

# ゼロの龍

九頭龍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2009年、沖縄・東京を巻き込んだ土地買収の裏に隠された陰謀の壮絶な戦いを終えた堂島の龍、桐生一馬は平穏な暮らしを送っていた。

ある日、久しぶりに神室町に戻った桐生はいつもの喧嘩の後、突然どこかに落ちる様な感覚に襲われ気絶してしまう。

目覚めた見知らぬ世界で出逢った少女は桐生を見るなりこう言った。

「あんた、誰？」

使い魔として召喚された「伝説の龍」桐生一馬と、その主人となった「ゼロ」の二つ名を持つ少女ルイズ。親子ほどの年の差でありながら逆転してる主従関係の二人の物

語が始まる。

龍が如くとゼロの使い魔のオリジナル要素込みクロスオーバーストーリー。

# 目次

## 第一章 異世界奮闘篇

第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
293	258	236	193	156	121	77	43	28	10	1

第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話
611	590	566	544	521	497	475	447	422	398	374	349	321

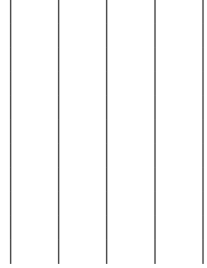
第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話

907 883 857 836 813 791 766 744 721 700 679 657 635

第50話 第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話 第38話

1206118211601138111510941073105210301007 981 959 933

第 55 話  
第 54 話  
第 53 話  
第 52 話  
第 51 話



13151292126912491227

# 第一章 異世界奮闘篇 第1話

「あんた、誰？」

先程まで見ていた星のない夜空と、厭らしい程ギラつき輝いていたネオンの灯りの代わりに視界いっぱい広がる青空に呆気を取られていた桐生はその声で我に帰り、自分が仰向けに寝ているのに気付いて身体を起き上がらせた。

声の主は女の子だった。歳は15、6位だろうか。桃色の長い髪に白い肌の顔の鳶色の瞳が此方を不思議そうに眺めている。見た限り、日本人ではない様だ。

周りには、その女の子と同じ位の歳の男女が、やはり不思議そうに此方を見ている。みな、制服の様な格好に黒いマントを羽織っている。

更に周りを見回して、桐生は眉をひそめた。どうやら自分は柔らかい草が覆い茂る大草原のど真ん中にいるらしい。更に遠くの方では、昔テレビで見た様な石造りの城の様な建物が見える。見慣れたはずの高層ビルや、卑猥な喧騒に満ちた通り等はどこにもない。一体ここはどこなのだろうか？

「おいおい、ルイズ…」「サモン・サーヴァント」で平民を呼んでどうすんだよ？」

誰かがからかう様な口調で言ったのを皮切りに、桐生と女の子を囲んでいた男女が揃って大声で笑い始めた。

ルイズと呼ばれた女の子は、そんな周りをキツと睨みながら顔を真っ赤にして怒鳴る。

「ちよつと間違えただけよ!」

「どこがちよつとだよ!? 相変わらず笑わせてくれんなあつ!」

「流石ルイズだぜ!」

爆笑の音が響く中、桐生は今に至るまでの経緯を考え始めた。

確か、遙達アサガオの子供達が揃って林間学校となつて暫く帰つて来ない事になった。じつとアサガオで待つのも何だと、久しぶりに神室町に来て親友の真島、伊達等とニューセレナで飲んでいた。

暫く飲んでからニューセレナの前で解散し、久しぶりの神室町を探索してた所、数人の若者に絡まれ、何時もの様に殴り飛ばした。そして再び歩き出そうとした瞬間、どこかに落ちる様な感覚に襲われて意識を失ってしまったのだ。

「ミスタ・コルベール!」

桐生が回想に耽つて首を傾げてた所、ルイズの怒鳴り声が響いて再び顔を上げた。見ると、男女の中から中年の男が此方に向かって来たが、その男の格好に桐生は再度眉を



ひそめた。

大きな木の杖を持ち、真つ黒なローブに身を包んでいる。眼鏡の奥の瞳は困った様な、困惑の色が窺える。禿げ上がった頭には幾分かの親近感を感じるが、格好が格好だけに怪しい人物にしか見えない。まるで映画に出てくる魔法使いだ。

「なんだね？ ミス・ヴァリエール？」

中年の男はルイズに優しい口調で問い掛けながら首を傾げて見せた。

「もう一回召喚させて下さい！ 見ての通り、私は「サモン・サーヴァント」に失敗しました！」

必死さが窺える口調のルイズに男は静かに首を振って見せる。

「それは出来ません、ミス・ヴァリエール」

「何故ですか!?!」

「何故って……君もわかっているでしょう？ 二年生に進級する際、君達は「使い魔」を召喚する。今の様にね。それによって現れた「使い魔」で今後の属性を固定し、専門過程を決めます。一度呼び出した「使い魔」を変更する事は出来ない。これは、神聖な儀式の決まりですからね」

「でも、平民を「使い魔」にするなんて聞いた事がありません！ これは例外でしょう!?!」  
ルイズと男の会話に桐生はついて行けず、周りを眺めながら事の成り行きを見守って

いた。春を感じさせる暖かな風が肌を撫でる感触が心地良い。

「ミス・ヴァリエール……彼は確かに平民かもしれない。だが、呼び出された以上君の『使い魔』にしなければならぬ。確かに古今東西、人間を「使い魔」にした例は聞いた事がないが、ルールはルール。いいですね？」

「そんな……」

桐生を指差しながら語りかける様に言う男の言葉に、ルイズはがっくりと肩を落とす。

「では、儀式を続けなさい」

「その……彼と、ですか？」

まだ納得出来ないのかルイズが渋った様に言うと、男は溜め息を漏らしながら頷いた。

「さあ、早く。次の授業がつかえてしまうでしょう？」

少し強い口調で言う男の言葉にグツと言葉を飲み込み、深い溜め息を漏らしながらルイズが桐生に向き直る。

「ねえ」

「なんだ？」

「あんた、感謝しなさいよ。貴族にこんな事されるなんて、普通は有り得ないんだから」

貴族とは、随分古めかしい言葉を知っているなど感心してる桐生をよそに、ルイズは目を瞑って手に持った小さな杖を振り始めた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の「使い魔」となせ」

長つたらしい呪文を唱えてから桐生の額に杖を置き、ゆっくり顔を近付け始めた。

「おい、何の真似だ？」

「うるさいわね！　じつとしてなさい！」

桐生の問い掛けを無視して半ば無理矢理に唇を重ねる。柔らかい感触が互いの唇に伝わっていく。

そつと唇を離して男に向き直ったルイズは、白い頬を桃色に染めながら儀式の終わりを告げた。

ルイズの頭に手を乗せ、優しく撫でながら男が頷いた。

「サモン・サーヴァント」は何回も失敗しましたが、「コントラクト・サーヴァント」はきちんと出来ましたね」

男の褒め言葉を聞いて、周りにいた男女が鼻を鳴らした。

「ふんっ！　そいつが平民だから「契約」出来たのさ！」

「他の幻獣とかだったら、ルイズには「契約」なんて出来ねえって」

再び沸き起こる笑い声にルイズが怒鳴り声を上げる。

「バカにしないでよ！ たまには成功するわ！」

「本当にたまにね、「ゼロ」のルイズ」

今度はブロンドの巻き髪を揺らしながらそばかす顔の少女が嘲笑う様にルイズに声をかけた。

「うるさいわね！ 「洪水」のモンモランシー！」

「私の二つ名は「香水」よ！ いい加減覚えてよね！ 頭の中身までゼロなのかしら！」  
二人の言い争いに男が割って入り仲裁する。そんな光景を見てみると急に左手の甲が焼ける様に熱くなったのを感じて桐生が自分の手を見る。すると光の様なものが見覚えのない字を刻んでいく。

「お前、俺の身体に何をした？」

熱は一瞬だったがどうにも入れ墨の様に落ちない文字にルイズを睨みながら桐生が聞く。

「貴族にそんな口利いていいと思ってるの？ まあ、いいわ。「使い魔のルーン」が刻まれたのよ」

説明になっていないルイズの説明に今度は脱力感を感じていると、男が熱心に左手の文字を眺めていた。

「さて、みんな教室へ戻りましょう」

しばらく桐生の左手を眺めた後男がそう言うと、次々に男や生徒達が飛んだ。

「なっ…!?!」

それなりに経験を積み、平常心が鍛えられていた桐生も流石に驚きを顔にする。

人間が飛んでいる。手品ではない様だ。浮かんだ全員は少し離れた場所に見える、絵画に描かれる様な石造りの城の様な建物に向かって飛び始める。

「ルイズ、お前は歩いて来いよ!」

「その平民、あんたにはお似合いよ!」

飛び去っていく生徒達に笑われ、いつしか桐生とルイズの二人になった。

ルイズは二人つきりになると、杖を桐生に突き付け大声で怒鳴る。

「あんた、なんなのよ!?!」

イマイチ状況も掴めていないが、子供相手に怒っても仕方ないと思つて立ち上がる。

「悪いな、俺にもよくわからん。俺は桐生一馬と言う。悪いんだが、ここがどこなのか教えてくれるか? ついでに、あいつ等が何故飛べるのかも教えてくれ」

「つたく、どこの田舎から来たんだか……いいわ、教えてあげる。ここはトリステインつて国。そして今あんたがいるのはかの高名なトリステイン魔法学園よ」

「魔法学園?」

「そうよ。選ばれた貴族だけが入れる高名で高貴な学園なの。そして私達メイジはここで魔法を学ぶ訳。学んだ魔法を使えばさつきみたいに飛ぶ事も出来るのよ。わかった？」

「イマイチわからんが……日本という国は聞いた事があるか？」

「にほん？ なにそれ？ 聞いた事ないわ」

ルイズの大まかな説明に懸命に納得しようとはするも、日本という国が存在してない様な発言に困惑の色が隠せない。

しかし、今自分が見てるのが現実なのはさつきの熱で思い知らされている。あれほどの熱を感じて夢から覚めない訳がない。

「私は二年生のルイズ・ド・ラ・ヴァリエール。今日からあなたのご主人様よ。覚えておきなさい！」

ひらりと身を翻し、学園であるだろう城の様な建物に向かって歩きだすルイズに返事もせず桐生も付いていく。

ともかく、今自分が置かれている状況を確認するためにもこの少女に付いて行った方が賢明な気がしていた。

「それと……言つとくけどね」

突然足を止めて振り向いたルイズの顔は頬が紅潮し、瞳に怒りの炎を灯しながら杖を

桐生に突き付けた。そして、その小さな体からは考えられないほどの大声で叫ぶ。

「ファーストキスだったんだからね！」

「……そりや、光荣だな」

などと答えた事に更に腹を立てたらしいルイズが大声でこちらを罵ってきたが、そこは大人の余裕と伊達に九人の子供達を見てきている訳ではないため、あっさりと躲したのであった。

## 第2話

それから学園の中をほんの軽く案内してもらってから魔法学園の授業とやらを拝見させて貰った。教師が何を言ってるのかさっぱりわからなかったが、魔法についての理論ややり方などを講義しているらしい。本来使い魔は明日まで主人が授業を受ける際は外にいけないといけないらしいが、ルイズが特別に許可をくれた。

教室に向かう際、外に見た事のない生物がいて驚いたがルイズ曰く、こちらの世界では普通に生息している物らしい。

少し遠くで説明している教師を見ると時々こちらをチラチラ見ている。生徒がいて気が散ったが、なかなかの興味深い物だった。

授業が終わり、それぞれの生徒が様々な使い魔を従えて寮に帰って行く。ルイズも然りである。桐生を連れ、女子寮へと向かうのを告げられ男の自分はずくないか？ と問い掛けるも、

「あんたねえ……使い魔は主人の側にいるのが普通なの！」

と逆に怒られた。

案内されたルイズの部屋は十二畳ほどのそこそこ広い部屋だった。夕暮れの淡いオ



レンジ色の光が差し込む窓が南らしく、西側にはベッド、東側にはタンス、そして今入ってきた北側に扉がある。真ん中には木製のテーブルと木製の椅子が佇んでいる。家具はどれもアンティーク調で高価そうだ。

自分の世界とは違つて電気ではなく、蠟燭で灯りを取るらしい。ルイズが机に飾られた蠟燭に火を灯すと、

「夕食を持つてくるから座つて待つてて」

と言つて部屋を出て行つてしまった。

とりあえず椅子に腰掛け腕を組んで現状を確認する。どうやらここは本当に自分のいた地球とは違うらしい。まず、日本と言う国はおろか、アメリカやイギリスと言つた国もルイズに問い掛けたが知らないとの一点張り。

寮に向かう際何気なく空を見上げると夕闇の中に月が二つ浮かんでいた。目の錯覚と思ひ何度も目を凝らしたがどうやら違うらしい。更にどちらの月も日本で見ていた物よりも遙かにでかいのだ。おそらく二倍以上はあつた。

ふとここで、自分のポケットに入っている物を確認しようと机に並べてみる。

財布。長年愛用している牛皮製の黒い長財布。中身は一万円札十五枚と小銭が数枚ほど。

煙草とライター。封を切つたばかりの物と、まだ開いていないのもあつて数十本ある

し、ライターのおイルもそこそこある。

携帯灰皿。煙草を吸う人間として当然のエチケツトだ。

携帯電話。一瞬これで遙達に連絡をと思ったが、どういふ訳か電源がつかない。思わず舌打ちしてしまう。

メリケンサック。なんでこんな物が、と思ったがニューセレナを出した後絡んできたチンピラをこれでボコボコにしたのを思い出した。

遙の御守り。遙を食事に連れて行ってあげた時にお礼にと渡してくれた物。頼むから店から出た瞬間に他のメニューが食べたいと言わず纏めて注文してくれと密かに思ってしまったが、渡された時から大切に持っていた。

「遙……」

御守りを見た途端、自分の世界にいる遙やアサガオの子供達の顔が浮かんだ。

林間学校から帰ってきた途端自分が行方不明と知ったらどうなるだろうか。恐らく名嘉原や流道一家のみんなが面倒を見てくれるとは思うがやはり自分にとって、アサガオのみんなは家族だ。

机に出した私物を再びしまい込み、なんとかして自分の世界に帰ろうと決意したのと同時にルイズが戻ってきた。

「ほら、あんたの分」

手に持っていたパンを桐生に渡して向かいの椅子へ座る。

「さあ、教えてちょうだい。あんた、一体どこから来たのよ?」

「……まあ、確かに説明しなきゃいけないな」

そう言つて桐生は自分の世界の事を話し始めた。

魔法使いがいないこと。月は一つしかないこと。建物の造りが違うこと。ここよりもずっと緑が少ない事。使い魔と呼ばれていた生き物が存在しないことなど。

「信じられないわ」

「だろうな。俺も信じられん」

疑わしい目つきでこちらを睨んでくるルイズに桐生はパンをかじりながら返す。

「じゃああんたの世界には、平民しかないわけ?」

「さつきから気になっていたんだが……その平民つてのは何なんだ? 他の奴らも言っ

てたが」

「だつてあんた、メイジじゃないでしょ? 魔法が使えないんだから」

「そのメイジ、つてのがお前らの言う貴族の事なのか?」

「まあ……例外はあるけどそう言う事ね」

「どうやらルイズの話から察するに、こちらの世界は格差社会で成り立っているらしい。」

魔法が使えるのは立派な血筋を持つ貴族だけで、魔法使いをメイジと言うらしい。逆に魔法が使えない者を平民と言う。この分類から行けば、自分は平民なのは理解出来たが如何せん気に入らなかつた。

「悪いが、俺には合いそうにない世界だな。元の世界に帰してくれないか？」

「無理ね」

「なに？」

あまりにもあつさり返され思わず問の抜けた声で返してしまふ桐生。

「あんたは私と契約したのよ。私の使い魔として。契約した以上はもう動かせない」

突きつけられた事実には桐生は言葉を失い、眉を潜める。これからどうすればいいのか。二度と遙達には会えないのか。不安な想いが胸に広がっていく。

そんな桐生を少し不憫に思ったのか、視線を泳がせながら口を開く。

「あのね、別の世界なんて聞いた事もないし、使い魔の契約を解除するには使い魔が……死ぬしかないのよ」

少し間を置いてから最後の言葉を紡ぐルイズに桐生は表情を変えなかつた。

「それに、私達魔法使いの間では「呼び出す」魔法はあっても「送る」魔法なんて聞いた事がないの。あんたが自分の世界………本当にあるかわからないけど、少なくともそこに帰すのは、私じゃ無理」

どちらにしろ、もう自分にはここで生きていくしか選択肢はないらしい。

しかし、死んでしまつては元も子もない。信じて生きていけば、元の世界に戻る方法や手がかりが見つかるかもしれない。そんな気持ちを胸に、桐生は独り頷いた。

「……わかつた。しばらくはお前の使い魔として生きよう」

「口の利き方がなつてないわね。「なんなりとおもうしつけ下さい、ご主人様」でしょ？」指を立てて言うルイズに、遙もこんな性格になるのかもなど内心笑いながらパンを飲み込む。

「しかし、使い魔つてのは何をするんだ？」

身体を伸ばしながら桐生が尋ねる。元の世界にいた時はアニメなどほとんど見た事がなかったので、実際どんな役割があるのか検討がつかない。

「本来使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ。早い話、あんたが見てる物や聞いている事を私も見たり聞いたり出来るの。でもあんたじゃ無理みたいね。さつきから何にも見えないし！」

「運が悪かつたんだよ……お前は」

ルイズの残念そうな声に桐生が渋い声で返す。状況を見る限り運が悪いのは桐生の方だと思われるが。

「でも使い魔の一番の役目は主人を守る事！ まあ、強い幻獣ならともかく、あんたじゃ

無理そうだけど」

その言葉には流石の桐生も少しカチンと来た。今まで屈強な猛者達と戦い、修羅場をくぐってきただけあり力には自信がある。

「さつきみた他の使い魔やその幻獣つてのはわからねえが、人間相手なら負ける気はしねえぜ」

口元に笑みを浮かばせながら盛大に拳を鳴らして見せる。一瞬ルイズの瞳に驚きの色が走るがすぐさま冷めた表情へと変わっていく。

「あのねえ……相手が人間でもメイジがいるのよ？　喧嘩ならともかく、魔法を使われたらお終いでしょ？」

「まあ……確かに魔法なんて使われたらかなわねえな……」

悔しいが、ルイズの言う通りである。あちらの世界では殴り合いの喧嘩が主流だったが、こちらでは魔法で闘うのが一般的なスタイルなのだろう。どんな出方をするか全くわからないだけあって、相手をするとなると確かに厄介かもしれない。

「だからあんたに出来そうな事をやらせてあげる。掃除、洗濯、その他雑用」

「まあ、その程度なら出来るが」

「さてと、喋ってたら眠くなってきたわ」

ルイズが可愛らしく欠伸をしてみせる。時計が無いためわからないが、話し込んでい

た為外は完全に真っ暗になっている。

自分も寝ておこうと思うもベッドは一つしかない。ルイズにどうするか尋ねようとするとブラウスのボタンを外していた。

白く可愛いらしい下着が露わになる。

「おい、何してんだ？」

「寝るから着替えるのよ」

「お前、恥じらいってもんがないのか？」

「なんで使い魔相手に恥じらわなきゃいけないのよ」

「どうやらこちらを男と認識はしてないらしい。桐生自身もルイズくらいの年の少女に「女」という認識はあまりない。と、言うのも、ルイズは年相応と言うか小柄な女の子らしい体格をしている。身長も自分よりはかなり低い。百五十センチそこそこと言った所か。」

「じゃあ、これ、明日洗濯しといて」

ばさつと何かを投げ渡される。

見てみると、レースのついたキャミソールに、パンティだ。今着けていた物だろう。

思わず溜め息を漏らしながら自分もグレーのスーツの上着を脱ぐ。ワインレッドのシャツの姿になって上着を椅子にかけ、渡された下着を椅子に置く。

ルイズの方は大きめのネグリジエを頭からかぶろうとしている。淡い蠟燭の灯りに照らされた姿は堂々としており、本当に恥じらいを感じてないらしい。

「あんたは床で寝なさい。ほら、これ」

言つて毛布を投げ渡してくる。そしてそそくさと自分のベッドに潜り込むと、「蠟燭、消して」と伝えてから寝息を立て始めた。

ふっと、蠟燭に息を吹きかけ灯りを消してから壁にもたれる形で床に座り、毛布をかける。

今日一日でいろんな事が起こりすぎた。帰る方法はあるのだろうか。

……本当に帰れるのだろうか。

しかし、いくら考えた所で自分を納得させてくれる答えは出てこない。

じたばたしても何も始まらない。頼れるのは自分の主人と名乗るこのルイズだけなのだ。

ひとまず眠ろう、とゆっくり目を閉じる。

良くも悪くも、長年の経験が与えた順応性が桐生に味方した。普通の人間ならパニクになるであろう状況を、自分の運命だと受け入れられた。

そうすると、背中の応龍を彫ってくれた彫り師、歌彫の言葉が脳裏に蘇る。

「刺青つてのは、彫った人間次第でその先の人生を変えちまう。俺の墨は運命を変える。



重さに潰されるんじゃないぞ」

あの言葉を、今試されている気がした。

神室町で歌彫に背中ハブを完成してもらい、自分を守る為、自ら命を捨てて自分を救ってくれた力也。短い生涯を絶つことを運命と受け入れこの世を去った力也の想いは、桐生の心を更に強くさせた。

運命？ そんなものに負けてたまるか！

負けず嫌いの性格が幸いし、この世界に来たのも運命と受け入れて、桐生は眠りについた。

窓から差し込む朝日に桐生が目を覚ます。視界に入って見慣れない部屋に一瞬戸惑いが生まれたが、すぐさま昨日の事を思い出す。

毛布を剥いで立ち上がり、上着を着込むとルイズの方に目をやる。

ルイズはベッドの中でまだ寝息を立てている。あどけない寝顔だ。貴族だ魔法使いだと威張っていたが、こうしてみると可愛らしい。子供の寝顔はいいものだ、改めて桐生は思った。

同時に、やはりこれが夢ではないと言うことも思い知った。目が覚めた途端、いつものアサガオの布団の中で目覚められたらどんなに良かったか。

しかし、落ち込んでる訳にもいかない。もう自分は受け入れたのだ。元の世界に帰れるまではここで暮らすと。

窓を開けて朝の空気を吸う。清々しい青空とどこまでも続きそうな平原、遠くには山や森が見える。吹き込んだ風は暖かく、春風のように気持ちがいい。

とりあえず、寝ているルイズの肩をさする。すると目を見開いてガバツと起き上がった。

「な、なに!? 何事!?!」

「朝だぞ?」

「へっ? あ、あんた、誰よ!?!」

寝ぼけた声で怒鳴るルイズ。こっちの世界に呼び出しといてそれはないだろうと思いい、やれやれと言った表情で腰に手を当てる。

「桐生一馬だ。忘れたか?」

「ああ、使い魔ね。そっか、昨日召喚したんだっけ」

ルイズは起き上がり、大きな欠伸をして見せてから顎をしやくる。

「服」

机の上にあつた制服を取って手渡す。気怠そうにネグリジエを脱ぐと今度はクロ―ゼットを指差した。

「下着」

「そのくらい自分で取ったらどうだ？」

「そのクローゼットの一番下の引き出しに入ってる」

本当に自分では動かないらしい。

面倒臭そうにクローゼットの引き出しを開ける。確かに中には沢山の下着が入っていた。下着の良し悪しなど検討もつかないので適当にひつつかんで投げ渡す。

下着を身に着けたルイズが目をこすって口を開く。

「服」

「さつき渡しただろ？」

「着せて」

ルイズの言葉に思わず眉を潜める。そんな桐生の態度が気に入らないのか、頭をボリボリかきながらルイズが唇を尖らす。

「平民のあんたは知らないだろうけど、貴族は下僕がいる時は自分で服なんて着ないのよ」

「なるほど……」

言って桐生はブラウスを手に取り、ルイズの腕を袖に通し始めた。

「つまり貴族ってのは、自分一人じゃ何も出来ねえ甘ったれ共の総称って訳だな」

服を着させて勝ち誇った表情を浮かべてたルイズの眉がピクリと歪む。そんな事を気にせず制服を着せた桐生は大きな欠伸をして見せた。

「あんた……本当に口の利き方になってないわね」

「知らねえし、興味ねえな。弱い立場の奴をいびつたり、そんな奴にえげな事しか脳ねえ奴らに媚びるつもりはねえよ。お前は、俺の主人だ。だから言う事は聞いてやる。だがな、お前以外の貴族とやらがふざけた態度や行動を起こして俺の怒りに触れたら……その時は、お前の命令だろうとそいつは容赦しねえ。誰が相手だろうが叩きのめす。わかったか？」

しばらく睨み合いが続いたが、無言の凄まじい圧力を持つ桐生の眼光にルイズは忌々しそうに瞳を逸らす。

「……まあ、いいわ。私の言うことさえ聞いていればいいのよ。」

そう言つて扉を開け、外に出る。桐生もそれに続いた。

部屋を出ると、似た様な木で出来た扉が壁に三つ並んでいた。その中の一つが開き、中から炎の様な赤く長い髪の少女が出てきた。ルイズよりも背が高く、しかし桐生よりはやはり低い。大体百六十センチほどか。大人の男にも効きそうな色気を放っている。彫りが深い顔立ちに、突き出た豊満な乳房が艶めかしい。

一番上と二番目のブラウスのボタンを外して褐色の肌の谷間を露出している。

身長、肌の色、雰囲気、胸の大きさ……何もかもがルイズとは対照的だ。

彼女はルイズを見て、にやっと笑みを浮かべる。

「おはよう、ルイズ」

ルイズが露骨に嫌そうな表情を浮かべる。それでもしつかりと挨拶は返す。

「おはよう、キュルケ」

「それがあなたの使い魔？」

キュルケと呼ばれた少女がルイズの後ろに立っている桐生を指差す。

「そうよ」

「本当に人間なのね！ 凄いじゃない！」

キュルケが可笑しそうに大声で笑う。

桐生は腕を組んで黙って二人を見ていた。人間を召喚するのはそんなに可笑しい事なのだろうか。逆に今まで誰もやった事がないなら凄いのでは、と、内心考える。

「サモン・サーヴァント」で平民を召喚するなんて、流石は「ゼロ」のルイズ！」

ルイズの白い頬が怒りで赤く染まる。

「うるさいわね」

「あたしもね、昨日使い魔を召喚したのよ。誰かさんとは違って一発で呪文成功よ」

「あつそ」

「どうせ使い魔にするならこういうのがいいわよねえ。おいで、フレイム」

キュルケが勝ち誇った様に明るい声で自分の使い魔を呼ぶ。するとキュルケの部屋からのそのそと真つ赤で巨大なトカゲが現れた。トカゲの体から発する熱気が二人を襲う。

「……いつは……」

桐生は前へ出て近づき、物珍しそうにその赤いトカゲを眺めた。

大きさは虎ほどある。尻尾は燃え盛る炎で出来ており、口端からチロチロと炎を迸らせている。

思わずしやがみ込んで、頭を優しく撫でる。触れられなくはない程度の熱い体温と硬くざらついた鱗の感触が掌に伝わり、撫でられたトカゲはきゆるきゆると気持ち良さそうに鳴きながら目を細める。

「もしかしてあなた、この火トカゲを見るの初めて？」

「まあな。しかし、見た目とは裏腹に大人しくって人懐こいな」

「当然よ。この子はいいい子だから、あたしが命令しない限り人を襲ったりしないわ」

桐生の言葉にキュルケは手を顎に添えて、色っぽく笑った。

「そばにいて熱くないのか？」

フレイムと呼ばれた火トカゲの頭を撫で続けながら桐生が問い掛ける。汗ばむほど

ではないがむわっとする熱気がさつきから肌を刺激していた。

「あたしにとつては涼しいくらいね」

「これってサラマンダー？」

「ここですつと口を閉ざしていたルイズが悔しそうに尋ねる。

「そうよ。ねえ、見て？ この尻尾の炎！ ここまで鮮やかで大きな炎の尻尾は火竜山脈のサラマンダーに間違いないわ！ ブランド物の使い魔よ！ 好事家に見せたら値段なんかつけられる訳ないわ！」

「そりゃ良かったわね」

キュルケの使い魔自慢を聞かされて苦々しい表情でルイズで相槌を打つ。

「素敵でしょ？ あたしの属性ピツタリ！」

「あんた、「火」属性だもんね。」

「ええ、あたしの二つ名、「微熱」の象徴である「火」の属性。ささやかに燃える情熱は微熱。でも、男の子はそれでイチコロなのよ！ あなたと違ってね？」

キュルケは得意気に胸を張って見せる。ルイズも負けじと胸を張って見せるが、かなりポリウムに差がある。

それでもルイズはキュルケを睨み付ける。気付いてはいたが、かなり負けず嫌いな様だ。

「あんたみたいにいちいち色気を振り撒いていられるほど、私は暇じゃないのよ」

ルイズの発言にキュルケは一切動じずに笑って見せる。余裕の差も見せ付けられてしまっている様だ。

ふと、視線を桐生に移す。

「あなた、お名前は？ おじ様」

「桐生一馬だ」

「キリユウカズマ？ 変な名前ね」

「そうか？」

「じゃあ、お先に失礼するわ」

そう言つてキュルケは炎の様な赤髪をかきあげ、優雅な足取りで去つていった。その後を大柄な体をちよこちよこ可愛らしく動かしてフレイムも追つていく。

キュルケとフレイムの姿が見えなくなった瞬間、ルイズが拳を握り締め地団駄を踏む。

「悔しい！ なんなのよあの女あ！ 自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからつてえー！」

「別に誰が何を召喚しようが、構わねえじゃねえか」

「構わくないわよ！ メイジの実力を測るには使い魔を見ろつて昔から言われてんの



！　なんであんなバカ女がサラマンダーを呼べて、私はあんたしか呼べないのよ！」

「知らねえよ。こつちだつて好きで来た訳じゃねえんだ」

ルイズの八つ当たりで額に手を添えながら答える桐生。ふと、ここで昨日から思っていた疑問を思い出して聞いてみる。

「そう言えば、お前、ゼロのルイズと良く言われてるが、「ゼロ」って何の事だ？」

「はあ？　それは……あだ名よ」

「あだ名か。あのキュルケとか言うのは確か微熱と言っていたな。まあ、年頃の男には確かに熱を上げられそうなタイプには見えるが……。なら、お前のゼロってのはどういう意味だ？」

「知らなくていいことよ」

ルイズはバツが悪そうに表情を歪める。

これ以上は聞けないと悟り、言葉を切つて桐生はある事に気が付いた。

昨日他の生徒がみんな飛んでいったのにルイズは歩いてきた。魔法使いだ貴族だと  
言っている割には、桐生はまだルイズが魔法を使った所を見ていない。

どうしてなのだろう、と心に微かな疑問が生まれた。

## 第3話

トリステイン魔法学園の食堂は、学園の中でも一番背の高い真ん中の本塔の中にあつた。

食堂の中にはやたらと長いテーブルが三つ並んでいる。長さからして百人は座れそうだ。ルイズを含む二年生は真ん中のテーブルだ。

自分の世界で学年を分けるのがジャージだったように、こちらの世界ではマントの色で学年が分けられているらしい。ルイズ達の机を正面に見て左隣のテーブルに座っている大人びた学生達は紫色のマントを羽織っている。三年生だろうか。

右隣の生徒達は茶色のマントだった。まだ幼さが残っている顔立ちの者が多い。恐らく一年生だろう。

朝食、昼食、夕食と学園の中にいる全ての生徒、教師はここで食事を取っているらしい。

一階の上にロフトの中階があり、そこで歓談に興じてる教師達の姿が見えた。

どのテーブルにも豪華な飾り付けが施されている。流石は貴族の食卓と言った所か。いくつものローソクが立てられ、花が飾られ、果物がいっぱい盛られた籠が乗って

いる。

食堂の豪華絢爛さにキョロキョロと興味深そうに眺めている桐生に気付き、得意気に指を立ててルイズが口を開く。

「このトリステイン魔法学園で教えるのは魔法だけじゃないのよ」

「と、言うとは？」

「メイジはほぼ全員が貴族なの。「貴族は魔法をもつてしてその精神となす」のモットーのもと、貴族たるべき教育を受けるのよ。だから食堂も貴族の食卓に相応しいものでなくてはならないの」

「確かに……見事ではあるな」

腕を組みながら頷いて見せる桐生にルイズは気を良くした様に笑みを浮かべる。鳶色の瞳が悪戯っぽく輝いた。

「でしよう？ 本当ならあんたみたいな平民がこの「アルヴィーズの食堂」には一生入れないの。感謝しなさい」

「どうでもいいが、アルヴィーズってのはなんだ？ 人の名前か？」

「小人の名前よ。周りに像がたくさん並んでるでしょ？」

ルイズに言われて初めて気が付いたが、壁際には精巧な造りの小人の彫像が並んでいる。

「よく出来てるな……まさか動くのか？」

「あら、良く知ってるじゃない」

「……動くのか」

冗談半分に聞いてみたのが凄いわねとばかりにルイズに驚かれ肩を落とす。やはりこちらの世界では自分の常識は通用しないらしい。

「つていうか踊るわ。いいから椅子を引いて頂戴よ。気の利かない使い魔ね」

ルイズが呆れた様に腕を組んでくいと首を傾げてみせる。桃色の髪が揺れた。確かに紳士なら椅子を引くべきではある。

椅子を引いて見せると、ルイズが礼も言わず腰掛ける。そして……桐生は少し困った。

ルイズの隣に腰掛けようかと思ったが、いかんせん椅子が小さいのだ。座れなくはなくともこれでは腰が痛くなりそうだ。

顎に手を当て考えていると、ルイズが睨んできた。

「なに突っ立てるの？ あんたはそこよ」

ルイズが床を指差す。

そこには申し訳程度の大きさの肉が浮かんだスープが盛られた皿と、パンが二個ポツンと置かれていた。

「これが……朝飯か?」

不満を込めた瞳で桐生はルイズを見る。それも当然だろう。

ルイズ達の机には朝からこんなにと言わんばかりに豪華な料理が並んでいる。デカイ鳥のローストやパイ、ワインの瓶まで見える。一体この差はなんなんだ。

そんな桐生にルイズは頬杖をついて溜め息をつく。

「あのね、本当は使い魔は外。あんたは私の特別な計らいで床。わかった?」

言われて見れば他の使い魔の姿が見えない。あのキュルケが連れてきているはずのフレイルも姿がない。

仕方なしに桐生は床に座った。目の前にあるスープとパンは貧相ではあるが、食事であることには変わらない。目の前で両手を合掌する。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもうたことを感謝致します」

祈りの声が、唱和される。ルイズも目を瞑ってそれに加わっている。

ささやかな糧。恐らくテーブルに並んだ豪華絢爛な料理を指しているのだろう。しかし、これのどこが「ささやか」なのか。これがささやかなら自分のはちよつぴりのか。

とりあえずスープとパンを平らげると、やはり足りない。仕方なしに、ルイズの腕を

軽くつついた。

「なによう？」

「なんでもいい。少しくれ。俺は大人だから、これだけじゃ足りん」

「まったく……」

ルイズはぶつくさ言いながら鳥のローストを少量と果物を皿に落として、美味しそうに豪華な料理を頬張り始めた。

「コレが三食続くのか……やれやれ」

桐生は果物をかじりながら呟いた。

魔法学園の教室は大学の講義室の様な造りをしている。木の代わりに石を使って造ったと想像すると当たる。講義を行う魔法使いの先生が、一番下の段に位置し階段の様に席が続いている。ルイズと桐生が入っていくと、先に教室に来ていた生徒達の視線が一斉にこちらに向けられる。

一瞬の沈黙の後、周りからクスクスと笑い声が起こる。先ほど会ったキュルケもいた。周りを男子生徒が取り囲んでいる。自称、男をイチコロにすると言うのは本当らしい。

昨日とは違って、今日は様々な使い魔が教室にいた。ルイズに尋ねると、昨日は使い

魔を召喚した初日の為外に待たせたが、今日からは主人と一緒に授業に出る様になるらしい。

キュルケのサラマンダーは椅子の下で寝ていた。肩にフクロウやカラスを乗せてる生徒もいる。窓からは巨大な蛇がこちらを覗き込んでいる。チチッと鳴き声が耳元でしたので見てみると、ピンク色のネズミが桐生の肩に乗っていた。誰かの声がするとすぐさま肩から飛び降り、走り去る。

しかし桐生の目を引いたのは、自分の世界では存在しない生き物達だった。

六本足のトカゲがちよろちよろ歩いている。巨大な目玉が浮かんでいる。二つの首を持つワシが飛んでいる。

初めて見る生物達に驚きを表す桐生を後目にルイズが席の一つに腰掛ける。桐生は腕を組んで壁に背をもたれた。

扉が開き、先生が入ってくる。

中年の女性だ。紫色のローブに身を包み、帽子を被っている。ふくよかな頬が優しい雰囲気を作り出し、思わず近所のおばちゃんの様に見えた。

彼女は教室を見回すと、満足そうに微笑んだ。

「皆さん、春の使い魔召喚は、どうやら大成功の様ですね。このシュヴルーズ、こうして春の新学期に様々な使い魔達を見るのがとても楽しみなのですよ」

その言葉にルイズが俯く。シュヴルーズと言う女性が壁にもたれている桐生に視線を止める。

「おやおや、変わった使い魔を召喚しましたね？ ミス・ヴァリエール」

とぼけた声でシュヴルーズが言うと、教室中がどつと笑いに包まれた。

「ゼロ」のルイズ！ 召喚出来なかったからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

誰かの野次にルイズが立ち上がり、桃色の髪を揺らして可愛らしい声で怒鳴る。

「そんな事しないわよ！ きちんと召喚したわ！ コイツが来ちやっただけよ！」

「嘘つくな！」「サモン・サーヴァント」が出来なかつたんだろ？」

ゲラゲラと笑い声が響き渡る。その耳障りな声に桐生の眉が少しつり上がる。

「ミセス・シュヴルーズ！ 侮辱されました！」「風邪つびき」のマリコルヌが私を侮辱しました！」

握り締めた拳でルイズが机を叩いた。ダンッ、と少し小さく音がした。

「俺は「風上」のマリコルヌだ！ 風邪なんか引いてないぞ！」

「あんた、自分のガラガラ声聞いた事ないの？ 馬鹿は風邪を引かないと言うけど、風邪を引いてるのに気付かないだけなのかしら!？」

マリコルヌと呼ばれた少し太っちよの男子生徒が立ち上がりルイズを睨みつける。



シュヴルーズが手に持った小ぶりの杖を振ると、立ち上がっていた二人が突然ストンと席に座り込んだ。

「ミス・ヴァリエール、ミスタ・マリコルヌ、みつともない口論はお止めなさい」

ルイズがシヨボンとうなだれる。今までの勝ち気で生意気な態度が嘘の様だ。

「お友達をゼロだの風邪つぴきだの呼んではなりません。わかりましたか？」

「ミセス・シュヴルーズ、僕の風邪つぴきは中傷ですが、ルイズのゼロは事実です」

再びクスクスと笑い声が漏れる。

シュヴルーズは厳しい顔つきで教室を見回し、なにかをしようとしたが、それよりも先に行動を取った者がいた。

「てめえ等、うるせえぞ」

静かに、しかし迫力の籠もった声に笑い声がピタリと止まる。

驚いた表情で声の主である桐生に教室中の生徒が視線を向ける。その瞳は怒りに染まっており、気の弱い生徒は思わず生唾を飲む。

「授業が始まるんだろが。いつまでもつまらねえ事で騒いでんじゃねえ」

「……そちらの使い魔さんの言う通りです」

シュヴルーズが桐生の言葉に頷いて、授業を始める。こほん、と重々しく咳払いをしたあとに杖を振るうと机の上にくっつか石ころが現れる。

「私の二つ名は「赤土」。「赤土」のシュヴルーズです。「土」系統の魔法をこれから一年、皆さんに講義していきます。魔法の四大系統はご存知ですね？ ミスタ・マリコルヌ」

「は、はい、ミセス・シュヴルーズ！ 「火」「水」「風」「土」の四つです！」

「その通り。かつて失われた系統魔法である「虚無」を合わせて全部で五つの系統があるのは、皆さんも知つての通りです。その五つの中で「土」はもつとも重要な系統であると思つています。それは私が「土」系統だからとか、単なる身びいきではありません」

シュヴルーズは今一度、咳払いをして見せる。

「土」系統の魔法は、万物の組成を司る重要な魔法です。この魔法がなければ金属を作り出す事も出来ないし、加工する事も出来ません。石を切り出して建物を建てることや、農作物の収穫も今より手間取るでしょう。この様に、「土」系統の魔法は皆さんの生活の中である意味一番密接に関係しているのです」

桐生は黙つたまま聞きながら思つた。こつちの世界の魔法はどうやら自分の世界で言う所の科学技術に当たる様だ。ある意味ルイズが、魔法使いである事を威張る理由が何となくわかる。

「今から皆さんには「土」系統の魔法の基本である、「錬金」の魔法を覚えて貰います。一年生の時に出来る様になつた人もいるでしょうが、基本は大事です。もう一度、おさら

いしましょう」

シユヴルーズが目の前の石に杖を振り、なにやら呪文を唱えて見せた。すると石が光り出し、光がおさまるとただの石だったそれはピカピカ光る金属に変わっていた。

「それって……もしかして、ゴールドですか!? ミセス・シユヴルーズ!」

キュルケが興奮した顔で身を乗り出す。

そんなキュルケにシユヴルーズは笑顔で首を振って見せた。

「違います。ただの真鍮です。ゴールドを錬金出来るのは「スクウエア」クラスのメイジだけです。私はただの、「トライアングル」ですから」

ここで桐生は昨日の授業の内容を思い出す。昨日はメイジの基本についてのおさらいだった。

メイジとは、上から「スクウエア」、「トライアングル」、「ライン」、「ドット」の順にランクが別れている。このランクは、どれだけ魔法が足せるかを表している。

「ドット」は、「火」の系統の魔法を単体でしか使えない。しかし、「ライン」のランクになると、「火」「土」の様に二系統を足せる。それが四つまで足せるのが最高ランクの「スクウエア」に当たるのだ。ちなみに、同じ系統を足せば、それだけその系統の魔法が強力になるらしい。

つまり、今講義をしているシユヴルーズは「トライアングル」のメイジの為、強力な

メイジに当たるとのだ。

桐生がルイズの肩を軽く叩く。鬱陶しそうに振り向いたルイズに桐生が小声で囁く。

「お前はいくつ足せるんだ？」

その言葉にルイズの表情が固まる。どうやら聞いてはいけないことだった様だ。

その様子を見てシュヴァルーズがルイズを見咎める。

「ミス・ヴァリエール！」

「は、はい！」

突然自分の名を呼ばれた事に驚いて慌てて振り向くルイズ。

「授業中の私語は慎みなさい」

「す、すみません……」

「お喋りをする暇があったら、あなたにやって貰いましょうか」

「え？ 私ですか？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてもらなさい」

シュヴァルーズに指名されたのに、ルイズは立ち上がらない。もじもじと困った様に手をすり合わせている。

「ミス・ヴァリエール？ どうしたのですか？」

再びシュヴァルーズがルイズに声をかける。すると、キュルケが困った表情で手を上げ

た。

「先生」

「なんです？」

「やめといた方がいいと思いますけど……」

「何故ですか？」

「危険です」

キュルケのキツパリした発言に、教室中の全員が頷いた。桐生とシユヴルーズだけが首を傾げる。

「危険？ どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。ですが、彼女が努力家という事は聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール、やっごーらんなさい。失敗を恐れている、何も出来ませんよ？」

「ルイズ……お願い、やめて」

キュルケが首を振る。健康的な褐色の肌をした顔が青白く変わっている。まるで、得体の知れない物に怯える者の様に。

そんな言葉を無視し、ルイズが立ち上がる。

「やります」

そして緊張した顔で教室の前へと歩いていく。どことなく、足取りが重い。

隣に立ったシユヴルーズが優しくルイズに微笑みかける。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、心の中に思い描くのです」

こくり、と可愛らしく頷いて、ルイズが手に持った杖を振り上げる。表情は真剣そのものだ。

そんなルイズとは裏腹に、次々と教室の生徒が椅子の下に隠れ始めた。まるで何かに怯えている様に見える。

そう言えば、あんまりルイズは人気がない様に見える。誰も彼もが「ゼロ」の二つ名で彼女を馬鹿にする。女子ならわかる。その容姿に嫉妬して、イジメの様に呼ぶのはどこの世界でもあるだろう。実際、桐生の見た限り、ルイズと対等か、それ以上の容姿の女子はあのキュルケくらいしか見えない。

しかし、男子はどうだ。キュルケと対等の可愛いさを持つルイズに言い寄ろうとする者がいてもおかしくないが、そんな様子はない。

ルイズが目を瞑り、短く呪文を唱えて杖を下ろす。

その瞬間、机ごと石ころが爆発した。

爆風をモロに受けて、ルイズとシユヴルーズが黒板に叩きつけられる。桐生も思わず腕を顔にかざして爆風に耐える。誰かの悲鳴が上がった。

爆風と音によって驚いた使い魔達が一斉に暴れ始めた。キュルケのサラマンダーが眠りを妨げられた事に腹を立てて口から炎を吹き出す。翼を生やした犬が飛び上がってガラスを突き破り外へ出て行った。その穴から先ほどの巨大な蛇が入って来て誰かのカラスを飲み込んだ。

悲鳴が響き渡り、混乱に陥った教室の中、キュルケがルイズを指差して怒鳴る。

「だから言ったのよ！ あいつにやらせるなつて！」

「ああ、もう！ ヴァリエールは退学してくれよ！」

「俺のラツキーが蛇に喰われた！ 俺のラツキーが！」

様々な文句や怒号が響く中、横たわっているシュヴルーズの姿が見える。時折痙攣しているの、死んではいないらしい。

ここで桐生はハツとする。

「ルイズ！」

机に飛び乗り、そのまま飛び移りながら急いで下へ駆け下りる。

ルイズはシュヴルーズの隣で既に起き上がっていた。煤で真っ黒になった姿は見るも無残だ。ブラウスが破け、華奢な肩が覗いてる。スカートは破れてパンツが見えている。しかし、そんな姿の事も、大騒ぎの教室にも目もくれずにハンカチを取り出す。

手にしたハンカチで顔の煤を拭き取ると、淡々とした口調で言った。

「ちよつと失敗したみたいね」

その言葉に他の生徒から猛然と反撃を食らう。

「どこがちよつとだ！」「ゼロ」のルイズ！」

「いつだって成功の確率ゼロだろうが！」

ここで初めて、桐生はルイズの二つ名が何故「ゼロ」なのかを知る事になった。



## 第4話

トリステイン魔法学園の図書館は、食堂のある本塔の中にある。本棚は驚くほど大きい。およそ三十メートル程の高さの本棚が並んでいる。ここには始祖ブリミルがハルケギニアに新天地を築いて以来の歴史が積み込まれていた。

この図書館の一区画には、「フェニアのライブラリー」と呼ばれる、教師のみが閲覧を許される本棚がある。そこには彼、ミスタ・コルベールが本を漁っていた。

ミスタ・コルベールはこの学園に勤めて二十年、中堅の教師である。彼の二つ名は「炎蛇」の「コルベール」。「火」系統の魔法を得意とするメイジだ。

彼は、先日の「春の使い魔召喚」でルイズが呼び出した平民の男が気になっていた。正確には、その男の左手に刻まれたルーンが。珍しいルーンだった。それで先日の夜から図書館に籠もりつきりになった。

生徒達でも閲覧出来る本棚には彼の望む情報が載っていなかったもので、とうとうこの区画の本を漁る事になった。

「レビテーシオン」、空中浮遊の呪文を使い隅から隅までの本棚を漁る。

そしてその努力は報われる事になる。彼は始祖ブリミルの使い魔について記された

書物を手に取り、ページを捲っていく。

その中の一説に彼は目を止めた。じっくり読みふけてから、男の左手に現れたルーンのスケッチを見比べる。

「ハ、これは……」

思わず目を見開いて固唾を飲む。

彼は急いで床に戻り、本を抱えたまま走り出した。

目指すは学園長室であった。

学園長室は本塔の最上階にある。トリステイン魔法学園の学園長、オールド・オスマンは白い口髭と髪を揺らして、重厚な作りの木製のテーブルに肘を突いて退屈をもちまわっていた。

ぼんやりと天井を眺めていたが、机の引き出しを開いて中から水キセルを取り出す。

それを見た部屋の隅の机で書き物をしている秘書のミス・ロングビルが羽ペンを振る。長く、淡いライトグリーンの髪が静かに揺れる。

すると、水キセルが宙を飛んでミス・ロングビルの手元にやってきた。つまらなそうにオスマンが溜め息を漏らす。

「年寄りの楽しみを奪わんでくれんか？ ミス……」

「オールド・オスマン。あなたの健康を管理するのも、私の仕事です」

オスマンが椅子から立ち上がると、理知的な凛々しい顔を伏せたまま書き物を続けるロングビルの後ろに立つ。窓から見える春の日差しを浴びている草原を見つめた後、重々しく目を瞑る。

「こう平和な日々が続くと、時間の過ごし方と言うものが何より重要な問題になってくるんじゃない」

オスマンの顔に刻まれた皺は、彼が長い年月を過ごしてきたのを物語っている。百歳とも、三百歳とも言われているが、本当の年齢は誰も知らない。もしかしたら本人さえも知らないのかもしれない。

「オールド・オスマン。暇なのはわかりますが、だからと言って私のお尻を撫でないで下さい」

いつの間にか手を伸ばし、ロングビルの柔らかな尻を撫で回していた手を咎められると、オスマンは素直に手を引っ込めた。

「この世の平和はどこにあると思う？ ミス……」

「少なくとも私のスカートの中にはありませんので、机の下にネズミを忍ばせるのはやめてください」

オスマンの問いかけに、すぐさま返すロングビルに言葉を詰まらした後、口笛を吹く。

するとロングビルの机から小さなネズミが飛び出す。オスマンの足から肩まで上がり、ちゆうちゆうと可愛らしく鳴いている。

そんなネズミにオスマンがポケットから取り出したナッツを差し出す。ネズミは嬉しそうにかじり始めた。

「さあ、モートソグニル。報告をしてくれたらもつとナッツをやるぞで」

ネズミがちゆうちゆう鳴き出す。

「そうか、白か。うむ。しかし、ミス・ロングビルは黒の方が似合うと思わんか、モートソグニルや」

ロングビルの美しい眉が歪む。

「オールド・オスマン。今度やったら王室に報告しますよ」

「なにい!? 王室が怖くて魔法学園学园长が務まるかあ!」

ロングビルの発言に目を見開きオーバーなアクションを取るオスマン。

「オールド・オスマン!」

そんな二人の漫才の様な行いは、突然の訪問者によって遮られる。

入ってきたのはコルベールだった。荒い息遣いで手に持った書物と体を揺らしている。

「大変、大変なんですよ!」

「大変なのは君の方じゃろう？　ともかく落ち着きなさい」

言われてコルベールは荒い息遣いを整えてから手に持った書物をオスマンに手渡す。

「これを見て下さい」

「これは……「始祖ブリミルの使い魔達」ではないか。まったく……こんな埃っぽい文献なんぞ読み漁っておつて。もつと有効に時間を使わんか、ミスタ……なんだっけ？」

「コルベールです！　お忘れですか!？」

「そうそう、そんな名前じゃつたな。で、この本がどうかしたかね？　コルベール君」

オスマンは興味なさそうに椅子に座り机に本を広げてペラペラとページを捲る。すると途中でしおりが挟まれていたため、そこを開いて止めた。

「これを見て下さい！」

興奮した口調でコルベールが桐生の手に見れたルーンのスケッチを渡す。

本とそのスケッチを見比べた瞬間、オスマンの目が強く光る。

ロングビルの方へ顔を向けて顎をしやくる。席を外してくれ、という合図だ。すぐさまロングビルが立ち上がり、学園長室から出て行く。

「詳しく説明してくれ、ミスタ・コルベール」

オスマンの表情からは雑念が消え、厳しい顔立ちのままコルベールに問い掛けた。

めちやくちやになった教室の片付けが終わったのは、昼休みの前だった。魔法が使えない為、人力で修理する事になっていたので思ったよりも時間がかかってしまった。

シュヴルーズは爆風に吹き飛ばされてから二時間程で意識を取り戻したが、先ほどのルイズの呪文が効いたのか「錬金」の講義は行わなかった。

窓ガラスや重たい机を運ぶ作業が多かった為、ほとんど桐生が片付けた様なものだがなんとか終わり、二人は昼食をとるために食堂に向かつて歩いていった。

ルイズはさつきから俯いていて、こちらに顔を向けようとしなない。

ボン、と桐生の大きな手がルイズの頭に乘せられる。驚いた様にルイズが桐生の顔を見上げた。

「気にするな。人間、誰にでも得意不得意がある。そんなに気に病む事じゃねえよ」

くしやりと優しく髪を撫でる。その感触は暖かく、思わずルイズの瞳に涙が溜まりそうになる。

しかし、プライドの高いルイズはそんな桐生の手を振り解く。そしてギツと歯を剥いて桐生を睨みつけた。

「ふざけないでよ！　なんで平民のあんたなんか、そんな事言われなきやなんないのよ！　あんただって……あんただって馬鹿にしてるんでしょ!?　貴族のクセに魔法が使えない！　えばつてるクセに何も出来ない！　そう思ってるんでしょ!?!」

「おい、俺は」

「うるさいわね！」

ルイズの言葉に言い返そうとするも、大きな声で遮られてしまう。怒りに顔が真っ赤に染まり、肩が震えている。これ以上何を言っても恐らく火に油だろうと思ひ黙っていると、ビシッと桐生に指を突き出してきた。

「今、あんたの顔なんて見たくないわ！ お昼ご飯抜き！ どっか行ってちょうだい！」  
「……わかった」

ルイズの言葉に頷いて見せ、桐生は背を向けて歩き始める。そんな桐生の背中をルイズは睨み続けた。

嬉しかった。今まで誰もが馬鹿にしてきたのに、桐生は優しくそれを慰めてくれた。それでも貴族のプライドが邪魔をし、素直になれなかった。

一筋の大粒の涙が、ルイズの頬を伝った。

少し歩いた所で、桐生は建物の壁にもたれるとポケットから煙草を取り出して火を付ける。美味そうに紫煙を吹き出しながら、すっかり空っぽになった腹を抱える。

「どうなさいました？」

しばらく煙草を楽しんでいると、銀のトレイを持ったメイド姿の少女が話しかけてき

た。カチューシャで纏めた黒髪とそばかすが印象的な、素朴な感じの少女だった。

「なんでもない、大丈夫だ。」

「あなた、もしかしてミス・ヴァリエールに召喚されたっていう……」

煙草を携帯灰皿にしまい込む桐生に少女が首を傾げてくる。服装からしてこちらの世界には居なさそうなのですぐにわかつたらしい。

「知ってるのか？」

「ええ。平民が使い魔として召喚されたって、噂になってますから」

少女はにっこりと笑ってみせた。多分、こつちの世界に来て始めた見た笑顔かも知れない。

「私もあなたと同じ平民です。貴族の皆さんをお世話するため、ここでご奉公させていただきます。ただいてるんです」

ルイズ達とそう年が変わらないのに随時すっかりした少女だと思った。

携帯灰皿をしまつて挨拶する。

「はじめまして、だな。俺は桐生一馬だ。よろしくな」

「変わったお名前ですね？ 私はシエスタといいます。」

握手をした瞬間、桐生の腹が鳴った。

「ああ……悪いな」



少し照れ臭そうに桐生が頭をかいてみせる。シエスタはそんな桐生を見てクスリと笑うと、ついて来る様に言った。

シエスタについて行くと、食堂の裏にある厨房に出た。大きな鍋やオーブンが並んでいる。コックやシエスタの様なメイド達が忙しそうに働いていた。

桐生を厨房の隅の机に座らせると、シエスタが厨房の奥へと消えた。そして再び姿を見せると、シチューがたっぷり盛られた皿とスプーンを持って来た。それを桐生の前に置く。

「貴族の方々にお出しする料理の余り物で作ったシチューです。良かったらどうぞ」

「いいのか？」

「ええ、賄い食ですけど」

桐生は両手を合掌した後、スプーンを手に取り、一匙すくって口に入れる。

「……美味しいな」

「良かった。お代わりもありますから、ごゆっくり」

桐生は夢中になってシチューを食べる。食べっぷりのいい桐生をシエスタが笑顔を浮かべたまま眺めていた。

「ご飯、貰えなかったんですか？」

「ちよつと怒らせちゃってな……昼飯を抜かれた」

「貴族を怒らせるなんて、大変な事ですよ!？」

「貴族か……自分一人じゃ何も出来ねえくせにえびる甘ったれの集まりじゃねえか。そんな奴ら、怖くもねえし興味もねえよ」

「勇気がありますね……」

シエスタは啞然として桐生を見ている。自分よりもずっと年を取っているであろう桐生の顔は貴族への悪口を口にしても揺るがない。凄い人だなあ、と内心シエスタは思った。

すっかり空になった皿をシエスタに返す。

「初対面なのにいきなりご馳走になっちまったな……ありがとうございます」

「お腹が空いたら、いつでも来てください。私達が食べているもので良かったら、お出ししますから」

「そうか……なら、礼代わりと言っちゃなんだが、何か手伝わせてくれ」

満たされた腹を軽くさすってから、桐生が立ち上がる。桐生の顔を見上げながら、シエスタが微笑んで頷いた。

「なら、デザートを運ぶのを手伝ってくださいいますか？」

「おう」

桐生が大きく頷く。

渡されたデザートのカッキーが並んだ銀のトレイを持ってシエスタと食堂に出る。そのカッキーをシエスタがはさみでつまみ、一つずつ貴族達に配って行く。

金色の巻き髪にフリルのついたシャツを着た気障つたらしいメイジの姿が見えた。薔薇をシャツのポケットに挿して髪を手でかきあげている。周りの友人が、口々に彼を冷やかしている。

「なあ、ギーシュ！ お前、今誰と付き合ってた？」

「教えるよ、ギーシュ！」

あの気障つたらしいメイジはギーシュというらしい。彼は愛でる様に薔薇を撫でた。「付き合う？ 僕は特定の女性には縛られないのだよ。薔薇は多くの女性を楽しませる花だからね」

自分を薔薇に例えて、酔いしれている。どこの世界にもこんな馬鹿は居るんだと、桐生は内心納得する。

その時、ギーシュのポケットから小さなガラス製の瓶が落ちた。中には紫色の液体が入っている。

「気に入らない餓鬼ではあるが、落とし物を教えるのは当然の行いだ。」

「おい、ポケットから瓶が落ちたぞ。」

しかし、ギーシュは振り向かない。

仕方なしに桐生はシエスタにトレイを持って貰い、小瓶を拾い上げてタンツとギーシュの前に置く。

「落とし物だぜ」

ギーシュが苦々しい顔で桐生を見上げると小瓶を押しやってきた。

「これは僕のじゃない。君は何を言ってるんだね？」

その小瓶を見るや否やギーシュの友人達が騒ぎ始めた。

「その香水、モンモランシーの香水か？」

「そうだ！ この鮮やかな紫色は、自分用に調合してるモンモランシーの物だ！」

「それを持ってたって事はギーシュ、お前はモンモランシーと付き合ってるんだな！」

「違う。いいかい？ 彼女の名誉の為に言うが……」

ギーシュの言葉が最後まで紡がれる事はなかった。

いつの間にかギーシュの背後に少女が立っていた。

栗色の髪をした可愛らしい少女だ。茶色のマントを見る限り、一年生の様だが。

「ギーシュ様……」

突然少女の瞳から大粒の涙がボロボロと零れ、泣き始める。

「やはりミス・モンモランシーと……」

「誤解だよ、ケティ。いいかい、僕の心の中に住んでいるのは」

ギーシユの弁解の最中に、ケティと呼ばれたその少女は力強く頬をひっぱたいた。

「その香水を持ってしている事が何よりの証拠ですわ！ さようなら！」

ギーシユが頬をさする。少し赤くなっていた。

今度は遠くの席から見事な黄金な巻き髪をたなびかせて歩いてくる少女が見えた。その少女には見覚えがある。自分がこちらの世界に来た初日に、ルイズと言いついていた少女だ。

眉を歪ませて怒りを露わにした表情でモンモランシーがギーシユの前に歩み出る。

「誤解だよ、モンモランシー。彼女とはこの間ラ・ロシエールの森に遠乗りしただけで……」

再び都合のいいように弁解するギーシユの頬には冷や汗が伝っている。どこの世界でも、修羅場は見ていて気持ちのいいものではない。

「やっぱりの一年生に手を出していたのね……」

「お願いだ、「香水」のモンモランシー。咲き誇る薔薇の様に美しい笑顔をそんな歪ませないでくれ……」

タジタジになって弁解しているギーシユの頬が、再び強くひっぱたかれる。今度はさつきとは反対の頬だ。

「嘘つきー！」

とモンモランシーが怒鳴って去っていく。

ギーシユはまた頬をさすりながら芝居がかつた仕草で言う。

「あのレデイ達には薔薇の存在の意味を理解して貰えない様だ」

桐生はとりあえず事の成り行きを見届けた後、机の上に置かれたままになった小瓶を取ってポケットに入れ、トレイをシエスタから受け取り歩き出した。

そんな桐生をギーシユが呼び止める。

「待ちたまえ」

「なんだ？ やっぱりこの小瓶は俺のだ、とでも認めるのか？」

トレイを持ったまま片手で小瓶を出して振って見せながら桐生が問い掛ける。

桐生の言葉に答えずに足を組んで椅子にふんぞり返るギーシユはどうも気障ったらしい。

「君が軽率にその瓶を拾ったおかげで二人のレデイの名誉が傷付いた。どうしてくれるんだね？」

ギーシユの言葉に思わず桐生は鼻で笑う。

「俺のせいだ、と言いたいのか？ 二股かけてたお前が悪いし、お前の方があの二人の名誉を傷つけたと思うんだがな」

ギーシユの友人達がどつと笑った。

「そうだ、ギーシユ！ お前が悪い！」

ギーシユの顔に赤みが差した。そして、桐生の身体を見回すと、ああつ、と突然小馬鹿にした様な目つきに変わる。

「君は確か、あの「ゼロ」のルイズが召喚した平民だったな。平民に貴族の名誉など語つても、わかりはしないか。しかも主人はあのルイズだしな……躰など出来る筈もない。君と、君の主人の無知さ故の所行と思つて許してあげるよ。さあ、行きたまえ」

桐生はギーシユの挑発を聞いて、シエスタに再びトレイを預けると、ゆつくりとギーシユに歩み寄つて見下した。

「うるせえんだよ、ガキが」

桐生の一言に、場の空気が一気に凍りついた。しかし、構わず桐生は言葉を続ける。

「二股かけた挙げ句両方に振られたキザ野郎が、偉そうに語つてんじやねえよ。てめえみてえな奴にルイズを馬鹿にする権利もねえ。もうちつと自分の惨めさに自覚を持つたらどうだ？ クソガキ」

腕を組んで見下しながら罵る桐生にギーシユの目が光る。

「どうやら、君は貴族に対しての礼儀を知らない様だな」

「だつたらなんなんだ？」

「良かろう、君に貴族に対しての礼儀を教えてやろう。ちようどいい

腹ごなしだ」

ギーシユが立ち上がった。桐生の眉もつり上がる。

「どこでやんのか？」

「貴族の食卓を平民の血で汚せるか。ヴェストリの広場で待っている。ケーキを配つたら来たまえ」

ギーシユが体を翻して食堂の外に出る。ギーシユの友人がワクワクした様子で、ギーシユの後を追った。もう一人は残って桐生を監視している。

面倒臭そうに頭をかいた後、震えているシエスタに近寄る。

「あ、あなた、殺されちゃう……」

「なに？」

「貴族を本気で怒らせたら……」

突然シエスタが逃げる様に走り去って行く。よくわからないが、あのギーシユと言う男、強いらしい。

去って行くシエスタを見送っていると、後ろからルイズが駆け寄ってきた。

「あんた！ なにしてんのよ！ 見てたわよ！」

「お前には関係ない」

キツパリと言い放つ桐生にルイズが溜め息を漏らす。



「謝っちゃいなさいよ」

「なに？」

「怪我したくなかったら、謝って来なさい。今なら許してくれるかもしれないわ」

ルイズの言葉に桐生は首を傾げる。そしてその後、残っているギーシユの友人に声をかける。

「ヴェストリの広場つてのはどっちだ？」

「こつちだ、平民」

友人が顎をしゃくって見せると、突然桐生がその友人に近づき、胸

ぐらを掴んで宙に浮かせた。突然の状況にギーシユの友人は目を回して慌てている。

「ちよ、ちよつとあんた！ 何して」

「口の利き方に気をつけろ、ガキが。俺は今、機嫌が悪い……その口、一度ぶつ壊して直してやろうか？」

ルイズの言葉など聞こえてない様にギーシユの友人に静かに語る桐生。ただならぬ殺気を身体から迸らせその場にいる全員、ルイズですらすくんでしまう。

「す、すみ、すみません……こ、こつちです……」

目に涙をいっぱい溜めて身体を震わせながら指を差すギーシユの友人を下ろしてやり、そのまま広場まで案内させる。

「な、なんなのよ、あいつ……!」  
文句を口にしながらも、ルイズもそれに続いた。

ヴェストリの広場は魔法学園の敷地内、「風」と「火」の塔の間にある中庭の事である。西側に位置する中庭は日中でも日が射さない為、決闘にはうってつけの場所だ。

桐生が広場に着くと、既に噂を聞きつけた生徒達が所狭しと並んでいる。

「諸君! 決闘だ!」

ギーシュが薔薇の造花を掲げると、盛大な歓声が沸き上がる。

「ギーシュが決闘するぞ! 相手はあのルイズの使い魔の平民だ!」

歓声に包まれながら、桐生が広場の中へ進み出る。ギーシュが腕を振って歓声に答え  
ている。

桐生の存在に気付くと、ギーシュも中央へ寄りそこそこの距離が空いた状態で睨み合  
う。

「とりあえず、逃げずに来た事は誉めてやろうじゃないか」

「……」

ギーシュが薔薇の造花をいじりながら歌う様に言うも、桐生は答えない。

「さてと、始めるか」

「……気乗りしねえなあ」

ギーシュが合図を送る様に言った言葉に、桐生が舌打ちをして呟く。

桐生の言葉が聞こえたのかどうかはわからないが、突然沸き上がった歓声がピタリと止まる。そのまま桐生は苦々しい顔を浮かべながら言葉を続ける。

「殴る価値のねえ奴と喧嘩するのは好きじゃねえ」

ピンと、緊張の糸が広場に漂う。生徒達の視線が桐生に集中していく。

ギーシュはしばらく黙った後、口元に笑みを浮かべた。

「なるほど……やはり貴族とは喧嘩したくないから、いい言い訳を考えた訳か。ははっ、コイツは傑作だ！」

ギーシュの高らかな笑い声に周りの生徒達もつられた様に笑う。

「平民！ 逃げたっていいんだぜ！」

「さっさと謝っちゃいなさいよ！」

周りから笑い声に混じって様々な野次が飛ばされる。

その様子を見てルイズは密かに安心した。やはり桐生は喧嘩を避ける様だ。当然だ。平民が貴族に勝てる訳がないのだから。

「だがな……」

次に桐生から発せられた台詞に、その場の全員の期待が裏切られる事になる。

「てめえみたいな薄っぺらい野郎に好き勝手言わせておくのは……もつと好きじゃねえ」

ギーシユの顔から笑みが消え、今度は桐生の口元に笑みが浮かぶ。手を差し伸べ、ちよいちよいと指を動かしてみせる。

「来いよ、甘ったれのクソガキが。貴族つてのがどんだけやれんのか知らねえが……遊んでやるよ」

そしてゆっくりと構えを取る。

ギーシユは黙ったまま薔薇の造花を振るう。

花びらが一枚舞ったかと思うと、甲冑を着た女戦士の形をした人形に姿を変えた。

身長は人間と同じくらいだが、硬い金属製らしい。淡い太陽の光を浴びて甲冑が輝いた。

「ほお……」

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はないだろう？ 言い忘れていたが、僕の二つ名は「青銅」。「青銅」のギーシユだ。そしてこの青銅のゴーレム、「ワルキューレ」が君の相手をするよ」

「なんでもいい。さっさと来い」

二人のやり取りをしばらく見ていたルイズが人混みをかき分けて広場に躍り出る。

「ギーシュ！」

「ああ、ルイズ！ 悪いが君の使い魔をちよつとお借りするよ！」

「ルイズ、怪我するぞ。どいてろ」

ルイズはこちらに目もくれない桐生とギーシュに向かって大声で怒鳴りあげる。

「いい加減にしてよ！ 大体決闘は禁止されてるのよ！」

「それは貴族同士の決闘だ。平民との決闘を禁止する法はない。どうしても止めて欲しいなら、彼に僕に謝る様説得するんだな」

ルイズは言葉に詰まる。そして桐生の前に立ち塞がる。

「カズマー！ ご主人様の命令よ！ 今すぐギーシュに謝りなさい！」

自分だって嫌だった。こんな奴に頭を下げるのなんて。しかし、ここで謝らなければ、桐生は本当にギーシュにギタギタにされてしまう。そんなのは見たくなかった。

桐生は構えを解くと、ルイズの両肩に手を置く。そして、優しく微笑んだ。

その微笑みに思わずドキリとする。

「やつと俺を名前で呼んだな」

そう言つて、ルイズをそつと前からどけさせる。困惑するルイズに今度はギーシュに視線を移しながら言う。

「朝、言つただらう？ ナメた態度を取つたお前以外の貴族は容赦しねえと。だから、お

前の命令でも、それは聞けねえ」

「確かに聞いたわ！ でも」

「それだけじゃねえ。こいつはお前の事も馬鹿にした。使い魔なら、主人を馬鹿にした奴をぶつ飛ばすのが当然だろ？」

「でも、平民が貴族に勝てる訳」

「ルイズ！」

なんとかして桐生を止めようとするルイズの言葉を少し強い声で遮る。

「お前は俺の主人なんだろ？ なら、俺を信じろ」

それだけ言うと、桐生はワルキューレに向かって突進する。それに合わせたかのように、ワルキューレも桐生目掛けて走り始める。

突然、桐生が動きを止める。それに構わず接近したワルキューレが拳を振り上げた。

ルイズが手で目を覆う。

ワルキューレの拳が後数センチで桐生の顔面に届こうとしたその瞬間、

「つしやあー！」

突然桐生の身体が沈んだかと思うと、鋭い拳の一閃がワルキューレの腹を貫通して粉々に砕け散った。上半身と下半身に別れたワルキューレが派手な音を立てて地面に転がる。

「なっ!?!」

「えっ!?!」

ギーシユが驚きの声を上げ、ルイズは訳がわからず声を上げる。

小牧流体術三大奥義の一つ、「虎落とし」。相手に攻撃が当たるといふ確信を持った一瞬の隙を突いて拳を打ち込むカウンター技である。

桐生は粉々になって地面に転がるワルクユーレをつまらなさそうに見てから視線をギーシユに移して問い掛ける。

「もう終わりか?」

桐生の挑発にギーシユが歯を剥き出す。

「すまない、忘れていたよ……貴族はどんな相手であつても全力で叩き潰すのが礼儀であるからね!」

数回、ギーシユが薔薇を振るうと剥がれた花びらからワルクユーレが次々と作り出される。

生まれた七体のワルクユーレは隊列を組むと、一斉に桐生に向かって駆け始める。

「上等だ」

それを迎え討たんと桐生もワルクユーレの隊列に向かって走り始めた。

ところ変わり学園長室。

コルベールが何故、今になって始祖ブリミルの使い魔について調べる気になったのかをオスマンに説明していた。

春の使い魔召喚でルイズが平民の男を呼び出してしまった事、契約をした時左手に刻まれたルーンが気になった事、そしてそれを調べた結果、

「始祖ブリミルが従えた使い魔、『ガンダールヴ』に行き着いたと言う訳か」

「そうです！ あの男の左手に現れたルーンは、伝説の使い魔『ガンダールヴ』の物と一致します！」

「それで……君の結論は？」

「あの男は『ガンダールヴ』だと思います！」

コルベールがはげ上がった頭の汗をハンカチで拭いながらまくし立てる。

オスマンは書物に描かれた文字と桐生のルーンのスケッチを何度も見比べる。確かに、形は完全に一致している。

「……確かにルーンは同じじゃ。しかし、だからと言ってその男が『ガンダールヴ』であると決めつけるのは早計過ぎはせんか？」

「それは……確かに」

オスマンの冷静な言葉にコルベールの熱が冷め、落ち着きを取り戻していく。



コツコツ、と扉のノックの音が響いた。

「誰じゃ?」

「私です。オールド・オスマン」

声の主はロングビルのものであった。扉の向こう側から、用件を報告する。

「ヴェストリの広場で決闘をしている生徒がいるそうです。かなりの騒ぎになっています。止めに入った教師がいたそうですが、生徒に邪魔された様です」

「まったく……貴族とは暇を持って余すと本当に碌な事をせん。一体誰と誰が決闘をしてるんじゃない?」

「一人はギーシュ・ド・グラモン」

「あのグラモンの馬鹿息子か……」

オスマンは頭を抱える。

グラモン家の家系は先祖代々、好色家として有名で、ギーシュの女好きも血筋からきているものなのだ。

「大方女の子の取り合いでもしたんじゃないやろう。で、相手は?」

「それが……貴族ではなく、ミス・ヴァリエールの使い魔の様です」

オスマンとコルベールの視線が交差する。

「いかが致しましょう? 決闘を止める為に「眠りの鐘」の使用許可を求める教師がいる

「そうですが」

コルベールが慌てた様に首を振ると、オスマンが強く頷く。

これは、チャンスだ。あの男、桐生が本当に「ガンダールヴ」かを知る絶好の機会である。それを邪魔される訳にはいかない。

「たかが喧嘩に秘宝を使う必要はない。放っておきなさい」

「わかりました」

ロングビルが遠ざかっていく足音が聞こえる。

完全に気配が消えたのを見計らい、オスマンが鏡に向かって杖を振るう。すると、鏡にヴェストリの広場の光景が浮かび上がった。

桐生がまず先頭のワルキューレにタックルを繰り出す。後ろに吹き飛ばされたワルキューレがもう一体のワルキューレを巻き込んで吹き飛ばされる。

隊列が乱れた他のワルキューレに今度は自慢の拳を振るう。

殴り、蹴り、投げつけて次々とワルキューレを破壊していく。

ギーシュは必死になって薔薇を振るい、次々とワルキューレを生み出していく。そうして一体に気を取られた桐生に別の一体が拳を振り上げる。

「カズマー！」

ルイズの叫びに反応する様に、すぐさま防御の姿勢をとって肘で金属製の拳を受け止める。

「ちっ……流石に面倒だな」

自分を取り囲む様にワルクューレが横に並んでいる。そして、拳を防いだワルクューレの一体を蹴り倒すと一齐に殴りかかって来た。

「終わりだ！ 平民！」

勝利を確信したギーシュが笑みを浮かべて叫ぶ。

すると桐生は蹴り倒したワルクューレの脚を自分の腕でしっかり挟み込むと、

「うおおらああっ！」

人間の何倍もの重さを持つワルクューレをジャイアントスイングし、躍り掛かってくる他のワルクューレを次々と巻き込んで薙ぎ倒す。我流喧嘩体術、「スイングの極み」である。

金属同士がぶつかり合い派手な音を立てて碎かれた。倒されたワルクューレ達を見届けた後、無遠慮に投げ飛ばす。

「そ、そんな馬鹿な！」

絶望に声を荒げるギーシュを捉え、桐生は一気に距離を詰めると拳をギーシュの顔面目掛けて振り上げる。

「ひっ！」

小さな悲鳴を上げて目を閉じ、訪れる衝撃と痛みにも備えるギーシュ。しかし、いつまで経つても衝撃も痛みも訪れない。

恐る恐る瞳を開くと、自分の鼻先スレスレで止まっている桐生のゴツい拳で視界がいつぱいになる。

「言っただろ？」

そう言っつてゆっくり拳を下ろす桐生。

「殴る価値がねえってな」

それを聞いてへなへなとギーシュがその場にへたり込み、俯き始める。

それを合図に、周りから歓声が溢れ始めた。

「あの平民、強え！」

「ギーシュが負けたぞ！」

先ほども完全にギーシュに味方していた大半が桐生を褒め称え始める。

桐生はへたり込んでいるギーシュに視線を落とすと、ある事に気がつく。ギーシュのズボンの股間が湿って染みが出来ている。殴られるという余りの恐怖に失禁してしまった様だ。

桐生は先ほどの香水の入った小瓶をポケットから取り出し、蓋を開けるとギーシュの

頭から振りかけた。パシヤパシヤと香水が頭で弾けてギーシユの服とズボンを濡らす。桐生の行動の意図に気付いてギーシユがハツと顔を上げると、桐生は周りに気付かれない様に首を小さく振って見せて背を向けて歩き出した。

完敗だった。勝負も。そして、男としても。

オスマンとコルベールは「遠見の鏡」で一部始終を見た後、顔を合わせる。

コルベールが興奮した様に震えた声で言う。

「オールド・オスマン。あの平民、勝ってしまいましたか……」

「そうじゃな」

「ギーシユは一番レベルの低い「ドット」メイジですが、平民に後れをとるとは思えません。それにあの戦闘能力！ やはり彼は「ガンダールヴ」ですよ！」

「うむむ……」

コルベールの言葉にオスマンが眉をひそめる。確かに、並外れた身体能力ではあった。多人戦に対しての恐ろしいほどの的確な戦法……普通の平民では考えられない。

「早速王室へ報告し、指示を仰ぎましょう！」

「それはならん！」

コルベールの言葉にオスマンが強い口調で首を振る。

「何故です?! 世紀の大発見じゃないですか! 現代に蘇った「ガンダールヴ」!」

「ミスタ・コルベール……「ガンダールヴ」はただの使い魔ではない」

「それはわかっています」

始祖ブリミルが用いた使い魔、「ガンダールヴ」。その姿形は記述に残されておらず、謎の多い使い魔である。

始祖ブリミルが使用したと言われている「虚無」の魔法はその強大な威力の為、詠唱時間が長かった。無防備な主人を守る為に、「ガンダールヴ」はあらゆる「武器」を使いこなして闘ったと記されている。

その強さは千人もの部隊を一人で壊滅させ、並のメイジでは歯が立たなかったとも言われている。

「まさに一騎当千、国士無双の強さを誇っていた使い魔じゃ。そんな強大な兵器にも似た「ガンダールヴ」を王室へ渡してみる。宮廷で暇を持て余してる戦好きの連中が黙ってはおらん。必ず他国へ戦を仕掛ける筈じゃ」

「なるほど……学園長の深謀には恐れいります」

「ともかくこの件は私が預かる。他言は無用で頼むぞ」

「かしこまりました!」

オスマンが杖を握り、窓際に立つ。

「時にミスタ・コルベール……彼の主人は優秀なメイジなのかね？」

その言葉にコルベールが咳払いをする。ルイズの事を聞いているのだろう。

「いや、その……どちらかと言うと無能な方ですが……」

「なるほど、やはり腑に落ちん。何故そんな無能なメイジと契約した彼が「ガンダール」になったのか。そもそも彼は本当にただの人間なのかね？」

たつぷりと蓄えた髭をさすりながら顔を傾げるオスマン。

コルベールは深く頷いてからキツパリと言う。

「どこからどう見ても、平民の男性でした。念のため、「ディテクト・マジック」で確かめたのですが、正真正銘、ただの人間です」

「なるほど……なら、「あれ」は何だったのじやろうか……？」

「なんの事です？」

オスマンの呟きに、コルベールが問いかける。しかし、オスマンは言葉を濁して話を終わりにしてしまっただ。

彼の頭に引つかかっている「あれ」。

それは一瞬しか見えなかったが、「遠見の鏡」の中で確かに彼は見たのだ。

桐生の体を纏う様に流れる、稲光の様な青い光を。

「ちよ、ちよつと！ カズマ！」

歓声を上げて盛り上がり続ける生徒の波を掻き分け去ろうとする桐生の後をルイズが追う。

広場から少し離れた扉から学園に入ると、先ほどの喧騒が嘘の様に静かな空間が広がる。窓から吹き抜ける春の風が、汗ばんだ肌に心地良い。

すぐさま後を追いついたルイズが桐生の前に出て複雑な表情を浮かべる。

「まさか……本当に勝っちゃうなんてね」

「貴族とえぼつてた割には、大した事なかったぜ」

「あのねえ！ 勝てたからいいものの、あんた本当に……！」

ポタツ

ルイズが呆れた様に桐生の腕を掴むと、何か液体が落ちる様な音が耳についた。

音のした方を見てみると、赤い、小さな水滴が床に落ちている。

表情を険しくさせてルイズは桐生の両手を掴んでよく見てみる。

「あんた……これって……！」

両手の拳を見てルイズが言葉を失う。

ゴツイ拳は皮膚が剥がれ、肉が裂け、血がにじみ出していた。殴り合いの喧嘩が得意な桐生とはいえ、流石に金属製の人形を殴り続ければそれ相応の反動が来る。骨が折れて



ないだけマシだと思っていた。

「大したことねえよ、気にするな」

「大したことあるわよ！　ちよ、ちよつと待つてなさい！　包帯と薬、貰つてくるから！」

言うや否や、ルイズはすぐさまどこかへ走り去つて行く。

一人になつて拳を見つめ、溜め息をついた。メリケンサックを付けて戦つた方が良かったか、と内心ごちる。だが、メリケンサックも丈夫な方ではないから、どっちみちこうなつていたかもしれない。

そんな風に考えていると、ルイズが包帯と何か青い液体の入つた瓶を持つてきたのが見えた。

桐生の手を掴むとそのまま引つ張り始めるルイズ。一体どこに行くのか尋ねると、「私の部屋よ！　こんな所じゃ落ち着いて手当て出来ないでしょ!」

と怒鳴られた。何をそんなに怒つているのか。

一度外に出て、女子寮に向かい、ルイズの部屋まで引つ張られる。

椅子に桐生を座らせる。手の甲を向けさせ指を伸ばさせると、ルイズが瓶の中の液体を傷にかけた。

ピリピリとした痛みが伝わり顔をしかめる桐生。桐生の表情も気にせず、今度は傷を

包む様に包帯を巻く。

「まったくと……無茶して……」

小さな眩きに桐生が顔を上げると、ルイズの瞳から涙が流れていた。

その表情は心配した様な、安堵した様な複雑なものだった。

「泣いてるのか？」

「……泣いてなんかないわよ。どうしてこの私が、平民の、使い魔のあんたなんかの為に泣かなきゃいけないのよ」

ブラウスの袖で涙を拭ってから恨めしそうにこちらを見るルイズが可愛くて、桐生は声を出さずに笑う。

桐生の笑顔に顔を赤らめながら、もう片方の手に包帯を巻きつつルイズが早口で告げる。

「勘違いしないでよね。ギーシュを倒したのは凄いと思うけど、だからってあんたへの待遇が変わるわけじゃないわ」

そう言つて包帯を巻き終わると、今度はとびきりの笑顔を浮かべてくる。年相応の、少女の可愛らしさがそこにはあった。

「忘れないでよね！ あんたは私の使い魔なんだから！」

## 第5話

桐生がトリステインの魔法学園に来てから、一週間が経った。

朝、窓から漏れる朝日の眩しさに、桐生が床から身体を起こす。硬く冷たい床で寝るのが苦痛な為、メイドのシエスタに頼んで馬の餌である藁を貰って寝床を作った。寝返りの際に時折痛みを感じるが、床のゴツゴツした硬さに比べたらずっとマシである。

桐生が藁で寝床を作ると、ルイズが、

「あんた…鶏にでもなりたいの?」

と呆れた風に言ってきたが気にしない。

起きた桐生はまず、部屋から出て、下の水汲み場まで行って自分の顔を洗った後、バケツに水を汲んで部屋に戻る。水道なんて気の利いた物は引かれていない為、こうしてルイズが洗顔や歯磨きに使う水を汲まなきゃならないのだ。

戻ると、未だ寝息を立てているルイズを揺さぶって起こす。

まだ眠たそうに体を起こして、手の甲で目を擦りながら欠伸を浮かべたルイズはまず着替えを行う。下着を自分で着けた後は桐生に制服を着させる。

遥は流石に羞恥心があつて、以前、遥の着替え中に誤って部屋に入った時、ランドセ

ルを投げつけられた事がある。遥よりも少し上なのにそういった羞恥心を感じないルイズに桐生は親の様な、複雑な感情を抱く。

黒いマントに白いブラウス、グレーのプリーツスカートの制服を着終わると、顔を洗って歯を磨く。ルイズはもちろん自分で顔を洗わない。それも桐生にやらせるのだ。

一度「自分でやれ」、と言った事もあったがその日一日食事を抜かされた。それ以来は「手間のかかる甘えん坊な子供」と割り切ってやっている。

顔を洗ってやり、タオルで拭いてやるとようやく目覚めた様な顔をするルイズと食堂へ向かう。

相変わらず桐生は床で食べてはいるが食事は多少良くなった。祈りが始まる前に適当にルイズが肉やら野菜やら果物やらを渡してくれる様になったのだ。

それに関しては桐生も感謝していた。

いつもの様に朝食が終わると、ルイズは教室へ向かい、桐生は部屋へ向かう。

日課の掃除が桐生を待っているのだ。床を箒で掃き、机や窓を雑巾で綺麗に磨き上げる。

掃除が終わったら洗濯が待っている。下の水汲み場にルイズの洗濯物を運んで洗濯板でごしごし洗う。湯が出ないため冷たい水で洗わなければならなくて、なかなか厄介な仕事だ。

一度加減を間違えてルイズのパンツを破いてしまった事があった。如何せん元の世  
界では洗濯機なんて便利な物があるため、手洗いの加減がイマイチわからない。

桐生の失態に頭に來たルイズが怒鳴り声を上げて罵倒してきた。實際、自分のミスな  
ので「す、すまん……」としか言えない桐生。

今の自分を見たらアサガオの皆は、名嘉原は、あっちにいる力也はなんと思うだろう  
か。しかし、ここに居させて貰っている間は仕方ないのだ。ここを飛び出したら、右も  
左もわからず途方に暮れるしかない。

洗濯を終え、部屋の窓際に干すとルイズの教室へ向かう。授業中の為、教室には入ら  
ず、廊下で腕を組んで待つ。

大体桐生が自分の仕事を終えて教室に來るのは昼休み近くなので、しばらく待つとゾ  
ロゾロと教室からメイジが出てくる。

メイジ達は桐生を避けて廊下を進む。ギーシュを倒して以来、メイジ達に一目置かれ  
る事になった桐生に喧嘩を売る物は、もはや誰もいない。桐生が教室にいる午後の授業  
は誰も彼もが静かに授業を受ける為、密かに教師達からも人気がある。

ふと、いつもならルイズが來る筈なのに、見覚えのある少年が近付いてきた。

ギーシュである。

「何か用か？」

当たり障りのない声の調子で桐生がギーシュに聞く。ギーシュは頷いてみせた。

「少し君と話したいんだが、良いかね？」

相変わらず偉そうな言葉遣いで声をかけてくるが、表情は真剣そのものだ。もしかしたら、再戦を望んでるかもしれないと思い、桐生も頷いて見せる。

「いいだろう。場所を変えて聞いてやる」

「カズマ、終わったわよ」

桐生とギーシュが話していると、ルイズが近付いてきた。ギーシュの存在に気付いて目つきが厳しいものになる。

「なによ、ギーシュ……カズマになんか用な訳？」

「どうやらそうらしい。昼飯は、お前一人で行つてくれ」

桐生の言葉に、ルイズがギーシュに詰め寄つて睨み付ける。

「あんた、まさか……カズマに再戦しようってんじゃないでしょうね？」

「違う、そうじゃない。ともかく、君の使い魔と話がしたいんだ」

ギーシュは困つた様な顔で手を上げ、首を振つてルイズに弁解する。

桐生からも大丈夫だと説明を受けたルイズは納得がいつていない様だったが、しぶしぶ一人で食堂に向かつていった。

「では、ついてきてくれ」

ギーシュが食堂とは反対に歩き出し、桐生がそれについていく。

しばらく歩くと、学園の裏に当たる広い場所に出た。建物の影で薄暗く、少し冷たい風が吹いている。周りを見る限り、人の気配はない。

桐生が少しギーシュと距離を取って向き合う。

「で、話ってなんだ？ またやり合いてえって言うなら……いつでも相手になるぜ？」

「さつきルイズにも言ったが、そんな事じゃあない」

桐生の言葉にギーシュが首を振る。なら一体何の用なのかさっぱりわからない桐生はとりあえず、ギーシュの出方を待つ。

しばしの沈黙の後、ギーシュが言い辛そうに口を開く。

「あの時……君はその、なんで僕に香水をかけたんだね？」

「……なんの事だ？」

ギーシュの話し方になんとなく言いたい事がわかってきて、桐生はとぼけた様に首を傾げる。

ギーシュは真剣な眼差しで首を振った。

「君があの時、僕を助けたのはわかっている。それに僕は感謝もしている。だがわからないのは、あそこまで君を馬鹿にした僕を、なんで君は助けたんだね？」

本当にわからない、と言った様子で桐生を見ながらギーシュが言う。

曖昧な返答が許されない状況に見え、桐生もとぼけるのを止める。

「俺はお前に勝った。それだけで十分だったただけだ」

「……そんな理由で、僕を助けたのか？」

「ギーシュって言ったな。俺は売られた喧嘩を買ったまでだ。別に勝ったからと言って、相手を辱めるつもりも、えばるつもりもねえよ」

腕を組んで、諭す様にギーシュに語りかける桐生。ギーシュは俯いて身体を震わせた。

「……たとえ相手が、勝った時に相手を馬鹿にしようと思つていてもかい？」

「ああ、関係ねえな」

ポケットから煙草を取り出し、先端に火を付けて紫煙を吹きながら桐生はギーシュに笑いかける。優しい、まるで父親が子供に浮かべる様な笑みにギーシュは言葉を失う。

「ギーシュ、お前くらいの年に、女にモテたいと思うのは当たり前前の事だ。だから別にお前に文句はねえ。だがな、同じ男として忠告しておく。今すぐには言わねえが、外見と同じくらい、中身も鍛えろ。それが出来る様になれば、年を取ったお前は今の何倍も格好いい男になつてると思うぜ？」

笑いながら言う桐生を、ギーシュは心から格好いいと思つた。

自分よりも遥かに年上のこの平民の男は、ギーシュが今まで会ってきた貴族の男達の



上辺の強さとは違う、真の強さを秘めている様に思う。

ギーシユは桐生に、「付き合わせて悪かったね」と謝罪と共に感謝を述べてから食堂へ向かった。

日の傾きを見た桐生は、そろそろ昼休みが終わるだろうと感じ、携帯灰皿に煙草を押しやりながら食堂とは違うある場所へ向かう。

桐生が向かったのは以前シエスタに案内してもらった、食堂の裏にある厨房だ。

昼食を終えてやはり足りないと感じていた桐生をシエスタが見つけ、再び案内されて食事を恵んで貰って以来昼には来させて貰っていた。

ヴェストリの広場でギーシユをやっつけた桐生は厨房の人気者になっていた。

「我等の拳<sup>けん</sup>」が来たぞ！」

そう叫んで桐生を歓迎したのは、この厨房のコック長であるマルトー親父だった。四十過ぎの太った親父だ。もちろん貴族ではなく平民ではあるが、魔法学園のコック長ともなればちゃんな貴族よりもずっと収入が良く、羽振りもいい。

丸々と太った体に、立派なあつらえの服を着込んで厨房を一手に切り盛りしている。

マルトー親父は羽振りのいい平民の例に漏れず、魔法学園のコック長でありながら貴族と魔法を毛嫌いしていた。

彼はメイジのギーシユを素手で倒した桐生を「我等の拳」と呼んで、いつも快くもて

なしてくれた。

桐生がすっかり自分専用になった椅子に座ると、シエスタが寄ってきて温かなシチューの入った皿と、ふかふかの白パンを目の前に出して微笑んだ。

「いつもすまないな」

「今日のシチューは特別ですわ」

シエスタの嬉しそうに言う言葉に桐生がスプーンでシチューをすくい、口に入れる。

瞬間、桐生の顔が輝いた。

「これは……美味しい！ いつも貰っている食事も美味しいが、これはまた……！」

感動に笑みを浮かべる桐生の元へ包丁を持ったマルトー親父がやってきた。

「そりやそうだ。そのシチューは、貴族連中に出しているのと同じ物だからな」

「こんな美味しい物を、あいつ等は毎日食べているのか……」

桐生がそう言うと、マルトー親父は得意げに鼻を鳴らした。

「ふん！ あいつ等は、確かに魔法が使える。土から鍋や城を作ったり、とんでもない火の玉を飛ばしたり、ドラゴンや魔物を操ったりと、大したものだ！ それは認める。だが、こうやって絶妙の味に料理を仕立て上げるのだから一緒の魔法だ！ そう思うだろ、カズマ？」

桐生は頷き、スプーンを置く。

「まったくその通りだな。そして、あいつ等が少し不憫に思う」

「?… どういう事だ?」

桐生の言葉にマルトー親父や側にいたシエスタ、果ては調理を続けていた他のコックも手を止めて桐生の方を見て首を傾げる。

厨房の中で、桐生の言葉が通る様に響いた。

「こんな美味しい物を毎日食べているのに、あいつ等は感謝の気持ちを知らない。いつも祈りを捧げ、感謝するのは始祖と呼ばれる神や、女王陛下とやらだ」

「まあ……確かにな」

桐生の言葉にマルトー親父が頷く。

「俺の所もそうだったが、最近の子供は「食べられている」事に当たり前になつてきている。だから食事を取れる事に感謝の気持ちがない。俺が子供の頃は、出された料理はもちろん、作ってくれた人にも感謝したものだ」

厨房の誰もが黙ったまま、桐生の言葉に耳を傾けている。

「それをあいつ等はしない。恐らく、親が教えなかったからなんだろうが、そんな子供が今度は親になり、自分の子供に同じ考えを教えると思うと……少しあいつ等が可哀想だな」

寂しそうに言い終えた桐生の言葉に一瞬の沈黙が漂った後、誰かの鼻をすする音が聞

こえた。

驚いて桐生が周りを見ると、コック達が次々と腕で目を覆って泣いていた。

マルトー親父の閉じた瞼からも、涙が溢れて頬を伝っていた。

「す、すまん、なにか気に障ったか？」

コック達が泣く姿を見て、桐生が席を立つて狼狽える。マルトー親父の涙を初めて見たシエスタも、困った様にオロオロとしていた。

「ち、違う……。違うんだ、カズマ……」

マルトー親父は太い指で涙を拭いながら桐生の肩に手をかけて、再び椅子に座らせる。声が震えていた。

「俺は……。いや、俺だけじゃない。ここにいるコック全員が、いつも悔しい思いをしている。どんなに美味しい物を作っても、結局あいつ等が感謝するのは始祖ブリミルと女王陛下だ。俺達に対してそんな気持ちは一切持たない。いつもそれが歯痒く、悔しかった……」

マルトー親父の言葉にコック達がウンウン頷く。

涙を拭いたマルトー親父が今度はにかつと笑ってみせた。気持ちのいい笑顔だ。

「だが、今のお前の言葉を聞いて、俺は今日ほどコックで良かったと思つた日はない。お前は、本当にいい奴だ！」

少し大袈裟にマルト―親父が腕を高々と上げて見せるとコック達から盛大な拍手が巻き起こった。

桐生は気恥ずかしさから頭をかいてシチューを食べる。

「なあ、カズマ、お前一体どこであんな格闘技を身につけたんだ？俺にも教えてくれよ」

マルト―親父がシチューを食べ続けている桐生の顔を覗き込んで問い掛ける。

桐生はその問いに首を振る。

「別に習ったわけじゃあねえよ。ただ喧嘩して、勝手に身に付いたもんだ」

嘘ではない。元の世界ではしよっちゅう喧嘩を売られては買った物だ。

もともと桐生の喧嘩慣れは、養護施設で育っていた頃から来ている。孤児だ、親がないんだと周りから馬鹿にされたりいじめられたりした仲間を守る為に良く親友だった男、錦山彰と共に喧嘩した。

もちろん負ける事だつてあった。その度に自分なり鍛えて仕返しもしにいった。

そんな昔を思い出しながらシチューを食べていると、

「聞いたか!?! お前達!」

マルト―親父が厨房で調理を再開していたコック達に叫ぶ。

若いコックや見習い達が頷く。

「聞いてますよ、親方！」

「これが本当の達人だ！ 自分の實力を決して誇つたりしないんだ！ 見習えよ！ 達人は誇らない！」

マルトー親父の言葉を、コック達が嬉しげに唱和する。

「達人は誇らない！」

コック達の唱和を聞いて、マルトー親父が嬉しそうに頷き、桐生の手を掴み上げる。その手はもう傷が治っていた。

「この拳であんな固そうなゴーレムを砕くとは、まったく見事だ！ なのに決してそれを自慢しない！ 俺はますますお前の事が好きになつたぞ！ 「我等の拳」！」

「やめてくれ……」

マルトー親父の好意に苦笑を浮かべながら桐生は自分の手を見た。数々の猛者を殴り倒してきた自慢の拳はゴツゴツして、細かい傷でいっぱいだ。

「シエスタ！」

「はい！」

マルトー親父がシエスタに笑顔で話し掛ける。桐生とマルトー親父達のやり取りを見ていたシエスタが元氣良く返事を返した。

「我等の勇者にアルビオンの古いのを注いでやってくれ！」

マルト―親父の言葉に頷いて、シエスタが葡萄酒の棚から言われた通りのヴァインテ―ジの物を取り出し、桐生のグラスに並々と注いでいく。

グツと葡萄酒で満たされたグラスを空ける桐生を、シエスタはうつとりとした表情で見つめている。

桐生が厨房に来る度にマルト―親父やコック達はますます桐生を気に入りに、シエスタは更に桐生を尊敬していくのだった。

みんなが桐生を囲んでワイワイ騒いでいると、そんな様子を厨房の窓から覗き込んでいる赤い影があつた。その影に若いコックが気がつき、首を傾げる。

「なんだ？ 窓の外に何かいるぞ？」

赤い影はきゆるきゆると鳴いて、消えていった。

仕事を終えた桐生は午後からルイズの授業のお供を務める。相変わらず壁に背中を預けたまま、静かに黒板に視線を定めながら授業を眺めている。

授業中にふざけたり、教師の邪魔をする生徒が出ると、真つ先に桐生が口を出して止めさせる。毎度平民のくせに、と文句は言うものの、ギーシュに勝利した実力を目の当たりにした生徒達は素直に言うことを聞いていた。

桐生は、この魔法学園の授業を気に入っている。自分の世界では絶対に受けられない

内容のせいかな、毎回真剣に教師の話の話を聞いている。

水からワインを作り出す授業や、秘薬を調合して特殊なポーションを作り出す講義、目の前に現れる巨大な火の玉や、空中に箱やボールを自在に浮かして動かす授業など、新鮮な内容に驚き、夢中になって見ていた。

しかし、この日は窓から差し込む春の暖かい日差しに当てられてうとうととしてしまった。

ルイズには申し訳なく思うも、眠りの誘惑に勝てず、邪魔にならない様に教室の隅に移動して座り込み、そのまま眠ってしまう。

ルイズは眠り始めた桐生を一瞬睨んだが、授業中の使い魔の居眠りを禁じる校則はないたため溜め息をつく。よく見れば夜行性の幻獣や、誰かのフクロウだつてぐーすか寝ている。文句の一つでも言つてやりたいが、邪魔しない様に教室の隅まで移動しているだけマシだろうと割り切る。

するとここで、不思議な事が起こった。

授業を受けて黒板を眺めていたルイズの目の前を、誰かの使い魔である青い猫が横切った。思わずルイズがその猫を視線で追う。

猫は机から飛び降りて、あぐらをかいて床に座って寝ている桐生に向かって歩いていく。桐生の目の前まで行くと、スンスンと鼻を鳴らして膝の匂いを嗅いでから、その膝



の上へ飛び乗って、桐生の脚の中で丸くなり眠り始めた。

それを皮切りにした様に、次々と使い魔達が桐生に近寄り、その体を寄せながら眠り始める。肩にはピンク色のネズミが眠っている。もう片方の肩には赤い鳥が止まっている。空いてる膝には六本足のトカゲが顎を乗せていびきをかいている。反対側の膝に大きな蛇が体をすり寄せて丸まっている。

「……おや？」

講義をしていた教師が使い魔達に群がられた桐生に気づいて笑みを浮かべた。

「ミス・ヴァリエールの使い魔さんは、他の使い魔に大人気ですね」

教師の言葉に生徒達が桐生を眺める。桐生に寄り添い、幸せそうに眠る使い魔達の姿に誰もが思わず和んだ。

「使い魔となる生物の大半は、人間よりも警戒心が強く、自分の主人が認めた相手にしか懐かない事が多いですが、ミス・ヴァリエールの使い魔さんは、そんな生物達の警戒心を解いてしまう人なのです。きつと、とても優しい人なのでしょう」

教師は笑顔のままルイズに語りかける。思わず真っ赤になってしまったルイズをよそに、桐生は身体に感じる重みからか寝苦しそうに顔を歪めていた。

ギーシュは教師の言葉に誰も気付かぬ様に小さく頷いた。

そんな桐生を、遠くからじつと睨んでいる赤い影があった。

キュルケのサラマンダーである。床に腹ばいになり、教室の隅で使い魔に囲まれ眠りこけている桐生をじっと見つめている。

サラマンダーの主であるキュルケは、教科書である本を見つめながら、その口元に妖艶な笑みを浮かべた。

学園長室で秘書のロングビルは書き物をしていた。

紙の上を滑る様に走っている羽ペンの動きを止め、オスマンの方を見つめた。オスマンは、セコイアの机に体を伏せて居眠りをしている。

ロングビルはその姿を見て薄く笑った。誰にも見せた事のない笑みである。

それから立ち上がり、低い声で「サイレント」の呪文を唱える。オスマンを起こさぬ様、自分の足音を消して学園長室を出て行った。そのまま下の階に向かって歩き続ける。

ロングビルが向かった先は、学園長室の一階下にある宝物庫の階である。

階段を下りて、巨大な鉄製の扉を見上げる。扉には、太く固そうな門がかかっている。その門にはこれまた頑丈そうな錠前がかけられて守られている。

この宝物庫には、魔法学園創立以来の秘宝が収められているのだ。

ロングビルは慎重に辺りを確認し、誰もいないのを確かめた後、ポケットから杖を取り

出した。鉛筆ぐらいの長さだが、くいつと手首を捻ってみると杖が伸び始めた。オーケストラの指揮者が振っている指揮棒ぐらいの長さだ。

ロングビルは低く呪文を唱え始め、詠唱が完成すると杖を錠前に振った。

しかし、錠前からは何の音もしない。

「……想定通り、この錠前には「アンロック」は通用しないか」

少し残念そうに呟いてから、ロングビルは妖艶に笑うと今度は自分の得意な呪文を唱え始めた。

それは「土」系統の魔法、「錬金」であった。慣れた調子で呪文を唱えあげ、分厚い鉄の扉に向かって杖を振る。魔法は扉に届いたものの、なんの変化も表れない。

「スクウェアアクリスのメイジが、「固定化」の呪文をかけてるみたいね……」

ロングビルはつまらなそうに呟いた。

「固定化」の呪文は、物質の酸化や腐敗を防ぐ呪文である。これをかけられた物質はあらゆる化学反応から保護され、そのままの姿を永遠に保ち続ける。「固定化」をかけられた物質には「錬金」の呪文も効力を失う。呪文をかけたメイジが、「固定化」をかけたメイジの実力を上回れば話は別だが。

しかし、この鉄製の扉に「固定化」の呪文をかけたメイジは相当強力なメイジであるらしい。「土」系統のエキスパートである、ロングビルの「錬金」を受け付けられないのだか

ら。

ロングビルはかけた眼鏡を持ち上げ、扉を見つめた。その時、階段を上ってくる足音に気付く。

素早く杖を折りたたんでポケットにしまう。

現れたのはコルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここでなにを？」

コルベールは予想外の人物がいた事に間の抜けた声で尋ねた。

ロングビルはそんなコルベールに愛想の良い笑みを浮かべる。

「どうも、ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているんですが……」

「ほお、それは大変だ。なにせここにはお宝、ガラクタひつくるめて所狭しと並んでいますからな。一つ一つ見て回るだけでも、一日がかりになりますよ」

「でしようね」

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか？」

何気なく思った事を口にするコルベールにロングビルは困った様に眉をひそめて見せる。

「それが、ご就寝中です。まあ、宝物庫の目録作成は急ぎの仕事ではないので」

「なるほど、ご就寝中ですか。あのクソじ、じゃなかった、オールド・オスマンは寝ると

起きませんからな。仕方ない、僕も後で伺う事にしよう」

コルベールは溜め息混じりに呟いてから歩き出した。そして急に立ち止まり、ロングビルの方へ振り向いた。

「その……ミス・ロングビル？」

「なんででしょう？」

ロングビルが首を傾げて見せると、コルベールは照れくさそうに禿げた頭をかいてから口を開く。

「その……もし、よろしかったら、昼食を……一緒にいかがですか？」

ロングビルは少し考えた後、にっこりと微笑んで頷き、申し出を受ける。

「ええ、喜んで」

二人は並んで歩き出した。

「ねえ、ミスタ・コルベール」

ちよつとくだけた言葉遣いになって、ロングビルが隣を歩くコルベールに話しかける。

「は、はい？　なんででしょうか？」

自分の誘いがあつさり受けられ少し舞い上がった気分だったコルベールは、跳ねる様な調子で答えた。

「宝物庫の中には、入った事がありました?」

「もちろん、ありますとも」

「では、「破壊の杖」をご存知?」

「ああ、あれは奇妙な形をしておりましたなあ」

コルベールは思い出した様に顎に手を当てながら頷く。

ロングビルの目が光った。

「と、申されますと?」

「いやあ、説明のしようがありません。奇妙な形としか……それよりも何をお召し上がりになります? 本日のメニューは平目の香草焼きですが、なに、僕はコック長のマルトー親父に顔が利くんですよ。僕が一言言えば、世界の珍味や美味を」

「ミスタ」

コルベールの自慢気なお喋りをロングビルが遮る。

「は、はい?」

「それにしても、宝物庫は立派な造りですわね。あれなら、どんなメイジを連れてきても、開けるのは不可能でしょうね」

「その様ですな。なんでもスクウエアクラスのメイジが何人も集まって、あらゆる呪文に対抗出来る様に設計したそうですからね。並大抵のメイジが何十人と集まってもビ

クともしないでしょう」

「ミスタ・コルベールは様々な事をご存知ですのね。本当に感心いたしますわ」

ロングビルはコルベールを頼もしげに見つめた。

「え？ いや……ははっ、暇になってはいろんな書物を眺めている物で。研究一筋に生きてますからね。おかげでこの年になっても独身でして……ははっ」

少し寂しそうに笑って見せるコルベールにロングビルは悪戯っぽい笑みを浮かべながら熱い視線を送る。

「ミスタ・コルベールのお側にいられる女性は幸せですわね。だって誰も知らない様な事を教えて貰えるんですから……」

ロングビルの熱い視線にコルベールは禿げ上がった額の汗を拭く。今までの人生でこんなに近くで女性と接する事がなかったコルベールの身体は緊張でカチコチになっていた。

少し歩いて所で、コルベールが真顔になってロングビルの顔を覗き込む。

「ミス・ロングビル、ユルの曜日に開かれる「フリックの舞踏会」はご存知ですか？」

「あら、なんですか？ それは」

「ははあ、貴女はここに来てまだ二カ月ほどでしたな。その、なんてことない、ただの

パーティーです。ただ、そこで一緒に踊ったカップルは、結ばれるとかなんとか！ そんな伝説があります！ はい！」

「素敵な伝説ですわね。それで？」

白ロングビルが笑って先を促した。

コルベールは頬を少し染めながら勇気を出す様に口を開く。

「その……もしよろしければ、僕と踊りませんかと、そういう。はい」

「喜んで。舞踏会も素敵ですが、私はもっと宝物庫の事について知りたいわ。魔法の品々にはとても興味があります……教えてくださる？ ミスタ」

自分の言葉に笑って頷いてから、まるで甘える彼女の様に腕を絡めて熱い視線で見上げてくるロングビルにコルベールは顔を真っ赤にして身体を更に固まらせる。

それでもコルベールはロングビルの気を引きたい一心で、まるでグーグル検索の様に頭の中を探った。宝物庫……宝物庫と……。

やっとロングビルの興味が引けそうな話を見つけたコルベールは、少しもつたいぶつた様に話し始めた。

「では、ちよつとご披露いたしましょう。大した話ではないのですがね……」

「是非とも、お伺いしたいわ」

「宝物庫は確かに魔法に関しては無敵に近いですが、一つだけ弱点があると思うんです



よ

「それは……興味深いお話ですわ」

「それは……ズバリ、物理的な力です！」

「物理的な力？」

「そうですとも！ 例えば、まあ、そんな事はないでしょうが、巨大なゴーレムが……」

「巨大なゴーレムが？」

「コルベールは得意気に、ロングビルに自説を語った。聞き終わった後、ロングビルは満足気に微笑んだ。」

「大変興味深いお話でしたわ。ありがとう、ミスタ・コルベール」

二つの月が彩る夜空を眺めながら、桐生は一人、女子寮の外で煙草を吸っていた。

あれから目を覚ますと、いろんな使い魔に身体をすり寄せられ、乗られていた事に驚いたが「使い魔に人気者の使い魔」と誰かに言われて思わず苦笑してしまった。

授業も終わり、夕食を済ましてから暫しルイズと他愛ない話をして先に寝ると言われたので、こうして外で煙草を吸っているのである。

寶石が散りばめられた様な星空に浮かぶ二つの月を見て、綺麗だな、と思つてから短くなった煙草を携帯灰皿に捨てて女子寮に戻る。

石造りの廊下に桐生の革靴の足音が響く。壁に開いた穴から吹き込む夜風が身体を少し冷ましていく。

ルイズの部屋の前に行き、ドアノブに手をかけようとした瞬間、どこかの扉が開く音が聞こえた。

振り返ってみると、扉の一つが開いている。場所からして、そこはキュルケの部屋だ。中からサラマンダーのフレイムが出てきた。燃える尻尾を揺らしながらちよこちよこと桐生の方へ近づいていく。桐生はしやがみ込んで笑みを浮かべた。

「お前は確か……フレイム、だったな。どうした？ 俺に用か？」

目の前まで近づいてきたフレイムの頭を優しく撫でてやる。フレイムはきゆるきゆると気持ち良さそうに声を漏らした後、桐生の上着の袖をくわえてグイグイ首を振る。

「なんだ？ どうした？」

桐生の言葉を無視してまるで付いて来いと言わんばかりにグイグイ上着を引っ張るフレイム。

キュルケの部屋のドアは開けっ放しだった。どうやらその部屋に桐生を連れて行きたいらしい。

「わかった、わかったから袖を引っ張るのは止めてくれ」

困った様に言う桐生の言葉を理解した様に、フレイムは袖から口を離すとキュルケの

部屋に向かつて歩き出す。部屋に入る前、桐生に振り向いてきゆるつ、と鳴いて見せてから中へと入っていった。

一体キュルケが何の用なのだろうか。よくわからないが、フレイムに案内された為、そのまま部屋へと入る。

入ると部屋は真つ暗だった。フレイムの周りだけ、ぼんやりと明るく光っている。

桐生がどうするか迷っていると、暗がりからキュルケの声が聞こえた。

「扉を閉めて？」

とりあえず言われた通り扉を閉める桐生。辺りは更に闇に包まれた。

「いらつしやい。こちらにいらして？」

「暗くて何も見えねえぞ？」

桐生がそう言った瞬間、パチンと指が鳴る音が響いた。

すると部屋の中に立てられた蠟燭が、一つずつ灯っていく。

桐生の近くに置かれた蠟燭から順に火が灯り、キュルケのそばの蠟燭がゴールの様だ。道のりを照らす街灯の様に、蠟燭の灯りがゆらゆら揺れながら浮かんでいる。

ぼんやりと淡い幻想的な光の中に、ベットに腰掛けたキュルケの姿が見えた。ベビードールと言ったか、そういう誘惑する為の下着姿で妖艶に笑っている。

キュルケの胸が、上げ底でない事が確認出来た。豊満な褐色の乳房が、レースのベ

ビーボールを持ち上げている。

「そんな所に突っ立ってないで、いらっしやいな」

キュルケが色っぽい声で言う。

桐生はゆっくり蠟燭の灯りが照らす床を踏みしめてキュルケの元に向かった。

「座って？」

目の前まで来ると、キュルケは自分の隣をポンポン叩きながら笑って言った。桐生はそれに従う様に隣に腰掛ける。

「それで、俺に何の用だ？」

桐生が静かに口を開く。燃える様な赤い髪を優雅にかきあげ、キュルケは桐生を見つめた。淡い蠟燭の灯りに照らされるキュルケの褐色の肌は、野性的な魅力を放っている。

キュルケは大きな溜め息を漏らし、そして悩ましげに首を振った。

「あなたは、あたしをはしたない女と思うでしょうね」

「何の事だ？」

「思われても仕方ないわ。わかる？ あたしの二つ名は「微熱」」

「そう言えばそう言ってたな」

キュルケの言葉に桐生は首を傾げたり、頷いたりと反応を見せる。

「あたしはね、松明みたいに燃え上がりやすいの。だから、いきなりこんな風にお呼びだてしたりしてしまうの。わかってるわ。いけない事なのよ」

「確かに感心はしないな」

桐生は相槌を打ちながら、異国の少女の打ち明け話を聞いていた。

「でもね、あなたはきつとお許しくださると思うわ」

キュルケは潤んだ瞳で桐生を見つめた。年頃の男なら、キュルケにこんな風に見つめられたら本能を剥き出しにしてしまうだろうと思う。

「何を許すんだ？」

キュルケは、すつと桐生の手を握り始めた。キュルケの手は温かい。そして一本一本、桐生の指を確かめる様になぞりだす。思わず桐生も困惑した表情を浮かべる。

「恋してるのよ、あたし。貴方に。恋はまったたく、突然ね」

「それは……突然だな」

キュルケの真剣な表情に、桐生も真剣な表情で頷いて返す。

「あなたがギーシユを倒した時の姿……かっこよかったわ。まるで伝説のイーヴァルデイの勇者の様だった！ あたしね、それを見て痺れたのよ。信じられる!? 痺れたのよ！ 情熱！ ああ、情熱だわ！」

「あ、ああ……じよ、情熱か」

芝居がかった様なキユルケの語りに思わず圧倒される桐生。そんな桐生に構わず、キユルケは夢見る少女の様に語り続ける。

「二つ名の「微熱」はつまり情熱なのよ！ その日から、あたしはぼんやりとマドリガルを綴ったわ。マドリガル。恋歌よ。あなたのせいなのよ、カズマ。あなたはあの日からあたしの中に住んでしまったの。だからフレイムを使って様子も探らせたりしたわ。本当に、あたしってばみつともない女だわ。そう思うでしょ？ でも全部、あなたのおかげなのよ」

桐生はなんと答えればいいかわからず、じっとしていた。

キユルケは桐生の沈黙を、イエスと受け取ったのか、ゆっくり目をつむり、唇を近づけてきた。

大概の男なら、女性に、しかもキユルケの様な魅力的な女性にここまでされたら堪らなくなるだろう。しかし、桐生はキユルケの肩を押し戻した。

どうして？ と言わんばかりの顔で、キユルケが桐生を見つめた。

「今話を聞いて思ったんだが……」

「ええ」

「お前、惚れっぼいんだな」

桐生がきつぱり言う。それは凶星だった様で、キユルケは顔を赤らめた。

「そうね……人より、ちよつと恋つ気は多いのかもしいわ。でも仕方ないじゃない。恋は突然だし、すぐにあたしの身体を炎の様に燃やしてしまうんだもの」

「そうか……どうしてそうなのか、わかるか？」

桐生の言葉にキュルケは首を振る。桐生は真剣な眼差しでキュルケを見つめながら言った。

「お前、誰かを本気で好きになつた事があるか？」

「えっ？」

突然の質問に、キュルケは言葉を詰まらせる。そんなキュルケを見抜いていた様に桐生は頷いた。

「やっぱりな。恋つ気が多いのは、別に悪い事じゃねえ。だが、それは誰かを真剣に好きになつた事がない証拠だ。本気で誰かを好きになつたら、必ずそいつに似た部分を持つてる奴を好きになるだろうしな」

「……」

桐生の言葉に何も返せないキュルケ。確かに、誰かを本気で好きになつた事があるかと自分に問いかけても、その名前は出てこない。

「お前は本当にいい女だと思う。だが誰かを本気で好きになつた事がなければ、俺みたいな男に惚れない方がいい。いつかお前の前に、誰よりも本気で好きになる相手が現れ

るさ」

燃える様な赤髪に桐生の指が絡み、優しくキュルケの頭を撫でる。

大人の女性顔負けのプロポーションを持つキュルケの顔が僅かに赤らみ、小さく声を漏らす。

桐生の手が頭から離れたかと思うと、突然キュルケがベットに身体を横にし、桐生の膝に頭を乗せる。

「ねえ……もう少し、もう少しだけ……撫でてくれない……？」

「……ああ」

甘える少女の様なおねだりに応える様に何度も優しくキュルケの頭を撫でながら桐生が小さな笑みを浮かべる。

撫でられる度にキュルケの中で小さな頃の記憶が蘇る。いつだったか、まだ魔法なんて使えなかった頃、父親によく頭を撫でて貰った。その感触は何よりも優しく、安心出来る温もりがあった。

この桐生と言う男はよくわからない。絶対自分の魅力に落ちると思っていたのに、こちらの心を見透かしたかと思えば、こんなにも優しく扱ってくれる。今まで遊びで付き合った男達にはない包容力に、キュルケの心の炎は静かに燃え広がった。

そんな風に二人の時間が流れていくと、窓の外が叩かれた。



そこには恨めしげにこちらを覗いている、なかなかのハンサムな男が一人いた。

「キュルケ！ 待ち合わせの時間に君が来ないから来てみれば……！」

「ペリッソン！ ええと、二時間後に」

「話が違う！」

ここは確か三階のはずだ。どうやらペリッソンと言うこのハンサムな男は魔法で浮いているらしい。

キュルケは煩そうに胸の谷間に差していた派手な魔法の杖を取り上げると、そちらの方も向かずに杖を振った。

蠟燭に灯っていた火から炎が大蛇の様に伸びて窓ごと男を吹き飛ばした。

「もう、無粋なフクロウね」

キュルケは桐生の膝に指を這わせながら、迷惑そうに呟いた。

「今のは誰だ？」

あまりにも突然の事で事態についていけてなかった桐生がキュルケに尋ねる。

「彼はただのお友達よ。それより、ほら……もつと撫でて……」

キュルケは桐生に色っぽい声でおねだりする。どうやら撫でられるのがクセになっているらしい。

再びキュルケの頭に手を伸ばそうとすると、今度は窓枠が叩かれた。

見ると、悲しそうな顔でこちらを覗き込む、精悍な顔立ちの男がいた。

「キュルケ！ その男は誰だ!? 今夜は僕と過ごすんじゃないのか!」

「ステイククス！ ええと、四時間後に」

「そいつは誰だ!? キュルケ！」

怒りに狂いながらステイククスと呼ばれた男が部屋に入ってこようとした。キュルケは煩そうに再び杖を振るう。

蠟燭の火から再び太い炎が宙を泳ぎ、男を包み込んで地面に墜としていった。

「……今のも友達か?」

「彼は、友達と言うよりただの知り合いね。ああ、もう！ 夜が長いなんて誰が言ったのかしら!」 瞬きする間に、太陽は昇って来るじゃないの!」

少し苛立ちを隠せない様子でキュルケが頭を掻く。

窓だった壁の穴から悲鳴が聞こえた。いい加減桐生もうんざりしながら振り返る。

窓枠で、三人の男が押し合いへし合いしている。

三人は同時に、同じ台詞を吐いた。二重唱の歌手も真つ青なほどのハモリ具合だった。

「キュルケ！ そいつは誰だ!? 恋人はいないって言ったじゃないか!」

「マニカン！ エイジャックス！ ギムリ！」

今まで出てきた男が全員違うので、呆れを通り越して思わず感心してしまふ桐生と、言うよりこのキュルケと言う少女、一体一晩に何人会うつもりだったのだろうか。

「ええと、六時間後に」

キュルケは起き上がって面倒くさそうに言った。

「朝だよー」

三人は仲良く唱和する。

キュルケはうんざりした様に、フレイムに命令した。

「フレイム！ ちょっとなんとかしてちょうだい！」

今まで部屋の隅で眠っていたフレイムが起き上がり、三人が押し合っている窓だった穴に向かって炎を吐いた。三人は仲良く地面に落下していく。

「…………おい」

同じくうんざりした様にキュルケを見ながら桐生が声を漏らす。そんな桐生にキュルケは手を広げて見せた。

「彼らは知り合いでも何でもないわ。ともかく今夜はあなたと過ごしたいの」

キュルケは桐生の隣に座り、再び目を瞑って唇を突き出した瞬間、今度はドアが物凄い勢いで蹴破られた。

また男か、と思つて桐生とキュルケが扉に向かつて視線を移すと違った。ネグリジェ

姿のルイズが立っている。

艶やかに部屋を照らす蠟燭を、ルイズは一本一本忌々しそうに蹴り飛ばしながら桐生とキュルケに近づいた。どうやらルイズは怒ると口よりも先に足が動く様だ。

「キュルケ！」

ルイズはキュルケを睨み付けながら大声で怒鳴った。そんなルイズに面倒くさい、と言わんばかりの態度でキュルケが溜め息をつきながら口を開く。

「ちよつと。取り込み中よ、ヴァリエール」

「ツエルプストー！ 誰の使い魔に手を出してんのよ!？」

ルイズの鳶色の瞳は爛々と輝き、火の様な怒りを灯している。

「仕方ないでしょ？ 好きになっちゃったんだから」

「キュルケは両手を上げて見せた。桐生はひとまず黙って事の成り行きを見守る事にした。」

余裕な態度を取るキュルケと、感情が爆発した様に怒り狂っているルイズの姿は、いかに也是对極の様に見える。

「恋と炎はフォン・ツエルプストーの宿命なのよ。身を焦がす宿命よ。恋の業火で焼かれるなら、あたしの家系は本望なのよ。それはあなたが一番ご存知でしょう？」

キュルケは両手をすくめて見せた。ルイズの手がわなわたと震えている。

「来なさい、カズマー！」

ルイズが桐生をじろりと睨んだ。

「ねえ、ルイズ。彼は確かにあなたの使い魔かもしれないけど、意思だつてあるのよ？」

そこは尊重してあげなくちゃ」

キュルケの意見にルイズは桐生を指差しながら硬い声を漏らす。

「あんた、明日になったら十数人の貴族に魔法で串刺しにされるわよ？　それでもいいの？」

「彼なら平気でしょ？　あなただつてヴェストリの広場で、彼の活躍を見たでしょう？」

ルイズは鼻で笑つて右手を振つてみせる。

「ふん、確かにちよつと拳法がお上手かもしれないわ。それは認めるわよ。でも、後ろから「ファイヤーボール」を撃たれたり、「ウィンド・ブレイク」で吹き飛ばされたりしたら、自慢の拳法も関係ないわね」

「大丈夫、あたしが守るわ！」

キュルケは顎の下に手を置くと、桐生に熱っぽい流し目を送った。

しかし、桐生はすくつと立ち上がった。

魔法でこちらに攻撃を仕掛ける相手を容赦するつもりもないが、まだこと魔法に関して知識が浅い以上、負ける可能性は十分にある。それ以前に、やはり自分の主人はルイ

ズなのだ。ルイズの言う事は聞いておかないと自分の中で割り切っていた。「あら、お戻りになるの?」

立ち上がった桐生をキュルケは悲しそうに見つめた。キラキラとした瞳が、悲しそうに潤む。

「悪いな。俺の主人はあいつだからな」

そんなキュルケに苦笑を漏らしながら、桐生がキュルケの頭を撫でてルイズの元に歩き始める。と、突然歩みを止めて、キュルケに振り向き、

「男を部屋に呼ぶなら、相手は一人に絞つといた方がいいぞ」

という助言を残して部屋を出て行く。

ルイズについて行く様に部屋に戻るなり、突然慎重に内鍵をかけると、ルイズが桐生に体を向けた。

唇をぎゅつと噛み締め、両目が吊り上がっている。

「なあにやってんのよあんた〜!」

声を震わせながらルイズが怒鳴る。相変わらずその小さい身体に不釣り合いの大声に顔をしかめる桐生。

「別に何もしてないぞ? 誘われたから入っただけだ」

「当たり前でしょうが! 何かしてたらただじゃおかなかったわよ! なによ! あん

な女のどこがいいのよっ!？」

桐生の言葉がルイズの怒りに更に火を付けたらしく、悔しそうに床にダンツ、ダンツと足を打ち付ける。なかなか力が入っているのか、わずかながら振動が伝わってくる。

桐生はあまりにも怒りを露わにするルイズに首を傾げながら尋ねる。

「お前、なんでそんなにキュルケと仲が悪いんだ?」

突然の質問にルイズは呆気にとられた様な顔を見せた後、腕を組みながらベットに腰掛けた。桐生も釣られた様に椅子に座る。

しばしの沈黙の後、忌々しそうにルイズが顔をしかめながら口を開いた。

「まず、キュルケはトリステインの人間じゃないの。隣国のゲルマニアの貴族よ。それだけでも許せないわ! 私にはゲルマニアが大嫌いなもの!」

「ふざけた理由だな」

ルイズの言葉に桐生が口を挟む。キツとルイズは桐生を睨むが、桐生もまた同じ様にルイズを睨んでいた為思わず視線を逸らしてしまう。

「それはお前の勝手な偏見だろうが。そんな理由で友達を選んだり、相手を差別するんじゃないわ。わかったか?」

「な、なによ!?! ご主人様に説教するつもり?!? 使い魔のくせに」

「わかったか、つて聞いたんだ」

なおも意見しようとするルイズに容赦なく桐生が言葉を遮る。その声は低く、真剣そのもので怒っているのがすぐにわかった。

ルイズは認めたくないながらも桐生の言葉に唇を噛んで押し黙る。まるで悪戯を叱る父親の様な言い方には妙な迫力があり、同時に逆らいがたい何かを桐生は持っていた。

「……まあ、確かにあんたの言うとおりよ。国が違うのを理由に嫌うのは悪いと認めるわ」

でもね、と言わんばかりにルイズは桐生を見つめる。桐生もそれには意見を言わず、先を促す様に頷いて見せる。

「私がキュルケを嫌っているのはそれだけじゃないわ。私の実家があるヴァリエールの領地はね、ゲルマニアとの国境沿いにあるの。だから戦争になるといつも先頭切ってゲルマニアと戦ってきたの。そして、国境の向こうの地名はツエルプストー！ キュルケの生まれた土地よ！」

ルイズが齒軋りしながら叫んだ。

「つまり、あのキュルケの家は……フォン・ツエルプストー家は……！ ヴァリエールの領地を治める貴族にとつて不倶戴天の敵なのよ！ 実家の領地は国境を挟んで隣同士！ 寮では部屋が隣同士！ 許せない！」



「なるほど……しかも、恋する家系とか言ってたな？」

「ただの色ボケの家系よ！ キュルケのひいひいひいおじいさんのツエルプストーは、私のひいひいひいおじいさんの恋人を奪ったのよ！ 今から二百年前に！」

「そりやまた……」

長い歴史を感じさせるルイズの語りに桐生も驚きの色を露わにする。

ルイズの方は一度付いた火が収まらないかの様に更に早口で語り続ける。

「それから、あのツエルプストーの一族は散々ヴァリエールの名を辱めたわ！ ひいひいおじいさんはキュルケのひいひいおじいさんに婚約者を奪われたし、ひいおじいさんは奥さんを取られたのよ！ ううん、それだけじゃないわ！ 戦争の度に殺し合ってるのよ！ お互い殺し殺された一族の数は、もう数え切れないわ！」

「わ、わかった、わかったからちよつと落ち着け。な？」

深夜なのにも関わらず大声で叫び興奮から荒い呼吸に肩を上下させるルイズをなだめる様に言ってから、桐生が家具の棚から水差しとグラスを取ってやる。グラスに並々と水を注いでルイズに手渡すと、そのまま一気に飲み干した。喋り過ぎたせいで喉もカラカラに乾いていたのだろう。

水で喉を潤し、グラスを桐生に手渡すと、ルイズも少しずつ落ち着きを取り戻した様子だ。

「まあ、そんな訳だから……あんたが誰と付き合おうと勝手だけど、キュルケはダメ！  
絶対！」

「心配しなくても、あいつにはいい男が周りに沢山いるだろ？　俺みたいな男より若い男を選ぶさ」

「……だと、いいけどね」

桐生の言葉にルイズはどこか納得がいつてない様に顔をしかめながら呟く。確かにキュルケは気まぐれで、誰彼構わず声をかけて、本命を作らない。しかし、女の勘と言うのか、桐生に対してのキュルケの想いはそんなちっぽけなものではないと思う。

ここでルイズはハツとする。

なんで私……こいつが取られないか心配してるのよ？

チラリと桐生の方を見してみる。当の桐生はルイズが飲み干したグラスを布で拭いている。

自分よりもずっと年上の男。整った顔立ちには力強さと、多くの苦難を乗り越えてきたかのような逞しさが見える。時折見る横顔は、どこか影を持った、憂いを感じさせる物もあつた。今までルイズが出会った事のないタイプだ。

「そう言えば、あんたって幾つなの？」

ふと、疑問に思った事をルイズが口にする。桐生はグラスと水差しを棚に戻して振り

向いた。

「今年で四十になったが？」

「……そう」

自分の十六と言う年齢からして本当に親子の様な年の差だ。しかし、自分の父親とはまったく似ても似つかない。

桐生は椅子に座りながら、先ほどのキュルケの部屋で焼かれ、落とされた男達を思い返していた。あの連中、キュルケの隣にいたのが自分だとわかったらどうするのだろうか。ギーシユの様に決闘を申し込んでくるか。はたまた魔法で闇討ちしに来るか。桐生にとつてはどちらでも構わなかった。売られた喧嘩は買う、それだけの事だ。

考え込んでいると、ルイズがこちらを見つめているのに気がつく。どうかしたのか桐生が首を傾げると、

「……何を考えてんのよ？」

とぶつきらぼうに言ってきた。

「キュルケの取り巻き達と喧嘩になったらどうするか、考えていただけだ」

「あんた、勝つ自信でもある訳？」

「なんでガキ相手に負けなきゃいけないんだ？　どんな方法で来ようが、魔法を使われようが、喧嘩売ってきた奴はぶちのめすだけだ」

「あんたねえ……」

呆れた様に口にながらも、ルイズは桐生が負けるなどと到底思えなかった。

ギーシユの決闘、あの時の様子が頭に浮かぶ。見慣れない拳法で鉄製のゴーレム達を蹴散らす姿は正直格好良かったと思う。

しかし、同時に不安も押し寄せる。またあの時の様に拳をボロボロにってしまったら。今度は肩や足がなくなってしまうたら。万が一……命を落としてしまったら。

ルイズの中の不安は、まるで朝靄の様に立ち込め、頭の中と胸の中をいっぱいにする。少し考える様に顎に手を当てて眉をひそめた後、ルイズが桐生に再び顔を向ける。

「ねえ、あんたって、何か武器の心得とかあるの?」

「武器か? そうだな……一応、剣術と棒術なら嗜んではいるが」

「そう……なら、決まりね」

ルイズは納得した様に立ち上がり、桐生にツカツカ歩み寄ると、ビシツと指を突き差した。

「あんたに剣、買ってあげる」

「なに?」

突然の申し出に、桐生は驚いた様に目を見開く。

「キュルケに好かれたんじゃ、命がいくつあっても足りないでしょ? それに、あんたは

私の使い魔なんだから、また怪我されたら困るのよ」

ルイズは溜め息混じり告げてチラリと桐生の拳を見る。薬のおかげであの時の傷は治ったが、細かい傷の跡から桐生が生半可な戦いをしてきた訳がないと物語っている。

「使い魔は主人を守るのが役目なんだから、あつた方がなにかと便利でしょ？」

そうよ。私を守る為に持たせるのよ。べ、別にあんたの身体が心配だからとか、そんなじゃないのよ！ そう！ 怪我されていちいち薬買うのだからお金かかるし！

表情はあくまで仕方なさそうにしながらも、心の中では訳もわからず弁解しているルイズ。

そんなルイズの心情に気付かず、桐生は笑みを浮かべる。

「ご主人様からの初めての贈り物って訳か。ありがとうよ」

ルイズの頭に手を伸ばし、桃色の髪を指でかき分け優しく頭を撫でる。ルイズの頬が、仄かに赤く染まった。

「あ、あのねえ！ あんたは私を守るのも仕事のうちなの！ だから、仕方なく、買ってあげるの！ 感謝しなさいよね！」

「ああ、わかってるよ。ありがとうな、ルイズ」

くしやくしやと頭を撫でる桐生の手を振り払えず、されるがままになりながらルイズがうっつと唸る。

気安くご主人様の頭なんか撫でてえ……！　で、でもまあ、いいわ……させてあげるわよ……。

心の中で桐生に文句を言いながらも、その優しい掌の感触に、ルイズは心の底から心地良さを感じていた。

「い、いつまで撫でてんのよ！　ほら、早く寝るわよ！　明日は虚無の曜日だから、街に行くわよ！」

少し名残惜しさを感じながらも、ルイズはどうとう桐生の手を振り払ってベットに向かう。こちらにも曜日によって休みがあるんだな、と思いながら、ルイズがベットに入ったのを見計らって蝋燭の火を吹き消した。

毛布にくるまって、飼い葉のベットに横になる。

なんだかんだ今日も一日が終わった。ゆっくりと桐生の意識は闇の中へ吸い込まれていった。

## 第6話

臉に当たる日の光を感じ、キュルケは昼前に目覚めた。今日は虚無の曜日の為たつぷりと睡眠が取れた。

まだ眠気眼のまま窓を眺めて、窓ガラスが入っていない事に気がつく。周りが焼き焦げている。

しばらくまだ回らない頭で考えてから、欠伸を漏らしながら一人納得する。

「そうだわ、ふあ、いろんな連中が出てきて吹っ飛ばしたんだっけ」

窓の事などまったく気にしない様子でベットから滑り降り、ベビードールから服に着替えて化粧を始める。

頭に昨日の桐生の顔が浮かび、それだけでウキウキしてしまう。せつかくの休みを彼と過ごしたい一心で、いつも以上に念入りに化粧を施す。

化粧を終え、自分の部屋を出てからツカツカとルイズの部屋の前に行き、扉をノックする。

その後、キュルケは笑みを浮かべながら頭の中でシチュエーションを描く。

桐生が扉を開けたら、いきなり抱き付く。

ルイズが扉を開けてきたら……その時は、そうね、部屋の奥にいるであろう桐生に視線でアプローチをかけるとしましょう。

昨日、キュルケは生まれて初めて自分の求愛を断られた。だからこそ、興味が湧いた。学園の周りにいる男で自分の求愛を断る様な輩はいなかったからだ。

別にプライドを踏みにじられた、と言う訳ではない。明らかに女の扱いに慣れてる様な物言いの桐生に、異性として興味があるのだ。

しかし、ノックの返事はない。思わずドアノブに手をかけて回すと鍵がかかっていった。

キュルケはなんの躊躇いもなく、ドアに「アンロック」の呪文をかけた。鍵が開く音がする。本来なら、学園内で「アンロック」の呪文を唱える事は、重大な校則違反に当たるのだがキュルケは気にしない。

恋の情熱は全てのルールや法律を超越する、と言うのがツエルプストー家の家訓なのだ。

しかし、残念ながら部屋に二人の姿はなかった。

キュルケはつまらなそうにルイズの部屋を見回した。

「相変わらず色気のない部屋ね……。こんなんじや男の子を呼んでも息を詰まらせるだけじゃない」



ふと、キュルケはルイズの鞆がない事に気付く。虚無の曜日なのに、鞆がないと言うことはどこかに出掛けたのだろうか。

窓から体を出して外を見回して見る。

門から馬に乗って出て行く二人の姿が見えた。目を凝らして見る。

それは、やはりと言うか、ルイズと桐生であった。

「なによお、出掛けるの?」

キュルケは残念そうに呟いてから、ルイズの部屋を飛び出した。

タバサは寮の自分の部屋で、読書を楽しんでいた。青みかがった髪と、サファイアを思わせる様なブルーの瞳を持つ彼女は、メガネの奥でキラキラと海のように目を輝かせて本の世界に没頭していた。

タバサはその小柄な体から、実年齢より四つも五つも若く見られる事が多い。身長は小柄なルイズよりも五センチも低く、身体もまるで病弱なのかと思わせる程細かいからだ。しかし、本人はまったくその事を気にしていない。

他人からどう思われる事よりも、とにかく放っておいて欲しい、と考えるタイプなのである。

タバサは虚無の曜日が好きだった。誰にも邪魔されずに、自分の好きな世界に没頭出

来るからだ。彼女にとって他人は、自分の世界に対する無粋な闖入者でしかないのだ。自分が信頼したり、必要と思う人間でも、よほどの時でなければ鬱陶しく感じるのだった。

その日も、どんどんとドアが叩かれたのでタバサはとりあえず無視する。

一瞬の静寂の後、今度は激しくドアが叩かれ始めた。

タバサは立ち上がらず、面倒くさそうに眉をひそめてから小さな唇を動かしてルーンを呟き、机に立てかけてあった自分の身長よりも大きい杖を振るった。

「サイレント」、風属性の魔法である。「サイレント」がかけられたタバサの部屋の中は無音が支配し、恐らくまだ叩いているであろうドアのノックの音もかき消えた。

タバサは風属性の魔法を得意とするメイジなのである。「サイレント」によって、彼女の集中を妨げる騒音は消え去った。

タバサは満足して再び本に集中し始めた。その間、表情はぴくりとも変わらない。

しかし、ドアは勢い良く開かれた。タバサは闖入者に気付いたが、本からは目を離さない。

入ってきたのはキュルケだった。彼女は二言、三言、大袈裟な素振りで何かを喚いたが、「サイレント」の呪文が効果を発揮している為、その声はタバサに届かない。

キュルケはタバサの本を取り上げた。そして、タバサの肩を掴んでこちらに振り向か

せる。タバサは無表情のままキュルケの顔を眺めている。その表情から感情は読み取れないが、歓迎していない事は確からしい。

本来なら、自分にこんな振る舞いをする輩は「ウインド・ブレイク」で吹き飛ばして、部屋から追い出す所なのだが、相手は友人であるキュルケだ。タバサの中で心を許せる数少ない例外の一人である。

仕方なく、タバサは「サイレント」の魔法を解除する。

いきなりスイッチを入れたオルゴールの様に、キュルケの口から言葉が飛び出した。

「タバサ！ 今から出掛けるわよ！ 早く支度をしてちょうだい！」

タバサは短くボソツとした声で自分の都合を興奮気味の友人に伝える。

「虚無の曜日」

それでわかるでしょ、と言わんばかりに、タバサはキュルケから本を取り返そうと手を伸ばす。キュルケは高く本を掲げてそれを阻止する。背の高いキュルケがそうするだけで、タバサの手は本に届かない。

「わかってるわ。あなたにとって虚無の曜日がどんな日か、あたしは痛いほどよくわかっている。でも、今はね、そんな事言ってもらえないの！ 恋なのよ！ 恋！」

今度はキュルケがそれでわかるでしょ、と言わんばかりの態度を取ったが、タバサは首を振った。キュルケは感情で動くが、タバサは理屈で動く。どうにも対照的な二人で

あるが、そんな二人は何故か仲が良い。

「そうね。あなたは説明しなくちゃ動かないのよね。ああ、もう！ あたしね、恋をしたの！ でね？ その人が今日、あのにつくいヴァリエールと出掛けたの！ あたしはそれを追って、二人がどこに行くのか突き止めなきゃいけないの！ わかった？」

タバサはなおも首を振る。事情はわかったが、どうして自分も一緒に行かなきゃならないのか、理由がわからなかつたからだ。

「馬に乗って出掛けたのよ！ あなたの使い魔じゃなきゃ追いつけないの！ お願い！ 助けて！」

キュルケはタバサに泣きついた。

タバサは自分の使い魔じゃなきゃ追いつけないと合点がいき、ようやく頷いて見せた。

「ありがとう！ じゃあ、追いかけてくれるのね?！」

タバサは再び頷いた。キュルケは友人だ。その友人が、自分でなくては解決出来ない問題を持ち込んだ。ならば仕方ない。面倒ではあるが、受けてあげよう。

タバサは窓を開け、口笛を吹いた。

ピューつと甲高い口笛の音が、青空に吸い込まれる。

それから、窓枠によじ登り、外に向かって飛び降りた。

何も知らない人間が見たら、頭がおかしくなったとしか思えない行為だが、キュルケはまったく動じず、タバサに続いて窓の外へ身を踊らせた。ちなみに、タバサの部屋は五階にある。

タバサは外出の際あまりドアを使わない。こっちの方が早いからである。落下する二人をその理由が受け止めた。

力強く両の翼を陽光にはためかせ、二人をその背に乗せて、ウィンドドラゴンが飛び上がった。

「いつ見ても、あなたのシルフィードは惚れ惚れするわー」  
キュルケが突き出た背びれに捕まり、感嘆の声を上げた。

タバサの使い魔は、ウィンドドラゴンの幼生なのだ。

タバサから風の妖精の名を授かったその風竜は、寮塔に当たって上空に抜ける上昇気流を器用に捉え、一瞬で二百メートルも空を駆け上った。

「どつち？」とタバサが短くキュルケに尋ねる。

「わかんない……慌ててて」

申し訳なさそうに言うキュルケに、タバサは別に文句を付けるでなく、ウィンドドラゴンに命じる。

「馬二頭。食べちゃ、駄目」

ウインドドラゴンは短く鳴いて了承の意を主人に伝えると、青い鱗を輝かせながら力強く翼を振る。

高空に上り、人間の何十倍も良い視力で走る馬を見つけするなど、この風竜にはたやすい事であった。

自分の使い魔が仕事を始めたのに満足すると、タバサはキュルケから本を取り返し、尖った風竜の背びれにもたれて再びページを捲り始めた。

トリステインの城下町を、ルイズと桐生が歩いていた。魔法学園からここまで乗ってきた馬は町の門のそばにある駅に預けてある。桐生は少し腰を痛めながらひよこひよこ歩く。なにせ、生まれて初めて馬に乗ったのだ。

そんな桐生を、ルイズはしかめ面を見つめた。

「情けないわね。馬にも乗った事がないなんて……これだから平民は……」

「俺の所じゃあ、移動に馬を使わなかったんだ。仕方ないだろ」

溜め息混じりに肩を落とすルイズに、桐生はなんとか痛みを抑えて言い返す。

桐生は周りを見回した。白い石造りの町は、まるでテーマパークの様だ。魔法学園に比べると、質素ななりの人間が多い。

道端で声を張り上げ、果物や肉、籠などを売る商人達の姿が、その場の活気を更に盛

り上げる。

のんびり歩いたり、急いでるやつがいたり、老若男女取り混ぜ歩いている光景は神室町と同じだが、如何せん通りが狭い。

「狭いな」

「狭いって、これでも大通りなんだけど？」

「これでか？」

道幅は五メートルもない。そこを大勢の人が行き来するものだから、歩くのも一苦勞だ。神室町の天下一通りが懐かしい。

「ブルドンネ街。トリステインで一番大きな通りよ。この先にトリステインの宮殿があるわ」

「宮殿にいくのか？」

「女王陛下に拝謁してどうすんのよ」

「そうだな……使い魔にももつといい食事を、とでも言ってみるか」

桐生がそう言ったら、ルイズが笑った。

道端には露店が溢れている。桐生は思わず時折足を止めては、店の品物を眺めていた。そんな事を繰り返していると、ルイズに服の袖を引っ張られた。

「ほら、寄り道しない！ スリが多いんだから！ あんた、上着の中の財布は大丈夫で

しようね？」

ルイズは財布は下僕が持つものだ、と言って財布をそっくり桐生に持たせていた。中にはぎっしり金貨が詰まっていた、ずっしりとした重さがあった。

「大丈夫だ。まあ、こんな重いのスつたら、逃げんのも大変だろうがな」

「魔法を使われたら、一発でしょ？」

ルイズが呆れた声で言ったが、周りにはメイジらしい姿の人間がいなかった。桐生は魔法学園で過ごすうちに、貴族と平民の見分け方を独自ながら学んだ。まず、メイジはマントを羽織っている。あと、歩き方が勿体ぶった感じなのだ。ルイズ曰わく、それが貴族の歩き方らしい。

「見た限り、普通の奴しかいない様だが？」

「だって貴族は全体の人口の一割しかないのよ。あと、こんな下賤な所、滅多に歩かないわ」

「貴族でもスリなんてするのか？」

「貴族は全員がメイジだけど、メイジの全てが貴族と言うわけではないの。いろんな事情で勘当されたり、家が没落したり、当主の次男坊や三男坊が身をやつして傭兵や犯罪者になったりしてる事もあるのよ」

「貴族には貴族の事情があるのか……」



ルイズの話聞いて、桐生は自分の世界でも起こる犯罪の経緯が似てる部分がある事に溜め息を漏らした。

道を歩いて物珍しそうに店の看板を眺める桐生に、ルイズは田舎者丸出しね、と心の中で笑いながら裏路地に入った。

悪臭が二人の鼻をつく。ゴミや汚物が、道端に転がっている。

「汚えな……」

「だからあんまり来たくないのよ」

鼻を押さえながらルイズが忌々しそうに呟く。

しばらく歩くと四辻に出た。ルイズはそこで足を止め辺りをきよろきよろと見回した。どうやらこの近くに目的の店があるらしい。

桐生はいつでも動ける様に気を張っていた。裏路地からこちらを見ている薄汚いなりの男達が所々見える。もし追い剥ぎでもしようものなら拳をおみまい出来る様にグツと拳を握り締める。

ルイズはそんな桐生に気付かず、一枚の銅の看板を見つけ、嬉しそうに呟いた。

「あ、あつたわ」

見ると、剣の形をした看板が下がっていた。そこがどうやら、武器屋らしい。

ルイズと桐生は、石段を上り、羽扉を開けて店の中に入った。

店の中は昼間だと言うのに薄暗く、ランプの灯りが灯っていた。壁や棚に、所狭しと劍や槍が乱雑に並べられ、立派な甲冑が飾られていた。

店の奥で、パイプをくわえている五十がらみの親父が、入ってきたルイズを胡散臭そうに見つめた。紐タイ留めに描かれた五芒星に気付く。それからパイプを口から離し、ドスの利いた声を発した。

「旦那、貴族の旦那。うちやあ真つ当な商売をしておりますぜ？ お上に目を付けられる様な事あ、何一つありませんぜ」

ルイズは短く、「客よ」と腕を組んで言った。

「こりゃあおったまげた。貴族が劍を！ おったまげた！」

「どうして？」

「いえ、若奥様。坊主は聖具を振る、兵隊は劍を振る、貴族は杖を振る、そして陛下はバルコニーからお手を振るうつてのが相場と決まっておりますんで」

「使うのは私じゃないわ。使い魔よ」

「忘れておりました。昨今の貴族の使い魔は劍も振る様で」

主人は商売つ気たつぷりに愛想笑いを浮かべて言う。それから桐生の事をじろじろと眺めた。

「劍をお使いになるのは、この方で？」

ルイズは頷いた。

桐生は腕を組んで二人の会話を聞いていた。

主人は見慣れない桐生の格好に訝しげに眉をひそめてから、奥の倉庫へと消える。その時、彼は聞こえない様小声で言った。

「こりや鴨がネギしよってやってきたわい。せいぜい高く売りつけるか」

彼は一メートル程の長さの、細身の剣を持って現れた。

随分と華奢な剣である。片手で扱う物らしく、短めの柄にハンドガードが付いている。

主人は思い出す様に言った。

「そーいや、昨今は宮廷の貴族の方々の間で下僕に剣を持たせるのが流行っておりやしてね。その際お選びになるのが、この様なレイピアでさあ」

なるほど、煌びやかな模様や装飾が付いていて、貴族には似合いの綺麗な剣だった。

「貴族の間で、下僕に剣を持たせるのが流行ってる?」

ルイズが尋ねると、主人はもつともらしく頷いた。

「へえ、なんでもここ最近、このトリスティンの城下町を盗賊が荒らしておりやして

……」

「盗賊?」

「そうでき。なんでも「土くれ」のフーケとかいう、メイジの盗賊が貴族のお宝を次々盗みまくってるって噂で。貴族の方々は恐れて、下僕にまで剣を持たせる始末でして、へえ」

ルイズは盗賊には興味がないのでじろじろと剣を観察した。しかし、すぐに折れてしまいいそうな程細い刀身は、桐生にどうも似合いそうにない。

「もつと大きくて太いのがいいわ」

「へえ、かしこまりやした」

ルイズの注文に主人はぺこりと頭を下げて奥へ消えた。

主人は二人に見えぬ様ガッツポーズを取る。このレイピアはそこそこ値段はするが、更に太い剣となるとより高価に売りつける事が出来るからだ。

今度は立派な剣を油布で拭きながら、主人が現れた。

「若奥様、これなんて如何でしょう？」

見事な剣だ。一・五メートルはあろうかという大剣で、柄は両手で扱える様に長く、立派な拵えである。所々に宝石が散りばめられ、鏡の様に両刃の刀身が光っている。見るからに切れそうな、頑丈な大剣であった。

「店一番の業物でさあ。貴族のお供をさせるなら、このぐらいいは腰から下げてて欲しいもんですな」

桐生も近寄ってその剣を眺める。

「ほお……見事な作りだな」

宝石等が少々うざったく感じながらも、桐生も褒めの言葉を漏らす。

桐生が気に入ったのを見て、ルイズはこれでいいだろうと思つた。店一番と親父が太鼓判を押したのも気に入った。貴族はとにかく、なんでも一番でないと気が済まないのである。

「これ、おいくら？」

ルイズが主人に尋ねた。

「何せこいつを鍛えたのは、かの高名なゲルマニアの錬金魔術師シュペー卿で。魔法がかかっているから鉄だつて一刀両断でさあ。ご覧下せえ。ここにその名が刻まれておりやしよう？ お安かありませんぜ？」

主人は勿体ぶつて柄に刻まれた文字を指差した。

「私は貴族よ」

ルイズも胸を反らせて言った。主人は淡々と値段を告げる。

「エキユー金貨で二千、新金貨なら三千でさあ」

「立派な家と、森付きの庭が買えるじゃないの」

ルイズは呆れてしまった。桐生はこの世界の相場と貨幣価値がわからないので黙つ

ているが、ルイズの言葉から半端な値段ではないのを察した。

「名剣は城に匹敵しますぞ？ 屋敷で済んだら安いもんでさあ」

「新金貨で百しか持つてきてないわ」

ルイズは貴族なので、買い物 of 駆け引きが下手くそだった。呆気なく財布の中身をバラしてしまふ。主人は話にならない、とばかりに手を振つて見せた。

「まともな大剣なら、どんなに安くても相場は二百でさあ」

ルイズは顔を赤くした。剣がそんなに高いなんて知らなかったのだ。

「流石に、これは無理か」

二人の会話を聞いていた桐生が剣を撫でてルイズに振り向く。

「そうね。買えるのにしましょう」

「ああ、そうだな」

ルイズの言葉に頷くと、桐生は乱雑に積まれ、並べられた剣を眺め始めた。

ルイズは心の中で恥ずかしさを感じて齒軋りしていた。普段桐生に貴族だと言えばついていたのに、これでは格好もつかない。更にルイズに恥ずかしさを感じさせるのは、その事を桐生が一切責めて来ない事だった。いつそ、「貴族のくせに」、とでも言われた方が言い返せるものなのに。

桐生は並べられた剣の一つを取り、しばらく眺めてから元に戻そうとすると、

「さつきから剣なんざ眺めやがって……おめえみてえな大男は棍棒がお似合いだぜ」

と低い、男の声が聞こえた。主人の声ではない。桐生が声のする方に振り向く。が、そこには乱雑に積まれた剣の束しかない。

「さつきと帰つちまいな。おめえもだ、貴族の娘っ子」

「失礼ね！」

突然聞こえた声に呆気にとられていたが、今度は自分が言われたのを聞いてルイズが声を張り上げる。

桐生はつかつかと声のする方に向かって辺りを見回す。やはりどこにも人影がない。

また、隠れられそうな場所もない。

「妙だな……誰もいないんだが……」

「おめえの目は節穴か！」

桐生は思わず後ずさる。なんと、声の主は一本の剣であった。錆の浮いたボロボロの剣から、声が発せられているのである。

「驚いた……こつちには喋る剣まであるのか」

桐生がそう言うと、主人が怒鳴り声を上げた。

「やい！ デル公！ お客様に失礼な事を言うんじやねえ！」

「デル公？」

桐生はその剣を取ってまじまじと眺めてみる。先程の大剣と長さは変わらないが、刀身が片刃で細い。薄手の長剣である。ただ、表面には錆が浮き、お世辞にも見栄えがいいとは言えなかった。

「お客様？ はっ！ まともな買い物出来なさそうなおのぼりさんのお客様だあ？ ふざけんじゃねえよ！ 顔出せや！ 耳ちよんぎつてやらあ！」

「それって、インテリジエンスソード？」

ルイズが当惑した声を上げる。

「そうでさあ、若奥様。意志を持つ魔剣、インテリジエンスソードでさあ。一体、どこの魔術師が始めたんですかねえ……剣を喋らせるなんざ。とにかくこいつはやたらと口は悪いわ、客に喧嘩売るわで閉口しておりやして……。やい、デル公！ これ以上失礼があったら、貴族に頼んでてめえを溶かしちまうからな！」

「おもしろえ！ やってみろ！ どうせこの世にやあもう、飽き飽きしてた所なんだ！ 溶かしてくれんなら、上等だ！」

「やってやらあ！」

とうとう主人も堪忍袋の緒が切れたのか、つかつかと剣を持つ桐生に近寄る。すると、桐生がそれを遮った。

まじまじと剣を眺め、刃に指を走らせる。小さな切り傷が指の腹にでき、血が滲む。



「お前、デル公って言うのか」

「ちがわあ！ デルフリンガー様だ！ 置きやがれ！」

「名前だけは一人前でさあ」

「俺は桐生一馬だ。よろしくな」

切れた指をくわえながら桐生が言うと、剣が黙った。まるでじつと、桐生を観察するかの様に押し黙った。

それからしばらくして、剣は小さな声で喋り始めた。

「こいつはおでれえた。見損なってた。てめ、「使い手」か」

「「使い手」？」

「自分の実力も知らねえのか。まあいい。てめ、俺を買え」

「ああ、買うぜ」

桐生が頷いて見せると、再び剣が押し黙った。

「ルイズ、これにするぜ。」

ルイズは嫌そうな声を上げた。

「ちよつと、そんなのにするの？ もつと綺麗で喋らない剣にしなさいよ」

「いいじゃねえか。喋る剣なんて面白い。それに……」

「それに？」

ルイズの質問に桐生が剣を掲げて見せる。錆の浮いた刀身はやはり見栄えが良くなく、ルイズとしては貴族である自分の使い魔が、こんな薄汚い剣をぶら下げるのは少々抵抗があった。しかし、そんなルイズとは対照的に、桐生は静かな笑みを浮かべながらその薄汚い刀身を眺める。

「この刃の形……俺の国の剣と似てるんだよ。だから気に入った」

片刃の刀身は、なるほど、桐生の国、日本で作られている刀に似ていた。

そんな事を知らないルイズはイマイチ納得がいかなかったが、他に買えそうな剣もないので主人に尋ねた。

「あれ、おいくら?」

「あれなら、百で結構でさあ」

「安いじゃない?」

「こつちからしてみりゃ、厄介払いみたいなもんでさあ」

主人は手をひらひらと振った。

桐生は上着のポケットからルイズの財布を取り出すと、中身をカウンターにぶちまけた。金貨がじゃらじゃらと派手な音を立てて落ちる。主人は慎重に枚数を確認してから頷いた。

「毎度、ありがとうござえやす」

劍を取って鞘に収めると、桐生に手渡した。

「どうしても煩く感じたら、こうやって鞘に入れれば大人しくなりませう」

桐生は頷いて、デルフリンガーと言う名前の劍を受け取った。

武器屋から出てきた桐生とルイズを、見つめる二つの影があつた。キュルケとタバサである。キュルケは、路地の陰から二人を見つめると、ギリギリと唇を噛み締めた。

「ゼロ」のルイズつたら、劍なんか買つて気を引こうとしちやつて。あたしが狙つてゐるつてわかつたら早速プレゼント攻撃？ なんなのよお！」

キュルケは地団駄を踏んだ。タバサはもう自分の仕事は終わつたとばかりに、本を読んでいる。ウィンドラゴンのシルフィードは高空をぐるぐる回っている。なんなくルイズと桐生の馬を見つけた一行は、ここまで後を付けてきたのである。

キュルケは二人が見えなくなった後、武器屋の戸をくぐつた。主人が入つてきたキュルケを見て目を丸くする。

「こりやおつたまげた！ また貴族だ！」

「ねえ、ご主人？」

キュルケは髪をかきあげ、色つぼく笑つた。むんとする色気に押され、主人は思わず顔を赤らめる。自分よりも遙かに年下であろう少々から発せられる色気が、熱波の様に

襲ってくる様だ。

「今の貴族が、何を買っていったかご存知？」

「へ、へえ。剣でさあ」

「なるほど、やっぱり剣なのね……。どんな剣を買っていったの？」

「へえ、ボロボロの大剣を一振り」

「ボロボロの？ どうして？」

「生憎、持ち合わせがなかった様で。へえ」

キユルケは手を顎の下に構え、おっほっほ！ と大声で笑った。

「貧乏ね！ ヴァリエール！ 公爵家が泣くわよ！」

「若奥様も、剣をお買い求めで？」

主人は商売のチャンスとばかりに身を乗り出した。今度の貴族の娘は、どうやらさっきのやせっぽちに比べて、胸も財布の中身も豊富な様だ。

「ええ、見繕ってくださいな」

主人は揉み手をしながら奥へ消えた。そして持つて来たのは、なんと先程ルイズと桐生に持つて来て見せた物と同じ立派な剣だった。

「あら、綺麗な剣じゃない」

「若奥様、流石お目が高くていらっしやる。この剣は、先程の貴族のお連れ様が欲しがっ

てたもんでさあ。しかし、お値段の加減が釣り合いませんで。へえ」

「それ、本当？」

貴族のお連れ様？ と、言うことは桐生が欲しがっていた物だろう。

「左様で。何せこいつを鍛えたのは、かの高名なゲルマニアの錬金魔術師シユペー卿で。魔法がかかっているから鉄だつて一刀両断でさあ。ご覧なさい、ここにその名が刻まれているでしょう？」

主人は先程ルイズと桐生に言ったのと同じ商売文句を言った。

キュルケは納得した様に頷いて見せる。

「おいくらかしら？」

主人はキュルケを値踏みした。どうやら先程の貴族よりも羽振りは良さそうだ。

「へえ。エキュー金貨で三千。新金貨で四千五百でさあ。」

「ちよつと高くない？」

キュルケの美しい眉が上がった。

「へえ、名剣は釣り合う黄金を求めるもんでさあ」

キュルケはちよつと考え込むと、主人の顔に自分の体を近付けた。

「ご主人……ちよつとお値段が張りすぎじゃございませんこと？」

無精髭の生えた顎の下をキュルケの手で撫でられて、主人は呼吸が出来なくなつた。

今までに感じたことのない物凄い色気が、親父の脳髓を駆け巡る。

「へ、へえ……名剣は……」

キユルケはカウンターの上に腰掛けた。左の脚を持ち上げる。

「お値段、張りすぎじゃ、ございませんこと？」

熱い吐息混じりに囁く様に更に言葉をかける。そのままゆつくりと、投げ出した脚をカウンターの上に乗せた。主人の目は、キユルケの褐色の太股に釘付けになる。

「さ、左様で？ では、新金貨で四千……」

キユルケの脚が、更に持ち上がった。太股の奥が、見えそうになる。

「いや！ 三千で結構でさあ！」

「なんか暑いわね……」

キユルケは答えずに、シャツのボタンを外し始めた。

「シャツ、脱いでしまおうかしら……よろしくて？ ご主人」

主人に熱っぽい流し目を送る。

「お、おとお、お値段を間違えておりやした！ 二千で！ へえ！」

キユルケは答える代わりにシャツのボタンを一つ外した。

それから勿体ぶった様に、主人の顔を見上げる。

「千八百で！ へえ！」

再び、一個ボタンを外した。キュルケの発育のいい、豊満な胸の谷間が露わになる。それからまた主人の顔を見上げた。

「千六百で！へえ！」

キュルケはボタンを外す手を止め、今度はスカートの裾を持ち上げ様とした。その指が突然止まり、主人が情けない顔でキュルケの顔を見る。

「千よ」

キュルケは言い放ち、再びするするとスカートの裾を持ち上げる。主人は鼻息を荒くしてそれを見つめた。

その指が、再び下着が見えかねない高さで止まる。主人はたまらず、悲しそうな声を漏らした。

「あ、ああ……！」

キュルケはスカートの裾を戻し始めた。そして、希望の値段を繰り返し告げる。

「千」

「へえ！千で結構でさあ！」

キュルケはにこつと笑顔を浮かべ、カウンターからすつと降りるとさらさらと小切手を書いた。

それをカウンターに叩きつける。

「買ったわ」

そして剣を掴むと、さつきと店を出て行った。

主人は呆然として、カウンターの上の小切手を見つめていた。

そして急激に冷静さを取り戻し、頭を抱える。

「あの剣を千で売っちゃまったよ！」

我ながら、男とはなんて馬鹿なんだと思いながら、主人は引き出しから酒壺を取り出した。

「ええい！ やつてらんねえぜ！ くそつたれが！ 今日はまだ閉店だ！」

買い物を終えた桐生とルイズは、来た道に戻る様に大通りを歩いていった。

ルイズはさつきから機嫌が悪そうにぶつぶつ文句を言っている。どうやら桐生の選んだデルFRINGERの外見が気に入らないようだ。

桐生はデルFRINGERの鞆の中央を左手で持ちながら、目の前を歩くルイズについて行っている。

突然、ルイズが振り向き、桐生の手に握られたデルFRINGERを訝しげに眺めて大きな溜め息をついた。

「やっぱり……きつたないわね」



「まあ、そう言うなよ。指先で試したが、切れ味は本物だ」

「そういう問題じゃないの！ あのね、貴族の使い魔なんだからそれなりに見栄えを良くして貰いたいの！ 大体あんた、服だっておかしいじゃないの！」

「そうか？ 気に入ってるんだがな」

剣のついでに自分の服装を指差された桐生は自分の着ているスーツとシャツを交互に見る。長年このスタイルで来ている為、全く違和感を感じない服装なのだ。

ルイズはまだ何か言いたげだったが、そんな気力も切れたのだろう。再び歩き始めた。

桐生も歩き出そうとした時、突然背後から女性の悲鳴が聞こえた。ルイズも桐生もそちらを振り向く。

見ると若い女性が倒れていて、その女性の物であろう鞆を持った、ターバンで顔を隠した二人組の男がこちらに向かって走ってくる。

「ひったくりよ！ 捕まえて！」

女性が大声で叫ぶが、あまりにも突然の事に道を歩く人は驚いた様に振り返るだけで二人組に押しつけられてしまう。

こちらに向かっているのがわかった桐生は、道の真ん中に立って二人組を睨み付ける。

「どけえ！ おっさん！」

鞆を持った前を走る男が怒声をあげながら、スピードを緩めず向かってくる。

桐生はふうつ、とまるでリラックスする様に溜め息をついた後、鋭い前蹴りを男の腹に打ち込む。

桐生の蹴りの射程圏内に入った男の腹に深々と脚がめり込み、目をぐるんと回してその場に男が倒れ込む。

とつさの事に反応出来ないルイズを横目に、手からこぼれた鞆を掴み取ると、もう一人の男が桐生の前に立ち止まる。

「なにしてくれてんだあつ?! おっさん!」

「怒りを剥き出しにして桐生を睨み付ける男。しかし桐生は動じる事もなく、鞆をルイズに投げ渡す。」

「俺はてめえ等みてえなチンケな野郎が嫌いなんだ。そこの伸びてるのを連れて、さつさと行け」

「ぶざげんなあ！ ぶち殺されてえか!」

桐生の言葉に男はポケットからナイフを取り出す。刀身が太陽に照らされ鈍い光を放っている。

周りの通行人も息を飲みながら後ずさる。ルイズも初めてちらつかされたナイフに

不安が隠せない。息を飲んで桐生と男を交互に見つめる。

「そんな物取り出すなら……遊びじゃ済まねえぞ？」

「うるせえ！ こちとら何人もこれでぶつた斬つてんだ！ 殺されたくなけりやそのガキに渡した靴こつちに寄越せ！」

しつかりとナイフを握り、男はその刃先を桐生に向ける。

ルイズはすかさず杖を引き抜こうとするも、自分の魔法の無さに呪文を唱えた後の恐怖がよぎって手が止まってしまふ。万が一、自分の失敗で桐生にもしもの事があつたらと考えると、迂闊に杖を抜けない。

「そうか……なら都合だな」

一瞬の沈黙の後、桐生がデルフリンガーの柄に手をかけ始める。

相手の獲物が自分のナイフより長いのを確認し、男の顔が一瞬困惑した色をしたのを見逃さない。

「俺は今日剣を買つて貰つたばかりでな……この剣の切れ味がいまいちわかんねえんだ。お前で試させて貰うぜ……」

そう言つて、男の方へ一歩歩み寄る。

男はそんな桐生に笑い声をあげた。

「はははっ！ てめえ、人斬つた事あんのか!? 初めてだつっうんなら、止めー」

「うるせえよ」

もう一步、桐生の足が男に近づくと、笑い声を遮り、静かな表情で剣を握る姿には妙な迫力がある。

男の方もナイフをしつかり構え、桐生の間合いを確認する。

「逆に聞くが……お前、斬られた事はあんのか？」

「なに……!？」

桐生の質問に男が戸惑った様な態度を表す。そんな男に桐生は容赦なく間合いを詰め、デルフリンガーの切っ先が届く距離まで近付いていく。

「お前は俺に殺すって言ったな。それはつまり、自分も死ぬ覚悟があるって事だよな？」

じりじりと、静かな動きで桐生と男の距離が縮まる。男の呼吸が荒くなり始め、少し離れているルイズですら、その荒い吐息の音が耳に届いていた。

「お前がどんな人生を送ってきたか知らねえが、この剣で一瞬にして終わらせる事も出来るんだぞ？」

もう桐生と男の距離は手を伸ばせば届く所まで来ていた。そして、ルイズや周りの人間は初めての光景に驚愕する。

桐生の体から、青いオーラの様な物が迸り始めたのだ。魔法を習っているルイズにも、そのオーラが何なのか、全くわからない。

周りの目も気にせず、桐生はただ一言、静かに、しかしはつきりと聞こえる様に言った。

「今ここで……死ぬか？」

「ひっ！」

圧倒的な威圧感に男は悲鳴を上げて、でたらめにナイフを突き出した。

ナイフが突き出されたのと同時に、桐生は手に持っていたデルフリンガーを天高く放り投げた。そして、ナイフを握る男の手首を右手で掴み、鋭い膝蹴りを腹に打ちつける。そのまま呻き声と共に前屈みになった男のズボンをもう片手で掴んで乱雑に宙に投げ上げた。

宙を舞う男は身体を何回か回転させて容赦なく地面に叩きつけられ、そのまま気絶する。

我流喧嘩体術、「物怖じの極み」。武器を持った相手がこちらに怯え、怯んだ隙に腹を蹴り上げ、宙に投げ飛ばす豪快な技である。

「ビビるくらいなら最初はなっからナイフなんて出すんじゃないやねえ。馬鹿が」

気絶して聞こえない男に言い放ちながら、落ちてきたデルフリンガーを華麗に受け止める桐生。

呆気に取られてた周りからその鮮やかさに大きな歓声が上がった。

ハツと我に返つたルイズが桐生に駆け寄る。

「ちよつと、カズマ！ あんた、大丈夫なの!？」

ルイズは桐生の体を眺めながら心配そうに言う。そして傷が一切ないのに安堵すると、今度は思いつきり桐生を睨み付ける。安心した瞬間に、腹が立ってきたのだ。

「何やってんのよ！ 勝手な事しないでちようだい!」

「荷物取られんのを見たら助けんのが普通だろ?」

桐生は当然の様に言つてルイズに返す。

ルイズは自分の身体が僅かに震えてるのを桐生に悟られまいと、大きな溜め息を漏らした。怖かった。初めてナイフを突きつけられ、本当に殺されるのではないかという恐怖が、一瞬で身体を駆け巡つた。話や書物の中とはやはり違う。

しかし、桐生は違う。あんなにも殺気を露わにし、ナイフまで突きつけてきた相手に動揺する事なく打ち破つたのだ。改めてただ者ではない事を思い知る。

そんな事を考えていると、鞆を取られた女性が二人に駆け寄ってきた。

「す、すみません！ 私の鞆は……!?!」

不安そうにこちらに声をかける女性にルイズが持つていた鞆を手渡す。

女性の顔が満開の笑顔になって何度も二人に頭を下げた。

「ありがとうございます！ なんとお礼を言つていいか……あの、申し訳ありません

……生憎御礼になる様な物は……」

感謝を表しながらも、女性の声と表情から覇気が薄れていく。そんな女性に桐生は首を振って見せた。

「そんなのいらねえよ。もう、引つたくられない様に気をつけな」

それだけ伝え、女性に背を向けて再び歩き出す。ルイズも慌てて桐生の後を追う。

ちらりと振り返ると、女性がこちらに深々と頭を下げているのが見えた。

町の入り口にある駅に辿り着き、二人の帰りを待つていた馬がこちらを見て首を振る。桐生はその馬の頭に手を添え、優しく撫でた。

「ねえ……ちよつと聞きたいんだけど」

「なんだ？」

馬の頭を撫でながら桐生がルイズに視線を合わせ答える。

「ナイフを突きつけられたって言うのに、あんた、怖くなかったの？」

「俺の過ごした街じゃ、あんなの日常茶飯事だったからな。もう慣れてるんだ」

「日常茶飯事って……」

あんなのが毎日の様にあるなんて、一体どんな町なのだろうか。ただルイズの中に広がる妄想はとてつもなく野蛮な光景に溢れていた。

弱肉強食、欲しい物は力で奪う、殺られる前に殺れ……絶対に違うとは思ってもどうし

ても勝手なイメージがつきまとう。

「……ならもう一つ。さつきあんたの身体から出てたあの青い光は何？」

「ヒートの事か？」

ルイズの質問に思わず質問で返しながら首を傾げる桐生。

「ヒート」。極道として生き始めた頃から体得した闘気の様な物で、身体から迸ると普段以上の力を発揮する優れ物だ。しかし、この場合はなんと説明すれば良いのか悩み、思ったままの事を口にする事にした。

「一種の闘気にも似た、精神力だ。あの光が身体から溢れ出すと動きや反応が良くなるんだ……学んで身に着けた訳じゃないから、体質なのかもしれないな」

「妙な体質持つてんのね、あんた……」

ルイズが奇妙な表情で此方を見てきたのに桐生は苦笑を浮かべて見せた。

二人揃って馬に跨がり、学園に向けて走り出す。来る時はかなり苦戦していた乗馬も、今の桐生は軽々とこなしていた。物覚えはいいらしい。

久々の町への買い物は、色々な事があった。それもこれも、この異世界から来た男のせいだ、とルイズは隣を走る桐生を横目で見る。真剣な眼差しで前を向いて馬を操る桐生の顔はどこか力強い男らしさを感じさせ、覗き見たその横顔に思わず見とれてしまったのに気付कि、慌てて視線を逸らす。



沈みかけた太陽が夕陽に変わり、淡いオレンジ色の光を漏らして草原と山々を暖かく染めていく。

「綺麗だな……」

馬上から沈む夕陽を眺めながら呟いた桐生の言葉に、ルイズも夕陽に顔を向ける。町へ買い物に行つて帰る頃にはいつも見てる見慣れた風景。しかし、今日はそんな景色も素直に美しいと思えた。

## 第7話

「土くれ」の二つ名で呼ばれ、トリステイン中の貴族を恐怖に陥れているメイジの盜賊がいる。土くれのフーケである。

フーケは北の貴族の屋敷に寶石が散りばめられたティアラがあると聞けば、早速赴きこれを頂戴し、南の貴族の別荘に先帝から賜りし家宝の杖があると聞けば、別荘を破壊してこれを頂戴し、東の貴族の豪邸にアルビオンの細工師が腕によりをかけて作った真珠の指輪があると聞いたなら一も二もなく頂戴し、西の貴族のワイン倉に、値千金、百年物のヴェンテージワインがあると聞けば喜び勇んで頂戴する。

まさに神出鬼没のメイジの大怪盜、それが「土くれ」のフーケなのである。

そして、フーケの盗み方は、白昼堂々屋敷を襲ったり、暗闇に紛れ別荘に忍び込んだりと、行動パターンが読めないのです。トリステインの治安を守る王室衛士隊の魔法衛士達も振り回されているのだ。

しかし、盗みの方法には共通する点があった。フーケは狙った獲物が隠された場所に忍び込む時は、主に「鍊金」の魔法を使う。「鍊金」の呪文で扉や壁を粘土や砂に変え、穴を開けて潜り込むのである。

貴族だって馬鹿ではないから当然対策は練っている。屋敷の壁やドアは、強力なマジに頼んでかけられた「固定化」の魔法で「鍊金」の魔法から守られている。しかし、フーケの「鍊金」は強力で、大抵の場合、「固定化」の呪文等物ともせずただの土くれに扉や壁を変えてしまうのだ。

「土くれ」は、そんな盗みの技からつけられた、二つ名なのである。

忍び込むばかりでなく、力任せに屋敷を破壊する時は、フーケは巨大なゴーレムを使う。その身の丈はおよそ三十メートル。

城でも壊せそうな巨大なゴーレムだ。集まった魔法衛士達をなんなく蹴散らし、白昼堂々とお宝を盗み出した事がある。

そんな土くれのフーケの正体を見た者はいない。男か、女かもわかっていない。ただわかつている事は……。

恐らくトライアングルクラスの「土」系統のメイジである事。

そして、犯行現場の壁に「秘蔵の○○、確かに領収しました。土くれのフーケ」と、ふざけたサインを残していく事。

そして……いわゆるマジックアイテム、強力な魔法が付与された数々の高名なお宝が何より好きだと言う事であった。

巨大な二つの月が、五階に宝物庫がある魔法学園の本塔の外壁を照らしている。

二つの月の光が、壁に垂直に立った人影を浮かび上がらせた。

今話題の大怪盗、「土くれ」のフーケであった。

長い、青い髪を夜風になびかせ悠然と佇む様に、国中の貴族を恐怖に陥れた怪盗の風格が漂っている。

フーケは足から伝わってくる壁の感触に舌打ちした。

「流石は魔法学園本塔の壁ね……物理攻撃が弱点？　こんなに厚かったら、ちよつとやそつとの魔法じゃどうしようもないじゃないの！」

足の裏で、壁の厚さを測っている。「土」系統のエキスパートであるフーケにとつて、そんな事は造作もない事だった。

「確かに「固定化」の魔法以外はかかってないけど……こんなに厚いと、私のゴーレムの力でも壊せそうにないわね……」

フーケは腕を組んで悩んだ。

強力な「固定化」の呪文がかかっている為、「錬金」の呪文で壁に穴を空ける事は出来ない。

「やつと……まで来たつてのに……」

フーケは歯噛みした。

「かと言って、「破壊の杖」を諦める訳にやあ、いかないね……」

フーケの目が月の光を受けきらりと光った。そしてそのまま、腕組みを続けて考え始めた。

フーケが本塔の壁に足をつけて悩んでいる頃……ルイズの部屋では騒動が起きていた。

ルイズとキュルケはお互い睨み合っている。桐生は自分の藁で出来た寝床の上でキュルケが持つて来た名剣とデルフリンガーを交互に見ている。タバサはベッドに座り、本を広げている。

「どういう意味かしら？ ツエルプストー」

腰に両手を当てて、不倶戴天の敵を睨み付けているのはルイズである。

キュルケは悠然と、恋の相手の主人の視線を受け流す。

「だから、カズマが欲しがってる剣を手に入れたから、そっちをいさいつて言ってるのよ」

「お生憎様。使い魔の使う道具なら間に合ってるの。ねえ、カズマ？」

桐生はルイズの声が聞こえない様に眉間に皺を寄せながら二つの剣を眺めていた。

キュルケが持つて来てくれた剣は確かに見事だと思う。相変わらず散りばめられた宝石がうざったいが、作りは確かな様であるし、刃もいかにも斬れそうだ。しかし、デ

ルフリンガーが悪いとも思えないのも確かだ。片刃の日本刀に似ている造りに素直に愛着も湧いている。

それぞれの剣を見て大半の者が選ぶのは、この綺麗な大剣だろう。

再び大剣を手にとると、突然ルイズが膝を蹴つ飛ばしてきた。

「おい、何するんだ？」

「その剣をキュルケに返しなさい。あんたにはその喋る剣があるでしょうが」

「まあ……そうなんだけども」

桐生は言葉を濁らせて二つの剣に視線を戻す。桐生がどちらも選べないのは、それぞれの剣を買った二人の想いだった。

ルイズは主人として初めて自分に剣を買ってくれた。キュルケはあんなにも高かった剣を自分の為に買ってくれた。どちらにも感謝の気持ちはある。

「嫉妬はみつともないわよ？ ヴァリエール」

キュルケは勝ち誇った調子で言った。

「嫉妬!?! 誰が嫉妬してるのよ!?!」

「だってそうじゃないの。カズマが欲しがってた剣を、あたしが難なく手に入れてプレゼントしたもんだから嫉妬してるんじゃないかって?」

「誰がよ!?! やめてよね! ツエルプストーの者からは豆の一粒だって貰いたくない!

ただそれだけよ！」

怒鳴り声を上げながらルイズが桐生から大剣を取り上げる。キュルケはそんなルイズを横目に未だ大剣を見ている桐生を見た。

「見てご覧なさい？ カズマはこの剣に夢中じゃないの。知ってる？ この剣を鍛えたのはゲルマニアの錬金魔術師シユペー卿だそうよ？」

そう言えば店の主がそんな事を言っていたなど桐生は心の中で呟いた。

それからキュルケは、熱っぽい流し目を桐生に送った。

「ねえ、貴方。良くって？ 剣も女も、生まれはゲルマニアに限るわよ？ トリステインの女ときたら、このルイズみたいに嫉妬深くって、気が短くって、ヒステリーで、プライドばかり高くしてしようがないんだから」

ルイズは桐生を見つめるキュルケの視界に入り、キュルケをぐつと睨み付けた。

「何よ、本当の事じゃないの？」

「へ、へんだ。あんたなんかただの色ボケじゃない！ なに？ ゲルマニアで男を漁りすぎて相手にされなくなったから、トリステインまで留学しに来たんでしょ!？」

ルイズは冷たい笑みを浮かべてキュルケを挑発する。声が震えてる所を見ると、相当頭に来ている様だ。

「言ってくれるわね、ヴァリエール……」

キュルケの顔つきが変わった。今度はルイズが勝ち誇った調子で言う。

「何よ、本当の事でしよう?」

二人は同時に自分の杖に手をかけた。

それまでじつとベッドの上で本を読んでいたタバサが、二人よりも早く自分の杖を振るう。

つむじ風舞い上がり、キュルケとルイズの手から杖が弾き飛ばされる。

「室内」

タバサは淡々と言った。

「ここでは危険、と伝えたい様だ。」

「何なの、この子……さっきから居るけど」

ルイズが本から一向に視線を外さなそうなタバサを見て忌々しそうに言う。そんなルイズの疑問を、キュルケが答えた。

「あたしの友達よ」

「何であんたの友達が私の部屋にいるのよ?」

不満をたっぷり含んだ声で呟くルイズを、キュルケがぐつと睨んだ。

「別にいいじゃない」

「そーいやまだ挨拶してなかったな。俺は桐生一馬だ。よろしくな」



「……タバサ」

桐生がじっと本を読んでいるタバサに声をかけると、小さく自分の名前だけを口にして、視線は本から外さなかった。相当無口なタイプの様だ。

「ごめんなさい、ダーリン。この子、あんまり愛想がないのよ」

「別に構わないさ」

キュルケが本から目を離さないタバサの頭を撫でながら桐生に謝罪を口にする。そんなキュルケに桐生は優しく首を振った。

一瞬和みかけた場だったが、再びキュルケとルイズが視線を混じらせ、睨み合い、火花を散らし始めた。

しばらくの硬直の後、キュルケが視線を逸らして言った。

「じゃあ、カズマに決めて貰いましょうか」

「えっ?」

いきなり自分に選択をゆだねられて、桐生は戸惑った様に声を漏らした。

「そうね。あんたの剣で揉めてるんだから、それが一番良さそうだわ。まあ、どちらを選ぶかなんて……わかりきっているけど。ねえ、カズマ?」

ルイズが随分とドスを利かせて言いながら桐生を睨む。

桐生は悩んだ。剣自体では、キュルケの買ってくれた物の方が見栄えがいいに決まっ

ている。

しかし、この錆びた剣、デルフリンガーはルイズが初めて自分に買ってくれた物だ。それなりに思い入れはある。

そう思うと選べない。剣を選ぶと言うことは、即ち二人のうち、どちらかを選ぶと言うことだ。

桐生は子供達が夏休みの時、綾子が夢中になっていた昼ドラを思い出した。内容は、妻を持つ主人公の男が出張先で出会った初恋の相手に再会し、思い出話に花が咲いて気分が高まった勢いで一線を越えた関係を持ってしまった為に、三人の間で修羅場が起ると言う物だった。結局最後までは観なかつたが、「私とこの人、どっちをとるの!？」とお約束のシーンが妙に頭に残っている。あの主人公も今の自分の様な心境だったのだろうか。

今思うと、綾子も随時マセた内容のドラマに夢中になったなと思う。そんな回想が頭を巡る中、

「どっち?」

と静かな口調でルイズとキュルケが睨み付けてくる。自分よりも遙かに年下のくせに妙な迫力だ。

そして悩んだ結果、桐生はある事を思い付く。

「なあ、二本同時つてのは駄目なのか？」

ルイズとキュルケの顔が一瞬間の抜けた顔になる。しかし、すぐさま眼光を戻し、口には出さぬものの「はあっ!」っと言う副音声がかえりききそうな表情を露わにする。

桐生はそんな二人の顔を交互に見てから続ける。

「二応俺は二刀流も使えるしな」

正確にはインドの古来から伝わる総合格闘武術、「カリステイック」の構えなのだが、武器を作ってくれている上山兄弟から買った秘蔵の書に書かれた宮本武蔵の二刀流剣術も体得してるのは事実だった。これなら二人の想いも傷付けずに解決する。我ながらいい案だ、と桐生は一人思った。しかし、

「却下!」

ものの一秒もしない内に断られた。

「ねえ」

キュルケはルイズに向き直った。

「何よ?」

「そろそろ、決着をつけませんか?」

「そうね」

「あたしね、あんたの事、大っ嫌いなものよ」

「私もよ」

「気が合うわね」

キュルケは微笑んだ後、目を吊り上げた。

ルイズも負けじと、胸を張った。そして二人は同時に怒鳴った。

「決闘よ！」

「やめとけよ」

桐生は呆れて言った。しかし、ルイズもキュルケも、お互い怒りを剥き出しにして睨み合い、激しい火花を散らしている。桐生の言葉等、耳に届かない様だ。

「勿論、魔法ですよ？」

キュルケが勝ち誇った様に言った。

ルイズは一瞬唇を噛み締めたが、すぐに頷いて見せた。

「ええ、望む所よ！」

「いいの？」「ゼロ」のルイズ。魔法で決闘で、大丈夫なの？」

小馬鹿にした口調でキュルケが呟く。しかし、ルイズは再び頷いた。自信はない。勿論、ない。あるわけがない。でもツエルプストー家の女に魔法で勝負と言われて、引き下がる訳がない。これはルイズの、ヴェリエール家のプライドの問題なのだ。

「勿論よ！ 誰が負けるもんですか！」

最早止まる事を知らない二人の興奮と敵対心に、桐生は深く溜め息を漏らした。

本塔の外壁に張り付いていたフーケは、誰かが近付く気配を感じた。

とんつ、と壁を蹴り、すぐに地面に飛び降りる。地面にぶつかる際、小さく「レビティション」を唱え、回転している勢いを殺し、羽毛の様に着地する。それからすぐに中庭の植え込みに消えた。

中庭に現れたのは、ルイズとキュルケとタバサ、そして桐生だった。

「じゃあ、始めましょうか？」

キュルケが言った。

今すぐにも本当に決闘をしかねないルイズとキュルケを見ながら、桐生が口を開く。

「本当にお前等、決闘をする気か？」

「勿論よ！」

ルイズもやる気まんまんである。

「危ないから、やめとけよ」

呆れた声で桐生が言う。

「確かに怪我するのも馬鹿らしいわね……」

「それは……まあ、そうね……」

桐生の発言にルイズもキュルケもちよつとだけ我に返ったらしい。

このまま決闘自体がなくなるかと一瞬ホツとしたのも束の間、今まで黙っていたタバサがキュルケに何かを呟く。そして、桐生を指差した。

「あ、それいいわね！」

キュルケは微笑むと、今度はルイズに呟いた。

「ああ、それはいいわ」

ルイズも頷いた。

そして三人は笑顔で（タバサは相変わらず無表情だが）一斉に桐生の方を向いた。

桐生は何故か、なんだかとても嫌な予感が身体を走るのを感じた。

「おい……お前等、本気か？」

桐生は珍しく情けない声で言ったが、誰も返事をしてくれない。

今の桐生は本塔の上からロープで縛られ、吊され、空中にぶら下がっている。やはりどちらかを選べば良かったと、今更ながら後悔する。

遙か地面の方には、小さくルイズとキュルケの姿が見える。夜とは言え、二つの月の

おかげでかなり視界は明るい。塔の屋上には、ウィンドドラゴンに跨がったタバサの姿が見えた。風竜は、二本の剣をくわえている。

二つの月が優しく桐生を照らしている。大きいだけに手を伸ばせば届きそうだが、今は肝心のその手が伸ばせない体勢だ。こんな吊された状況でなければこの風景で酒の一杯でも引つ掛けたい物なのだが。

ルイズとキュルケは、地面に立って桐生を見上げている。ロープに縛られ、上から吊された桐生が小さく揺れているのが二人の目に映った。

キュルケが腕を組んで言った。

「いいこと、ヴェリエール？ あのロープを切って、カズマを地面に落とした方が勝ちよ。勝った方の剣をカズマは使う。良いわね？」

「わかったわ」

ルイズは硬い表情のまま頷いた。

「使う魔法は自由。ただし、あたしは後攻。そのぐらいはハンデよ」

「いいわ」

「じゃあ、どうぞ」

ルイズは杖を構えた。屋上のタバサが、桐生を吊したロープを振り始めた。桐生が左右に揺れる。「ファイヤーボール」等の魔法は命中率が高い。動かさなければ、簡単に

ロープに当たってしまふ。

しかし、命中するかしないかよりもルイズには大きな問題があった。発動する魔法が成功するかしないか、である。

ルイズは悩んだ。どの魔法なら成功するだろう？ 「風」系統？ 「火」系統？

「水」や「土」の系統は論外だった。ロープを切るための攻撃魔法が少ない。やはり、ここは「火」である。そして気付いた。今、対戦しているキュルケは「火」の系統魔法が得意である事を。

キュルケの「ファイヤーボール」は桐生のロープを難なく焼き切るだろう。先行を貰った以上、失敗は許されない。

悩んだ挙げ句、ルイズは「ファイヤーボール」を使う事に決めた。小さな火球を目標目掛けて打ち込む魔法である。

短くルーンを呟く。もし失敗したら……桐生はキュルケが買ってきた剣を使う事になる。プライドの高いルイズには許せる事ではない。

呪文詠唱が完成する。気合いを入れて、杖を降った。

呪文が成功すれば、火の玉がその杖の先から飛び出す……はずだった。

杖の先からは何も出ず、一瞬の静寂の後、桐生の後ろの壁が爆発した。

凄まじい爆風で、吊された桐生の体が大きく揺れる。



桐生は思わず後ろを振り返った。爆発によつて塔の壁が粉々に砕け、亀裂が走っている。

百戦錬磨の桐生もその威力には度肝を抜かれそうになった。もし、あの爆発が自分に目掛けて発動されたら……思わずゾツとしてしまう。

「ルイズ……俺に恨みを持つのはわからなくもないんだが、せめて他の方法で仕返ししてくれ……」

桐生は顔を青ざめさせながら呟いた。当然ながらルイズの耳にその声は届かない。

件のルイズは桐生のロープを見つめる。ロープはなんともない。爆風で切れてくれたら、なんて考えたが甘かった様だ。本塔の壁が砕けてヒビが入っている。

ルイズはキュルケの方を振り向いた。

キュルケは……腹を抱えて笑っていた。

「ゼロ」！ 「ゼロ」のルイズ！ ロープじゃなくて壁を爆発させてどうするの!? 器用ね！」

ルイズは無然とした

「貴女って、どんな魔法を使っても爆発させるのね！ あっはっはっ！」

ルイズは悔しそうに拳を握り締めて、そのまま力無く膝を突いた。

「さて、あたしの番ね……」

キュルケは笑いを止めて、狩人の瞳で桐生を吊したロープを見据えた。タバサがロープを揺らしているの、狙いがつけづらい。

それでも、キュルケは余裕の笑みを浮かべた。ルーンを短く眩き、手慣れた仕草で杖を突き出す。「ファイヤーボール」はキュルケの十八番である。

杖の先から、メロン程の大きさの火球が現れ、桐生のロープ目掛けて飛んだ。火球は狙い変わらずロープにぶつかり、一瞬でロープを焼き尽くした。

桐生の体が真つ逆様に地面に向かって落ちていく。屋上にいたタバサが杖を振り、桐生に「レビテーション」をかけた。加減された呪文のおかげで、ゆつくりと桐生は地面に落ちた。

キュルケは勝ち誇って笑い声を高らかに上げた。

「あたしの勝ちね！ ヴァリエール！」

ルイズはしよぼんとうなだれて座り込み、地面の草をむしり始めた。

フーケは、中庭の植え込みの中から気配を殺して一部始終を見守っていた。ルイズの魔法で、宝物庫の辺りの壁にヒビが入ったのが見受けられる。

一体、あの魔法はなんなのだろう？ 唱えた呪文は「ファイヤーボール」なのに、杖の先からは火球が出なかった。代わりに、壁が爆発した。

あんな風に物が爆発する呪文なんて見たことがない。

フーケは頭を振った。それよりも、このチャンスを逃してはならない。フーケは、呪文を詠唱し始めた。長い詠唱だった。

詠唱が完成し、地面に向けて杖を振る。

フーケの唇が妖艶に薄く笑った。

音を立てて平らだった地面が盛り上がる。

「土くれ」のフーケが、その本領を發揮したのだ。

「残念だったわね、ヴァリエール！」

勝ち誇ったキュルケは笑い続ける。大きな声だ。一瞬近所迷惑を考えた桐生だったが、この辺りは寮から離れてるしいいか、と割り切った。

ルイズは勝負に負けたのが悔しいのか、膝を突いたまましよぼんと肩を落としていく。うなだれていて表情は読めない。

桐生は複雑な気持ちで、ルイズを見つめた。それからキュルケへと視線を向け、低い声で言った。

「喜んでる所悪いんだが、ロープを解いてくれないか？」

地面に座って足の自由は利くものの、上半身はきつちりロープでぐるぐる巻きにされ

ている。

キュルケは桐生に微笑んだ。

「ええ、喜んで」

その時である。

背後に巨大な何かの気配を感じて、キュルケは後ろに振り返った。

そして、我が目を疑った。

「な、何あれ!？」

キュルケは口を大きく開けた。巨大なゴーレムがこちらに歩いて来るではないか。

「きゃあああああつー!」

キュルケはパニックに陥り、悲鳴を上げて逃げ出した。

キュルケのパニックに一瞬唖然としたが、キュルケがどいた事で迫り来る巨大なゴー

レムが見えた。桐生の眉が歪む。

「何だ、ありやあ! でけえ……!」

桐生もここにいるのは危険と判断し、立ち上がるうとして、手が使えない事に気付いた。上半身を使わずに立ち上がるのは、よほどの脚力やテクニクがなければ不可能だ。

我に返ったルイズが桐生に駆け寄る。

「な、何で縛られてるのよ!? あんたってば!」

「お前等が縛ったんだろが!」

そんな二人の頭上で、ゴーレムが足を持ち上げる。こちらを踏み潰そうとしてるのだ。

「くっ、このロープ……!」

ルイズは一生懸命にロープを外そうともがいている。が、よほど固く結んでしまったのかなかなか外れない。

「ちっ! ルイズ、ちよつと離れろ!」

舌打ちの後、桐生がルイズに叫び、即座にそれにルイズが従う。

桐生が両腕に力を入れてロープを引きちぎろうとする。その間にも、ゴーレムの足はゆっくり二人に降りて来ている。

ぶちぶちつと音を立ててロープが切れた瞬間、桐生がルイズに駆け寄り抱きかかえ、ゴーレムの足の射程範囲から転がり出る。一瞬の差でズシンと二人のいた場所が踏み潰された。

ルイズを抱きかかえたままゴーレムを見上げる桐生をタバサのウィンドドラゴンが両足でがっしり掴み上空へ登った。

ウィンドドラゴンの足にぶら下がった二人は、上空からゴーレムを見下ろした。

桐生が目を細めてその大きさを確認する。

「あれも、何かの魔法か？」

「わかんないけど……巨大な土のゴーレムね」

「ゴーレム、か……。あのギーシュの物とは、比べ物にならないな」

「当然よ。あんな大きいゴーレムを操れるなんて、トライアングルクラスのメイジに違いないわ」

「どうやら、そこそこ強力なメイジの者によるゴーレムらしい。」

しかし、今はそんな事よりも、桐生はルイズに顔を向けた。

「助けようとしてくれて、ありがとうな。ルイズ」

桐生はそう伝えると、ルイズの頭を優しく撫でた。

「と、当然よ。使い魔を見捨てるメイジはメイジじゃないわ」

きっぱりと言いながらも、先程まで感じていた恐怖は、桐生の手の温もりと感触がゆっくり溶かしていつてくれた。

フーケは、巨大なゴーレムの肩の上で、薄い笑いを浮かべていた。

逃げ惑うキュルケや、上空を舞うウインドドラゴンの姿が見えたが気にしない。フーケは頭からすっぽりと黒いローブに身を包んでいる。その下の自分の顔さえ見られな

ければ、問題はない。

ヒビが入った壁に向かって、土ゴーレムの拳が打ち下ろされた。

フーケはインパクトの瞬間、ゴーレムの拳を鉄に変えた。

壁に拳がめり込む。バカツと鈍い音を立てて壁が崩れる。黒いローブの下で、フーケは微笑んだ。

フーケはゴーレムの腕を伝い、壁に空いた穴から宝物庫の中へ入り込んだ。

中には様々な宝物があつた。しかし、フーケの狙いはただ一つ、「破壊の杖」である。様々な杖が壁に立て掛けられている一画を見つめる。その中に、どう見ても魔法の杖には見えない品があつた。全長は一メートル程の長さで、見た事もない金属で出来ていた。フーケはその下にかげられた鉄製のプレートを見つめた。

「破壊の杖。持ち出し不可」と書かれている。フーケの笑みますます深くなる。

フーケは「破壊の杖」を取った。

その軽さに驚いた。一体、何で出来ているのだろうか？

しかし、今は考えている暇はない。「破壊の杖」を抱きかかえて、急いでゴーレムの肩に乗った。

去り際に、杖を振る。すると、壁に文字が刻まれた。

「破壊の杖、確かに領収致しました。土くれのフーケ」

再び黒いロープのメイジを肩に乗せて、ゴーレムは歩き出した。魔法学園の城壁をひとまたぎで乗り越え、ずしんずしんと地響きを立てて草原を歩いていく。

そのゴーレムの上空を、ウインドドラゴンが旋回する。

その背に跨がった。タバサが身長よりも長い杖を振るう。「レビテーション」の魔法で、桐生とルイズの身体が、足からウインドドラゴンの背に移動した。宙ぶらりんの体勢とは違い、しつかり足場のある所に行くのとホツとする。

「助かったぜ。ありがとう、タバサ」

桐生がタバサに礼を言う。タバサは無表情で頷いた。

桐生は巨大なゴーレムを見下ろしながら、ルイズに尋ねた。

「あいつ、壁をぶち壊しやがったが……何をしたんだ？」

「宝物庫」

ルイズの代わりにタバサが穴の空いた壁を指差して答える。

「あの黒ロープのメイジ、壁の穴から出てきた時、何か握ってたわ」

「要は泥棒って奴か。しかし……随分派手に盗みやがったもんだな」

草原の真ん中を歩いていた巨大なゴーレムは、突然ぐしゃつと崩れ落ちた。

巨大ゴーレムはみるみるうちに原型を崩し、大きな土の塊になった。



三人はウインドドラゴンから地面に降りた。月明かりに照らされたこんもりと小山の様に盛り上がった土山以外、何も無い。

そして、肩に乗っていた黒ローブのメイジの姿は、どこにもなかった。

翌朝。

トリステイン魔法学園では、昨夜から蜂の巣をつついたような騒ぎが続いていた。

何せ、秘宝の「破壊の杖」を盗まれたのである。

それも、巨大なゴーレムが、壁を破壊するといった大胆な方法で。

宝物庫には、学園中の教師が集まり、壁に空いた大きな穴を見てあぐりと口を開けていた。

壁には、「土くれ」のフーケの犯行声明が刻まれていた。

「破壊の杖、確かに領収致しました。土くれのフーケ」

教師達は口々に好き勝手に喚き散らしている。

「土くれ」のフーケ！ 貴族達の財宝を荒らし回っていると言う盗賊か！ 魔法学園にまで手を出しおつて！ 随分とナメられたらもんじゃないか！」

「衛兵は何をしていたのかね？」

「衛兵などあてにならない！ 所詮は平民ではないか！ それより当直の貴族は誰だった

んだね!」

シユヴルーズはその言葉にビクツと震え上がった。昨晚の当直は自分であった。しかし、まさか魔法学園を襲う盗賊などいるとは夢にも思わず、当直をサボってぐうぐう自室で寝ていたのである。本来なら、夜通し門の詰め所に待機していなければならぬのに。

「ミセス・シユヴルーズ! 当直は貴女なのではありませんか!」

教師の一人が、早速シユヴルーズを追及し始めた。オスマンが来る前に責任の所在を明らかにしておこうと言うのだろう。

シユヴルーズはボロボロと泣き出してしまった。

「も、申し訳ありません……」

「謝れば済む問題ではありませんぞ! 泣いたって、お宝は戻って来ないのですぞ!? それとも貴女、「破壊の杖」の弁償が出来るのですか!」

「私、家を立てたばかりで……」

シユヴルーズは、よよよと床に崩れ落ちた。

そこに、オスマンが現れた。蓄えられた髭を撫でながら集まった教師達を見回す。

「これこれ……女性を苛めるものではない」

シユヴルーズを問い詰めていた教師が、オスマンに訴える。

「しかしですな！ オールド・オスマン！ ミセス・シュヴルーズは、当直なのに自室でぐうぐう寝ていたのですぞ！ 責任は彼女にあります！」

オスマンは相変わらず長い髭を弄りながら、口から唾を飛ばして興奮するその教師を見つめた。

「ミスタ……何だっけ？」

「ギトーです！ お忘れですか!？」

「そうそう、ギトー君。そんな名前じゃったな。君は怒りつぽくていかん。さて、ではせつかくの機会だし、改めて聞かせて貰おう。この中でまともに当直をしたことのある教師は何人おられるかな？」

オスマンは周りを見回した。教師達はお互い、顔を見合わせたかと思うと恥ずかしそうに顔を伏せた。名乗り出る者は一人もない。

「さて、これが現実じゃ。責任があるとすれば、我々全員じゃ。この中の誰もが……もちろん、私も含めてじゃが、まさかこの魔法学園に賊が現れるなど、夢にも思っていないかった。何せここにいるのは、ほとんどがメイジじゃからな。誰が好き好んで、虎穴に入るのかっちゅう訳じゃ。しかし、それは間違いないじゃった」

オスマンは、壁にぽっかりと空いた穴を見つめた。

「この通り、賊は大胆にも忍び込み、「破壊の杖」を奪っていきおった。つまり、我々は

油断していたのじゃ。この油断が、賊を入れる結果となった。違わぬか？ 諸君」

誰もが反論出来ずに一瞬の静寂が辺りを包んだ。

その静寂を破つたのは、シユヴルーズだった。オスマンの言葉に感激し、いきなり抱き付いた。

「おおつ！ オールド・オスマン、あなたのお慈悲のお心に感謝致します！ 私はあなたをこれから父と呼ぶ事にします！」

オスマンはそんなシユヴルーズの尻を撫でた。

「ええのじゃ、ええのじゃ、ミセス……」

「私のお尻で良かったら！ そりやもう！ いくらでも！ はい！」

オスマンはこほんと咳払いした。場を和ませる為にシユヴルーズの尻を撫でて見せたのだが、誰も突っ込んでくれない。皆、一様に真剣な眼差しでオスマンの言葉を見ている。

「で、犯行の現場を見ていたのは誰だね？」

オスマンが尋ねた。

「この三人です」

コルベールがさつと進み出て、自分の後ろに控えていた三人を指差した。

ルイズにキュルケにタバサの三人である。桐生も側にいたが、使い魔なので人数に

入っていない。

「ふむ、君達か……」

オスマンは興味深そうに桐生を見つめた。桐生はどうして自分がじろじろ見られるのか分からず、また、その視線が不快でオスマンを睨み付けた。

「では、詳しく説明したまえ」

オスマンの言葉にルイズが進み出て、見たままを述べた。

「あの、大きなゴーレムが現れて、この壁を壊したんです。肩に乗っていた黒いメイジがこの宝物庫の中から何かを、その、「破壊の杖」だと思えますけど。盗み出した後またゴーレムの肩に乗りました。ゴーレムは城壁を超えて歩き出して……最後には崩れて土になっちゃいました」

「ふむ、それで？」

「後には、土しかありませんでした。肩に乗っていた黒いローブを着たメイジは、影も形もなくなっていました」

「ふむ……」

オスマンは顎髭を撫でた。

「後を追おうにも、手掛かりはなしと言うわけか……」

ふと、ここで気付いた様にオスマンがコルベールに尋ねた。

「時に、ミス・ロングビルはどうしたのかね？」

「それがその、朝から姿が見えませんが」

「この非常時に、どこにいったのじゃ」

「さあ、どこなんでしよう？」

そんな風の噂をしていると、ロングビルが宝物庫に入ってきた。

「ミス・ロングビル！ どこに行っていたんですか！ 一大事ですぞ！ 事件ですぞ！」

コルベールが興奮した調子でロングビルに近付きまくし立てる。しかし、ロングビルは落ち着きを払った態度で、オスマンに告げた。

「申し訳ありません。朝から急ぎ調査をしていました」

「調査？」

「そうですわ。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はこの通り。壁にフーケのサインを見つけたので、すぐにこれが国中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査を致しました」

「仕事が早いのは、ミス・ロングビル」

オスマンが感心した様に顎髭を撫でながら言った。

コルベールが慌てた調子で結果を促した。

「それで、結果は!？」

「はい。フーケの居場所がわかりました」

「な、なんですと!」

コルベールが素つ頓狂な声を上げる。

「一体、どうやって居場所を掴んだのかね? ミス・ロングビル」

「はい。近在の農民に聞き込んだ所、近くの森の廃屋に入っていった黒ずくめのローブの男を見たそうです。恐らく、彼はフーケで、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」

ロングビルの話にルイズが叫んだ。

「黒ずくめのローブ……それはフーケです! 間違いありません!」

ルイズの言葉に頷いて見せてから、オスマンは鋭い眼差してロングビルに尋ねた。

「そこは近いのかね?」

「はい。徒歩で半日、馬で四時間と言った所でしようか」

「すぐに王室に報告しましょう! 王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けて貰わなくては!」

コルベールが叫ぶ。

しかし、オスマンは首を振り、目を剥いて怒鳴った。年寄りとは思えない迫力だった。「馬鹿者! 王室なんぞに知らせてる間にフーケは逃げてしまおう! その上、身にかかる火の粉を己で払えぬ様で何が貴族じゃ! 魔法学園の宝が盗まれた! これは魔

法学園の問題じゃ！ 当然、我らで解決する！」

その言葉を聞いて、まるでこの答えを待っていたかの様に微笑むロングビルを、桐生は横目で眺めていた。

オスマンは咳払いを一つして、有志を募った。

「では捜索隊を編成する。我と思考者は杖を掲げよ」

しかし、誰も杖を掲げない。皆、困った様に顔を見合わずだけだ。

「おらんのか？ おや？ どうした!? フーケを捕まえて、名をあげようと思う貴族はおらんのか!？」

誰も杖を掲げない中、ルイズは俯いていたが、それからスツと杖を顔の前に掲げた。

「ミス・ヴァリエール！」

シユヴルーズが驚きの声を上げた。

「何をしているのです！ 貴女は生徒ではありませんか！ ここは教師に任せてー」

「誰も杖を掲げないじゃありませんか」

ルイズはキツと唇を強く結んで言い放った。唇をへの字に曲げて、真剣な目をしたルイズは凜々しく、美しかった。そんなルイズを、桐生は眉を歪めて見つめた。本来なら、止めるべきなのだろう。だが、今のルイズにはそうさせない何かがあり、諦めた様に溜め息を漏らした。



ルイズがその様に杖を掲げるのを見て、キュルケが渋々杖を掲げた。

そんなキュルケに今度はコルベールが驚きの声を上げる。

「ツエルプストー！ 君は生徒じゃないか！」

キュルケは鼻を鳴らし、つまらなそうに言った。

「ふん。ヴァリエールには負けられませんわ」

キュルケが杖を掲げるのを見て、タバサも杖を掲げた。

「タバサ、あんたはいいのよ。関係ないんだから」

キュルケがそう言ったら、タバサは首を振って短く答えた。

「心配」

キュルケは感動した面持ちでタバサを見つめた。ルイズも唇を噛み締めて、お礼を言った。

「ありがとう、タバサ」

そんな三人の様子を見て、オスマンが笑った。

「そうか……では、諸君等に頼むでしょう」

「オールド・オスマン！ 私は反対です！ 生徒達を危険な目に合わせるなんて！」

「では、君が行くかね？ ミセス・シユヴルーズ」

「い、いえ、私は体調が優れませんので……」

強く否定の念を表すものの、オスマンの一言でシュヴルーズが弱々しく答える。

「彼女達は敵を見ている。その上、ミス・タバサは若くしてシュヴアリエの称号を持つ騎士だと聞いているが？」

オスマンの言葉に、タバサは返事もせずポケットと突っ立っている。教師達は驚いた様にタバサを見つめた。

「本当なの、タバサ？」

親友であるキュルケも驚いている。

王室から与えられる爵位としては、最下級の「シュヴアリエ」の称号であるが、タバサの年でそれを与えられるのは異例である。男爵や子爵の爵位なら、領地を買う事で行われる事も可能であるが、シュヴアリエだけは違う。純粹に業績に対して与えられる爵位……言わば実力の称号なのだ。

宝物庫の中がざわめいた。オスマンは、それからキュルケを見つめた。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、彼女自身の炎の魔法もかなり強力と聞いている」

「ええ。炎の魔法に関しては、自信がありますわ」

キュルケは得意気に髪をかき上げながら、優雅な調子で言った。

それから、ルイズが今度は自分の番とばかりに可愛らしく胸を張った。

オスマンは困ってしまった。誉める所がなかなか見つからないのだ。

こほん、と咳払いをすると、オスマンは目を背けた。

「その……ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵の息女で、その、うん、なんというか……将来有望なメイジと聞いている。しかもその使い魔は！」

それから桐生を熱っぽい視線で見つめた。

「平民ながらあのグラモン元帥の息子である、ギーシユ・ド・グラモンと決闘して勝ったという噂だが？」

オスマンは思った。彼が、本当に、本当に伝説の「カンダールヴ」なら、「土くれ」のフーケに、後れを取ることもあるまい。

コルベールは興奮した調子で、後を引き取った。

「そうですぞ！ なにせ、彼はガンダー——」

先を言おうとするコルベールの口を、オスマンが押さえて言葉を遮らせた。

「むぐつ！ いえ、何でもありません！ はい！」

教師達はすっかり黙ってしまった。最後の確認とばかりに、オスマンが威厳のある声で言う。

「この三人に勝てるという者がいるなら、前に出たまえ」

誰もいなかった。オスマンは、桐生を含む四人に向き直った。

「魔法学園は、諸君等の努力と貴族の義務に期待する」

「杖にかけて！」

ルイズとキュルケとタバサは、真顔になって直立すると、同時に唱和してスカートの手柄を掴み、恭しく礼をする。

このまま早速「破壊の杖」奪還に向かわせようとするオスマンよりも先に、口を開く者がいた。

「ふざけんじゃねえよ」

宝物庫の中に響く静かで、威厳のある声が響く。教師達もルイズ達も、誰も彼もが声の主に視線を向けた。

声の主、桐生は眉を歪め、露骨に機嫌の悪い表情を浮かべてオスマンを睨む。

「危険を承知の上で、生徒を向かわせて、それが貴族の義務と努力だ？ 笑わせんじゃねえよ」

「何だと、貴様！」

桐生の言葉に、オスマンの代わりにギトーが歯を向き指を差して声を荒げる。

「平民風情が知ったような口を利くな！ これは我々の問題だ！」

「なら、こいつ等の代わりにてめえが行くのか？」

「い、いや、私は……」

桐生の言葉にぐつとギトーが口を紡ぐ。そんなギトーにつかつかと桐生が歩み寄ると、力強く胸倉を掴んだ。余程握る力が入っているのか、ギチギチとギトーの服が音を立てて歪んでいく。

「か、カズマー！」

ルイズが困った様な声を出して桐生に駆け寄るも、桐生の視線は真つ直ぐ目の前のギトーに向かっている。心臓を射抜く様な鋭い視線に、ギトーは顔を逸らしてしまう。

「普段授業で偉そうに生徒に説教する割に、いざ自分達じゃ手に負えなくなりや生徒に任すつてか？ ふざけた真似してんじやねえよ。貴族かなんだか知らねえが、教師つてもんは親から預かった生徒を命に代えても守るもんじやねえのか？」

乱暴にギトーを離して言い放つ桐生。誰も、何も言い返さない。いや、返せない。

そんな教師達を、今度は小馬鹿にする様に桐生が鼻で笑った。

「平民に言われて何も言い返せねえか……てめえ等みてえな奴等に、教師を名乗る資格はねえよ」

そしてオスマンの前まで歩み寄る。目の前に立つ平民の男を、オスマンが静かな眼差いで見上げる。その表情は静かで、力強い自信を感じさせる物だった。

「安心しな。俺はてめえ等格好だけの大人と違って、こいつ等を必ず守ってみせる。

自分の命に代えてもな」

隣で心配そうに桐生を見上げるルイズの頭に、優しく手を乗せて言い放つ。

ルイズはそんな桐生を見て、心の底から安堵した。正直に言えば、怖い。あの巨大なゴーレムと対峙し、勝てる自信なんてこれっぽっちもない。しかし、目の前にいる桐生がいれば、なんとかなる様な気がして来た。

オスマンは溜め息を漏らしてから、桐生をジッと見つめた。

「……では、頼むぞ。この子達を守ってやってくれ」

オスマンが頭を下げる姿を見て、教師達は驚きに互いの顔を見合わす。

桐生は、深く頷いた。

「では、馬車を用意しよう。それで向かうのじゃ。魔法と体力は目的地につくまで温存したまえ。ミス・ロングビル！」

「はい、オールド・オスマン」

「彼女達を手伝ってやってくれ」

オスマンの言葉にロングビルが頭を下げる。

「もとよりそのつもりですわ」

四人はロングビルを案内役に、早速出発した。

## 第8話

拓けた草原に出来た道を、一行を乗せた馬車が走っていた。馬車と言っても、屋根なしの荷車の様な馬車だった。襲われた時、すぐに外に飛び出せる方がいいということ、この様な馬車を用意したのだ。

馬車の御者は、ロングビルが買つて出た。

キュルケが、黙々と手綱を握るロングビルに話し掛けた。

「ミス・ロングビル……手綱なんて付き人にやらせれば良いじゃありませんか」

ロングビルはそんなキュルケに、にっこりと微笑んだ。

「いいのです。私は、貴族の名を無くした者ですから」

キュルケはきよとんとした。

「だって、貴女はオールド・オスマンの秘書なのでしょう？」

「ええ。でも、オスマン氏は貴族や平民と言う事に、あまり拘られないお方ですから」

「差し支えなかつたら、事情をお聞かせ願いたいわ」

ロングビルは答える代わりに優しい微笑みを見せた。それは、語りたくないと言う事なのだろう。

「良いじゃないの。教えて下さいな」

キュルケは興味津々と言った顔で、御者台に座るロングビルに詰め寄った。そんなキュルケの肩をルイズが掴む。

「何よ、ヴァリエール」

キュルケは振り返るなり機嫌が悪そうにルイズを睨んだ。

「止しなさいよ。昔の事を根ほり葉ほり聞くなんて」

キュルケはふん、と鼻で呟き、荷台の柵に寄りかかつて頭の後ろで腕を組んだ。

「暇だからお喋りしようと思っただけじゃないの」

「あなたのお国じゃどうか知りませんが、聞かれたくない事を、無理矢理聞き出そうとするのはトリステインじゃ恥すべき事なのよ」

キュルケはルイズの説教に答えず、その褐色の美しい脚を組んだ。そして、イヤミな調子で口を開いた。

「つたく……あなたが格好つけたおかげで、とぼつちりよ。何が悲しくて泥棒退治なんか……」

その言葉に、今度はルイズがキュルケをじろりと睨んだ。

「とぼつちり？ あなたが勝手に志願したんでしょ」

「あなた一人じゃ、カズマが危険じゃないの。ねえ、「ゼロ」のルイズ？」



「どうしてよ?」

「いぎ、あの大きなゴーレムが現れたら、あんたはどうせ逃げ出して後ろから見てるだけでしょ? カズマに戦わせて自分は高みの見物。そうでしょ?」

「誰が逃げるもんですか。私の魔法でなんとかしてみるわ」

「魔法? 誰が? 笑わせないですよ!」

二人は再び火花を散らし始めた。

タバサは相変わらず本を読んでいる。桐生は煙草を啜えたまま、静かな眼差しで来た道を眺めている。

そんな桐生に、ルイズがキュルケから視線を移す。

今、キュルケに向かって言った事は間違つてるとは思わない。ただそれでも、自分もなんだかんだこの異世界から来た男の素性や過去が気になって仕方がない。どんな生き方をしてきたのか。何故そんな憂いの籠もった眼差しをするのか。この男の言う異世界に、想い人は、恋人は、妻と呼ぶ者はいるのか。

ルイズの視線には気付かず、こちらから目を背けた事にキュルケはふんつと鼻で笑う。

「ま、いいけど。せいぜい怪我しない事ね」

キュルケはそう言うのと、手をひらひらと振って見せた。その態度と言葉にルイズは今

一度キュルケを睨み付け、ぐつと唇を噛んだ。

「じゃあダーリン。これ、使つてね？」

キュルケが桐生に近寄り色気たつぷりに流し目を送つて、自分が買つてきた剣を手渡した。

「……ああ」

桐生は短く答え、しっかりと剣を握り締める。

「勝負に勝つたのはあたし。文句はないわよね？」 「ゼロ」のルイズ」

キュルケが勝ち誇つた様にルイズを見ながら言う。

ルイズはそんな二人を眺めて、何も言わなかった。

馬車は深い森に入つていった。鬱蒼とした森が、五人の恐怖を煽る。昼間だと言うのに薄暗く、気味が悪い。

「ここからは徒歩で行きましょう」

ロングビルがそう言つて、全員が馬車から降りた。

森を通る道から、小道が続いている。

「なんか……怖いわ……。やだ……」

キュルケが桐生の腕に手を回して来た。

「あまりくつつきすぎるなよ」

「だつて、凄く、怖いんだもの」

キュルケは物凄く嘘臭い調子で言った。口元には笑みまで浮かんでいる。桐生が小さく溜め息を漏らす。

ルイズは前を歩く二人を見て、ふんつ、と顔を背けた。

一行は開けた場所に出た。森の中の空き地と言った風情である。およそ、魔法学園の中庭ぐらいの広さだ。真ん中に、確かに廃屋があった。元々は木こり小屋だったのだろうか。朽ち果てた炭焼き用らしい釜と、壁板が外れた物置が隣に並んでいる。

五人は小屋の中から見えない様に、森の茂みに身を隠したまま廃屋を見つめた。

「私の聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

ロングビルが廃屋を指差して言った。

フーケはあの中にいるのだろうか？

ルイズ達はゆつくり相談をし始めた。とにかく、あの中にいるのなら奇襲が一番である。寝ていたなら尚更だ。

タバサはちよこんと地面に正座すると、皆に自分の立てた作戦を説明する為に杖を使って地面に絵を書き始めた。

まず、偵察兼囃が小屋の側まで赴き、中の様子を探る。

そして、中にフーケがいれば、これを挑発し、外に出す。

小屋の中にゴーレムを作り出せるほどの土はない。

外に出ない限り、得意の土ゴーレムは使えないのだ。

そしてフーケが外に出た所を、魔法で一気に攻撃する。土ゴーレムを作り出す暇を与えず、集中砲火でフーケを沈めるのだ。

「でも、誰が囃役をやるの？」

ルイズがもつともな意見を出す。するとタバサが答える前にずっと廃屋に視線を向けていた桐生が口を開いた。

「必要ねえよ」

そう言った桐生の方に全員が視線を向けると、突然すくつと立ち上がった。百八十七センチを超える長身は、廃屋から丸見えだ。

「ちよ、ちよつとカズマ！ 見つかつちやうわよ！」

「だから隠れる必要はねえよ。あの廃屋の中には誰もいねえ」

驚くルイズや他の皆をよそに、妙に自信たっぷりな桐生が言う。極道時代培った経験から、人の気配を察するのには自信があった。そして、その感覚は桐生に廃屋には無人と伝えていた。

「信じられねえなら、俺が行くさ」

桐生はそう言うのと、廃屋に向かって歩き始めた。

すぐさまタバサが他の三人に合図を送って桐生の背後から四方に散って近付く。万が一、桐生の勤が外れた場合はすぐさま攻撃出来る様だ。

桐生が廃屋の扉の前に立つ。今の所は何もない。四人はゆっくり桐生の元へと集まった。

タバサが扉に目掛けて杖をかざす。

「罨はないみたい」

そう言つて扉を開き、中へと入つていった。

桐生とキュルケもそれに続く。

ルイズは外で見張りをすると言つて、後に残つた。

ロングビルは、辺りを偵察してくると言つて、森の中に消えた。

小屋に入った桐生達は、フーケが残した手がかりがないか調べ始めた。ふと、桐生は部屋の中に置かれた椅子と机に近付き、椅子を指で擦つてみた。指の腹に、年季の入つた埃が張り付く。

「やはりな……」

桐生の中で様々な思惑のピースがぴったり重なり始める。しかし、まだ確証に至るま

での事ではない為、タバサ達には黙っていた。

そんな桐生に気付かず、タバサがチェストの中から……。

なんと、「破壊の杖」を発見した。

「あつた」

タバサは無造作にそれを持ち上げて、二人に見せる。

「なによ、呆気ないわね」

キュルケがどこかつまらなそうに言う。

桐生はタバサが持ち上げた「破壊の杖」を見るなり、つかつかとタバサに近寄った。

「これが……「破壊の杖」か？」

桐生の質問に、タバサが小さく頷く。

間違いない、これには見覚えがある。しかし、何故これがこんな所に……。

そんな風に考えていると、外で待機しているルイズの悲鳴が響いた。

「どうした!? ルイズ!」

耳につんざく悲鳴に三人がドアに振り向くと……。

突然、ミシミシと音が鳴り響いて小屋が揺れた。そして、バキツと小気味良い音を立

てて屋根が取り払われる。

屋根がなくなると、どこまでも澄んだ青空と、白く輝く太陽が見えた。そしてその景

色をバツクに、巨大な土ゴーレムがぬつと姿を現す。

「ゴーレムー！」

キュルケが顔を真っ青にして叫んだ。突然の敵の来襲に、少しパニックになっている様にも見える。

そんな状況の中、タバサが真っ先に動く。

自分の身長よりも大きな杖を振り、呪文を唱える。すると、風が渦を巻いて鋭い槍の様に尖り、ゴーレムに目掛けて飛んでいく。

しかし、風の槍はゴーレムの岩肌につつかると掻き消えてしまった。

タバサの行動に落ち着きを取り戻したキュルケが、胸に差した杖を引き抜くと、派手な動きで杖を振って呪文を唱える。

いくつもの火の玉がキュルケの周りに浮かび上がり、それがゴーレムに飛んでいく。しかし、やはりゴーレムには効果が無いらしく、佇んだままビクともしない。

「無理よ、こんな奴の相手なんて！」

キュルケがヒステリックに叫んだ。

「(ハハ)は……退却」

タバサが呟く。

キュルケとタバサは一目散に走って逃げ始めた。

桐生はルイズの姿を探す。

見つけた。

ゴーレムの背後でルイズが立っている。ルイズは呪文を呟き、ゴーレムに向かって杖を振りかざす。

巨大なゴーレムの肌で何かが弾けた。ルイズの魔法だろう。自分の肌を感じた衝撃でゴーレムがルイズに気付き振り向いた。小屋の入り口に立った桐生が怒鳴り声を上げて、少し離れたルイズに声をかける。

「ルイズ！ 何やってんだ！ 逃げろ！」

桐生の言葉にルイズが唇を噛み、真剣な眼差しをゴーレムに向けたまま口を開いた。

「嫌よ！ こいつを捕まえれば、誰ももう私を「ゼロ」のルイズと呼ぶなくなるわ！」

ゴーレムは近くに立ったルイズを潰すか、逃げ出したキュルケ達を追おうか、迷っている様にそれぞれを見て首を傾げた。

「お前も解ってんだろ！ この大きさ相手じゃ無理だ！」

「やってみなくちゃ、わからないわよ！」

「聞け！ ルイズ！ どんな奴でも、退く時は退かなきゃならねえ！ 逃げるのは負けじゃねえ！ 作戦を立て直してまた戦えばいいだろ！」

桐生の必死の説得に、ルイズはキッと睨み付けた。



「あんた、私にハッキリ言ったじゃない！ ナメた真似したら容赦しないって！ 私だつてそうよ！ ささやかだけど、プライドつてもものがある！ ここで逃げたら、私はみんなにナメられる！ そんなのもう、我慢出来ないわ！ それに、私は貴族よ！ 平民のあんたなんかには解らないだろうけど、魔法を使える者を貴族と言うんじゃない！」

ルイズは杖を握り締め、ゴーレムに再び視線をやる。

「敵に背を向けない者を、貴族と言うのよ！」

悩んでいたゴーレムが、先にルイズを潰すと決めたらしい。ゴーレムの巨大な足が持ち上がり、ルイズに目掛けて下ろされていく。ルイズは再び呪文を唱え、杖を振った。

しかし、やはりゴーレムには通用しない。何か魔法を唱えたらしいが、失敗した様だ。ゴーレムの胸が小さく爆発するのが見えたが、それだけだった。ゴーレムはビクともしてない。土が少し剥がれただけだ。

桐生は剣を構えると、一目散に飛び出した。瞬間、左手のルーンが一瞬光り、自分でも信じられない程速く走れた。しかし、今はその事に驚いてる余裕はない。

ルイズの視界が、ゴーレムの足いっぱいになった。体から込み上げてくる恐怖と絶望に、ルイズはギュッと目を閉じた。

その時、烈風の如き速さで走ってきた桐生がルイズの身体を抱きかかえて地面に転が

る。

ズシンと言う重々しい振動が二人の体に響く。

ルイズは恐る恐る目を開けると、目の前で荒い呼吸を繰り返す桐生を見て、自分が助かったのを確認する。

安堵から涙が溢れそうなのをなんとか堪え、自分を座らせて目の前で膝立ちになった桐生を見上げた次の瞬間。

パンつと風船が破裂した様な音が響き、自分の視界が右に回った。頬に感じる痛みから、桐生に叩かれたのに漸く気付き、ルイズは頬を押さえながら呆気にとられた表情で再び桐生の顔を見上げた。

「馬鹿野郎！ 死ぬ気か！」

真剣な表情で怒鳴る桐生に、ルイズの瞳からボロボロと大粒の涙が溢れ出した。

「だって……私、悔しくて……いつも……みんなに馬鹿にされて……」

目の前で泣くルイズに桐生は思った。いつもゼロゼロと呼ばれて馬鹿にされてきたのが余程悔しかったのだろう。しかし、実際は戦いなんて嫌いなのだ。当然だ。ルイズだって普通の女の子なのだから。

しかし、今はグシャグシャに泣いてしまってるルイズに構ってやれる余裕はない。

振り向くと、ゴーレムが此方に向かって拳を握り締めてるのが見える。

桐生はルイズを抱きかかえ、そのまま走り始めた。ゴーレムはその大きさからあまり動きは速くない。追ってきてはいるものの、桐生には追いつけない。

「ルイズ！ もっと飯を食え！ 軽過ぎる！」

「は、はあっ!? 重い方がいいでしょ！」

桐生の軽口に涙を拭いて言い返すルイズは、いつもの調子だ。思わず安堵してしまう自分がいて、桐生は内心笑ってしまう。

タバサのウインドドラゴンが、二人を救う為にやってきた。桐生達の目の前に着陸する。

「乗って！」

ウインドドラゴンに跨がったタバサが叫び、桐生がルイズをその背中に押し上げる。

「あなたも早く！」

タバサが焦った口調で言う。

しかし、桐生はそんなタバサに背を向けてゴーレムに向かって歩き出す。

「何してんの、カズマ！ 早く乗って！」

ウインドドラゴンに跨がったルイズが叫ぶ。その声にも振り向かず、桐生は真っ直ぐゴーレムに向かって行く。

「先に行け。俺には……やる事がある」

タバサは無表情に桐生の背中を見つめていたが、このままでは追い付くゴーレムに攻撃されてしまう為、やむなくウインドドラゴンを飛び上がらせた。

目の前で対峙する自分よりも遥かに巨大なゴーレムを桐生は睨み付けた。

「てめえ……誰の主人に手え上げようとしてんだ？ 落とし前……つけて貰うぜ」

剣を鞘から引き抜き、切っ先をゴーレムに向ける。曇りのない刀身が、日の光を浴びて鈍く輝いた。

「来いよ、木偶の坊。たかが土の塊がいい気になってんじやねえ……」

上段に剣を構え、柄をグツと握り締める。

「俺は「ゼロ」のルイズの使い魔、桐生一馬だ！」

左手のルーンが先程よりも強く輝いた。

「カズマ！」

ルイズは上昇するウインドドラゴンの背から飛び降りようとする。その体をタバサが手で抱きかかえて止める。

「お願い、タバサ！ カズマを助けて！」

ルイズは必死に怒鳴った。しかし、タバサは首を横に振る。

「近寄れない」

確かにその通りだった。ゴーレムは桐生を標的にしながらも、少しでも近付こうとすると此方に腕を振るってくるのだ。

「カズマー！」

ルイズは再度怒鳴り声を上げた。その瞳には、しっかりと剣を構えゴーレムに対峙する桐生の姿が映った。

ゴーレムが拳を振り上げ桐生目掛けて打ち付ける。軽いフットワークで後ろへ飛んで拳をかわし、そのまま一気に距離を詰めて足元へ近付き、剣を振るう桐生。

瞬間、ガキンと鈍い音を立てて剣が根元から折れてしまった。

眉を潜めて剣を見るも、すぐさまゴーレムが足を上げて踏みつけようとして来た為、一旦距離を置く。

「ナマクラか……」

桐生は折れた根元を指でさすりながら呟き、つまらなそうに柄だけになった剣を放り投げる。

「あの武器屋の親父は後回しだな。今はてめえが俺の相手だからな」

キュルケの気持ち足を踏みにじった武器屋の親父の顔を思い浮かべて溜め息を漏らし、此方に近付いてくるゴーレムに拳を構える。

再びゴーレムの拳が桐生を潰さんと打ち下ろされた。桐生はギリギリまで近付けてそれをかわし、がら空きの足元に走って近付く。ふと、先程までの素早い動きが突然消えた。感覚としては今まで通りの動きだ。チラリと左手の甲を見ると、ルーンの光が消えていた。

このルーンになんの意味があるのか、今は考えている場合ではない。今は目の前の敵に集中しなければ。

「おらあつー！」

桐生の拳がゴーレムのふくらはぎに放たれる。バコンと小気味よい音を立てて少しが砕けた。硬さはギーシユの青銅ほどではない。

しかし、すぐさま地面の土が吸い寄せられて傷が再生されていく。

「こりやあ……持久戦はキツイか」

眉を歪めて振り上げられた足から逃れる桐生。地面を踏みつけた時の風圧が凄まじい衝撃波となって桐生の体を吹き飛ばす。

ゴロゴロと体を回転させなんとか立ち上がり、再びゴーレムを強く睨み付けた。

ウインドドラゴンの上から桐生とゴーレムの対決を眺めていたルイズがキュルケをキツと睨み付けた。

「ちよつと！ あんたの買ってきた剣、なんなのよ！ ナマクラじゃない！」  
「あたしに言わないでよ！」

キュルケ自身も、あまりにも呆気なく折れてしまった剣に舌打ちしていた。

「何がゲルマニアの錬金術師シュペー卿が鍛えた業物よ！ あの親父！ ナマクラを売りつけるなんて！」

腹の中でマグマを煮えたぎらせるキュルケをよそに、ルイズはゴーレムに苦戦してる桐生をハラハラしながら見つめていた。なにか、自分が手助け出来る事はないだろうか。

桐生は他でもない、自分の為に危険を省みず、戦ってくれてるのだ。このままだ眺めてるだけでは、キュルケの言うとおり、高見の見物になってしまう。

思わず周りを眺めたその時、タバサの持つ「破壊の杖」が目に入った。

「タバサ！ それを！」

タバサは頷いてルイズに「破壊の杖」を渡す。

渡された「破壊の杖」の奇妙な形に思わず眉を潜める。そもそも、杖と言う割にはやけに太い。日の光を浴びて鈍く光っている。

しかし、今は疑問を持つてゐる場合ではない。自分の魔法より役に立つはずだ。

ルイズは桐生を見つめ、そして深呼吸をすると、カッと目を見開いた。

「タバサ！ 私に「レビテーション」をかけて！」

そう叫ぶなり、ルイズは突然立ち上がると、迷い無くウインドドラゴンから飛び降りた。

タバサはすぐさまルイズの体に「レビテーション」の呪文をかける。

「レビテーション」のお陰でフワリと地面に降り立ったルイズは、桐生と交戦中のゴレムに向かって「破壊の杖」を振る。

しかし、「破壊の杖」はうんともすんとも言わず、何も起こらない。

「何よ、これ!? 本当に魔法の杖なの!？」

焦りと苛立ちからルイズが声を荒げる。一体どうすれば、この杖に秘められた魔法を使えるのか。

桐生はゴレムの拳を避けながら、地面に降り立ったルイズを見て舌打ちする。

しかし、ルイズの持つ「破壊の杖」が目にとまった。

どうやらルイズは、その使い方がわからずもたもたしているようだ。

十分にゴレムの拳を引き寄せ、無理な体勢で打ち込ませた隙に、ルイズに向かって桐生が駆け出した。

「カズマ！ これ、使い方がわからない！」



「貸せー」

ルイズの手から「破壊の杖」を受け取る桐生。

「これはな……こう使うんだ！」

桐生は「破壊の杖」を持ち直し、安全ピンを引き抜く。リアカバーを引き出し、インナーチューブをスライドさせた。

……何で俺は「これ」の使い方がわかるんだ？

元の世界にいた時、確かに様々な武器を扱った。ナイフや銃にビール瓶、更にはおよそ武器とは言えない物も扱った事がある。しかし、「これ」は使った事がない。むしろ元の世界では実際に見る事ですら珍しいのに。

そんな事を考えていると、体勢を整えたゴーレムが此方に体を向けて歩み始めた。考えている暇はない様だ。

チューブに立てられた照尺を立てる。

テキパキと「破壊の杖」をいじる桐生を、ルイズは唾然としながら見つめていた。

桐生は「破壊の杖」を肩にかけると、フロントサイトをゴーレムに合わせる。ほぼ直接照準だ。距離が近い。もしかしたら、安全装置が働いて、命中しても爆発しないかもかもしれない。

だが、その時はその時だ。

「ルイズ、後ろに立つな。噴射ガスがいく」

桐生の言葉の意味はわからないものの、後ろに立つなと言われて慌てて隣に立った。

ゴーレムがズシンと音を立てて迫ってくる。

安全装置を解除し、トリガーを引いた。

シュポント！ と栓抜きのような音を立てて、白煙を噴きながら羽をつけたロケット状

の物がゴーレムに吸い込まれる。

それは狙い変わらずゴーレムに命中した。

吸い込まれた弾頭が、ゴーレムの体にめり込み、そこで信管を作動させ爆発を起こす。

耳をつんざく様な爆音が響き、ゴーレムの上半身がバラバラに飛び散った。桐生は

「破壊の杖」を放り、ルイズを抱き寄せ背を向けて、辺り一面に降り注ぐ土の雨を凌がせた。

土の雨が止んでから、桐生が首を動かしてゴーレムを見る。

白い煙の中、ゴーレムの下半身だけが立っていた。

下半身だけになったゴーレムは、ゆっくりと足を踏み出そうとして動くも、バラバラと崩れ出した。

そしてゴーレムの立っていた場所には、この前と同じ様に、土の小山だけが残った。

ルイズは桐生の腕から解放され、その小山を見た瞬間、深い溜め息を漏らしながらそ

の場にゆっくりと崩れ落ちた。戦いが終わった安堵から、腰が抜けてしまったらしい。

木陰に隠れていたキュルケ達がこっちに走ってきた。

「カズマ！ 凄いわ！ 流石、あたしのダーリンね！」

キュルケは桐生に駆け寄るなりいきなり抱き付いた。そんなキュルケに苦笑しながら、桐生がキュルケの頭を撫でてやる。

タバサはスタスタと土の小山に近付き、暫く見つめてから呟いた。

「フーケは、どこ？」

タバサの言葉に、ルイズとキュルケがハツとする。桐生はまるでフーケに興味がない様に、折れた剣を拾い上げて鞘にしまい、転がった「破壊の杖」を拾い上げタバサに渡す。

「ちよつとカズマ！ フーケがまだ見つかってないのよ！ 少しは警戒して」

「そろそろ現れんだろ」

桐生の緊張感のない動きに焦りを感じて怒鳴るルイズをよそに、桐生はんつ、と体を伸ばして言う。

すると、偵察から戻ってきたらしいロングビルが茂みから姿を現した。

「ミス・ロングビル！ フーケは見つかりました？」

「残念ながら……姿は見られませんでした」

キュルケの質問にロングビルは残念そうに首を振って見せた。

「でも、「破壊の杖」は取り戻せたのですね？」

タバサの持つ「破壊の杖」を見てロングビルは嬉しそうに笑った。タバサはロングビルに、「破壊の杖」を手渡す。

タバサから「破壊の杖」を受け取ったロングビルは、少し歩いて離れたかと思うと、桐生がやった様に「破壊の杖」を構えて桐生達に向けた。

「ゴッ苦労様」

「ミス・ロングビル!?!」

突然の行動にキュルケが声を上げる。

「ど、どういう事ですか!?!」

ルイズも状況が飲み込めず、目を見開きながら信じられないと言った表情で叫ぶ。

「やっぱりな……」

桐生だけは一人、漸く納得出来たと言わんばかりに目を細めてロングビルを見る。

「やっぱりって……どういう事!?! カズマー!」

「見たままだ。あの「破壊の杖」とやらを俺達の前で盗み出し、さつきまでゴーレムを操ってたのはこいつだ。そうだろ? ロングビルとやら……いや、フーケ、って言った

か?」

ルイズの質問に答え、顎でロングビルをしゃくつて見せる桐生の言葉に、ロングビルは眼鏡を外した。優しかった目が、獲物を狙う猛禽類の様に鋭く吊り上がった。

「そう、私が「土くれ」のフーケ。しかし、流石「破壊の杖」ね。私のゴーレムがこんなにバラバラにされるなんて……」

フーケは辺り一面に散らばった土の欠片を眺め、満足そうに笑った。  
タバサが杖を振ろうとする。

「おっと、動かないでくれるかしら？」「破壊の杖」は、しっかりあなた達を捉えているのよ？ 全員、杖を遠くへ投げ捨てなさい」

仕方なしに、ルイズ達は杖を放り投げた。これでもう、魔法は使えない。

「それと使い魔、あんたはその剣を捨てなさい。剣を持つてた方が、速く動けるみたいだしね」

「もう折れて使い物になんねえけどな……」

桐生は呟いてから剣を放り投げた。

「なんで……どうして!？」

ルイズが思わず叫ぶと、

「そうね、ちゃんと説明しなきゃ死んでも死にきれないでしょうから、ちゃんと説明してあげるわ」

と、フーケが妖艶な笑みを浮かべて頷いた。

「私ね、この「破壊の杖」を盗んだのは良いけど、使い方がわからなかったのよ」

「使い方？」

タバサが呟くと、フーケは頷いて見せた。

「ええ、振っても、魔法をかけても、この杖はうんともすんとも言わないんだもの。だから困ったのよ。これじゃあ宝の持ち腐れだわ。そうでしょう？」

ルイズがギリツと歯を食いしばってフーケに駆け出そうとするも、桐生が肩を掴んで止めた。

「カズマー！」

「まあ、言わせてやれ」

「随分物分かりのいい使い魔ね。なら、続けさせて貰うわ。使い方がわからなかった私は、あなた達に使わせて、使い方を知らうと思つたのよ」

「それであたし達をここまで連れてきたのね？」

「そうよ。魔法学園の者なら、使い方を知ってるかもしれないでしょう？ もし、あなた

達が知らなかったら、ゴーレムで踏み潰して、また何人か連れてくれば良かったんだけど……その手間も省けたしね」

フーケは笑い、しっかりと狙いを定める様に体を動かして「破壊の杖」の先を四人に

向ける。

すると、桐生が三人を押しつけて前に出た。まるで、三人を守る様に。

「カズマ……!」

「そうそう、そう言えばあなた、私がフーケだっていつ気が付いたのかしら?」

前に出る桐生に心配そうに声をかけるルイズを無視して、フーケが桐生に尋ねる。

「確信を持ち始めたのは、馬車で送って貰ってる時だった。あんた、付近の農民に聞いた、と言っていたが、来る途中にどこにも家がなかったんだ。それと、廃屋に入っただけにしかここに入ってない。だから、場所を知ってるあんたが怪しいと思った、それだけだ」

桐生の推理を聞いて、タバサはなるほど、とばかりに首を頷かせた。

「なるほど……なかなか楽しい話だったわ。それじゃあ、そろそろお別れといきましようか。さようなら」

キュルケは観念して、目を強く瞑った。

タバサも目を瞑った。

ルイズも目を瞑った。

しかし、桐生は瞑らなかつた。

「あら、勇気があるのね」

「そんなんじゃないよ。こいつ等と約束したんでな」

腕を組んでフリーケに言葉を返す桐生。そんな桐生の言葉に、三人が目を開いて桐生の背中を見つめた。大きく、逞しい背中は、幼少の記憶にある父親の背中を連想させた。

「こいつ等は俺が守る、誰一人傷付けさせない。そう約束したんだ。だから……」

桐生は深い溜め息を漏らして、フリーケを鋭い眼光で睨み付けた。

「こいつ等には、手を出させねえ！」

突然叫んだかと思うと、桐生はフリーケ目掛けて駆け出した。

フリーケは咄嗟に桐生がして見せた様にトリガーを引いた。しかし、先程の様な魔法は出ない。

「なっ!! どうして!?!」

フリーケはもう一度トリガーを引く。が、やはり何も起きない。

「それは単発だな。魔法の杖じゃねえんだよ」

焦りを露わにするフリーケに一気に近付き、フリーケが杖を取ろうとするよりも速く、腹に鋭い掌底を打ち込む。

「なに……これ……!?!」

フリーケは自分の体から力を抜けていくのを感じて思わず眩く。



蓮家流体術、「蓮家閃気掌」。鋭い掌底に射抜かれた相手は精神力を奪われ、気迫を失う秘拳である。

「そいつは俺の世界の武器でな。確か「M72ロケットランチャー」、とか言ったか」

フーケは地面に崩れ落ちた。

桐生はもう使えない「破壊の杖」を拾い上げてルイズ達に振り向く。

「フーケを捕まえて、「破壊の杖」も取り戻したぜ」

キュルケとタバサが、桐生に駆け寄って抱き付いた。ルイズは後に続いて足を一步踏み出し、固まった。

先程の叱られた光景が脳裏に蘇る。今の自分に、桐生と喜びを共にする資格があるのか、不安に駆られた。

俯いてるルイズに気が付き、桐生が二人を体から離してゆっくりルイズに近付く。

「ルイズ……」

声をかけられ、ルイズの肩がビクツと震える。まるで叱られる子供の様に小さくなりながら俯いて地面を見つめた。

「ルイズ、勇気と無謀は違う。わかるな?」

桐生の言葉が、ズキリとルイズの胸に突き刺さる。溢れそうな涙をギュツと目を瞑ってなんとか零さぬ様に耐える。

「自分の力量を見極めず、メチャクチャに突っ込むのは無謀以外の何物でもない。だが……」

ルイズの頭に、ポンっと手が乗せられる。優しく撫でてくるゴツゴツした手は肌を伝って心まで温かくしてくる。

恐る恐る、ルイズは顔を上げた。そこには、優しい笑顔を浮かべた桐生の顔があつた。「大人が怯える中、自分からこの探索に名乗り上げたのは紛れもない勇気だ。お前は、「ゼロ」なんかじゃない。もっと胸を張れ。なっ?」

ルイズの中で、熱い何かが弾けた。

誰も彼もが馬鹿にし、頑張っても空回りし、心のどこかで自分自身でも卑下してた。そんな自分をこの異世界から来た男は認めてくれた。

ルイズはプイっと顔を背け、桐生に背を向けた。

「……何よ、ご主人様をひっぱたく使い魔なんて、聞いた事ないわ。許してあげる私の広い心に感謝してよね」

本当は桐生に抱きつきたい。抱きついて思いっきり泣いてしまいたい。でも、それは自分のプライドが許さない。

遙か遠くまで続きそうな青い空を見上げながら、ルイズの頬に温かい涙が伝った。

学園長室でオスマンは戻った四人の報告を聞いていた。

「ふむう……ミス・ロングビルが「土くれ」のフーケだったとは。美人だったもので、何の疑いもなく秘書に採用してしまった」

「一体、どこで採用されたんですか？」

隣に控えていたコルベールが尋ねた。

「うむ、街の居酒屋じゃ。私が客で、彼女が給仕をしておったんじやが、つついこの手が彼女のお尻を撫でてしまった」

「それで？」

コルベールが先を促した。オスマンは僅かに頬を赤くした。

「うむ……それでも怒らないので、秘書にならんか？　と言ってしまった」

「……はっ？　なんで？」

本当に理解できないと言った表情と口調でコルベールが尋ねた。

「おまけに魔法も使えると言うのでな……まあ、それが一番の理由じゃ」

「……………死ねば？」

コルベールがボソツと黒い表情を晒しながら呟いた。そんなコルベールに、オスマンは体を向けて首を振った。

「今思えば、あれも魔法学園に潜り込む為のフーケの手じやったのじやろう。居酒屋で

くつろぐ私の前に来ては酌をし、魔法学園の学園長なんて素敵ですわ、とか、お年を召しても男前ですね、なんて言う。終いにや尻を撫でも怒らない。私に惚れてる？ とか思うじやろ？ なあ？ ねえ？ お願ひ、そうだと行って！」

重々しい口調で話すも、最後は懇願に近い口調でコルベールに詰め寄るオスマン。

オスマンの言葉に、彼女に良い所を見せたくて、宝物庫の壁の弱点を教えてしまったのを、コルベールは思い出した。あの事がバレてしまうと一大事である。ここは、オスマンに合わせる事にした。

「そ、そうですね！ 美人はそれだけで、強者の魔法使いですな！」

「その通りじゃ！ いやあ、コルベール君、君は上手い事を言う！」

桐生達四人は、呆れた表情で二人を眺めていた。

そんな四人の視線に気付き、オスマンは慌てた様に咳払いすると、厳しい顔つきをして見せた。

「さて、君達はよくぞ、フーケを捕らえ、「破壊の杖」を取り戻してくれた」

誇らしげに桐生を除く三人が礼をした。

「フーケは城の衛士に引き渡した。そして、「破壊の杖」は無事宝物庫に戻された。一件落着じゃ」

オスマンは、一人ずつ頭を撫でた。

「君達の、「シユヴァリエ」の爵位申請を、宮廷に出しておいた。追って沙汰があるじやろう。ミス・タバサは既に「シユヴァリエ」の爵位を持つておるから、精霊勲章の授与を申請しておいた」

三人の顔が、パアつと輝いた。

「本当ですか!?!」

キュルケがはしやいだ様に声を上げた。

「もちろん本当じゃ。いいのじや、君達はそれぐらいの事をしたのじやから」

ルイズはチラツと、壁に寄りかかつて此方を眺めていてる桐生を見てからオスマンに向き直った。

「あの、オールド・オスマン。カズマには、何もありませんか?」

「残念ながら、彼は貴族ではない」

「いらねえよ」

桐生がぶつきらぼうな口調で言う。

「俺は見返りが欲しくて、こいつ等を守った訳じゃねえ」

桐生の言葉に頷いた後、オスマンはポンポンと手を打った。

「さあ、今夜は「フリッグの舞踏会」じゃ。「破壊の杖」も無事戻ってきたのじやし、予定通り行おう」

キュルケの顔が再び輝いた。

「そうでしたわ！ フーケの騒動で忘れていました！」

「今日の舞踏会の主役は君達じゃ。せいぜい着飾り、華やかな会にしておくれ」

三人は礼をすると、ドアに向かった。

ルイズが桐生を見つめ、立ち止まる。

「先に行つてろ」

桐生の言葉にルイズは心配そうな表情をしたが、頷いて部屋を出て行つた。

オスマンは三人が出て行つたのを見計らい、桐生に顔を向けた。

「私に聞きたい事がある様じゃな」

「まあな……」

桐生は頷いてオスマンの座る椅子の前まで歩み寄つた。

オスマンはチラリとコルベールを見て退出を促す。桐生からどんな話が出るのかワクワクしていたコルベールは、しぶしぶと部屋を出て行つた。

「さあ、これで二人きりじゃ。遠慮はいらん。私の知っている事なら何でも答えよう。

それが君へのせめてもの礼じゃ」

「なら、聞かせて貰おう。まず、あんた達が「破壊の杖」と呼んでる物なんだが……あれは俺の世界の武器だ」

オスマンの目が鋭く光った。

「俺の世界、とは？」

「俺はこつちの世界の人間じゃない」

「本当かね？」

「本当だ。俺はルイズに、この世界に「召喚」されたんだ」

「なるほど……そうじゃったのか……」

オスマンは納得した様に一人頷いて見せた。

「あの「破壊の杖」を、ここに持ってきたのは一体誰だ？」

桐生の質問に、オスマンは溜め息を漏らした。

「あれを私にくれたのは、私の命の恩人じゃ」

「そいつは、今どこにいます。そいつは俺と同じ世界の人間だ。間違いない」

「死んでしまった……もう、三十年前の話じゃ」

「死んだ？」

「三十年前、森を探索していた私は野生のワイバーンに襲われてな。そこを救ってくれたのが、あの「破壊の杖」の持ち主じゃ。彼は、もう一本の「破壊の杖」でワイバーンを吹き飛ばすと、倒れてしまった。私は彼を学園に運び、手厚く介抱したんじゃが……」

「死んでしまった？」

オスマンは頷いた。

「私は彼が使った一本を墓に埋め、もう一本を宝物庫にしまい込んだのじゃ。恩人の形見として……」

オスマンは遠い目をして窓の外を眺めた。夕暮れの淡いオレンジ色の光が、遠くまで続く草原を照らしていた。

「彼はベッドの上で、何度も言っておった……。『ここは一体どこだ？ 元の世界に帰りたい』と。恐らく彼も、君と同じ世界から来たのじゃろうな」

「それいつも、俺と同じ様に『召喚』されたのか？」

「それはわからん。どんな方法で彼がこっちに来たのか、最後までわからなかった」  
「ちっ……振り出しか」

桐生は肩を落とした。漸く見つかかった手掛かりは、いとも簡単に消えてしまった。恐らく彼は、どこかの国の兵隊だったのだろう。生きていけば色々聞きたい事があったが、今となってはどうしようもない。

オスマンは、桐生の左手を掴んだ。

「君のこのルーン……」

「ああ、こいつも聞きたかった。この文字が光ると、身体が軽くなって、使った事もない武器まで使えたんだが……これは一体なんなんだ？」



オスマンは、話そうかどうか迷った様に言葉を詰まらせたが、ゆっくり口を開いた。

「……これは知っておるよ。「ガンダールヴ」の印じや。伝説の使い魔の印じやよ」

「伝説の使い魔？」

「うむ。その伝説の使い魔はありとあらゆる「武器」を使いこなしたそうじや。君が「破壊の杖」を使えたのも、このルーンの力じやろう」

桐生は改めて左手の甲に刻まれた文字を眺めた。

「なんで俺が、その伝説の使い魔とやらになったんだ？」

「わからん」

オスマンはキツパリと言った。

「わかんねえ事ばかりだな」

「すまんの。ただ、もしかしたら君がこっちの世界にやってきた事と、その「ガンダールヴ」の印は、何か関係があるのかもしれない」

桐生は溜め息を漏らした。少しは有力な情報が得られるかと期待したが、どうやらあてが外れたらしい。

「力になれんですまんの。ただ、これだけは言っておく。私は君の味方じや、「ガンダールヴ」よ」

オスマンはそう言うと、桐生の体を抱き締めた。

「よくぞ恩人の形見を取り戻してくれた。改めて、礼を言うぞ」

「いや……」

「私なりに君が元の世界に戻れる方法を探してみよう。だが、何もわからなくても恨まんでくれよ」

「ああ……すまねえが、頼むぜ、じいさん」

期待外れの状況にはなってしまったものの、オスマンの申し出はありがたかった。

桐生は学園長室から出て、ふと、窓の外を眺めた。薄暗い空に、二つの月が静かに佇んでるのが見えた。

アルヴィーズの食堂の上の階が、大きなホールになっている。舞踏会はそこで行われていた。桐生はバルコニーの柵もたに凭れ、華やかな会場には目もくれずに夜空を眺めていた。

会場では着飾った生徒や教師達が、豪華な料理が盛られたテーブルの周りで談笑している。

桐生は外からバルコニーの続く階段を上つてから、シエスタが差し入れてくれた肉料理とワインを味わっていた。こういったパーティーは昔から苦手で、どうにも中に入

る気になれなかった。

手酌でワインをグラスに注ぎ、グイツと叫あおつた。

「いい飲みっぷりじゃねえか」

バルコニーの柵に立てかけられた、抜き身のデルフリンガーが笑いを込めて言った。キュルケから貰った剣が呆気なく折れてしまったので、今はこの剣をベルトにかけて持っていた。

「酒は慣れてるんでな……」

「なんだなんだ？ 随分暗えじゃねえか？ だからさっきの娘っ子の誘いに乗れば良かったんだ」

静かな口調で話す桐生に、デルフリンガーがつまらなそうに言う。先程、数人の生徒からダンスの誘いを受けたのだが、踊れないと言って次々と断っていた。

チラリと会場の方を見ると、綺麗なドレスに身を包んだキュルケは、大勢の男に囲まれて笑みを浮かべていた。タバサは黒い可愛らしいドレスを着て、その小柄な体からは想像出来ない様な食欲でバクバクと料理を平らげている。

それぞれにパーティーを満喫している様だ。

突然、ホールの壮麗な扉が開く音が鳴り響き、門に控えた呼び出しの衛士が、誰が到着したのかを告げた。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢の、おな～り～り～り～り～り～り～り～り！」

ルイズと言う名前から桐生は振り返った。

ルイズは長い桃色の髪をバレッタに纏め、ホワイトのパーティドレスに身を包んでいた。肘までの白い手袋が、ルイズの気高さを更に演出し、胸元の開いたドレスが作りの小さい顔を宝石の様際に際立たせていた。

パーティーの主役が全員揃ったのを告げる様に、控えていた楽士達が一斉に華やかな音楽を演奏し始めた。

ルイズの周りには、普段馬鹿にしていた少女の美しさに気が付いた男達が群がり、ダンスの申し入れを行っていた。あわよくば、未だ汚れた事のないその美しく柔らかな頬にいち早く唾をつけたいと言う願望を隠し、真摯な態度で次々と男が手を差し出した。

桐生はそんなルイズの姿を見た後、再び会場に背を向けて、ズボンのポケットから遥の御守りを取り出した。淡いピンク色の袋が、ルイズの髪を連想させる。帰りたくても帰れない歯痒さからか、自然と手に力が入り、ギュツと御守りを握り締める。

ホールでは生徒や教師達が、優雅にダンスを躍り始めた。しかし、ルイズは男達の欲望を知ってか知らぬか、誰からの誘いも受けず、バルコニーに佇む桐生に近付いていった。

「なに隅っこで一人で飲んでんのよ」

「こういうパーティーは性に合わねえ……」

ルイズに視線を向けず、桐生が再びグラスにワインを満たすと一気に飲み干した。

「おお、馬子にも衣装じゃねえか、娘っ子」

「うるさいわね」

ルイズに気付いたデルフリンガーが声を出すと、ルイズが腕を組んで睨み付けた。

「お前は踊らないのか？」

パーティー会場をチラリと見て桐生が首を傾げて見せる。

「相手がいないのよ」

「誘ってきた男に好みのがいなかったか？」

手を広げて首を振るルイズに苦笑を漏らしながら桐生が再度問い掛ける。

しかし、ルイズはその質問に答えず、純白の手袋に包まれた手を桐生に差し伸べた。

「何だ？」

「踊ってあげても、よくってよ」

目を逸らしながらルイズが照れた様な口調で言う。色白の頬がほんのりと赤らんでいる。

桐生は差し伸べられた手を見てから、困った様に笑った。

「やめとけ。俺と踊っても、お前が恥をかくだけだ。ちゃんと教養のある奴と踊った方がいい」

桐生の言葉に、ルイズは思いつきり仏頂面をして見せてから大きな溜め息をついた。そして、頬を搔いてみたり、腕を組んで唸ってみたりと何やら一人で葛藤してから肩をガクリと落とす。

「あゝ……もう、今回だけだからね」

ルイズはドレスの裾を摘み、恭しく持ち上げて膝を曲げ、桐生に一礼した。

「私と、一曲踊って下さいませんか？ ジェントルマン」

そう言つて頬を赤らめるルイズは、とても可愛らしく見えた。

桐生は小さく笑つてグラスを置くと、スツとルイズに手を差し伸べた。

「お前にそこまでさせて、恥をかかせる訳にはいかねえな。喜んで、お嬢様」

互いの手をしっかりと握ると、二人はホールへと歩き出した。

「ただ、悪いが社交ダンスなんて経験がないんだが……」

桐生が不安そうに言うのと、ルイズは、私に合わせて、と言つて向かい合いながら手を握る。

ルイズの動きに合わせてぎこちないながらもなんとかステップを踏む桐生。周りの人間を見ると恋人同士や想い人同士で踊る中で自分達は親子が踊っている様に見える。

「……信じてあげるわよ、カズマ」

突然のルイズの言葉に、桐生が思わず首を傾げる。

「何をだ？」

「あんたが、別の世界から来たって事」

ルイズは桐生のぎこちない動きをカバーする様に、軽やかなステップを踏みながら言った。

「そうか……まあ、いきなり信じろって言う方が無理な話だからな」

「正直今まで半信半疑だったけど……あの「破壊の杖」、あんたの世界の武器なんでしょう？ あんなのを見せられたら、信じるしかないわよ」

そう言つて、ルイズは桐生の瞳を見詰めた。鳶色の瞳が、桐生を目を射抜く。

「ねえ……やっぱ、帰りたい？」

「まあなあ……。あつちには、俺を待つてくれてる人達がいるからな。でも、今はその方法かわからない以上、お前の所に厄介になっちゃうしかなさそうだしな。悪いが、宜しく頼む」

「うん……そっか、そうよね……」

ゆつくりと顔を下に向け、俯きながらルイズが呟く。その声は、どこか寂しげだった。しばらく無言のまま踊り続けると、ルイズが再び顔を上げた。しかし、今度は桐生の

視線から目を逸らし、どこか落ち着かなそうな表情が浮かんでいた。

「その……ね、ありがとう……」

突然の礼の言葉に、桐生は首を傾げた。

「えつと……フーケのゴーレムに潰されそうになった時、助けてくれたじゃない?」

ルイズの身体は優雅なステップを踏みながらも、顔は恥ずかしそうにもじもじさせて呟いた。

楽士達の奏でる曲が変わり、よりスローテンポの曲調がホールに流れる。

桐生は徐々にダンスのコツを掴んだのか、ルイズのカバーがなくなっても、それなりに踊れる様になった。

いつ帰れるかはわからない。だが、元の世界へ帰るその日まで、この少女を守ろう。

桐生は心の中で決心した。

「気にするな。お前を守るのは当然だろ?」

「どうしてよ……」

「俺は、お前の使い魔だからな」

優しく、愛おしむ様な温かい笑顔で、桐生はルイズにそう言った。

バルコニーの柵に立てかけられたままのデルフリンガーが二人を見て呟いた。



「主人と踊る使い魔なんて見た事あねえぜ。相棒の野郎、てえしたもんじゃねえか！」

## 第9話

フーケによる宝物庫強盗事件から数日経ったある日。

二つの月が空高く上がり、星々と共に夜を照らす頃、ルイズはベットのの中で夢を見ていた。舞台は生まれ故郷であるラ・ヴァリエールの領地にある屋敷。

夢の中の幼いルイズは、必死になって屋敷を逃げ回っていた。小さな迷宮の様に整えられた植え込みに隠れて息を殺し、追っ手をやり過ぎす。頭上には、二つの月の片方、赤い月が爛々と輝いていた。

「ルイズ！ どこにいるの!?! まだお説教は終わってませんよ！ 出て来なさい！ ルイズ！」

怒声を響かせながら歩くのはルイズの母だ。ルイズは上の姉二人と違って物覚えが悪く、と叱られている最中に逃げ出したのだ。

ふと、隠れた植え込みに向かって足音と声が響いた。

「ルイズお嬢様も難儀だよねえ。あそこまで魔法が使えないなんてさあ」  
「全くだ。上のお二人はあんなにも魔法が使えるのに……」

本人がいるとも知らずに吐き出される言葉は、ルイズの胸に深く突き刺さる。悔しく

て悲しくて、瞳に涙をいっぱい溜めて歯を食いしばりながらその場を離れた。

気付けば、ルイズは自然と中庭の池へと向かっていた。

池の周りには季節の花が咲き乱れ、石のアーチとベンチがある。池の真ん中には小さな島があり、中央には白い石造りの東屋が建っている。

池のほりには小船が一艘浮かんでいた。もっと小さかった頃はこの小船で船遊びを楽しんだが、今は誰も使っていない。

成長した姉達は魔法の勉強で忙しいし、父も母も、あの頃のように自分に優しく接してはくれない。

屋敷の中でも、特に誰も訪れないこの場所は、ルイズにとって「秘密の場所」だった。叱られる度にここに来ては、人目を忍んで涙を流していた。

ルイズは小船に乗り込んで用意してあった毛布にくるまると、声を殺して涙を流した。

ふと、中庭の島に霧が出て来たかと思うと、その霧の中からマントを羽織った男が出て来た。

年は十六ぐらいだろうか、夢の中のルイズは六歳なので、十歳ばかり年上に見えた。「また泣いているのかい、ルイズ？」

優しく、逞しさを感じさせる声がルイズの耳に木霊した。恐る恐る毛布から顔を出す

と、羽根付き帽子で顔が隠れた男の存在に気付く。

顔は見えなくても、ルイズにはそれが誰なのか、すぐにわかった。

その男は、最近近所の領地を相続した子爵だった。ルイズにとつて憧れの、年上の貴族。晩餐会を幾度も共にし、父とも密かな約束を持っている。

「し、子爵様！ いらしていたの!?!」

ルイズは顔を赤らめながら毛布の中に再度隠れる。みつともない姿を憧れの男性に見られたのが恥ずかしいのだ。

「今日は君のお父上に呼ばれたのさ……あの約束の事だね」

「まあっ!」

言葉の意味が、じんわりと心に染み渡つてルイズの顔が更に赤らんでいく。口元を隠す様な形で顔を出したルイズは、恥じらいを含んだ姿勢で子爵を見つめた。

「いけない人ですわ、子爵様は……」

「僕の小さなルイズ。君は、僕の事が嫌いかい?」

帽子から覗く口元に優しい笑みを浮かべながらおどけた様に子爵が問い掛ける。その問いに、ルイズは静かに首を振つて見せた。

「そんな事はありません。でも……私はまだ小さいから、よくわかりません」

はにかみながら素直な気持ちを伝えると、子爵がくすりと笑ったのが聞こえた。

ルイズにとって暖かく、穏やかな時間を感じていると、子爵がそつと手を差し伸べた。

「ミ・レイディ、手を貸してあげよう。もうすぐ晩餐会が始まるよ」

「……でも、私……」

子爵の手を掴もうとして伸びていたルイズの腕が、僅かに引つ込められる。

「また、怒られたのかい？　大丈夫だよ、僕からお父上にとりなしてあげよう。さあ、捕まっつて。僕のルイズ」

ルイズは少し戸惑いを見せた後、差し伸べられた手を掴もうと腕を伸ばした。

瞬間、一陣の強い風が吹き、池の水面を揺らしながら羽根付き帽子が舞い上がった。

「あっ?」

帽子の下から現れた顔に、ルイズは困惑の声を上げる。

帽子の下から現れたのは憧れの子爵ではなく、子爵と同じ服装をした桐生だった。

「な、何よ、あんた!」

ふと、ルイズも自分の身体を見て気付く。先程まで幼かったはずの自分は今現在の16歳の身体になっていた。

「おいで、ルイズ」

「やめてよ!　あんたがおいでつて言うのと、なんか……変!」

「そうか?　なら……来い、ルイズ」

「そうそう、やっぱりそっちの方があんたらしい……って、そうじゃなくて!」

桐生の言い直しに満足しながら差し伸べられた手を掴もうとして、すんでの所で手を引つ込める。

「なんであんたが、ここにいんのよ!」

「なんだ? 抱つこの方が良いのか? 手間のかかるお嬢様だな」

ルイズの言葉が聞こえていないかの様に桐生は溜め息を漏らすと、服がぬれるのも構わず池の中へ入って小船に近付き、ルイズの身体をヒヨイツと抱きかかえる。

「ちよ、ちよっと! 下ろしてよ! どこに行くのよ!」

「決まってるだろ? お前の親父さんの所に行つて正式に俺達の結婚を認めて貰うんだ

よ」

「はあっ!」

結婚!? 誰が!? 誰と!?

困惑と驚愕の表情を浮かべるルイズを無視して桐生が歩き始める。確かな足取りで中庭から屋敷の中へと入って行き、父が何時もいる書齋に向けて突き進んでいく。

「ちよっと! 下ろして! 下ろしなさいったら!」

胸元をポカポカと叩くルイズを微笑ましく眺める桐生の視線は優しい。その視線に思わず顔を赤らめながらも、ルイズは必死に抵抗し続けた。

ビュンツ、と渴いた音が空を切り裂いた。

二つの月と満天の星空が照らす女子寮の庭に当たる広場で、桐生はデルフリンガーを素振りしている。左手の甲で光るルーンが軌跡を描く様に宙に線を引く。

「ふんっ！ でいやっ！」

まるで連撃を繰り出す様に袈裟切りから大振りな横一文にデルフリンガーを振るい、深呼吸をしながらゆっくりと中段に構える。

「なかなかやるじゃねえか、相棒」

桐生の素振りの終わりを見て取って、デルフリンガーが声を発した。

「剣の振り方もとても素人とは思えねえ。どっかで習ったのか？」

「まあな。武道家のじいさんから教わった」

桐生は構えを解いてデルフリンガーを壁に立て掛けると、ポケットに手を突っ込んで暫く中をあさる様に動かしてから手を引き抜いた。

両手には、メリケンサックが装着されている。

「それがあのおばさんに「強化」の魔法をかけてもらった武器か？」

デルフリンガーの問いに、桐生は静かに頷いて見せる。

今日の「土」系統の授業は「強化」についてのおさらいと実習だった。「強化」とは、

物質を本来の状態よりも硬く、丈夫にする呪文の事だ。実際、王宮の兵士達の劍等にはこの「強化」の魔法がかけられている物が多いらしい。

授業の後、桐生はシュヴルーズに頼んで自分のメリケンサックに「強化」の魔法をかけてもらった。見た目は変わらないが、身に付けた時に感じる奇妙な感覚が、生半可な事では壊れる事がないという事を教えてくれた。

左手のルーンは相変わらず輝き続けているのをチラツと見た後、桐生は構えを取って拳を振るってみた。

メリケンサックの鉄製の拳が空を穿つ。普段の生身の拳よりも速く動かせるのは、これもルーンの力なのだろうか。

一通り拳を振るい終えてからメリケンサックを指から外し、持ってきていた小瓶の中の水を飲み干す。

「そろそろ戻るか……行くぞ、デルフ」

「あいよ、相棒」

デルフリンガーを鞆に収めて、先に眠っているであろうルイズの元へ戻る。

静かに部屋の扉を開いてから鍵を掛け、デルフリンガーを壁に立て掛けて自分の寢床に向かおうとすると、ルイズのベッドから呻き声が漏れた。

首を傾げてベッドに近付くと、何やらルイズがうなされている。形のいい眉はハの字



に歪み、眉間に皺が寄っている。

「ありやりや……娘っ子、うなされてんじやねえか」

壁に立て掛けられたデルフリンガーがまるでルイズの表情が見えてるかの様な口調で言う。

桐生はベッドの端に腰掛けると、ルイズの頭を優しく撫でてやる。アサガオでも、時々悪夢にうなされていた子供達には良くこうしてやったものだ。暫く撫でてやると、ルイズの表情が幾分か穏やかになってきた。

表情の変化を満足そうに眺めていると、突然ルイズの瞳がカツと見開いた。思わず驚いている桐生の方へ鳶色の瞳がギョロツと動くと、そのままゴロゴロとベッドの端まで身体を回転させて床へと落ちた。

ベッドから立ち上がり何事かと桐生がルイズの方へ回ろうとすると、ルイズがガバツと身体を起こす。

「あ、あ、あ、あんた！ い、一体、何しようとしたのよ!？」

顔を真っ赤に染めながら声を震わせて桐生に指を突き付けるルイズ。

「つれねえ言い方だなあ、娘っ子」

何を怒っているのか理解出来ず首を傾げていた桐生に変わって、デルフリンガーが笑みを含んだ声で答える。ルイズの視線も、デルフリンガーの方へと向けられた。

「悪夢にうなされてたお前さんを、相棒が撫でてあやしてくれてたんじゃねえか。怒声よりも感謝の言葉を述べるべきだぜ？」

「あ、あやしてたですって!?!」

デルフリンガーの言葉に今度は桐生とデルフリンガーの交互に視線を移して困惑するルイズ。

「本当だぞ。なんかうなされていたみたいだったんでな……軽く頭を撫でてたんだが、起こしたか?」

少々申し訳なさそうに言う桐生にルイズは深い溜め息を漏らすと、ベッドに乗って座り込んだ。

「まあ、いいわ。ちよつと夢の中のものあんたと現実のものあんたの区別がつかなくなってたから……悪かったわね」

「おいおい……夢の中の俺はお前に一体何をしたんだ?」

その言葉に、ルイズの頭の中で先程まで見ていた夢が再現される。

結局どういふ訳か話ほとんどん拍子に進み、あっさりと父に認められた桐生はルイズを連れて晚餐会へ。会の終了と同時にルイズの自室へと向かいベッドに寝かされてから耳元で囁かれたのは愛の言葉、そして……。

ボンッと大きな爆発音が聞こえそうな勢いで顔を一気に真っ赤にしたルイズは、いき

なりベッドに潜り込んでシーツを頭からひっ被った。

「う、うるさいわね！ いいからさっさとあんたも寝なさい！」

再び怒声を上げるルイズに何を怒っているのかわからず首を傾げるも、桐生は上着のジャケットを脱ぎ椅子に掛けて寝床についた。

暫くして桐生の寝息が聞こえてくると、ルイズがそつとシーツから顔を出して桐生を見つめた。

こいつのせいで眠れない……！

正確に言えば桐生は全く悪くないのだが。顔を赤らめ、またあの夢を見てしまうのではと思いつながらも、ルイズは寝返りをうって瞼を閉じた。

トリステインの城下町の一角にあるチエルノボーグの監獄の牢の一室で、フーケは質素なベッドに寝ころんでいた。

桐生達に捕まるなり、魔法を得意とした彼女はトリステインの監獄の中でも一番監視の強いこのチエルノボーグの監獄に入れられたのであった。

裁判は来週に行われると聞いているが、様々な貴族のプライドを踏みにじり、お宝を頂戴してきたのだ。恐らく絞首の刑だろう。あるいは島流しか。少なくとも、もうこのハルケギニアの地に足をつくことは許されないだろう。脱獄を考えたが、フーケはすぐ

さま諦めた。

牢の中は木製のこのベッドしかない。運ばれてくる食事の食器も、全て木製だ。

得意の「錬金」の魔法を使おうにも、杖は取り上げられてしまった。もつとも、仮に「錬金」の魔法を使おうにも、壁や鉄格子には魔法の障壁が施されている。

「杖がないメイジに価値はなし、か……」

自分で呟きながらフーケは苦笑を浮かべた。

そして、自分を捕らえた、あの平民の男の顔を思い出して舌打ちする。

熟練の戦士を思わせる様な巧みなフットワークで自分のゴーレムを翻弄し、挙げ句「破壊の杖」を操って倒してしまった。

一体あの男は何者なのだろうか。少し気にはなったが、もう自分には関係のない事だ。

仕方なしに瞼を閉じて眠ろうとするも、その瞼はすぐに開かれる事になった。

上の階から、誰かが下りてくる足音が響いてきた。カツ、カツという音にガシヤガシヤと拍車の音が混じっている。門番の靴には拍車等ついていなかった。こんな音がする筈がない。

とりあえずとばかりに、フーケはベッドから起き上がった。

暫くすると、鉄格子の向こうに長身の黒マントを身に付けた人物が現れた。白い仮面

に覆われて顔はわからないが、マントから長い魔法の杖が覗いている事からメイジである事はわかる。長年の経験から、体格からして恐らく男だろうという事も。

「あらあら……こんな夜更けにお客様だなんて、珍しいわね」

フーケの言葉に微動だにせず、仮面の人物はまるで値踏みするかの様にフーケを眺めている。

フーケはすぐさま自分を殺しに来た刺客だろうと当たりをつけた。自分が今まで盗んだお宝の中には、明るみに出ては不味い代物も幾つかあったからだ。恐らく、裁判の際に余計な事を言わさぬ様、口封じに来たのだろう。

「生憎、客人をもてなす様な気の利いた物はないの。それとも、私を抱きに来たのかしら？ もしその鉄格子から出してくれるなら……好きにしても良いわよ？」

フーケはベッドに横になると色つばい仕草と目つきで仮面の人物を手招きして見せる。

杖がない為、魔法は使えないがむぎむぎ殺されるつもりはない。体術にもそれなりの心得がある。しかし、外から魔法を使われては適わないので、なんとか中に引き込もうと誘いをかける。

「土くれ」だな？」

仮面の人物が口を開く。年若く、力強い男の声だ。

「誰がつけたかは知らないけど、そう呼ばれてるわ」

フーケの言葉に男は両手を上げ、敵意がない事を見せた。

「お前に話が合つて来た」

「話？ 弁護でもしてくるって言うの？ 物好きな客人ね」

男の言葉にフーケは鼻を鳴らして笑つて見せる。

「なんなら弁護してやつても構わないぞ？ マチルダ・オブ・サウスゴータ」

フーケの表情から何時もの余裕が無くなる。その名は、かつて捨てざる得なかつた自分の、貴族であつた自分の名だ。その名を知る者は、もうこの世にはいない筈だつた。

「あんた……何者なの？」

驚愕と憎悪の混じつた表情で問い掛けるフーケの問いに、男は答えず笑つて見せた。

「再びアルビオンに仕える気はないか、マチルダ？」

「ふざけるな！ 父を手につけて、家名を奪つた王家なんか仕える気なんかさらさらないわ！」

普段の冷静な態度を投げ捨て、感情的な声で怒鳴るフーケ。しかし、男は気にしない様子で首を振つて見せた。

「勘違いするな。アルビオンの王家に仕えろ、と言っている訳じゃない。アルビオンの王家は倒れる。近いうちにね」

「どういう事?」

「革命だよ、マチルダ。無能で私欲を満たす事しか頭がない王家は潰れる。そして、我々有能な貴族による政が始まるんだ」

拳を握り締めて力説を唱える男に面食らいながらも、フーケはもつともな疑問をぶつけてみる。

「でもあんた、トリステインの貴族じゃない。アルビオンの革命とやらに何の関係があるのよ?」

「我々はハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて繋がった貴族の連盟さ。我々に国境なんて存在しない。ハルケギニアには我々の手で一つとなり、始祖ブリミルの光臨せし「聖地」を取り戻す」

「馬鹿馬鹿しいわね……」

フーケは鼻で笑いながら手を振って見せる。

「で? その国境を越えた貴族の連盟様が、私みたいなのこそ泥にんの用よ?」

「我々は一人でも優秀なメイジが欲しくてね。協力してくれないか? 「土くれ」よ」

「あのね、寝言は寝て言うものよ?」

興味が無さそうにフーケは溜め息を漏らした。

トリステイン王国、帝政ゲルマニア、自分の故郷でもあるアルビオン王国、そしてガ

リア王国。未だに小競り合いを続ける国同士が一つになる？ 有り得る筈がない。

しかも「聖地」を取り戻す？ あの強力なエルフ共から？

ハルケギニアから東に離れた地に住まうエルフ達に「聖地」が奪われてから数百年。度々各国が「聖地」奪還を目指し兵を送ったが、その度に惨敗の結果に終わっている。

独特の文化と人間では有り得ない程の長命、そして尖った耳が特徴のエルフ達は、一人一人が優秀な魔法使いであり、繰り出される魔法も強烈なものばかりなのだ。

「私は貴族が嫌いだし、ハルケギニアの統一なんかこれっぽっちも興味がないの。おまけに「聖地」を取り戻す？ あそこに何の意味があるのか知らないけど、エルフ共が居たいって言うならいさせておけば良いじゃないの」

フーケの言い分を聞き終えると、男はマントから覗く腰に差した魔法の杖の柄を掴んだ。

「土くれ」よ、お前は選択する事が出来る」

「あら、どんな選択かしら？」

「我々の同志となるか、」

続けようとした男の言葉を、フーケが代わりに口にした。

「ここで死ぬか、でしょ？」

「その通りだ。我々の事を知られた以上、生かしておく訳にはいかない」



「勝手に来て、勝手に話しといてそう言う訳？　本当に貴族ってやつはロクなものじゃないわ」

フーケは苦笑を浮かべながら肩をすくめて見せた。

「早い話、選択じゃない。強制でしょ？」

フーケの言葉に男は肩を震わせた。仮面のせいで表情はわからないが、笑っている様だ。

「その通りだ」

「だったら間怠つこしい真似なんてせず、味方になれって言いなさいな。命令も出来ない男なんて、場合によっては女に嫌われるわよ？　少なくとも、私は嫌いだよ」

「……」緒に來い、マチルダ」

強い口調に変わって命令する男に笑みを浮かべながら、フーケは腕を組んで見せる。

「で、あんた達の貴族の連盟は何て言うのかしら？」

「一緒に来るのか、来ないのか、どっちなんだ？」

「これから旗を振る組織の名前くらい、聞いておこうと思っただけど？」

男は溜め息を漏らした後、ズボンのポケットから鍵を取り出して鉄格子の扉を開くと、フーケに手を差し伸べた。

「レコン・キスタ」

小さな蠟燭が揺れる聖堂で、一人の男が三人の男と話していた。男は黒いローブで顔を隠して顔が見えない。が、それは三人も一緒だった。

三人はそれぞれ、奇妙な仮面で顔を隠していた。男から向かって左に立つ者は、蛇をイメージした様な白い仮面を着けている。右に立つ者は、鼻から上を覆い隠す鉛色の仮面を着けている。額の左右のこめかみの所には短い突起が付いており、さながら鬼の様だ。そして正面で椅子に座り、十字架をバックに佇む男は黒い、嘴の様な尖った物が突き出た仮面を着けている。

「レコン・キスタ？」

男の正面に座る黒い仮面の男がオウム返しの様に言葉を発する。声からして、年はまだ若い。

「そうだ。我々は優秀なメイジを集めてアルピオンで革命を起こそうと奮闘している」「ふくん……でもさ、僕達は誰一人としてメイジでもなければ、貴族でもないよ？」

黒い仮面の男が左右に立つ男を指差してから笑みの籠もった声で首を傾げて見せる。

ローブの男は、首を振ってから僅かに身を乗り出した。

「確かに君達はメイジではない。だが、我々にとって必要なのはメイジだけではない。更なる力を付ける為に、「トライデント」の君達にこうして勧誘に来たと言う訳だ」

「ふうん……」

黒い仮面の男が、頭の後ろに腕を組んで呟く。

「トライデント」。ハルケギニアの裏社会に住む者達で知らぬ者はいないと言われて  
いる、暗殺・殺人を主に行う三人組。

一度依頼を受ければ、ターゲットとなった人物は決して逃れる事は出来ないと言われ  
る程の凄腕の集まりである。

「報酬は後払いになってしまいが、満足のいく金額を用意する。担保は私の命で構わな  
い。どうだ？」

ロープの男の問い掛けに、黒い仮面の男が左右に立つ男達に視線を送る。が、どちら  
も一切の動きは見せず、ただ佇んでいるだけであった。

暫く考える様に見つめていた黒い仮面の男は、ゆっくりロープの男に視線を戻し  
た。

「やっぱり、いいや。なんかつまんなそうだし」

「つまらない？」

仮面の男の発言に、ロープの男の言葉に怒気が込められる。

「そう。正直僕達は王制とか、政とか興味ないんだよね。せつかくの誘いだけど、お引き  
取り願えるかな？」

黒い仮面の男が手を伸ばしてロープの男の背後にある扉を指し示す。するとロープの男は素早い動きで腰に差してあった杖を引き抜き、黒い仮面の男に顔面に先端を突き付ける。その先端には小さいながらも炎の玉が浮かび上がっている。

「トライデント」のリーダー君、君には選択する事が出来る」

「どんな？」

さほど焦る様子も見せずに黒い仮面から覗く瞳がロープの男を見つめながら問い掛ける。左右の男達も、まるで置物の様に佇んだまま動かない。

「我々の仲間になるか、今ここで死ぬか、だ。我々の事を知られた以上、生かしておく訳にはいかない」

「ふくん……じゃあさ、賭けない？」

「賭け？」

凄みを利かせて脅しをかけたつもりだったか、黒い仮面の男はまるで友達に接するかのような口調でロープの男に提案する。

「今あんたがこの魔法、「ファイヤーボール」かな？　これを発動して僕が死んだら、この二人を好きに使っていいよ。ただし……」

黒い仮面の男は杖を挿んで自分の鼻先数センチの所まで引つ張る。火の玉が徐々に仮面を焦がして煙が上がっていく。

「もし、発動して死ななかつたら……あんたの命を貰うよ。いいね？」  
「ッ!?!」

ローブの男は困惑した様に言葉を詰まらせる。

これだけの距離だ、外す筈がない。しかも自分は「火」系統のスクウエアメイジだ。見た目は小さいが、この火の玉は確実に人を殺せる。それだけの威力がある。なのに。

何故こんなにも、この目の前の男には余裕があるのか。

徐々にローブの男の呼吸が乱れていく。今までに感じた事のない、奇妙な恐怖が男の背筋を走っていく。

黒い仮面は火の玉で焼かれ、嘴の部分には火が付いて黒い煙を上げている。

「し……死ねっ!!」

男が最後の一言を発すると、火の玉が杖から離れて爆発した。黒い仮面が、燃えながら宙を舞う。

「なっ!?!」

そしてローブの男は驚愕する。

たった今、爆発が起こった。そして焼かれた筈の目の前の男の顔には、傷一つ付いていなかった。

黒い仮面の下にあった顔は若い。声の通り、年相応の青年だ。その顔が、無邪気に笑

う。

「あんたの負けだ」

青年は楽しそうに言ったが、もう男の耳には入らなかつただろう。青年が話すよりも早く、鉛色の仮面の男が腰に差していた剣を引き抜きローブの男の首を跳ねたのだ。

切り口から真つ赤な血が噴き上がり、青年と背後の十字架にバタバタと降りかかる。

「あゝあ……血って拭き取るの大変なんだよ？　ちよつとは考えて殺してよ」

「……すまん」

青年が不満を訴えるのを聞きながら、鉛色の仮面の男が渋い声で謝罪を口にしながら剣を鞘へとしまう。

「ふん。レコン・キスタか……下らないな」

佇んでいた白い仮面の男が腕を組みながら、首の無くなった男の死体を見下した。少し声色は違うが、鉛色の仮面の男同様渋い声だ。

「だが、良かったのか？　場合によっては組んだ方が計画が進んだんじゃないのか？」

「ん……まあ、良いんじゃない？　焦る事は無いしさ」

鉛色の仮面の男の質問に青年が肩をすくめて笑ってみせる。そんな二人のやり取りを聞いていた白い仮面の男が無造作にローブに包まれた生首と首のない死体の胸元を掴んだ。

「俺が捨ててくる。そのまま戻るぞ」

「ああ、また連絡するから待機しててよ」

ズルズルと死体を引きずって扉を開き、外に出て行った白い仮面の男を見送ると、鉛色の仮面の男も外へと出て行った。

後に残された青年は椅子から立ち上がって、血に汚れた十字架を眺めながら腕を組んだ。

「革命だの戦争だの……みんな頑張るねえ。もうちよつとで、そんな物に意味が無くなっちゃうのに」

青年は一人呟くと、笑みを浮かべながら額から流れる返り血を指で拭いて、ペロリと舐めた。

## 第10話

翌朝、教室に入ってきたルイズは、起床してから十数回目となる欠伸をしながら眠たそうに席に着いた。その後ろで桐生が壁に寄りかかる。

結局、また夢の続きを見てしまうのではと妙な不安に駆られて上手く眠れなかったルイズは、朝から欠伸を繰り返して眠たそうな目を必死に開いていた。

次々と生徒達が席に着くと、教室の扉が開き、ギトーが現れた。

長い黒髪に漆黒のマントと言う不気味な出で立ちは、実年齢よりもどこか老けて見える。実際、生徒の間ではその不気味さ故に、あまり人気がない。

「では諸君、早速授業を始める。私の二つ名は知つての通り、「疾風」。「疾風」のギトーだ」

生徒の誰もが口を噤む。そして静寂の中でギトーの言葉が響き渡る。

「さて、最強の系統は何かご存知かね？ ミス・ツエルプストー」

突然指名を受けたキュルケはつまらなそうに頬杖を突きながら答えた。

「虚無」じゃないんですか？」

「生憎伝説の話をしているんじゃない。現実的な答えを聞いているんだが？」



ずいぶんと引つかかる言い方にキュルケは僅かに眉をひそめてから赤髪の毛先を指に絡ませた。

「火」に決まっていますわ、ミスタ・ギトー」

「ほう？ 何故そう思うのかね？」

「全てを焼き付くせるのは、いつの時代も炎と情熱。そうじゃございせん？」

「残念ながらそうではない」

ギトーは腰に差し込んであった杖を引き抜くと、首を振って見せた。

「ならば試しに、この私に君の得意な「火」の魔法をぶつけてみたまえ」

突然の申し出に、キュルケや教室の生徒達はギョツとした表情になった。

「火」の系統は最も攻撃的な魔法が多く、未熟な者でもその威力はなかなかのものになってしまふ事が多いのだ。それを、この教師は生徒にぶつけろと言うのだろうか。

「どうしたね？ ミス・ツエルプストー。君は確か、「火」系統に自信があるのではないのかね？」

ギトーの言葉には、どこか挑発的な物が含まれており、キュルケの目が細くなった。

「火傷じゃ、済みませんわよ？」

「構わんから、全力で来たまえ。そのツエルプストーの者の証である赤毛が本物ならばね」

ギトーの挑発に、キュルケの瞳から光が消える。

キュルケは胸に差してあつた杖を引き抜くと詠唱を開始する。杖の先端に生まれた火の玉を自分の胸元に手繰り寄せると、徐々に火の玉が大きくなっていく。その大きさは見る見るうちにバレーボール程まで膨らみ、キュルケのそばの席に座っていた生徒が肌を焦がしかねない程の熱波から逃れようと席を立った。

キュルケは膨らんだ火の玉を、ギトー目掛けて押しやった。真つ赤に燃え盛る火球が真つ直ぐに宙を進んでいく。

すると、ギトーが杖を横に振った。瞬間、突風が生まれて火の玉をかき消し、キュルケの身体を吹き飛ばして壁へと打ち付けた。

「わかつたかね、諸君？」「風」こそ最強の系統なのだ。「風」は「火」だろうと、「土」だろうと、「水」だろうと吹き飛ばす。試した事はないが、「虚無」すらも吹き飛ばす事が出来ると、私は思っている」

壁に打ち付けられ、床に崩れたキュルケが立ち上がって不満たつぷりな視線をギトーに向けながら手を上げる。しかし、ギトーは気にした様子もなく講義を続ける。

「目に見えぬ「風」は、諸君等の盾となり、矛となるのだ。そして、「風」が最強たる所  
以がもう一つ……」

ギトーが杖を立てて何やら呪文を唱えようとした瞬間、教室の扉が開かれる大きな音

が響き渡り、みな視線が一斉に其方に向く。

入ってきたのはコルベールだった。が、彼は普段とはかけ離れた、奇妙な格好をしていた。

頭に馬鹿でかい金髪のロールが巻かれたカツラをかぶり、彩り鮮やかな刺繍が施された服を着込んでいる。さながらサーカスの曲芸師のようだ。

「ミスタ？」

場違いな格好で絶妙にタイミングの悪いコルベールの登場にギトーは不満を隠さず問いかける。

「やや、授業中に失礼致しますぞ！ ミスタ・ギトー！」

「あなたの目が悪いのは存じているが頭の方まで悪いのは知らなんだ。授業中ですぞ？」

皮肉をたつぷり含んだギトーの言葉が聞こえていないかの様にコルベールはこほん、と咳払いを一つして見せた。

「本日の授業は、ただいまをもって中止します！」

コルベールの言葉に、生徒達から歓声上がる。学生にとって授業が中止になるのが喜ばしいのは全世界共通らしい。

喜び騒ぐ生徒達に対して静かにする様にコルベールが両手を上げて見せる。

「お静かに、皆さん。授業が中止になるのは、それよりも重要な事がこれから起こるからです」

格好に似合わない、重々しい口調で語るコルベールの言葉に生徒達が沈黙する。

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリステインの可憐なる一輪の花、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学園を訪れるとお達しがありません」

生徒達の間にごわめきが広がるのを、桐生は静かな眼差しで眺めていた。

「従って、粗相があつてはなりません。急な事ですが、今から学園の総力を上げて歓迎式典の準備を行います。諸君等は直ちに正装し、門に整列するように」

生徒達は緊張した面持ちになると、一斉に頷いた。

コルベールは満足そうに頷いた後、目を見開いて怒鳴り上げた。

「諸君等が立派な貴族に成長した事を、姫殿下にお見せする絶好の機会です！御覚えが宜しくなる様に、しっかりと杖を磨きなさい！宜しいですかな!？」

「はい！ ミスタ・コルベール！」

魔法学園に続く街道を、金の冠を御者台の隣につけた四頭立ての馬車が歩いている。所々に金銀やプラチナの装飾がかたどられ、この上なく豪華な造りになっている。

その中で聖獣であるユニコーンと水晶の杖が組み合わさった紋章をつけた馬車があった。それこそが、王女の馬車である証だった。馬車を引く馬も普通の馬ではない。額に一本の角を生やして白く美しい身体を持った、紋章に描かれたのと同じユニコーンだ。古くより清き乙女のみをその背に乗せると言われているユニコーンこそ、王女の馬車を引くのに相応しいのだ。

馬車の窓にはレースのカーテンが下ろされており、残念ながら中を見る事は出来ない。

王女の後ろの馬車には、今現在のトリステインの政治を握る、マザリーニ枢機卿の馬車が続いていた。王女の馬車よりも立派にあしらわれたその出で立ちは、現在のトリステインの権力を誰が握っているのかを知らしめているかの様だ。

二台の馬車の四方を固めるは、王室直属の近衛隊、魔法衛士隊の面々である。名門貴族の子弟のみで構成されている魔法衛士隊は、国中の貴族の憧れだ。男の貴族は誰もがその証となる漆黒のマントを羽織りたがり、女の貴族はその花嫁になるのを望んでいる。

街道には花が咲き乱れ、街道に並んだ平民達が歓喜の声を投げ掛ける。

「トリステイン万歳！ アンリエッタ姫殿下万歳！」

馬車が前を通る度に湧き上がる歓声に応える様に、馬車の窓のカーテンが上がり、う

ら若き王女が微笑みを浮かべて手を振って見せる。その美しい微笑みに、歓声は更に湧き上がった。

カーテンを下ろしたアンリエッタ王女は、微笑みを消して深い溜め息を漏らした。その瞳には年相応以上の苦悩と憂いが秘められている。

アンリエッタ王女は当年で御年十七歳。すらりとした気品のある顔立ちに薄いブルーの瞳、高い鼻が目を引き、まさに完璧に近い美少女だ。細くしなやかな指先で、水晶のついた杖を弄っている。王族である彼女もまた、強力なメイジであった。

街道の観衆の歓声も、彩る花々も、彼女の心を明るくは出来ない。悩める乙女は深い深い、政治と恋の悩みでいっぱいなのだ。

隣に座るマザリーニ枢機卿が、口髭を弄りながらそんな王女を見つめていた。丸い帽子に灰色のローブで痩せぎすの身体を纏った四十男だ。髪も髭も白く、伸びた指は骨ばり実年齢よりも十は上に見える。先帝亡き後、トリスティンの政治を一手に握った事で、外交や内政の激務が彼を老人に変えてしまった。

彼は先程自分の馬車から王女の馬車へと移っていた。政治の話をする為であったが、肝心姫殿下は溜め息ばかりで要領を得ない。

「これで本日十三回目ですぞ、殿下」

「何がですか?」

マザリーニの困った様な声にアンリエッタは振り返って首を傾げる。

「溜め息です。王族がそんなに溜め息を漏らすものではありませんぞ」

「王族? トリステインの王様は貴方でしょうか? 枢機卿。結婚だって、貴方の言いつけ通りにすれば良いのでしょうか?」

アンリエッタのやや投げやりな言葉に、マザリーニは頬を掻いて言葉を詰まらせる。

「私は貴方の言いつけ通り、ゲルマニアの皇帝に嫁ぐのですから。溜め息くらい、見逃して欲しいですわ」

「仕方ありません。目下、ゲルマニアとの同盟は、我がトリステインにとって急務なので」

望まぬ結婚を無理強いしてしまう事に多少残酷である事を承知しながらも、マザリーニは言い放つ。

「それくらい、私だって知ってますわ」

「ならば殿下もご存知でしょう? かの「白の国」アルピオンの阿呆共が行っている「革命」とやらを。きやつらには、ハルケギニアに王権と言うものが存在するのが我慢出来ないらしい様です」

マザリーニの言葉にアンリエッタの美しい眉が歪み、眉間に皺を寄せながら言い放つ

た。

「礼儀知らずの野蛮人達！ 可愛そうな王様を捕まえて、縛り首にしようだなんて！ この世の全ての人々があの愚かな行為を許そうとも、私と始祖ブリミルは絶対に赦しません！ 絶対に！」

「然りに。しかしながらアルビオンの貴族共は強力です。アルビオン王家ももう保ちますまい。始祖ブリミルが授けし三本の王権の一本が失われてしまう。もつとも、内憂を払えぬ王家に存在価値等ないでしょうが」

「枢機卿」

ふと、マザリーニが顔を向けると、アンリエッタが自分を睨みつけているのに気付いた。が、マザリーニはその瞳を真っ直ぐ見つめ返しながら、アンリエッタの次の言葉を待った。

「アルビオン王家の人々は、ゲルマニアの成り上がりと違って私達の親戚なのですよ？」

いくら貴方が枢機卿と言えど、今の言葉は聞き捨てなりません」

「これは失礼を。ですが、私は本当の事しか、殿下には伝えたくありませんので」

マザリーニの言葉に、アンリエッタは悲しそうに首を振った。

「風の噂が真実ならば、奴らはハルケギニアを統一するとか夢物語を吹いております。ならば自分達の王家を亡き者にした後、当然矛先は我等に向けられるでしょう。そう



なつてからでは遅いのです」

重々しい口調で語るマザリーニをよそに、アンリエッタはつまらなそうに頬杖を付き、カーテンから覗く街道を眺めている。

「政治とは、チェスの様に先を読み、一手ずつ確実に打つものなのですよ、殿下。ゲルマニアと同盟を組み、近いうちに生まれるであろう新勢力への対抗の駒を用意せぬば、この小国トリステインは、直ぐにでも制<sup>チエックメイト</sup>圧されるでしょう」

しかし、この様な大切な話がまるで聞こえていないかの様に、アンリエッタはただ溜め息を漏らすばかり。

マザリーニもアンリエッタに聞こえぬ様溜め息を漏らすと、窓のカーテンをずらした。そこには、腹心の部下がいた。

羽根帽子に長い口髭が凜々しい、精悍な顔立ちの若い貴族だ。黒いマントの胸元には、グリフォンをかたどった刺繍が施されている。その刺繍の理由は、彼の跨がっている幻獣だ。鷲の頭と翼と前足、獅子の胴体と後ろ足を持ったグリフォンそのものだった。

三つの魔法衛士隊の一つ、グリフォン隊隊長のワルド子爵である。彼の率いるグリフォン隊は魔法衛士隊の中でも、枢機卿の覚えが良い部隊である。

選りすぐりの貴族で構成された魔法衛士隊は、それぞれ隊の象徴となる幻獣に跨がっ

ている。

「お呼びですか？ 猊下」

ワルドは枢機卿の視線に気付くと、グリフォンを窓に近付けた。すると、窓が開かれ枢機卿が顔を覗かせた。

「ワルド君、殿下のご機嫌が麗しくない。何か気晴らしになる物を探ってきてくれ」

「御意」

ワルドは頷くと、街道を鷹の目の様に鋭い眼差しで見つめた。才気煥発な彼はすぐさま目当ての物を見つけると、そこに向かってグリフォンを走らせた。

腰に差したレイピアの様な長い杖を引き抜くとルーンを唱えて振るう。すると数本の花が旋風で摘まれ、ワルドの手元にやってきた。

目的の物を手に入れたワルドは急ぎ馬車に戻ると、枢機卿にそれを手渡そうとした。しかし、枢機卿は首を振って見せた。

「ワルド君、御手ずから殿下が受け取って下さるそうだ」  
「光栄でございます」

ワルドは一礼し、すぐさま反対側の窓へとグリフォンを走らせる。スルスルと窓が開かれアンリエッタが手を伸ばす。ワルドから花を受け取ると、今度は左手を差し出した。

ワルドは感動した面持ちでアンリエッタの手を取り、その手の甲に口付けた。

憂いの籠もった声で、アンリエッタが問い掛ける。

「お名前は？」

「殿下をお守りする魔法衛士隊、グリフォン隊隊長ワルド子爵でございます」

恭しくワルドが一礼する。

「貴方は、貴族の鑑の様な立派な方ですね」

「勿体無きお言葉……殿下の卑しき僕しもべに過ぎませぬ」

「最近はその様な物言いをする貴族も少なくなりました。かつて、あの偉大なるフィリップ三世の治下には、貴族はみなその様な態度を取ったものですわ」

「悲しき時代になった物です、殿下」

「貴方の忠誠には、期待しても宜しいのでしょうか？ 私が困った時には……」

「その様な際には戦の中だろうが、空の上だろうが、なにを置いてでも駆け付ける所存で  
いざいませ」

アンリエッタが頷くと、ワルドは再度一礼し馬車から離れていった。

「あの貴族は、使えるのですか？」

アンリエッタはマザリーニに問い掛けた。

「ワルド子爵。二つ名は「閃光」。彼に匹敵する貴族は、アルビオンにもそうはおりませぬ」

「まい」

「ワルド……聞き覚えのある地名ですわ」

顎に手を当てながら考えるアンリエッタに、そう言えばと思い出した様にマザリーニが口を開く。

「確かラ・ヴァリエール公爵領の近くだったと存じます」

「ラ・ヴァリエール？」

その名前が、幼き頃の記憶が紐解かれる。確か、これから向かう魔法学園には……。

「枢機卿、「土くれ」のフーケを捕らえた、貴族の名はご存知ですか？」

「忘れましたな」

「その者達に、爵位を授けるのではないのですか？」

アンリエッタが怪訝そうな顔で見つめてくるのも構わず、マザリーニは興味なさそうに言った。

「「シユヴァリエ」の授与条件が変わりましてな。従軍が必須になりました。盗賊を捕まえた程度で授与する訳にはいきません。これから戦になるかもしれないと言う時に、王家に忠誠を誓っている貴族達にいらん嫉妬をさせたくありませんしな」

「私達の知らない所でいろんな事が決まっていくなね」

マザリーニは黙っていた。そんなマザリーニとは裏腹に、アンリエッタは盗賊を捕ま

えた貴族の中にラ・ヴァリエールの名前があつた事を思い出した。

自分の中にある憂いがどうにかなるかもしれない。アンリエッタは密かに安堵した。

「殿下、最近宮廷と一部の貴族の間で、不穏な動きが確認されております」

マザリーニの言葉に、アンリエッタの身体がビクツと跳ねた。

「殿下の目出度きご婚礼をないがしろにして、トリステインとゲルマニアの同盟を阻止

しようとするアルビオンの貴族共の暗躍があるとか……」

アンリエッタの額から、嫌な汗が一筋流れた。

「よもや、その様な者達に漬け込まれる様な隙はありませんか？ 殿下」

暫しの沈黙の後、アンリエッタが苦しそうに言葉を絞り出した。

「……………ありませんわ」

「その言葉、信じますぞ？」

「私は王女です、嘘はつきません」

それからアンリエッタは再び溜め息を漏らした。

「やれやれ……十四回目ですぞ、殿下」

「心配事があれば誰だつて溜め息が出るものでしょう」

「王族たるもの、お心の平穩より、国の平穩を考える物ですぞ」

「私は……常にそうしております」

手の中の花を指先で撫でながら、つまらなそうにアンリエッタは呟いた。

魔法学園の正門を潜り抜け、王女の一行が現れると整列した生徒達が一斉に杖を掲げる。しゃんつ！ と小気味良く杖の音が重なった。

正門を潜った先に、本塔の玄関があった。そこで王女の一行を迎え入れるのは、学園長のオスマンである。

馬車が止まると召使い達が駆け寄り、火毛氈かもうせんの絨毯を敷き始めた。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなぐり〜！」

衛士の言葉と同時に馬車の中からアンリエッタが現れ、生徒達の間には歓声が上がった。

アンリエッタは火毛氈の絨毯の上を歩きながら、咲き誇る薔薇の様な美しい微笑みを浮かべて手を振った。

「あれがトリステインの王女？ ふん、あたしの方が美人じゃない。ねえ、ダーリンもそう思うでしょ？」

アンリエッタの姿を見て鼻を鳴らしたキュルケは桐生の腕に絡みつきながら甘える少女の様に問い掛ける。

「そうだな……色気ならキュルケ、気品ならあのお姫様、つて所か」

「んもうっ！ 手厳しいわね！」

桐生の笑みの混じった言葉にキュルケも笑顔になって答える。

桐生はルイズの方に視線を向ける。真面目な顔で絨毯の上を歩くアンリエッタを見つめている。

突然、ルイズの顔に驚きの表情が現れ、顔を赤らめながらうつとりとした表情へと変わった。

ルイズの視線を辿ると、羽根帽子を被った凛々しい貴族の男が見えた。鷲の頭と獅子の身体を持つ幻獣に跨がり堂々としている。どうやらルイズのタイプらしい。

ふと、隣に立っていたキュルケも静かになったのでどうしたのか見ると、ルイズ同様、羽根帽子の男に見とれている。

ああいう男がモテるのかと思いつつながら列から離れると、タバサが木の下に座って本を読んでいるのを見つけた。

「お前は行かないのか？」

桐生が声をかけると、タバサは視線を本から外さずに頷いた。

桐生も歓迎式典に興味がない為、タバサの隣で煙草を吹かし始めた。

無事に式典が終わりを告げ、夕食の時間になったので、生徒達は食堂へと向かいそれぞれの席に着いた。

相変わらず豪華な食事が並ぶテーブルは豪勢だった。桐生の前菜となるスープとパンも、最近ではシエスタがこつそりいい物に変えてくれている。

何時もの祈りが始まり、桐生もまた始祖や女王やらではなく、厨房のマルトー親父を筆頭にしたコック達に感謝を込めて合掌する。ふと、ここで何時もなら聞こえるルイズの祈りの声が聞こえないので思わず顔を向ける。

ルイズはどこかぼうつとした様な、呆けた顔のまま虚空を見つめていた。

みんなの祈りが終わりフォークやナイフの食器の音が響き始め、桐生もスープとパンを食べ始めた。

あつと言う間に平らげてしまい、ルイズに何か料理を取って貰おうと再度顔を上げると、桐生は一瞬自分の目を疑った。

ルイズはフォークを動かして料理を刺しては口に運ぶのだが、心此処に有らずと言った感じでポロポロとこぼしながら食べている。呆けた表情から美味しいのか不味いのかもわからない、はつきり言って下品な食べ方だった。

「ルイズ」

声を掛けるが、ルイズは此方に気付いてない。虚空を見つめながらまるでロボットの様にフォークを料理に刺しては口に運ぶ動きを続けている。

「……おい、ルイズー」



少し強めの口調で声を掛けるもやはりルイズは気付いていない。

桐生は舌打ちをして立ち上がり、ルイズに歩み寄ると、

「痛っ!?!」

突然ルイズのフォークを持つ手を叩いた。痛みを訴えるルイズの声と、フォークが食器に落ちたカチャンツ! という乾いた音が食堂に響き、みんなの視線がルイズに向かう。

「い、痛いわね! 何するーっ!?!」

叩かれた手をさすりながら桐生に顔を向けると文句を言おうと紡いだ言葉が引つ込められる。

桐生の目は怒りに染まっており、眉間に皺が寄った鋭い眼光がルイズの瞳を射抜いたのだ。

「いい加減な気持ちでフォークを扱うな。食べる時は食べる事に集中しろ。それが出来ないなら、とっとと部屋に戻れ。飯なんか食うな」

静かな口調だが、言葉から相当桐生が怒っているのが伝わってくる。

ルイズは一瞬生唾を飲んだ後、うなだれて、

「(ズ)めんなさい……」

と小さな声で呟いた。あのフーケの一件で怒られて以来、ルイズは桐生に叱られると

逆らえなくなつた事が増えた。それは桐生に対して恐怖心ではなく、子が親に対して抱く感情と同じものだった。

「いい子だ」

桐生はルイズの頭に手を乗せると、優しく頭を撫でてやる。それを皮切りに、食堂には再び活気が戻つた。

叱られた事でルイズも普段通りの食事を始め、それを満足そうに桐生は眺めていた。

食事を終え、部屋に戻つて着替えたルイズはどうにも落ち着きがない。突然枕を抱き締めながら立ち上がったかと思えば座り込み、また暫くしては立ち上がるのを繰り返している。明らかに挙動不審なルイズを桐生は椅子に座り、首を傾げながら眺めていた。

ふと、突然ドアがノックされた。

桐生とルイズの視線が、ドアへと向けられた。ノックは規則正しく、始めに長く二回、短く三回とされた。

ルイズの表情が変わり、ブラウスを羽織つて扉を開く。

扉の外には、真っ黒な頭巾を被つた少女が立っていた。少女は開かれた扉にそそくさ入り、後ろ手に扉を閉めた。

「……貴女は？」

ルイズが怪訝そうに言うのと同時に、桐生がポケットに手を突っ込み、メリケンサックを拳に嵌める。何時でも突撃出来る様、僅かに上体を前に出した。

少女は静かにと言わんばかりに口元に指をあてがうと、身体を包んでいる漆黒のマントから杖を取り出して軽く振るい、同時にルーンを唱える。すると、光の粉が部屋の中を舞った。

「これは……」

「探知ダイテクトマジック？」

桐生の驚きの眩きが続く様にルイズが眩く。

少女は静かに頷いた。

「どこに耳があり、目が光っているかわかりませんか」

光の粉はまるで粉雪の様にゆっくりと消え、どこにも目も耳もないのを確かめると、少女は頭巾を取った。

桐生はその顔に見覚えがあった。確か、この少女は……。

「姫殿下！」

ルイズが慌てて跪くのを見て、桐生も思い出した。そう、確かトリステイン王国王女、アンリエッタだ。

桐生はとりあえず椅子に座ったまま二人を見つめていた。

アンリエッタは頭巾で崩れた髪を梳く様にかき上げてから優しく微笑んだ。

「お久しぶりね、ルイズ・フランソワーズ」

ルイズが深々と頭を下げると、突然アンリエッタがルイズの身体を抱き締めた。

「ああ、ルイズ！ 懐かしいわ！」

「ひ、姫殿下、いけません！ この様な下賤な場所へお越しになるなんて……！」

ルイズは戸惑いの混じったかしこまった口調で告げた。

「ああ、ルイズ！ そんな堅苦しい行儀なんてやめてちょうだい！ 私と貴方は友達なのよ？」

「勿体無いお言葉です、姫殿下」

些か緊張の色を感じるルイズの声を聞きながら、桐生は二人の少女の包容を眺めていた。

「やめてったら、ルイズ！ ここには枢機卿も、お母様も、あの上辺だけの友達もいない、私の本当の友達の貴女しかいないのよ！ せめてこの場でくらい、あの頃のまままでいさせて……！」

「……姫様……」

ルイズは弱々しくアンリエッタの身体を抱き締め、懐かしき友人の感触を確かめる様に、徐々に強くアンリエッタの身体を抱き締めた。

「すまん、ルイズ……彼女とはどんな知り合いだ？」

二人の世界に浸っているのを邪魔するのも悪く思ったが、このままでは何時までも自分が宙ぶらりんな気がして問い掛ける。

「姫様がご幼少のみぎり、恐れ多くも遊び相手を務めさせて頂いたのよ」

そう懐かしそうに呟いてから、ルイズは身体を離し、アンリエッタに向き直った。

「でも光栄です。私の様な者を覚えていて下さったなんて……もう、お忘れになられておられたかと思いました」

「忘れたりなんかしないわ。あの頃は本当に毎日幸せだったもの……」

憂いの籠もった声が、ルイズの言葉に答えた。そんな声を漏らすアンリエッタの顔を、ルイズが心配そうに覗き込む。

「貴女が羨ましいわ……自由って素敵ね、ルイズ」

「何を仰いますの。貴女はお姫様ではありませんか」

ルイズの言葉に、アンリエッタは寂しそうに首を振って見せる。

「二国の姫なんて、捕らわれの鳥同然よ。飼い主の機嫌一つで何時でも飛び立たなければならぬのだから」

アンリエッタは窓の外に佇む、二つの月を眺めながら呟くと、ルイズの手を取って微笑んだ。

「結婚するのよ、私」

「それは……おめでとうございます」

アンリエッタの言葉から感じる悲しみに、ルイズは沈んだ声で答えた。

ふと、アンリエッタは椅子の上に座り、此方を眺めている桐生に気付いた。

「あら……ごめんなさい。もしかして、お邪魔だったかしら？」

「お邪魔？ 何故ですか？」

「だって、そのの彼、貴女の恋人でしょう？ 嫌だわ、私ったら……懐かしさにかまけて

とんだ粗相をしてしまったわね」

「はあ!? ち、違います！ あれは、私の使い魔です！ 恋人なんかじゃありません！」

ルイズは顔を真っ赤にしながら思いっきり首を振った。

「使い魔？」

アンリエッタは桐生をまじまじと見つめた。

「確かに、貴女の恋人にしてはかなりお年を召してらっしゃるとは思うけど……使い

魔って、人にしか見えませんか？」

「正真正銘、人間ですよ、お姫様」

アンリエッタの疑問に桐生が頭を下げて答える。

「そう、そうなのね、ルイズ。貴女は昔からどこか変わっていたけれども、相変わらずね」

「いえ……まあ」

ルイズが戸惑いがちに答えると、アンリエッタが深い溜め息を漏らした。

「姫様……何かあったのですか？」

「……いえ、ごめんなさい。何でもないわ……貴女に話しても、迷惑でしかないのに……私ってば」

「仰つて下さい。あんなに明るかった姫様が、そんな風に溜め息を漏らすなんて、何か悩みがあるのでしょうか？」

「……いえ、話せません。ごめんなさい、ルイズ。悩みがあるなんて、忘れてちょうだい」  
「いけません！ 私をお友達と呼んで下さったのは姫様です！ 友達を放っておくなんて、私には出来ません！ 仰つて下さい！」

ルイズの強い口調に、アンリエッタは嬉しそうに微笑みを浮かべた。

「私をまだお友達と呼んでくれるのね。嬉しいわ、ルイズ」

アンリエッタは決心した様に頷いてから、桐生に視線を向けた。

「外すか？」

桐生がそう言つて椅子から立ち上がろうとしたのを、アンリエッタが手で静止する。

「いえ、メイジにとつて使い魔は一心同体。席を外す理由はありません」

そして物悲しい調子で、アンリエッタは語り始めた。

「私は、ゲルマニアの皇帝の下に嫁ぐ事になったのですが……」  
「ゲルマニアですって！」

ゲルマニア嫌いのルイズが声を荒げた。

「あんな成り上がりの国なんかに！」

「そうね……でも、仕方がないの。同盟を結ぶ為ですから」

アンリエッタはハルケギニアの政治情勢をルイズに説明した。

アルビオンの貴族達が反乱を起こし、王室が敗れそうな事。反乱軍の次の狙いはトリステインである事。

それに対抗するには、ゲルマニアと同盟を結ぶしかない事。そして、その同盟を組むには、アンリエッタがゲルマニア皇帝に嫁ぐ事も。

「そんな事が……」

ルイズは沈んだ声で答えた。アンリエッタがその結婚を望んでないのは、口調からして明らかだったからだ。

「いいのよ、ルイズ。好きな殿方と結ばれるなんて、物心ついた時から諦めていたから」

「姫様……」

「アルビオンの貴族達は、当然ながらトリステインとゲルマニアの同盟を望んではいけません。矢は、一本ずつの方が折れやすいですから」



アンリエッタは憂いを込めて呟いた。

「ですから、今アルビオンの貴族達は、私とゲルマニア皇帝との婚姻の妨げになる材料を血眼で探しています」

アンリエッタの説明を聞きながら、桐生は此方の情勢がイマイチわからない為要領を得られない。しかし、この国に今一大事が訪れているのは、何となく把握してきた。

「もしかして、姫様はその材料に心当たりが……う？」

顔を蒼くして尋ねるルイズに、アンリエッタは両手で顔を覆う。

「おお、始祖ブリミルよ！ この愚かな姫をお許し下さい！」

「言つて！ 姫様！ 一体姫様の婚姻を妨げる材料とは何なのですか!?!」

ルイズがアンリエッタの肩を掴み、強い口調で問い詰める。アンリエッタは顔を俯かせたままポツリと呟いた。

「……私が以前したためた、一通の手紙です」

「手紙？」

「そうです。それがアルビオンの貴族の手に渡れば、すぐにゲルマニアに報告されるでしょう」

「その手紙には、一体何が？」

「……それは、言えません。ですが、手紙の内容を知れば、ゲルマニア皇帝は私を許さな

いでしよう。そうなればこの国は……破滅です」

力無く肩を震わせながら苦しそうに言葉を紡ぐアンリエッタの姿に、ルイズの胸は酷く痛んだ。

「姫様！ その手紙は何処にあるのです!?! この国を破滅に導いてしまおう、その手紙は!?!」

アンリエッタの身体がピクツと反応したかと思うと、重々しく首を振った。

「それが……手元にはないのです。実は、アルビオンにあるのです」

「アルビオン!?」と云う事は、もう既に敵の手に!?!」

「いえ……その手紙を持っているのは、今アルビオンの貴族達と骨肉の争いを繰り広げている、王家のウエールズ皇太子です」

「プリンス・オブ・ウエールズ? あの、凛々しき王子様が?」

ルイズの問いに頷いた後、アンリエッタは身体を仰け反らせ、ベッドに倒れ込んだ。

「ああ! 破滅です! 遅かれ早かれ、ウエールズ皇太子は反乱軍に敗れてしまえます! そうなればあの手紙は明るみに! そうなれば連盟は反故! たった一国であるアルビオンと対峙しなければなりません!」

絶望し叫ぶアンリエッタを見て、ルイズが息を飲んだ。

「では、姫様が私に頼みたい事と言うのは……」

「無理よ、ルイズ！ 考えてみれば、王家と反乱軍が戦を繰り広げる戦地に、貴女を送るなんて出来ないわ！ 危険過ぎる！」

「何を仰います！ 姫様の御為とあらば、このラ・ヴァリエール公爵家が三女、ルイズ・フランソワーズは地獄の釜だろうと、屍が歩く地獄だろうと向かいます！ 姫様とこのトリステインの危機を、見過ごす訳にはいきません！」

ルイズは再度跪き、恭しく頭を下げた。

「「土くれ」のフーケを捕らえたこの私めに、その一件、是非ともお任せ下さいますようお願い！」

「私の力になってくれると言うの!? ルイズ・フランソワーズ！ 懐かしきお友達！」

「勿論ですわ、姫様！」

ルイズがアンリエッタの手を優しく取って熱した声で言うと、アンリエッタの瞳からボロボロと涙が零れた。

「姫様！ このルイズ・フランソワーズ、は何時までも姫様のお友達であり、まったき理解者でございます！ 永久に誓った忠誠を、忘れ

たりはしません！」

「これで、これぞ誠の友情と忠誠です！ 私は貴女との友情を忘れません！ ルイズ・フランソワーズ！」

きつく抱き締め合う二人の少女を、桐生はただ黙って見ていた。今は、まだ。

「アルビオンに赴きウエールズ皇太子を探して、手紙を取り戻してくればいいのですかね？ 姫様」

「その通りです。「土くれ」のフーケを捕まえた貴女達なら、きつとこの困難な任務をやり遂げてくれると思います」

「一命に変えましても。急ぎの任務なのですか？」

「アルビオンの貴族達は、王党派を国の隅まで追い詰めていると聞いています。敗北も、時間の問題でしょう」

ルイズは深く頷いた。

「早速、明日の早朝に発ちます」

ルイズはそれだけ言うのと、さつきからずっと黙っている桐生に振り返った。

「カズマ、そう言う訳だけど、わかった？」

「お前とそこのお姫様の話で大体の事情はわかった」

「それなら話が早いわ。それじゃあ」

「ああ、そのアルビオンとやらに行くのはお断りだ」

ルイズの言葉を遮って桐生の放った一言は、ルイズとアンリエッタの心を強く抉った。

「何で……どうしてよ!? カズマー!」

桐生に歩み寄って怒りを露わにするルイズに、桐生は首を振る。

「戦場で危険ってわかってる所に、わざわざお前を連れて行く訳にはいかねえ」

「危険なのは承知しているし、命をかける覚悟だつてあるわ! それにこれは、この国の一大事なのよ!」

「関係ねえな。俺が守るのは「お前」であつて、この「国」じゃねえ。第一そこのお姫さんの尻拭いの為に、お前が使いに出されるつて事自体気に入らねえ」

桐生はアンリエッタを見てから再びルイズを見る。

桐生が冗談でこんな事を言っていない事は目でわかる。しかし、今回ばかりはルイズも引けない。友人でアンリエッタの頼みであり、この国の存亡がかかっているのだ。

「いい加減にしてカズマー! これはご主人様の命令よ! 私の使い魔なら」

「お前こそいい加減にしろ!」

「っ!」

苛立ちを隠せず怒鳴り散らすルイズを、机を強く叩いて桐生が怒鳴り返す。その気迫と声に、ルイズとアンリエッタの身体がビクツと跳ねる。

「命をかける覚悟がある? ふざけんじゃねえよ……戦争も殺し合いもロクに知らねえ餓鬼が、軽々しく口にするんじゃないやねえ!」

桐生がもつとも怒りを覚えたのは、ルイズのその一言だった。幾つもの死線をさまよひ、殺し合いが生む残酷さを知っている桐生にとって、ルイズからその様な一言は聞きたくなかった。

ルイズは暫く黙つた後、更に桐生に近付き瞳を真つ直ぐと見返す。その瞳には、迷いはなく、怯えも感じられなかった。

「確かに私は、あんたの言う通り、戦争の事はよくわからない。殺し合いだつて知りたいとも思わない。今のあんたの一言で、どれだけ私を心配してくれてるかは伝わったわ」でもね、とルイズは一旦瞳を閉じ、深呼吸をしてから力強く目を見開いた。

「私にとつて、姫様は全てなの！ 何よりも大切な、友達なの！ その姫様が、私を頼ってくれた！ 誰からも馬鹿にされてる、この私を！ 私はその想いに応えたい！」目をギユツと睨り、ルイズが桐生に深々と頭を下げ続ける。

「お願い、カズマ！ この任務は私一人じゃ達成出来ない！ あんたの力を私に貸して！」

ありつたけの思いを言葉に変えて、ルイズが桐生に懇願する。普通なら、使い魔に頭を下げる主人等、あり得ない光景ではあるが今のルイズはそんな事も気にする余裕はない。恥も外聞もなく、ただアンリエッタの為に、という思いだけで桐生に頭を下げていく。

桐生はそんなルイズの頭を見つめていた。

暫くの沈黙の後、桐生が一言ルイズに問い掛ける。

「絶対に無理はしない、退く時は退く……約束出来るか？」

フーケのゴーレムの時の一件を言っているのだろう。ルイズは頭を上げて、頷いて見せる。

「それが守れるなら、行ってやる。俺は、お前の使い魔だしな」

ルイズの頭を優しく撫でながら笑みを浮かべる。なんだかんだ、自分は本当に困った子供を見ると放っておけないタチらしい。

「ありがとう……カズマ……」

思いが届いた事に安堵したのか、ルイズの瞳に涙が溜まっていく。

二人の様子を眺めていたアンリエッタはゆっくりと桐生に近付くと微笑みかけた。

「私の大切なお友達を、宜しくお願いします」

そう言つて、左手の甲を差し出すアンリエッタに、ルイズが慌てた様に言う。

「姫様！ 使い魔にお手を許すなど……！」

「いいえ。例え使い魔であったとしても、忠誠には報いなければなりません」

その左手を見て桐生は昔観た映画を思い出す。確か、ご婦人に手をこの様に差し出した時、手の甲にキスするのだ。それが忠誠の証だと、映画の中で言っていた様な気が

する。

桐生は椅子から立ち上がって跪き、アンリエッタの左手を取ると、そつと手を戻させた。

「えっ?」

今までにない行動を取られ、アンリエッタは戸惑いに声を漏らす。

「上に立つ人間なら、忠誠を誓っているかを見極めてから手を差し出した方がいい。安易に差し出すと、付け入れられかねないからな」

そう言つて、桐生は立ち上がり、優しい微笑みを浮かべて見せた。

と、突然ドアが開かれ、思わず三人とも身構えるが、入ってきた人物に目が点になる。「カズマ、やはり君は素晴らしい男だ!」

入ってきたのは、ギーシュだった。薔薇の造花を指先で弄りながら部屋に入るなり、アンリエッタに一礼した。

「姫殿下! お話は聞かせていただきました! このギーシュ・ド・グラモンも、姫殿下のお力になりたく存じ上げます!」

「あんだ! 今までの話聞いてたの!」

ディテクトマジックにも引つかからぬ様話を聞くとは、ストーカーならかなりの強者になりかねないギーシュにルイズが額を手で押さえながら言う。



「見目麗しい姫殿下の姿を追っていたら君の部屋に入って行ったもんだからね。立ち聞きさせて貰ったよ」

黒い頭巾にマントまで羽織った変装まで見抜く所を見ると、このギーシュ、やはりただ者ではない。主に危ない方向で。

しかし、ギーシュの名を聞いたアンリエッタが首を傾げてみせた。

「グラモン？ あの、グラモン元帥の？」

「息子です、姫殿下！」

アンリエッタの疑問にギーシュは恭しく頭を下げる。

「では、貴方も私の力になってくださるのですね？ 宜しくお願いします、ギーシュさん

！」

アンリエッタの優しい微笑みにギーシュは何やら喚きながら部屋から飛び出していった。

「大丈夫か、あいつ？」

少し不安を覚えながらも、桐生は早速デルフリンガーを掴んで点検を始める。

そんな二人を放っておいて、ルイズがアンリエッタに向き直る。

「では明日の朝、アルビオンに向かって出発します」

「ウェールズ皇太子はアルビオンのニューカッスル付近に陣を構えていると聞いてま

す」

「了解しました。以前、姉達とアルビオンへ遠征に行つた事がありますので地理にはそれなりに自信がございます」

「旅は危険に満ちています。アルビオンの貴族達は貴女達を止めようと躍起になつてくるでしょう」

アンリエッタはマントの中から、封蠟がなされ花押かおうが捺おされた手紙をルイズに手渡した。

「ウェールズ皇太子にお会いしたら、この手紙を渡して下さい。すぐに件の手紙を返してくれるでしょう」

そしてアンリエッタは、右手の薬指から指輪を引き抜いてルイズに手渡す。

「母君から授かつた「水のルビー」です。御守りですが、もしもお金に困つたら売り払い、旅賃に当ててください」

ルイズは今一度跪き、深々と頭を下げた。

「この任務には、トリスティンの未来がかかっています。母君の指輪が、アルビオンの猛き風から、貴女方を守ります様に」

## 第11話

翌日の早朝、朝靄が立ちこめる中、桐生とギーシュは馬に鞍を付けていた。桐生の腰には、ベルトに紐で括り付けられたデルフリンガーが揺れている。

ルイズもギーシュも普段と変わらぬ制服姿だが、二人とも乗馬用のブーツを履いていた。どうやらかなりの距離を走るらしい。

そんな風に出発の準備をしていると、ギーシュが桐生に近付いてきた。

「お願いがあるのだが……」

「ん？ どうした？」

声をかけてきたギーシュに振り返り、桐生は馬の鞍をつける動作を止めて尋ねる。

「僕の使い魔も連れて行きたいんだ」

「お前も使い魔がいるのか？」

「いるさ。当たり前だろう？」

桐生とルイズは互いに顔を見合わせてから頷いて見せた。

「なら、連れて行きやあいじゃねえか。どこにしているんだ？」

「ハイハイ」

ギーシュが自分の足下を指差した。しかし、そこには草の覆い茂った地面しか見えな  
い。

「いないじゃないの」

ルイズが乗馬鞭で肩を叩きながら溜め息混じりにすました顔で言う。

ギーシュはにっと笑うと、片足で地面をトンつと叩いた。するとモコモコと地面が盛り上がり、ボコリと茶色い大きな生き物が顔を出した。

桐生とルイズが突然の事に驚いていると、ギーシュは膝を突いてその生き物を抱き締め  
めた。

「ヴェルダンデー！ 今日も可愛いよ、ヴェルダンデー！」

一瞬状況の読み込めなかった桐生は頬を掻きながらギーシュに問い掛ける。

「それが……お前の使い魔か？」

「そうとも。僕の可愛い使い魔、ヴェルダンデーだ」

「あなたの使い魔って……ジャイアントモールだったの？」

ルイズが変な物を見る目でギーシュを見ながら問い掛ける。

ボコボコと地面から姿を現したのは、巨大なモグラだった。大きさは小熊程ある。

「そうさ。ああヴェルダンデー、君はいつ見ても可愛いね」

ギーシュはヴェルダンデーと言う巨大モグラを抱き締めて頬摺りしている。まるで小

さな子供がプレゼントに貰ったぬいぐるみにする様に。

「ねえ、ギーシユ……駄目よ。その生き物は地面を潜って行くんでしょ？」

「そうさ。ヴェルダンデはモグラだからね」

「そんなの連れていける訳ないじゃない。私達、馬で行くのよ」

ルイズは呆れながら困った表情を浮かべて言った。

「大丈夫さ。ヴェルダンデは地面の中を泳ぐ様に掘り進むんだ。馬の速度くらいなんて事ないさ」

そうだそうだとばかりにヴェルダンデが鼻をモグモグ動かして抗議してくる。

「あのねえ……私達これからアルピオンに行くのよ？ 地面を掘り進む生き物なんて、連れては行けないわ」

ルイズの一言にやたらと大袈裟に衝撃を受けた様に身体を仰け反らせてから、ギーシユは膝を再び突いてヴェルダンデに抱き付く。

「お別れなんて……そんなの辛過ぎるよ、ヴェルダンデ……」

抱き付くギーシユを抱き締め返そうとしたヴェルダンデが、突然動きを止めて鼻をひくつかせた。そしてギーシユから離れて、ノシノシとルイズに近寄って行く。

「な、何よ、このモグラ……」

ルイズはヴェルダンデの巨体に気圧された様に後退る。と、ヴェルダンデはいきなり

ルイズを押し倒して鼻先で身体をまさぐり始めた。

「ちよ、ちよつと、何す、きやあ！ どこ触ってんのよ！」

ルイズは身体を鼻でつつかれて地面にのた打ち回る。なんとかヴェルダンデをどかせようと抵抗するものの、その巨体の体重が邪魔をして上手く行かないらしい。

桐生とギーシュが呆気に取られていると、ヴェルダンデはルイズの右手の薬指に嵌められた指輪のルビーを見つけると、そこに鼻を擦り付けた。

「この、無礼なモグラね！ 姫様から頂いた指輪に鼻なんか押し付けないでよ！」

ヴェルダンデの行動の意図に気付いてギーシュが納得した様に頷いた。

「なるほど、指輪か……ヴェルダンデは宝石が好きだからね」

「嫌なモグラだな……」

「嫌などとは言わないでくれたまえ。ヴェルダンデは貴重な宝石や鉱石を僕の為に地面の中から見つけてくれるんだ。「土」系統のメイジの僕にとってはこの上ない協力者さ」  
得意気に話すギーシュに桐生は額に手をあてがいがら溜め息を漏らす。そんな二人の話を聞いていたルイズが怒声を上げる。

「ちよつと！ 喋ってないで助けなさいよ！」

「あ、ああ……」

ルイズの声にハツとした様に声を漏らしてから桐生がヴェルダンデに近付いたその

時。

突然、突風が吹き付けルイズの上に乗っかっていたヴェルダンデを吹き飛ばした。

「誰だ!？」

自分の使い魔を吹き飛ばされて逆上したギーシュが声を張り上げた。

ギーシュの声に応える様に、朝靄の中から一人の長身の男が現れた。羽根帽子を被ったその姿に、桐生は見覚えがあった。

「貴様! 僕のヴェルダンデに何をするんだ!？」

ギーシュは薔薇の造花を取り出したが、まるで居合い抜きに男が腰に刺さっている杖を引き抜くと造花は碎け散り、赤い花びらが宙を舞った。

「待ってくれ、僕は敵じゃない。姫殿下の命により、君達の同行を頼まれた者さ。隠密の任務だが、君達だけでは心許ないらしい」

長身の男は杖を腰に収め、羽根帽子を取ると一礼した。

「女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ」

文句を言おうと開きかけたギーシュの口がゆっくり閉じていく。魔法衛士隊は貴族達にとつて憧れの的だ。相手が悪過ぎる。

落ち込んだ様にうなだれるギーシュを見て、ワルドはギーシュの肩を優しく叩いた。

「済まないね。自分の婚約者がモグラに襲われているのを見てはジツとしてられなくて

ね」

ヴェルダンデがいなくなった事で立ち上がり、乱れた制服を直してからルイズが声を漏らした。

「ワルド、様……」

「久し振りだね！ ルイズ！ 僕のルイズ！」

ワルドは人懐っこい笑みを浮かべてルイズに駆け寄り、その小さな身体を抱え上げた。その瞬間、桐生が眉をひそめているのをルイズは見逃さなかった。

「お久し振りでございます」

桐生の反応は気になったものの、ルイズは頬を赤らめてされるがままワルドに抱きかかえられる。

「相変わらず軽いな、君は！ まるで羽根の様だ！」

「ワ、ワルド様……お恥ずかしいですわ」

「おっと、失礼。つい懐かしさにかまけてしまったよ。ルイズ、彼等を紹介してくれないかい？」

桐生とギーシュの視線に気付いたワルドはルイズを地面に下ろすと、羽根帽子のつばを摘んで整えた。

「はい。あの……ギーシュ・ド・グラモンと、使い魔のカズマです」



ルイズが交互に指差して言う、ギーシュは深々と頭を下げ、桐生は腕を組んで見せた。

「君が……失礼、どうやら僕よりも年上の方の様だ。貴方がルイズの使い魔ですか……人とは思わなかった」

ワルドは気さくな感じで桐生に近付いた。

「僕の婚約者がお世話になっていきます」

「……ああ」

ワルドの差し出した手を握り締めながら、桐生は頷いて見せた。

「しかし、あの「土くれ」のフーケを捕らえた貴方が味方についてくれるなら、今回の任務はきつと上手く行くでしょうな」

「だと、いいがな……」

気さくに話し掛けるワルドとは対照的に、桐生はどこか素っ気ない態度だ。ルイズは思わず内心ハラハラする。別に、桐生にワルドとそこまで仲良くして欲しいとは思わない。しかし、今の桐生はあまりにも露骨に素っ気ないのが気になった。何と言うか……桐生らしくない様に見える。

ワルドが桐生との挨拶を終えて口笛を吹くと、朝靄の中からグリフォンが現れた。

ワルドはグリフォンに颯爽と跨がると、ルイズに手招きした。

「おいで、ルイズ」

ルイズは顔を真っ赤に染めてから俯き、両手の指先を摺り合わせてモジモジし始めた。チラリと横目で桐生を見ると、自分の馬に跨がっていた。その光景が、ルイズには何だか面白くなかった。

何よ……ワルド様が来た瞬間に素っ気なくしちやうし、そうかと思えば私の事なんてなんともないみたいな様子だし……。

そこでルイズはワルドにも桐生にも、当然ながらギーシュにも気付かれない様にハツとした。

ひよつとして……カズマ、嫉妬してるの？

再度チラリと桐生の方を見ると、馬に跨がりながら此方を見ているのが見える。

ルイズは迷った様に暫くモジモジした後、ワルドの手を取って抱きかかえられた。

「では、諸君！ 出発だ！」

ワルドが掛け声を上げると、グリフォンが駆け出した。その後を追う様に桐生とギーシュの馬も駆け出した。

出発する一行を、アンリエッタが学園長室の窓から見つめていた。胸元でしなやかな指を絡めて手を合わせている。

「始祖ブリミルよ、彼女達に神のご加護を……」

祈るアンリエッタの隣、自分の机の椅子に座つてオスマンが分厚い本に目を落としていた。

アンリエッタは一向に窓に視線をやらないオスマンに振り返つた。

「見送らないのですか？ オールド・オスマン」

「ほほ、姫、見ての通りこの老いぼれは今読書に夢中でしてな」

オスマンがそう返すと、学園長室の扉が強く叩かれた。オスマンは指先でページを捲りながら入りなさい、と入室の許可を口にした。

勢い良く開かれた扉からコルベールが飛び込んできた。禿げ上がった頭が汗に濡れて輝いている。

「いいいいいい、一大事ですよ！ オールド・オスマン！」

「君は私の部屋に落ち着いて入る時はないのかね？ ミスタ・コルベール」

「私が来る時は一大事の報告が多いせいです！ それより城からの知らせですよ！ なんと、あのフーケがチエルノボグの牢獄から脱獄したそうです！」

「ほお……」

オスマンは本から顔を離してコルベールの顔を見た。

「門番の話では、さる貴族を名乗る怪しい人物に「風」の魔法で気絶させられたそうです

！ 魔法衛士隊が、王女のお供で出払っている時を狙って脱獄の手引きをしたのですぞ！  
！ これはつまり、城下に裏切り者がいると言う事です！ これはどう考えても一大事  
でしょう！」

コルベールの言葉に、アンリエッタの顔が蒼白になった。

そんなアンリエッタの内情を知ったのか、オスマンは手を叩いてコルベールに退出を促した。

「わかったわかった。それについてはまた後で聞こうではないか」

まだ何か言いたそうだったコルベールを退出させると、アンリエッタは窓に手をつき嘆かわしいとばかりに深い溜め息を漏らした。

「城下に裏切り者がいるなんて……間違いありません！ アルビオン貴族の暗躍です！」

「そうかもしれませんな」

指先を軽く舐めて次のページを捲りながら言うオスマンに、アンリエッタは呆れの混じった視線を向けた。

「この国の、トリステインの未来が掛かっているのですよ？ なぜそこまで落ち着いていられるのです？」

「ならば、慌てれば状況は良くなりますかな？」

オスマンの言葉に、アンリエッタはグツと言葉を詰まらせる。

オスマンは本を閉じてアンリエッタに顔を向けると優しく微笑んだ。

「既に杖は振られました。私達に出来るのは、彼等の旅の無事と作戦の成功を祈るのみ。違いますか?」

「それは、そうですが……」

「なに、彼なら道中でどんな困難があつたとしても、乗り越えてくれますよ」

「彼、とは? あのギーシュと言うメイジ? それともワルド子爵?」

アンリエッタの質問に、オスマンはゆつくりと首を振つて見せた。

「ではあの、ルイズの使い魔の男性が? まさか! 彼はただの平民ではありませんか!」

「姫は、始祖ブリミルの伝説をご存知ですか?」

「は? はあ……まあ、通り一遍の事なら」

「では、「ガンダールヴ」のくだりは?」

「始祖ブリミルが用いた、最強の使い魔の事でしょう? まさか……彼がそうだと?」

オスマンは喋りすぎたと心の中で後悔した。この姫殿下を疑っている訳ではないが、王室の間には桐生が「ガンダールヴ」である事を隠しておかなければならないと感じていたからだ。

アンリエッタの言う通り、「ガンダールヴ」は伝説上の使い魔のなかでも最強の部類に入る。そんな兵器を手に入れたら王室の暇人共はどこか構わず戦争をふっかけるに違いない。

「ん、んんっ！　ともかく、彼は「ガンダールヴ」並みの使い手と、こう思つとる訳です。何せ、彼は異世界からきた男ですからな」

「異世界？」

「そうですじゃ。ハルケギニアではないどこか。「ここ」ではない、どこか。そこからやってきた彼ならばきつと大丈夫と、この老いぼれは信じてるんですよ」

「そんな世界があるのですか……」

アンリエッタは窓から、遙か彼方まで続く空を眺め、そして微笑んだ。

「ならば……祈りましょう。異世界から吹く風に」

アンリエッタの言葉につこりと笑つて頷いたオスマンだったが、再び本を開くと険しい表情に変わった。

「ありや……どこまで読んだかな？　ええい、折り目でもつけておけば良かった……！」

港町ラ・ロシエールはトリスティンから離れる事早馬で二日程の所にあるアルピオンへの玄関口だ。港町と言われているが、狭い峡谷の間に設けられた、小さな街である。

狭い山道を挟む様にそそり立つ崖の一枚岩を穿ち、旅籠や商店が並んでいる。並ぶ建物は全て同じ岩から削り出されたものであり、「土」系統のスクウエアメイジ達の努力が窺える。

そんな商店の並ぶ通りの裏路地に、一軒の酒場があつた。入り口は羽根扉で、酒樽の形をした看板には「金の酒樽亭」と書かれている。

しかし、店名の割には小汚く、客も傭兵やならず者達でいっぱいだ。

店の所々では酔いつぶれて机に突つ伏している者、殴り合いの喧嘩をしてる者、杯を重ねている者等様々だが活気があつた。

そんな店内に、一際武装が目立つ男達があつた。十数人の男達はテーブルをこれでもかと囲つて酒を呷あおっている。

その男達は、アルビオンの王党派についていた傭兵達だつた。内戦の中で自分達の主人に見切りをつけ、ラ・ロシエールまで撤退して来たのだ。

「しっかしよお、アルビオンの王党派も大した野郎がいねえなあ……さつきと切り上げて良かったぜ」

「全くだ。せつかく守つても、負けの分かりきつた野郎につくなんざ、やってられねえ」「我等の自由に乾杯っ！ てか！」

そう笑い、乾杯を繰り返していると、羽根扉がかたんと開き、長身の女が一人酒場に

入つて来た。目深に被つたフードのせいで口元しか見えないが、顎の線は細く、瑞々しい唇は若さと美貌を窺わせる。更に身体全体を包む様に羽織つたローブから覗くラインがプロポーションの良さを物語っていた。こんな小汚い酒場に現れた女性に店内の男達の視線は一気に集まり、中には口笛を吹く者もいた。

しかし、女はそんな視線等気にもせず、カウンターに腰掛けてワインと肉料理を注文した。酒と料理が運ばれてくると、女は給士に金貨を手渡した。

「こ、こんなに？ よ、よろしいんで？」

「泊まり賃込みでね。部屋は空いてるかしら？」

上品だが、街の垢を漂わせる物言いで女が言うと、給士は頷いて去つていった。

幾人かの男が目配せをすると、女を囲む様に席に近付いた。

「お嬢さん、こんな店に一人で入るなんざ感心しねえなあ」

「そうだけ。おつかねえ連中もいるからな。俺達が守つてやるよ」

女は男達の言葉に返事をしない。それに構わず下卑た笑いを浮かべて一人の男が女のフードを持ち上げた。

女は、かなりの美人だった。切れ長の目に細く高い鼻筋。その女は、「土くれ」のフーケだった。

「ヒュウツ！ こりや上玉だ。見ろよ、肌が象牙みてえじゃねえか」



男が口笛を吹いてフーケの顎を持ち上げた。が、その手はぴしゃりと叩かれ、はねのけられる。もう一人の男がフーケに近付き、その白く滑らかな頬にナイフの刃を当てる。

「何の真似かしら？」

「心配すんな、脅すだけだ。こんな綺麗な肌に傷付けちゃあ、楽しみも減るからな。男を漁りに来たんだろ？ 俺達が相手してやるよ」

ナイフに物怖じもせずフーケは小さく笑うと、身体を素早く捻り杖を引き抜き、一瞬で呪文を唱えた。

突然のフーケの動きに後退った男の手に持たれていたナイフがただの土くれに変わり、ボロボロと床に落ちていく。

「き、貴様……」

男達は意気込むも一歩、また一歩と後退った。マントを着けていない為、メイジと気付かなかったのである。

「私はメイジだけど、貴族ではないわ。それより、あんた達傭兵でしょ？」

男達は呆気に取られて顔を見合わせた。とりあえず、貴族でない事に安心してた。もし貴族だったら、今頃みんな命が無くなっていただろう。

「そ、そうだが……あんたは？」

「誰だつて良いじゃない。とにかく、あんた達を雇いたいだよ」  
「俺達を雇う？」

俺達は当惑した顔でフーケを見詰めた。

「……何よ？ 傭兵を雇うのがそんなにおかしいの？」

「そ、そうじゃねえけど……あんた、金はあるんだろうな？」

フーケは溜め息を漏らした後、金貨の詰まった袋をテーブルに投げ捨てた。中身を確認した男が笑みを浮かべる。

「こりやいい！ エキュー金貨だ！」

そんな風にはしやぐ男達をフーケが見ていると、羽根扉が開いて白い仮面を着けてマントを羽織った男が入って来た。フーケを脱獄させた貴族だ。

「あら、早かったわね」

フーケの声に傭兵の男達も入って来た男に視線を向ける。

「連中が出発した」

「こつちもあんたに言われた通り、人を雇ったよ」

白い仮面の男は、フーケに雇われた男達を見回した。

「貴様等、ここに来る前はどこに雇われていた？」

白い仮面の男の質問に、男達は薄ら笑いを浮かべた。

「先月までアルビオンの王党派にさ」

「だが負ける様な奴にやあいつまでもついてらんなかったんでね」

傭兵達が笑うと、白い仮面の男も笑った。

「金は言い値を払ってやる。だが、忘れるな……俺は甘つちよろい王様とは違う。逃げ出したら、殺す」

白い仮面の男の言いように、冗談ではないのが伝わり傭兵達は生唾を飲んだ。

魔法学園を出発させてからワールドはグリフォンを疾駆させっぱなしだった。桐生とギーシユは途中の駅で二回馬を交換せざる得なかったが、ワールドのグリフォンは疲れ知らずに走り続けている。乗り手に似てタフな様だ。

「ちよつとペースが早くない？」

抱かれる様な格好でワールドの前に跨がったルイズが砕けた口調でワールドに言う。雑談を交わすうちに昔の口調に戻して欲しいとワールドに頼まれたからだ。

「カズマ……はまだ大丈夫そうだけど、ギーシユはへばっているわ」

ワールドは後ろに振り向いた。桐生はまだ姿勢を整えて手綱を握っていたが、表情から流石に疲れが出ているのが窺える。ギーシユは馬にもたれ掛かる様に手綱にしがみついている。今度は馬よりも先に二人がへばってしまいそうだ。

「ラ・ロシエールの港町までは止まらずに行きたいのだがね……」

「無理よ、普通なら馬で二日の場所なのよ？」

「へばったなら、置いていけばいいさ」

「そう言う訳にはいかないわ」

「どうしてだい？」

ワルドの質問に、ルイズは困った様に言う。

「だって……仲間じゃない。それに、使い魔を置いていくなんて、メイジのする事じゃないわ」

「やけにあの二人の肩を持つね。どちらかが……いや、年齢的にカズマ殿は考え難いが、君の恋人かい？」

「こ、恋人なんかじゃないわ！」

ワルドの笑った口調の質問にルイズは顔を赤らめて首を振って見せた。

「そうか……良かったよ。婚約者に恋人がいるなんて知ったら、僕はショックで死んでしまふよ」

そう言いながらもワルドは笑っている。

「お、親が決めた事じゃない」

「おや？ 僕の小さなルイズ！ 君は僕の事が嫌いになったのかい？」

ワルドは昔の様に、おどけた口調で言った。

「もう小さくないわ、失礼ね」

「僕にとつては未だに小さな女の子だよ」

ルイズは頬を膨らませて抗議しながら、先日見た夢を思い出していた。

生まれ故郷のラ・ヴァリエーリの屋敷の中庭。忘れ去られた池に浮かぶ小船。幼い頃、そこで拗ねていると、いつもワルドが迎えに来てくれた。

親同士が決めた結婚、幼い頃の約束、婚約……。

まだその意味がわからなかったあの頃、ただ、憧れの人とずっと一緒に居られる。それがなんとなく嬉しかった。

今なら、その意味が分かる。結婚するのだ、と。

「嫌いな訳、ないじゃない」

「良かった。じゃあ好きなんだね?」

ワルドは手綱を握る手でルイズの肩を抱いた。

「僕はずっと君の事を忘れなかったよ。僕の父が戦死し、母も早くに亡くした僕にとつて、君の存在はとても大きく力になってくれたからね。だから爵位と領地を相続してすぐに街を出た。立派な貴族になりたくてね」

「どつして?」

「君と婚約した時から決めていたからさ。立派な貴族になって、君を迎えに行くからね」  
ワルドは優しい微笑みを浮かべて言った。

ルイズは顔を赤らめて顔を背けた。

ワルドの事は、あの夢を見るまで忘れていた。ルイズにとってワルドは婚約者と言うより、憧れの王子様という存在だったのだ。成長していくに連れ、婚約の意味を知れば知る程、まるで夢物語の様な、他人事の様にししか感じられなかった。

だから、夢を見てすぐにワルドが現れた時、戸惑いが身体を駆け巡った。思い出が現実に来てきて、どうして良いかわからなかったから。

「姫殿下には申し訳ないが、今回の旅はいい機会さ」

ワルドは落ち着いた口調で言った。

「君は、まだ久し振りの僕に戸惑っているのだろう。此方もなかなか会いに行けなかったしね。でもこうして一緒に旅を続ければ、またあの頃の懐かしい気持ちを思い出してくれると信じているよ」

ルイズは思う。ワルドの事が、本当に好きなのか、どうか。嫌いではない。だが、憧れの感情が好きに繋がっているかは疑問だった。

ルイズはそつと後ろに振り振り返り桐生を見た。

手綱を握り締め、駆ける馬をなんとか抑えながら跨がる桐生は、自分とワルドの婚約

をどう思うのだろうか。

ぐったりした様に馬の首にもたれ掛かりながら、ギーシュは隣を走る桐生に声を掛けた。

「もう半日以上も走りっぱなしだ。魔法衛士隊の連中も、君も、化け物か？」

「さあな」

桐生は疲れた声で答えながらも、馬の上で姿勢が整っていた。

しかし、馬に長時間跨がっているのがこんなにも疲労するとは予想外だった。馬の一步一步の荒々しい足取りの揺れに振り落とされぬ様手綱を握って体勢を整えるのは思いの外神経と体力を使う。少しでも気を抜けば、ギーシュの様に馬にもたれ掛かってしまいそうだった。

「時にカズマ……ちよつと聞きたいんだけど」

「なんだ？」

ギーシュの問い掛けに、やや苛立った口調で聞き返す桐生。神経を使っている為顔は前を走るグリフォンにむけられたままだ。

「君はどうにもあのワルド子爵が現れてから顔が険しいんだが……彼が気に入らないのかね？」

「……さあな」

ギーシュの質問に静かな口調で桐生が返すと、ギーシュの顔に笑みが浮かび始めた。「まさか、彼に嫉妬しているのか？ 自分の主人が取られたと。はは、カズマ！ 君もちゃんとそつちの方にも男らしい所があるんだな！」

力なく笑つてからかうギーシュに桐生は答えない。ギーシュも、あまり無茶なからかいをし過ぎて後で桐生にどやされては堪らないと感じてそれ以上は言うのを止めておいた。

「嫉妬、か……」

ギーシュに聞こえぬ様に、桐生は静かに言った。

「そんな単純な感情なら、もっと楽なんだがな……」

馬を何度も替えて飛ばしたので、桐生達はその比の夜にラ・ロシエールの入り口に着いた。桐生は辺りを見回しながら怪訝そうに眉をひそめた。途中から妙だとは思っていたか、何故港町に向かつていたのにこんな峡谷の山道に来ているのか。

「港町と聞いたのに、何故山なんだ？」

桐生の眩きに、ギーシュが呆れた様に首を振る。

「カズマ、君はアルピオンを知らないのか？」



疲れはあるもののこれで一息つけると言う安堵からギーシユは饒舌になっていた。

「ああ、知らん」

「まさか!」

ギーシユは高らかに笑ったが、桐生は表情を変えない。

「この常識と俺の常識は違うんでな」

そんな会話をしていると、突然桐生達の跨がった馬目掛けて崖の上から松明が何本も投げ込まれた。

「な、何だ!」

ギーシユの怒鳴り声を上げたのと同時に、戦の訓練を受けていない馬はメラメラと燃え上がる松明の灯りに驚き、前足を高々と上げて桐生とギーシユが振り落とされた。そこを狙って何本もの矢が夜風を切り裂いて飛んでくる。

「き、奇襲だ!」

ギーシユの喚き声の後、トスツと軽い音を立てて矢が地面に突き刺さる。

桐生が崖の上を見ると、無数の矢が桐生とギーシユ目掛けて放たれた。

「ちっ! ギーシユ! お前のマントを貸せ!」

「ま、マント!?!」

「早くしろ!」

桐生に怒鳴られ、ギーシユは引き剥がす様に自分が着けていたマントを取って桐生差し出す。するとギーシユの手首を掴み、ギーシユごと引き寄せてマントをひったくつてから自分の後ろにその細い身体を放り投げる桐生。

二人目掛けて降り注ぐ無数の矢にギーシユはもう駄目だと目をギュツと瞑る。

桐生はジツと矢を見つめて十分に引き寄せると、

「おおおっ！」

雄叫びを上げながら思いっきりマントを振るつた。すると、矢尻がマントを貫くのと同時に絡まり、二人のいる場所だけ矢の被害が無かった。

「か、カズマー！」

「立て、ギーシユ！ ちんたらしてたら殺られるぞ！」

助かった事に安堵した様な声を漏らすギーシユを怒鳴りつけてから、桐生はデルFRINGERを引き抜いた。

「いよおっ、相棒！ 寂しかったぜえ！ ずっと鞘に収まり」

「大丈夫か!？」

引き抜かれ上機嫌に語るデルFRINGERの言葉を遮ってワルドが二人に叫ぶ。

桐生はワルドに頷いてから再度崖の上を見た。今度は矢が飛んでこない。

「夜盗か山賊の類か？」

ワルドが呟くと、ルイズがハツとした。

「もしかしたら、アルビオンの貴族の仕業かも……」

「いや、貴族なら弓を使わないだろう」

その時、ばっさばっさと力強く羽ばたく羽根音が聞こえた。ワルド以外は、その音に聞き覚えがあった。

崖の上から、男達の喚き声が上がった。どうやら頭上から何かが襲いかかって来たらしい。

崖の上に突然小さな竜巻が巻き起こり、男達を吹き飛ばした。

「あれは……「風」の呪文!？」

ルイズが叫び声を上げると、ガラガラと崖の上から男達が転がり落ちてきた。男達は地面に身体を強く打ち、呻きながらのた打ち回っている。

頭上に、月をバツクに見慣れた幻獣が姿を現した。それを見てルイズが声を上げる。

「シルフィード!」

それは、タバサのウィンドドラゴンだった。地面に降り立つと、赤い髪の少女がウィンドドラゴンから飛び降りて、優雅に髪をかき上げた。

「お待たせ」

ルイズはグリフォンから飛び降りると、キュルケに怒鳴った。

「お待たせじゃないわよ！ なにしに來たのよ！」

「いきなりご挨拶ね、ヴァリエール。助けに來てあげたんじゃない。朝方、窓からあんた達が馬に乗つて出掛けたから急いでタバサを叩き起こしてきたのよ」

キュルケが指差す方向には、パジャマ姿でウインドドラゴンに乗っているタバサがいた。本当に叩き起こされて着替える間もなかつたらしい。しかし、タバサは気にした様子もなく、相変わらず本のページを捲っている。

「あのねえ、ツエルプスト……これはお忍びなのよ？」

「あら、そうなの？ ならそう言いなさいよ。言わなきゃわからないじゃない。とにかく、感謝しなさいよね。あんた達に襲いかかった奴等を捕まえたんだから」

キュルケは倒れた男達を指差した。

男達は先程まで痛みに耐えながらルイズ達を罵倒していたが、今はギーシユの尋問を受けて静かにしていた。

ルイズは腕を組んでキュルケを睨み付けた。

「勘違いしないでよね、ヴァリエール。貴女を助けたわけじゃないの。ねえ？」

キュルケは色つぽい仕草でワルドににじり寄った。

「お髭が素敵ね。貴方、情熱はご存知？」

ワルドは苦笑を浮かべると、キュルケを左手で優しく押しやった。

「あらん？」

「助けも、君の好意も嬉しいが、それ以上は近寄らないでくれたまえ。僕の婚約者に、いらん誤解を招きたくないのでね」

そう言つて、ワルドはルイズに微笑みかけた。ルイズの頬が赤く染まる。

「なあに？ あんたの婚約者だったの？」

キュルケがつまらなそうに言うと、ワルドが頷いた。

キュルケはつまらなそうに溜め息を漏らすと、桐生に視線を向けた。

桐生は、ギーシュのマントに突き刺さった矢を引き抜いていた。

「本当はね、ダーリンが心配だったのよ？」

キュルケが後ろから抱きつくと、桐生は振り向いて苦笑を浮かべながらキュルケの頭を撫でた。

「そういう事は、嘘でも最初に言える様になった相手に言うんだな」

「んっもう！ 本当なのにい……」

言いながらも嬉しそうに頭を撫でられて笑うキュルケに、ルイズは唇を噛んで怒鳴ろうとするも、ワルドに優しく肩を掴まれてしぶしぶ止めた。

暫くして、尋問を終えたギーシュがワルドに近付いた。

「どうやら、物取りが目当ての夜盗の様です」

「ならば、捨て置いても問題ないな」

ワルドは颯爽とグリフォンに跨がり、ルイズを抱き上げた。

「今夜はラ・ロシエールの宿に止まり、朝一番の便でアルビオンに向かおう」

そう言つて出発した一行の後ろで、ギーシュが馬に跨がつたまま、桐生に詰め寄つた。  
「カズマー！ 僕のマント、どうしてくれるんだ!?!」

矢が突き刺さつたマントは当然ながら穴だらけでポロポロだ。桐生は困つた表情で頬を搔いた。

「悪かつた。だが、そのお陰で助かつたんだ。帰つたら、ルイズに請求してくれ」

まだ文句がある様にブツブツ呟くギーシュを横目に、まだ幾分か遠くにあるラ・ロシエールの灯りが妖しく光つているのを見ながら、桐生はアルビオンとはどんな国なのかと想いを馳せた。

## 第12話

ラ・ロシエールに到着した一行は、この港町一番の宿「女神の杵」亭に泊まる事となった。

宿に着くなり、「棧橋」への乗船の交渉に出掛けたルイズとワルドを待つ為、桐生達は一階の酒場で寛いでいた。流石に一日中馬を走らせた桐生とギーシュには疲れが見えており、ギーシュにいたっては机に突っ伏して既に半分眠りに入っている。

桐生は「女神の杵」亭の中をキョロキョロと見回した。立派な造りだ。テーブルも床もピカピカに磨き上げられており、飾られてる装飾や家具の一つ一つは高級感を醸し出している。

暫くすると、ルイズとワルドが戻ってきた。ワルドは席に着くなり、困った顔で溜め息を漏らした。

「アルビオンに渡る船は明後日にならないと出ないそうだ」

「急ぎの任務なのに……」

ルイズも席に着くと唇を尖らせた。

「あたし、アルビオンに行った事がないからわからないんだけど、どうして明日は船が出

せないの？」

キュルケが疑問を口にする、ワルドが口を開いた。

「明日の夜は月が重なるだろう？」「スヴェル」の月夜だ。その翌日の朝が、アルビオンが最もラ・ロシエールに近づくからさ」

桐生はワルドの話を聞きながら、アサガオの前の浜辺に広がる海を思い出した。今の話が、まるで潮の満ち引きに似ているからだろう。

「さて、今日はそろそろ休もう。二人、特にギーシユはもう限界の様だしね」

机に突っ伏したままピクリとも動かないギーシユを見て、苦笑を浮かべながら鍵束を机に置くワルド。

「キュルケとタバサ、そしてギーシユとカズマ殿が相部屋だ」

桐生の肩がピクリと歪むのを、ワルドは見逃さなかった。

「僕とルイズが相部屋だ。婚約者だからね。当然でしょう？」

ワルドが首を傾げて見せながら桐生に言う。桐生は瞳を閉じて自分とギーシユの部屋の鍵を取った。肯定の意である。

ルイズがハツとなってワルドに振り向いた。

「そんな、駄目よ、ワルド！ 私達、まだ結婚してる訳じゃないじゃない！」

ルイズが桐生とワルドを交互に見ながら言うも、ワルドは首を振った。



「大事な話があるんだ。二人だけで話したい」

ワルドの真剣な表情に、ルイズは言葉を詰まらせ黙った。

それを合図ととらえたのか、タバサとキュルケが立ち上がり鍵を拾い上げる。

「それじゃ、邪魔者は退散させて貰うわ。お休み」

キュルケが桐生に投げキッスしてから階段を上がって行く。

桐生も立ち上がり、ギーシユの肩を叩いた。

「行くぞ、ギーシユ」

しかし、ギーシユから返事はない。良く見ると、疲れが限界にきたのか、気絶した様に眠っていた。

「仕方ねえ奴だ……」

桐生は苦笑した後、ギーシユを担ぎ上げて鍵を拾い上げる。何か言いたげなルイズとワルドの交互にまた明日、と告げるとそのまま階段を上がって行った。

「女神の柵」亭一番の部屋だけあって、ルイズとワルドの部屋はかなり立派で豪華な造りになっていた。ベッドは天蓋付きの広い物で、レースの飾りが高級感を演出している。机や椅子の一つ一つも高級品で、床に敷かれた絨毯は柔らかくフカフカの踏み心地だ。

ワルドはテーブルの席に着くと、用意されていたワインの栓を抜き、陶器のグラスに注いで飲み干した。

「君も一杯やらないか？ ルイズ」

ワルドに声を掛けられ、向かいの席に腰掛けたルイズがグラスを取ると、ワルドがワインを酌した。自らのグラスにも注ぎ、赤いワインで満たされたグラスを掲げた。

「二人の再会に」

ルイズも俯きながらグラスを掲げる。カチン、と小気味良い音が響いた。

「姫殿下から預かった手紙は、きちんと持つてるかい？」

ワルドがワインを軽く呷りながら言うと、ルイズはポケットの上からアンリエッタから預かった封書を押さえる。

この封書は、一体どんな内容なのだろう？　そして、ウエルズから返して欲しいと言う手紙には、どんな内容が書かれているのだろうか？

疑問に思いながらも、ルイズにはアンリエッタがウエルズから返して欲しいと言う手紙の内容には当たりがついていた。アンリエッタとは子供の頃、共に過ごした仲だ。彼女がウエルズをどう思っているか、ルイズにはわかる。だから、手紙の内容がどういふものなのかは想像がついた。

考え事をしている自分を見つめているワルドの視線に気付き、ルイズは頷いた。

「ええ、大丈夫……ちゃんど持ってるわ」

「……心配かい？ 今回の任務、ウェールズ皇太子から姫殿下の手紙を取り戻すのが成功するのだろうか」

ルイズは少し躊躇う様に言葉を詰まらせた後、可愛らしい眉をへの字に曲げながら頷いた。

「そうね……正直、心配だわ。本当に上手く行くのか、姫様の期待に応えられるかどうか……」

「大丈夫さ、きつと上手く行く。なにせ、この僕がついているからね」

「そうね。貴方がいれば、きつと大丈夫よね。貴方は昔から、とても頼もしかったもの」  
少し苦笑を浮かべて言った後、ルイズはワインを一口飲んでグラスを机に置いた。

「それで……大事な話って？」

ルイズの質問に、ワルドは遠くを見る様な目になった。

「覚えているかい？ あの日の約束……君の屋敷の中庭で……」

「あの池に浮かんだ小船の事？」

ルイズが言うと、ワルドは頷いた。

「君は良く、お姉さん達と魔法の才能を比べられて、出来が悪いと怒られていたよね」

楽しそうに話すワルドに、ルイズは恥ずかしさに酔いとは違った意味で顔を赤らめ

た。

「でも、それは間違いだ。君は確かに才能がない様に見える。だが、それは自分の中にある強大な力に気付いていないからさ」

「強大な力？」

「そうさ。君の中にはとてつもない力が秘められている。僕にはわかるんだ。僕も、メイジとしての実力に自信がある。だから、君から感じる一種のオーラの様なものが、僕にそれを伝えてくれる」

「まさか……」

ルイズはグラスを取ってもう一口ワインを飲む。ワールドが酔っているのかと思ったが、その真剣な表情と目つきから素面なのが窺える。

「まさかじゃない。例えば、君の使い魔……」

「カズマの事？」

ルイズの脳裏に桐生の顔が浮かんで心なしか顔が赤らんだ。

「そう。彼が武器を掴んだ時、左手に浮かび上がったルーン……あれはただのルーンじゃない。伝説の使い魔の印さ」

「伝説の使い魔？」

「そうさ。あれは「ガンダールヴ」の印だ。始祖ブリミルが用いた、最強と言われた使い

魔さ」

ワルドの目が、まるで子供の様に輝いた。

「ガンダールヴ？」

「誰もが持てる使い魔じゃない。君はそれだけの力を持ったメイジなんだ」

「信じられないわ……」

ルイズは首を振った。

ワルドの言葉は、冗談としか取れなかった。確かに桐生は強い。それこそ武器を使うと使わなからうと。しかし、それはあくまで桐生自身の強さだ。自分がたまたま呼んでしまった、異世界の住人。桐生の実力が凄いだけであって、自分の力が強大とは思えない。

まして自分は、「ゼロ」のルイズだ。落ちこぼれ。才能無し。未だに自分を認めてくれているのは、桐生だけだ。

「君は近い将来、偉大なメイジになるだろう。そう、始祖ブリミルの様な、歴史に名を残す程の存在に。僕はそう思っている」

ワルドは立ち上がると、ルイズの背後に立って優しく肩に手を置いた。

「ルイズ……この任務が終わったら、結婚しよう」

「えっ？」

いきなりのプロポーズに驚きながら、ルイズはワルドの顔を見上げた。

「僕は魔法衛士隊隊長で終わる気はない。いずれは国を、トリステインなんて小さなものじゃない。このハルケギニアを動かせる程の貴族になりたいと思っている」

「で、でも……」

「でも、なんだい？」

「私は、その、まだ……」

「心配しなくていい、ルイズ。君はもう子供じゃない。十六になっただろう？ 自分の事は自分で決められる年齢だし、お父上も僕が相手ならきつと許して下さるさ」

ワルドはそこで言葉を切り、寂しそうに首を振って見せる。

「確かに……忙しきにかまけて君を放っておいてしまったのは悪かったよ。申し訳なく思う。今更婚約者なんて言われても、君には実感なんてないだろう。でも、僕には君が必要なんだ、ルイズ……」

「ワルド……」

ワルドのプロポーズを聞きながら、何故か、桐生の顔が浮かんだ。もし、ワルドと結婚したら、桐生は自分のそばにはいられないだろう。

ならば、桐生はどうするのだろうか？

キュルケか、あの厨房にいるメイドか、誰かしらが世話を焼くだろうか。いや、桐生

の事だ。何処へ行ってもきつと遅しく生きてはいけるだろう。

だが、もしそこで、誰かと結婚なんてなってしまうたら？

そんなのは嫌だ、とルイズは心の底から思った。少女の我が儘と独占欲が、桐生と離れる事を拒んでいた。そりゃ時々怒るし、口うるさく感じる時だつてある。でも、桐生は自分の使い魔なのだ。誰にも渡したくない。

ルイズは困つた表情でワルドの瞳を見つめた。

「でも、でもね……」

「でもっ」

「あの、私、まだ貴方に釣り合う様な立派なメイジじゃないし……もつともつと修行したいの」

ルイズは俯き、続けた。

「私ね、ずっと子供の頃から思っていたの。立派なメイジになってお父様とお母様に認めて貰うつて。それが私にとつての、一人前になつた証だと思ふの」

ルイズは顔を上げて、肩に置かれたワルドの手に優しく自分の手を重ねた。

「私には、まだそれが出来ていない……」

「そうか……君の心の中に、誰かが住み着いてしまつたんだね」

「なっ!? ち、違うわ! そんな事、ない!」

ワルドの指摘に顔を真っ赤に染めながら首を振るルイズ。しかし、言葉と裏腹にルイズの頭の中では桐生の横顔がチラつく。

「いいさ、僕にはわかるよ。わかった、取り消すよ。今すぐ返事をくれなんて言わないよ。でもこの旅が終わったら、君の気持ちは僕に傾く筈さ」

ルイズは頷いた。

「それじゃあ、もう寝ようか。疲れただらう?」

ルイズがそれに答える様に立ち上がると、ワルドが唇を近付けようとした。しかし、ルイズは一瞬身体を強ばらせると、ゆっくりワルドを押し戻した。

「ルイズ?」

「ご、ごめんなさい、あの、その、でも……」

ルイズはしどろもどろに言いながらもじもじしてワルドを見つめる。そんなルイズを見ながらワルドは苦笑を浮かべた。

「大丈夫……急がないよ、僕は」

ルイズは申し訳なさそうに俯いた。

ワルドの事は嫌いじゃない。プロポーズされて嬉しくない訳じゃない。

しかし、心に引つ掛かる何かが、ルイズに答えを留まらせた。



眠るギーシュをベッドに横にしてやると、「女神の杵」亭の庭に当たる場所で、桐生は一人煙草を吸っていた。まだ寝静まろうとしない町の淡い灯りが美しい。

ゴソゴソと、ポケットを漁り中からピンク色の小さな袋を取り出した。遥の御守りである。

暫くジツと見つめた後、御守りをギュツと握り締めた。

「ルイズが結婚、か……」

美味そうに紫煙を吹かしながら呟く。

「遥……もしお前が俺の立場だったら、あいつになんて言うだろうな……」

再度ポケットに御守りをしまうと、肩を軽く叩かれた。振り返ると、キユルケがそこにいた。

「部屋に行ったけどいなかっただから……ここにいたのね」

桐生が煙草を啜えたまま優しく笑みを浮かべると、キユルケが隣に立った。

「灯りが綺麗ね……」

「ああ……」

時折吹く強い風がキユルケの赤い髪と煙草の紫煙を揺らした。

「ね？ カズマから見てどうなの？」

暫くの沈黙の後、キユルケが桐生に振り向いて問い掛ける。

「ワルドの事か？」

「そう。正直あたしは、ルイズには勿体無いくらいに感じるんだけど、一応使い魔であるカズマの意見も聞きたくてね」

キュルケが灯りの消えたルイズ達の部屋を見上げながら言うと、桐生は煙草を携帯灰皿に押し込んだ。

「そうだな……ワルドの事は詳しくは知らんが、役職についているくらいだから実力は確かだろう」

「まあね。魔法衛士隊なんて言ったら、メイジにとつては憧れの的だもの。男の子なら誰だつて目指すものだし、女の子なら自分の彼氏がそうであつて欲しいものだしね。まあ、あたしは格好良ければ誰でも良いけど」

桐生の言葉にキュルケは優雅に髪をかき上げながら笑つて言うと、桐生は頷いた。

「ルイズにとつてはいい相手なんだろう。まあ、結婚はあいつの問題だしな。あいつの決めた事にとやかく言う気はねえよ」

「ふくん……意外ね」

「何が？」

桐生が問い掛けると、キュルケは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「なんかずつと機嫌悪そうだったから、もしかして嫉妬してるのかと思つただけ？」

楽しそうに話すキュルケに対して、桐生の表情が真剣なものに変わった。

「嫉妬……か」

そう呟き、キュルケから顔を背けて再び町へと視線を戻す桐生。そんな桐生にキュルケは首を傾げて見せた。

「ギーシュにも言ったが、そんな簡単な感情なら俺も楽だったんだがな」

「カズマ？」

「確かにこれはルイズの問題だ。でもな……」

桐生はそこで言葉を詰まらせた。まるで、言つて良いのか悪いのかを考えている様子に。

暫くの沈黙の後、桐生は深い溜め息を漏らした。

「俺はワルドが……あいつが気に入らねえ」

「今の話を聞く限り、嫉妬から、ではないわよね？」

桐生の漏らした声からだならぬ感情を読み取ったキュルケは、少し桐生に近付き問い掛ける。

「正確に言えば、あいつのルイズを見る目がな」

桐生はそれだけ言うとうと身体を伸ばしてキュルケに振り向いた。

「そろそろ戻るか。冷えてきたしな」

「……そうね」

もつと桐生の意見を、その言葉の真意を聞きたく思うも、何故か聞いてはいけない気がしたキュルケは素直に頷いて宿に戻った。

翌朝、桐生は目を覚ますと、隣でまだ深い眠りについたままのギーシユを横目にベッドから起き上がった。

洗面に向かおう扉のドアノブに手をかけると、ノックの音が目の前から響いた。

桐生はポケットに手を入れてメリケンサックを拳に嵌めた。昨日の襲撃もあり、今度は相手からの刺客だった場合を考慮したのだ。

「誰だ？」

そう声をかけると、聞き覚えのある声が返ってきた。

「その声は、カズマ殿ですか？ ワルドです」

ワルドの返事に眉はひそめたものの、メリケンサックを外して扉を開ける。

扉の先には、羽根帽子を被ったワルドが立っていた。

「おはようございます、カズマ殿」

にっこりこと笑顔を浮かべるワルドに桐生は頷いて見せた。

「ああ、おはよう。どうした？ 何か用か？」

「朝早くに申し訳ない。ただ、貴方と少し話したいと思ひまして……良ければ少しお付き合ひ願えますか？」

桐生の問い掛けにワルドがそう言うのと、桐生は頷いて壁に立てかけてあつたデルフリンガーを掴み部屋の外に出た。

「ありがとうございます。では、此方へ」

ワルドに案内されるままついて行くと、やや広い物置の様な場所に着いた。樽や空き箱が積まれている石の段には苔が生えており、造られてから長い年月が立っているのを感じさせた。

「ここはかつて、修練場だった場所です」

辺りを見回す桐生にワルドが説明した。

「かつて王がまだ力を付けていた頃、貴族同士は互いの誇りをかけてここで魔法をぶつけ合つたんです。自分が誰よりも強い、そう周りに示す様に」

「そんな場所です。話とは……あまり穏やかじゃ無さそうだな」

桐生の言葉に、ワルドは笑みを浮かべた。しかし、目は笑っていない。鷹の様な鋭さを秘めた視線が桐生を射抜いた。

「カズマ殿……貴方は伝説の使い魔、「ガンダールヴ」なんだろうか？」

「なに?」

ワルドの言葉に桐生の目が険しくなる。

そんな桐生に、ワルドは首を振って見せた。

「貴方がフーケを捕らえた一件、あれで僕は貴方に興味がありましたね。昨日ルイズに聞きましたが、貴方は異世界からやってきたそうじゃないですか。更に、伝説の使い魔の「ガンダールヴ」でもあるそうじゃないですか」

「どこでその事を知った?」

桐生の瞳に険しさが増し、気の弱い者ならばその視線だけで気絶させられそうな鋭さが宿った。自分が「ガンダールヴ」である事は、周りにはオスマンしかない筈だ。

「僕は歴史と、歴代の兵に興味がありますね。フーケを尋問した際、貴方の話を聞いて興味湧き、王立図書館で調べました。そして行き着いたのが、「ガンダールヴ」だったんですよ」

そう言つて笑みを浮かべたワルドは、チラリと横を見てから、桐生にも見る様に顎をしゃくつて見せた。

其方に視線を向けると、ルイズが此方に向かつて歩いてきた。

「もう、一体どうしたのよ、ワルド。来いって言うから来てみればカズマもいるし……何をすするつもりなの?」

少し呆れた様に言うルイズにワルドが微笑みかけると、桐生に顔を向けた。

「カズマ殿、フーケを捕らえた貴方の力、是非試してみたい。此処で、手合わせ願えますか?」

ワルドがそう言うて腰に差した杖を引き抜くと、ルイズはギョツとした表情になった。

「ちよ、ちよつと! 馬鹿な事は止めて! 今はそんな事をしてる場合じゃないでしょう!」

「確かにね。しかし、貴族というのは我が儘な生き物でね。相手に強いか弱いかの興味を抱いてしまうと、試せずにはいられないんだ」

申し訳なきようにルイズに言いながらも、ワルドは楽しみが隠せない様に笑っている。本当に桐生の実力を試したい様だ。

ルイズは困惑した。桐生の実力はフーケの一件でわかっている。しかし、ワルドだって戦いに置いてはプロだ。どちらが勝つのか、全く想像がつかない。正直に言えば、ただ二人の勝負には興味があった。

桐生は腕を組んでワルドを見つめた後、溜め息を漏らして首を振った。

「止めておけ。やるまでもねえだろ。結果は分かり切っている」

「おや? 僕では相手にならないと?」

桐生の言葉を挑発と捉えたのか、ワルドが首を傾げながら桐生に問い掛ける。

しかし、桐生の口から飛び出して来たのは、ルイズはおろか、ワルドまでも想像していなかった言葉だった。

「その逆だ。俺がお前に勝てる訳ねえだろ」

「えっ!？」

ルイズが驚いて声を上げ、ワルドも怪訝そうに眉をひそめた。

「ただの殴り合いなら負ける気はしねえが、お前の魔法はかなり強力なんだろう？ 魔法の強さはフーケとの戦いで身に染みてる。なら、俺が勝てる訳ねえよ」

桐生はそう言うのと、ワルドに背を向けて歩き始めた。

戸惑っているルイズを他所に、ワルドは少し小馬鹿にした様に溜め息をつけて桐生の背中に言い放つ。

「フーケを捕らえた男がどれ程の者かと思つて期待したんだが……思つたよりも臆病者なんですな、カズマ殿。それでルイズが守れるのですか？」

ワルドの言葉に桐生が足を止めて振り向くと、再び腕を組んで笑みを浮かべた。

「ワルド……婚約者の前で良い所を見せたいお前の気持ちもわかるが、あまり年上を苛めるなよ。こいつを本気で守る時は、俺の命に代えても守ってみせるさ」

それだけ言い、桐生は再び歩き出して行ってしまった。



ワルドは構えを解いて杖を鞘に戻すと、残念そうに溜め息を漏らした。

「やれやれ……僕の完敗、かな」

「えっ!？」

今度はワルドの言葉に、ルイズが再び驚きの声を上げた。

「相手の実力を押し量り、素直に退散出来るのは簡単な事じゃないからね。あそこまで見事だと、少し憧れてしまうよ」

「でも、カズマは逃げちゃったのよ? あんな挑発までされたのに……」

納得の出来ていないルイズが食ってかかると、ワルドは悔しそうに苦笑を浮かべて首を振った。

「だから凄いのさ。大抵の人間なら、あんな挑発を受ければ勝てないのがわかっていながらも挑むだろう。多分立場が逆なら、僕だって挑発に乗っていたと思う。でも、カズマ殿はその挑発さえ流した。おまけに僕の下心まで見抜いてね。歴戦の強者じゃないか、辿り着けない境地だよ」

ワルドの言葉に、ルイズは未だに納得出来なかった。それでも、桐生が褒められているのは、心のどこかで嬉しかった。

その夜、桐生は一人、部屋のベランダで煙草を吸っていた。

ギーシュ達は一階の酒場で呑んで騒いでいる。明日のアルピオン出発に向けて英気を養っている様だ。ワルドに朝の事を詫びたいから奢らせて欲しいと誘われたが、丁重に断った。今は酒を呑みたい気分じゃない。

桐生は空を見上げ、満点の星空の中で赤い月と重なり、一つになった青い月を眺めながら紫煙をくゆらせた。

「カズマ……」

不意に声をかけられて桐生が振り返ると、ルイズが心配そうな表情で立っていた。

「ルイズか。どうした？ 下でみんなと呑まないのか？」

桐生の質問に答えず、ルイズはツカツカと歩くと桐生の隣に並んだ。

ルイズの真意が見えない桐生は首を傾げたが、視線を再び月に向けた。

青白く淡く光る一つの月。どこか日本にいた頃、アサガオの庭から眺めた満月と重なり、心の中に安心感が生まれた。

「……あんた、変よ」

突然ポツリと、ルイズが月を見ながら呟く様に言ったので、桐生がルイズに顔を向けた。

「何がだ？」

「ワルドが現れてから、あんた、何か変よ。妙に気が張ってるみたいだし、ワルドに対し

てはずっと素っ気ないし、一体どうしたのよ？」

ルイズが不安そうな表情で振り向いてきたので、桐生は煙草を吹かしながら首を振る。

「別に何もねえさ。気にするな」

「カズマ、ワルドと仲良くして、とは言わない。けど、今は任務中なのよ。いがみ合つてるとは思わないけど、もうちよつと彼に対して」

「なあ、ルイズ」

ルイズの言葉を遮り、桐生が煙草を携帯灰皿へ押し込んだ。そして、真剣な表情でルイズの目を見つめる。

「な、何よ？」

突然の桐生の真剣な眼差しに気圧され、ルイズは思わず噛みながら返す。

「お前は……ワルドを愛しているか？」

「はっ!？」

思いもよらない質問が飛んできて、ルイズは顔を真っ赤にしながら後退る。

「な、何よいきなり!？ そんな事」

「真剣に聞いているんだ。どうなんだ？」

慌てふためくルイズを他所に真剣な表情のまま同じ問いを投げかける桐生。

ルイズは少し落ち着きを取り戻し、自分の中で考えを整理してから口を開いた。  
「……正直、わからないわ。好き、だとは思うけど……上手く言えない……」

自分なりに出した精一杯の気持ちの口にする、桐生はルイズの頭に優しく手を乗せた。太くゴツイ指が、くしやりと桃色の髪を撫でる。

「そうか……なら、いい」

桐生は一言それだけ言うと、ベッドに向かって歩き出した。もう休むらしい。

桐生の質問の意図がわからず、再度月を見ようと外に視線を戻したルイズは、  
「なっ!？」

小さな悲鳴を上げた。その声に、桐生が振り返る。

ベランダの手すりの向こう側には先程まで見えていた夜空の代わりに、黒茶の岩の塊が立ちはだかっていた。

塊の正体は、岩で出来たゴーレムだ。こんなゴーレムを作れる人間は、桐生もルイズも一人しか知らない。

ふと、ゴーレムの肩に当たる所に女が立っているのに気付いた。長い髪が夜風になびいている。

「フーケー」

ルイズが怒鳴ると、フーケーは嬉しそうに微笑んだ。

「覚えていてくれたなんて感激ね、ミス・ヴアリエール。いいえ、もうあの学園の職員じゃない訳だし、畏まる必要はないわね」

「あんだ、牢屋に入ってたんじゃない?」

忌々しそうにフーケを睨み付けながらルイズが怒鳴り散らす。その様子を、桐生はポケットに手をつ突っ込んで眺めていた。

「親切な人がいてね? 私みたいな美人はもつと世に出て活躍すべきだと言ってくれたのよ」

フーケが色つぼく言うのと、背後から一人の人間が現れた。白い仮面で顔を隠しているが、どうやら男らしい。見た所、フーケを脱獄させた人物の様だ。

「あんだにお熱を上げるなんて悪趣味な奴がいたもんね! 何しに来たのよ!」  
「何しにつて……ねえ?」

フーケは勿体ぶった言い方をした後、狂的な笑みを浮かべた。

「もちろん、仕返しに来たのよ!」

ゴーレムが動き出し、ルイズが後ろに飛ぶのと同時にベランダが押し砕かれた。バキバキと音を立てて屋根まで剥がされる。

「カズマー!」

急いで逃げようとするルイズを他所に、桐生はゴーレムに向かって歩み寄る。

「ちよつと!? カズマ、何して」

「また会ったな、フーケ」

桐生の行動に理解出来ないルイズがヒステリックに声を上げるが、桐生はそれを無視してフーケに声をかける。

フーケは桐生の存在に気付くと、更に目を吊り上げて高らかに笑った。

「あらあら! 一番仕返ししたい人がこんな所にいるなんて嬉しいわ! 会いたかったわよ、色男!」

復讐に燃える瞳を輝かせて桐生を見つめるフーケ。もうルイズの存在は見えていないのかもしれない。

しかし、そんなフーケとは対照的に、桐生はポケットに手を突っ込んだまま落ち着いた調子で言う。

「そうか。所で、お前に一つ聞きたかった事があるんだが、いいか?」

「あらあら、私に聞きたい事ですつて? まあ、良いわ。冥土の土産に答えてあげようじゃないの」

復讐の対象を見つけたせいとか、上機嫌な調子でフーケが笑いながら言う。

桐生はそんなフーケに頷いて見せた。

「なら、聞かせてくれ」

一体桐生はこんな時に何を聞こうと言うのか？ 桐生の後ろに立ってルイズも、質問を聞くためかフーケも黙る中、桐生の言葉が響いた。

「お前、誰の為にそんな事してるんだ？」

「っ!？」

余裕だったフーケの表情が一瞬で崩れ去り、戸惑いと焦りの色が浮かび上がった。

「お前を捕らえる時、気絶する寸前に、誰かにごめんねと謝っているのが聞こえたんだな」

桐生はその時の事を思い出しながら言う。

「蓮家閃気掌」を受けて気絶するフーケが最後に呟いた言葉。「……ニア、ごめんね

……」と聞こえた言葉がずっと桐生の中で引っかかっていた。

「男か、それとも家族の為か？ なんにしても、もしそうならそんな事辞めちまえ。そんな事をして稼いだ金や物でそいつを守っても、そいつは喜んじゃくれねえよ」

「……あなたに、あなたには関係ないでしょ!？」

言葉を震わせながらフーケが叫ぶ。先程までの威勢は全く感じられない。追い詰められているのがどちらなのかすらわからない程の狼狽振りだ。

だが、

「なあ、フーケ……」

そんなフーケに、桐生は容赦なく言い放つ。

「お前がそこまで守りたいと思っっているそいつは、今のお前の姿を見て、笑ってくれるのか？」

桐生の言葉が、フーケの心を突き刺した。

真つ白に染まる視界の中、フーケの目の前に映ったのは一人の少女。自分を姉と呼び、慕ってくれる少女の笑顔。

そんなあの子が今の自分を見たらどう思うだろう。きつと、悲しみ泣き出すだろう。今日の前に映っているこの顔の様に。

少女の悲しみに染まった顔が見えた次の瞬間、フーケの視界が真つ赤に染まった。身体中が熱い。血が沸騰している様に。

怒りだ。怒りがフーケの身体を支配していた。目を見開き、歯を剥き出しにして、憎悪に染まった表情で桐生を睨み付ける。怒りに震え、歯がカチカチとなっている。

「……………まれ。」

震える声で小さく呟くのを皮切りに、フーケの口から悲鳴にも似た怒声が溢れ出す。

「黙れ！ 黙れ黙れ黙れ黙れ黙れえっ！」

掴んだ杖を強く握り締め、高々と掲げ上げる。それに合わせたかの様に、ゴーレムが右手を振り上げた。



制止しようとする仮面の男を強く払いのけ、フーケが思いっ切り杖を振り下ろす。

「お前にっ！ お前なんかは何がわかるっ！」

ゴーレムが岩の拳を桐生目掛けて振り下ろす。

「カズマ！ 逃げるわよ！」

ルイズが桐生のジャケツトを背中から引つ張るが、桐生はピクリとも動かない。遅いながらゴーレムの拳は桐生に目掛けて近付いていく。

もう駄目だ、とルイズは桐生に抱き付き背中に顔を押し付けてギュツと目を瞑った。桐生はゴーレムの動きに合わせる様に、ポケットから手を出して、

「おらあっ！」

自分の拳をゴーレムの拳目掛けて打ち付けた。

ガキンツッ！ と言う金属音が響き、自分の身体に痛みも衝撃も来ない事から、ルイズが恐る恐る顔を桐生の背中から離して目を開いた。

そこには、信じられない光景が広がっていた。

桐生の拳とゴーレムの拳が重なり、ゴーレムの拳が止まっているのだ。

「な、何で!?! どうして!?!」

冷静さを取り戻したフーケが驚きの声を上げる。

ルイズは桐生から少し離れて、ゴーレムの拳を受け止めている桐生の拳を見る。する

と、見たこともない銀色に輝く何か拳に嵌められていた。更に、桐生の身体からはいつも見た青いオーラではなく、赤いオーラが迸っていた。

「悪いな、フーケ」

桐生が静かな口調で口を開くと、ゴーレムの拳に亀裂が走った。

「お前が誰かの為にこんな事してるのはわかった。お前にも、守りたい誰かがいるんだろ」

ピシピシと、拳から徐々に腕に走る亀裂の音に混じって桐生の言葉が響く。

「でもな、俺にも、お前と同じくらいに守りたい奴がいるんだよ。そいつを守る為なら……」

ビシビシと悲痛な音を立て、とうとう亀裂はフーケ達の立つ肩まで走った。

「誰だろうと、ぶっ飛ばす！」

バキン！　と言う耳障りな金属音を立ててゴーレムの腕が砕け散った。反動でゴーレムが大きく後ろに後退る。

それをチャンスとばかりに、桐生は驚き呆けているルイズの身体を抱きかかえ、部屋から飛び出した。

## 第13話

ルイズを抱きかかえたまま駆け下りた一階は、既に戦場と化していた。飲んでいたワルド達にいきなり傭兵が襲いかかったらしい。

机を倒して壁にし、ギーシュにタバサ、キュルケにワルドが魔法で応戦しているが、戦況は宜しくないらしい。

傭兵達は長年の経験でメイジとどう戦えばいいのかを理解していた。ワルド達の魔法の射程範囲を計り、その外から弓を放っている。

豪華な造りだった玄関口は壊され、盾代わりのテーブルや壁には無数の矢が突き刺さっていた。

桐生は体勢を低くしてワルド達の上に駆け寄り、相手方にフーケがいる事を伝えた。

「王室もアテにならないわね。こそ泥一人満足に監禁出来ないなんて」

キュルケがうんざりした様子で呟きながら肩を落として見せた。

「参ったね……まさか先日の物取りが、また襲いに来るとは」

「それにフーケが付いているって事を考えると、アルビオン貴族が後ろに考えると考えて良いだろう」

青ざめながら呟くギーシュにワルドが頷いて言う。

そんな二人を見ながらキュルケはつまらなそうに杖を弄った。

「連中、あたし達の精神力が切れるのを待つて、その瞬間に一気に襲い来るつもりよ。そしたらどうする?」

「し、心配ない、僕のゴーレムで防いでみせるさ」

一気に襲いかかって来る傭兵達を想像したのか、更に青ざめた表情でギーシュが言う。心なしか声も震えている。

「無理ね、ギーシュ。あんたの「ワルキューレ」じゃ、一小隊が関の山よ。相手は手練れの傭兵なのよ?」

「ぼ、僕はグラモン元帥の息子だぞ! 卑しい傭兵風情に遅れを取る様な真似はしない!」

「……つたく、これだからトリステインの貴族は駄目なのよ。プライドばかり高くて現実を見ようとしなんだから」

ギーシュの力強い宣言を鼻で笑いながらキュルケが溜め息混じりに零す。

「いいかね、諸君?」

言い合いをしていたギーシュとキュルケを制してワルドが低い声で言う。

「今回の様な任務は半数が目的地に着けば成功となる」

こんな時でも分厚い本を広げていたタバサがワルドの言葉に答える様にパタン、と本を閉じて自分とキユルケとギーシユを指差し、

「**囧**」

と呟く。そして今度は桐生とルイズとワルドを指差してから、

「**棧橋へ**」

と呟いた。

「よし、開始時間は？」

「今すぐ」

頷き尋ねるワルドにタバサはきつぱりと言い放つ。

「聞いている通りだ。ルイズ、カズマ殿、裏口へ回るぞ」

「おい」

早速行動を開始しようとしたワルドに、桐生が顔をしかめて声をかける。

「こいつ等を置いて行けと言うのか？」

明らかに納得していない、不機嫌そのものが出ている様な声で桐生が言う。しかし、そんな桐生に、ワルドは当然の様に首を振って見せる。

「彼女達には**囧**になって貰い、せいぜい派手に暴れて貰います。貴方の言いたい事がわからなくもありませんが、これが我々の任務なのです。私情は捨てて頂きたい」

ワルドの言葉全てに納得は出来なかったものの、言っている事その物は間違っていない様に感じて桐生も言葉を詰まらせた。

桐生がギーシユ達に目を向けると、キュルケが優雅に赤く長い髪をかき上げて唇を尖らせた。

「仕方ないわよ、ダーリン。元々今回の任務はルイズとダーリンが受けたんでしょ？」

どんな任務かは知らないけど。なら、ダーリン達が行くのが当然なのよ」

ギーシユは薔薇の造花を弄りながら青ざめた顔でブツブツ呟いている。

「ああ、僕はここで死ぬんだろうか？ 姫様は僕を忘れないでいてくれるだろうか？ モンモランシーは僕が死んだら悲しんでくれるだろうか？」

どうにもネガティブな考えを口にするギーシユを横目にタバサが桐生に近付き裏口に続く廊下を指差す。

「行つて」

「……わかった。ただし、絶対に無茶はするな。ヤバくなったら必ず逃げろよ」

桐生の言葉にキュルケとタバサが頷き、ギーシユがコクコクと何度も頷いた。

「ねえ、ダーリン？ 帰ってきたら、キスの一つでもして貰えるかしら？」

矢が飛んできて次々壁に突き刺さっていく中、キュルケは色気たつぷりに笑みを浮かべて桐生を見つめる。そんなキュルケに桐生も笑みを浮かべて頷いて見せた。

「ああ……大人のキスを教えてやるよ」

「ふふ、期待してるわ」

そんな風にキュルケと話していると、不意にジャケットの裾がクイツと引つ張られた。其方に目を向けると、タバサが桐生を見つめながらジャケットの裾を指先で摘んでいた。

「料理、出来る？」

「……一応、得意料理はあるが」

良くアサガオで子供達に作ってあげていたカレーが頭によぎった。いつもみんなおかわりを求めてくれたのが嬉しかったのを思い出して僅かに口元に笑みが浮かぶ。

そんな桐生にタバサが頷いた。

「今度それ、作って」

どうやらタバサなりの恩返しの要望らしい。桐生はタバサの頭を優しく撫でながら頷いた。

「ああ、腹一杯食わしてやるよ。約束だ」

タバサは撫でられ瞳を細めながら満足そうに、ん……と呟くと桐生に背を向けて杖を構えた。

ふと、此方を不安そうに見ていたルイズに気付き、キュルケが鼻を鳴らして顎をしや

くつて見せる。

「ほら、さっさと行きなさいよ。言つとくけど、あんたの為じゃないわよ？　ダーリンの為に囿役になるんだからね」

「わ、わかっているわよー！」

そう言いながらも、ルイズはキュルケに深々と頭を下げた。

体勢が低いまま裏口へ向かった桐生達を見送つて、キュルケは杖を握り締めた。

「さうで、始めましようか？　ギーシユ、ちよつと「ワルキューレ」を使つて厨房の、そうね……揚げ物用みたいな、油の入った鍋を持つてきてくれない？」

「鍋かい？　あ、ああ……お安いご用だ」

キュルケの要望にギーシユは頷き、「ワルキューレ」を一体作り出すと、厨房に向かつて走らせた。

すかさず数本の矢がワルキューレ目掛けて飛んできてその青い身体に突き刺さったが、なんとか鍋を持つてきてくれた。

「これで準備は整つたわね。ほら、タバサ。あんたもちよつとは女の子らしくなさいな」鍋の到着に笑みを浮かべたキュルケは胸元から手鏡と化粧道具を取り出して化粧を施すと、タバサの唇に淡いピンク色の口紅を塗った。心なしかやる気が伝わつてきてギーシユは呆れ半分、羨ましさ半分に二人を見つめた。



「こんな時にまで化粧か……あいつ等をやつつける気が満々だね」

「当然よ！ ダーリンのキスがかかっているんだから！」

「……料理がかかっている」

ギーシュの言葉にキュルケとタバサが深く頷いた。色気と食い気、どちらも二人とつてはとても大事らしい。

「さあ、行くわよ。ギーシュ、鍋を入り口へ投げてちょうだい！」

「よしー」

「ワルキューレ」に命じて油の入った鍋が入り口目掛けて投げつけられた。その鍋にキュルケが「ファイヤーボール」を飛ばすと、中の油が引火して入り口が炎に包まれた。キュルケはそのまま杖を振って呪文を詠唱し、燃え盛る炎を操って入り口付近で動揺していた傭兵達の身体を焼き始めた。

火の勢いが強くなった所で、タバサが杖を振るって風を起こし、弓矢部隊に炎を飛ばした。暗い夜道が赤々と燃える炎に照らされる。

そんな中、たじろぎ後ずさる傭兵達の前に我が物顔で炎の中を闊歩してキュルケが前に出た。

「名も無き傭兵の皆様方、貴方達に一つ、教えて差し上げますわ」

キュルケは色つぽく髪をかき上げながら言うと、杖を高く振り上げて燃え盛る炎を踊

らせた。

「恋する乙女に、敵はいないのよ！」

裏口に出た桐生達は表の方から聞こえる傭兵達の悲鳴を聞いて互いに目を配らせた。  
「始まった様だ」

ワルドがそう言うのと、桐生とルイズが頷いた。

「棧橋とやらはどつちだ？」

表とは違つて暗く、静まり返つた辺りを見渡しながら桐生が言うのと、ワルドが「こつちだ」と先導して走り始めた。その後を、桐生とルイズが追つた。

腕が再生した巨大ゴーレムの肩の上で、フーケが舌打ちした。自分の雇つた傭兵達が見るも無惨に逃げ惑い、炎に喚き散らしているのを見て苛立ちを隠せない。

「つたく、やつぱり金で雇つた連中なんてアテにならないわね。情けないつたらありやしな」

「あれでいい」

フーケの苛立つ声に、隣に立っている仮面の男が意見した。

「こつちは完全に出遅れてるのよ！ あれじゃあ、あいつ等をやつつけられないじゃな

いー！」

「どの道、無理だっただろう。あの使い魔の男、ただ者ではない様だしな。それに、出遅れたのにはお前にも責任があるだろう？」

そう言われ、フーケは唇を噛み締めた。

腕を砕かれたゴーレムを再生させるのに時間を食ってしまった、襲撃に出遅れてしまったのだ。片腕だけでも十分戦えはしたが、拳一つでゴーレムを腕を砕いた桐生の存在はフーケに安心感を与えてくれず、より万全な状態で挑める様に更に硬く錬成したのだ。た。

「まあ、構わぬ。奴らを分散させられればそれでいい」

「そりゃあんたはいいかもしれないけど、私はそうはいかないわよ！ 恥をかかされて見逃すなんて、私のプライドが許さないわ！」

喚き散らすフーケに男は答えず、まるで風の音を聞く様に押し黙った。

暫くの沈黙の後、男は一人頷いた。

「よし、俺はラ・ヴァリエールの娘を追う」

「ちよつと、私はどうすんのよ!？」

自分の目的の為行動しようとした男にフーケは呆れながら問い掛ける。

仮面のせいでわからなかったが、「女神の杵」亭前で炎を操るキュルケをチラツと見た

様な気がした。

「連中をどうしようかと、お前の好きにするがいい。焼こうが煮ようが……それこそ八つ当たろうかな」

それだけ言うと、男はふわりとゴーレムの肩から飛び下り、まるで夜風の如く消えた。残されたフーケは再び舌打ちを鳴らす。

「全く……嫌な男だね。目的も何も教えずに行っちゃうし……八つ当たろうが、ですつて……」

ふと、先程の桐生の言葉が脳裏に蘇る。自分でもわかつているのだ。こんな事で金を稼ぎ、仕送りをした所であの子は喜ばない。だが、これしか道はないのだ。自分自身の復讐の為にも。

チラリと、踊る炎に逃げ惑う傭兵達を見てからゴーレムを動かし始めるフーケ。

「なら、させて貰おうじゃないの……八つ当たりってヤツを、ね！」

ゴーレムの拳が、「女神の杵」亭の入り口に叩き付けられた。

「女神の杵」亭の前でキュルケとタバサは炎を操り、傭兵達を苦しめた。近付けばキュルケが炎を踊らせて焼き払い、距離を取ればタバサが風を操り炎を飛ばしてくる。息の合った「火」と「風」のコンビは容赦なく傭兵達を撃退していった。

「わかる!? 恋する乙女の炎は、溶岩よりも熱いわよ!」

高らかに笑いながらキュルケが炎を踊らせる。

ほとんどの傭兵が逃げ去ってしまった所でギーシュが「女神の杵」亭から出て来て二人と並んだ。

「よし! 僕も!」

先程から全く良い所のなかったギーシュがここぞとばかりに薔薇の造花を振るおうとした瞬間、背後にズシンと言う強い衝撃と轟音が大地に響いた。

振り返ると、ゴーレムの太く硬そうな拳が、「女神の杵」亭の入り口に叩き付けられていた。

「あちゃあ……そう言えばあの業突く張りのおばさんがいたんだっけ」

キュルケが苦々しい顔で言うと、ゴーレムの肩の上からフーケが叫んだ。

「調子に乗ってんじゃないわよ、小娘共が! 仲良く潰されなさい!」

フーケの叫びを無視してキュルケがタバサに振り向く。タバサは両手を上げて首を振って見せると、キュルケは頷いた。

「仕方ないわね……ギーシュ、逃げるわよ」

「あ、ああ、そうだね、うん、素直に逃げよう、そうしよう」

つい数秒前までは意気込んでいたギーシュも、フーケのゴーレムを見るなり完全に逃

げ腰になつて頷く。

そして走り出そうとした時、急にタバサがギーシユの服を引つ張つた。

「なんだね!? 早く逃げよう! カズマも言つてただろう!? 無茶はするなつて!」

「タバサ、時間は十分稼いだわ。ここは退きましよう」

「……………作戦がある」

二人の説得に首を振るタバサに、とりあえず話だけでも聞こうと耳を傾ける。

「それ」

「それつて……………これかい?」

タバサがギーシユの持つている薔薇の造花を指差し、そしてそれを振る仕草をして見せる。

「花びら、沢山出して」

「そんな事をして何になるんだね!」

タバサの考えが理解出来ず怒鳴るギーシユの胸ぐらを掴んでキュルケが睨み付ける。無言の圧力で今すぐやれ、と言つているらしい。

キュルケの剣幕に圧されて訳もわからずギーシユが大量の花びらを造花から産み出す。するとタバサが杖を振るつて風を起こし、その花びらをゴーレムに振りかけた。

「ゴーレムに花びらをまぶしてどうするんだね!? 目潰しにでもすると!」

花びらに包まれたゴーレムを少しの間見つめてから、タバサがギーシュに振り向き言った。

「錬金」

自分のゴーレムに花びらがまぶされたのを見て、フーケは首を傾げた。

「何よ、贈り物？ だからって手加減はしないわよ！」

相手の意図がわからないままフーケはゴーレムに腕を上げさせた。動かない所に一気に拳を打ち付けてやろうと言う訳だ。

ふと、ゴーレムの身体にまとわり付いた花びらが、滑りを帯びた液体に変わった。つん、と油の臭いがフーケの鼻を抜ける。

「土」系統のエキス・パートであるフーケはその意図にやつと気付いた。どうやら連中は花びらを「錬金」して油に変えたいらしい。そして今、キュルケが杖の先に小さな火球を作り出していた。

まずい、そう思ったが既に遅かった。油に濡れたゴーレムの身体に火の玉がぶつかった。

一瞬で炎に包まれたゴーレムはゆっくり膝を突き、徐々にボロボロと崩れていった。

キュルケ達は互いに手を取り合って歓声を上げた。

「やったわ！ 勝ったわよ！ あたし達！」

「ああ！ 父上！ 僕はやりました！ あのフーケを僕の方で倒す事が出来ました！」

「何言ってるの!?! 勝ったのはタバサの作戦のおかげでしょ!?!」

嬉しそうにはしゃぐギーシユの頭をキュルケが腕で小突く。

燃え盛るゴーレムをバツクに鬼の様な形相のフーケが立ち上がった。美しく白い肌も青い髪も黒く煤けて汚れてしまっている。

「あんた達……またしてもこの私を！」

「しぶといわね、おぼさん！ でも、これで終わりよ！」

フーケに気付いたキュルケが再度杖を振るう。

が、杖の先からはポスンと情けない音と煙しか出てこなかった。

「あら……打ち止め？」

どうやら今の戦いで精神力を使い切ってしまったらしい。それはタバサもギーシユも同じらしく、両手を上げて見せた。

そんな三人にツカツカと近付いてフーケがキュルケに殴りかかる。

「誰がおぼさんよ！ 私はまだ二十三よ！ 大人の色気も持たない小娘が凶に乗るんじゃないわよ！」



「はあっ!? 十分おぼさんじゃないのよ! あたしの若さに嫉妬とか、みつともないわよ! おぼさん!」

キュルケとフーケによる女同士の殴り合いが始まった中、既に仕事を放棄した傭兵達はこちらが勝つのか賭けを始めて歓声が上がった。

ギーシユは疲れ果ててその場に座り込み、タバサもその場に座ると、再び本を開き始めた。

キュルケとフーケが殴り合いになった頃、桐生達は栈橋を目指して道を駆けていた。暫く進んでワルドが建物に入ると、目の前の階段を登り始めた。

栈橋へ向かうのに階段を登るのか、と桐生は心の中で疑問に思ったが考えている暇はない。そのまま三人は足を止めず階段を駆け登った。

長い階段を登り切ると、丘の上に出た。そして目の前の光景に、桐生は息を飲んだ。

巨大な樹が、四方八方に枝を伸ばしている。その大きさは山程あり、まるで東京タワーを見上げる様な気分だ。枝の先端には所々木の実の様な巨大な何かが引っかかっているのが見える。しかし、目を凝らすと、それ等は全て船だった。

「これが栈橋で……あれが船か」

驚きと感動が入り混じった声を漏らす桐生にルイズが首を傾げて見せた。

「あんたの居た所には、船はないの？」

「棧橋も船もある。だが、どちらも海にしかないな」

「海には海の、空には空の棧橋と船があるのが普通だと思つてたけど？」

事も無げに言うルイズに、相変わらず自分の常識が通じない世界である事を思い知らされる桐生。

ワルドに続いて樹の根元へと駆け寄ると、吹き抜けの様に洞窟になつて入りに入った。

樹の中は幾つもの階段があり、それぞれに鉄製のプレートが張られて何か文字が書かれていた。此方の世界の文字なのだろう。残念ながら桐生には読めなかったが、その光景は駅の行き先案内に見えた。

程なくしてワルドは目当ての船に続く階段を見つけると、二人に合図して駆け登った。桐生とルイズもそれに続く。

木製の階段は一步踏み込む度にしなり、手すりもボロボロで頼りない。造られてからそこそこの年月が経っているのが伺える。

ふと、階段を登っている足音が増えた事に気付き、桐生が振り向いた。少し前自分達を通つた階段の踊場に、あのフーケの隣に立っていた仮面の男がそこにいた。

男はまるで跳ぶ様に一気に間合いを詰めてルイズの背後に立った。

「ルイズ！ 伏せろ！」

桐生に怒鳴られ訳もわからずその場にルイズがしゃがんだのと同時に、桐生がデルFRINGERを居合斬りの様に引き抜きざまに仮面の男に斬りつけた。しかし、男も素早い動きで腰に差してあったレイピアの様な杖を引き抜いて桐生の一撃を止める。

そのままルイズを空いている片腕で抱きかかえると、男が後ろに跳び退いた。

「きゃあつ！」

「ルイズ！」

男が先程までいた踊場に立つと、桐生の背後からワールドが男目掛けて魔法を打ち込んだ。

風の槌が男の身体を打ち付けると、男は吹き飛びルイズを離れた。が、ルイズは踊場の外へと投げ出され、下に向かって落下していった。

すぐさまワールドは階段から飛び下り、ルイズの身体を抱きかかえると何やら呪文を唱えて空中で留まった。

ホッと一息ついたのと同時に、桐生は立ち上がった男を睨み付けながらデルFRINGERを構えた。

男はその場で杖を振るい始めると、突然空気が冷えるのを感じた。桐生も肌に、突き刺す様な冷気を感じる。

男が呪文を唱え始めると、デルフリンガーが叫んだ。

「相棒。気をつける！ 魔法が来るぜ！」

デルフリンガーの声を聞いた瞬間、男の周りの空気がパチンと音を立て震えた様に見えるかと思うと、青い稲妻が桐生目掛けて飛んできた。

すんでの所でかわしはしたが、左手が僅かに稲妻に触れてしまう。

「ぐううっ!？」

バチバチと激しい痛みが左手から腕にかけて走り、思わず声を漏らす桐生。見ると左手首から腕にかけて赤く焼けただれていた。

「ライトニング・クラウド」だ！ 「風」の中でも強力な魔法だぜ！ 野郎、やりやがるぞ、相棒！」

デルフリンガーの声に耳を傾けながら男を見ると、もう一発とばかりに構え始めていた。

すかさず桐生は脱兎の如く男に駆け寄って、デルフリンガーを打ち付ける。呪文の詠唱が邪魔された男が杖で刃を受け止めると、桐生は痛む左腕に鞭打ってそのまま力強く押し進む。

「うおおおおっ！」

雄叫びを上げながらデルフリンガーを振って男を踊場から押しやり、地面へと突き落

とした。

「カズマ！」

ワルドによつて階段に戻つたルイズが桐生に駆け込み、顔を覗き込んで来た。

「腕、大丈夫なの!？」

「心配ねえ。痛みはするが、何とか大丈夫そうだ」

ピリピリと痺れる様な痛みが走るが、我慢出来ない程ではない。まともに食らつていたらやばかつただろうが。

「流石ですな、カズマ殿。本来なら命すら奪いかねない魔法でしたし、相手も手練れの様でしたが……この高さなら助かりはしないでしょう」

ワルドがチラリと階段の外に視線をやりながら安心した様に言うと、桐生はデルフリンガーを鞘に収めた。

「行こう。また追つ手が来られちゃたまらねえ」

桐生が言うと、二人は領き再度階段を登り始めた。

登り切つた先には一本の枝が伸びており、その枝に沿つて一艘の船が停泊していた。マストがあつて帆が張られるらしいが、舷側には空を飛ぶ為らしい羽が突き出ていた。

桐生達が甲板に乗り込むと、眠りこけていた船員が起き上がった。

「な、なんでえ!?! てめえ等は!?!」

「船長はいるか？」

問い掛けに答えないワルドを疑わしく思った船員はラム酒の瓶をラツパ飲みすると派手にゲツプをしながら首を振って見せた。

「もう寝てるぜ。用があるなら明日来るこつたな」

ワルドは静かに杖を引き抜いて船員にその切っ先を向けた。

「貴族に二度同じ事を言わせる気か？ 僕は船長を呼んでこいと言ったんだ」

「き、貴族!？」

まどろんでいた様な船員の目がカツと見開かれて駆け出し始めた。

暫くして、手の甲で目元を擦りながら初老の男がやって来た。帽子を被っている。どうやらこの初老の男が船長らしい。

「こんな夜更けに何のご用ですか？」

船長は欠伸を漏らしながらワルドに問い掛けた。

「女王陛下直属の魔法衛士隊長、ワルド子爵だ」

船長の眠そうな目がすぐさま覚醒したかの様に開かれ、深々とワルドに対して頭を下げた。

「これはこれは……して、我が船に何のご用で？」

「今すぐ、アルピオンに発って貰いたい」

「そんな無茶な！」

「これは勅命だ。王室に逆らうつもりかい？」

「貴方方が何をしにアルビオンに行くのかこつちは知ったこつちやありませんが、朝にならなければ出発出来ません！」

「どうしてだ？」

「貴方方も知ってるでしょう!? アルビオンが最もここ、ラ・ロシエールに近付くのは朝です！ その前に出発してしまうと、風石が足りませんのや！」

「風石つてのは、何だ？」

ワルドと船長の話に割って入った桐生に、風石も知らんのか、とばかりに船長が溜め息を漏らした。

「風」の魔法力を蓄えた石の事さ。その石のおかげで船は飛ぶんだ」

桐生に風石の説明をした船長はワルドに向き直った。

「子爵様、当船が積んでいる風石はアルビオンへの最短距離分しかありません。途中で地面に墜っこつちまうのが関の山ですわ」

「風石が足りない分は、僕が補おう。僕は「風」のスクウェアだ」

船長と船員が互いに顔を見合わせた後、船長がワルドに頷いた。

「ならば結構でさあ。ただし、料金は弾んで貰いますよ」

「積み荷は何だ？」

「硫黄でさ。今のアルビオンじゃ、黄金並みの値段が付きますんで。新しい秩序を作ろうとしてる貴族の方々は、高値で買い取って下さいますんでね。火薬と火の秘薬は蓄えておきたいんでしようよ」

「その運賃と同額の報酬を出そう」

ワルドの言葉に船長はざる賢く笑みを浮かべると、控えていた船員が笛を高々と鳴らした。

「野郎共！ 出港だあつ！ もやいを放て！ 帆を打て！ グズグズするんじやねえ！」

眠っていた所を起こされて不機嫌そうにブツブツと文句を漏らしながらも訓練された船員達は無駄のない動きで準備を終了させ、風石を発動させた。打たれた帆と羽が風を受けて、ゆっくりと船が動き出す。

「アルビオンにはどれくらいで着く？」

「明日の昼過ぎには、スカボローの港に到着でさあ」

ワルドと船長の会話を聞きながら、桐生は舷側に乗り出して棧橋の枝から覗くラ・ロシエールの町を見渡した。

あの三人は無事に逃げただろうか、妙な無茶をしてなければいいが、と考える思わず



苦笑する。まるで父親の気分だ、と。

ルイズが舷側から町を見下ろしている桐生に近付き、ジャケットの裾をクイツと引つ張った。桐生が振り向くと、心配そうに此方を見るルイズの顔があった。

「カズマ……傷、大丈夫?」

不安そうに言うルイズに優しく微笑みかけ、頭を撫でてやる桐生。

「大丈夫だ……見た目程酷くはねえ。心配かけて悪いな」

「……使い魔の心配は、貴族として当然だわ」

精一杯強がって言う物の、瞳には安堵の色を浮かべながらルイズは苦笑して言った。

そんな二人の元に、ワルドが寄ってきた。

「船長の話では、ニューカッスル付近に陣を配置した王軍は、攻囲されて苦戦中の様だ。貴族も馬鹿じゃない、傭兵や手練れの兵士を引き連れて攻め続けているらしい」

ルイズがハツとした顔になった。

「ウエールズ皇太子は?」

その質問にワルドは首を振った。

「わからない。生きてはいるらしいが……」

「でも、もう港町は反乱軍に押さえられているんでしょう?」

「その様だね」

「なら、どうやって王党派と連絡を取れば良いのかしら」

「ふむ、危険ではあるが……」

「陣中突破、か」

顎に手を当てしかめ面を浮かべるワルドに桐生が言うと、ワルドは頷いた。

「ええ。スカボローからニューカッスルまでは馬で一日ですから、何とか反乱軍の間を抜けて向かうしかないでしょう」

「上手く……行くのかしら」

不安そうな声を漏らすルイズに、ワルドが肩に優しく手を添えた。

「大丈夫さ。反乱軍も公然とトリスティンの貴族に手出しは出来ないだろう。隙を見て、包囲網を突破したら真っ直ぐニューカッスルの陣へと向かう。ただ、夜の闇には気を配らなければならないがね」

ルイズが緊張した顔で頷くと、ワルドが微笑みかけた。

「心配ないよ、ルイズ。何があっても、僕とカズマ殿がいれば大丈夫さ。そうでしょう、カズマ殿？」

ワルドの問い掛けに、桐生は力強く頷いた。それを見たルイズの表情に、安堵の色が少し浮かんだ。

「そう言えばワルド、貴方のグリフォンはどうしたの？」

ルイズがふと思い出した様に聞くと、ワルドが口笛を吹いた。すると、力強い羽ばたきで船の下からグリフォンが舞い上がり、甲板に着地して船員達を驚かせた。

桐生はひとまず、まだまだ安心が出来ないのを悟って舷側に座り込んで瞳を閉じた。休めるうちに休み、体力を温存しておこうと考えたのだ。

ルイズとワルドの相談の声が徐々に遠くなり、桐生は夢の中に落ちていった。

## 第14話

臉に当たる眩しい光に桐生は目を覚ました。まだ寝ぼけてぼやけた視界の中を、ドタと船員達が走り回っている。

目を擦って身体を起こすと、青空が広がっていた。舷側から下を覗き込むと、白い雲がまるで波打つ海のように広がっている。船は雲の上を進んでいるのだ。

「アルビオンが見えたぞー！」

鐘楼の上に立った見張りの船員が、手に持った鐘を鳴らしながら叫ぶ。

冷たく強い風が頬を撫でる中、桐生は辺りを見回したが陸地らしい物が見えず首を傾げる。

「何してるの、カズマ？」

いつの間にか側へ寄って来ていたルイズが、桐生に声を掛けた。

「どこにも陸地がないんだが……本当にアルビオンとやらに着いたのか？」

桐生がそう尋ねると、ルイズは小悪魔っぽい笑みを浮かべて空の一点を指差した。その指先を目で追った桐生の表情が驚きの物に変わる。

雲の切れ間から、巨大な大地が覗いている。黒々とした岩肌を晒す大地は視界の続く

限り延びており、その上の地表には山がそびえ立ち、川が流れていた。

「どう？ 驚いた？」

舷側に身を乗り出し笑みを浮かべたままのルイズが桐生に尋ねる。桐生はルイズの方に顔を戻すと、素直に頷いた。

「あれが浮遊大陸アルビオン。ああやって空中を浮遊して、主に大洋の上をさまざつてゐるわ。でも、月に何度かだけど、ハルケギニアの上にやつてくるの。大きさはトリステインの国土ほどあるわ。通称、「白の国」と呼ばれてるわね」

「何で「白の国」と呼ばれるんだ？」

桐生の疑問に、ルイズは大陸を指差しながら説明した。

大陸に流れる大河から溢れ出した水が空に落ちる際、白い霧となつて大陸の下半分を包んでいる様子からそう呼ばれているらしい。その霧はやがて雲となり、大雨となつてハルケギニアの大陸に降り注ぐのだそうだ。

熱心にルイズの説明を聞いていると、鐘楼に立っている見張りの船員が大声を上げた。

「右舷上方の雲中より、船が接近してくる模様！」

見張りの言う方に桐生が首を向けた。見ると黒塗りの一隻の船が此方に近付いている。大きさは自分達の乗っているこの船より一回り大きい。舷側の開いた穴からは大

砲が突き出ていた。

「大砲とは、穏やかじゃねえな……」

桐生が眉をひそめて呟くと、ルイズが不安そうに顔に影を差した。

「まさか……貴族派の、反乱軍の軍艦？」

後甲板でワルドと並び操船の指揮を取っていた船長が見張りの指差した方向を見た。

黒くタールの塗られた船体は、さながら戦闘艇を思わせた。舷側の開かれた穴から突き出た二十数個もある大砲が、その砲門を此方に向けている。

「ありゃあアルビオンの貴族派か？ ふん、お前達の為の荷物を運んでる船だと伝えろ！」

船員は船長の指示通り手旗を振った。しかし、向こうからの返信はない。

船長が首を傾げていると、副長が青ざめた顔で駆け寄って来た。

「せ、船長！ あの船は旗を掲げておりません！」

その言葉に、船長の顔も青ざめた。

「つてえ事は……空賊か!？」

「その様です！ 内乱の混乱に乗じて、活動が活発化してると聞いています！」

「そ、そりややべえ！ 逃げろ！ 取り舵いっばいだ！」

すぐさま空賊から逃げる様に指示を出す船長。しかし、既に遅かった。併走している黒船から、桐生達の乗り込んだ船の針路目掛けて大砲が放たれた。

「ボゴンツ！」と音を立てて砲弾が雲の中に消えていった。いつでも当てられるという、脅しの一発である。

黒船のマストに、四色の旗流信号がするすると登った。

「て、停船命令です……船長」

副長が弱々しく言った。

船長は歯を食いしばり、拳を握り締めた。この船にも一応移動式の大砲が、三門ばかりはある。が、黒船の舷側から開かれている砲門は二十数個。それに比べれば役に立たない飾り同然だ。

思わず助けを求めてワルドを見る船長。が、ワルドは静かに首を振った。

「僕の魔法はこの船を浮かばせる為に使ってしまったって打ち止めだよ。あの船に従うしかない」

落ち着いた調子で言い放つワルドに、船長は深い溜め息を漏らしながら下を向いて俯いた。

「裏帆を打て……停船だ」

いきなり現れて大砲を放った黒船と、行き足を弱めて停船した船に、ルイズは怯えて桐生に抱き付いた。そんなルイズの肩に、桐生は優しく手を乗せてやる。

「空賊だあつ！ 死にたくなかつたら抵抗すんなあつ！」

黒船からメガホンを持った男が大声で怒鳴った。

「空賊ですつて？」

ルイズが驚いた声で言う。

此方に向けて狙いを定め、弓やフリントロック銃を構えた男達が黒船の舷側に並び始めた。

鉤の付いたロープが放たれ、桐生達の乗っている船の舷側に引つ掛けられる。それを伝つて手に斧や曲刀を持った屈強な男達が乗り込んで来た。数は数十人と多い。

桐生はルイズを自分の後ろに追いやり、腕を組んで静かに相手の動きを見詰めていた。抵抗はしない様だ。

「カズマ……」

不安そうに声をかけるルイズの頭を優しく撫でてやると、ワルドが此方に寄つて来た。

「ここは、素直に相手に従うしかない様です。相手にメイジがいる可能性もありますしね」



「ああ。しかもあの砲門の数が此方に向いてるとなると……抵抗した所で無意味だろう」

溜め息混じりに言うワルドに、桐生は頷いて言った。

乗り込んでくる男達に驚いたワルドのグリフォンが甲高い声で鳴き叫び、一瞬男達を驚かせた。が、突然グリフォンの顔に白い靄がかかったかと思うと、グリフォンは身体を横にして眠りこけてしまった。

「あれは……眠りの雲。やはりメイジもいる様だ」

ワルドが羽根付き帽子を深く被って眩いた。

甲板に降り立った空賊達は、乗組員含め桐生達を一カ所に集めた。そして、一人の空賊が前に出る。

元々は白かったであろう汗とグリース油で薄汚れたシャツの胸元をはだけ、赤銅色に日焼けした逞しい胸が覗いている。ボサボサの長い黒髪を赤い布で乱暴に纏め、顔中には無精髭が生えている。体格も一番良く、左目に眼帯をつけている事から、どうやら空賊の頭らしい。

「船長は誰でえ？」

荒っぽい口調で尋ねながらギロリと鋭い右目が船員達を見回した。

「私だ」

震えながらも精一杯威厳を保とうと強く言いながら船長が前に出る。

頭は船長に近付き、顔を抜いた曲刀でピタピタ叩いた。

「船の名前は？ それと、積み荷は何でえ？」

「トリステインの「マリー・ガラント」号。積み荷は硫黄だ」

「硫黄だあ？」

空賊達の間で溜め息や舌打ちが漏れた。頭の男はニツと笑うと船長の帽子を取り上げ、自分の頭に被せた。

「船ごと全部買い取るぜ。代金はてめえ等の命だ」

船長が俯き屈辱に身体を震わせる。それから頭は船員と並んでいるルイズとワルドに気付いた。

「あん？ 貴族の客も乗せてんのか？」

そう言つて頭は、ルイズの顔を覗き込んだ。

「こりやあ別嬪な娘じゃねえか。お前、俺の船で皿洗いでもやらねえか？」

男達から下卑た笑い声上がり、頭がルイズの顎に手を延ばした。が、その手がルイズの肌に触れる事はなかった。桐生の手が頭の手首を掴み、振り払つたのだ。

「汚え手で俺の主人に触るな」

「んだあ？ てめえは？」

頭が曲刀を桐生の首筋にあてがいながら睨み付ける。桐生はその目を真っ直ぐ見返しながら殺気の籠もった眼光を放った。

暫くの間沈黙が続いたが、頭がニツと笑って曲刀を鞘に収めた。

「その目つき、てめえ堅気じゃねえな。この俺にも怖じ気付かねえとは……：：：気に入ったぜ！」

頭はルイズとワルド、そして桐生を指差して男達に言った。

「こいつ等も運べ。身の代金がたんまり貰えそうだ」

空賊に捕らえられた桐生達は船倉に閉じ込められた。「マリー・ガラント」号の船員達は自分達の物だった船の曳航を手伝わされてるらしい。

桐生は剣を取り上げられ、ワルドとルイズは杖を取り上げられた。鍵をかけられては最早手も足も出ない状況だ。

倉庫の中には酒樽や穀物の詰まった袋、火薬樽等が無造作に積まれていた。そんな積み荷を、ワルドは興味深そうに見回した。

桐生は仕方なしにその場に座り込むと、手をついた左手に鋭い痛みを感じ、思わず顔をしかめた。どうやら昨日あの仮面の男の魔法で負った傷が痛んだらしい。

そんな桐生を見て、ルイズがしやがみ込んで不安そうに顔を覗き込んだ。

「カズマ、やつぱり昨日の傷、痛むんじや……」

「……大丈夫だ、それほどじゃねえ」

心配そうに言うルイズの不安を取り除こうと穏やかに言った桐生だが、上手くはいかなかった。

「嘘よ」

桐生が止めようとするのも間に合わず、ルイズは桐生のジャケットの袖を捲り上げた。

「きやつ!?!」

そこは、酷い事になっていた。

手首から肘まで続く巨大なミミズ腫れが水袋となつて膨らんでいる。

「何で……何で黙つてたのよ!?! こんな酷い傷、放つておいたりして!」

「……一刻を争う任務なんだろう? たかがこんな傷で、一々止まっちゃいられねえだろ?」

ルイズの事だ。きつと自分の傷を見れば、こうやつて冷静さを失つてしまうのは目に見えていた。だから隠していたのだが、どうやら隠し通すのは無理だった様だ。

ルイズは立ち上がつてドアを叩きながら叫んだ。

「誰か! 誰か来て!」

ルイズの声とドアを叩く音に、看守の男が起き上がった。

「……………んだよ、うるせえなあ」

「水を！ あと、「水」系統のメイジはいないの!? 怪我人があるの！ 早く治して！」

「ああ？ いねえよ、メイジなんて」

「嘘よ！ いるんでしょ!?!」

必死に叫んで取り乱すルイズの姿を見て、ワルドが驚いた。桐生はそんなルイズの肩を掴んで、ドアを叩くのを止めさせる。

「ルイズ、今は大人しくしてろ。俺達は捕まってるんだ。無闇に騒いで体力を消耗しない方がいい」

「嫌よ！ だって……………だってカズマ、怪我してるのよ!? これ以上放って悪化でもしたらどうすんのよ!?!」

「だから大丈夫だって言ってるだろう? 確かに痛むが……………自分の身体だ、自分が一番良く」

「嘘よ!」

桐生がなだめる様に言葉を口にしてるのを遮り、ルイズが桐生に抱き付いて顔を腹部に埋めた。

「ギーシュとの時だってそうだったじゃない……………あんなに手、怪我してたのに黙って

……何で我慢なんかするのよ……」

くぐもつた声を漏らしながら、ルイズの肩が小刻みに震えている。泣いてしまつていいらしい。そんなルイズの頭を優しく撫でてやる。

「悪かつたよ、ルイズ……だから、泣くな。なっ?」

「泣いてなんか、泣いてなんかいないもん……」

桐生から身体を離し、弱々しく言いながら瞳から涙を溢れさせてルイズが言うと、桐生に背を向けた。

桐生はワルドに目配せし、ワルドは頷いてルイズの肩を優しく抱いた。

ふと、突然扉が開き、丸々と太つた男がスープの盛られた三人分の皿と水の注がれたコップが乗つた盆を持つて入つて来た。

「飯だぜ」

桐生がそれを受け取ろうとすると、男は盆をひよいと遠ざけた。

「おっと、質問に答えてからだぜ」

ルイズが手の甲で目元を拭い、真つ赤な目で男を睨み付けた。

「何よ?」

「お前等、何の目的でアルビオンに向かつてたんだ?」

「旅行よ」

ルイズは腰に手を当て、毅然とした態度で答えた。

「トリステイン貴族が、今時アルビオンへ旅行だあ？ 一体何を見物するつもりだい？」

「それはこっちの勝手でしょ？ そこまで貴方に言う必要はないわ」

「はっ！ 怖くて泣いてた割には、随分と強がるじゃねえか」

ルイズがそっぽを向くと、男は笑って桐生に盆を手渡し出て行った。

桐生はスープの皿をワルドに渡し、そしてルイズに差し出した。

「ルイズ、お前の分だ」

しかし、ルイズはスープをチラツと見るなり顔を背けた。

「あんな連中の出したスープなんて飲めないわ」

「ルイズ、気持ちにはわかるけど、食べないと身体が持たないぞ？」

ワルドに言われ、ルイズはしぶしぶと言った感じで皿を受け取った。

たいして美味くもないスープを飲み干すと、やる事がなくなってしまった。

ワルドは壁に背をつき、物思いに耽っている様だ。

桐生は一瞬煙草を吸おうと考えたが、火薬樽があるのを思い出して思いとどまった。

ルイズはシャツの袖を破ると、コップの水に浸けて桐生に近付き、それを傷口に這わ

せて冷やした。

「これで少しは違うはずよ」

傷全体を破いたシャツの袖を水に浸けて這わせると、ルイズは満足げに笑みを浮かべた。

「ありがたいな、ルイズ。」

桐生が素直に礼を述べながら笑顔を見せると、ルイズは首を振った。

「使い魔の面倒は、メイジの嗜みだわ」

必死に厳しそうな顔をしようとしているが自然と笑みが浮かんでしまいうらしく、上手くいかずになんとも変な表情を浮かべてしまうルイズ。

その時、再びドアが開かれた。今度は痩せぎすの男が入って来て、三人をじろりと見回した。

「おめえ等、もしかしてアルビオンの貴族派かい？」

三人は答えず黙り込んだ。

「おいおい、だんまりじゃわかんねえぜ。でもよ、もしそうだったら、失礼したな。俺達は貴族派の皆さんのおかげで商売させて貰ってるんだ。王党派に味方しようとする酔狂な連中がいてよ。そいつ等を捕まえる密命を帯びてるのさ」

「なら、この船はやっぱり反乱軍の軍艦な訳ね？」

「いやいや、俺達は雇われてる訳じゃねえ。あくまでも対等な関係で協力し合ってるのさ。まあ、おめえ等には関係ねえ事だがな。で、どうなんだ？ 貴族派か？ そうだつ



てんなら、きちんと港まで送ってやるよ」

ここで桐生は一瞬考えた。この場で貴族派と言えば、とりあえずは港に入れる。しかし、ルイズは思いつ切り首を横に振ると、真つ向から男を睨み付けた。

「誰が薄汚い反乱軍の味方な物ですか。馬鹿言わないでちょうだい。私は王党派への使いよ。まだあんた達が勝った訳じゃないんだから、アルビオンは王国のままだし、正當な政府はアルビオンの王室。私はトリステインを代表してそこに向かう貴族なのだから、言うなれば大使よ。だから大使としての扱いをあんた達に要求するわ」

ルイズは言い終えると、ふんつ、と鼻を鳴らして見せた。

あまりにも正直な、馬鹿正直な言葉だった。此方の目的は伝えてしまふし、更には此方が相手にとって敵である事を伝えてしまったのだ。どことなくルイズらしい言葉に、桐生は思わず笑ってしまった。

「ちよつとカズマ!? 何笑ってんのよ!」

「いや……お前らしいな、と思つてな」

真つ赤になつて怒鳴るルイズと笑い続ける桐生を見て、男も笑い声を上げた。

「正直なのは確かに美德だが、おめえ等、タダじゃ済まねえぜ?」

「あんた達みたいな人間に頭を下げるくらいなら、死んだ方がマシだわ」

ルイズが言い切ると、男は、

「頭に報告して来る」

と言つて倉庫から出て行つた。

「やれやれ、これで俺達も終わりか？　まあ、確かにあんな連中に頭を下げるのは癪だな」

さほど気にしていない様子で桐生が呟くと、ルイズが拳を握り締めた。

「私は諦めないわ。地面に叩き付けられるまで、まだロープが伸び続けている事を信じてる」

そんなルイズの肩を、ワルドは優しく掴みながら楽しげに笑つた。

「流石は僕の妻となる女性だ。良かったよ、ルイズ」

ルイズはワルドに言われると、複雑な表情で俯いた。そんなワルドを、桐生はどこか冷ややかな目で見つめていた。

再びドアが開くと、先程の痩せぎすの男が入つてきた。

「頭が呼びだ、こつちに來な」

狭い通路を通り、細い階段を上つて三人が連れて來られたのは立派な部屋だつた。

後甲板に設けられたそこが、空賊の頭の部屋らしい。

がちやりと開かれたドアの先には豪華なダイナーテーブルがあり、一番上座に先程の

頭が腰掛けていた。手には大きな水晶の付いた杖が握られている。どうやら、格好はともかくメイジらしい。

頭の周りにはガラの悪い空賊達が立ち並び、ニヤニヤと笑って入ってきた桐生達を見つめている。

ここまで桐生達を連れてきた瘦せぎすの男がルイズの背中をつついた。

「おい、お前等、頭の前だ。挨拶しな」

しかし、ルイズはキツと睨むばかり。頭はにやつと笑って見せた。

「気の強い女は好きだぜ。子供でもな。さあ、名乗りな」

「さっきこの後ろの瘦せつぼちにも言ったけど、大使としての扱いを要求するわ」

ルイズは頭の言葉を無視して後ろの瘦せぎすの男を指差して顔を背けた。

「そうじゃなきやあんだ達となんてこれっぼっちも口を聞きたくないわ」

しかし、そんな挑発的なルイズの言葉を頭も無視した。

「お前等、王党派と言ったな？」

「ええ、言ったわよ」

「何しに行くんだ？ あいつ等は、明日にでも消えちまうぜ？」

「そんな事、あんだ達に言う必要なんてないわ」

頭はそんな態度のルイズを見て楽しそうに笑う。

「貴族派につく気はないのかい？ あいつ等、メイジを欲しがっている。たんまり礼金を貰えるだろうぜ？」

「死んでも嫌よ」

桐生がルイズに目をやると、僅かだが、身体が震えているのがわかった。態度こそ気丈に振る舞ってはいるが、やはり怖いのだろう。当然だ。

「もう一度言う。貴族派につく気はないか？」

ルイズはキツと顔を上げ、腰に手を当てて胸を張った。口を開こうとした瞬間、桐生がその後を引き取った。

「何度も同じ事を言わせるな。つかねえと言つたら」

「またてめえか……」

頭は桐生の方に目をやって睨み付けた。

「そーいやあの時、俺の主人とか抜かしてたな。てめえはこの女の何だ？」

「使い魔だ」

「使い魔？」

「ああ、そうだ」

頭は大声で、さも楽しそうに笑った。

「トリステインの貴族は気ばかり強くていけないな！ まあ、どこぞの国の恥知らずよ

りも何百倍もマシか！」

頭はそう言いながら立ち上がる。頭の突然の態度の豹変ぶりについて行けない桐生達は呆気に取りられて口を開けていた。

「これは失礼した。貴族に名を尋ねるなら、まずは自分から名乗らなくてはね」

その言葉に立ち並んでいた空賊達の顔から笑みが消え、ビシッと背筋が延ばされた。

頭は束ねられた黒髪を引つ張った。それはカツラだった。中から黄金に輝く髪が現れ、眼帯を取り外し、作り物だったらしい無精髭をビリッと剥がした。現れたのは凛々しい若者だった。

「私はアルビオン王立空軍大将、本国艦隊司令長官……と、格好をつけても既に本艦「イーグル」号しか存在しない、無力な艦隊だがね。まあ、肩書きなんかより此方の方が通りがいいだろう」

若者は苦笑を浮かべて居住まいを正し、威風堂々と名乗り上げた。

「アルビオン王国皇太子、ウエールズ・テューダーだ」

ルイズが口をあぐりと開けた。桐生は面食らった様な表情で、名乗り上げた若き皇太子を見つめた。その横で、ワルドはウエールズを興味深そうに見つめた。

「アルビオン王国へようこそ、大使殿。さて、では今回の御用の向きを伺おうか」

あまりの事の展開に、桐生達は口も開かずぼうっと立ち尽くす。

「ははあ、何故私が空賊風情に身をやつしているのだ？　と考えているのだね？　いや、金持ちの反乱軍には続々と補給や支援の物資が送り込まれる。敵の補給路を絶つのは戦での基本中の基本だ。しかしながら堂々と王軍の軍艦旗を上げてはあつと言う間に反乱軍の船に囲まれてしまう。まあ、そんな訳で空賊を演じているのだよ。はは、なかなか様になっていただろう？」

まるで悪戯小僧の様なあどけない笑顔を浮かべてウエルズが言う。

「いや、大使殿、先程は誠に失礼をした。しかしながら、君達が王党派という事がなかなか信じられなくてね。外国に我々の味方の貴族がいるなど、夢にも思わなかったよ。君達を試す様な真似をしてしまい申し訳ない」

ウエルズの言葉が聞こえていないのか、ルイズは口を開けたまま微動だにしない。いきなり目的の人物が目の前に現れてしまい、心の準備が出来ていなかったのだ。

「アンリエッタ姫殿下より、密書を言付かって参りました」

ワルドが一步前に出て、羽根帽子を外して優雅に頭を下げた。

「ほう、姫殿下とは……君は？」

「トリステイン王国魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵にございます」

それからワルドは、ルイズ達をウエルズに紹介した。

「そして此方が姫殿下より大使の大任を仰せつかったラ・ヴァリエール嬢とその使い魔

の青年にございます、殿下」

「なるほど！ 君の様な立派な貴族が、私の親衛隊に後十人ばかりいたらこの様な惨めな姿で出会う事もなかっただろうに！ して、その密書とやらは？」

ウエールズの言葉に、ルイズが慌てて胸のポケットからアンリエッタの手紙を取り出した。

恭しくウエールズに近付いたが、突然立ち止まり、手紙を胸元でギュツと握り締めた。

「あ、あの……」

「何かな？」

「その、失礼ですが、本当に皇太子様なのですか？」

ルイズが申し訳なさそうに尋ねると、ウエールズは優しく微笑んだ。

「まあ、先程の顔を見れば疑ってかかるのは当然の事。しかしながら、私は正真正銘、ウエールズだよ。そうだね……せっかくだ、証拠をお見せしよう」

ウエールズは自分の薬指に嵌められていた指輪を外すと、ルイズの左手を取って、薬指に嵌められた「水」のルビーに近付けた。二つの宝石は互いに共鳴し合い、虹色の光を振り撒いた。

「この指輪は、アルピオン王家に伝わる「風」のルビーだ。君がその指に嵌めているのは、アンリエッタの「水」のルビーだね？」

ルイズは頷いた。

「水と風は虹を作る。王家の間にかかる虹をね」

「大変失礼をば、致しました」

ルイズは一礼して、手紙をウエールズに差し出した。

ウエールズは愛おしそうにその手紙を受け取ると、花押にそつと口付けた。それから慎重に封を開き、中の便箋を取り出して読み始めた。

暫く真剣に読んでいたが、そのうちに顔を上げた。

「姫は結婚するのか？ あの愛らしいアンリエッタが……私の、可愛い従妹が」

ワルドは黙ったまま頷き、肯定の意を表した。

再びウエールズは便箋に目を落とすとし、最後の一行まで読むと頷いた。

「用件はわかった。姫はどうやら、あの手紙を返して欲しいとの事を私に告げている。何よりも大切な、姫から貰った手紙ではあるが、姫の望みは私の望み。了解した」

ウエールズの言葉に、ルイズの顔が輝いた。

「しかし、残念ながら件の手紙はこの場にはない。ニューカッスルの城にあるんだ。姫の手紙を、空賊船に連れてくる訳にはいかなかったのですね」

ウエールズは笑って言った。

「多少面倒ではあるが、君達にもニューカッスルまで足労願いたい」



桐生達を載せた軍艦「イーグル」号は、浮遊大陸アルビオンのジグザグした海岸線を、雲に隠れる様に航海した。数時間その様に雲の中を進むと、大陸から突き出た岬が見えてきた。岬の突端には、高い城がそびえ立っている。

ウエールズは桐生達に、あれがニューカッスルの城だと言う事を説明した。しかし、「イーグル」号は真つ直ぐニューカッスルに向かわず、大陸の下側に潜り込む様な進路を取った。

「何故下に潜る？ 目的地は目と鼻の先だろうか？」

桐生がそう言うと、ウエールズが城の上空を指差した。その先には、巨大な船が降下して来るのが見える。慎重に雲中を航海して来た甲斐あつてか、向こうは「イーグル」号が見えていないらしい。

「叛徒共の軍艦だ」

ウエールズが忌々しそうに呟いた。

巨大と言う形容しか出来ない禍々しい巨艦だ。長さは「イーグル」号の二倍ほどもある。帆を何枚もはためかせ、ゆつくりと降下したかと思うと、ニューカッスルの城目掛けて並んだ砲門を一斉に開いた。激しい轟音と斉射の振動が「イーグル」号にまで伝わってくる。放たれた砲弾は城に着弾して城壁を崩し、小さな火災を発生させた。

「かつての本国最高にして最強の軍艦、「ロイヤル・ソヴリン」号だ。今では叛徒共の軍艦として、「レキシントン」と名前を変えられているがね。あれが城の上空を閉鎖してるのさ。時々ああやって降りてきては、嫌がらせの様に大砲をぶっ放していく」

桐生が雲の切れ目から遠く覗く巨大な軍艦を見上げた。無数とも言える数の大砲が舷側から突き出て、艦上にはドラゴンが舞っている。

「大砲は両舷合わせて百八門。おまけに竜騎兵まで積んでいる、まさに魔物の船さ。あの軍艦の反乱から、全てが始まった。さて、我々の船は当然あんな化け物が相手では歯が立たない。だから雲中を抜けて大陸の下からニューカッスルに近付く。そこに我々しか知らない秘密の港があるんだ」

そう言つてウェールズが笑つた。

ズンズンと下に「イーグル」号が雲中を進み、大陸の下に出ると辺りは真つ暗になつた。大陸が頭上にあつて日の光が差さないせいである。おまけに雲の中だ。視界がゼロに等しく、簡単に頭上の大陸に座礁する危険がある為、反乱軍は大陸の下には絶対に近寄らないとウェールズは語る。

「地形図を頼りに測量と魔法の明かりだけで航海する事は、王立空軍にとつては造作もないんだが、奴等は空を知らない無粋者だからね」

恐らく、ウェールズは笑いながら言っているのだろう。しかし、桐生達は大陸の下に

広がる闇に包まれ、辺りに何があるのか全くわからないのだ。わかるのは、頬を撫でる湿った冷たい空気ぐらいである。

暫く航行すると、突然船が止まった。マストに淡い魔法の明かりが灯され、辺りが僅かながら見える。すると、頭上に直径三百メートルほどの、黒々とした穴の真下にいる事がわかった。

「一時停止」

「一時停止、アイサーー!」

掌帆手が命令を復唱すると、「イーグル」号は裏帆を打って帆がたたまれ、穴の真下で停止した。

「微速上昇」

「微速上昇、アイサーー!」

ゆるゆると「イーグル」号が穴に向かって上昇を始めた。「イーグル」号の航海士が乗り込んだ、「マリー・ガラント」号もそれに続く。

「まるで空賊の様ですな、殿下」

ワルドが皮肉めいた言い方をする、ウエールズはにっこりと笑って頷いた。

「まるで、ではなく、正に空賊なのだよ、子爵」

## 第15話

穴に沿って「イーグル」号が徐々に上昇していくと、頭上にうつすらと灯りが見えた。突然眩い光に包まれたかと思うと、艦はニューカッスルの秘密の港に入港していた。

そこは真っ白い光苔に覆われていた鍾乳洞だった。発行する苔の明かりはなかなか明るく、岩壁の上に大勢の人間が待ちかまえていたのが見えた。「イーグル」号が鍾乳洞の岸壁に近付くと、その人物達は一斉にもやいの縄を飛ばした。すぐさま「イーグル」号の水兵達が投げられた縄を手に取り、船体にゆわえ付けていく。「イーグル」号は岸壁に引き寄せられ、車輪のついた木のタラップがゴロゴロと音を立てて近付き、船体にびったりと取り付けられる。

ウエールズは桐生達を促し、タラップを降りた。

タラップの周りに集まっている兵隊達の中から、背の高い年老いたメイジが前に出てウエールズに笑みを浮かべた。

「ほほう！ 殿下、見事な収穫ですな！」

老メイジは「イーグル」号に続いて鍾乳洞に現れた「マリー・ガラント」号を見て嬉しそうに声を上げた。

「喜べ、バリー！ みんな！ 今回の収穫は硫黄だ！」

ウエールズが手を上げて叫ぶと、集まっていた兵隊達は拳を高々と振り上げて歓声を上げた。雄叫びの様な歓声が鍾乳洞の中で反響する。

「おお！ 硫黄ですと！ 火の秘薬ではございませんか！ これで我々の名誉も、守られるのですな！」

バリーと呼ばれた老メイジは嬉しそうに声を上げた後、ローブの裾で目元を押さえながら涙を流し始めた。

「先代にお仕えて六十年……こんな嬉しい日はありませんよ、殿下。反乱が起こってから毎日の様に苦渋舐め続けましたが、これだけの硫黄さえあれば……」

涙を流しながら嗚咽混じりに呟くバリーの肩を、ウエールズは優しく叩くとニツと満面の笑顔を浮かべて頷いた。

「王家の誇りと名誉を叛徒共に示した上で、敗北出来るだろう」

「名誉ある敗北ですぞ！ この老骨、年甲斐もなく武者震いが……！」

先ほどまでの泣き顔とは打って変わり、身体の震えを強調する様にバリーが手を広げて見せると、兵隊達の中から一人が前に出てウエールズに敬礼した。

「殿下！ その問題の叛徒共が、明日の正午に攻城すると伝えて来ました！ 殿下の此度の成果、まさに千載一遇の収穫です！」

「そうか！　まさに間一髪と言うやつだな！　戦に間に合わぬ等、武人として後世に語り継がれるであろう恥となる！」

「まったくですな！」

ウエールズはバリーや兵隊達と、心底楽しそうに笑いながら話している。

ルイズはウエールズ達の会話の中に敗北と言う言葉に思わずゾツとした。以前、父に聞いた事がある。戦争に敗北と言う言葉は存在しない。あるのは勝利か、死のみだと。つまり、彼等は死ぬつもりなのだ。

「おお……そう言えば、そちらの方々は？」

バリーは桐生達の存在に気付き、ウエールズに首を傾げて見せた。

「トリステインからの大使殿一行だ。重要な用件で、我が国に参られた」

ウエールズの説明に、バリーは一瞬訝しげな表情を浮かべるも、すぐさま表情を改めて桐生達に歩み寄った。

「これはこれは大使殿。お初にお目にかかります。私、殿下の侍従を仰せつかっております、バリーと申します。遠路はるばるようこそ、我がアルビオン王国へ。大したもてなしは出来ませぬが、今宵はささやかな祝宴がございます。是非ともご出席下さい」

桐生達はウエールズに付き従い、城内の彼の部屋までやってきた。城の一番高い天守

の一角にあるウエールズの居室は、想像していた豪華な部屋ではなく、とても質素な物だった。

木で出来た粗末なベッドに木製の椅子と机が一組と言った、まるで平民の部屋の様だ。

王子は椅子に腰掛けると、机の引き出しを開いた。そこには宝石の散りばめられた、高価そうな小箱が入っていた。ウエールズが首からネックレスを外す。その先には小さな鍵が括り付けられていた。鍵をゆつくりと小箱の鍵穴に差し込み捻ると、カチリと音を立てて鍵が外れた。

ウエールズが小箱を開くと、蓋の内側にアンリエッタの肖像が描かれていた。

ルイズがその小箱の中を眺めているのに気付いたウエールズは優しくはにかんで見せた。

「宝箱でね」

小箱の中には、一通の手紙が入っていた。それがアンリエッタの言っていた件の手紙らしい。ウエールズはそれを取り出し、愛おしそうに口付けた後、何度も読まれてボロボロになった手紙を開いて読み始めた。

手紙を読み返したウエールズは、再びその手紙を丁寧に畳んで封筒に入れるとルイズに手渡した。

「これが、姫から頂いた手紙だ。この通り、確かに返したよ」  
「ありがとうございます」

ルイズは深々と頭を下げると手紙を受け取り、胸元で大切そうに抱き締めた。

「明日の朝、非戦闘員を乗せた「イーグル」号が出航する。それに乗って、トリステインに帰りなさい。明日の午後、ここは戦場になる」

ルイズは躊躇うかの様に口を開いては閉じるのを繰り返すと、その内決心した様に言葉を紡いだ。

「殿下、先ほど、名誉ある敗北と話しておりましたが……王軍に勝ち目はないのですか？」

ルイズの質問にウェールズは笑顔のままあっさりと言った。

「もちろん、ないよ。我が軍は三百。敵軍は五万。万に、いや、億に一つの可能性もない。我々に来る事は、少しでも敵軍の兵を道連れに、勇敢に死ぬ事だけだろう」

その言葉に、ルイズは俯いた。

「それには、殿下の死も……含まれているのですか？」

「当然だ。私は真つ先に死ぬつもりだ。私には、私を信じてここまで付いて来てくれた家臣達がいる。何も恐れる事はないし、それが彼等への恩返しだとも思っている」

桐生には、ウェールズの気持ちが少しだけわかる気がした。自分を信じ、付いて来て



くれた人達がいれば何も怖くない。例えそれが、自らの命がかかっていようと。

ルイズは暫く俯いていたが、一度頭を上げたかと思うと、再び深々と頭を下げ、ウエールズの瞳を見つめた。

「殿下、失礼をお許し下さい。恐れながらどうしても、申し上げたい事がございます」

「ふむ……宜しい。何なりと、申してみよ」

「ただいまお預かりした姫様の手紙、この内容は……」

「止せ、ルイズ」

背後に立っていた桐生がルイズをたしなめた。しかし、ルイズは桐生の言葉を無視してウエールズに尋ねた。

「この任務を私に仰せつけられた姫様のご様子、普通ではございませんでした。まるで、遠い恋人を案じていらっしやる様な……。それに、先ほどの小箱の内蓋に描かれていますのは姫様の肖像画。更に手紙に接吻をなされた際の殿下の物憂げなお顔と言い、もしや、姫様と殿下は……」

ウエールズはルイズの言いたい事を察したらしい。暫く無表情だったが、優しい微笑みを浮かべてルイズを見つめた。

「私と、従姉のアンリエッタが恋仲だったと、君は言いたいんだね？」

ルイズは頷き、申し訳に頭を下げた。

「そう、想像致しました。とんだご無礼をお許し下さい。そうすると、この手紙の内容は……」

ウエールズは瞳を閉じて額に手を当てながら、顔を上に向けた。暫くの沈黙の後、首を振りながら口を開いた。

「恋文だよ。恐らく君が想像している通りの、ね。確かにアンリエッタが手紙で知らせた様に、この恋文がゲルマニアの皇室に渡っては面倒な事になる。なにせ、その手紙には始祖ブリミルの名の下、永遠の愛を僕に誓っているからね。君も知つての通り、始祖に誓う愛は婚姻の際の誓いでなくてはならない。この手紙が白日の下に晒された時、彼女は重婚の罪を犯す事になる。そうなれば、ゲルマニアの皇帝はアンリエッタとの婚約を破棄するだろう。そうなれば、同盟は相成らず。トリステインは一国である強力な貴族共と立ち向かわなければならぬ」

「……姫様と殿下は恋仲であつた、そう取つて宜しいのですね？」

「昔の、話さ」

ルイズは首を振り、その場に突然跪き叫んだ。

「殿下！ 亡命を！ トリステインに亡命なさつて下さい！」

これまでずっと事の成り行きを見守つていたワルドが歩み寄り、跪いたルイズの肩に手を置いた。しかし、ルイズの剣幕はおさまらない。

「お願いでございます！ 私達と共に、トリステインへいらしてくださいませ！」

「それは出来んよ」

ウエールズは、あくまでも笑顔のまま、跪いたルイズを見下ろしながら優しく言った。

「殿下！ これは、私個人のお願いでございます！ 姫様のお願いでございます！」

姫様の手紙には、そう書かれておりませんでしたか!? 私は幼き頃、恐れ多くも悲鳴のお遊び相手を務めさせて頂きました！ 姫様の性格は良く存じ上げております！

あの姫様が、ご自分の愛した男性を見捨てる筈ありません！ 仰って下さい、殿下！

姫様は、その手紙の中で亡命を勧められた筈です！」

悲痛なルイズの訴え虚しく、ウエールズは首を振った。

「その様な事は、一行も書かれていない」

「殿下！」

ルイズは立ち上がり、ウエールズに詰め寄った。

「私は王族だ。嘘は言わない。姫の名誉の為今一度言うが、亡命を勧める様な文は一行も書かれていない」

そう言いながらも、ウエールズは苦しそうにルイズから視線を逸らした。その表情、態度から、ルイズの言っている事が当たっているのが窺えた。

「アンリエッタは王女だ。自分の都合を……国の大事に優先させる筈がない」

ルイズは、ウェールズが言葉からアンリエッタを庇っているのを察した。ウェールズは例え亡命を勧める文が書いてあつたとしても、アンリエッタの名誉の為にはないと言いつ張っているのだ。

ウェールズは再び優しい微笑み浮かべると、ルイズの肩を優しく叩いた。

「君は正直な女の子なんだな、ラ・ヴァリエール嬢。正直で、真つ直ぐで、良い眼をしている。汚れない、澄んだ瞳だ」

ルイズは唇を噛み締めながら俯いた。

「だが、忠告しておこう。その様に自分に正直過ぎては、大使は務まらないよ。しつかりしなさい」

ウェールズの手がルイズの頬を撫でる。優しく、温かい感触だつた。それから机の上にある、水が張られた盆の上に乗つた針を見つめた。どうやら時計らしい。

「さあ、そろそろパーティーの時間だ。諸君等は、我等が王国の最後の客人となる。是非参加して欲しい」

桐生はルイズの肩を抱いて部屋を出て行つた。ワルドは残り、二人が出て行つたのを見計らつてウェールズに一礼した。

「おや、まだ何か御用が御ありかな？ 子爵殿」

「恐れながら、殿下にお願いしたい儀がございます」

「何なりと申されよ」

ワルドはウエールズの言葉に頷き、自分の頼みを口にした。

ウエールズは満面の笑みを浮かべて頷いた。

「何ともめでたい話ではないか！ その役目、喜んで引き受けよう！」

パーティーは城のホールで行われた。簡易の王座が設けられ、王座にはアルビオン王、年老いたジェームズ一世が腰掛け、集まった貴族や臣下を見守っていた。

明日で自分達が滅びると言う自覚があるせいなのか、華やかなパーティーが開かれた。テーブルには豪華な料理が並び、ワインを片手に着飾った兵隊達や貴族達が談笑している。まるで、最後の生を実感する様に。

会場の隅からパーティーを眺めていた桐生はふと、「最後の晚餐」を思い出していた。レオナルド・ダ・ヴィンチによって描かれたあの絵画は、キリストが十二人の弟子の内、一人が自分を裏切ると予言した最後の食事の情景だ。明日、否応なしに終わりを迎えるこの王国の人間達が、何となくその絵と重なった。

「……なんで明日、みんな死んでしまうとと言うのにこんなに明るいのよ」

独り言の様にルイズが漏らす。手に持たれてる桐生が取ってやった料理の取り皿は一切手が付けられていない。

そんなルイズにワールドが頷いた。

「最後だからこそ、明るく振る舞っているのさ」

ふと、扉が開かれてウエールズが現れた瞬間、貴婦人達の間から拍手と歓声が飛んだ。若く凛々しい王子はやはりどこでも人気らしい。ウエールズは玉座に近付き、父王に何かを耳打ちした。

ジエームズ一世は真つ直ぐ立ち上がろうとしたが、年のせいかよろけて倒れかけてしまった。

会場のあちこちから屈託のない失笑が漏れた。

「陛下！ お倒れになるのはまだまだ早いですぞ！」

「その通り！ せめて明日までは立っていて頂かなければ、我等が困ります！」

失笑と共に投げかけられる野次に気を悪くした様子もなく、ニツと人懐っこい笑みを浮かべた。

「待て待て、各々方！ 座りっぱなしのせいで足が痺れただけじゃ！」

ウエールズが父王を寄り添う様にして立ち、その弱々しい身体を支えた。陛下が小さく咳払いすると、ホールの貴族、貴婦人達がすぐさま直立した。

「諸君……忠実なる臣下の諸君等に告げる。いよいよ明日、このニューカッスルの城に立てこもった我等王軍に、反乱軍「レコン・キスタ」の総攻撃が始まる。この無能で無

力な王に、諸君等はよく従い、よく戦つてくれた。しかし、明日の戦いはもはや、戦いとは言えぬ。一方的な虐殺となろう。朕は忠勇な諸君等が傷付き、倒れる様を見たくはない」

老いたる王は激しく咳き込んだ後、ぜえぜえと息を切らしながら言葉を続けた。

「従つて、朕は諸君等に暇を与える。長年、よくぞこの王に付き従つてくれた。厚く礼を述べさせてくれ。明日の朝、巡洋艦「イーグル」号が女子供を乗せてここを離れる。諸君等もこの艦に乗り、この忌まわしき大陸から離れるが良い」

しかし、王の言葉には誰も返事をしない。

すると一人の貴族が歩み出て、高々と宣言した。

「陛下！ 我等はが陛下の口から出てくるのを待つ言葉は一つ！ 「全軍前へ！」これだけであります！ 今宵、この美味しい酒のせいか、些か耳が遠くなつてしまった様だ！ それ以外の命令は聞こえませぬ！」

その発言に次々と他の貴族が声を上げた。

「陛下！ もう酔われましたか!? まだまだ宵の口ですぞ！ 呂律が回らなくなるほど酔うには早すぎる！」

「いやいや、違う違う！ 陛下はどうやら異国の歌を歌われたのだ！ だから我等では言葉の意味が理解出来んのさ！」

その様子に王は指先で目頭を拭い、この馬鹿共が、と呟いてから高々と杖を掲げた。「よかろう！ 我が忠実なる勇士達よ！ しからばまずは飲め！ 食え！ 明日の決戦に向けて英気を養え！」

歓声が上がった後、辺りは喧騒に包まれた。

桐生達トリスティンの客人が珍しいのか、次々と貴族が挨拶に来た。みんな悲観な言葉は一切言わず、三人に明るく料理を、酒を勧めてきた。

「大使殿！ このワインは最高ですよ！」

「あいや、待たれい！ ワインよりもこの肉料理が宜しいかと！」

死を前に明るく振る舞う人々と姿に、ルイズは勇ましいと言うよりも、悲しく見えた。やがてその場の雰囲気になんとも耐えられなくなったらしく、顔を振って料理の乗った取り皿を桐生に押し付けると、外に出て行ってしまった。

桐生はルイズを追いかけ様かとも思ったが、ワルドが後を追った為任せる事にした。

一人ワインを飲んでいると、会場の中央で貴婦人達と話していたウエールズが此方に寄ってきた。

「ラ・ヴァリエール嬢の使い魔の青年だね。しかし、人が使い魔とは珍しい。トリスティンは変わった国だ」

桐生の隣に立ち言うと、ウエールズは笑った。



「トリスティンでも、珍しいらしいぜ」

グツとワインを呷り口元を拭う桐生は苦笑を浮かべた。ウエールズはそんな桐生を見て笑みを浮かべると会場でパーティーを楽しむ貴族達を二人して眺めた。

暫く二人して黙っていたが、桐生が沈黙を破った。

「あんたの親父さんは立派だな」

「もちろんさ。私の憧れだよ」

父親を褒められた事に素直に喜びを表すウエールズに桐生は頷いた。

「あれだけの人間に慕われるのは、簡単な事じゃねえからな」

かつて一度とは言え東城会の頂点に立った桐生は、素直に下についてくる構成員を作るのがどれほど難しいのを知っていた。

「ああ……父のおかげで、私も胸を張って死ねる」

ウエールズの呟きに、桐生は腕を組んでそちらを身体を向けた。

「さつきは済まなかったな」

「ヤッパキッ」

「俺の主人が、興奮しちまってたからな」

桐生は先ほど、ルイズがウエールズに詰め寄った事を謝罪した。しかし、ウエールズは気にした様子もなく、おどけた様に笑って見せる。

「別に気にしてないさ。彼女の気持ちもわかる。アンリエッタを、姫を大切に思ってるのだろう」

心から嬉しそうに呟いた後、ウエールズの表情が真剣なものに変わった。

「だが、だからと言って心を動かす訳にはいかない。「レコン・キスタ」の理想を否定はしない。だがその理想の為に流れる民草の血を、奴等は気にしない。それは、許される事ではないのだ」

「そもそも、その「レコン・キスタ」って奴等の目的はなんなんだ？」

桐生は今まで「レコン・キスタ」の名前は聞いていたものの、その組織の目的まではわかっていなかった。

ウエールズは首を振ってから溜め息を漏らした。

「奴等の目的はハルケギニアの統一だ。「聖地」を取り戻すと言う、理想の下にな」

「要は世界征服って訳か……くだらねえ」

吐き捨てる様に言つて見せた桐生にウエールズは苦笑した。

「ああ、確かにくだらぬ。だが、奴等はそれを実現させようとしている。我が国を起点として。だから我々王族は、最後まで戦わねばならぬ。それが、王家に生まれた者の義務であり、国の内憂を払えなかつた我等の課せられた責任なのだ。我等の勇気と名誉の片鱗を見せ付けた所で、「レコン・キスタ」の理想が揺らぐとは思わんが」

「例えそれで、自分てめえの愛した女を泣かす事になってもか？」

桐生は語気を強めて言った。

ウエルズは暫くの間黙っていたが、顔を俯かせた。

「愛するが故に、身を引かなければならぬ時がある。愛するが故に、突き放さなければならぬ時がある。今私がトリストインに亡命すれば、「レコン・キスタ」がトリストインに攻めいる為の格好の口実を与えてしまう」

苦しそうに言葉を紡ぐウエルズの表情は、俯き垂れた髪で隠れて見えなかった。だが、どんな表情をしているのかぐらい、桐生にはわかっていた。

「そうか……そこまでの覚悟なら、もう俺からは何も言わねえよ」

ウエルズは顔を上げ、桐生に身体を向けると手を差し出した。

「君に頼みがある。彼女に会ったら伝えてくれ。ウエルズは勇敢に戦い、そして勇敢に死んだ、と」

「ああ……必ず伝える。約束する」

桐生はしっかりとウエルズと握手を交わした。

会場から出て用意された寢室に向かう途中、ワールドが現れて桐生に近付いてきた。

「カズマ殿、貴方に伝えておく事がある」

「何だ？」

「明日、僕とルイズはここで結婚式を挙げる」

その言葉に、桐生の眉が吊り上がったのをワルドは見逃さなかった。

「随分急だな……しかもここでか？」

「ええ、是非僕達の婚姻の媒酌ばいしやくを、あの勇敢なウエルズ皇太子にお願いしたく思っています。皇太子も快く引き受けてくれました。決戦の前に、僕達は式を挙げます」

桐生は黙ってワルドの言葉を聞いていた。

「貴方は出席なさいますか？」

ワルドの質問に、桐生は首を傾げて見せた。

「ルイズが望むならな」

「では、ルイズへの確認をお願いします。もし、出席なさらなかった場合、貴方とはここで別れですな」

「そうだな……」

ワルドは桐生に一礼すると、どこかへと消えた。

桐生は薄暗い廊下を一人歩いていた。

ふと、廊下の途中に開かれた窓が見え、月が見えた。そこで一人、涙ぐんでいる少女

の姿があった。月明かりが照らす長い桃色の髪、白い頬を伝う涙はまるで真珠の様に輝いていた。

ふと、ルイズは振り向き、薄暗い廊下の少し先に桐生が立っているのに気付कि、慌てた様に目を手で拭うも、すぐに新しい涙が頬を伝った。

桐生がゆっくり近付いてルイズの目の前に来ると、ルイズは力なく桐生の腹部に顔を押し付けた。

桐生は何も言わず、優しくルイズの頭を撫でてやる。くしゃりと、柔らかい髪が桐生の指に絡まった。

「嫌、あの人達……。どうして、何で死を選ぶのよ？ 訳わかんない。姫様が逃げてと言っているのに……。恋人が逃げてと言っているのに、どうしてウェールズ皇太子は死を選ぶの？」

ルイズの問い掛けに、桐生は何も言わない。ただ黙ってルイズの頭を撫で続けた。

「愛する人より大事なものなんて、この世にあるはずないじゃない。私、もう一度皇太子を説得するわ」

「それは無理だ」

ルイズの頭を撫でながらも、強い口調で桐生が言う。

「どうしてよっ」

「お前にはあのお姫様に手紙を届ける任務があるだろう。覚悟を決めた男の事は、放っておいてやれ」

ルイズは桐生から身体を離すと、涙で濡れた眼でキツと睨んだ。

「何よ……あんたまで、自分から死ぬのが正しいって言うの？ 愛する恋人を置いて、自分の命を失うのが間違っていないって、そう言うの!?!」

廊下に響き渡る悲鳴にも近いルイズの怒声に、桐生は目を逸らさずルイズの顔を見つめていた。

やがて、桐生がゆっくりと目を閉じ、再び瞼が開かれると、口も開かれた。

「甘ったれんなよ、ルイズ」

「っ!?!」

静かだが、ゾクリとするほど怒気の籠もった声にルイズは身震いする。

「お前は今回この任務を受けて、俺がそれを許さなかった時、なんて言った？ 「命を賭ける覚悟はある」、そう言ったよな？ あの時のお前の言葉と、今あいつ等が言っている言葉に何の違いがある?」

「それ、は……」

口ごもるルイズに桐生は屈んで視線を合わせると、ルイズの肩を優しく掴んだ。

「忘れるな、ルイズ。そして覚えておけ。これが、戦争だ。くだらねえ理由だろうと何だ

ろうと、始まつちまつたら最後、終わるまで自分の大事な物を失うか、相手の大事な物を奪うしかねえ。馬鹿な野郎共が引き起こす、くだらねえ殺し合いなんだ」

桐生の真つ直ぐな目とその言葉に、ルイズは止まっていたと思っていた涙を再び流した。

桐生は立ち上がり、ルイズの身体を優しく抱き寄せると、暫くの間頭を撫でてやつていた。

どれくらいそうしていただろう。月明かりが照らす沈黙の中、桐生がそれを破った。

「ルイズ……お前は明日、結婚するんだろう?」

その言葉に、ルイズが驚いた様に顔を上げた。

「な、何よ、それ!」

「さつきワルドに言われてな。明日、あのウェールズに媒酌人をして貰い、式を挙げると言っていたぞ?」

ルイズは戸惑った様な、困惑した表情で落ち着きなく、目を動かした。

「それで、俺の出席を問い掛けられたんだが、ルイズに聞くと行ってしまつてな」

桐生の言葉は、ほとんどルイズの耳には入っていなかった。

結婚? 誰が? 誰と? 私と、ワルドが?

遠い昔、幼い頃から憧れ、婚約者となつた事を喜んでいたのに、なぜ今はこんなにも

戸惑うのだろうか。

「……おい、ルイズ？」

一向に返事を返して来ないルイズに首を傾げながら桐生が問い掛けると、ルイズは桐生の顔を見つめた。

野性的だが、どこか憂いを秘めた瞳。整った顎の髭。自分より遙か、と言うか自分の親とほとんど同い年のこの異国の男は、ルイズの心を強く揺さぶった。

「……あ……」

「あ？」

ルイズの言いたい事がイマイチわからず、オウム返しのように繰り返す言う桐生が首を更に傾げた。

「あ、あんたは……その、どう思う？ 私はやっぱり……ワルドと結婚するのが、いいと思う……？」

声が震えて途切れ途切れになる。心臓が早鐘を打っている。もしかしたら、桐生にも聞こえているかもしれない。

桐生は少し悩んだ様に黙ってから言った。

「はつきり言って、俺はワルドが気に入らねえ。だから、出来ればお前と一緒にさせるのは、余り賛成出来ないのが正直な気持ちだ」



ルイズは顔を俯かせる。耳が熱い。呼吸が思わず早くなる。

今桐生は、自分とワルドの結婚に反対している。それって、それってつまり……!?

「だが……」

淡い少女の期待は、呆気なくも砕かれてしまう。

「結局、最後を決めるのはお前だ。だから、お前が自分で選んで決めるといい」

その言葉に、ルイズの中で何かが切れた。

ルイズは突然桐生を押しやる様に身体を離すと、俯いたまま言った。

「私……ワルドと結婚する」

「そうか……」

桐生の呟きに答えもせず、ルイズは薄暗い廊下に向かって歩き出した。

「おい、ルイズ」

「話しかけないで!」

声をかけようとした桐生の言葉をルイズが怒気の籠もった声で遮る。

「もうあんたの顔なんて見たくない! 明日の式には出席しないで! それで、どこへなりとも行つちやいなさい!」

突然怒りだしたルイズに訳がわからなかったが、桐生はただ一言だけ告げた。

「わかった」

桐生の言葉を聞き、ルイズは唇を噛み締めると、そのまま廊下を走り出した。

割り当てられた寝室に入り、ルイズは一目散にベッドに横になると、頭からシーツをひっかぶった。

何を期待していたのだろう。相手は自分よりも遥かに年上の男なのに。

「馬鹿みたい……本当に、馬鹿みたい……いーう、うう……いー」

身体を震わせ、涙を流しながら嗚咽混じりに呟き、自分が本当に馬鹿みたいに思えたルイズはシーツの中でその小さな身体を丸めた。

ニューカッスルの城が見える少し離れた崖の上で、その少年は小さな茶色い紙袋に手を入れた。中から驚掴んだナッツを口に放り、ボリボリと音を立てて咀嚼する。

「まだ行かんのか？」

少年の背後から、鉛色の顔上半分が隠れる仮面を着けた男が声をかけた。ボロボロの袖のない胴着の様な服に、日本で言う袴の様なズボン姿の男は左手に分厚い布で包まれた長い物を持ち、背中には黒い刀身の太剣を引っかけている。

「レコン・キスタ」が明日あそこを襲うんだってさ。終わってからでいいじゃない。余計な運動は好きじゃないし」

ナッツのかすが付いた指を行儀悪く舐めながら少年が言うと、男は腕を組んだ。

「つまり明日か、明後日か……あいつの「手土産」とやらが腐らなければ良いがな」

「あつはは！ そうだねえ……」

男の言葉に楽しそうに笑う少年は、砲撃によつて所々が崩れているニューカッスルの城を見つめた。

## 第16話

翌朝。

昨晩から泊まった部屋の窓際で、桐生は外を眺めながら煙草を吸っていた。開け放たれた窓から吹き込む少し冷たい風が、紫煙を攫っていく。

「どうしたんでい、相棒？」

ふと、壁に立てかけてあったデルフリンガーがカタカタと音を立てて桐生に話しかけた。

「あの娘つ子とはもうお別れなんだろう？なら自由じゃねえか。さつき知らせにきた船に乗って、さつきとこつからおさらばしようぜ？」

先ほど、ウェールズの使いを名乗る男が、戦場と化す前にここから飛び立つ「イーグル」号の出発時間を知らせに来た。その話によれば、あと数分後には出航するらしい。

しかし、桐生はその知らせを聞いても部屋から出ようとしなかった。昨日のルイズに言った言葉が、今になって桐生を迷わせていた。

内心、可笑しな話だとも思う。自分の子供ではないし、結婚と言う大事な選択は自分で選ぶ物だとも思う。最終的に決めるのはルイズ本人なのだ。その考え事態に迷いは

ない。

だが、それとは別の物が、桐生の心を悩ませていた。

ルイズの婚約者、ワルド。キュルケから聞いてもいる通り、貴族の中でも上位の階級である事は間違いないし、メイジとしての実力も確かな物だろう。

一見非の打ち所ない婚約者に見えるが、桐生が気がかりになっているのは、ルイズを見るワルドの瞳だった。あの眼、あの眼差しは……。

桐生は煙草を携帯灰皿に捻り込むと、デルフリンガーを手に取って部屋を出た。

「やっど行く気になったか、相棒。なあに、おめえと俺ならどこに行ってもやっどいけるさ」

デルフリンガーが楽しげに話すのを無視して、桐生は歩き始めた。

説明を受けた通りに廊下を歩き、昨日この城に入る際に訪れた鍾乳洞に足を踏み入れた。

タラップがかけられた「イーグル」号と、共に並んで停泊している「マリー・ガランド」号に次々と女子供、それと恐らく食糧であろう袋や樽が積み込まれていく。

「ああ、漸く来ましたか」

タラップに近付くと、先ほど桐生に出航の時間を伝えに来た使いの男が声をかけてきた。

「あんまりにも遅いから来ないと思ってましたよ。さあ、早く乗ってー」  
「結婚式はどこでやっている？」

男の言葉を遮って、桐生が問い掛ける。男は突然の質問に呆気に取られた様な表情を浮かべながら首を傾げた。

「結婚式？ ああ、あの子爵と女の子の子ですか？ いやあ、こんな時に……しかもこんな場所で式を挙げるなんてねえ。そもそも歳がー」

「どこでやっている、と聞いたんだ」

突然の式の実行に難色を表す様に愚痴り始めた男の言葉を今度は少し強い口調で遮る桐生。その迫力に男は一瞬声を詰まらせてから答えた。

「ここ、ここから昨日のパーティーの会場だったホールを抜けて階段を上った礼拝堂で行われています！」

「わかった。すまんが俺は船には乗らない。早く出航しろ」

「えっ!? ちよつと!」

場所を聞くなり突然背を向けて走り出した桐生に男は声をかけるが、桐生が振り向く事はなかった。

「何だよ、相棒……あの娘っ子の所に行くのか？」

「ああ、やはりワールドにアイツを任す訳にはいかない!」

自慢の脚力を駆使して来た道を駆ける桐生。昨日の名残とも言える、机や椅子が無造作に置かれたホールに来て思わず舌打ちする。

「ちっ！ どの階段だ!？」

ホールから抜ける開かれた扉の先にはそれぞれ上りか下りの階段がある。しかし、今見る中でも行き先が不明な上り階段が三つあった。もつとちゃんと道を聞くべきだったと、心の中で思わずごちる。

「そう言やあ、相棒。確かおめえ、「ガンダールヴ」とか呼ばれてたよな？」

突然のデルフリンガーの質問に、桐生は苛立ちを顔に表しながら頷いて見せる。

「なんつうかこう……その言葉が妙に引つ掛かるんだが……」

「デルフ、悪いがお前のお喋りに付き合ってやれる暇はねえ」

何やら唸る様に声を出すデルフリンガーに強い口調で言いつけて、桐生は一つの階段に近付いた。すると、階段の脇に栈橋で見たのと同じ鉄製のプレートが張られており、何やら文字らしき物が書いてある。恐らく階段の行き先なのだろうが、桐生には読めない。

「何でえ、相棒。字、読めねえのか？」

「この世界の字はわからねえ」

焦りを含んだ声で桐生が答えながら、内心何故焦っているのかを考えた。

嫌な予感が頭を満たしている。このままルイズとワルドが結ばれてしまったては、何か良くない事が起こる様な……そんな予感が。

こんな事なら昨日ハッキリと結婚を反対するべきだったと後悔していると、思わぬ助け舟がデルフリンガーから出された。

「ならよ、俺をプレートにかざしな。相棒の代わりに読んでやらあ」

「お前……字が読めるのか？」

少し驚いた口調と表情を浮かべる桐生に、デルフリンガーがカタカタと小さく震えた。どうやら笑っているらしい。

「あたぼうよ。こちとらおめえ数千年と生きてんだぜ？ 文字ぐらい読めらあ」

自信たっぷりと言うデルフリンガーに対して、桐生は申し訳ないと思いつつも胡散臭く思ってしまった。そもそもコイツは一体どこから物を見ているのだろうか？ 目と見える様な部分はないんだが、とデルフリンガーの全体を眺めて見る。

そんな桐生の心中を察したのか、デルフリンガーから溜め息が漏れた。

「相棒……信じてねえな？ おめえ信じてねえだろ!？」

「い、いや！ そんな事はない！ 頼む、デルフー！」

正直に言えばちよつと信じられないが、桐生は藁をも掴む思いでデルフリンガーをプレートにかざしてみた。



すると突然デルフリンガーの声が止み、静寂が辺りを包んだ。

「こりやあアレだ……「武器庫」って書いてあんど」

どうやらこの階段ではないらしい。仕方なしに次の階段に向かって同じ様に脇に張られているプレートにデルフリンガーをかざす。

「あ……こりやあ「バルコニー」って書いてあんど」

どうやらこの階段でもないらしい。

桐生は急いで次の階段に向かい、念の為再度デルフリンガーをプレートにかざす。

「ん……おっ！ ここだ、相棒！ 「礼拝堂」って書いてあんど！」

桐生はその言葉に頷くと、急いで階段を駆け上がった。

桐生が鍾乳洞へ向かった頃、始祖ブリミルの像が祀られた礼拝堂で、ウエールズは新郎新婦の登場を待っていた。ウエールズ以外は戦の準備を行っている為、彼以外の人間は誰もいなかった。

ウエールズは王族の象徴である明るい紫のマントに、アルビオン王家の象徴である七色の羽根が着いた帽子を被った格好の、皇太子の礼装に身を包んでいた。

礼拝堂のカラフルなステンドグラスから漏れる朝日の中、ゆつくりと扉が開かれ、何時もの魔法衛士隊の服に身を包んだワルドと、魔法の力で永久に枯れない花であしらわ

れた美しい冠を乗せたルイズが現れた。

どこかぼうっとしているルイズがワルドに促されてウエールズの前まで歩み寄った。

朝早くにワルドが部屋に訪れ、今から結婚式を挙げようと話された。昨日の桐生の言葉と、自ら死を選ぶウエールズ達の姿に若干の自暴自棄になつていたルイズは何も深く考えずにワルドに付いて来た。

「では、式を始めろ」

ウエールズの優しい声がルイズの耳で木霊する。

式？ ああ、そうか。今からワルドと結婚するんだ、私。

まるで他人事のように考えながら、ルイズは静かに顔を上げた。

「新郎、子爵ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。汝は始祖ブリミルの名においてこの者を敬い、愛し、そして妻とする事を誓いますか？」

「はい、誓います」

凜々しい表情で強く頷くワルドに、ウエールズは優しい微笑みを浮かべて頷いた。

「新婦、ラ・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……」

ウエールズの言葉が、ルイズの耳をすり抜けていく。

何故自分は今、こんなにも悲しいのだろう。

ワルドと結婚するから？ いや、ワルドは昔から憧れていた人だ。きつと好きだとも思う。

目の前のこの凛々しき皇太子が今日死ぬとわかっていてるから？ しかし、もうそれを止める事は出来ない。それについては昨日カズマとも話したはずだ。

そうでしょう？ とふと周りに目を配ると、そのカズマがいない。ご主人様が結婚式だつて時にどこ行つたのよ、あの使い魔は。

そこまで考えて、ルイズは思い出す。昨日自分が言つた言葉を。どこへなりとも行つちやいなさいと、言つてしまったあの言葉を。

きつと今頃、「イーグル」号に乗つてこの地を離れているだろう。もう二度と、会う事もない。

「今までの桐生との生活が頭を駆け巡る。誰よりも厳しくて、ことあるごとに叱られた。誰よりも優しく、何時も自分を守ってくれた。フーケのゴーレムからも、自分を馬鹿にしたクラスメートからも。そんな桐生と、もう会えない。」

「……新婦？」

嫌だ。そんなのは嫌だ。あの笑顔を、頭を撫でてくれた感触を、失うのは耐えられない。その気持ちに気付いた時、ルイズは改めて知つた。一番近くにおいて欲しいのは誰かを。

「…緊張してしまっている様です。まあ、初めての時はどの様な事であれ、緊張する物だろう」

ルイズの顔を心配そうに覗き込んだワルドがウエールズに言う。

ウエールズも心得ている様に頷くと、突然ルイズは首を振ってワルドから身体を離れた。

ルイズの行動の意図が読めないウエールズとワルドが首を傾げると、ルイズは決心した様に背筋を伸ばした。

「ごめんなさい、ワルド……私、貴方とは結婚出来ない」

突然の宣言に面食らった様な表情を浮かべるワルドをよそに、ウエールズが真剣な表情でルイズに問い掛ける。

「新婦はこの結婚を望まない……そういう事かな？」

「はい。お二方には大変失礼とは存じますが、私はこの結婚を望みません」

ワルドの息が詰まる気配を感じたウエールズは、そつとワルドの肩に手を置いた。

「子爵、誠にお気の毒だが……新婦が望まぬのではこの結婚、成立はさせられない」

ワルドはウエールズの手からすり抜ける様にルイズに歩み寄ると、その小さな手を取った。

「ルイズ、別に日を改めて構わない。緊張しているのだろうか？」

「ごめんなさい、ワルド。貴方の事は憧れだったの。確かに好きだったのかもしれない。でも、貴方と一緒にはない」

ルイズの言葉にワルドは表情を変え、ルイズの肩を強く掴んだ。その目つきはまるで爬虫類を思わせる様な鋭さが秘められていて、ルイズは思わず息を飲んだ。

「ルイズ、僕には君が必要なんだ！ 君の力が！ 君の才能が！」

「……何を、言ってるの？」

ワルドの剣幕に押されて怯えた様な表情を浮かべながらルイズが一步後退る。今日の前にいるのは、ルイズの知っている優しく格好良いワルドとは別人だった。

「いつだか君に言った事を忘れたのかい!? 君は始祖ブリミルを超えるほどの優秀なメイジになる！ 僕と共に来れば、世界すら君の前にひれ伏すんだぞ！」

あまりの剣幕にたじろいでいるルイズを思つてか、ウエールズは再度ワルドの肩に手をかける。

「子爵、残念とは思うが、君は振られたんだ。君も男なら潔くー」

しかし、ワルドは振り返るなりウエールズの手を振り払った。

「貴様には関係ない！」

その豹変振りにウエールズも面食らってしまう。礼儀正しく、紳士的な態度を取つていたワルドからは想像出来ない荒々しさだ。

そんなウエールズに目もくれずに、ワルドは再度ルイズの手を掴む。その強い握力に、ルイズの表情が苦痛で歪んだ。

「ルイズ！ 僕には君が、君の才能が必要なんだ！」

「い、痛い！ 離して！ 貴方が私の何を求めているかは知らないけれど、貴方が欲しいのは私自身じゃないって事じゃない！ そんな人と……結婚するなんてごめんだわ！」

ルイズは必死にワルドの手を振り払うと、ワルドと距離を取る様に後退った。

そんなルイズを、ワルドは無表情で見つめた。その瞳は光が無く、まるで氷の様に冷たい何かを感じてルイズは息を飲む。

「仕方がない。君を手に入れるのが目的の一つだったんだが……予定変更だ」

「目的？」

ルイズはワルドの言葉が理解出来ず、訝しげな表情でオウム返しのように口ずさんだ。

「そう、今回の任務で僕には三つの目的があった。一つ目は君を手に入れる事。そして二つ目は……」

そう言うのと突然ワルドの口元に禍々しい笑みが浮かび、素早い動きで腰に差していた杖を引き抜いて事の成り行きを見守っていたウエールズの胸を貫いた。

「き、貴様……」「レコン・キスタ」か……！」

「そう……貴様の命だよ、ウエールズ皇太子」

ウエールズの身体から杖を引き抜くと、ワルドは冷たい笑みを浮かべてそう告げた。ウエールズは必死にワルドに掴みかかろうとしたが、貫かれた胸元から流れる鮮血を床に流しながら静かに倒れ込んだ。

一瞬何が起きたのかわからなかったルイズは事態を飲み込むと、悲鳴を上げて腰を抜かしてしまいその場に尻餅をついた。

「これで一つの目的は達成した。最後の目的はルイズ……君のその胸ポケットに入っているアンリエッタの手紙だ」

屍となったウエールズの肩を蹴った後、ワルドは血で赤く染まった杖をルイズへと向けた。

怯える様に必死に後退るルイズに、ワルドは容赦なく歩み寄る。

「何で……何で貴方が貴族派に!? 貴方はトリスティンの貴族なのに!」

ルイズの悲痛な叫びの質問に、ワルドは笑いながら杖を掲げた。

「我々「レコン・キスタ」は、このハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて集まった貴族の連盟だ! 国の違いなど関係ない!」

そう言つてワルドは杖を振るつた。発動したのは「風」系統の魔法、「ウインド・ブレイク」。ルイズの小さな身体が吹き飛び、壁へと叩き付けられる。その際、頭に乗せていた新婦の冠がワルドの足元に転がった。ワルドはそれを踏みつける。

「残念だよ、ルイズ。君をこの手で殺さぬばならぬとは……」

ワルドは心底残念そうに言いながら床に転がるルイズを見つめた後、呪文を詠唱し始める。

「う……あつ……」

叩き付けられた背中が痛むルイズは呻き声を漏らしながら瞳から涙を溢れさせる。

涙でぼやけた視界に写るのは、うつ伏せて倒れたウェールズの死体と、呪文を詠唱しているワルドの姿だった。

こんな時、アイツがいれば。そう考えるも、件の人物はもうここにはいない。自分の身勝手な我が儘で追いやったクセに、なんて都合のいい考えを持つてしまったのだから。

頭に浮かぶのは、優しい笑みを浮かべた桐生の顔。

「……助けてカズマあつ！」

力の限りルイズが叫んだのと同時に、礼拝堂の扉が物凄い勢いでワルド目掛けて飛ばされる。

呪文を詠唱していたワルドは突然の身の危険に詠唱を中断し、背後へと飛んで扉だった木片を避ける。

それに合わせたかのように、ルイズの目の前に一人の男が駆け寄った。



「大丈夫か、ルイズ!？」

ああ……その声をどれだけ待ち望んだ事か。

心配そうに身をかがめて自分の身体を抱き上げる桐生の顔に、ルイズの瞳から安堵の涙が溢れ出る。

「カズマ……来て、くれたのね……」

「おう、待たせたな」

ルイズの目元を指先で拭って上げた後、ルイズを床に座らせて桐生はワルドに向き合った。

「やはり……貴様が邪魔をするか」

忌々しげに桐生を見ながらワルドが吐き捨てる様に言う。

「最初（はな）っからお前は気に食わなかったが……やはりこうなったか」

桐生はワルドの横で倒れたウェールズを見て辛そうに顔をしかめた。そんな桐生に、ワルドは楽しそうに笑みを浮かべながら杖を弄ぶ様に振るつた。

「貴様にも礼儀正しく接したつもりだったんだが……一体何が気に入らなかったのだ？」

平民風情が貴族にそんなに何を求めると言うのだ？」

「お前のルイズを見る眼だよ」

桐生の言葉にワルドも、ルイズも意味がわからなくて首を傾げながら桐生の次の言葉

を待った。

「初めて学園の前でお前と会った時、ルイズを見つめるお前の眼は純粋だった。でもな、あの眼は「愛する人を見る眼」じゃねえ。あれは、「新しい玩具を見つけた子供の眼」だった。だからお前がルイズを本当に愛してるのか疑問だった」

そう言つて桐生はルイズを見る。魔法を受けてボロボロになった小さな身体に、愛など感じられるはずがなかった。

「ふん、まあいい。フーケの言う通り、貴様は危険な存在だ。生かしておけば必ず我々の障害になるだろう。今この場で、コイツの様に殺してやる」

ワルドは横たわったウエールズをチラツと見て笑みを浮かべながら言った。

桐生は静かに溜め息を漏らして上着に手をかけると、そのまま一気に脱ぎ捨てた。

「っ!？」

その光景に、ルイズとワルドが言葉を詰まらせる。

露わになった桐生の傷だらけの身体は、歴戦の猛者を思わせた。腕や肩、腹等に見られる様々な銃創や切創。しかし、二人が目を見張ったのは、その背中に描かれた龍の刺青だった。

まるで荒々しく、しかし力強く天まで上ろうとしているかの様に描かれた上り龍。

「……………ふっ、ドラゴンのタトゥーか。虚仮威しには良いかもな」

「虚仮威しかどうか……その身体に教えてやるよ」

静かに怒りの籠もった声を発しながら、桐生の身体から赤いオーラが溢れ出る。

ヒートの事を聞いていたルイズはともかく、ワルドは初めて見る桐生のオーラに訝しげに顔をしかめると、杖を構えて呪文を口にした。

「ユビキタス・デル・ウインデ……」

詠唱を終え、ワルドが杖を振るう。すると、ワルドの身体が分身を始め、四人のワルドが現れた。

「奇妙な術まで使えるとはな。分身か……」

「ただの分身とは思わぬ事だ。風のユビキタス（遍在）……それぞれが意志を持ち、私自身に近ければ近いほど強くなる！」

ワルドの分身が懐から白い仮面を取り出して顔に着ける。その姿はまさに、フーケのゴーレムに乗っていた男だった。

「なるほど、あの時の男もお前だったか。ならフーケを逃がしたのも……」

「その通りだ。我々「レコン・キスタ」は国境を越えた貴族の同盟。犯罪者であろうと優秀なメイジは大歓迎なのでな」

桐生はワルドの言葉を聞き終えるとデルフリンガーを引き抜いた。錆の浮いた刀身が鈍い輝きを放つ。

「来いよ、ワルド……お前は、俺が倒す！」

「行くぞー！」

桐生がワルド本体に向かって突進すると、ワルドの分身の四人が四方に散ってその内の二人が杖を桐生に打ち込む。

ガキンと言う鈍い金属音を立てながら二人のワルドの杖捌きをデルフリンガーで受け止める桐生。しかし、突然二人が退いたかと思うと、左右に別れていたもう二人の分身が杖を振るって「ウインド・ブレイク」を叩き込んで来た。

デルフリンガーを構えてとつきに守りの体勢に入るも強い風圧によってルイズ同様壁に叩き付けられる桐生。

「野郎ー！」

背中から伝わる痛みに顔をしかめながらも立ち上がってワルド達を睨み付ける。そんな桐生に、本体のワルドが笑みを浮かべる。

「貴様の剣技は多少なりとも見事だが、所詮はただの棒振りに過ぎん。平民である以上、魔法の前では無力だ！」

五人のワルドが杖を掲げて同時に呪文を唱え始めた。桐生はその呪文に聞き覚えがあった。あの時、棧橋で仮面の男と対峙した時に聞いた呪文、「ライトニング・クラウド」だ。

「ちつ、この人数から一斉に受けんのはマズいな……!」

忌々しそうに桐生が呟いたその時、

「思い出した!」

突然デルフリンガーが叫び声を上げた。

「何だ、デルフ!?!」

「いやあ、やつと思ひ出したぜ! 俺は昔もおめえに握られてた、「ガンダールヴ」!」

「悪いがお前の昔話を聞いている暇はねえぞ!」

そんな会話をしていると一斉に蒼白い稲妻が桐生目掛けて放たれる。

桐生はデルフリンガーとの会話で避けるタイミングを逃がしてしまい、とつさにデル

フリンガーで防御の構えを取った。

「無駄だ! その様な刃で防げるはずなからう! 丸焦げになるがいい!」

勝利を確信したワルドが狂気に顔を歪める。

「ライトニング・クラウド」がデルフリンガーに当たった瞬間、突然錆び付いた刀身から眩い光が放たれた。そして、桐生を焼き焦がすはずだった蒼白い稲妻は、その光り輝く刀身に吸い込まれていく。

桐生とワルドが驚きを浮かべる中、光がゆつくりと消えた刀身はまるで新品の様に白銀に輝いていた。

「デルフ、これは!？」

「これが俺の本当の姿だ! 相応しい使い手にやあ相応しい姿で応えるぜ! さあ、行こうか相棒! チャチャな魔法は任せときな! この「ガンダールヴ」の左腕、デルフリンガー様が吸い取ってやらあ!」

デルフリンガーの言葉にゆつくりと笑みを浮かべた桐生は束をしつかりと握り返し、上段に構えを取ってワルドを睨み付ける。

そんな桐生には目もくれず、錆び付いた刀身から光り輝く刃へと変わったデルフリンガーを見てワルドが溜め息を漏らす。

「なるほど、ただのナマクラではなかった訳か。だが、形勢逆転には程遠いな」

そう言ってワルドは再度呪文を詠唱する。すると杖が蒼白い光を放ち始めた。光の正体は回転している真空の渦である。杖を触れる物を切り、貫く鋭利な真空の刃をまとった剣へと変えたのだ。

「エア・ニードル」。ウェールズを殺す際にも使った魔法だ。杖自体が魔法の渦の中心、これを吸収する事は不可能だろう!」

蒼白い輝きを放つ杖を構えた五人のワルドが一斉に桐生に躍り掛かる。桐生はデルフリンガーで真空の刃を受け、払い、流すが五対一だ。鋭い突きをすんでのところであわしては頬の肉が裂け、次々と打ち込まれる斬撃に避けきれず腕や胸の肉が裂けて血が

流れる。

「そらそらそらっ！ どうした、「ガンダールヴ」!? その程度か!？」

「くっ！」

防戦一方の桐生をルイズはハラハラしながら見守った。しかし、このままではマズいと思いい、思い切って杖を引き抜いて呪文を詠唱する。失敗したとしてもワルドの猛攻を多少は逸らせると思ったのだ。

だが、ワルドも実戦の中で生きてきたメイジである。ルイズの呪文の詠唱に気付き、本体のワルドが素早く呪文を詠唱して再度ルイズに「ウインド・ブレイク」をお見舞いする。

ルイズの身体は風で吹き飛ばされ、始祖ブリミルの像へと身体を叩き付けられ気絶してしまふ。

「ルイズ！」

「戦いの最中に余所見とは余裕じゃないか！」

吹き飛ばされ、床に突っ伏したルイズに気を取られた桐生はワルドの突きをなんとかデルフリンガーで受け止めるも突き飛ばされ、ウェールズの隣に倒れ込んでしまふ。

「安心しろ。あの聞き分けのない娘は貴様を殺してから殺してやる」

「くっ、てめえ……！」

痛む身体を起こして立ち上がろうとした時、カシヤンと指先に何か硬い感触が伝わりそれに視線を向ける桐生。

指の先には青い鞘に収まった、茶色い束の短剣が転がっていた。状況から察するに、ウエールズの護身用の短剣の様だ。

桐生はその短剣の鞘を引き抜いてみる。鞘の中からは刃渡り十五センチほどの両刃の刀身が現れる。

桐生は突然デルフリンガーを鞘に収めると、その短剣を握り締めて立ち上がった。

「あ、相棒、何してんだ!! 俺を使えよ! そんなチンケな刃物じゃなくて!」

突然鞘に収められたデルフリンガーが喚き散らす、桐生は短剣片手にワールドへと突っ込んで行った。

「そんな小さな!」

「果物ナイフで!」

「この私を倒せると!」

「思っているのか!?!」

分身である四人のワールドが交互に口にして桐生に挑みかかる。本体のワールドは勝ち誇った様に笑みを浮かべながら少し距離を取った。

桐生は小さく呼吸を漏らすと流れる様な動きで一人目のワールドの杖を避けて脇腹を



短剣で切り裂いた。更にもう一人、またもう一人と杖をすんでのところで避けては脇腹を切り払うの繰り返し、最後の一人が鋭い突きを繰り出すと深く屈んですれ違いざまに切りつける。そして短剣でピュツと空を払うと分身のワルド達が消えていった。

「何いつ!？」

予想だにしない出来事に、ワルドの表情が驚愕に変わる。

宮本武蔵秘伝必殺剣、「組小太刀・幻狼」。相手の攻撃の合間を縫ってすれ違いざまに切りつける、電光石火の狼の動きを元に編み出された必殺剣である。

余裕を無くしたワルドはすぐさま呪文の詠唱に入るが桐生は止まらない。

短剣を鞘に収めてポケットにしまうと、デルフリンガーの束に手をかけてワルドをしつかりと見据える。

「……………うおおおおおっ!」

雄叫びを上げながら目にも止まらぬ速さで一気にワルドに駆け寄り、引き抜かれたデルフリンガーの居合いの刃が閃いた。

一瞬の沈黙の後、ボトリとワルドの左腕が地面に転がる。

「ぐうっ! 何だ!?! 今の速さは!?!」

切り裂かれた左腕と桐生を交互に見ながら鮮血が溢れ出る肩の切り口を覆い、よろめき後退るワルド。

宮本武蔵秘伝必殺劍の一つ、「荒れ牛」である。暴れ牛の突進の如く一氣に間合いを詰めて居合い斬りを繰り出す必殺必中の一撃だ。しかも今は、「ガンダールヴ」としての能力の助けもあつて、通常よりも遙かに速い。

「ぐっ!? はあ……はあ……!」

突然得体の知れない疲労感が身体を駆け巡り、デルフリンガーを地面に突き立てながら膝をつく桐生。身体から迸るヒートも、赤から青い色へと変わる。

「無茶したな、相棒。「ガンダールヴ」としての動きは、その時は軽快でも疲労は半端じゃねえ。おめえはあくまで、主人の魔法の詠唱を守る盾として動くのが役目だからな」

デルフリンガーの説明を聞きながら、桐生はワルドに視線を向ける。

ワルドは残った右腕で杖を振って宙へと浮かんだ。

「貴様を殺せなかったのは心残りだが、ウエールズを始末出来ただけ良しとしよう。間もなくここは我が「レコン・キスタ」の同志によって滅ぼされるのだからな!」

ワルドの言葉の通り、外では大砲の砲撃の音と竜の様な鳴き声が聞こえてくる。更にそれに混じり、断末魔の悲鳴までもが響いていた。

「さらばだ、「ガンダールヴ」! 愚かな主人と共に死ぬ!」

「待てよ」

退こうとするワルドを桐生が呼び止める。ワルドはもはや桐生に打つ手等ないと高

をくくり、首を傾げて見せた。

「まだてめえに、渡してねえもんがあるんだ」

息も絶え絶えながら、桐生ワルドを睨み付けながら言う。

「ほう？ 貴族の私に渡したい物だと？ 平民風情の贈り物等期待はしていないが……

一応受け取ってやろうじゃないか！」

「ああ……とくと受け取りやがれっ！」

桐生はワルドの魔法によつて碎かれた壁の破片の一つを取ると、ワルド目掛けて思いつき切り投げつけた。

一瞬キョトンとした表情を浮かべた後、ワルドは心底楽しそうに目をつぶって笑いながら破片を右手弾いた。

「こんな……こんな物が贈り物だと!? もっと貴族への礼儀を学ぶんだなーっ!」

高らかに笑つて目を開くと、その笑いは一瞬で消えた。先ほどまでそこにいたはずの桐生の姿が見当たらないのだ。左右に視界を動かすが、倒れたルイズとウエールズ以外どこにも見当たらない。

ふと、左側に気配を感じて振り向くと、ワルドの身体は硬直した。

そこには、自分の高さより少し上に飛んだ桐生の姿があった。左手には鞆に収められたデルフリンガーが握られている。

「これは……！」

桐生はそう口ずさみながら、右手の拳を握り締める。その表情は怒り一色に染まり、そんな桐生の動きを、まるで金縛りにあつた様にワルドが呆然と見つめる。

「慕っていたお前に裏切られた、ルイズの分だ！」

ワルドの左頬に桐生の拳が打ち込まれ、ワルドの身体はステンドグラスを破つて外へと消えた。

着地と同時に桐生は呼吸を荒げて傷口から流れる血と汗を地面に流す。身体から迸っていたヒートの青い輝きも、静かに消えていった。

「いくら何でも無茶し過ぎだぜ、相棒！ 壁を走つて飛ぶなんざあ！」

デルフリンガーの心配そうな声を他所に、桐生はシャツを手にとつてルイズの元へと急ぐ。

小さな身体を抱きかかえて呼吸をしているのを確認してホツとすると、ワインレッドのシャツを着込んでジャケットでルイズの身体をすっぽりと包み込んだ。

## 第17話

激戦を終えた桐生は、ルイズを抱きかかえて歩き出す。

「相棒、どうするんない？」

ふと、腰に括り付けたデルフリンガーが桐生に話し掛けた。

「俺は勝って、ルイズも取り戻した。ならここに用はねえ。脱出するまでだ」

「しかしよお、どうするよ？」 「イーグル」号は出ちまつてるし、皇太子のいねえ軍はもう負けちまうだろ？ ここにも敵が来るだろうぜ？」

デルフリンガーの言う通りだ。ここを出る為の唯一の船である「イーグル」号はもう行ってしまった。この城から出るのはほぼ不可能なのである。

桐生はルイズを壁にもたれかけさせて、ルイズの前に立つとデルフリンガーを片手に深呼吸をした。

「どうすんだよ？」

「ルイズを守る」

「つつてもよお、昨日王様も言ってたろ？ 相手は五万なんだぜ？ しかも相棒……ポロボロじゃねえか。そんなんで戦おうなんてー」

「関係ねえんだよ」

デルフリンガーのどこか諦めた声を、桐生の力強い声が遮る。

桐生はデルフリンガーの柄をしっかりと握り締め、扉がなくなつた礼拝堂の入り口を真つ直ぐ見つめた。

「相手が何人だろうと、誰だろうと、俺はルイズを守る。そしてここを脱出する。来るなら来やがれってんだ……まとめて面倒見てやるぜ！」

力強く、迷いのない声で宣言する桐生に、デルフリンガーはかつての持ち主を思い出した。顔までは覚えていない。しかし、この男と同じ様に力強く、真つ直ぐで、己の信念とブリミルの為に戦つた、初代「ガンダールヴ」を。

「そうだ、相棒……！」

デルフリンガーの柄がカタカタと揺れる。それは興奮の震えにも、歓喜の笑いとも取れる震えだった。

「そうともよ、相棒！ たかが五万くらい、俺と相棒なら訳はねえぜ！」

デルフリンガーの言葉に、桐生の口元に笑みが浮かぶ。

そんな風に迫り来るであろう敵の大群を待っていると、桐生の目の前の床がポコッと盛り上がり始めた。

「何だ？」

桐生は訝しげに盛り上がった床を見つめながらデルフリンガーを構えた。

ゆつくりと床石が盛り上がり、ボコンと音を立てて穴が開くと、そこには茶色い巨大なモグラが顔を出してきた。

「お前、確か……」

桐生はそのモグラに見覚えがあつた。ギーシュの使い魔、ジャイアントモールのヴェルダンデだ。

ヴェルダンデはそのそと身体を穴から出すと、ルイズを見つけて鼻っ面でジャケツトに包まれた小さな身体をまさぐり始めた。

突然の事に呆気にと取られていると、今度は穴からギーシュが顔を出してきた。

「ヴェルダンデー！ お前はどこまで穴を掘る気なんだね!? まったく……ん？」

穴から土にまみれた顔と身体を出したギーシュはそこで桐生とルイズの存在に気付いて目を輝かせた。

「おおつ、カズマにルイズ！ ここにいたのか！」

「お前……どうしてここに？」

身体の手で払うギーシュに桐生が構えを解いて歩み寄る。

「いや、「土くれ」のフーケとの一戦に勝利した僕達は急いで君達の後を追ったんだよ。何せ今回の任務、姫様の名誉がかかっているしね」

「だが、ここは雲の上だぞ？　あのモグラが飛べるとは思えないし……どうやって来たんだ？」

「タバサのシルフィードよ。」

ギーシユの代わりに、穴から聞き覚えのある声が答えが返ってきた。

見るとキュルケがギーシユ同様、顔も身体も土にまみらせながら穴から出てきた。

「キュルケ！」

「まったく……突然ギーシユの使い魔が穴を掘り始めたから何事かと思つてついでに行つたんだけど。あゝあ、ダーリンにはいつでも「綺麗なあたし」で会いたかったのに。見てよ、これ！」

キュルケは土のせいで薄汚れた制服を指差しながらハンカチで顔についた土を拭いた。

件のヴェルダンデは、ルイズの指に嵌められた「水のルビー」を見つけると、そこに鼻を押し当ててふんふんと興奮した様に鼻を鳴らした。それを見たギーシユが納得した様に頷いて見せる。

「なるほど、ルイズの嵌めている指輪の宝石の匂いに釣られてここまで掘つてきたのか。ヴェルダンデはとびきりの宝石が大好きだからね。魔法学園から穴を掘つてここまで来たんだよ、彼は」



桐生は溜め息混じりにデルフリンガーを鞘におさめ、ヴェルダンテの身体を押しつけてルイズの身体を抱きかかえた。

「ともかく、話は後だ。今はここから脱出するぞ。間もなく五万の兵が、ここに攻め入ってくるからな」

「な、何だつて!?! それは大変だ! しかしカズマ、任務はどうなったんだね!?! それに、ワルド隊長は!?!」

ギーシュの顔が桐生の言葉に青ざめるとすぐさまヴェルダンテを呼び寄せて疑問を投げかけた。

「手紙は手に入れた。ワルドは……裏切り者だったのさ。もうここに用はねえ。行こう」

「なくんだ、やっぱ裏切り者だったの? 怪しいと思つてたのよね、あたし」

キュルケが知つたような口調で言いながら穴へと再び身体を潜らせた。

桐生もそれに続こうとしたが、ルイズをギーシュに預けてウェールズの元へと駆け寄つた。当然ながら、もう息はない。桐生は静かに黙祷した。

「カズマ! 何をやってるだね!?! 早く行こう!」

ギーシュの怒鳴り声を背に、桐生はウェールズの身体を弄つた。何か、アンリエッタへの形見となる物を探しているのだ。ふと、桐生の目にウェールズの指に嵌められた指

輪が写った。

アルビオン王家に伝わる、「風のルビー」だ。

桐生は指輪をウェールズの指から取ると、ポケットにしまい込んだ。

「約束は守るぜ、王子様。あんたの最後は、姫様に伝える」

桐生はウェールズの亡骸に一礼し、そして背を向けた。

「さよならだ、勇敢な王子様」

桐生は急いで穴へと駆け寄ると、中に吸い込まれる様に落ちていった。

そのまま滑り落ちる様に穴を下っていくと、アルビオン大陸の真下にある空へと繋がっていた。勢い良く穴から飛び出し、落下する中ギーシュがルイズを離してしまいパニックになるが、桐生がその小さな身体をキャッチした。

澄み渡る青空の中をダイブする四人と一匹をシルフィードが背中ではキャッチし、ヴェルダンデは大きな口で啜えられた。

啜えられた事に対してか、それとも腹を撫でるシルフィードの舌の感触がくすぐったいのか、ヴェルダンデが抗議の声を上げる。

「ああ、ごめんよ、愛しいヴェルダンデ。学園までの辛抱だから我慢しておくれ」

ギーシュはシルフィードの背びれにしがみつきながら申し訳なさそうに言う。

シルフィードの首もとで座るタバサは相変わらずのパジャマ姿で本を読んでいる。

が、先日まで見た頭の上のトンがり帽子がない。どうやら風で飛ばされたらしい。

キユルケは慣れた様にシルフィードの背びれに寄りかかり、胸の谷間から出した手鏡で自分の顔についた土をハンカチで拭っている。

桐生はシルフィードの尻尾の付け根部分で座り込むとルイズの身体をしっかりと抱きかかえた。

白い頬についた血と土を指で拭ってやり、ルイズの体温が伝わる事に、桐生は心から安堵した。

ルイズは夢を見ていた。

ラ・ヴァリエール家にある、あの忘れ去られた中庭の池に浮かぶ小船の上で、幼いルイズは寝転がっていた。

ズキリ、と胸が痛む。もうここにワルドは来ない。辛い時、この小船で隠れていればいつでも迎えに来てくれたワルド。優しかったワルド。

もう、そんなワルドはこの世にはいないのだ。いるのは残酷で冷酷な裏切り者。勇気ある皇太子を殺した、裏切り者しか。

ふと、ざぶりと水面に波紋を走らせて、誰かが池の中に入って来た。怖くなったルイズは身体を丸めて小船の隅っこでうずくまる。

水面を揺らす音はゆっくりと近付き、遂にぎしりと小船に誰かが乗ってきた。

ルイズは恐怖のあまりギョツと目を瞑ると、閉じられた瞼から涙が溢れ出した。  
「泣くな、ルイズ」

聞き覚えのある声と、優しく頭を撫でてくれる手の感触。ルイズが瞳を開けると、そこには桐生が優しい笑みを浮かべて座っていた。

「カズマ……!」

嬉しくて、切なくて、堪らなくなったルイズは桐生に抱き付いて思いつ切り泣いた。涙を流し続ける間も、桐生は優しくルイズの頭を撫で続けた。

「大丈夫だ、ルイズ。ワルドの奴は、お前の分までぶっ飛ばしてやったから」

悪戯っぽく言う桐生に、ルイズが顔を上げる。涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった今の自分は、桐生から見えてどう写っているんだろうか。

「だから、もう心配するな。なっ?」

そう言つて頬を撫でる桐生の手の感触に、ルイズの視界はぼやけていき、やがて闇へと包まれた。

頬を撫でる風の感触を感じながら、ルイズはゆっくりと瞼を開けた。視界に写るのは青い空と、傍らにいる桐生の顔。桐生の視界はどこか遠くに向けられていて、ルイズが目覚めた事に気付いていない。

身体はそのままに目だけを動かして、自分が桐生の腕に抱かれているのをしるルイズ。もう少し目を動かすと、自分は桐生のジャケットに包まれ、シルフィードの尻尾の付け根の部分にいるのがわかった。更に、シルフィードの背中の方には、ギーシユにキュルケ、そしてタバサがいる事も。

ああ、自分は助かったんだ。安堵の気持ちが温かくルイズの心に染み渡った。

ワルドの魔法を受けて気絶してしまっていた為どの様な形だったかは知らないが、桐生は勝つたらしい。

しかし、王軍は負けてしまっただろう。ウエルズも……死んでしまった。

助かった喜び、失った悲しみ、様々な感情がルイズの中を駆け巡り、涙が溢れそうになるのを必死にこらえた。

ふわりと、桐生の匂いが鼻をくすぐる。

色々な事があった。ワルドの裏切り、ウエルズの死、暗躍する「レコン・キスタ」……アンリエッタに報告しなければならぬ事は山とある。

でも今はもう少しだけこの男の、この異世界から来た使い魔の香りに抱かれたまま眠りたいと願うルイズであった。

桐生達がアルビオンから脱出した翌日、ニューカッスルの城は惨状を極めていた。魔

法や大砲によつて崩れた城壁の下には生き埋めになったり、焼け焦げた死体が手を出している。

メイジのみによつて作られた王軍は、「レコン・キスタ」に大打撃を与えはした物の一人、また一人と手に掛けられていった。

しかし、このニューカツスルの戦いで一兵残らず敗れた王軍は、相手に倍以上の損傷を与えたと、後々まで語られる伝説となった。

戦が終わつた照りつける太陽の下、羽根帽子を被りトリステインの魔法衛士隊の制服を着た長身の男が戦場を検分していた。ワルドである。

傍らにはフードを被つたフーケが立っていた。

キュルケとのキャットファイトを繰り広げた彼女は燃える「女神の杵」亭の騒ぎに紛れてラ・ロシユから船に乗つてアルピオンにやってきたのである。

周りでは「レコン・キスタ」の兵士達が財宝探しに精を出している。死体から豪華な装飾品や武器を奪い、宝物庫から金貨を見つけては歓声が上がつた。

フーケはそんな兵士達を苦々しく見つめては、露骨に不機嫌そうに舌打ちした。

そんなフーケに気付いたワルドが、薄ら笑いを浮かべた。

「どうした、「土くれ」よ。奴等の様に宝を漁らんのか？ なに、今回の働きは悪くなかった。いくら持ち去ろうと構わんぞ？ 貴族から宝を盗むのが、お前の本来の仕事だろう

「？」

「はっ！ 私をあんな連中と一緒にしないで欲しいわね。死体から宝石を剥ぎ取るほど、落ちぶれちゃいないわ」

フーケは忌々しそうに眉をひそめてヒラヒラと手を振って見せる。

「アルビオンの王党派は貴様の仇だろう？ 王家の名の下に、貴様の家名は辱められたのではなかったのか？」

どうにもすつきりしない表情を浮かべるフーケにワルドが嘯く。フーケは俯きながら溜め息を漏らした。

それからワルドの方に視線を向ける。肩からなくなった左腕の服の袖がヒラヒラと風で舞っていた。

「あんたも随分と苦戦したみたいじゃない」

失った左腕を見て、ワルドは小さく頷いた。

「なに、此度の目的はウエールズの暗殺だったからな。腕一本で済んだのなら、安いもんだ」

「それに……ぶっ」

ワルドの左腕から顔へと視線を向けたフーケが思わず小さく吹き出す。

最後の桐生の拳を受けた左頬は赤く腫れ上がり、口元は奇妙な形に歪んでいる。

「随分な一発を貰ったみたいね。いい男が台無しだね」  
「止せ」

からかう様に喋りながら腫れたワルドの頬に手を伸ばすフーケの腕を掴んで止めさせる。まだ痛みは取れてない様だ。

「やっぱり大した奴だね、あの「ガンダールヴ」は。「風」のスクウエアのあんたの腕をぶった切るなんてね」

「ふん……油断大敵と言う奴だな。あれほどの腕とは、思わなんだ」

「言つたろう？ 奴は私のゴーレムすら倒したんだ。簡単に殺れるタマじゃないよ」

フーケがそう言うのと、ワルドは冷たい笑みを浮かべた。

「確かに奴は強い。それは認めざるを得ない。だが、これだけの兵が相手だったんだ。奴は俺と戦い消耗していた。生き残れる筈がない」

「……そう、だろうね」

ワルドの言葉にどこかつまらない様に返すフーケ。確かにこれだけの兵が相手だったんだ。万全ならともかく、かなり消耗したあの男が勝てる訳がない。しかし、本当にそうだろうか？ あの力強い眼差しを持った男が、そう簡単に倒されるとは思えない。

「それで？ その大事な手紙とやらはどこにあるの？」

「この辺りだ」



二人は桐生との戦いの場となった、礼拝堂へと足を踏み入れた。崩れ落ちた壁や天井の瓦礫が地面を覆い、床が見えない状態になっていた。

「あのラ・ヴァリエールの小娘……あんたの婚約者のポケットに手紙が入ってるんでしょう?」

「そうだ」

「随分あつさりと答えるわね。愛してなかったの?」

どこか不満そうに言うフーケの言葉に、ワルドは口元にだけ笑みを浮かべた。

「愛するとか愛さないとか……そんな感情は忘れたよ」

感情の籠っていない声でそう返すと、ワルドは杖を引き抜いて呪文を詠唱し、杖を振った。

旋風が巻き起こり、地面を覆っていた瓦礫が吹き飛んで横たわったウエールズの死体が出てきた。が、肝心のルイズ、そしてあの桐生の死体が見当たらない。

「懐かしのウエールズ様は見つかったけど、二人の死体がないじゃないの?」

「そうだな」

ワルドはウエールズの亡骸をつまらなそうに見た後で目を鋭くさせて辺りを見回す。

フーケも同じ様に辺りを見回すと、ふと下から風を感じて視線をそちらへと向ける。すると瓦礫に半分埋まった、人一人くらいが入りそうな穴がぽっかりと開いていた。

「ねえ、ワルド。この穴、何かしら?」

ワルドを呼んで二人でその穴を見つめる。死体がない所を見ると、恐らく桐生とルイズはここから逃げ出したと思われる。ワルドの顔に赤みが差して、怒りが伺える。

「どうする? 中に入って追いかけてみる?」

「いや、風が通つていと言う事は空に続いているだろう」

ワルドは苦々しく顔を歪めて舌打ちする。そんなワルドを見て、今度はフーケが笑みを浮かべて見せた。

「ふくん……あんたもそんな顔するのね。感情のない、人形みたいな奴かと思ってたけど」

ワルドはふんつ、と鼻を鳴らしてフーケに背を向けた。

ふと、そんな二人に遠くから声が掛けられた。活発な、良く通る男の声だ。

「ワルド君! 目的の手紙は見つかったかね!? アンリエツタがウエールズにしたためたという、その……ラブレター、は!? 同盟を破棄する救世主は!」

ワルドは首を振って此方に向かつてきた男に答えた。

現れた男は、年は三十代の半ばといった感じだった。丸い球帽を被り緑色のローブとマントを身に着けている。一見すると聖職者の様だが、物腰は軽く、軍人の様だった。高い鷲鼻に理知的な碧眼。帽子の裾からはカールしてる金髪が垂れている。

「申し訳ありません、閣下。件の手紙は、どこぞへと風が攫って行つてしまった様です。私のミスです。何なりと罰を……」

ワルドは男の前に跪き、深々と頭を垂れた。

そんなワルドに男は人懐っこそうに笑い、ワルドの肩を優しく叩いた。

「何を言うか、子爵！ 君の働きは素晴らしい物だよ！ たった一人で敵軍の大将を打ち取つたのだ！ そこに倒れているのは親愛なるウエールズ皇太子だろう？ 彼は随時と余を嫌つておつたが……ふ、死すればみな友達と言う奴かな？ 今は友情すら感じるよ」

上機嫌そうに語る上官にも構わず、ワルドは謝罪し続けた。

「しかしながら、閣下の欲していたアンリエツタの手紙を手に入れる事は叶いませんでした。私は、閣下のご期待には添えられなかつたのです」

「なに、同盟等ささやかな問題でしかない。大事なのはウエールズ皇太子を確実に仕留める事だつたのだ。理想は一步ずつ、確実に進む者のみが達成出来るのだ」

そう言つて緑のローブの男は、フーケへと顔を向けた。

「所で子爵、そちらの見目麗しい女性を世に紹介してくれるかね？ 未だ僧籍に身を置く余からは女性に声を掛け辛いからね」

フーケは男を見つめた。

ワルドが頭を下げている所を見ると、随分なお偉いさんなのだろう。しかし、ローブの隙間から漂う雰囲気はその笑顔に似合わぬほど禍々しく、邪悪さえ感じるオーラを放っている。

ワルドは立ち上がり、フーケを男に紹介した。

「彼女こそ、かつてトリステインの貴族達を震え上がらせた「土くれ」のフーケにございます」

「おおっ！ 噂はかねがね聞いておるよ！ お会い出来て光栄だ、ミス・サウスゴータ  
！」

かつて捨てた貴族の名を口にされ、フーケは内心驚くも微笑んだ。

「貴方がワルドに私の名を教えたのね？」

「そうとも。余はアルビオン全ての貴族を知っておるのだよ。管区を預かる司教時代に全てを記憶していてね。おっと、ご挨拶が遅れてしまった。普段女性にこんな間近に迫る事も少ないのでね、少々舞い上がってしまったよ」

男は照れ臭そうに笑ってから胸元に手を添えた。

「レコン・キスタ」総司令官を務めさせて頂いている、オリヴァー・クロムウエルだ。元は一介の司教に過ぎなかったがね。しかしながら、貴族議会の投票により総司令官に任じたからには、尽力を惜しまぬつもりだ。始祖ブリミルに仕える身でありながら「余」と

名乗るのを許しておくれよ？軍の行使には信用と権威が必要だ」

「閣下は既にただの総司令官ではありません。今やアルビオンの」

「皇帝だ、子爵」

クロムウエルは笑みを浮かべながら頷いた。

「確かにトリスティンとゲルマニアの同盟が破棄されるのは、余の望む所ではある。しかしながら、もつと大事な事がある。何だかわかるかね、子爵？」

「閣下の深いお考えは、凡人の私にはわかりかねます」

ワルドがそう言つて頭を下げると、クロムウエルはカツと目を見開いて手を広げた。

「結束」だよ、子爵！ 鉄の「結束」だ！ ハルケギニアは我等、選ばれた貴族によつて結束し、あの忌々しきエルフ共から「聖地」を取り戻す！ それこそが始祖ブリミルから余に与えられた使命なのだ！ その使命の為に互いを信用し、揺るぐ事のない「結束」が必要だ！ だから子爵、余は君を信用する。ささいな問題など責めはしない。優しくワルドの肩を叩くクロムウエルに、ワルドは深々と頭を下げる。

その偉大な理想の為に、始祖ブリミルは余に力を授けたのだ」

フーケの眉が一瞬ピクンと揺れた。始祖ブリミルが授けた力とは、一体何なのか。

「閣下、宜しければそのお力とやらはどんな物なのか……私に教えて頂けるかしら？」

「ふむ。魔法の四大系統はご存知だろうか？ ミス・サウスゴータ  
クロムウエルの質問に、フーケは頷いた。

「火、水、土、風……この系統が現代の魔法の基盤となっている。だが、余が使うのはそのどれでもない。真実、根源、万物の源となる零番目の系統だ」

「零番目……まさか、「虚無」？」

フーケの顔が、僅かながら青ざめた。

かつて始祖ブリミルが用いた、失われた系統、「虚無」。その魔法がどんな物だったのか、未だ謎に包まれている。

「余は始祖ブリミルから、その力を授かったのだ。だからこそ議会の諸君は、余を「レコン・キスタ」の総司令官として任命したのだろう」

クロムウエルは横たわったウエールズの死体を指差した。

「ワルド君、彼を我が友人として迎えたい。彼は確かに余を嫌っていたが、死した後はわだかまりも消えよう。良いかね？」

「閣下の決定に異義などありません」

ワルドの言葉にクロムウエルはにっこりと笑い、腰に差していた杖を引き抜いてフーケを見た。

「ではミス・サウスゴータ。「虚無」の魔法をお見せしよう」

フーケは息を飲んでクロムウエルを見つめた。

小さな詠唱がクロムウエルの口から漏れる。それは聞いた事のない言葉だった。

詠唱が完成し、杖がウエールズの身体に優しく振り下ろされる。すると、ウエールズの眼がパチリと開いて、フーケの背筋が凍りついた。

今さっきまで死んでいた筈のウエールズがゆっくりと起き上がり、青白かった肌に生氣が漲っていく。

「おはよう、皇太子」

クロムウエルが言うと、ウエールズは優しく微笑んだ。

「久し振りだね、大司教」

「失礼ながら、今は皇帝なのだ。親愛なる皇太子。」

「ああ、そうか……これは失礼した、閣下」

ウエールズは跪くとクロムウエルに深々と頭を下げた。

「君を余の親衛隊に加えたい。どうかね、ウエールズ君？」

「喜んで、閣下」

ウエールズがクロムウエルの手の甲に口付けるのを見ながら、フーケは小さく呟いた。

「これが、「虚無」？ 死者が蘇るなんて……」

そんなフーケにワルドが頷いた。

「虚無」とは、生命を司る系統……俺にも詳しくはわからんが、閣下が言うのはそうらしい」

息を飲んでフーケが見守る中、クロムウエルはワルドに顔を向けた。

「ワルド君、同盟は結ばれても構わない。どの道トリステインは裸だ。しかし、トリステインは理想の為にも、我が手中に納めぬばならない。あの国には「始祖の祈禱書」が眠っている。「聖地」に赴く際は是非とも携えたい」

「御意」

ワルドが頷くと、クロムウエルはウエールズを立ち上がらせてその場から去ろうとした。

その時、一人の兵士が身に着けた鎧をガシャガシャと鳴らしながら此方に走ってきた。

「か、閣下！ ご報告があります！」

「何事かね？」

息を切らしながら走ってきた「レコン・キスタ」の兵士はクロムウエルの前に跪き、高々と声を発した。

「はっ！ たった今、この城の城門に、「トライデント」を名乗る三人組が現れました！」



その名前に、クロムウエルとワルドの肩が僅かに歪む。

「ふむ……して、用件は？」

「はっ！ それが、「レコン・キスタ」のリーダーに会わせろ、の一点張りで……」

「その三人は本物なのか？」

ワルドが身を乗り出して兵士に尋ねると、兵士は困った様な表情で首を傾げて見せた。

「お、恐らくは。私自身、噂でしか聞いた事がないので……。ですが不振に思い、三人を囲んだ我が兵が一瞬にして六人、殺されてしまいました！」

兵士の伝令から、「トライデント」の面々が本物であると確信したワルドはクロムウエルに耳打ちした。

「閣下、恐らく彼等は本物でしょう。ここは、彼等の願いを叶えた方が良いかと」

「ふむ……子爵が言うなら間違いないだろう。よし、ここへ通したまえ」

「はっ！」

クロムウエルの言葉に兵士はそそくさと走り去って行った。

「トライデント」ねえ……話は良く聞くけど、一体何者なの？」

フーケは頬を掻きながら訝しげにワルドに尋ねた。盗賊となつて裏社会を歩いて来て凄腕の殺し屋である事は良く聞くが、それ以外の情報は全く入って来ないのだ。

ワールドは溜め息を漏らしてフーケを見た。

「トライデント」の語源は知ってるな？」

「ああ……始祖ブリミルに戦いを挑んだ、三柱の悪魔の事でしょう？」

フーケは思い出す様に遠くを見る目で呟いた。

「トライデント」とは、かつて始祖ブリミルと大戦を繰り広げた悪魔の事を差している。

自らの身を食らい、傷付いた身体を癒やしながら三日三晩戦ったと言われる大蛇、「ウロボロス」。

一つの国を乗っ取り、まるで人間の様な戦法を使ってブリミルと弟子達を苦しめた幾億もの鴉の集合体、「レイヴン」。

武術に長け、長き戦いの末にブリミルと差し違えたと言われている悪鬼、「オーガ」。

この悪魔達の名を借りて活動しているのを理由に「トライデント」と名乗っていると  
言われているのだ。

「確かに凄腕らしいけど……メイジが寄つてたかれば勝てるんじゃないの？」

「俺は奴等の戦いを見た事があってな……そのメイジが三千もの人数で寄つてたかつて、たった三人に敗れた」

フーケの疑問をスパッと返した所で、件の三人が連れて来られた。

一人は薄汚れた、袖が破かれ取られた濃紺の胴着の様な服を着て、赤茶けた袴の様なズボンの、変わった格好の大男だ。顔を鼻から上半分を覆う鉛色の仮面の額の突起は鬼を思わせ、恐らくこの男が「オーガ」なのだろう。背中から突き出てる大剣の柄と、左手に握られた布の包みから覗く剣の柄が威圧的に感じる。

もう一人は「オーガ」より少し背の低い男だ。白い生地には蛇があしらわれた服を身に包み、後ろで組まれた手からは長く鋭い鉤爪が覗いている。顔にはまるで蛇の頭を模した白い仮面が着けられており、長く黒い髪を結って後ろに垂らしている。この男が「ウロボロス」なのだろう。

その二人の間で少し背の低い男は、黒いロングコートに黒いズボンと言った、黒ずくめの姿をしている。二人に比べると体格は華奢に見え、唯一武器らしい物を持っていない。ただ、左手には赤茶けた白い布に包まれた何かを持っている。顔を覆うのは黒く烏の嘴の様な突起がでた仮面。「レイヴン」だ。

「おおっ！」「トライデント」の諸君、お会いできて光栄だ！」

クロムウエルは両手を広げ、人懐っこい笑みを浮かべて三人を歓迎した。が、三人は反応を示さない。仮面のせいで表情が見えず、笑みを浮かべているのか、怒っているのかも読み取れない。

「余がこの「レコン・キスタ」の総司令官、そして今やアルピオンの皇帝となったオリ

ヴァー・クロムウエルだ。君達の噂はかねがね聞いているよ。して、余にどんな用件が  
おありかな？」

クロムウエルが笑顔で問い掛けると、レイヴンは手に持っていた赤茶けた白い布をク  
ロムウエルの足元に投げた。ゴトリ、と鈍い音が響く。

「話の前に、此方からの「手土産」を開けて貰えるかな？ 皇帝殿」

言葉を発したレイヴンの声は若さを感じさせた。

クロムウエルは足元に転がった布を拾い上げて、ゆっくりと包みを開いた。

「うっー」

布から出された物にフーケが口元を抑えながら顔を背け、ワルドとクロムウエルの顔  
が歪んだ。

布に包まれていたのは、男の生首だった。年の頃は四十辺りで、ダークグリーンの短  
い髪がこびり付いた血で固まっている。開かれた目は虚ろで、口端やただれた頬の皮膚  
からは白く小さな蛆が蠢いている。

クロムウエルとワルドは、その男に見覚えがあった。

「瞬火」のアルヴァルト……」

ワルドが口にした名に、フーケは聞き覚えがあった。

「瞬火」のアルヴァルト。ゲルマニアでその名を知らぬと言われている「火」のスク

ウエアクラスのメイジで、荒事専門の何でも屋を営んでいた。二つ名の「瞬火」とは、ファイヤーボール等の下級魔法であれば一瞬にして繰り出し、敵を焼き尽くす事から来ている。ハルケギニア全土を探しても、彼に匹敵するほど素早く魔法を放てるのは十人といないと言われていた。

戸惑いの色を浮かべながらクロムウエルがレイヴンと生首を眺めていると、レイヴンが身体を小さく震わせた。笑っているらしい。

「僕達に仲間になって欲しいと勧誘に来ただけど、断ったら急に襲いかかって来てね。此方の用件は、おたく等「レコン・キスタ」が僕達に対して宣戦布告をしたと捉えて良いか、それとも此方の望む物を出して貰って手打ちとするとか……どちらが良いかと思つて」

レイヴンがそう言うと、オーガが肩に掛けた大剣の柄を握り締め、ウロボロスがユラリと両手を前に出して鉤爪を露わにさせ始めた。

「……君達の望む物とは、一体何なのかね？」

クロムウエルが苦々しい表情を浮かべて問い掛けると、レイヴンはクロムウエルの後ろに立つウエルズを指差した。

「その皇太子……失礼、「元」皇太子か。あんたが持っている「風のルビー」を頂きたい。それを差し出すなら、手打ちで構わないよ」

クロムウエルがウエールズの方を見ると、ウエールズは自分の手元を見てある筈の指輪がない事に気がついた。

「残念だが、「風のルビー」はない。誰かに取られてしまった様だ」

クロムウエルの前に出たウエールズはそう言つて両手をレイヴンに見せる。

ウエールズの両手を見てレイヴンは舌打ちした後、クロムウエルに視線を戻した。

「隠してるつもりなら、おたく等をみんな殺して身体検査するけど？」

「始祖ブリミルにかけて誓うが、そんな事はしていない。ワルド君、心当たりはないかね？」

クロムウエルは両手を上げて他意がない事を表しながらワルドへと視線を送る。

ワルドとしても、「トライデント」の面々と戦うのはごめんだ。しかし、最後にウエールズをしとめてから身体には触れていない為、指輪の事はわからない。

「最後にその男と接したのは私だが、指輪の事はわからない」

ワルドはそう言つてから少々苦し紛れながらも、思い付いた事を口にした。

「恐らく、最後にこの部屋にいた男と女が持つて行つたと思われるが……」

「その男と女の名は？」

レイヴンの仮面越しから感じる心臓を撃ち抜かんばかりの鋭い視線に生唾を飲むワルド。

声の感じからして自分よりも若いか同年代の様だが、一体どんな人生を送るとこんなにも鋭い視線が出せる様になるのか。

「ひ、一人はラ・ヴァリエール家の三女、ルイズ。もう一人は……カズマと言う男だ。」  
「ふ〜ん……」

レイヴンは間延びした返事をしながら遠くを見つめる様に何処かへと視線を向けた。暫くの沈黙の後、レイヴンが手を上げるとオーガとウロボロスが構えを解いた。

「まあ、それが嘘だとしたらまたおたく等所の所に来ればいいか。とりあえずは手打ちにしといてあげるよ。それとも、殺り合う方がいいかな？」

「いや、ご遠慮願おう」

クロムウエルがホツとした表情で首を振って見せると、レイヴン達は踵を返して歩き始めた。

「ああ、そうだ」

少し歩いた所でレイヴンが呟くと、レイヴンだけが振り返ってクロムウエル達を見回した。

「派手に暴れ回るのは構わないけど、せいぜい僕達に誰かから依頼されない様にね。その時は……一人残らず、殺してあげるから」

笑みを含んだその若々しい声は冷たく、クロムウエル達の耳を通して頭の中で反響し

た。

それだけ言うとレイヴンは満足そうに再び背を向けて歩き出す。

「アイツは始末しなくて良いのか？」

歩きながらオーガがレイヴンに問い掛ける。レイヴンは黙ったまま歩き続けた。

「あのクロムウエルとか言う男、「虚無」の使い手の様だったぞ？ 目的の物もなかった

し、せめて「虚無」の使い手は始末しといた方が良くないか？」

「今は別にいい」

尚も説得する様にレイヴンに語るオーガに対して、レイヴンは首を振って詰まらそうに言った。

「あんな弱々しいのはいつでも殺せるしね。時が来れば、始末するよ。一人残らず、確実に。この世に「虚無」の使い手は、僕一人で充分だ」



## 第18話

ニューカッスルでの戦いはあつと言う間に各国へと伝わり、戦争が近いかもしれないと言う噂があちらこちらで広まった。

トリステインの王宮も厳戒態勢が敷かれ、普段なら難なく通される仕立て屋や商人も嚴重な荷物チェックや魔法による身体検査が行われていた。

三隊に別れている魔法衛士隊のうちの一つ、マンティコア隊は蟻一匹通さぬ様な鋭い目つきで王宮の前を闊歩し、本日の警備に当たっていた。

そんな中、突然上空から一匹のウインドドラゴンが確認されて隊員達は色めき立った。すぐさま跨がっている相棒のマンティコアを飛び上がらせ、現れたウインドドラゴンに近付いていく。

ウインドドラゴンの背に五人の人間の姿と、口元には巨大なモグラが啞えられているのを確認して、隊員達がここは現在飛行禁止である事を呼びかけたが、風竜は警告が聞こえない様に王宮の中庭へと優雅に着陸した。

ウインドドラゴンの背中から降りたのは桃色の髪の子、赤毛の長身の少女、眼鏡をかけた小さな女の子、そして金髪の少年に黒髪の大男だ。大男の腰には大振りの剣がぶ

ら下がっている。

マンティコアに跨がった隊員達は中庭に着陸したウインドドラゴンを取り囲んだ。腰からワルドの物同様、レイピアの様な形状の杖を引き抜いて切っ先を風竜から降りた五人に向ける。下手な動きを見せればすぐさま魔法をお見舞いすると言ふ意思表示だ。隊員達の中からゴツい身体つきの髭面の男が一步歩み出た。

「杖を捨てろ！　そして、その男！　腰からぶら下げている物を捨てるんだ！」

男の言葉に赤毛の少女と桃色の髪の少女が顔をしかめたが、青髪の小さな女の子が首を振って見せ、大男が桃色の髪の少女の肩を掴んだ。

「宮廷」

「俺達はここに殴り込みに来た訳じゃねえ。ここは従っておけ」

二人の言葉に少年少女が杖を捨て、大男が腰にぶら下げた剣を地面に置いた。

「今現在、王宮の上空は飛行禁止だ。貴様等、触れを知らんのか？」

敵意がない事を悟った髭面の男が五人に歩み寄って溜め息混じりに言うのと、桃色の髪の少女が一步前に出て名乗った。

「私はラ・ヴァリエール公爵が三女、ルイズ・フランソワーズです。怪しい者ではありません。姫殿下にお取り次ぎ願います」

髭面の男はその伸びた髭を指先で捻りながら少女を見つめた。ラ・ヴァリエール公爵

と言えば高名な貴族故知っている。

「ラ・ヴァリエール公爵様の三女、と仰ったか？」

「いかにも」

ルイズは小さな胸を張りながら凜々しく頷いて見せた。

「ふむ……確かに目元が母君そっくりだ。して、要件を伺おうか？」

「それは言えません。密命なのです」

「それでは殿下に取り次ぐ訳には行かぬ。要件も聞かずに取り次いだ日には此方の首が飛んでしまう」

髭面の男は困った様な苦笑を漏らしながら掌で自分の首を切る仕草を見せた。

ルイズがしかめっ面を浮かべると、大男が脇から前へ出て来た。

「あんたの言いたい事はわかる。が、こつちも姫様から直々に密命を受けた身だ。取り次ぎの際にはルイズが戻って来た、と伝えてくれればいい。なんとか取り次いでくれな  
いか？」

髭面の男は大男の格好を見て首を傾げた。自分よりも年は上の様だが、見たことない服装に黄色い肌だ。どこの国の人間かは知らないが、貴族ではない事は確からしい。が、ただの平民でもない様だ。大柄な身体から熟練の戦士特有の雰囲気が漂っている。

「無礼な平民だな。従者が貴族に話し掛けるという法はない。貴様は黙っている」

大男の表情が静かに変わっていくのをルイズは見逃さなかった。この大男、桐生一馬が怒りを露わにしてる表情はもう何度も見てきたが、やはりその静かな圧力は得体の知らない怖さがあった。

「おい……」

桐生から発せられる今さつき話した時よりも低いトーンにルイズを含む四人も、髭面の男も表情を強張らせた。

「こつちもガキの使いで来てんじゃねえんだ。あんたがどれだけ偉いか知らねえが、あんまりこつちを、しかも目上の人間を見下す様な態度は頂けねえな」

「貴様……この俺とやろうと言うのか？」

桐生の威圧的な態度が気に入らなく、髭面の男がズイツと顔を近付けた。

一瞬の沈黙と緊張感の中、宮殿の入り口から鮮やかな紫色のマントとローブを羽織った少女が現れ、中庭で魔法衛士隊に囲まれているルイズの姿を確認するなり駆け寄った。

「ルイズ！ ルイズなのね!？」

聞き覚えのある声にルイズが振り向くと、その顔を輝かせた。

「姫様!」

二人は一行と魔法衛士隊に見守られる中抱き合った。その様子に桐生も、髭面の男も

戦意が失せて互いに一歩引いた。

「良かった……無事で本当に良かったわ、ルイズ」

「姫様……」

アンリエッタの熱い包容に瞳から涙を一筋零しながらルイズが少し身体を引くと、胸ポケットから手紙を取り出した。

「これが、件の手紙です」

アンリエッタは大きく頷くと手紙を差し出してきたルイズの手をかたく握り締めた。

「ありがとう、ルイズ。やはり貴女こそ、私の一番のお友達よ」

「勿体無いお言葉です、姫様」

明るく輝いた表情を浮かべたアンリエッタだったが、一行の中にウエルズの様がな  
いのを確認すると、その表情は一瞬で暗くなった。

「やはりウエルズ様は……父王に殉じた、のですね」

ルイズはなんと言っているのかわからず、静かに頷いた。

「そう言えば、ワルド隊長は？ 姿が見えませんが……別行動を取っているの？」

アンリエッタの言葉に今度はルイズの表情が暗くなる。そんなルイズの頭を優しく撫でながら、桐生のその言葉の返事を返した。

「あいつは裏切り者だったんだよ、お姫様」

「裏切り者……?」

アンリエッタがその言葉に息を飲んだ。

そこで漸く、此方を興味深そうに眺めている魔法衛士隊達に気付いてアンリエッタが説明した。

「彼等は私の客人です、隊長殿」

「左様ですか。では、我々は警備に戻ります」

隊長と呼ばれた髭面の男が頷いて他の隊員達も引き下がろうとした時、

「おい」

桐生が隊長を呼び止めた。

「良かったな、首が飛ばなくて」

少し小馬鹿にした様に笑みを浮かべながら言い放つ桐生を忌々しそうに一瞥してから、隊長達はマンティコアを飛ばして去っていった。

「長いお話になりそうね、ルイズ」

「……はい」

ルイズは力なく頷いた。

キュルケとタバサ、そしてギーシュを謁見待合室に残し、アンリエッタはルイズと桐

生を自分の居室に招き入れた。小さいながらも精巧なレリーフがかたどられた椅子に座り、アンリエッタは力を抜く様に背にもたれた。

ルイズはアンリエッタに事の次第を説明した。

途中キュルケとタバサが合流した事。アルビオンへと向かう船に乗って空賊に襲われた事。空賊の正体がウエールズ皇太子だった事。ウエールズに亡命を勧めるも、拒否されてしまった事。

そして、ワルドと結婚式を挙げる為に脱出船に乗らなかつた事。その式の最中にワルドが豹変し、ウエールズの命を奪つた事を。

「あの子爵が……まさか、魔法衛士隊の中に裏切り者がいるなんて……」

静かにルイズの話の聞いていたアンリエッタは深い溜め息を漏らしてうなだれた後、かつて自分がウエールズに出した手紙を見ながらポロポロと涙を零した。

「私が、私がウエールズ様のお命を奪つた様な物だわ。裏切り者を使者に選ぶなんて、私はなんて事を……」

「それは違うぜ、お姫様」

涙をパタパタと手紙の上に零して弾くアンリエッタに、桐生が首を振って言う。

「あの王子様はどの道あの国に残るつもりだったんだ。例え他の人間が使者として出向いても、戦火に焼かれていただろう」

「あの方は私の手紙をちゃんと最後まで読んで下さったのかしら？」

アンリエッタが顔を上げてルイズと桐生に視線を向けると、二人は頷いて見せた。

「はい、姫様。ウエールズ皇太子は、姫様からの手紙を読まれました」

「そう……ならあの方は、私を愛しておられなかったのね」

アンリエッタの顔に、寂しげな笑みが浮かんだ。

「姫様……やはり、ウエールズ皇太子に亡命を？」

アンリエッタはルイズの言葉に力なく頷いた。

ニューカッスルの城で、ウエールズからアンリエッタの手紙には亡命の事は書かれていないと聞いていたが、やはりそれは嘘だったのだ。

「死んで欲しくなかったのよ。心から愛していたのよ、私。でも、あの方には私よりも、名誉の死の方が大切だったのね」

どこか遠くを見つめる様な瞳でアンリエッタが呟くと、桐生は力強く首を振った。

「それも違うな。あの王子様はあんたやこの国の為に、あの国に残ったのさ」

桐生の言葉に、アンリエッタが呆けた様な表情を浮かべる。

「私と……この国の為？」

「今自分がトリステインに亡命すれば、反乱勢に攻めいる為の格好の口実が出来ちゃう。

あの王子様はそれを心配していたんだ。本人から直接聞いた」



「ウェールズ様が亡命しようとしまいと、攻める時は攻めて来るでしょう。個人が存在だけで、戦は発生するものではありませんわ」

「あの国に残り、そしてあんたやこの国に迷惑をかけないのが、あの王子様なりのあんたへの愛だったんじゃないか？ そばにいるだけが愛の表現じゃない。愛してるからこそ、時に突き放し、自ら身を引く場合もある。あんたがどう思うかは知らないが、俺にはあの王子様が、誰よりもあんたを愛していたと思うぜ？」

アンリエッタは溜め息を漏らしながら、涙で濡れた手紙を胸元で抱き締めて窓の外へと視線を向けた。

桐生はゆっくりと、ウェールズからの必ず伝えると約束した伝言を口にした。

「勇敢に戦い、勇敢に死んでいった……それだけをあんたに伝えてくれと、王子様が言っていた」

寂しそうな微笑みを浮かべて、アンリエッタは桐生に頷いた。

アンリエッタは美しい彫刻が施された大理石の机に手紙を置いて、何度目かの深い溜め息を漏らした。

「勇敢に戦い、勇敢に死んでいく……ふふ、殿方の特権ですわね。なら残された女は、どうすれば良いのでしょうか……」

桐生は何も言わなかった。何を言っても、慰めの言葉にはならないのを知っているか

らだ。誰かの為に死ぬ。その残された誰かの痛み、他人が簡単にわかる物ではない。

「申し訳ありません、姫様。私がつと強く、ウエールズ皇太子を説得していれば……」  
俯き、申し訳なさそうに話すルイズを、アンリエッタは立ち上がり、つて優しく抱き寄せた。

「いいえ、ルイズ。貴女は立派にお役目を果たしてくれたわ。貴女が気にする事なんて何もありません。第一、ウエールズ様に亡命を勧めろなんて、私はお願いしてないのだから」

ルイズの身体を離してアンリエッタはにっこりと笑った。

「私の婚姻を妨げようとした暗躍は未然に防がれました。我が国はこれで無事ゲルマニアと同盟を結ぶ事が出来ます。そうすればアルビオンも簡単に此方を攻められません。危機は去つたのよ、ルイズ・フランソワーズ」

努めて明るく振る舞うアンリエッタの姿に、ルイズの胸が痛んだ。

ルイズはポケットからアンリエッタから授かった水のルビーを取り出すと、差し出した。

「姫様、これをお返しします」

しかし、アンリエッタは首を振りながらルイズのその手を押しやった。

「それは貴女が持つていなさい、ルイズ。せめてものお礼です」

「こんな高価な物……受け取れません」

「忠誠には報いが必要です。いいから取っておきなさい。私からの気持ちです」

ルイズは素直に頷くと、その指輪を指に嵌めた。

ルイズとアンリエッタのやり取りを見送った後、桐生はアンリエッタに歩み寄ってズボンのポケットから指輪を手渡した。

「王子様から、あんたへだ」

その指輪を受け取り眺めると、アンリエッタの視線が指輪と桐生に交互に向けられた。

「これは……「風」のルビー。ウエルズ様から預かってきたのですか？」

「ああ。事切れる前にあんたに渡して欲しいと託された」

本当は勝手にウエルズズの指から引き抜いてきたのだがそれは言わない。この世には、誰かを傷付ける厳しい真実もあれば、誰かを救う優しい嘘もあるのだ。

アンリエッタは「風」のルビーを指に通した。ウエルズが嵌めていただけあってブカブカだったが、小さく呪文を唱えるとピツタリと吸い付く様に薬指に指輪が嵌められた。

アンリエッタは「風」のルビーを愛おしそうに撫でてから桐生に微笑みかけた。

「それと……これもだ」

桐生は腰のベルト差していたウエールズの短剣をアンリエッタに差し出した。自分の危機を救ってくれた武器ではあるが、ウエールズの形見を少しでもアンリエッタに渡したかった。

「この短剣は？」

「王子様が護身用に持っていた物だ。勝手に拝借させて貰ったが……あんたが持っている方が良いだろう」

アンリエッタは差し出された短剣をジッと見つめていたが、やがてそつと優しく押し返した。

「それは貴方が持っていて下さい」

「良いのか？」

「武器は、使われてこそ価値があります。私よりも貴方の方がこの短剣には相応しい筈です」

桐生は短剣を少し見つめてから、再び腰のベルトに差した。

「ありがとう、優しい使い魔さん。」

寂しさを伺える笑みではあるが、アンリエッタからの感謝の気持ちが伝わり桐生も微笑みかける。

「あの人は、勇敢に死んでいった……そう仰られましたね？」

「ああ、そうだ」

アンリエッタの言葉に、桐生が深く頷いた。

「ならば私は、勇敢に生きてみようと思います。私の命が尽きた時、向こうでウエールズ様に胸を張って会える様に」

窓から差し込む午後の柔らかな日差しが、「風」のルビーを淡く照らした。

王宮から魔法学園へと向かって風竜の背に乗った空の上で、桐生とルイズは一言も口を聞かなかった。

キュルケは、ルイズはともかく、桐生が黙っている事に妙な不安を覚えているのかやたらと二人に話し掛けるが、二人とも「ああ」とか「そうね」としか返さない。

「……なんなの？ 本当に。まるでタバサが三人いるみたいだわ。いやまあ、タバサは何となく言いたい事がわかるんだけど……」

一人呟くキュルケをよそに、ギーシュが溜め息を漏らした。

「しかし、あのワルド隊長が裏切り者だったなんて。僕は彼を尊敬していたのに……」  
落ち込んだ様に風竜の背鱗に寄りかかるギーシュ。

以前キュルケから聞いていたが、魔法衛士隊はメイジの男の憧れの的だと言う。ギーシュも自分の目指していた立場に立っていた人間の裏切りに多少なりともショックな

様だ。

ギーシユのその言葉を聞いたキュルケが、いきなり桐生の腕に絡み付いてきた。

「でもそんなワルドを、ダーリンが倒したのよね？」

「倒した……か。いや、引き分けだろうな。逃げられた訳だし」

キュルケの熱っぽい視線に桐生が苦笑を浮かべながら答える。キュルケはやつともにも口を聞いた桐生に嬉しく思い、そのまま首に腕を回して抱き付いた。

「それでも凄いわ！　流石はあたしのダーリンね！」

そんなキュルケを見て、ルイズがグイツと桐生の袖を引っ張った。その揺れでキュルケの腕から桐生が離れる。

「ちよつと何よ、ルイズ！　せっかくダーリンと熱い包容を楽しんだのに！」

「カズマは私の使い魔なのよ。勝手な事しないでちようだい。熱い包容がお望みなら、自分の使い魔とすればいいじゃないの」

ルイズとキュルケの視線がぶつかり合い、久し振りに火花が飛ぶのを見て桐生は苦笑を浮かべる。喧嘩するほど仲が良いとは言いが、この二人の場合は犬猿、もしくはハブとマングースの様だ。

キュルケは苛立った様子で本を読んでいるタバサの肩を掴んだ。

「ちよつと、タバサ！　どう思う!?　「ゼロ」のルイズったら生意気よ！　今回の任務の

内容も全然教えてくれないし！ 馬鹿にしてるわよね!? ねえ!？」

キュルケが物凄い勢いでタバサを揺さぶる。タバサは壊れた人形のようにカツクンカツクンと首が前後するが視線は本へと真っ直ぐ向けられている。

キュルケがタバサを揺らした事で風竜がバランスを崩してギーシユが背中から放り出されてしまった。

「ギーシユー！」

断末魔の様な叫びを上げながら落ちていくギーシユに視線を向けて叫ぶ桐生。しかし他の三人は意に介した様子もなく自分のバランスを取るのに懸命になっている。

何故意に介さないか？それは落ちたのがギーシユだから。

「おい！ ギーシユが落ちたぞー！」

「大丈夫よ、ほら」

慌てる桐生にルイズが落ちていくギーシユを指差す。

落ちていく中、ギーシユは杖を取り出して「レビテーション」の魔法を唱え、すんでのところまで地面にふわりと着地した。

ウインドドラゴンが何とかバランスを戻そうともがいた所、今度はルイズがバランスを崩して落ちそうになるのを桐生が腕で抱き止めた。その桐生の行動に、ルイズの胸はドキッと高鳴る。

「大丈夫か？」

心配そうに見つめてくる真っ直ぐで綺麗な黒い瞳。桐生のその瞳に見つめられるだけで、ルイズの小さな胸はキュンと痛んだ。

自分は、カズマの事が好きなのだろうか。

確かに格好は良い。学校の男子にはない大人の色気と言うのか、そう言った魅力的に見える所もある。どんな強敵には臆さない強い心や、そばにいただけで安心出来るほどの逞しい身体。

しかし、桐生は平民だ。年だって自分よりも遥かに上だ。貴族と平民は身分が違う。そう教わってきたルイズにとつてこの胸の痛みや高鳴りは戸惑いしか生まなかつた。

「き、気安く触らないでよね！」

結局、照れ隠しなのか桐生に怒鳴ってしまうルイズ。本当はこんな事が言いたいのではないのに。

「そうは言ってもな……お前も落ちそうだったんだぞ？　ギーシュみたいに。」

「ギーシュは落ちても良いのよ。ギーシュだから」

緊張からかともんでもない事を口にするルイズ。

「いや、あいつだつて落ちない方が良いが……ともかくちよつと我慢しろ。支えてないといけない」



「使い魔のくせに……」

顔を赤らめてもごもごと文句を言いながらも素直に桐生の腕に抱き止められたままじっとしているルイズ。

そんな二人を見て、キュルケが軽く首を傾げた。

「なんだ……貴方達、もう出来てたの?」

キュルケの言葉にルイズの顔が更にかあつと赤くなり、何か文句を言おうと口を開くよりも先に桐生の笑みが聞こえた。

「俺みたいな中年と一緒にされちゃあ、こいつが可哀想だ。なあ、ルイズ?」

「う、う……」

桐生なりのフォローだったのだが、ルイズはその言葉に不服そうに顔をしかめながら唸っている。

何かいけない事でも言ったか? と一人首を傾げる桐生をよそに、風竜は真っ直ぐに魔法学園へと羽ばたいた。

魔法学園の厨房で、桐生は野菜を刻んでいた。

その周りにはシエスタ、マルトー親父、そして他のコック達が包丁を振る桐生を見ていた。

「……なあ」

「はい！ 何ですか!? カズマさん！」

一口大に切った人参を火にかけて鍋にポチャポチャと入れながら桐生が周りに声をかけると、シエスタが笑顔で元気良く返事を返した。

「その、そんな大勢で見られるとやり辛いんだが……」

「何言ってるんだ、カズマ！」

マルトー親父が笑顔で言う。その手には羽根ペンと羊皮紙が握られていた。

「お前が料理を作らせてくれなんて言うから興味があるんだ。それに俺の知らない料理だしな。しかし、カレー粉を煮込むなんてな」

「こつちではどういう風に使うんだ？」

「肉や魚にまぶして焼くぐらいさ」

「確かにそれも美味そうだ。今度俺にも食わせてくれ」

話ながら桐生は今度はスパイスの調合に取り掛かる。「アサガオ」にいた頃、遙に勧められて一度だけスパイスの調合からカレーを作ったのが功を奏した。幸い此方の世界にも桐生が使ったスパイスと同じ物があつたので、それを擦り碎いてカレー粉を混ぜる。厨房にスパイスの良い香りが漂い始めた。

「こりゃあ……良い匂いだ」

「ああ、腹が減って来るぜ」

鼻をヒクヒクと動かしてスパイスの香りを味わいながらコック達が堪らなそうに溜め息を漏らした。

マルトー親父は羊皮紙にサラサラと桐生の調理法や材料を書き込んでいく。

材料を鍋で混ぜて煮込み、暫くして良い感じに煮込まれていくと一口味見をする。

「……………」

口の中に広がるスパイシーな味はやや辛さとコクが足りない様にも感じるが、勝手知らない厨房で作ったには悪くない味だ。

「マルトー、味を見てくれ」

「よし来たー!」

周りのコック達やシエスタが羨ましそうに見る中、マルトーは煮込まれた人参と一緒にルウを口に含んだ。

「うん? なんと言うか……………スパイシーなシチュー、みたいな味だな。だが、シチューにはない深みがある。もう少しコクを出せば、更に美味くなりそうだ」

もぐもぐと味わう様に咀嚼しながら感想を言うマルトー親父にコック達とシエスタは味を想像して生唾を飲み込んだ。

「シエスタ、悪いんだがルイズとタバサ、それにキュルケとギーシュを呼んできてくれるか？」

「わかりました！」

桐生が呼んできて欲しい名前を言うと、シエスタは一目散に走り出した。

「いやあ、カズマ！ お前が料理出来るなんて意外だったが、こりやあなかなかどうしてだぞー！」

マルトー親父が桐生の背中を叩きながら笑うと、桐生もつられた様に笑った。

「今度、学生やこいつ等に作ってやってくれ。あんたなら俺よりも上手く作れるはずだ」

「うん！これなかなか美味しいわ！」

「まあ、悪くないわね……」

呼び出された厨房のテーブルでカレーを口に運ぶキュルケとルイズが感想を漏らす。どうやらルイズにはちよつと辛かったらしい。一口含んでは水をごくごくと飲んでいく。

「色の違うシチューの様に見えるが、これはクセになる味だな」

ギーシュもカレーを食べながら笑みを浮かべて感想を言う。

タバサはと思い桐生が顔を向けると、空になった皿をズイツと差し出してきた。

「おかわり」

「おう」

桐生は皿を受け取り再び盛ると、皿を受け取ったタバサがガツガツと食べ始めた。

「でもどうしたのよ、ダーリン？ 急に料理なんて」

食べきってスプーンを口に咥えながらキュルケが問い掛けると、桐生がタバサの頭を優しく撫でた。

「約束したからな。俺の得意料理を、腹一杯食わせてやると」

カレーにがつついていたタバサがスプーンを止めて桐生を見上げる。相変わらず表情に変化は見られないが、僅かながら頬が赤らんでいる気がする。

「ふくん……なら、ダーリン？ 私との約束も覚えてくれるかしら？」

スプーンを皿に乗せて顎に手を当てながら色っぽくウインクを飛ばすキュルケの一言に、ルイズのスプーンが止まる。

敵意を剥き出しにした視線を向けるルイズにキュルケは勝ち誇った様な余裕の笑みを浮かべて見せる。

「何よ、ルイズ？ あたしはダーリンとちやくんと約束したのよ？ 無事に帰ったら、キスをしてちょうだいって。ねえ、ダーリン？」

ルイズから桐生に視線を移すと熱っぽい視線を向けるキュルケ。

桐生は苦笑を浮かべてから首を振って見せた。

「ああ、約束したな。でも今日は駄目だ。人目もあるしな。そういった事は人前でするもんじゃねえ」

「あら？ 二人きりでしてくれるの？ いや〜ん、キスだけじゃ済まなくなっちゃうかも〜」

まるでルイズを挑発する様に目の前で自分の肩抱き締めながら身体をくねらせるキュルケを睨んでから、今度は桐生に鋭い視線を飛ばすルイズ。

その視線に苦笑を浮かべた直後、突然左足に鋭い痛みを感じて桐生が顔を歪める。見ると、シエスタの足が桐生の足を思いつき踏んづけていた。

「すみません、カズマさん。ミス・タバサのコップに水を注ごうとしたら踏んじやつて」  
笑顔だが、目は全く笑っていないシエスタに妙な怖さを感じて、桐生が溜め息を漏らした。

「いやはや……「我等の拳」はモテモテだな」

「ライバルが多過ぎて大変そうですね」

「シエスタ、頑張れ」

桐生の背後では、マルトー親父とコック、そしてシエスタの同期のメイドがグスクスと笑いながら話し合っていた。

## 第19話

桐生がカレーを振る舞った翌日から、ルイズの様子がおかしくなった。

何時もなら桐生にやらせる洗顔や歯磨きを自分でやると言い出したのだ。更には服を取って着せようと広げると、

「自分で着るから良いわ。それと……あつちを向いてて」

と言い出した。

慣れない手付きで顔を洗った物だから、まだ前髪から雫を垂らしながら顔を赤らめて言うルイズに桐生は首を傾げるも、恥じらいを覚えるのはいい事だと思つて素直に従つた。

「あ、あの……カズマ？」

ふと、ルイズに背を向けていた桐生の背中に声を掛けられて、桐生はまだ着替え中だと思つて背を向けたまま問いかける。

「どうした？」

「このスカート、なんかホックが留まらないんだけど……」

桐生が振り向くと、シャツは着れているがスカートが僅かにずり下がった状態のルイ

ズが恥ずかしそうに困った顔をしていた。

「これはな、こうするんだ」

普段から着させられて手慣れた手付きでスカートのホックを留める桐生。

「あ、ありがとう……」

「? おう」

普段なら、着替えが終わっても礼の一つも寄越さないルイズの感觸の言葉に、思わず少し驚きながら頷く桐生であった。

アルヴィーズの食堂に向かうと、何時も自分が地べたに座る所に見慣れない大きめの椅子が置かれており、桐生は戸惑った。

ルイズの席は長いテーブルの一番端で、その横で普段桐生は地べたに座って食事をとるのだが、その場所に椅子が置かれているのだ。まるで誕生日の者が着く様な位置の席だが、今日は誰か来るのだろうか。

「何ボーツと立ってるの? その椅子に座りなさい」

椅子を眺めていた桐生に先に席に着いたルイズが声を掛ける。

「俺がか?」

「そうよ。今日からは机で食べなさい。よくよく考えたら、あんたが地べたで食事をと



るのって見栄えが良くないわ」

突然の申し出に少し面食らうも、桐生はその椅子に腰掛ける。なかなか造りが良い様で、尻に感じるクッションが柔らかい。地べたの時の尻の痛みがなくなつて心地好い。

しかし、椅子に着くと、今度は何時もの自分のスープとパンが見当たらない。あるのはナイフとフォーク、それと空いた皿だけだ。

「ルイズ、俺の飯がないんだが？」

「ああ」

ルイズはチラッと桐生の前に置かれた皿を見てから、自分の前に置かれた料理を少し桐生の方へと寄せた。

「この料理を自分で皿に取つて食べなさい」

「良いのか？」

寄せてくれた料理とルイズを交互に見て、桐生は再び面食らつた。

目の前に並ぶ料理は豪華絢爛と言う言葉が似合う物で、ローストチキンや色とりどりのサラダ、ふつくらと焼き上がったパンや、何か良く分からない魚料理等も並んでいる。普段ルイズが自分に取つて手渡してくれてはいたが、改めて見ると朝っぱらから凄いご馳走だ。

「良いから食べなさい」

「……わかった」

澄ました顔で食前の祈りを終えてからルイズがそう言ったので、桐生も手を合わせてから、朝から凄いご馳走を口へと運んだ。

朝食が終わって教室に入ると、数人の生徒がルイズを囲みだした。

ここ数日、ルイズ達が授業を休んでいたのは何かとんでもない任務を承ったからと噂になっていたのだ。良く見ると、タバサとキュルケ、それにギーシユまでもが多くの生徒に囲まれている。

誰も彼もがこの数日間何をしているのか？　と言う質問を飛ばしているが、タバサは相変わらず本を読んで無視しているし、キュルケは勿体ぶった言い方をしながら化粧を直している。ギーシユは喋りたそうだが、言つて良いのか悪いのか戸惑った様に口をゴニョゴニョと動かして困った顔をしている。

「ねえ、ルイズ……一体何があつたのよ？」

ルイズを囲む生徒の中から「香水」のモンモランシーが前に出て問いかけて来た。

ルイズは疲れた様に溜め息を漏らしてから澄ました顔で手を振って見せた。

「別に何も無いわ。ただ、オスマン氏に頼まれて宮殿へお使いに行つただけよ。ねえ？

キュルケ、タバサ、ギーシユ？」

ルイズから声を掛けられてキュルケは手鏡から視線を逸らさず頷き、タバサも本から視線を逸らさず頷き、ギーシユがやや戸惑った表情を浮かべてから頷いた。

何か隠しているのはわかる物の口が割れないルイズ達に、クラスメート達は次々と詰まらなそうに席へ戻っていった。

生徒達が席に着くと、本日の授業の先生でもあるコルベールが教室に入ってきた。

今日の授業は、「火」の魔法と油によって動力を得た物体が動くと言う物だった。この研究が更に高度になれば、いずれは魔法を使わずに、更には動物を使わずに馬車や船が動くと言うのだ。

しかし、物を動かすのにわざわざ油や「火」の魔法を使うのなら、最初から魔法で物を動かした方が早いと、生徒達は退屈そうにコルベールの抗議を聞いていた。

黒板に書かれている方程式は、こちらの言葉で何が書かれているのかわからないが、コルベールの抗議に桐生が驚きを表した。

「凄いな。あの先生、エンジンの基本的な構造を説明してるのか」

「えんじん？」

桐生の呟きが気になったルイズが振り向きながら言うと、コルベールにもそれが聞こえたらしく黒板を書くチョークの動きを止めた。

「おおっ！ この方程式が生む素晴らしさをわかってくれるのかね!？」

退屈そうに自分の講義を受けている生徒達の視線が辛かったコルベールは、嬉しそうに桐生を見て笑った。

「ああ。あんたが話している方程式は、俺の世界ではエンジンと呼ばれて、あんたが言った通り、魔法も動物も使わずに車や船を動かす装置の基本的な原理になっているんだ」「だから何だつて言うのよ?」

興味深そうに桐生の話を聞いているコルベールと他の生徒達をよそに、モンモランシーが金色の巻き毛を指で揺らして退屈そうに声を出した。

「魔法があるのにわざわざ魔法を使わないのは、宝の持ち腐れと言う物じゃないかしら?」

その言葉を聞いて数人の生徒も頷いて見せる。しかし、桐生は首を振った。

「発想を変えたらどうだ? 確かに、お前達貴族は魔法が使えるから必要ないかもしれない。だが、一般の人間、お前達の言葉を借りるなら平民か。その平民が魔法も使わずに車や船を自動で動かしたとしたらどうする?」

「平民が……車や船を自動で動かす?」

桐生の言葉が理解出来ない様に戸惑いの表情を浮かべながら生徒達が色めき立つ。

「少なくとも、俺のいた所では日常的にそう言った方法で人々は生活していた。魔法が使えないから、と言う理由もあるだろうが」

「いや、実に素晴らしい！」

興奮した様子でコルベールが黒板から離れて桐生の元へと近付いて来た。

「ミス・ヴァリエールの使い魔殿！ 貴方の話は実に興味深い！ 一体貴方はどこの国の出なのかね!？」

この質問に、桐生は言葉をつぐんでしまった。以前ルイズに問いかけた通り、日本と言つてもわかりはしないだろうし、かと言つて、下手に適当な国を挙げてしまえば、このコルベールと言う男は死に物狂いで探すだろう。それだけの情熱を持った瞳が、目の前のコルベールにはあつた。

そんな桐生の心情を察したのか、ルイズが横からコルベールに口を挟んだ。

「ミスタ・コルベール。彼は……その、えっと……東のロバ・アル・カリイエの方から来たんです」

ルイズの言葉にコルベールの表情が驚きの物に変わった。

「なんと！ あの恐ろしいエルフの地を通つてこの国に！ あ……いや、「召喚」されたのだから通る必要はないか。しかし、エルフ達の住まう東の地ではトリスティン以上の技術・研究が盛んと聞いている。なるほど、貴方はそちらから来られたのか」

コルベールが納得した様に頷く。

桐生がルイズの方をチラツと見ると、私に合わせて、とアイコンタクトを感じてコル

ベールに顔を見て見せた。

「ああ。俺はその、ロバ……と言う国から来たんだ」

コルベールが桐生に笑みを浮かべると、終業の鐘が響いた。

退屈な講義を受けて気だるそうに教室から出ていく生徒達を尻目に、コルベールは照れ臭そうに笑って見せた。

「いや、失礼した。年甲斐もなく教師と言う立場を忘れて聞き入ってしまったよ。名を、教えてくれないか？」

「桐生一馬だ。あんたは？」

桐生が名を名乗って問いかけると、コルベールが右手を差し出した。

「私はジャン・コルベール。二つ名は「炎蛇」だ。宜しく、カズマ殿」

「ああ」

桐生も右手を差し出して硬く握手を交わした。

「いずれカズマ殿とは酒でも酌み交わしながらもつと話してみたい物だ」

その夜、夕食を終えて部屋に一度戻ってから、桐生は女子寮の庭でデルフリンガーを振るっていた。錆び一つない刀身が空を裂いてビュンツと音を立てる。

「熱心だねえ、相棒」

振られ、空を裂くデルフリンガーが軽口を叩いて桐生に話しかける。

「娘っ子に嫌われでもしたのかい？」

「わからんが……一応心当たりはない」

桐生がこうして庭に出る事になった十五分程前。部屋に帰っていつも通り寝間着のネグリジエに着替えさせようとタンスへ桐生が向かうと、ルイズがそれを止めて布団のシートでカーテンの様な隔たりを作り始めた。

「き、着替えるから……ちよつとあつち向いてなさい」

シートから顔を出して真つ赤な表情で言うルイズに本日何度目かの驚きを表した後、桐生は素振りをしてくると言つて部屋から出ていったのだった。

「まあ、良いんじゃないかねえの？ 着替えさせさんの面倒だったんだろ？」

「まあ……自立してくるのは良い事だしな。それには文句はねえさ」

それから更に十五分程デルフリンガーを振つてから、そろそろ良いだろうと部屋へと戻った。

戻つてみると、着替えを終えたルイズがベッドの上で窓の外を眺めていたが、桐生の帰宅に気付いて顔をそちらに向けた。

「そろそろ俺は寝るぞ。お休み、ルイズ」

デルフリンガーを壁に掛け、ジャケットを椅子に掛けると桐生が何時もの様に就寝の挨拶を口にしたが、ルイズは答えない。じつと桐生を見つめて押し黙っている。

桐生はルイズの態度がイマイチ良くわからず、ルイズに構わず寝床である藁束に横になつた。

「ねえ……」

瞳を閉じて暫くの沈黙の後、ルイズが声を掛けてきたので顔を向ける桐生。

「どうした？」

「その、えっと……」

問いかけると突然モジモジしだしたルイズに、桐生は首を傾げて先を待つ。

「い、何時までも床に寝かせるのはちょっと良くないわよ、ね？ 今日からは……こっちのベッドで寝て良いわ」

「何？」

思いがけない言葉に身体を起こす桐生。ルイズは自分で言つて恥ずかしくなつたのか、蠟燭に照らされた灯りの中で顔を真っ赤にしている。

「い、いいから！ 早く蠟燭を消してこっちに來なさい！」

怒鳴る様に捲し立てるルイズに頬を搔いてから、藁束から立ち上がつて蠟燭をふうつと吐息で消し、桐生がベッドに腰掛ける。

「ほら、（ハハ）……」

ルイズが横になつて奥へと身体を詰める。幸いベッドはかなりの大きさがあつて、桐生



が横になっても窮屈ではない。

桐生は促されるままベッドに横になった。フワフワの枕に程好い固さのベッドの感触が高級感を伺わせる。

「悪いな、ルイズ」

「良いのよ、別に」

藁束とは比べ物にならない寝心地の良さに意識が持っていかれそうになると、ルイズが突然口を開いた。

「ねえ……カズマの世界には、本当に貴族がないの？」

ルイズの質問に、桐生は天井に視線を向けたまま頷いた。

「ああ。魔法を使える奴は、いないな」

「なら、大人になったら、何をするの？」

「それは人によるな。どこかに勤めに行く奴もいれば、家の跡を継ぐ奴もいる。それに関しては、こつちとは変わらないかもな」

「カズマも、そうだった？」

「ここで桐生は一旦口を閉ざしてから、瞳を閉じながら口を再び開いた。

「俺は少し、普通の人とは違う生き方をしてきた。それに疑問を持った事はなかったが、今思えば……そんな生き方しか出来なかったのかもしれない」

孤児院「ヒマワリ」で幼少を過ごし、自分や他の孤児達を育ててくれた風間新太郎の背を追いかける様に極道となった桐生。その事を恥じた事も無いが、同時に本当に良かったと思つた事もなかった。かけがえのない存在、澤村遥に出会うまでは。

「そうなんだ……それって、カズマがずつとなりたかつたものだったの？」

いつもとは違う、妙に近い所から聞こえるルイズの声は心地よく、桐生は寝てしまわぬ様に意識しながら眼を閉じたまま頷いた。

「多分な。それだけを目指して生きていたと思う。ルイズは、何になりたいんだ？　そう言う夢とか……あるのか？」

「……笑つたりしたら、怒るからね」

念を押す様な物言いのルイズに苦笑を浮かべてから頷く桐生。そんな桐生に安心したのか、ルイズはポツポツと言葉を紡ぎ始めた。

「私ね、立派なメイジになりたいの。別に強力な力なんていらぬ。ただ、人並みに魔法が使える、立派なメイジに」

桐生がゆつくりと首を動かして、ルイズの方へと顔を向けた。

「私、小さい頃からずっと、貴女は駄目って言われて来たの。お母様もお父様も、私には何にも期待しない。そんな自分を変えたくて努力してきたけど、結局駄目で。クラスのみんなにも、ゼロゼロって馬鹿にされて……もうそんなの嫌なの。自分の得意な系統さ

えわからない、そんな惨めな存在でいるのが……辛いのに」

口から漏れていく想いはルイズの気持ちで蝕んで、徐々に力なく顔を沈ませながら桐生のシャツの袖をギュツと掴んでいた。

「だから私、せめてみんなと同じ……普通のメイジになりたいの。失敗ばかりじゃなくてちゃんと魔法が使える、そんなメイジに」

ルイズはこの小さな身体で、どれだけ辛い思いを味わい、苦しみ、涙を流して来たのだろう。話ながら徐々に感情が高ぶってしまったらしく、桃色の髪から覗く頬に流れた涙が月明かりに淡く反射している。

桐生はゆっくり身体をルイズの方に向けて、優しく頭を撫でてやる。くしゃりと桃色の髪が指に絡み、まるで梳く様に撫でていく。

言葉のない優しさに包まれる心地好さに、ルイズは自然と桐生の胸元へ顔を埋めて眠りについた。

オスマンは王室から届けられた一冊の本を眺めながら長い髭を弄っていた。古びた革製の装飾がなされた表紙はボロボロで、羊皮紙は茶色くくすんでしまつて年季を感じると同時に、みすばらしさすら感じてしまつていた。

指先で丁寧に表紙を巡り、一通りページを捲つて見るが何も書かれていない。三百

ページ程あるその本には、文字は一切書かれておらず、ただ茶色くくすんだ羊皮紙があるだけだった。

「これがトリステイン王室に伝わる「始祖の祈禱書」か……」

六千年前、始祖ブリミルが神に祈りを捧げた呪文が記されていると言われているが、ルーンは愚か、文字一つ書かれていない。

この手の伝説の道具と言うのは紛い物が多い。が、それにしても白紙の本とは酷い出来だと、オスマンは溜め息を漏らした。

「これを本と呼んでいいのか？」

パタンと表紙を閉じて胡散臭そうにその本を眺めていると、ノックの音が部屋の中に響いた。

「鍵は開いておる。入ってきなさい」

オスマンの言葉の後、扉が開いてルイズが学園長室に入ってきた。

「お呼びでしょうか？」

オスマンは入ってきたルイズに笑顔を浮かべて歓迎し、先日の任務の件を労った。

「良く来てくれた、ミス・ヴァリエール。お主達のお陰でこの国を陥れようとする陰謀は阻止された。思い出すだけで辛いかもしれないが……」

オスマンはルイズの心中を察して少しトーンを落として言ってから、椅子から立ち上

がって窓の外に視線を向けた。

「だが、君達のお陰で、姫は無事来月にゲルマニアの皇帝との結婚式が挙げられる事になった」

「そう、ですか……」

ルイズは途端に悲しくなった。アンリエッタが望まぬ結婚をするなんて、幼馴染みとしても気持ちの良い物ではない。

劳いの言葉に頭を下げていると、オスマンはルイズに「始祖の祈祷書」を差し出した。

「これは？」

手渡された薄汚れた本を怪訝そうに眺めながら、ルイズがオスマンに問いかける。

「始祖の祈祷書」じゃ。」

「始祖の祈祷書」？　これが？」

王室に伝わる伝説の書物。国宝だ。何故そんな物を、オスマンが持っているのか。

「トリステイン王室の伝統で、王族の結婚式の際には貴族より選ばれし巫女が必要となる。その巫女はこの祈祷書を手に、式の詔（みことり）を詠み上げるのが習わしじゃ」

初めて聞かされる伝統の習わしに、ルイズはとりあえず頷いて見せた。

「そして姫は、その巫女に君を選んだのじゃよ。ミス・ヴァリエール」

「私を……姫様が？」

「うむ。巫女は式の前より、この「始祖の祈祷書」を肌身離さず持ち歩き、詠み上げる詔を考えるのじゃ」

「え!? 詔を私が考えるんですか!?!」

「そうじゃ。まあ伝統と言うのは面倒な物での……。しかし、姫は君を選んだのじゃ。きつと君なら良い詔を考えてくれると。これは、大変名譽な事なのじゃ」

恐らくアンリエッタは、幼馴染みとして幼少の頃を共に過ごしたルイズだからこそ選んだのだろう。そう思つてルイズは力強く頷いた。

「慎んで、お受けします」

ルイズの言葉に、オスマンは嬉しそうに笑いながらルイズの肩を優しく叩いた。

「君が詔を詠み上げてくれれば、姫もきつと喜ぶ筈じゃ」

その日の夕方、桐生は風呂に入っていた。風呂と言つても、貴族が入る湯船に湯が張られた風呂ではなく、焼き石が放つ熱によるサウナ風呂である。

木造の安っぽい小屋の中でタオルを腰に巻いた状態で、腕を組みながら中の椅子に腰掛けて瞳を閉じた状態で汗を流していた。

サウナ風呂に入ると、まだ堂島組の新入りだった頃に兄貴分の真島が連れていつてくれたサウナを思い出す。真島は熱さに異常に強く、結局初めて一緒に入った時は上せて

倒れてしまった苦い記憶があるが。

ダラダラと皮膚の毛穴から老廃物が汗となって流れていく感覚を心地好く感じ、程好い所で外の脱衣場に行つて近くの井戸から水を汲み、頭から被つた。火照つた肌に少し温めの水の感触が気持ち良い。

「あ、カズマさん」

着替えを済ませ外に出ると、シエスタがカップとティーポットを乗せた盆を持つて待っていた。

「シエスタか……どうした？ 俺に何か用か？」

桐生がそう言うと、シエスタは小屋のそばにあるベンチへ桐生を誘導し、盆に乗せられたカップにティーポットの中身を注いだ。

「先程、東方のロバ・アル・カリイエから運ばれた珍しい品が行商の方々から差し入れられたんです。「お茶」って言って、せっかくだからカズマさんにご馳走したくて……はい、どうぞ」

「お茶か……ありがとうございます。いただきます」

手渡されたカップから漂う香りは上品さを感じられ、ゆつくり味わう様に口へと含む。鼻へと抜ける芳香や程好い渋味が利いた味は日本の緑茶を思わせた。

「これは美味しいな。懐かしい味がする」

「懐かしい？あ、そっか……カズマさん、東方の出身でしたもんね」

茶を啜りながら、桐生はとりあえず頷いた。

「まあ、そうだな……しかし、良く俺がここにいるのがわかったな？」

「ああ、それは、カズマさんの前に入ったコックの人が教えてくれたんですよ」

クスクス笑いながら言うシエスタに釣られ、桐生の口許にも笑みが浮かんだ。

暫く他愛のない話をしてから部屋に戻ると、桐生は目の前の光景に一瞬言葉を失った。

ルイズがベッドに腰掛けて何やら古びた感じの本を持っている。いや、それは別になんて事ない。問題はルイズの格好だった。

風呂に行くからと置いておいた桐生のジャケットを羽織っている。グレーのジャケットの胸元からはルイズの白い肌が覗き、裾からは素足が延びている。大きいせいでルイズの身体をすっぽりと包み込んでいるが、ブカブカの袖からは白魚の様な綺麗な指が短く突き出ていた。

「ルイズ……」

「ああ、戻ったの？ お帰り」

普段通りの返事をするルイズ。

「これ、凄い滑らかな生地ね。何で出来てるの？」



指先でジャケットの袖を摘みながら問いかけるルイズ。どうやら肌触りが気に入ったらしい。室内ならシャツ一枚でも寒くはないしと、とりあえず注意するのを諦めた。

「それは確かか……ウールで出来ていたか」

「ウール？」

「羊の毛だ」

桐生が説明していると、ルイズがジャケットの胸ポケットから何かを見付けたりしい。もぞもぞと指先を動かして中の物を取り出した。

それは見た事がない小さな袋だった。ピンク色の生地になにか読めない文字が書かれている。

「何これ？」

ルイズが指先でその袋をいじっていると、いつの間にか近付いていた桐生がその袋を優しく取り上げた。

「悪いな、ルイズ。これは俺の大切な……御守りなんだ。こればかりは、お前でも持たせたくない」

桐生が取り上げた小さな袋。それは遥から貰った御守りだった。

「そう……。ごめん、いじっちゃマズかったかしら？」

「いや、そんな事ないさ。悪いな」

申し訳無きように謝るルイズの頭を優しく撫でてやり、飲み水を汲んでくると桐生が部屋から出ていった。

その隙に、ルイズはジャケットの胸元を掴んで顔に寄せ、スンと匂いを嗅いでみる。鼻をくすぐるのは少しワイルドさを感じる男の、桐生の匂い。抱き締められた時、そばにいた時に感じるこの匂いは、ルイズの心を優しくも激しく掻き立てた。

「カズマの、匂い……」

ポツリと呟いてハツとする。

わ、私は何を変態みたいな事を!?

誰もいない部屋の中でルイズは一人、顔を真っ赤にしながら慌てふためくも、そのジャケットを脱ぐ事は出来なかつた。

「何よ、随分仲良さげにいちやついてるじゃない。しかもルイズ、ちやつかりダーリンの服まで着ちやつて」

ルイズの部屋の窓の外に、シルフィードが静かな羽音を響かせながら飛んでいた。

シルフィードの上に乗っているのはタバサとキュルケ。タバサは月明かりを明かりにして本を読んでいる。キュルケは窓の隙間から部屋の中の様子を伺っていた。

王宮からの帰りに見せたルイズの態度が気になって様子を見に来たが、やはりルイズもまんざらではなさそうだ。

「何よ、そりゃあたしだってそこまで本気じゃないわ。けど、あれだけアプローチしてるのに何にもなしは納得いかないわ」

まるでタバサに言い聞かせている様だが、当然タバサは聞いていない。

内心、キュルケは焦っていた。桐生が自分になびかないだけでも問題なのに、ルイズとは今や良い感じの様だし、先程はメイドと二人きりで過ごしていた。この自分を差し置いての二股は許せない。「微熱」の二つ名が泣くと言うものだ。しかもルイズが桐生とくつつこうとしているのなら意地でも奪わなければならない。フォン・ツエルプストーの名にかけて。

「個人的にはあまり陰謀なんてらしくないけど、何かしら策を用さないと。ねえ、タバサ？」

パタンと読んでいた本を閉じて、いつもと変わらぬ表情でキュルケを指差すと、タバサの口が開いた。

「嫉妬」

瞬間、キュルケの頬が赤く染まる。初めて見るキュルケの反応に、タバサがこてんと首を傾げた。

一瞬の沈黙の後、キュルケは物凄い勢いで首を振りながらタバサの肩を掴んだ。

「違うっ！ 断じて違うわ！ あたしが嫉妬なんてする訳ないじゃない！ これはゲー

ムなのよ！ あのにつくいヴァリエールからダーリンを奪うって言う、恋のゲーム！  
しかし、タバサは動じずに再び口を開いた。

「嫉妬」

その一言で、キュルケの中の何かがブツンと切れた。

「いい、いいわ、上等よ！ 嫉妬なんかなくて所、見せてあげようじゃないの！」

メラメラと瞳を燃やしながら、キュルケはタバサにシルフィードの移動をお願いした。

女子寮の庭にある井戸から水を汲み上げ、持ってきた飲水用の瓶へと移していると、不意に背後に気配を感じて桐生が振り向いた。

「は〜い、ダーリン♪」

そこにはキュルケが立っていた。まだ制服姿で、燃える様な赤い髪が大きめの赤い月明かりに照らされて神々しさを感ぜさせた。

「キュルケか。どうした？ こんな時間に」

「もう、ダーリンってば本当に冷たい」

桐生の質問に答えずに歩みよるなり、首に腕を回してキュルケがしなだれかかる。柔らかな乳房が制服とシャツの布を隔てて桐生の胸元で押し潰される。

「この間の約束、しっかりと守って貰いたくて会いに来たのよ?」

熱く甘い吐息を漏らして言いながらチラリと横目で女子寮の角を見る。そこからは目を凝らさなきや見えない様にタバサが顔を出していた。

タバサの言葉に切れたキュルケは、タバサに桐生と当然の様にキスして見せると、訳のわからない意気込みを伝えて証拠代わりに見ている様にと勝手に約束させたのであった。

「今、ここにぞか?」

「人目がなければ良いんでしよう?」

戸惑う様子もなく言う桐生を挑発する様に舌舐めずりして見せるキュルケ。本当はタバサの目があるのだが、細かい事は気にしない。

「ならまあ、約束だしな」

桐生の手が優しくキュルケの頭を撫でてゆっくり背中を下ろされる。小さくんつ、と声を漏らした後、キュルケが瞳を閉じて唇を突き出した。

赤い月明かりの中、桐生とキュルケの唇が重なる。

「ん……」

余裕ぶっていたキュルケの表情が変わって頬に赤みが差す。苦い煙草の味と、桐生の味が混ざりあつてキュルケの舌を、喉を刺激する。

そつと桐生が唇を離して、優しい笑みを浮かべる。

「約束は守れたな。お休み、キュルケ」

惚けた表情のキュルケの額に口付けて、桐生は瓶を持ってそのまま去っていった。

桐生がいなくなつて数秒後、キュルケがヘナヘナとその場にへたり込んで熱い吐息を漏らした。

隠れていたタバサがキュルケに近付き、しゃがみ込んでキュルケに呟いた。

「完敗?!」

「……そう、ね」

先程まで桐生の唇が重なっていた自分の唇を指先で撫でながら、心地の良い妙な高揚感を覚えてキュルケが呟いた。

## 第20話

ルイズは魔法学園の東にある、「アウストリ」の広場のベンチに腰掛けて、「始祖の祈祷書」をパラパラと捲っていた。どんなにページを捲つても、目に写るのは黄ばんだ白いページばかり。そんな空白のページを見ながら、アンリエッタの式に相応しい詔を考えた。

が、なかなか思う様な言葉が思い浮かばない。と言うより、先程から必死に考え様としても、気が散ってしまうのだ。

「始祖の祈祷書」を手に切ない気に溜め息を漏らすルイズの姿は、まるで一枚の絵画の様に見える。ルイズの天性の美貌は、それほどまでに映えがあるので。

ルイズの脳裏に浮かぶのは、今頃自分の部屋を掃除している使い魔、桐生一馬の事ばかり。自分がベッドで寝るのを許したあの日から、何度も枕を共にしてはいるが進展等一切ない。

桐生が自分に手を出す筈がないと、ルイズにはわかっている。だからこそ共に寝るのを許したし、そこらのお子様と違って、桐生はそんな野蛮な真似はしないと信じているからだ。

だが、まったく手を出して来ない事も納得がいかなかった。そりやあ、自分とは歳が離れすぎてているし、身体だつて正直自信はない。けどそれはつまり、自分を「女」として見てくれないのだ。

もちろん、桐生が野蛮な気を起こせば、対処はとるつもりだ。けれども……と奇妙なジレンマが小さな少女の心に渦を巻いて広がっていった。

本日何度目となるかわからない溜め息を漏らした時、ふと肩を叩かれて振り返る。そこには、キュルケが立っていた。

「何やってんの？ ヴァリエール」

ルイズの視線は思わず、目の前で揺れるキュルケの胸へと行った。

白いシャツから覗く褐色の谷間。そのシャツをはち切らんばかりの豊満な膨らみ。もし自分がキュルケくらいの胸だったら、桐生も少しは意識してくれるのだろうか。

「……ちよつと、聞いてるの？」

ルイズの視線に気付かず小馬鹿にした様な口調のキュルケの声に、ルイズはハツと我に帰つて慌てて視線を逸らした。

「ど、読書をしてただけよー」

緊張から声が大きくなるルイズ。一瞬でもキュルケの胸が羨ましい等と思つた自分が恨めしい。



「読書って……その本、白紙じゃない。どうやって読んでるのよ?」

開かれたページの黄ばんだ白紙に苦笑を浮かべながら、キュルケはルイズの隣に腰掛ける。少し強い風が、二人の髪とスカートの裾を静かに揺らす。

「これは「始祖の祈祷書」。国宝の本なのよ」

視線を開かれた白紙のページに向けながら、ルイズが面倒臭そうに話す。

「そんな国宝をどうしてあんたが持つてんのよ?」

ルイズはキュルケに説明し始めた。アンリエッタの結婚式が近い事、その式の詔を自分が詠みあげる事、その際にはこの「始祖の祈祷書」を用いる事等を。

「あのお姫様が結婚とはねえ……なるほどなるほど。その結婚式に、あのおんた達の任務が関わってるとしてしょ?」

ルイズは一瞬誤魔化すべきか考えたが、自分達の為に困らなってくれたキュルケを下に出来ず頷いた。

「あたし達はあのお姫様が無事結婚出来る様に危険を犯したって訳ね。なかなか名誉な事じゃないの。それってつまり、この間発表されたトリステインとゲルマニアの同盟が絡んで……違う?」

キュルケの鋭い指摘に、ルイズは辺りを確認してからキュルケの瞳を覗き込む。

「誰にも言わないでよね」

「言う訳ないじゃない。あたしはギーシユみたくお喋りじゃないの。まあもつとも……言った所で誰も信じはしないわよ。」

キュルケはヒラヒラと手を振って見せてから、ゆつくりとルイズの肩に腕を回して身体を寄り添わせながら笑みを浮かべた。柔らかくポリユームのある胸の感触がルイズの腕に伝わる。

「あたし達の祖国は同盟を結んだ……なら少しは仲良くしなくちゃね？　ヴァリエール？」

「そう、ね」

わざとらしく言うキュルケにルイズは素っ気ない返事を返した。その同盟の為に、アンリエッタは好きでもない相手と結婚するのだ。喜べる訳がない。

「所で、さつきから何をそんなに溜め息をついているの？」

キュルケの言葉に、顔が熱くなるのを感じた。そんなルイズを、キュルケはニヤニヤと笑いながら見下した。

「べ、別に……疲れているだけよ！」

ルイズはキュルケから視線を逸らしながら怒鳴る様に声を荒げた。そんなルイズに退く事なく、キュルケは耳元に顔を寄せて囁く。

「良いのよ、照れなくて。あたしにはちゃんとわかってるわ、ルイズ」

顔を振り向かせ赤らんだ頬のままキツと睨みを利かせるルイズ。キュルケは心底樂しそうな、余裕のある表情で更に言葉が続けた。

「カズマの事、考えているんでしよう?」

その一言、ルイズは酸欠の金魚の様に口をパクパクとさせながら耳まで真っ赤になっていく。

「貴女って面白いくらいわかりやすいわね。好きなんでしょう? カズマの事が」

「な、何言ってるのよ!?! 私がかズマを、すす、すす、好きなんて……ある訳ないでしょうが! 好きなのはあんたでしょう!?!」

「ええ、あたしはかズマが好きよ。大好き。心の底からね」

サラリと恥ずかしげもなく言つてのけたキュルケにルイズは言葉を詰まらせる。

キュルケの言葉は自分を挑発する為の物なのはわかつている。わかつてはいるのだが、同時に堪らなく羨ましいと思う。こんなにも自分の気持ちを簡単に認め、何の躊躇いもなく言えるのだから。

「貴女が好きじゃないなら、あたしが貰っても文句はないでしょう?」

「だ、駄目よ!」

「どうして? 好きでもない男が誰に取られようと構わないんじゃないやなくて?」

クスクスと小悪魔な笑みを浮かべてキュルケが問い掛ける。その表情はどこまでも

余裕で、ルイズは心の底から腹が立った。

桐生の事等どうでもいい、そう思えない自分の感情が何なのかわからず、ルイズは一人混乱する。幼少の頃、ワルドに対して抱いていた感情とは全く別の気持ち。これが恋なのか、あるいはただ桐生にすがりたいだけなのか、その答えをルイズはまだ見つけられていなかった。

「か、カズマは私の使い魔よ！ 主人の元を去る使い魔なんて聞いた事ないわ！ あいつが誰をどう思うかは勝手だけど、私の元から離れるなんていけない事なのよ！」

結局、ルイズは自分の気持ちに踏ん切りもつけられず、逃げの一言を放つのが精一杯だった。

キュルケはそんなルイズをつまらなそうに眺める。本当は薄々自分の気持ちにも気付いている癖に。なんでこうもお子ちゃまなのかしら、と心の中で一人ごちる。

「そうね。でも、」

ならば、もつと揺さぶりをかけて反応を楽しむまでだ。キュルケの中の黒い炎が小さく揺らめいた。

「今、貴女が敵視するのは私じゃなくて、カズマの側にいる子じゃなくって？」

キュルケの一言に、ルイズの眉がピクツと吊り上がる。

「何よ、それ………どういう意味よ？」

「ほら、あの厨房のメイド……とか？」

メイド。その言葉から浮かび上がる人物は一人しかない。

カズマに食事や酒を差し入れたりする、確か、シエスタと言う名前のメイドだ。

「心当たりがあるなら、今部屋に行くと面白いかもしれないわね」

ルイズは「始祖の祈祷書」を脇に抱えるとそそくさとベンチから立ち上がり、女子寮の方へと足を進め始めた。

「あら？　好きでもない男の元に行くの？」

「忘れ物を取ってくるだけよ！」

からかう様に言うキュルケの顔もろくに見ずに、ルイズは足早に寮へと走り出した。

「全く、素直じゃないんだから」

部屋の掃除を終えた桐生は椅子に座りながら、ルイズの愛読している本をパラパラと捲っていた。絵がない所を見ると、小説なのだろう。なのだろうと言うのは、書かれている文字が一切読めないので内容がわからないのだ。

アルファベットでもハングルでもない、独特の文字は発音もわからない。なのに何故自分は、ルイズ達の言葉がわかるのだろうか。

腕を組んで眉間に皺を寄せながら考え込む桐生に、壁に立て掛けられているデルフリ

ンガーが声を掛けた。

「どしたい、相棒？ そんな難しい顔しちまって」

「なあ、デルフ？ どうして俺はお前やルイズ達の言葉がわかるんだろうな……」

溜め息を漏らしながら重々しく言う桐生に、デルフリンガーが笑いの混じった声で答える。

「そらおめえ、言葉がわからなきや不便だろうがよ」

「確かにな。だが、俺はお前達の言う所の「異世界」から来たんだ。書かれてる文字は全くわからないのに、言葉がわかるのがずっと不思議だったんだよ」

桐生はオスマンが三十年程前に会ったと言う、あのロケットランチャーの持ち主を思い出した。彼もオスマンとは言葉が通じていたらしい。

「んく……相棒はどこを通ってハルケギニアに来たんだ？」

「どこ、と言われてもな。突然穴に落ちた様な感覚になって、気が付いたらこの世界にいたんだ」

今思えば、あの瞬間は不思議な感覚だった。第三公園を出て天下一通りに向かって歩き始めた瞬間、突然地面がなくなった様な浮遊感を感じて気を失ったのだ。

「良くわかんねえが、ま、難しく考えんなって。言葉が通じて楽しやねえか」

「お前って本当に楽天家だよな……」

デルフリンガーの言葉に桐生が苦笑しながら本を戻すと、扉がノックされた。

ルイズだったらノックする事はないだろう。ならば、ギーシユかキュルケだろうか。

「開いているぞ」

桐生がそう言うと、静かに開いた扉からシエスタがひよこつと顔を出した。

「シエスタ……どうした？ ルイズに用事か？」

「い、いえ、あの……カズマさんにちよつと」

シエスタは部屋の中をキョロキョロ見回し、ルイズがいないのに安堵した様に溜め息を漏らしてから更に扉を開いた。その手には銀の盆が持たれており、盆の上にはいくつかの料理が乗っている。

「最近カズマさん、厨房になかなかいらつしやらないから……お腹が空いているかと思つて差し入れを」

盆を軽く持ち上げて照れ臭そうにはにかみながら言うシエスタの姿は一瞬、「アサガオ」の資金の計算をしている深夜に夜食を持ってきてくれた遥の姿を思い浮かべさせた。

「そうか、すまないな。最近ちよつと食事の摂り方が変わつて腹が満たされていたからな。あまり厨房に迷惑もかけたくなかつたから、ちよつと足を遠ざけていたんだ」

「め、迷惑なんてとんでもないです！」

桐生の言葉にシエスタが首を振って否定した。

「マルトーさんも他のコックさんも、カズマさんがいなくなって寂しがつてますよ！カズマさんが来てくれると、いつも厨房が明るくなるんです！」

「そ、そうなのか？ まあ、悪い気はしないな。また行かせて貰おう」

「はい！ お待ちしています！」

剣幕に押されてややたじろぎながら答える桐生に、シエスタは飛びつきりの笑顔で頷いた。

「それじゃあ、せっかくシエスタが持ってきてくれたしな……頂くとしようか」

「はい、どうぞ！」

盆をテーブルに置いて料理を並べてくれたシエスタに、桐生は椅子に座って両手を合わせてから食べ始めた。

美味しい。昼食として食べた先程の料理も美味しいが、この料理も負けず劣らず美味しい。

「美味しいですか？」

「ああ、美味しいよ」

立ったまま問い掛けてくるシエスタに笑顔で桐生が答える。先程腹一杯昼食を食べたのが嘘の様なフオークが進む。

「それ、私が作ったんです」



「シエスタが？それは凄いな。料理上手なんだな」

「ちよつと厨房のコックさんに無理言つて、作らせて貰つたんです。でも良かった。そんな風に美味しそうに食べて頂けて、作った甲斐がありました」

心底嬉しそうに笑い、頬を赤らめながら言うシエスタが可愛らしい。

あつという間に料理を平らげた桐生は感嘆の溜め息を漏らした。美味しかったが、流石に少し食べすぎたらしい。腹がこの上ない程一杯だ。

「美味しかったよ、ご馳走様」

「はい！ お粗末様でした！」

綺麗に空になった皿を一枚一枚愛しそうに縁を撫でてから盆に乗せながらシエスタが鼻歌を歌う。

そんなシエスタに笑いながら桐生が声を掛ける。

「ずいぶんとご機嫌だな。何か良い事でもあつたのか？」

「え？ はい……今、ありました」

桐生に声を掛けられて鼻歌を止めてから、シエスタは盆に乗つた皿の一枚を取つて胸元で抱き締める。

「自分の作つた料理が、お皿の上から綺麗になくなる事がこんなにも嬉しい事なんて知りませんでした。私、初めてなんです。誰かの為に、あんなに一生懸命料理をしたの。

でも、カズマさんは私の想像した表情で食べてくれた」

「想像した表情？」

「はい。作りながら思っていたんです。こんな顔で食べて欲しい。こんな表情で美味しいと言つて欲しい。それが、叶いました」

嬉しそうにはにかむシエスタに桐生もはにかみを見せる。

心地の良い沈黙の中、シエスタがお茶を入れようと盆に乗っていたポットに手を伸ばすと、テーブルの足に爪先が引つ掛かつて身体のバランスを崩してしまった。

「っーと……」

とっさに桐生がシエスタの身体を支えながら床に尻餅をついてしまう。桐生の膝の上に座る形になったシエスタは驚きと羞恥心から顔を真っ赤にして俯いた。

「す、すみません、カズマさん……」

「いや、大丈夫か？」

答え様と顔を上げたシエスタは、間近で見ると桐生の顔に言葉を失った。整った眉、細かい傷だらけの肌、自分を心配そうに見つめる、澄んだ瞳。こんなにも間近で見ると桐生の顔は初めてで、その大人の男の顔に暫し見とれてしまう。

そんな中、パンツ！ と勢い良く開かれた扉が沈黙を破る。

二人の顔が扉に向かうと、そこには息を荒げたルイズが立っていた。

シエスタはルイズの顔を見て我に返ると、桐生の膝から立ち上がり、盆を持って部屋から出ていった。

桐生がシエスタを見送ってから立ち上がると、スタスタとルイズが距離を詰めてきた。

「何、やってたのよ、あんた……」

ルイズの声は静かだが、声の震えから相当な怒りを感じて桐生は首を振った。

「何もしていない。シエスタがバランスを崩したのを支えたら、たまたまあんな格好になっただけだ」

「あんた……私がいない時に、あの子をこの部屋に呼んでたの？」

「いや、今日初めてシエスタがこの部屋に来た」

桐生は腕を組んで堂々と言った。当然だ。やましい事は何もなし、嘘もついていないのだから。

しかし、今のルイズの耳には、そんな桐生の言葉は届かない。メイドと、部屋で二人きり。その真実しか受け入れられていないのだ。

ルイズはベッドに向かって歩くとそのまま腰掛けて俯いた。握り締めるシートが皺を作る。

「カズマ、今すぐ出てって」

「聞け、ルイズ。お前が何を怒っているかわからんが、今のは誤解でー」  
「出て行って言ってるでしょ！」

桐生が溜め息混じりに言っていた言葉はルイズの叫びと、投げつけられた枕で遮られる。肩を震わせ涙が滲んだ瞳で桐生を睨み付けている。

「今度こそ……今度こそ怒ったわ！ あんたなんかクビよ！ 二度と私の前に姿を表さないで！」

ルイズの言葉に、桐生は思わず一瞬ポカンとしてしまった。

「クビ？」

「そうよ、クビよ！ わかったらとつと出て行ってよ！」

プイツと桐生に背を向けて、ルイズは言い放つ。

「私の、貴族の部屋をなんだと思ってるのよ！」

その言葉に、桐生はルイズが怒っている理由に当たりをつけた。ルイズが怒っているのは、自分の部屋を逢い引きの舞台にされた事なのだろう。桐生にはそんなつもりもなければ、そんな事実も存在しないのだが。

しかし、これでもそれなりに長い付き合いだ。ルイズの性格はわかってるし、今のルイズにどんなに説明しても納得しないだろう。

「勝手にしろ」

初めて聞く桐生の冷たい一言に、ルイズの胸はズキンと痛んだ。

桐生は投げ付けられた枕をテーブルに置き、壁に立て掛けていたデルフリンガーを乱暴に取ると扉へと向かい、

「世話になったな」

その一言を残して、ガチャンと扉が閉められた。

一人になった部屋の中で、ルイズの瞳からボロボロと涙が零れ、小さな身体がそのままベッドに倒れ込んだ。

桐生は取り敢えず女子寮から出ると、学園の方へと歩き出した。

「しかしこの歳で解雇宣告か……。人生何かあるかわかったもんじやないな」

一人ごちながら今後についてマルトーに相談しようと厨房に向かうと、食堂の前でメイド達とコック達が困った表情を浮かべて集まっていた。

気になった桐生がその集団に近付くと、

「あ！ ミス・ヴァリエールの使い魔さん！」

と数人のメイドが桐生に近寄ってきた。

「どうしたんだ？ こんなに集まって、何かあったのか？」

「それが……」

メイドの一人が食堂に視線を向けながら口ごもった。桐生は気になって食堂に顔を出してみる。

真ん中のテーブル。ルイズ達二年生が普段食事を取っている席の一つに、誰かが座っていた。その人物の前にはワインの壺が十数本と並んでいる。その人物は手酌でワインをグラスになみなみ注ぐと、一気に呷って飲み干した。

その人物は、ギーシュだった。大きな溜め息を漏らしながら空になったグラスをテーブルに置いて、酔って赤らんだ顔で虚空を眺めている。

「ギーシュじゃねえか。何やってんだ、あいつ？」

「それが、昼食の片付けをしている最中に突然やって来て、「ワインを持ってこい」と言われて、それからずっとあなんです」

困った表情でメイドとコックが顔を合わせて溜め息を漏らす。桐生は頬を掻きながらギーシュを顎でしゃくった。

「追い出せば良いじゃねえか」

「と、とんでもない！ 貴族の方にそんな事……！」

メイドもコックもブンブン首を振って顔を青ざめさせている。この世界の階級制度にはいい加減うんざりしてくる。

「なら、俺がやる」

周りの制止の声も聞かずに、桐生はギーシュに歩み寄る。

再度グラスに注いだワインを飲み干して、ギーシュは桐生の存在に気が付いて振り返った。やはり相当呑んでいるらしい。アルコールの臭いが身体から漂い、目は濁っている。

「おお、カズマジやないか。ヒクツ、何か……よ、うぶつ、用かね……？」

ヘラヘラと笑みを浮かべながら話すギーシュに、桐生は苦笑を浮かべながら隣に座る。

「どうも、荒れてるみたいだな。」

「ヒック……ふん、君はいつでも余裕だな。大人の男つて奴か……くだらんな」

隣に座る桐生を横目に、ギーシュはグラスにワインを注ぐ。しかし、既に空になった壇からはポタポタと数滴の雫しか出てこない。舌打ちをしながらギーシュは壇を置くと、椅子に寄りかかって此方を見ているメイドとコック達に顔を向けた。

「見ている暇があったらワインを持って来たまえ！ 使えない平民共め！」

「止めろ、ギーシュ」

桐生が身体をギーシュに向けて睨み付ける。普段のギーシュならそうされただけで身体を震わせる所だが、酔いが思考を濁らせて妙な度胸を生んでいく。

「なんだあ？ カズマあ……平民の君が、僕に、ヒック、貴族の僕に意見するのかい？」

「酒を呑むのはお前の勝手だ。だが、ここでは他の奴の迷惑になる。自分の部屋か、外で呑め」

「迷惑う？　はっ、貴族が平民に迷惑をかけていると？　その貴族の金でパンをかじってる奴等の事など知るか！」

乱暴にギーシユがテーブルを蹴りつけると、並んでいた壇が数本転がり床へと落ちる。カランと乾いた音を立てて床に転がる壇の一本を足で止めると、桐生は立ち上がりギーシユの胸ぐらを掴んで立ち上がらせて睨み付ける。

「口で言っつてわからねえならその身体に教えてやる。表へ出ろ」

「はっ！　上等だあ！」

桐生の腕を振りほどこいて酒臭い息を漏らしながらギーシユも凄みを利かせる。

桐生がそのまま食堂の外へと向かうと、ギーシユも酔った足取りでその後を追う。

既に午後の授業が始まり、誰もいない「ヴェストリ」の広場へと二人はやつて来た。初夏を彩る木々の緑が風に揺れている。

少し距離を取つて桐生とギーシユはお互いに睨み合うと、ギーシユは杖代わりの薔薇の造花を取り出して、それを投げ捨てた。

「どうした？　貴族お得意の魔法で来ないのか？」

挑発する様に桐生がデルフリンガーを投げ捨てて言うと、ギーシユは構えを取り始め



る。構えと言つても、拳を握り締めて軽く腕を上げているだけだ。殴り合いのなの字も知らない、素人の格好。

「甘つたれた貴族の拳で、俺に敵うと思つてんのか？」

「二度僕に勝つたからつて……いつまでも偉そうにするなあつ！」

ギーシュががむしやらになつて突進してくる。

桐生の腹にタツクルをかましてから、顔に向かつて拳を振るう。が、筋肉もなく、人の殴り方も知らないギーシュの拳はペチンと音を立てるだけでダメージは全くない。

そんなギーシュに、桐生は容赦なく胸ぐらを掴んで背負い投げを繰り出す。芝生に覆われた地面に背中を打ち付けられて、ギーシュが苦悶の表情を浮かべて呻き声を漏らす。

ギーシュの痛みなど構わず、桐生はギーシュの肩を掴んで無理矢理立ち上がらせる。荒い呼吸を繰り返しながら桐生を睨むギーシュに対して、桐生はかかつてこいとばかりに手を振つて見せる。

「僕だつて……僕だつてえっ！」

メチャクチャな動きで桐生の顔に、胸に、腹に拳を打ち付けるギーシュ。桐生はただギーシュに殴られ続けるが、ダメージを感じないまま暫く好きにさせる。

弱々しく桐生の腹に拳を打ち付けて、身体中に汗をかいて呼吸を乱しながらギーシュ

が俯きブツブツと言葉を漏らす。

「僕は、守られたくてカズマの側にいるんじゃない！ ただ彼に、彼に近付きたい。彼の様な男になりたい。ただ、ただそれだけなのに……！」

ヨロヨロと頼りない足取りで桐生の胸ぐらを掴み、顔を上げるギーシュ。その瞳からは、涙が溢れていた。

「そのの何がいけないんだ!? 僕はただ、カズマを！ 君を！ 間近で見て学びたい！ 君の力はどこから来るのか！ どうすれば君みたくなれるのか！ その為側にいる事が、そんなに悪い事なのか!? 誰も彼もが言う！ あいつは弱い自分を守ってくれからあの平民の側にいる！ そんな事、一度も考えた事がなかったのに！」

悲痛な胸の内を声に出して漏らすギーシュの手首を掴み、胸ぐらから離させるとギーシュの額にゴツリと自分の額を重ねる桐生。

「お前は何も悪くない」

自分の瞳を覗く桐生の優しい瞳に射抜かれ、ギーシュは力なくその場に崩れ落ちる。そんなギーシュの頭に、桐生は手を乗せて優しく撫でた。

「ギーシュ、お前はお前の思う様にやればいい。周りの声なんて気にするな。どんなに馬鹿にされ、笑われ、蔑まされても、それでも諦めず努力し続けた奴だけが、なりたいたいものになれるんだ」

くしやりと髪を掻き分けて撫でる桐生の手の温もりに、ギーシュは嗚咽を漏らしながらポロポロと涙を地面に零す。

「ただ、これだけは覚えておけ。お前がどんなに頑張っても、俺にはなれない。お前は「お前」なんだからな。でもな、その気になれば人間誰だって、「自分の目指したものを越えた自分」にはなれるんだ」

「自分の目指したものを越えた、自分……？」

涙と鼻水でグシャグシャになった顔で見上げるギーシュに、桐生は力強く頷いた。

「僕もいつか、カズマを越えられるのかな……？」

「お前がそう願ひ、努力し続けられればな。だからまずは、外野の声に惑わされるな。男なら、堂々としろ」

優しく語る桐生に力なく笑みを浮かべたギーシュは、暴れたせいで身体中に回ったアルコールの影響で、そのまま意識を失った。

瞳を開くと、日が沈みかけた薄暗い空が視界に広がった。淡い茜色から青黒い夜の闇へと変わろうとしている空にはうつすらと星の瞬きが見える。

ギーシュがゆっくりと身体を起こすと、目の前には桐生が座っていた。グラスに注がれたワインを一口含んでから、ギーシュの方へと顔を向ける。

「起きたか」

「僕は……？」

そこで初めて、ギーシュは自分が白く広いシートに寝かされていた事がわかった。

「あれから六時間くらいだ。お前がずっと寝てたから、俺もここで酒を飲ませて貰っていた。いるか？」

桐生が水の入ったコップを差し出すと、ギーシュは素直にそれを受け取った。手渡されたコップの水を飲み干して溜め息を漏らすと、シエスタが料理の乗った盆を持ってやって来た。

「おはようございます、ミスタ・グラモン。夕食を持ってきました。あ、カズマさんにも」  
「ありがとな、シエスタ」

盆を受け取ると、上には皿に乗ったローストチキンやサラダが乗っていた。

「それでは、ごゆっくり」

シエスタが去ると、桐生は自分のともう一個のグラスにワインを注いで、片方をギーシュに手渡した。

「今夜は男同士、サシで呑もう。お前とこうしてサシで呑むのは初めてだしな」

「僕は構わないが、君は良いのかい？ ルイズが待っているんじゃないか？」

ギーシュの言葉に桐生は頬を掻きながら困った表情を浮かべた。

「それなんだが、ちょっと使い魔をクビになっちまってな。もうあの部屋には戻れないんだ」

「クビ? ……はっ? クビ!?!」

桐生の言葉が一瞬理解出来なかつたらしく、ギーシュがすつとんきような声を上げて確認してきた。桐生は肩を落としながら頷く。

「ちよつと喧嘩みたいな感じになっちまってな。まあ、そう言う事だ。だから付き合え」  
苦笑してグラスを掲げた桐生に、ギーシュは吹き出す様に笑ってから頷いて同じ様にグラスを掲げた。

二つの月が照らす「ヴェストリ」の広場の片隅で、男達のグラスがカチンと重なった。

## 第21話

桐生を部屋から追い出して三日目の夜、ルイズは布団にくるまって部屋に閉じ籠っていた。

桐生がいなくなってから体調が悪いのを理由に、授業も休んでいる。チラリと向かう視線の先にはテーブルに乗った、シエスタが持つてきてくれた食事があるが一切手をつけていない。

桐生を追い出してすぐに、シエスタがルイズの部屋にやって来て、あれは誤解で、桐生は自分を庇ってくれただけだと必死に訴えにきた。

シエスタの話し振りからしてそれは本当なのだろうが、あそこまで逆上して追い出してしまった手前どんな顔で桐生を迎えに行けばいいかわからない。と言うより、ルイズの中のプライドが素直に謝る事を拒否していた。我ながら貴族とはなんと我が儘な生き物か、と、ルイズ自身も思う。

カチャリ、と扉が開く音が聞こえてルイズは勢い良く身体を起き上がらせる。もしかして桐生が戻って来てくれた、と言う淡い期待を胸に扉の方へと視線を向ける。

しかし、そこにいたのは桐生ではなく、まだ制服のままのキュルケだった。

「こんばんは、ルイズ」

キュルケは小さな微笑を浮かべながら言うと、ルイズは敵意剥き出しの眼で睨み付けてから再びベッドに倒れ込む。

キュルケはツカツカとルイズのベッドに近付いて、毛布を掴むとガバツと剥ぎ取った。丸まって横になったルイズの視線だけがキュルケに向けられる。

「何しに……来たのよ？」

「ご挨拶ね。貴女が三日も授業を休むから様子を見てあげたんじゃない」

キュルケは呆れた様に溜め息を漏らして言うも、内心ではしまったと思っていた。シエスタと二人きりの所を見せ付けからかうつもりが、まさか桐生を追い出す程の結果になるとは思ってもみなかった。

「で、どうするのよ？ 使い魔を追い出しちゃって」

「あんたには関係ないでしょ」

力なく言うルイズの声にキュルケは思わず苛立ちを覚えるが、ルイズの頬に残る涙の跡にそんな気持ちも削がれていく。

「貴女って、高慢ちきで、馬鹿で、嫉妬深くて、自分勝手なのはわかっていたけど、たかが一緒に食事してただけじゃない。それとも……食事以外にも何かしちゃったの？」

その言葉に、ルイズの身体がビクツと跳ねる。どうやら食事だけでは済まなかったら

しい。

「そう……まあ、それじゃあショックよね。好きな男が他の女と、しかも自分の部屋でいちゃついているなんて」

「す、好きなんかじゃないわ!」

ガバツとルイズが起き上がってキュルケに怒鳴り付ける。思つたよりも元気はあるらしく、キュルケは心配した自分を馬鹿らしく思うのと同時に、まだまだからかい甲斐があるのを内心嬉しく思った。

「なら貴女は、好きでもない男を他の娘といちゃついているだけで部屋から追い出すって言うの?」

「だからっ! よりによって私の部屋で、だから……!」

「なら、他の場所なら良いんだ?」

「そ、それは……!」

キュルケの言葉にルイズは思わず口ごもる。

キュルケはそんなルイズにクスツと笑みを零すと、ゆつくりとその手をルイズの頬に這わせる。しなやかな褐色の指が、ルイズの頬を優しく撫でた。

「ルイズ、貴女って絶対損した人生を送ってるわよ? もっと自分の気持ちに素直になっても良いじゃない。好きな人は好き。その感情に理由も理屈もいらなのよ?」



ルイズはただ黙って、ゆっくりと俯いていく。

ルイズの頬から手を離すと、キュルケは扉に向かつて歩き、ドアノブに手をかけながら言った。

「ま、カズマの事はあたしがなんとかしてあげるわ。ちよつとは言え貴女をけしかけたあたしにも責任はあるしね。その間に、せいぜい自分の気持ちに気付く事ね」

白そう言つて部屋から出て行つたキュルケを見送らず俯いたまま、ルイズはポツリと呟いた。

「ありがとう……キュルケ」

「ヴェストリ」の広場の片隅で、桐生はデルフリンガー振るつていた。赤混じりの青い月明かりの中、白い刃がビュンツと空を切り裂く。

その横ではギーシユが歯を食い縛り、額から汗を流しながら腕立て伏せを行つていく。

「十五……じゅ、十六……！」

細い腕をプルプルと震わせ、ゆっくりと腕の筋肉だけで上体を上げ下げさせる。

桐生がルイズに追い出されたのを聞いて、ギーシユは桐生を自分の部屋で寝泊まりさせていた。その際、桐生に自分も桐生の様な身体付きになりたいと話すと、筋肉トレー

ニングを提案されたのだ。腕立て伏せ、腹筋、背筋と基礎的なトレーニングだが、今まで一度も経験した事のない筋肉の酷使にギーシユの身体は悲鳴を上げていた。

「に、二十……だはっ！」

上体を上げ切ると、ギーシユは声を漏らしながら地面に突っ伏した。その横で、ギーシユの使い魔であるヴェルダンデが心配そうに主人を見ている。

「か、身体中が痛い……！」

「筋肉痛だな。痛みが来るって事は、それだけ筋肉を使った証拠だ。トレーニングに慣れれば、痛みも出なくなる」

ごろんと仰向けになって荒い呼吸を漏らしながら喘ぐギーシユに桐生が声をかける。

ギーシユが痛む身体を起こして持つてきたタオルで顔を拭うと、二人の前にキュルケが現れた。

「男二人で何やってんのよ？」

キュルケは呆れた表情を浮かべながら言うと、手に持つていた水の入った瓶を二人に手渡した。モンモランシーから、ギーシユがルイズの使い魔と広場で何かをやっていると聞いて一応差し入れのつもりで持つてきた物だった。

「トレーニングだよ。ありがとう、キュルケ」

ギーシユは顔をすっかり拭ってからキュルケから貰った瓶の蓋を開けて中身を一気

に飲み干した。

「まあ、なんでも良いけど。さあ、ダーリン。出掛ける支度をして」

「出掛ける？」

桐生も瓶の水を飲みながらキュルケに首を傾げる。

「これを見て」

キュルケは自分の後ろから出てきたフレームに啞えさせていた紙の束を桐生に差し出す。

その紙はどうやら何かの地図らしい。訳のわからない絵の中に所々丸が付いては読めない文字が書かれている。

「これは？」

「宝の地図よ」

「宝あ？」

横から二人のやり取りを見ていたギーシュが呆れた様に声を漏らす。そんなギーシュを無視して、キュルケは桐生に続けた。

「ルイズに追い出されてギーシュの所にいるのも悪くはないけど、宝が見付かれれば貴方は大金持ちになれるわ。そうすれば、ゲルマニアでなら貴族にだってなれる」

「金次第なら平民も貴族になれるらしいもんな。だからゲルマニアは野蠻だと言うんだ」

ギーシュが吐き捨てる様に茶々を入れると、キュルケが物凄い形相でギーシュを睨み付けた。さながら蛇に睨まれた蛙の如く固まったギーシュを他所に、キュルケは熱っぽい視線を桐生に向けながら続ける。

「ねえ、カズマ……貴族になって、ルイズをぎやふんと言わせてみない？」

しなだれかかるキュルケの頭を優しく撫でながら桐生はその地図を返す。

「俺はハッキリ言つて、貴族になる事その物に興味はない。だが、確かにここで留まるだけと言うのもなんだしな。いい機会だ。この宝探し、乗らせて貰おう」

桐生の言葉に嬉しそうにキュルケが微笑むと、ギーシュが桐生の横に立つて胸を張つた。

「カズマが行くなら僕も行く」

「いや、あんたはどうでも良いんだけど。まあ、良いわ。好きになさいな」

心底どうでも良さそうにキュルケは手を振りながら苦笑した。

「しかしこの地図の位置、ここからじゃ相当な距離じゃないか。どうやって行くんだ？」

ギーシュは数枚の地図を眺めて頭を掻きながら首を傾げた。

そんなギーシュに得意な顔で、キュルケがパチンと指を鳴らす。すると突如空から

青いウインドドラゴンが降り立った。竜の首筋には、タバサがちよこんと座っていつもの様に本を読んでいる。

「あたしの親友が宝の元へと導いてくれるわ」

これで準備は整ったとばかりに豊満な胸を張ったキュルケ。

「待ってください！」

突然、出発の雰囲気になりかけていた空気は一つの声でかき消された。タバサ以外の誰もがその声の主を探して視線を向ける。

声の主は、シエスタだった。

「お話は聞かせて貰いました！ 私も連れて行って下さい！」

言いながらシエスタは桐生の腕に絡み付いた。たまたま通りかかった所で桐生を見つ、様子を伺いながら事の成り行きを見守っていたが、このまま行けばキュルケが桐生を派手に誘惑すると思つて危機感を覚えたのだ。

そんなシエスタを小馬鹿にした様に見ながらキュルケが手を振った。

「貴女は平民でしょう？ 貴女が来ても足手まといになるだけよ」

「ば、馬鹿にしないで下さい！ わ、私、こう見えても……！」

シエスタが拳を震わせながらキュルケを睨む。その姿にキュルケもギーシュ、桐生もが黙った。桐生がそうである様に、シエスタにも何か特別な能力があるのではないかと

思つて。

「料理が得意なんです！」

「……………まあ、メイドだしね。」

一瞬シエスタの言葉に呆氣に取られたキュルケは鼻を鳴らしながら苦笑を浮かべて見せる。

「で、でもでも！ 私、食べられる野草とか果物とか、色々知ってますよ！ 宝探しと言うからには野宿もあるんでしょう？ 皆さんの食事は私が用意します！」

確かに、野宿の際にむやみやたらにそこらの草や木の実を食べて体調を崩しては危険が伴う。

キュルケは渋々ながらも頷いた。

「まあ、良いわ。人手が多いのは悪くないし。でも怖い思いをしても知らないからね？」

「平気です！ カズマさんが守ってくれます！」

シエスタはぎゅつと桐生の腕を抱き締めながら宣言する。

キュルケはタバサを含めた全員を見回すと、笑みを浮かべて宣言した。

「さあ、宝探しの始まりよ！」

祭壇に灯された蠟燭の灯りと、ステンドグラス越しに差し込む月明かりだけが照らす

薄暗い聖堂の中にボリボリと何かを咀嚼する音が響いている。

祭壇を前に数列と並ぶ長椅子の一番手前でその男、レイヴンは寝そべって茶色い紙袋からナッツを鷲掴んでは口に放り込んでいた。塩味の効いたナッツを味わいながら虚空を眺めている。

ガタンと大きな音を立てて聖堂の入り口が開き、相変わず白装束に身を包み、蛇を模した仮面を着けたウロボロスが入ってきた。ウロボロスはレイヴンの元に歩み寄ると、立ったまま後ろに手を組んだ。

「アルビオンのロサイスに巨大な戦艦が停まっているらしい。以前会ったクロムウエルとか言う皇帝が乗っていた船と思われる。それと、その戦艦を造るに当たってロバ・アル・カリイエの技術者がいるとの事だ」

「ふ〜ん……」

ウロボロスの報告をさほど気にした様子もなく、レイヴンが声を漏らしながらナッツのカスで汚れた指を舐める。

レイヴンは椅子から身体を起こして上体を伸ばすと、欠伸をしてからウロボロスに笑いかける。

「ありがたいね。気になる事があるのに仕事をこなしてくれて助かったよ」

「……何の事だ？」

ウロボロスは気にしていない様に取り繕うも、仮面から覗く眼が細くなるのをレイヴンは見逃さない。

「カズマ……その名前に何か覚えがあるんでしょ？」

からかう様に話すレイヴンにウロボロスは背を向ける。

「まあ、僕にはどうでも良いけどね。あんたが何を企もうと、ね」

レイヴンがそう言うと、ウロボロスは言葉一つ発さずに聖堂から出ていった。

レイヴンは祭壇の元へと歩み寄って、掲げられた十字架の前で指を十字に切る。

「せいぜい今を楽しむんだね、クロムウエル。虚無の使い手である事を、後悔するその日まで」

穏やかな日差しが辺りを包む廃村の前の木に、タバサは身を潜めていた。

所々崩れた家々が立ち並ぶ通りの向こう側に、小さな教会が見える。今回の宝の地図が指し示す場所だ。

だが、いつの時代にも、宝の地図が指し示す場所には危険が付き物である。そして、今回の危険の元が家々の間からのつそりと出てきた。

体長が二メートル程の赤い皮膚をしたその存在は、豚の様な顔から突き出た鼻をブヒブヒ鳴らして辺りに漂う人間の臭いを嗅いで、本日のご馳走を探す。



醜悪な姿をして丸々と太ったこの生き物は、オーク鬼と呼ばれる魔物だ。動物から剥ぎ取った皮を身体に巻いて、手には人間程の大きさをした棍棒を持つている。木陰から確認出来るだけでも、数は十数匹という。人間の子供の柔らかい肉が好物と言うこの魔物に襲われた村の住民達は、泣く泣く故郷を手放したのだった。この様に、何らかの形で放置されている村や集落は、ハルケギニアにははいて捨てる程存在する。

タバサは敵の数が思ったよりも多い事を危惧して、使う呪文を考えていた。すると、突然オーク鬼達の前に花びらが舞い、七体の青銅のゴーレムが現れた。ギーシユのワルキューレだ。

タバサは思わず眉を潜める。打ち合わせた作戦と違う。ギーシユが先走ったのが目に見えていた。

七体のワルキューレは一匹のオーク鬼目掛けて突進する。青銅の七つの槍がオーク鬼の腹に打ち付けられた。

しかし、厚い皮と脂肪、それに動物の皮が盾となってオーク鬼の内臓を守る。結局、急所には届かない。

一瞬の攻撃に呆気に取られたオーク鬼はすぐさま自我を取り戻し、一斉にワルキューレに棍棒を叩き付けて粉々にした。

その隙に、タバサは魔法を詠唱する。「水」と「風」の二乗を組み合わせて杖を振るつ

た瞬間、数十本の氷の矢がオーク鬼達に放たれてその醜く太った腹を貫通する。タバサの得意攻撃呪文、「ウインディ・アイシクル」だ。

タバサの攻撃が成功したのを見計らい、木の上に待機していたキュルケが呪文を唱えた。「炎」の二乗、「フレイム・ボール」。ボーリング玉程の炎の塊がオーク鬼の頭を焼き付くした。

五匹程のオーク鬼を倒した所で、キュルケ達の軽快な攻撃は中断を迎える。強力な魔法にはそれなりに呪文を完成させるのに時間がかかるのだ。

仲間を倒され怯んでいたオーク鬼達は、すぐさま相手が数人のメイジである事を確信すると、恐れを忘れて怒りを露にした。長年人間と戦いを繰り返してきたオーク鬼達はメイジの戦い方を知っている。魔法が一度切れれば、暫く発動出来ない瞬間がチャンスなのだ。

漂う人間の子供の臭いを嗅ぎ分けて動き出したオーク鬼達の前に、抜き身の剣を手に持った男とサラマンダーが現れた。

しかし、オーク鬼達は気にしない。サラマンダーは厄介な相手だが、人間が一人出てきた所で自分達の相手ではない。オーク鬼達はサラマンダーと男に突進した。

「フレイム、俺は右をやる。お前は主人を守れ」

デルフリンガーを構えながら桐生が言うと、フレイムはきゆるきゆる鳴いて頷いて見

せる。

一気に距離を縮めたオーク鬼が、桐生目掛けて棍棒を振り下ろす。

ゴキヤツ！ と潰れる手応えを感じる、筈だった棍棒は地面を叩いていた。オーク鬼は急いで桐生に視線を向けようとして違和感に気付く。

首が回らないのだ。どんなに左を向こうとしても、何故か視界は棍棒が叩き付けられた地面を眺めている。

桐生はギリギリの位置で棍棒を避けると、そのままオーク鬼の首を斬り払ったのだ。オーク鬼の首が、ゆっくりと地面に転がり、首を無くした巨体が切り口から血を噴き出しながら前のめりに倒れる。

一瞬何が起こったのか理解出来なかった他のオーク鬼達に、桐生は待った等しない。流れる様な動きでもう一匹のオーク鬼の腹を切り裂き、その勢いを着けたまま飛んで、更にもう一匹の頭を脳天から唐竹に割る。

フレイムの方を見ると、太った身体を組み敷いてその醜い顔に炎を浴びせる姿が目に入った。

そのまま、魔法の詠唱を完成させたタバサとキュルケの援護を受けながら、桐生は残りのオーク鬼を容赦なく切り捨てた。

「あんたねえっ！　ちゃんと作戦通りに動きなさいよ！　ワルキューレであんたの使い魔が作った落とし穴に誘導して一網打尽の計画だったでしょうが！」

全てのオーク鬼を倒したのを確認してキュルケがギーシュに怒鳴り付ける。

そんなキュルケに、ギーシュは痛そうに腕や腹を擦りながら首を振って見せた。

「必ず作戦が成功する保証はない。戦は先手必勝。それが一番の兵法だ」

「あんた、自分の使い魔が作った落とし穴くらい信じなさいよ！」

尚も納得のいかなそうなキュルケの頭を優しく撫でながら、桐生がなだめる。

「まあ良いじゃねえか。誰一人怪我せずにこの場を乗りきったんだ。終わりよければ全てよし、だ」

まだどこか納得出来ないながらも、桐生に言われたキュルケは渋々ながら頷いて見せた。

キュルケが落ち着いたのを見計らって、物陰で怯えていたシエスタが桐生に駆け寄り抱き付いた。

「凄いです、カズマさん！　あの凶暴なオーク鬼をあんな簡単に倒すなんて！」

シエスタは桐生の腕にしがみつきながら死体となったオーク鬼達を見て生唾を飲んだ。

「こんな化け物共がいちゃあ、おちおち森の探索にも行けねえな」

シエスタを少し離してビュンツ！とデルフリンガーを振るって刃に付いたオーク鬼の血を地面に飛び散らせてから鞆におさめた。

命のやり取りに対して一種の慣れの様な物を持っている自分を少し忌々しく思いながらも、桐生は全員が無事である事を改めて喜んだ。

「さあ、邪魔者もいなくなつたし、お宝とご対面といきましょうか！」

今までの戦いがまるで他の誰かが行つた活劇の様に、ワクワクした表情で朽ち果てた教会を眺めてキュルケが舌舐めずりして見せた。ギーシユもどこかワクワクした様に笑みを浮かべている。

遠い昔、「ヒマワリ」で探検ごっこをして、錦山と由美と共に、誰かが書いた宝の地図をヒントに宝探しをしたのを思い出した。あの頃は純粹に、それがどんなに価値のない物でも見つけたと言う達成感が堪らない快感だったのを覚えている。

「所で今回の宝はどんな物なんだね？」

ギーシユが尋ねると、キュルケは宝の地図に書かれている注釈を読み始めた。

「えつとね、ここの教会の祭壇の下に、チェストが隠されてるらしいのよ。そのチェストの中に入っているのが、この村を逃げ出す際に司祭が隠した金銀財宝、それに伝説の秘宝「ブリーシנגメル」があるんですって！」

「そ、そのブリーシングメルって何なんですか!？」

シエスタが身を乗り出してキュルケに問い掛ける。

「黄金で出来た首飾りだそうよ。「炎の黄金」で作られてるんですって！ もう聞くだけでワクワクしちゃうわ！ その首飾りを身に付けたらどんな災厄からも守られるらしいわ！ さあ、行くわよ、みんな！」

キュルケを先導に、勢い良く教会の扉を開いて、一行は教会の中へと入っていった。

夜、教会の中で焚き火を焚いて、シエスタが鍋の中のシチューを掻き回していた。

タバサは教会の中にあつた、朽ちて薄汚れた長椅子に座つて本を読んでいる。

キュルケは地面に座つて詰まらなそうに爪の手入れをしてから、目の前にある安っぽい真鍮製の首飾りを摘まみ上げてしかめっ面をして見せる。

「これが……こんな物が秘宝だなんてね」

結局、中に入つて地図の通りに祭壇の下の隠されたチェストを見つけはしたが、中に入つていたのはこの二束三文にしかならなそうな首飾りと、銅貨が数枚程度だった。

「これで……七件目、だっ！ やっぱり、お、お宝なんか、ないんじゃないのか……?!」

痛む身体に鞭を打つてギーシュが腕立て伏せをしながらキュルケに言う。

キュルケは溜め息をつきながら「この宝を示していた宝の地図を指先から一瞬で焼

き付くした。

他の所でも、猛獣や魔物と戦い、罾を潜り抜け、険しい道を通ったにも関わらず、地図に書かれている様な財宝等一つも手に入っていない。まあ、地図は露店商や情報屋等から仕入れた物だし、ほとんどの宝の地図がガセネタである事は世の常である事を考えていたキュルケは多少シヨックを受けながらも堪えてはいなかった。

「うっ、はあ……いも、もう限界だ！」

ぶるぶる腕を震わせて上体を起こした所でギーシユが地面に突つ伏した。荒い呼吸を漏らしながら仰向けに寝転がり、地面に座つて煙草を燻らせる桐生に視線を向ける。

「か、カズマ……トレーニングを続ければ、僕も強くなれるのかな？」

汗にまみれた顔を真つ赤にさせながら、ギーシユが桐生に問い掛ける。そんなギーシユに桐生は頷いてから、自分の胸元を親指で指差して見せた。

「ああ、鍛えれば誰だって強くなれる。でもな、一番鍛えなきやいけないのは、心の方だ」  
「心……」

ギーシユが首を傾げながら疑問を投げ掛けると、キュルケとシエスタ、更にはタバサまでもが桐生へと視線を向ける。

桐生は煙草を携帯灰皿に押し付けて、紫煙を吹きながら頷いた。

「「心技体」と言う言葉がある。「心」は精神、「技」は技術、「体」は身体と言う意味だ。

これは喧嘩や格闘技だけの話じゃない。権力、魔法、仕事に関して当てる言葉だ」  
ギーシュは身体を起こして胡座をかくと、真剣な眼差しで桐生の言葉に耳を傾けた。  
「技体は努力すれば、誰だって簡単に鍛えられる。一つの技を覚える、丈夫な身体を作る、それだって大事な事だ。けどな、それと同じくらい、心も鍛えなきゃ、人間は堕落の一端を辿る事になる」

桐生の言葉を真剣に聞きながら、その場の全員がゴクリと生唾を飲んだ。

「魔法だろうが権力だろうが、過ぎた力はどうしても人を慢心にさせて、狂わせる。その力を制御して、自分が正しいと思う事に使える様になつた時、人は本当の意味で強くなるんだ」

「なら……どうすれば、心を鍛える事が出来るんだい？」

どこか興奮した様な表情でギーシュが更に桐生に問い掛ける。桐生はそんなギーシュに首を振った。

「それは人に教わる事じゃなく、自分で探すしかないんだ。ならギーシュ、お前は何で強くなりたい？」

「それは、僕もカズマの様になりたいから……」

「そうだ。お前が今強くなりたいのは、お前が俺の様になりたいからと言うのが理由だ。それは決して悪い事じゃない。でもな……」



桐生は優しい笑みを浮かべてギーシュに拳を突きだして見せる。

「いつかその強くなりたい理由が自分の為じゃなく、誰かの為にと考えられる様になった時、お前は本当の意味で強くなれる筈さ。」

「誰かの、為に……」

ギーシュは自分の胸元に拳を当てながら一人呟く。

そんな中、タバサもまた一人、握り締めた自分の拳を静かな眼差しで眺めていた。

「さあ、皆さん！ お話はそのくらいにして、食事に行きましょう！」

シエスタの元気な声に、みんな焚き火を囲む様に座って皿に注がれたシチューを受け取った。

「あら、なかなか美味しそうじゃない！ どれどれ……」

「待て、キュルケ」

渡された皿の中で湯気立つシチューをスプーンで掬って食べようとするキュルケを桐生が止める。

「なあに、ダーリン？」

「食べる時は、作って貰った人に感謝して、「いただきます」と言ってから食べるものでぞ」

そう言って桐生は目の前で両掌を合わせていただきますと言ってから、シチューを

擲つて食べ始めた。キュルケはタバサと顔を合わせて、見よう見まねながら両手を重ねていただきますと呟き、ギーシユもそれに習つて続けた。

「……うん！ 美味しい！ やるじゃないの！」

一口シチューを口に含んだキュルケが歓声を上げた。

タバサは何も言わないが、そのがつつき方からとても美味しいと感じているのが伝わってくる。

「美味しいな……ありがとうな、シエスタ」

「と、とんでもないです！ お口に合つて良かったです！ これ、私のおじいちゃん秘伝の料理、ヨシエナヴェつて言うんです！ 私の村の名物です！」

嬉しそうに話すシエスタと温かな食事に、誰もが疲れを癒されるのを感じた。

食事が終わり、ギーシユが身体を伸ばしながらキュルケを見て口を開いた。

「なあ、キュルケ……もう終わりにしないか？ どうせ次のお宝もバツタもんじゃ決まつてるよ。もう学園を出て十日だ。そろそろ戻つた方が良いんじゃないか？」

ギーシユの言葉から、改めて自分がルイズの元を離れている期間を思い知らされた。ちゃんと食事を摂っているだろうか、元気にしているだろうかと考えてしまう。

「あと一つ！ あと一つだけ見たら諦めるわ！」

そう言つてキュルケは残つた数枚の地図から、一枚を取り出してバンツと地面に叩き

付けた。

「これで最後よ！　これが駄目だったら、素直に学園に戻る事を約束するわ！」

「約束する程の事じゃないと思うが……今度は一体何てお宝なんだい？」

欠伸を漏らして興味無さそうに言うギーシュを無視し、地図に書かれている注釈に目を走らせるキュルケ。

「名前は期待出来そうね！　その名も、「竜の羽衣」よ！」

「えっ!？」

キュルケの言葉に先程からずっと黙っていたシエスタが叫び声を上げた。

「何よ、貴女……「竜の羽衣」について何か知ってるの？」

「あの、それって……タルブの村のですか？」

「ええ、タルブの村の近くを指しているわね。って、タルブの村ってどこよ？」

赤い髪をかき上げながら頭を掻くキュルケに、シエスタが口を開いた。

「ラ・ロシエールの向こう側にある村です。とても広くて綺麗な草原のある……私の、故郷です」

## 第22話

翌朝、一行を乗せたウインドドラゴンの上でシエスタが「竜の羽衣」についてみんなに説明した。

しかし、シエスタから受けた説明は村の近くに寺院がある事、そしてそこに「竜の羽衣」が祀られていると言うだけで、どんな物なのかが想像出来なかった。

「そもそも、なんで「竜の羽衣」なんて呼ばれているの？」

風になびく燃える様な赤髪を手で抑えながらキュルケが首を傾げて見せた。

「それを纏ったら、空を飛べるらしいんです」

「らしい？」

シエスタの言葉からどこか自信が無さそうなのを感じ取って、桐生が鸚鵡返しのように言う。

「実は……その「竜の羽衣」の持ち主、私のひいおじいちゃんなんです。その「竜の羽衣」に乗って、私の村に突然ふらりと現れたらしいんです。それで、「自分は東の国からこれに乗って来た」とみんなに言ったそうです」

「へえ、凄いいじゃないか。本当に飛べるんだね」

ギーシュがワクワクした表情で言うも、シエスタは溜め息をつきながら首を振った。「いえ、それが……村の人がその「竜の羽衣」に乗って飛んで見せてくれと言ったら、ひいおじいちゃんは何か言い訳をしたらしいんですけど、結局飛べなかつたんです。だから、みんなはひいおじいちゃんが頭がおかしくなつたと、馬鹿にして相手にしなかつたそうです」

「なんだか……いたたまれないな」

シエスタの話ぶりからそのひいおじいちゃんと言う人物がなんだか可哀想に感じて、桐生は眉をひそめながら呟いた。

そんな桐生に、シエスタは手と首を振って見せた。

「でも、その「竜の羽衣」の件以外はとも真面目で働き者だつたそうです。飛べないからと言う理由で私の村に住み着いちゃつたんですけで、明るくて元気な姿に私のひいおばあちゃんが惚れちゃつたみたいで……そのまま結婚して、村では人気者だつたそうです」

「異国から来た謎の男と村娘の恋……なんかロマンチックね」

シエスタのひいおばあちゃんの恋の馴れ初めに、キュルケは心底楽しそうに呟く。

「しかし、寺院に祀られているって事は、その村の名物みたいな物だろう？ 昨日シエスタが作ってくれたヨシエナヴェエみたいな。そんな物を貰う訳にはいかないんじゃない

か?」

桐生の言葉にギーシュとキュルケもどこか残念そうにしながらも確かにとばかりに頷いた。

「でも、私の家の持ち物だし……もしもカズマさんが欲しいって言ったら、私の父に掛け合います」

シエスタは少し悩んだ様にそう言つて、苦笑を浮かべた。

桐生は信じられない物を見ているかの様に、その「竜の羽衣」を眺めていた。

ここはシエスタの故郷、タルブの村の近くに建てられた寺院。そこに「竜の羽衣」は安置されていた。

寺院はシエスタの曾祖父が自分で建てたらしく、まるで日本の寺を思わせる様な造りをしている。

曾祖父が金を工面し「固定化」の魔法をかけられた「竜の羽衣」は錆一つない姿をしていた。

ギーシュとキュルケはつまらなそうにその「竜の羽衣」を眺めているが、タバサは好奇心が刺激されたのか、珍しくしげしげと眺めている。

「あの、カズマさん? 大丈夫ですか?」

呆けた様に「竜の羽衣」を見つめる桐生を心配した様にシエスタが声をかけるが、桐生は答えずにただだだ「竜の羽衣」に視線を釘付けにしていた。

「こんな物が飛ぶ訳ないじゃない」

キュルケががっかりした様に肩を落とした。

「確かに……どう見てもカヌーに翼を着けた玩具にしか見えないな。まあこんな大きさに作れたのは素直に凄いとは思うけど」

ギーシュもつまらなそうに「竜の羽衣」から視線を逸らして小馬鹿にした様に笑った。

「シエスタ……」

そんなギーシュとキュルケが見えていないかの様に桐生が口を開いた。

「お前のひいおじいちゃんが残したのは、これだけか？」

「えっ？ あとはお墓と、探せば何かあるかもしれないけど……」

桐生はシエスタの方へと身体をむけると、シエスタの肩をガシツと掴んだ。シエスタは自分の瞳を見つめる桐生の真剣な眼差しにドキツとして、顔に赤みが差す。

「頼む、それを見せてくれ」

桐生の真剣な言葉にギーシュもキュルケも、「竜の羽衣」を眺めていたタバサも桐生へと視線を向ける。

「わ、わかりました。ではまず、お墓を」

桐生の言葉に戸惑いながらシエスタは頷き、寺院の外へと出ていった。それに桐生が続き、ギーシュ達も続く。

シエスタに先導されて辿り着いたのは、タルブの村の共同墓地だった。所々に白い石で作られた墓石の中、一つだけ黒く他の墓石と趣を異にした墓石がある。

その墓石には墓碑銘が刻まれていた。

「ひいおじいちゃんが亡くなる前、自分で掘った文字なんです……村のみんなも誰も読めないんです」

シエスタの言葉に興味を持ったのか、タバサが墓石に近付いて刻まれている墓碑銘を指先でなぞる。

「見た事ない文字」

小さく呟いて桐生達に顔を向けたタバサは小さく首を振って見せた。

「確かに、見た事ない文字だな。古代の文字とか？」

「うーん……どちらかと言うと、どこか異国の言葉なんじゃないかしら？ シエスタのひいおじいちゃんって、東から来たんでしょ？」

ギーシュとキュルケも試しに墓碑銘を眺めるが、見た事のない文字に首を傾げて手を上げて見せる。

「そうなんですよね。だから未だにひいおじいちゃんがなんて掘ったのかわからなく



て。ねえ、カズマさん、何かー」

「海軍少尉佐々木武雄、異界二眠ル」

「えっ？」

シエスタの言葉を遮りスラスラと墓碑銘を読み上げた桐生に、一同は目を丸くする。桐生は墓石に手を合わせて黙祷した後、シエスタへと視線を移す。

黒い髪と黒い瞳。どこか懐かしさを感じさせるその色に、桐生は漸く合点がいった。

「シエスタ……お前、その髪と瞳、ひいおじいちゃんに良く似ていると言われないか？」  
桐生の言葉に、シエスタは驚いて口元を手で覆う。

「ど、どうして……その事を？」

再び寺院に戻った桐生は「竜の羽衣」に触れてみた。すると左手のルーンが輝き、中の構造や操縦法がまるでパソコンにインストールされる様に桐生の脳へと入っていく。

燃料タンクのコックを見つけ、開いて見ると中は空っぽだった。如何に綺麗に原型を留めていようとも、ガス欠では飛ぶ筈がない。恐らく、シエスタの曾祖父はそれを村のみんなに説明したのだろうが、理解されなかったのだろう。

一体この機体に乗っていた主は、どうやってこのハルケギニアに来たのだろう。そう考えると、生家に帰っていたシエスタが戻ってきた。

「ふう。予定よりも二週間も早く帰ってきたから、みんなに驚かれちゃいました」  
シエスタは手に持っていた品物を桐生に差し出した。

それはひびの入った、古ぼけたゴーグルだった。恐らくシエスタの曾祖父が着けていた物のだろう。

「ひいおじいちゃんの形見はこれしかないそうです。日記とかも書いてなかったそうで……ただ、父が遺言を残したと言っていました」

「遺言？」

「なんでも、あの墓石の言葉が読めた人に、あの「竜の羽衣」を譲る様に言われたそうです」

「つまり、俺にあの「竜の羽衣」を受け取る権利があると言う訳か」

「はい。それで父と話したんですが、もしカズマさんが宜しければ貰って欲しいとの事です。やっぱり管理とか大変だし、今は正直村でもお荷物みたいなんで」

当然と言えば当然だが、シエスタの曾祖父の事を思うと少し可哀想に感じながら苦笑を浮かべる桐生。

「なら、有り難く頂こう」

「それと、「竜の羽衣」を受け取る相手にこう伝えて欲しいと言ったそうです」

「それは？」

「なんとしてもあの「竜の羽衣」を、陛下にお返しして欲しい、との事です。でも陛下ついで、誰の事なんでしょうか？ ひいおじいちゃんは、一体どこの国から来たのか、未だにわからないんです」

桐生は遠い目をして呟く。

「俺と同じ国だよ」

「カズマさんと？ ああ、だからカズマさんはあの墓石の文字が読めたんですね。うわあ……なんか、運命を感じます。私のひいおじいちゃんとカズマさんが同じ国の人だったなんて」

両手で顔を覆い頬を赤らめて呟いたシエスタは、「竜の羽衣」を見ながら手を下ろした。

「ひいおじいちゃんは本当に、この「竜の羽衣」に乗ってタルブの村に来たんですね」

「シエスタ……これは「竜の羽衣」って言う物じゃないんだ」

桐生は指先で濃緑色のボディに触れて、そのラインをなぞる様に機体に描かれた日の丸の赤い塗料の箇所へと滑らせた。

「じゃあ、カズマさんの国ではなんと呼ぶんですか？」

そう言えば、何故この機体がそう呼ばれたのかは、理由はわからない。

機体に描かれた白い辰の文字。恐らく部隊を表した記号なのだろう。この機体に

乗って、何人の若き命が戦い、散った事だろうか。

「ゼロ戦。俺の国の戦闘機だ」

「ゼロせん？　せんとうき？」

言葉が理解出来ないシエスタはおうむ返しのように桐生の言葉を繰り返す。

「空を飛んで敵と戦う……戦争の道具だ」

「戦争の、道具……！」

シエスタが息を飲みながら一歩後退さるのを感じる。

当然だろう。自分のひいおじいちゃんが持つてきた物が、まさか戦争の道具だなんて思いもしなかっただろうから。

「恐らくシエスタのひいおじいさんとやらは、戦争の最中に、何らかの理由でこのタルブの村に来てしまったんだ」

「ひいおじいちゃんが、そんな……とても明るくて優しい人だつて聞いていたのに。戦争に参加していたなんて……」

口元を押さえながら、瞳からポロポロと涙を零すシエスタ。姿こそ見た事は無い物の、シエスタの中で曾祖父は優しく、汚れない人だった。それがまさか戦争に、人を殺める立場に立っていたとなれば、それなりのショックは隠せなかった。

「戦争とはそう言う物だ。望む望まぬを好まず、国や上の人間達が勝手に決めた戦場に

人々を駆り出し戦わせる……本当に、下らねえ」

吐き捨てる様に言った後、桐生はシエスタに近付いて優しく肩を掴んだ。

涙に濡れた瞳を桐生へと向けるシエスタの視線に写るのは、優しい笑顔の桐生だった。

「だが、シエスタのひいおじいさんはこのタルブの村に来て、タルブの村のみんなのお陰で温かく、安らかに眠る事が出来た。無駄死にする事もなく、一人の人としての幸せの中で亡くなったと思う。同じ国の人間として、礼を言わせてくれ。ありがとう」

ひいおじいちゃんはこの村の一員。だから、墓を作り、安らかな眠りつく事が出来たのは当たり前的事。

そんな当たり前だと思っていた事に礼を言われて、何でこんなにも、温かい涙が溢れてくるのだろうか。

「そんな、私、私達、なんにも……ただ、ただひいおじいちゃんを……」

心の何処かですっと気になっていた曾祖父の出世や過去。その謎が少し溶けた安堵と、桐生の言葉から伝わる温かい気持ちに、シエスタの涙は止まらなかつた。

桐生はそんなシエスタを抱き寄せ、頭を優しく撫でながら、シエスタの涙が止まるのを待った。

少しの間、桐生の胸元で泣きじやくっていたシエスタは漸く顔を上げ、涙を指先で

拭った。

「今夜は、私の家に泊まっていって下さい。家族にカズマさんや皆さんを紹介したいし、これからお昼ご飯になりますから」

満面の笑顔を浮かべるシエスタに、桐生も笑顔で頷くと、村を散歩していたギーシユ達と合流してシエスタの生家に向かった。

シエスタの家は父母に兄弟姉妹が大勢と言う大家族だった。シエスタは八人兄弟の長女で、家への仕送りの為に魔法学園で働いているとの事だ。

シエスタと同年代のギーシユ達の中で桐生の存在は少し特異に見え、シエスタの父母は少し怪訝そうに眺めていたが、シエスタから奉公先でお世話になっている人だと説明を受けると、直ぐに相好を崩して握手を求めてきた。

「いや、失礼致しました。私がシエスタの父でございます。娘がいつもお世話になっている様で」

「いや、俺の方こそ食事やら何やらでいつもお世話になりっぱなしです。シエスタさんは良い娘さんだ。いつもご家族の為にと頑張っていますよ」

「も、もう、カズマさんたら……」

父と握手を交わしながら優しい笑顔を浮かべて自分への褒め言葉を口にする桐生にシエスタが顔を赤らめる。そんなシエスタを姉妹兄弟がからかって慌てた様に怒声が

上がった。

大家族に囲まれて振る舞われたのはヨシエナヴエだった。皿にシチューを盛りながら家族に囲まれ動くシエスタは幸せそうに見える。

不意に、その光景が「アサガオ」の食事風景と重なった。太一や三雄がふざける中叱りながら食事を運び、幸せそうに笑顔を浮かべていた遥。

当然ながら、ルイズにもギーシュにもキュルケにも、そしてタバサにも家族がいる。自分にとっての家族と呼べるあの子達は、今頃どうしているのだろうか。

昼食を終え、暫くシエスタの兄弟達と戯れてから迎えた夕方、桐生は一人村のそばにある草原へと足を運んだ。

夕陽が草原の向こうにある山の間沈みかけて、青いであろう草が茜色に染まっている。所々に咲いている小さな花が、時折吹く風に静かに揺れている。

桐生は啞えた煙草に火を着けて、ゼロ戦に乗ってこの世界を迷い込んでしまったシエスタの曾祖父に想いを馳せた。

突然日本からこのハルケギニアに迷い込み、あてもなくさまよっている内にこの草原を見つければ、不時着したのだろう。そして村のみんなに飛んでみる、と言われ再びエンジンをかけた所でガスが切れてしまい、そのままここに住み着いたと思われる。

不幸中の幸いだったのは、不時着に成功してからガス欠になった事だ。飛んでいる最中にガスが切れ、墜落等すればまず助からない。それに、もし墜落で亡くなってしまうていたら、シエスタは産まれる事もなかった。人の縁とは、なんとも不思議な物である。煙草の先と口元から吐き出される紫煙が風に拐われる中、シエスタが桐生の元へとやって来た。先程まで着ていたメイド服とは違い、茶色のスカートに木の靴、草色の木綿のシャツを身に付けたシエスタは、まるで陽の香りのする、目の前に広がる優しい草原を連想させた。

「ここにいらつしやったんですか」

優しい微笑みを浮かべたシエスタは桐生の隣に立つと、桐生と同じ様に草原を見つめた。吹き抜ける緑の香りを含んだ風が、二人の頬を心地好く撫でる。

「この草原、とても綺麗でしょう？　小さい頃からこの草原を前にすると、嫌な事も辛い事も全部忘れられたんです」

「確かに……心を洗われる様な、綺麗な景色だ」

桐生が頷きながら言うと、シエスタは口元に手を当てて小さく笑った。

「父が言っていました。学園に奉公に行っているから年代ぐらいの男の子に囲まれているんじゃないかと思っていたって。カズマさんを見て、この人がいれば大丈夫だって安心したみたいです」



「そうか。まあ、父親にとって、娘に変な虫が着かないか心配だったんだろうさ。でもいずれ、シエスタの前にも理想の男が現れる時が来る」

美味そうに紫煙を燻らせながら、自分もきつと遙が彼氏を作ったなんて聞いたら、いてもたってもいられなくなるだろうと苦笑を浮かべる桐生。

するとシエスタは俯いて、指先を弄りながら呟いた。

「本当は、もう現れたんです」

「ん？」

シエスタの呟きに、桐生は顔を向けながら首を傾げて見せた。

顔を上げたシエスタの頬は、夕陽とは違う赤みに染まっている。

「私は……カズマさんが好きです。同年代の男の子にはない、上手く、上手く言えませんが、強い意志と信念を背負っているカズマさんがとても格好良くて……私は好きです！」

「シエスタ……」

「厨房からカズマさんの足が遠ざかった時、私、寂しかった。どうしてカズマさんは来てくれないんだらうって。そして、ミス・ヴァリエールにも何度も嫉妬しました。カズマさんをいつも独り占め出来るのは、ミス・ヴァリエールだけ。でも、でもっ！ 私がカズマさんを好きって感情は、誰にも負けないっ！ ミス・ヴァリエールにもっ！ ミス・

ツエルプストーリーにもっ！ 絶対につ！

呼吸を荒げながら必死の告白をするシエスタに、桐生は何も答えない。ただ黙って、シエスタを真剣な眼差しで見つめていた。

暫くの沈黙の後、一際強い風が二人の頬を撫でると、シエスタは肩を落として首を振った。

「でも、駄目なんですよね。わかってます。私はカズマさんよりもずっと年下だし、美人とは言えないし。それに、カズマさんの目には……他の誰かがずっと写っているんですよ」

「他の誰か？」

「私、これでもずっとカズマさんを見てきたつもりです。だからわかるんです。カズマさんの視線の先にあるのは、ミス・ヴァリエールでも、ミス・ツエルプストーリーでもない、別の誰かだって」

寂しそうに言葉を紡ぎながら俯くシエスタに、桐生は正直少し驚いていた。

視線の先にあるのは、いつでも遙や「アサガオ」のみんなだった。それを、年端も行かぬ目の前の少女は見抜いていたのだ。

桐生は携帯灰皿に煙草を振じ込むと、シエスタに本当の事を言おうと決めた。

「シエスタ、今から話す俺の言葉が信じられないかもしれないが、聞いてくれるか？」

「……はい」

顔を上げたシエスタの頬にある涙の跡が、夕陽に照らされて淡く小さく反射していた。

桐生はシエスタから視線を夕陽に移すと、ゆっくりと口を開き始めた。

「俺も、シエスタのひいおじいさんも、この世界の人間じゃないんだ」

「この、世界？ 東のロバ・アル・カリイエの生まれじゃないんですか？」

「違う。そんな所よりも遙か遠く……いや、そもそも、手の届く場所にはない場所だ」

桐生は夕陽に向かって手を伸ばすと、グツと拳を握り締めた。

「俺もそのひいおじいさんも、このハルケギニアの生まれじゃない。別の世界の日本と

言う国から、この世界に「召喚」されたんだ」

「その世界に……カズマさんを待っている人が、いるんですか？」

シエスタは半ば信じられないかと思いつつも、桐生の表情、言葉から冗談を言っているのではないのを感じていた。

「ああ、俺の家族が待っている。血は繋がってはいないが、俺にとってかけがえのない家族が」

そう言って、桐生は再度シエスタに顔を向けると、申し訳なさそうに首を振った。

「だから、シエスタだから、じゃない。俺はこの世界で、誰とも一緒にはなれない。だが、

どういう訳か、俺には特別な力がある。だから元の世界へ帰るまでの間は、身近な人々をこの力で俺は必ず守ってみせる」

シエスタは桐生の瞳を見つめながら暫く息を飲んだように動かなかつたが、やがて溜め息を漏らして小さく微笑んだ。

「カズマさんのお話はわかりました」

「そうか……」

シエスタにとって、初めての失恋。どんな言葉をかけて良いかはわからない。だが、優しくは出来ない。それは、相手を余計傷付けるだけだと桐生は知っているから。

「でも……」

しかしこの少女は、そんな桐生の思惑を遥かに越えた存在だった。

「私が、カズマさんを好きでいるのは自由ですよ？ だから私、待ちます。カズマさんが頑張つて、それでもその、元の世界？ に帰る方法がわからなかつた時に、改めて私は貴方に告白します」

「シエスタ、お前……」

「これは、譲りません。どんなに怒鳴られようが、説得されようが、私はカズマさんを諦めません。人が人を好きになるのに理由がない様に、人が好きな人を諦めなきやいけない理由だつてない筈ですから」

戸惑った様に漏らす桐生に、シエスタは満面の笑顔で宣言した。その笑顔はとても穏やかで晴々としていて、見ている者の心を和ませる物だった。

桐生は溜め息をつきながら頭を搔くと、降参した様に苦笑を浮かべた。

「強情な娘だな……勝手にしろ」

「はい、勝手にします」

どこか楽しそうに言うシエスタに、桐生も笑みを浮かべて、もう青黒い夜の闇に覆われ、星が瞬く空に飲み込まれかけた夕陽を眺めた。

「さあ、そろそろ戻りましょう。今夜はお母さんと頑張つて、美味しい食事をご馳走します」

「それは楽しみなだな」

桐生とシエスタは並んで歩き、シエスタの生家へと向かった。

すると、玄関に当たる扉の前でギーシュ達が何やら一枚の紙を睨み付けていた。ギーシュとキュルケは顔を青ざめさせながら肩を震わせ、タバサは興味がなさそうにその紙に視線を落としていた。

「何やってんだ、お前等？」

桐生がそう言うと、シエスタも首を傾げながら三人を見ていた。

するとギーシュがつかつかと桐生に近付き、その紙を差し出してきた。

紙の上部には、何やら赤い大きな文字が判子で押された様に刻まれており、その下には誰かが書いたと思われる癖のある文字が並んでいた。当然ながら、桐生には読めない。

「何だ、この紙は？」

「見てわからないのかい!! 警告書だよ! さつき学園から伝書フクロウが飛んで来たんだ！」

青ざめた顔で頭を抱えるギーシユを余所に、桐生はシエスタに解読を頼んだ。

シエスタによれば、どうやら明日までに学園に帰らなかつたら実家へと連絡し、留年もしくは退学の処置を取ると言う物らしい。

「あ、私の事も書いてあります」

三枚の紙の一番下には、シエスタはそのままアンリエッタの結婚式終了まで休暇を取って良いとの事が書かれているらしい。

絶望する二人といつも通りの一人を適当になだめて、桐生達はシエスタの生家に再びお邪魔した。

夕食は豪勢で、ローストチキンやふつくらとしたパン、タルブの村の特産品を使った料理と、シエスタの父秘蔵のワインが振る舞われた。

「三人に相談したい事がある」

食事を終えて、シエスタが兄弟達を寝かし付けている間に、桐生はギーシユ達にあのゼロ戦を学園まで運べないか相談した。

「あの大ききとなると、タバサのウインドドラゴンでも無理があるわ。ちよつと難しいんじゃない？」

キュルケの言葉にタバサは視線を本に向けたままコクリと頷いた。

なんとかしてあのゼロ戦を学園に持つていきたい桐生。学園に行けば、コルベールが力になってくれる様な気がしているのだ。しかし、今のキュルケの話にもあつた通り、タバサのウインドドラゴンでも運ぶのが難しいとなると、少々厄介だ。

「仕方ない……カズマ、何とか運べる様に手配は出来るが、少しばかり値が張つても構わないかい？」

ギーシユが頭を掻きながら桐生に運送の概要を説明した。

ギーシユの父のコネを使えば、竜騎士を雇つて何とか運べそうではあると言う。しかし、竜騎士を雇うのにも、ゼロ戦を運ぶのにも恐らく馬鹿にならない金額がかかつてしまふのは間違いない様だ。

金の工面は少々厄介だが、最悪オスマンと相談して何とかしようとした桐生はギーシユの提案を受け入れ、ギーシユは早速とばかりに羽根ペンを取つて実家へ竜騎士の手配をお願いする手紙を書いた。

ギーシュの書いた手紙は外の地面にいたヴェルダンデが明日の朝一番までに届けてくれるらしい。

明日の起床時間を決めて床に着いた三人と、シエスタを含む兄弟達が目りに着く中、リビングではシエスタの両親と桐生がワインを片手に談笑していた。

「いや、私のじいさんと同じ国のご出身とは……カズマさんとはある意味遠い親戚の様に感じますな」

チビチビとワインを味わいながら上機嫌なシエスタの父が話す。そんなシエスタの父に桐生も笑顔で答えた。

「偶然とは恐ろしい物です」

そう言つてワインを呷つた桐生を見ると、シエスタの父は立ち上がり、桐生の肩に手を置いた。

「カズマさん、ちよつと外にご一緒出来ますかな?」

「……構いません」

シエスタの父に促されるまま、桐生は家の外へと出ていった。

二つの月が照らす中、シエスタの父が真剣な表情で桐生を見据えた。

「カズマさん、娘がいつもお世話になつて居るのは、心から感謝しています。しかし、娘の目を見ていると、貴方へ好意を寄せて居るのを感じる。まさかとは思いますが……娘



に、手を出してはいないでしょうな？」

先程の上機嫌な表情は消し飛び、緊張を感じさせる真剣な眼差しで桐生を見つめながら問い掛けるシエスタの父。

桐生はその視線を真つ直ぐと見つめ返し、頷いた。

「神に誓っても、そんな事はしていない。ただ、今日の夕方、娘さんから告白を受けた」「な、何ですと!?!」

驚きの余り声を上げてしまった自分を罰する様に、シエスタの父は首を振って深呼吸をしてから桐生に先を促す様に見つめた。

「申し訳ないが、娘さんの想いに応える訳にはいかない理由が俺にはある。丁重に断りは入れさせて貰った。あんないい娘さんは、俺にはもつたいない」

「そう、ですか……」

安堵と怒り、喜びと憎しみ、様々な感情が宿った目で桐生を見つめていたシエスタの父は、やがてゆつくり桐生に近付くと、握り締めた拳を桐生の顔に打ち付けた。

何の抵抗もなく殴られた桐生は、そのまま尻餅をついて殴られた頬をさする。

「貴方がシエスタの告白を断ってくれた事には正直安堵していません。だが、夕食の下拵え中に泣いていたあの子を思うと、貴方を殴らずにはいられなかつた! 娘は、いや、シエスタだけじゃない! 子供達は私にとって何よりも大切な存在なんです! そんな

シエスタを、泣かせた……貴方が……！」

肩を震わせ呼吸を荒げながら必死に自分の感情を押しさえ込もうとするシエスタの父に、桐生は立ち上がって優しく肩に手を置いた。

草原での告白を断られたシエスタは、氣丈に振る舞ってはいた物の相当辛い思いをしていたに違いない。自分には、シエスタの父を責める資格などないと、桐生は自覚していた。

「すみません。つい、感情的に……」

「良いんだ。あんたの娘さんが味わった痛みには比べたら安い仕打ちだ」

汗が浮かび上がる額を震える手で押さえるシエスタの父に、桐生は首を振って見せる。

「だが、父親の拳とは痛い物だな。想いが乗っていた分、身体の芯まで響いたよ」

口端から伝う血を指先で拭いながら苦笑して見せる桐生に、シエスタの父は頭を下げた。

「カズマさん、こんな事をしておいて虫が良すぎるかもしれないが、あの子を……シエスタをこれからも、宜しくお願いします。」

「もちろんだ」

シエスタの父の言葉に、桐生は力強く頷いた。

シエスタにも宣言したのだ。自分が元の世界に帰るその日まで、身近な人々を必ず守ってみせると。

## 第23話

翌朝、ギーシユの便りのおかげで集まってくれた竜騎士隊とドラゴンによって、綱を繋げたゼロ戦が運ばれる事になった。

シエスタ一家が見送る中出発し、今回の運賃の額を聞いて静かに頭を抱えていた桐生は、情けないながらもオスマンに何とか助けを乞えない物かと考えていた。

コルベールは突如学園の中庭に現れたゼロ戦を見て歓喜に身体を震わせていた。彼の知的好奇心がとてつもなく刺激を受けたのである。

今年で四十二歳となる彼の趣味、もとい生き甲斐は研究と発明なのだ。おかげで周りには変人扱いされ、恋人もままならぬままこの歳まで来てしまったが、そんな事はどうでもいい。

「カズマ殿！ これは一体なんなのかね!？」

竜騎士隊がゼロ戦を下ろす作業を見守っていた桐生は、興奮した様に駆け寄ってきたコルベールに笑顔を浮かべた。

「良い所に来てくれたな、コルベールさん。実は飛行機に関して、あなたに相談したい事

があるんだ」

「ほう、これは「ひこうき」と言うのか！　そしてこれに関して私に相談とな!?　さあ、早く言ってみたまえ！」

ゆつくりと中庭に下ろされ、太陽の光を浴びたボディが鈍い輝きを放つゼロ戦と桐生を交互に見ながら、この得体の知れない物体に関して携われる事を嬉しく思ったコルベールが子供の様に瞳をキラキラさせながら問いかける。

そんなコルベールに苦笑を浮かべながら、桐生は静かに首を振った。

「だが、その前にこいつを運んだ運賃をあの手士隊に払わなきゃならないんだ。まずはオスマンのじいさんの所に相談に――」

「そんな物は私が払う！　だから早く話を聞かせてくれ！」

桐生の言葉を遮り、興奮して桐生の肩を掴みながら迫ってくるコルベールは中々の迫力があつた。キュルケの言葉を借りるなら、瞳は情熱の炎が宿つた様に爛々としてい

る。「い、良いのか？　結構な額らしいんだが……」

桐生はコルベールの迫力に気押されながら請求額の書かれた紙を差し出した。

コルベールはその紙を引つたくる様に受け取ると、ローブの内ポケットから取り出した羽根ペンでサラサラと何かを書き込んで桐生に返す。

「これで大丈夫だ。後日竜騎士隊の連中に金が払われる様に手配した。さあ、この紙をさつさと彼等に渡して話を聞かせてくれ」

「あ、ああ。だが、良かったのか？　こんな結構な額をそんな簡単に立て替えてしまつて」

「何を言うのかね」

心配そうに話す桐生にコルベールは子供の様な悪戯っぽい笑みを浮かべて見せた。

「自らの悲願を達成する為には、金では解決出来ない事が多い。それを金で解決出来るなら、私は喜んで出すさ。独身の者にはね、躊躇いなくそれが出来る時があるのだよ」

ギーシュ達と別れた桐生は、コルベールの研究室に招かれていた。

研究室は本塔と火の塔の間に建てられた、見るも無惨な掘つ立て小屋だった。

「最初は自分の居室で研究をしていたんだが、騒音と異臭から苦情が来てしまつてね。仕方なくここに小屋を建てて移つたのさ」

コルベールは話しながら自分の机であろう、様々な書類や用途がわからない器具が置かれた物の椅子に腰掛けた。

研究室には木で作られた棚が並び、中には本や良くわからない生き物が入った瓶や調合用の器具等が並んでいた。

カビとも埃とも言えない異臭が鼻をつき、桐生の眉が僅かにひそむ。

「臭いはすぐにも慣れるさ。まあ、ご婦人には堪らないだろうがね」

コルベールは苦笑を漏らしながら、ゼロ戦の燃料タンクの中から取り出した、僅かに残ったガソリンを入れた壺の臭いを嗅いだ。「固定化」の呪文をかけられたお陰で、ガソリンは化学変化を起こしていなかった。

「む……嗅いだ事のない臭いだな。温めていないのにこの臭いを発するとは、随分気化しやすい液体の様だ。これは、爆発した時の威力も凄そうだ」

コルベールは独り呟きながら羊皮紙にサラサラと羽根ペンを走らせてメモを取る。

「この油が大量にあれば、あの「ひこうき」とやらは飛ぶのだね？」

桐生は腕を組みながら頷いた。

「壊れてなければ、その筈だ」

「面白い！ 久々に血が騒ぐ！ 調合は大変そうだがやってみよう！」

コルベールはそう言うのと、棚から色んな液体やら粉やらを取り出して机の上に並べ、桐生へと顔を向けた。

「カズマ殿、貴方の故郷ではあれが普通に飛んでいるのかね？ だとしたらエルフの知識や技術は、もはやハルケギニアとは別次元の物を感じるな」

桐生はここで言葉を詰まらせて困った表情を浮かべた。運賃を立て替えて貰ったり、

ガソリンをこれから作って貰うのを考えると、コルベールに嘘はつきたくなかった。

話した所で信じて貰えるかはわからないが、作業を続けているコルベールに真剣な眼差しを向けて、桐生は口を開いた。

「実はな、コルベールさん……俺はこの世界の人間じゃないんだ。俺も、あの飛行機も、そしていつぞやの「破壊の杖」とやらも、このハルケギニアじゃない、別の世界からやって来たんだ」

桐生の言葉に、コルベールの手がピタリと止まった。

「カズマ殿……今、何と言ったのかね？」

「別の世界から来た、と言った」

コルベールは手を完全に止めて、桐生をマジマジと眺めた。そして、ふむ、と小さく呟くと、頷いて見せた。

「あまり驚かないんだな」

「そんな事はない。しかし、貴方の言動、知識は確かにあまりにもハルケギニアでは常識外れな事が多いからね。いや、実に面白い」

「変わった人だな、あんたは」

桐生の言葉にコルベールは小さく頷いた。

「その通りだよ。私は変わっている。変人、とも良く言われる。だがね、私には信念があ



るんだ」

「信念？」

コルベールは開かれた窓の外へと視線を向けながら、遠い目をして頷いた。

「ハルケギニアの貴族は、魔法をただの道具としてしか見ていない。しかし、私はそうは思わない。魔法は使い様で顔色を変える。「火」の系統は、特にそうだと思う。人を救う為に食事を作ったり、暖を取ったりと出来るように、人を殺める為に牙を剥き、家も大地も焼き付く武器にもなる」

心なしか、コルベールの口元が辛そうに歪んでいるのが見えた。が、すぐに優しげな笑みへと変わる。

「だから私はいつか、誰も彼もが魔法の様に火を着けたり、水を出したり出来る装置を作りたいのだよ。そして、それを世界に広めたいんだ。はは、カズマ殿、貴方との出逢いも、もしかしたら始祖ブリミルのお導きかもしれない。異世界とは！ ハルケギニアの理が全てではないのだ！ ならばまだまだ世界は広く、そして多くの可能性が秘められていると言う事だ！ 実に面白い！ 私はまだまだカズマ殿と交流を深めたいと思う！ だから、困った事があればいつでも来てくれたまえ！」

満面の笑顔を浮かべて握手を求めるコルベールに、桐生も笑顔で握手を固く結んだ。

「アウストリ」の広場に佇むゼロ戦を眺めながら、桐生は煙草に火を着けた。そして、ゼロ戦の機体に手を這わせ、瞳を閉じてみる。

頭の中にゼロ戦の操縦法が流れ込んで来て、操縦桿の扱い方、機体の構造が次々と自分の知識として吸収されていくのを感じる。瞳を開いてみると、左手甲の「ガンダールヴ」の印が輝いていた。

「相棒、本当にこれは飛ぶのかね？」

腰からぶら下げていたデルフリンガーが、とぼけた口調で桐生に問い掛けた。

「ああ、飛ぶ」

「はあん。こんな物が飛ぶなんざ、相棒のいた世界つてのは本当に奇妙な所だあね」

「俺からすれば、こつちの方が奇妙な所なんだがな」

軽口を叩き合いながらゼロ戦から手を離すと、数人の生徒がやって来ては中庭に現れた奇妙な物体を物珍しそうに見ているのに気付いた。

ふと、その中に見覚えのある、桃色の髪が見えたのだが桐生はあえて無視した。ゼロ戦へと身体を向けてこちらを見つめている少女に背を向けた。

「相棒、娘っ子が見てるぜ？」

「放っておけ」

美味そうに紫煙を燻らせて呟く桐生。

早くもゼロ戦に興味をなくした生徒達が足早に去っていく。やはりこの様な物に心を持つのはコルベールくらいのもらしい。

今、桐生の後ろにいるのはルイズ一人。それは気配でわかる。

「お、おい、相棒……娘っ子の奴、顔を赤くしたり青くしたり、笑ったり怒ったり落ち込んだりと、なんか大変そうだぞ?」

デルフリンガーの言葉からルイズの様子は容易にわかり、思わず口元に笑みが浮かびそうになるが堪える。

「いいから放っておけ。時には自分が悪い事を認め、自分から謝る勇氣も必要だ。あいつには、それを学んでもらわなきゃならない。今後のあいつの為にもな」

後ろで独り百面相をしているルイズに構わず、煙草を携帯灰皿へ押し込んで腕を組む桐生。

不意に、こちらに近づく足取りを感じたかと思うと、ジャケットの背中を小さくクイツと引つ張られた。

「か、カズマ……」

弱々しく、今にも泣き出しそうな声で桐生の名を呼ぶルイズ。

桐生はゆっくりと身体をルイズに向けて頷いた。

「久しぶりだな、ルイズ」

どこか冷たさを含んだ声で軽く挨拶する桐生に、ルイズは少し戸惑いながらもどこか安堵した表情を浮かべる。

しかし、すぐさま少し怒った様な表情へと変わる。

「今まで、どこにいたのよ？」

「キュルケ達と少し出掛けていた」

「何を勝手にそんな……」

「クビになった身なんぞでな。いちいちお前に伝えなきゃいけない理由はない」

いつもとは違い、冷たく素っ気ない態度で答える桐生に、ルイズの心に不安が募っていく。自分が勝手に追い出してしまった手前、そうされても文句は言えないのだが悲しい。ルイズが求めていた桐生の声はそんな冷たい物ではなく、もっと暖かい物だ。

もっと自分の気持ちに素直になれ、と言うキュルケの言葉が蘇る。

「……シエスタから、聞いたわ。あの時、本当に何もなかったのね」

「最初からそう言っただろう？ まあ……お前にとつて、俺はそこまで信用されてなかった事に素直に驚いたが」

ズキリ、と桐生の言葉がルイズの胸に突き刺さる。そうなのだ。何故あの時、自分は桐生の言葉を信じられなかったのだろうか。

本人にも自覚がない、恋する乙女の複雑な心境に、ルイズは常に自分自身を振り回し

てしまっていた。

「そ、その、あの、あのね……」

スカートを強く握り締め、必死に言葉を紡ごうとするルイズ。次第に瞳には涙が溜まりだし、肩は小さく震え始める。

「……話も聞かないで、追い出してごめんなさい。もう、もうクビなんて言わないから……帰って、がえって……ぎで……!」

とうとう涙を零して嗚咽混じりに謝罪し始めたルイズの頭を、桐生は優しく撫でてやる。

「おう」

その一言に、ルイズは桐生に抱き着いて身体を震わせて静かに泣いた。

その夜、桐生のジャケットを身に纏ったルイズがベツトの上でこの十数日間、桐生が体験した話を聞いていた。時折ワクワクした様な表情を浮かべて聞き入っている。

「……それで、シエスタの実家にあったあの「ひこうき」とやらを持って帰って来た訳ね？」

「ああ。あれがちゃんと飛べば、シエスタのひいおじいさんとやらがやって来た東の方へと向かえるからな」

ワインレッドのシャツ姿で椅子に座った桐生が頷く。もしコルベールの研究が上手くいつてガソリンが作れば、間違いないくあのゼロ戦は飛べる。そうすれば、東の方へと飛んで何か元の世界へ帰る手掛かりを探せるかもしれない。

「やつぱり……帰りたい？」

不安げな顔でシートを握り締めながらルイズが問い掛ける。

そんなルイズの表情に一瞬戸惑いを見せてから、桐生はゆっくりと頷いた。

「この生活も悪くないと思ってる。自分のいた場所では体験できない事ばかりだしな。だが、あっちには俺の帰りを待っていてくれる人達がいる。それは。俺にとっても大切な人達なんだ」

「そっか、そうよね……」

少し寂しげに笑いながら言ったルイズは、桐生に手を振って手招いて見せる。

桐生は素直にそれに応え、ルイズの隣へと座った。

「私ね、今……姫様の結婚の際に詠み上げる詔を考えなきゃいけないの」

話題を反らし、少しでも自分にとつて嫌な話を遠ざける子供騙しな方法だが、桐生は気にしていない様に先を促す様に頷いた。

「だけど、私は詩人じゃないし、こんな時にどんな言葉を言えば良いのかわからないの。だから、カズマにも協力して欲しいのよ」

「協力、と言われてもな。その詔とやらはどんな風に詠むんだ？」

桐生とて、それなりに様々な知識はある物の詩なんてまともに考えた事がない。正直、自分では大したこと助けにはなれないんじゃないかと自覚し始めた。

「んと……火に対する感謝、水に対する感謝と、四大系統に対する感謝の辞を順番に詠み上げなきゃいけないの。だけど、ただ詠めば良いって訳じゃないわ。韻を踏みながら詩的な言葉で詠まなければいけないの」

「なるほどな……」

ルイズの言葉を頭の中で整理しながら相槌を打つ桐生。韻を踏む、と聞くと以前神室町で出会った青年のラップを思い出す。ヤル気が全く感じられない歌からまさかのわらしべ長者への道が開けるなんて誰が考えるだろう。

「……俺はこの世界の風習についてまだまだ詳しくはないから、上手く言えないんだが」  
桐生はそう前置きを置いてから続けた。

「お前があのお姫様を祝いたい気持ちも、そのまま乗せたらどうだ？ 火に対する感謝、と言われてもピンとは来ないんだが、燃える火の様に互いを熱く愛し合える相手に出会えて良かった、とかな」

「そんな事、嘘でも言いたくないわ」

桐生なりに真剣に考えた言葉だったが、ルイズは顔を俯かせて小さく呟いた。

あのお姫様は、アンリエッタは、国の為に自分も良く知らない相手と結婚するのだ。親友であり、家臣であるルイズから見れば、そんな物祝いたくもない事だろう。

「お前は優しいな、ルイズ」

そう漏らしてから、桐生はルイズの頭を優しく撫でた。

桐生が魔法学園に戻って三日、コルベールは自分の受け持つ授業の講義以外は寝食を忘れて調査に勤しんでいた。目の下の隈が、その努力を物語っている。

アルコールランプの上に置かれたフラスコが外から差し込む日の光を反射して、眩しさに目が痛む。ガラス官が伸びて左に置かれた冷えたビールの中には、熱せられた触媒が冷えて凝固している。

最後の仕上げに直面したコルベールは、ここでゆっくりと深呼吸してから意識を集中させた。桐生から貰ったガソリンの臭いを強くイメージしながら、冷やされたビールカーに向かつて「錬金」の呪文を唱えた。

ボンツ、と小さな爆発音と煙を上げながらビールカーの中の冷えた触媒が茶褐色の液体に変わった。ごくつと生唾を飲んでビールカーを手に取り臭いを嗅いでみる。

つんと鼻をつく刺激臭。それはあの時嗅いだガソリンの臭いだった。

自然と笑みが浮かんでくるコルベールはこの調査を数回繰り返し、ちようどワイン瓶



二本分の量を作ると急いで研究室から出た。

目を焼かんばかりの眩しい輝きに一瞬間を手で覆う。すると昼食を告げるチャイムの音が鳴り響いた。

「もう昼か……ん、外の空気はいいな。そんな事すら忘れていた」

身体を少し伸ばして正午を迎えた太陽の日差しを久々にたつぷりと浴びながら、コルベールは自嘲気味に呟いてゼロ戦の置かれている「アウストリ」の広場まで走った。

ゼロ戦の所には桐生がおり、コックピットに乗り込んで点検をしていた。

「カズマ殿！ 完成しましたぞ！」

コルベールの声で此方に向かってくるのに気が付いた桐生はコックピットから飛び降りた。

コルベールの手に持たれたワイン瓶二本に入ったガソリンを燃料コックへと注ぎ込んだ。

「いやあ、なかなか難しい作業でしたぞ。あの油の成分を調べたら微生物の化石から作られた様だったので、それに近い成分の石炭を使用しました。そこから色々試行錯誤して「錬金」を何日間も繰り返し出来上がったのが……なんと言ったかな？」

「ガソリンだな」

桐生の言葉にコルベールは笑顔で頷いた。

「そうそう、ガソリンでしたな！　しかし、こんなに真剣に何かを調査したのは久しぶりだ。お陰で寝るのも食事も忘れていましたよ」

禿げ上がった頭を掻きながらコルベールが苦笑を浮かべて見せた。

目の下に出来た濃い隈に、頬も若干やつれて見える。相当無理をした様だ。

「すまないな。随分難しい作業を任せてしまった様で……」

申し訳なさそうに言う桐生にコルベールはあっけらかんと笑って首を振った。

「何をおっしゃるか。私の知的好奇心を満たしてくれた事に、逆に感謝を表したいくらいなんですぞ？　それよりもカズマ殿、早くこの「ひこうき」とやらを飛ばして見せてくれ！　私はそれだけが楽しみで楽しみで……！」

桐生は頷くと、燃料コックの蓋を閉めて再びコックピットへと乗り込んだ。頭に流れてくるエンジンの始動方法からまずはプロペラを回さなくてはならないのがわかった。コックピットから顔を出した桐生がコルベールに声をかける。

「コルベールさん、魔法でそのプロペラを回せるか？」

「む、これかね？　それは可能だが……これを回す動力はあのガソリンとやらとは違うのかね？」

「最初はエンジンをかけるために、手で回す必要がある。だが、本来回す為の道具がないから魔法で直接回してくれ」

「なるほど、心得た」

コルベールに協力を頼んでから、桐生は各部の操作を開始する。

「ガンダールヴ」の力のお陰か、手は止まる事を知らない様に操作を行っていく。

コルベールが魔法で回してくれたプロペラが、重そうにゆつくりと回り始めた。後はタイミングの問題だ。

緊張から汗ばむ左手で握ったスロットルレバーを、ゆつくり前に倒す。

バスンと燦る音が聞こえたかと思うと、プラグの点火でエンジンが始動し、プロペラの回転が早まる。その風圧でコルベールが一瞬吹き飛ばされそうになった。

轟音を立てながら機体が振動している。車輪ブレーキをかけてなければ、間違いなく走り出してしまっていただろう。

プロペラの風を避けて少しだけ離れた場所から、確かに起動しているゼロ戦を見て、コルベールは感動した面持ちを浮かべている。

問題なく全てのエンジン系の計器が機能しているのを確認してから、桐生は点火スイッチをOFFへ切り替えた。

コックピットから飛び降りてコルベールに近付くと、硬い握手を結んだ。

「やったぞ、コルベールさん！ あんたのお陰でエンジンがかかった！」

「いやあ、良かった良かった！ 頑張つて調査した甲斐がありましたぞ！ しかし、何故

飛ばんのかね？」

コルベールは握手を交わしたままゼロ戦へ視線を向けて首を傾げて見せる。てつきり飛び立つと思っていた彼には、少々拍子抜けだった様だ。

「残念だが、ガソリンが足りない。飛び立つには、そうだな……樽で五個分、といった所か」

「そんなに必要なのかね!? だが、この大きさを考えれば当然か。うむ！ 乗り掛かった船だ！ やってやろうじゃないか！」

コルベールは力強く頷いてから握手を解くと、ゼロ戦に身体を向けて腕を組んだ。

「カズマ殿のいた世界には、こんな物が飛んでいるとは……もしこれがこの世界に広まれば、平民の生活も豊かになるだろうか。」

コルベールと同じ様にゼロ戦に身体を向け、啜えた煙草に火を着けてから桐生は頷いた。

「きつとな。少なくとも、今まで見えていた世界が、もつと広く見えるのは間違いないだろう。この飛行機の基礎を応用すれば、物資や人手の運送に使える筈だ」

「そして、応用次第では武器にもなる、か……」

コルベールの小さな眩きに、桐生が顔を向ける。

コルベールはゼロ戦を複雑な表情で見つめていた。不安と期待が入り交じった、何と

も言えない表情だった。

「カズマ殿……少し、私の独り言を聞いてくれますかな？」

コルベールの言葉に、桐生は小さく頷きゼロ戦へ視線を向けた。少しだけ強い風が、二人の身体を撫でて煙草の紫煙と灰を拐って行った。

「私がこの魔法学園に来たのも、そして周りに変人と呼ばれながらも研究を続けるのも、ある事の為なのです。「罪滅ぼし」と言う、身勝手な理由のね。」

普段の陽気さや気難しさとは違う声色の、重々しいコルベールの言葉が広場に小さく響く。

「私は20年程前、罪を犯しました。決して許されない、許されてはならない罪を。私は、私の様な人間が再びこの世に現れない様に学園の教師となり、子供達に魔法の正しい使い方を教えてきました。そして、いつか世界中の人々がより豊かな生活を送れる様に研究を重ねているんです」

そこでコルベールは自分の身体を抱き締め、歯をカチカチと鳴らして震え出した。桐生はコルベールの顔を見ない様に紫煙を燻らせたが、見ずともその表情が苦痛に歪んでいるのが手に取る様にわかった。

「しかし、私は同時に恐いんです。私の教えが元で、子供達を兵士へと育ててしまったら、私の研究が元で戦争の道具を増やしてしまったらと思うと……恐いんです」

嗚咽に近い声で漏らすコルベールに、桐生は黙ったままだ側面にいた。

暫く二人はそのまま立ち尽くしていたが、やがてコルベールが溜め息を漏らしながら身体を楽にさせた。

「フーケの一件の時、カズマ殿はおつしやいましたね？ お前達に、教師を名乗る資格はない、と。その通りだと思います。私は、私自身の教えを信じられていない。そんな人間が誰かに物を教えるなんて、無理な話——」

「そんな事はないさ」

コルベールの自嘲を、桐生は力強い声で遮る。

コルベールが桐生に視線を向けると、桐生は煙草を携帯灰皿に振り込んで顔を向けた。

「コルベールさん、あんたがかつてどんな罪を犯しちゃったのか、俺にはわからない。だがな、それを償おうと子供達に授業を教え、そして世界の為にと研究をしている……：良いじゃねえか、身勝手な理由だって。償おうとして行動しているなら胸を張るべきだぜ」

コルベールの肩を優しく叩きながら言う桐生。桐生には、コルベールの気持ちは何となくわかった。

以前、賽の河原で峰義孝に言われた言葉。沖縄で営む「アサガオ」を偽善呼ばわりさ

れた瞬間、桐生は心のどこかでそうかもしれないと自重した。

だが、遙の、あの子供達的笑顔を見ると、周りにどう思われても構わない。この子供達がただ幸せな日々を送ってくれば良い。そう思えたのだ。

「そして、授業と研究。自分に自信がないなら、子供達に、周りの人間に教えて貰えばいい。教師だから、研究者だからと言って自分で殻に閉じ籠つちや、見える物も見えなくなる。以前あんたは俺に力になるって言うてくれたな？ なら、俺だつてあんたの力になる。一人で抱え込まないで、たまには誰かに頼るのも、大事な事だと思うぜ？」

桐生はコルベールに身体を向けると、手を差し出した。かつて、全てを失い、自暴自棄になっていた、浜崎豪へと差し出した様に。

コルベールは少し驚いた表情を浮かべてから、照れ臭そうにその手を強く握った。

「ありがとう、カズマ殿。少し、気が楽になりました。そうですな……一人で抱え込んで、ただ辛いだけ。いつからか私は、誰かを頼るのを一番恐れていたのかもしれないな」

そう話した後、コルベールの腹が大きく鳴った。ここ三日間、ガソリンの調査に精を出してしまい、ろくに食べなかったせいで胃袋がいい加減にしろと訴え始めたのである。

一瞬の間の後、二人は大声で笑った。

「そう言えば腹が減っていたのも忘れていた！ 今日私授業もないし、これから遅めの昼食と行きませんか、カズマ殿？」

「良いな。俺もそろそろ腹が減ってきた」

二人は並んで食堂へと歩き出した。

それぞれの罪を背負い、それでも懸命に生きている二人の男。その背中まはるで、気の置ける友が並んで歩く様に温かく見えた。



## 第24話

ゲルマニアの皇帝アルブレヒト三世と、トリステイン王女アンリエッタの結婚式は、ゲルマニアの首都に当たるヴィンドボナで執り行われる事になった。式の日取りは三日後、ちょうど月を跨いだニューイの月の一日に行われる。

そして本日はトリステイン艦隊旗艦の「メルカトル」号が新生アルビオン政府の客人を迎え入れる為に、艦隊を率いてラ・ロシエールの上空に停泊していた。

甲板では、艦隊司令官のラ・ラメー伯爵が服装を正して客人を待っていた。その横では艦長のフェヴィスが退屈そうに口髭を弄っていた。

「ちっ、流石は自らの王を死に追いやる連中だ。時間も守れん野蛮人共しかいないらしい」

イライラした様子で舌打ちをしながらラ・ラメーは呟く。向こうが此方に出向く筈の約束の時間は等に過ぎていた。

「野蛮人は野蛮人なりに着飾っているのではないですか？ もっとも、正装と言う物を理解していれば……の話ですが。」

フェヴィスがラ・ラメーに見えぬ様に小指で耳の穴を掻きながらどうでも良さそうに

眩くと、鐘楼に登った見張りの水兵が声を上げた。

「艦長！ 左上方より艦隊！」

水兵の言った方を目をやると、とてつもない巨艦を先頭にアルビオン艦隊が降下して来るのが見えた。

「ふん、遅れて来ただけの大物らしい大ききではあるな」

忌々しく先頭の巨艦を見つめながら鼻を鳴らして眩く。あの艦隊には姫と皇帝の結婚式に出席する大使が乗っている筈だ。

「あの先頭の艦は巨大ですな。あの様な艦は今まで見た事がない。ここが戦場でない事を、少なからずとも始祖ブリミルに感謝すべきかもしれません」

感極まった様に眩くフェヴィスにラ・ラメーは小さく頷いて見せた。

降下してきたアルビオン艦隊はトリステイン艦隊と並走する様に停泊すると、旗流信号をマストに掲げた。

「貴艦隊ノ歓迎誠ニ感謝致ス。アルビオン艦隊「レキシントン」号艦長」

「馬鹿にしよって……！ 此方は提督を乗せているのだぞ。艦長名義での発信とは、随分な傲慢振りではないですか」

露骨に不機嫌な表情を浮かべながらも、アルビオンに比べ貧弱に見える自軍の陣容を眺めて悔しそうに漏らすフェヴィス。

そんなフェヴィスの肩に手をやり、ラ・ラメーがあやす様に首を振った。

「あの様な艦を与えられたら、世界を我が物にでもした様な気分にもなるのだろう。野蛮人なりの見栄と受けて飲み込もうではないか。よし、返信だ。「貴艦隊ノ来訪心ヨリ歓迎致ス。トリステイン艦隊司令長官」、以上だ」

ラ・ラメーの言葉は控えた士官からマストに張り付いた水兵へと復唱され、スルスルとマストに命令通りの旗流信号が登る。

突如、どんつ！と大きな音を立てて空砲が数回放たれた。礼砲である。

巨大な大砲から放たれた空砲は、辺りの空気を震えさせた。幸い、弾が込めてあつたとしても此方の距離には届く事はない。しかし、それがわかつていながらも、ラ・ラメーは一瞬後退さつた。

実戦経験のある提督ですら威圧する程の禍々しい雰囲気、「レキシントン」号から感じられた。

「ふん、野蛮人にお似合いの野蛮な艦め。よし、答砲だ！」

「して、何発撃ちますか？最上級の貴族には十一発と決められておりますが？」

礼砲の数は相手の格式と位で決まる。フェヴィスの質問に、ラ・ラメーはヒラヒラと手を振った。

「あんな野蛮人共に最上級と言う言葉は似合わん。七発で良い」

子供の様に意地を張るラ・ラマーをニヤニヤしながら眺めたフェヴィスが声を上げた。

「答砲用意！ 順に七発！ 準備出来次第撃ち方始め！」

礼砲を撃ち終えたアルビオン艦隊旗艦「レキシントン」号の甲板で、艦長のボーウツドは左舷の向こうのトリステイン艦隊を見つめていた。

彼の頭の中をよぎるのは、数日前の出来事だ。

突如アルビオン皇帝となったクロムウエルの指示で「レキシントン」号を、東方の「ロバ・アル・カリイエ」からやって来たシエフィールドと呼ばれた女性と共に整備している最中に聞かされた今回の作戦。祖国を裏切り、トリステインとの不可侵条約を破ると言うとてもない悪行を決行する事を知らされたボーウツドは、怒りに我を忘れてクロムウエルに掴みかかった。

しかし、そんな彼を制したのは討ち死にしたと伝えられていたウエールズ皇太子だった。だが、かつては自分を信頼してくれていたその瞳も、改めて忠誠を誓う為に接吻した手も、氷の様に冷たい物だった。

クロムウエルに関して流れいた噂、あの男は「虚無」を操ると囁かれていたが、どうやら本当だった様だ。

純粋な軍人であるボーウッドは、祖国の為でも、クロムウエルの為でもなく、ただウエルズ皇太子の忠誠の為にこの作戦を執行する事を決めた。

例えその皇太子が、もはや「人」ではなかったとしても。

「艦長よ」

物思いに耽つているボーウッドに、今回の全般指揮を執り行うサー・ジョンストーンが声をかけた。その声色からは不安が伺える。

「サー?」

「こんなにも奴等の艦に近付いて大丈夫かね? 最新の大砲はかなりの射程範囲を持つのだろうか? ならばもつと離れたまえ。私は閣下から大事な兵を預かっているのだぞ?」

ボーウッドは口の中で臆病者めとジョンストーンを罵倒しながら表情に出さぬ様氣を付けて見下した。

ジョンストーンはクロムウエルの信頼の厚い男ではあるが、実戦経験のないただの政治家に過ぎない。戦場でははつきり言って邪魔な存在でしかないのだ。

「サー。しかしいかに最新の大砲と言えども、射程範囲いっぱいでは届かない場合がありますので」

「しかし、こんなに近付いては兵達が怯えてしまうだろう? 士気を下げる様な事は避

けたいのだ」

言うに事欠いて兵が怯えるだと？ 怯えているのは貴様だけだ。

ジョンストンに聞こえぬ様に舌打ちしてからボーウッドは構わず命令を下す。

「左砲戦準備っ！」

「左砲戦準備っ！ アイ・サー！」

空の向こうのトリステインの艦隊から轟音が響き渡る。答砲が発射された。

作戦開始の時間だ。

艦隊の最後尾に位置する旧型艦「ホバート」号から乗組員等が「フライ」の呪文で浮かぶボートで脱出するのを見送り、サー・ヘンリ・ボーウッドは完全な軍人へと変化した。

政治も、陰謀も、卑怯極まりないこの作戦も、最早どうでもいい。その瞳には勝つためなら何でも行う非情な冷たさが宿っていた。

答砲を発射し続ける「メルカトール」号の甲板で、ラ・ラメーはその光景に驚きを表し眉を潜めた。

アルビオン艦隊の一番最後尾の艦から、突如火の手が上がったのだ。

「何事だ？ 火事か？ 事故か？」

フエヴィスが訝しげに呟いた瞬間、突如その艦が空中爆発を起こした。燃え盛る残骸となったアルビオン艦がゆっくりと地面に向かって墜落し始める。

「い、一体何事だ!? 何故艦が爆発した!? 火薬庫に火が回ったのか!」

「メルカトール」号の水兵が声を荒げて、甲板が騒然となる。

「落ち着け! 落ち着かんか!」

フエヴィスが水兵達を叱咤する中、「レキシントン」号から手旗手が信号を送ってきた。それを望遠鏡で確認した水兵が、顔を青くさせて内容を報告する。

「レキシントン」号艦長ヨリ、トリステイン艦隊旗艦。我ガ艦隊「ホバート」号ヲ撃沈セシ、貴艦ノ砲撃ノ意図ヲ説明セヨ」

「ば、馬鹿な! 撃沈だど!? 勝手に爆発したんじゃないか!」

相手の手旗信号に慌てるラ・ラメーは怒鳴る様にマストに張り付いた水兵に指示した。

「返信しろ! 「本艦ノ射撃ハ答砲ナリ。実弾ニアラズ」

水兵が言われた通りに手旗信号を送る。するとすぐに返事が返ってきた。

「只今ノ貴艦ノ砲撃ハ空砲ニアラズ。我ハ、貴艦カラノ攻撃ト捉工、応戦セントス」

「ふざけるなっ! 弾のない大砲でどうやって艦を撃沈させると言うのだ!」

ラ・ラメーの怒号に近い絶叫は、「レキシントン」号の大砲によって掻き消される。

巨大な黒い砲弾が「メルカトール」のマストをへし折り、甲板に幾つもの大穴が開く。艦のあちこちから黒い煙が吹き出す。

「あの距離から大砲が届くだど!?!」

揺れる甲板の上でへし折れたマストにしがみつきなながらフェヴィスが驚愕の声を上げる。長年艦長を勤めてきたが、これ程まで長い射程範囲を持つ大砲は見た事がない。

「送れ!」「砲撃を中止セヨ。我ニ交戦ノ意思アラズ」

ラ・ラメーが怒鳴るが、「レキシントン」号は返事の代わりに砲撃を繰り返す。

次々と砲弾は艦を撃ち抜き、あちこちからとうとう火の手が上がり始めた。

「メルカトール」号から悲鳴の様に手旗信号が送られていたが、とうとうその旗手も大砲により吹き飛ばされてしまった。

フェヴィスは自分の身体が吹き飛び、甲板に叩き付けられた瞬間、ラ・ラメーが砲弾を抱き抱える様な形で甲板に飲み込まれていったのを見た。

ここで漸くフェヴィスは悟った。これは最初から仕組まれた襲撃であると。自分達がアルビオンに嵌められたと言う事を。

燃え盛る甲板は傷付き呻く水兵か、物言わぬ屍となった者達の姿が見える。フェヴィスは痛む頭を振るって叫んだ。

「艦隊司令長官戦死!」これより旗艦艦長が艦隊指揮を執る! 各部被害報告を知らせ



ろ！ 艦隊全速！ 右砲戦用意！ モタモタするな！」

燃え盛りながらゆっくりと動き出したトリステイン艦隊をポーウッドは冷たい眼差しで見つめていた。

「奴等、漸く我々の意図に気付けた様ですな」

いつの間にかポーウッドの傍らに佇んでいたワルドが呟いた。ワルドもジョンストンに司令長官が務まる訳がないのを理解していた為、実際の上陸作戦全般の指揮はワルドが執る事になっていた。

「その様だな。だが子爵、もはや勝敗は決している。奴等がいかに抵抗しようとも、結果が変わる事はない」

軍人らしい冷たい口調でポーウッドが視線を燃える「メルカトル」号に向け続けながら言う。

既に行き足のついていたアルビオン艦隊は、漸く動き出したトリステイン艦隊の頭を抑える様な機動で動いていた。

アルビオン艦隊は最新の大砲を試す様に次々と砲弾をトリステイン艦隊に発射した。トリステイン艦隊も微力ながら応戦しようとして大砲を放つが、従来の射的範囲から外れた位置から撃ってくるアルビオン艦隊には弾が届かず、空しく雲を貫くだけだった。

容赦のない砲弾の雨の中、とうとう「メルカトール」号が轟音を上げて爆発した。最早トリステイン艦に無傷な艦等一つもない。中には白旗を掲げている艦も見える。

一方的ななぶり殺しの様に次々とトリステイン艦を撃ち落とした「レキシントン」号の甲板では、水兵達が次々に手を上げて「アルビオン万歳！神聖皇帝クロムウエル万歳！」と叫び声を上げた。見るとジョンストンまでその万歳に参加している。

ボーウツドはワルドがいるのも構わず忌々しそうに万歳を繰り返すジョンストン達を見て唾を吐き捨てた。かつて空軍が王位だった頃は、戦闘の最中に万歳をする輩等いなかった。例えば敵であろうとも、相手も自分と同じ血の通った人間。その敵を看取り心の中で敬意を払うのが軍人の務めであるとボーウツドは信じてやまなかった。

不機嫌なボーウツドを気にした様子もなく、ワルドがボーウツドの肩を掴み笑みを浮かべた。

「艦長、新たな歴史の幕開けですな」

「下らんな、子爵」

ワルドの手を振り払う様に肩を揺らしながらボーウツドは心底つまらなそうに言った。

「歴史とは人々の争いと文化の形象だ。この戦もその広大な歴史のほんの一部に過ぎない。同じ事が再び繰り返されただけだ」

「ボーウッドは墮ち近くトリスティンの艦隊に心の中で十字を切りながら皮肉に満ちた笑みを浮かべてワルドに振り向いた。

「そしてその歴史が正しかったかどうかを決めるのは我々ではない。我々の子孫や、後に産まれてくる子供達だ。我々のこの戦いもこれからの戦いも、せいぜい悪名高い歴史の一ページにならない事を祈りたい物だ。そうは思わんかね、子爵？」

生家の庭で幼い兄弟達を抱き締めながらシエスタは空を不安そうに見上げていた。

生家のキッチンで昼食の下拵えをしている最中に、突然大きな爆発音を聞いて慌てて外に飛び出すと、空には異様な光景が広がっていた。

ラ・ロシエールの方角の空から何隻もの燃え盛る艦が墜ちてきては山肌につつかり、森へと崩れながら墜ちた。

突然の出来事に村中が騒然となった中、シエスタに抱き締められた妹が怯えた様に身体を震わせて顔を上げた。

「お姉ちゃん、何が起こってるの？」

妹の質問に安心させ様と答えようとした時、空から巨大な艦が降りてきた。あまりの大きさと威圧感に後退る村人を無視して艦からは錨が下ろされ、上空に停泊した瞬間何匹ものドラゴンが甲板から飛び立った。

「みんな、家に入りましょう」

兄弟達をしつかりと引き連れてシエスタが家に入ると、両親が窓から訝しげに巨大な艦を眺めていた。

「あれは……アルビオンの艦隊じゃないか」

父親が停泊した巨大な艦を見上げて呟く。

「まさか、戦争が始まるの？」

「それはないんじゃないか？ アルビオンとはついこの間不可侵条約を結んだばかりだと、領主様からおふれもあつたし」

不安そうに言う母親に父親は首を振ったが、母親の表情から不安は消えなかつた。

突如、空を駆けた竜騎士が跨がったドラゴンが炎のブレスを村の家々に吹きかけた。

「きゃあつー！」

悲鳴を上げながら母親が後ろへと吹き飛ばされた。ドラゴンの吹いた炎が家に火を着け、窓ガラスを割りながら家の中へと炎が飛び散つたのだ。

外からは怒号や悲鳴が響き渡り、村中が焼かれているのを悟つた父親は気絶する母親を抱き抱えてシエスタに叫んだ。

「シエスタ！ 南の森へと逃げろ！ 兄弟達を頼む！」

家々が焼かれ、燃え盛る村を見下ろしながら大きな風竜に跨がったワルドが冷たい笑みを浮かべた。辺りには自分の従えた火竜に跨がる竜騎士達が容赦なく村を焼くのが見える。

チラリと「レキシントン」号を見ると、甲板から下ろされたロープを伝って上陸部隊の兵が次々と降りているのが見える。広い草原を持つタルブの村を拠点に、アルビオン軍はトリステインへの侵略を開始する手筈になっている。

ふと、草原の向こうから近在の領主の物であろう、数十人の軍勢が此方に突撃してくるのが見える。上陸する部隊に突っ込まれては厄介と踏んだワルドは、竜騎士達にその軍勢に攻撃する様に指示を出した。

ワルド率いる竜騎士達目掛けて炎の魔法が飛んで来るが、それに物怖じせず竜のブレスが容赦なく部隊へと吹きかけられた。

トリステインの王宮ではラ・ロシエールの「メルカトール」号率いる国賓歓迎の為の艦隊が全滅した報を受けて騒然となっていた。

さらにその報と同時に、アルビオンから宣戦布告文が届けられた。そこには不可侵条約を無視して此方の艦隊を攻撃した事への非難が書かれ、「自衛ノ為我ガ神聖アルビオン共和国政府ハ、トリステイン王国政府ニ対シ宣戦ヲ布告ス」と締められていた。

ゲルマニアへ出発する準備を進めていた王宮は急いで將軍や大臣を呼んで緊急会議を開いたが、話は一向に進まない。

アルビオンへことの次第を問い合わせようとする者や、今すぐゲルマニアに軍の要請を送るべきだと言う者もいる。

アンリエッタは結婚の為にあしらった純白のウエディングドレスに身を包みながら呆然とその会議を眺めていた。

「奴等是我々が先に攻撃を仕掛けたと言っておる！　しかし此方は礼砲を発射しただけだと言う話ではないか！」

「野蛮人共め、偶然の事故から誤解しおつたに決まっている」

「急ぎアルビオンに会議の開催の打診を！　今ならまだ間に合うかもしれない！」

飛び交う有力貴族が意見を冷静に聞いていた枢機卿のマザリーニが領いた。

「よし、アルビオンへ急ぎ特使を派遣する。事は慎重を要する。この誤解から全面戦争へと発展させぬ為にも……」

マザリーニの意見にその場の皆が頷いた瞬間、急報が寄越された。

伝書フクロウによって送られてきた書簡を確認した伝令が会議室の扉を荒々しく開いて入ってきた。

「急報です！　アルビオン艦隊が降下し、占有行動を開始しました！」

「何だと!? 場所はどこだ!？」

マザリーニが机をバンツ! と強く叩きながら立ち上がる。伝令は急いで書簡を広げて書かれている場所を確認する。

「ば、場所はラ・ロシエールの近郊! タルブの草原とあります!」

ざわめく会議室に次々と伝令が飛び込んで来た。

「で、伝令! タルブの領主、アストン伯戦死!」

この伝令により、会議室の意見は完全に二つに別れてしまった。

「ゲルマニアに軍の要請を! 最早一刻の猶予もない!」

「しかし、その様に事を荒立てては……」

「残りの艦を急いで集めろ! 古かろうが小さかろうが構わん! 全部だ!」

「落ち着かれよ! ここは特使を派遣するべきだ! 此方から仕掛ければ、それこそ全面戦争の口実を与えてしまう!」

一向にまとまる気配が見えない会議の中、マザリーニは歯軋りしながら悩んでいた。出来れば彼は外交の解決を望んでいた。わざわざ下らない戦争を引き起こす理由も必要もないからだ。

怒号や罵声が響く中アンリエッタはぼんやりと薬指に嵌めた「風」のルビーを見つめた。ウエールズの形見、それを自分に託した男の顔を思い出した。

私は、何をやっているの？

あの時、この指輪を届けてくれた二人とウエールズ様に誓ったのではなかったの？  
ウエールズ様に胸を張って会える様に、勇敢に生きていくと。

「タルブの村、炎上中！」

その急報の声に、アンリエッタは強く瞳を閉じてから椅子を乱暴に引いて大きく音を立てながら立ち上がった。

会議室はシンと静まり返り、皆の視線が立ち上がったアンリエッタに向けられた。

「貴方は、恥ずかしくないのですか？」

「姫殿下？」

「我が国土が敵に侵されているのですよ？ 同盟だの特使だのと口にする前に、やるべき事があるでしょう」

「いや、しかし姫殿下……誤解から生まれた小競り合いですぞ？」

「誤解？ 礼砲に実弾が込まれていたと言う世迷い事を、貴方はまだ信じているのですか？」

「我等は不可侵条約を結んでいるのですぞ？ 事故の筈です」

「ほう？ 仮に此方がその条約を破いた瞬間に、見計らった様に宣戦布告の文を出す国を信用しろと、貴方はそう言いたい訳ですか」



アンリエッタは呆れた様に小さく冷たい笑いを漏らした後、力強くテーブルを叩いて叫んだ。

「我等の民が！ 何の罪もない民が血を流しているのですよ！ 彼等を守るのが貴族の務めではないのですか!？ 我等は何の為に王族を、貴族を名乗っているのです!？ この様な緊急を要する事態に対応し、彼等を守る為に君臨しているのではないのですか!？」  
力強いアンリエッタの言葉に、会議室の将軍や大臣達は息を飲んで言葉を詰まらせた。

「貴方は、単に怖いのでしょうか。アルビオンと言う大国を敵に回す事が。なるほど、確かに敗れば責任を取らされ、反撃の計画者になったと非難を浴びかねない。そうならぬ為に、傷付き血を流す民を見捨てると言うのですね?」

「姫殿下……」

マザリーニがたしなめ様と声をかけるも、アンリエッタは構わずその場の全員に背を向けた。

「ならば私が軍を率いましょう。貴方はそこで怯えながら意味のない会議でもしているなさい」

そう言い放つと、アンリエッタは会議室から飛び出した。マザリーニや大臣達が慌ててそれを制しようとする。

「姫殿下！ 落ち着いて下さい！ お興入れ前の大事なお身体なのですぞ！」  
「ええい、走りにくい！ こんな物！」

アンリエッタはドレスの裾を掴むと乱暴に引きちぎった。純白のウエディングドレスのスカー트가ビリビリと音を立てて膝上くらいのミニスカートに変えてしまった。引きちぎった布切れを、マザリーニの顔に投げ付ける。

「私の代わりに、貴方が結婚すれば良いじゃないの！」

宮廷の中庭に出ると、アンリエッタは大声で叫んだ。

「私の馬車を！ 近衛！ 急ぎなさい！」

聖獣ユニコーンが繋がれた王女の馬車が引かれてきた。

アンリエッタの呼び掛けに、近衛の魔法衛士隊が次々と中庭に集まってくる。

アンリエッタは一匹のユニコーンの手綱を馬車から外すと、ヒラリとその上に跨がり再び大声で叫んだ。

「これより全軍の指揮を私が執ります！ 各連隊集めなさい！」

既に状況を察していた魔法衛士隊の各々が、一斉に敬礼する。

アンリエッタが魔法でユニコーンに手綱を着けて引くと、ユニコーンは額から突き出した神々しい一角を陽の光に煌めかせ、前足を高く上げて走り出した。

幻獣に騎乗した魔法衛士隊口々に叫びながら後に続く。

「我等が姫殿下に続け！」

「後れを取っては家名が泣くぞ！ 貴族の誇りを見せるのだ！」

我こそはと次々に中庭の貴族達がアンリエッタを追って走り出す。城下に散らばっている各連隊への伝書フクロウが一斉に飛び立った。

マザリーニは伝書フクロウで埋められた空を仰いだ。

どちらにしろ、いずれは戦わなければならぬ大国。未だ準備が出来てないとは言え、ここで引いては一生対抗出来ないかもしれない。

そう、アンリエッタの言う通りだ。自国の民を救えない者が、どうして王族でいられよう。

未だに戸惑いを見せる他の將軍や大臣達に向き直ると、マザリーニは破り捨てられたウエディングドレスのスカートを握り締めて突き出した。

「見ましたか、各々方。姫殿下は戦いを決意しました。未だ政治の事もわからない、我等よりも遙かに幼い少女がです」

そう言つてマザリーニは一瞬瞼を閉じると、カッと眼を見開き怒鳴り付けた。

「各々方！ 急ぎ馬へ！ ここで姫殿下を一人で行かせたとあつては、我等末代までの恥ですぞ！」

マザリーニの劍幕に、將軍や大臣達は迷いを捨てて力強く頷いた。

南の森の片隅で、「トライデント」の三人は佇みながら焼かれるタルブの村を眺めていた。三人とも仮面を被り、表情の伺えない視線を向けて一方的な侵略を見物している。「綺麗な村だったのに。勿体ない事をするね、あの皇帝は」

どこか呆れた様に声を漏らすレイヴンを他所に、ウロボロスとオーガが同時に背後に視線をやる。その視線に怯えた様に、繁った長い草がガサガサと揺れた。

「出ていけ」

静かだが、他の追従を許さない様な言葉でオーガが呟く。すると、草むらから二人の子供が出てきた。

一人は十歳くらいの男の子で、煤で汚れた草色のシャツに茶色いズボンを穿いている。少し長いクリーム色の前髪から覗く目尻は涙の痕が見える。その男の子の後ろには同じ格好で髪色をした小さな女の子がいた。男の子のシャツをすっかり片手で掴みながら小さな嗚咽を漏らして泣いている。見た所、兄妹の様だ。

「何か用かな？ 坊やお嬢ちゃん」

レイヴンが二人に向き直り身体を屈めて優しい口調で問い掛ける。

女の子を抱き寄せて少し戸惑った様に視線を泳がせてから、男の子が口を開いた。

「あんた達、殺し屋なんですよ？」

男の子の言葉からピンと緊張の糸がその場に張られる。

レイヴンは首を傾げながら男の子に問い掛ける。

「どうしてそう思うのかな？」

「以前、村に寄った旅人のおじちゃんが言ってた。仮面の着けた三人組の凄く殺し屋が世の中にはいるって」

緊張からか、呼吸を荒げながら口ずさむ男の子がギュツと女の子の身体を強く抱き締めた。女の子は顔を男の子の胸元に埋めながら肩を揺らして静かに泣いている。

「だったら何だ、坊主？」

オーガがそう問い掛けると男の子は片手でズボンのポケットを漁り、何かを握り締め取り出した。

「これで、これであのドラゴンに乗った奴等を！父さんと母さんの……仇、を……うつつくつ……！」

涙を零し嗚咽を漏らしながら差し出された震える手には銅貨が数枚乗っていた。掌には強く拳を握り締めたのか、爪の痕から血が滲んでいる。

「下らん、こんなはした金で仕事等受けるか。とつとと失せろ」

ウロボロスが小馬鹿にした様に言っつて首を振ると、男の子は突然女の子を突き飛ばしてレイヴンに駆け寄った。レイヴンの羽織っていた黒いロングコートの襟元を掴み、涙

と鼻水を流して懇願する。

「お願い！ あいつ等を殺して！ あいつ等は僕の友達を！ 父さんを！ 母さんを燃やしたんだ！ 許せない！ 絶対に許さない！ お願いだから……お願いだからあつ！」

必死に訴えレイヴンの肩をガクガク揺らした後男の子がゆっくりとその場に崩れ落ちた。チャリン、と小さな音を立てて血の付いた銅貨が地面を転がる。

オーガが突き飛ばされ声を上げずに泣き崩れた女の子を乱暴に立たせると男の子の元へと押しやった。

レイヴンは涙を流しながらうずくまる二人を見下ろしてから、転がった銅貨を拾い集めて男の子の髪を掴んで顔を上げさせた。

「本当にあいつ等を殺して欲しい？」

ぞつとするほど冷たい、氷の様な声で男の子に問い掛けるレイヴン。

男の子は涙を流し続けながら頷いた。その瞳には、弱々しくも憎悪に染まった光が宿っていた。

「よし。かなり安いけど、君のその怒りと憎悪に敬意を表して、特別に引き受けてあげるよ」

男の子の髪から手を離すと、レイヴンは銅貨を握り締めてズボンのポケットにとしま

いこんだ。

「レイヴン、本気か？ そんな安っぽい額で仕事を引き受けるだど？」

ウロボロスが驚きと呆れを表しながら言うも、レイヴンは頷いた。

「暇潰しくらいにはなるでしょ？ ちよつと暴れたい気分だったし。あ、二人はここにいていいよ。僕一人で行くから」

まるでピクニックに行くかの様な軽い口調で話すと、状況がまだ理解できていない男の子と女の子の首に手刀を打ち付けて気絶させる。

「代わりにこの子達を適当にどつか置いてきてあげて。あ、丁重に扱ってよ？ こんな小さくても依頼主なんだから」

「……お前の気紛れは俺の友人だった男よりも読めないな。わかった、好きにしろ」

オーガもまた呆れた様に言いながら子供達を担ぎ上げると、どこか納得がいつていない様なウロボロスと共に森の中へと消えた。

「久々に純粹に人を憎む眼を見たな。あの子はいずれ大物になるかも」

そう小さく呟いたレイヴンは森の中から草原へと出て、鼻歌混じりにドラゴンが飛び交い燃え盛るタルブの村へと歩み寄っていった。

ふと、巨大な艦からロープを伝って下りてくる兵達を見つけ、肩を伸ばしながらそちらに身体を向ける。

「二応依頼はあの竜騎士みたいだけど、まずは地上のゴミを掃除しようかな。さて、楽しもうか」

一人楽しそうに漏らし、漆黒の仮面とコートを身に纏ったその男は、アルビオンの上陸部隊へと駆け出した。



## 第25話

トリステイン魔法学園にアルビオンからの宣戦布告の報が入ったのは翌朝の事だった。

桐生とルイズは「始祖の祈禱書」を手に魔法学園の玄関先で、ゲルマニアへ向かう為の王宮からの馬車を待っていたが、突如朝靄の中から息せききって現れた一人の使者に面食らった。

彼は荒い呼吸を繰り返しながらオスマンの居室を尋ねてくると、教えた瞬間に疲れた身体に鞭打って走り出した。

その様子から異様な事態を察した桐生とルイズは互いの顔を見合わせて、頷き合うと使者の後を追った。

オスマンは式典に向けての準備をしていた所に現れた使者の話を聞くと、深い溜め息を漏らしながら自分の席へと腰掛けた。

「アルビオンからの宣戦布告……戦争と言う訳じゃな？」

「さよう！ 敵軍はタルブの草原に陣を張り、ラ・ロシエール付近に展開した我が軍と睨

み合っておりませす！」

使者は肩を落としてがっくりとした様子で続けた。

「敵軍は巨艦「レキシントン」号を筆頭に戦列艦が十数隻。上陸せし総兵力は三千少々と見積もられています。我が軍の艦隊主力は既に全滅、なんとかかき集めた兵力は多く見積もつても二千。国内で緊急配備できる兵はそれが精一杯の様です。ですが何より厄介なのは制空権を敵に奪われた事です。敵軍は空からの砲撃を筆頭に、我が軍を難なく蹴散らすでしょう」

「現在の戦況はどうなつてゐるのかね？」

「敵の竜騎兵がタルブの村を焼いているとの事です。同盟に基づきゲルマニアへ軍の派遣を要請しましたが……先陣が到着するのは三週間後になると」

使者の言葉にオスマンは深い溜め息を再び漏らしながら首を振った。

「残念じゃが、ゲルマニアはトリステインを見捨てる気じやろうて。敵はその間にトリステインの城下町を落とすじやろう」

使者とオスマンがどちらからともなく溜め息を漏らした瞬間、学園長室の扉が勢い良く蹴破られた。

驚いた二人が扉に目を向けると、桐生とルイズが立っていた。学園長室の扉に張り付いて二人の会話を盗み聞きしていた桐生の眉間には深い皺が出来てオスマンと使者を

睨み付けており、ルイズは不安そうに桐生と二人を交互に見ている。

「今の話は本当か？」

「き、君達は!？」

使者は先程ここまでの道のりを教えてくれた二人がすぐ外にいた事に驚いたが、桐生はそんな事に構わず使者に詰め寄ると胸ぐらを掴んで乱暴に引き寄せた。

「今の話が本当かどうかを聞いているんだ、答えろ！」

有無を言わせない迫力で迫る桐生に使者は小さな悲鳴を漏らしてから何度も首を縦に振って頷いた。

「ほ、本当です！ アルビオンと我が国は本格的な戦争を開始する事になりました！」

「げ、現在敵軍はタルブの草原で……！」

オスマンに報告した内容を伝えようとする使者の言葉に、桐生は表情を怒りに染めて乱暴に手を離すと駆け足で学園長室から出ていった。

ルイズが慌ててその後を追う。

中庭に向かった桐生はゼロ戦を眺めてから再び走り出そうとした。そんな桐生の腰に、ルイズが後ろから抱きつく。

「な、何をするつもりなのよ、カズマ!？」

「決まってるだろ、タルブの村に行く！」

その言葉に青ざめたルイズは力強く桐生の脚にしがみついた。

「何言ってるの!?! 聞いたでしよ!?! 戦争が始まったのよ! あんたが一人で行ったって、無駄死にするだけじゃない!」

「こいつがある。敵はウエールズと見たあの巨艦なんだろう? こいつなら空を飛べるし、対抗できる筈だ」

ルイズはゼロ戦を見上げる。太陽の光を受けて鈍い輝きを放つ機体はこの世界の常識にとらわれたルイズにはただの鉄の塊にしか見えない。

「こんな……こんな玩具で何が出来るのよ!?!」

「ルイズ、これは玩具じゃねえよ」

桐生が左手でゼロ戦のボディを撫でる。ルーンが力強く輝いた。

「俺の世界の武器だ。人殺しの道具だ。だが、こいつならシエスタ達を救えるかもしれない」

ルイズは桐生に力強く首を振る。

「これが仮にあんたの世界の武器だとしても、あんな巨大な戦艦に勝てる訳ないでしよ!?! わかんないの!?! 王軍に任せなさい!」

「そのトリステインの艦隊は全滅だって話じゃねえか」

桐生は優しくルイズの手をほどき、頭を撫でる。

「お前の言う通り、俺が行った所で何も変わらないかもしれないあの戦艦も倒せないかもしれない。でもな……」

「でも……何よ?」

顔を上げて桐生を見上げながら尋ねるルイズ。

「世話になった人が危険な目にあってるのに、「自分には関係ない」って割り切れるほど……俺は大人じゃねえんだよ」

桐生のどこまでも優しい口調に、思わず涙が目溜まりかけたルイズは首を振った。

「……馬鹿じゃないの? あんた、二元の世界に帰るんでしょ!? こんな所で死んだらどうすんのよ!? 待っている人達がいるんでしょ!」

ルイズの必死の言葉に、一瞬遥の姿が脳裏に蘇る。確かにここで死んでしまったら、二度と遥には、「アサガオ」のみんなには会えない。

「確かにな。ここで死んじまったら、元も子ねえ。でもここで逃げ出したら、あいつ等に胸を張って会えない。そんな事になれば、俺は俺を一生許せない」

桐生は優しくルイズを優しく抱き寄せた。小さい身体から伝わる温もりは、桐生の心を強くさせた。

「大丈夫だ、ルイズ。必ず俺は帰ってくる。約束する。だからお前は残れ。自分のご主

人様を危険な目に合わせるのは、使い魔として良くねえからな」

最後に少し悪戯つぼく囁いてからゆつくりとルイズの身体を離すと、桐生はゼロ戦にまだガソリンが入っていない事に気付いてコルベールの元へ駆け出した。

ルイズは遠ざかる桐生の背中を見ながら地団駄を踏んだ。

「何よ何よ！ 本当にご主人様の言う事を聞かない使い魔なんだから！ 危ないって言うてんでしようが！」

肩を震わせながら叫んだルイズの声はもう桐生に届かない。呼吸を荒げながら拳を握り締めると、瞳から涙が溢れてきた。

「死んだら……死んだら、どうすんのよ？ あんたが居なくなるなんて、嫌よ、私……」  
頬を伝い、顎を伝って一粒の涙が地面に零れ落ちた。

ルイズは制服の袖でゴシゴシと目を拭いてからゼロ戦を睨み付けて、胸元で「始祖の祈祷書」を抱き締めると独り強く頷いた。

桐生が乱暴に研究室の扉を開けた音で、夢の世界で美女と戯れていたコルベールは身体を跳ねさせて現実へと引き戻された。

「おわっ!? な、何事かね?」

口端から垂れている涎を指で拭いながらまだぼやけてる寝ぼけ眼で研究室の扉へと

視線を送るコルベール。そのぼやけた視界の中に浮かぶシルエットから桐生が立っている事に気付く。

「おや、カズマ殿。ああ、ガソリンなら頼まれた量が出来ましたぞ。その樽がそうです」

ゴシゴシと手の甲で目を擦つてから眼鏡をかけたコルベールは乱雑に積まれた五個の樽を指差した。

桐生は頷くとコルベールに詰め寄つた。

「頼む、今すぐこれを運んでくれ」

桐生に言われるまま、まだしつかりと起きてない頭で樽を運びながらコルベールは欠伸を繰り返した。

ガソリンをゼロ戦に入れながら辺りを見回すとルイズがいない。恐らく自分の部屋へと戻つたのだろうと桐生はホツとした。ここでついていくなんて言われたら厄介な事極まりない。

「しかし、こんな朝つばらから飛ぶとは。出来れば昼過ぎにしてもらえると頭も冴えて良く見えそうなんだがね」

「今は時間がねえんだ」

寝起きのコルベールは当然ながら戦争の事等知りはない。桐生も面倒だったので

説明は省かせて貰った。どの道後でオスマン辺りから知らされる筈でもあるし。

桐生は操縦席に乗り込みエンジン始動前の操作を行う。そしてこの前の様にコルベールに頼み、エンジンを始動させた。

唸り声の様な音と振動を響かせながらエンジンが始動し、プロペラが回転し始める。各部計器を確認し、機銃や翼の機関砲にも弾が込められている事を確認する。

ブレーキをリリースし、ゼロ戦が動き出す。

前を見る。「アウストリ」の広場を囲う壁が少し向こうに見える。ギリギリだが、飛び立てる距離である事を左手のルーンが教えてくれる。

眠気が吹き飛んだ様に瞳を輝かせて此方を見ているコルベールに、桐生はシエスタから貰ったゴーグルを着けてから親指を立てて見せた。

ブレーキを踏みしめ、カウルフラップを全開にする。プロペラのピッチレバーを離陸上昇に合わせてからブレーキを弱め、左手で握ったスロットルレバーを開いた。

瞬間、弾かれた様にゼロ戦が勢い良く加速し始める。

操縦桿を軽く前方に押し、尾輪が地面から離れたのを感じながらそのまま滑走する。魔法学園の壁が徐々に迫り、身体中に嫌な緊張感が走って筋肉が強ばり手が汗ばんでいく。

「今だー！」



操縦席に立て掛けたデルフリンガーの掛け声に合わせて、壁が目の前近くまで迫った所で操縦桿を引く。

轟音を響かせながらゼロ戦が浮き上がり、壁をかすめて空へと飛び上がった。

脚を収納して計器盤の左下についた脚表示灯が青から赤へ変わったのを確認する。

「本当に飛びやがった！ すっげえ！ 面白えっ！ やっぱり長生きはするもんだな！」

上昇を続けるゼロ戦にデルフリンガーがはしやいだ様に声を上げる。

「そりゃ飛ぶさ。飛ぶ様に出来てるんだからな」

桐生はそんなデルフリンガーに苦笑を浮かべてから、真剣な表情へと変えた。

「さあ、行くぜー」

ゼロ戦は鋼の翼を太陽の光に反射させて煌めかせながら、異世界の空を駆け出した。

タルブの村の火災はおさまったが、そこは無惨な戦場へと変わり果てていた。草原には大部隊が終結し、港町ラ・ロシエールに立て籠っているトリステイン軍との決戦の火蓋が切られるのを待ち構えていた。

その上には部隊を空から守る為、「レキシントン」号から発艦した竜騎士達が飛び交っている。何度かトリステイン軍からの竜騎士隊が攻撃を仕掛けてきたが、悉く撃ち落と

してきた。

決戦に先立ち、アルビオン軍は「レキシントン」号を筆頭とした艦隊の冠砲射撃が行われる事になっていた。それぞれの戦艦が砲撃に向けてタルブの草原の上空で準備をしていた。

タルブの村の上空を警戒していた竜騎士の一人が、自分の上空、二千五百メートル程の一点に此方に近付く一騎の竜騎兵を発見した。

竜に股がった騎士は竜を鳴かせ、仲間へ敵の接近を告げた。

ふと、もう一人の竜騎士が地上の大部隊の数百メートル先、南の森から何やら一騎の兵の様な物が近付いているのを見つけ、草原に陣を組んだ大部隊の兵士達に警戒する様に伝えた。

桐生は風防から顔を出し、眼下のタルブの村を見つめてギリツと奥歯を噛み締めた。素朴で美しかった村は跡形もなく焼かれ、黒い煙が空へ立ち上っている。

シエスタと共に眺めた草原にはアルビオンの軍勢で埋まっていた。

「許さねえ……！」

操縦桿を握る力が強くなるのを感じながら、タルブの村の上空を我が物顔で飛び交う竜騎士達を睨む桐生。

スロットルを絞り、機体を捻らせてタルブの村目掛けてゼロ戦を急降下させた。

竜騎士から連絡を受けた地上部隊の数名が南の森から此方に向かってくる何かを迎え撃とうと隊列を組んで待ち構えた。

最初は豆粒程度にししか見えなかった物は徐々に輪郭が現れていき、兵士達は目を凝らした。

どうやら向かってくるのは一人らしい。全身黒ずくめの何かが此方に向かってきている。

兵士達は剣を引き抜いてその人物が来るのを待った。すると、突然その黒い人物は速度を落としてゆっくりと近付いてきた。

奇妙な格好だった。黒いロングコートに黒いズボン、極めつけは鳥の嘴の様な物が突き出た黒い仮面を被っていた。

「何者だ？ 我々は神聖アルビオン帝国の地上部隊だ。今は作戦待機中で忙しいんだ、とつとと失せろ。さもなくば……切り捨てるぞ？」

鎧に身を包んだ数人の兵士の男の一人が剣の切っ先をその黒ずくめの人物に向けて突き付けた。

黒ずくめの人物は一瞬の間を取ってから構わずその男に近づく。

「貴様、聞こえないのか?! 今のは作戦待機ちゆ」

怒りを露にしたその男の言葉は、それ以上続かなかつた。

黒ずくめの人物は切っ先が向けられた剣の刃を掴むなり、そのまま奪い取ると目にも止まらぬ速さで剣を持ち直し男の首を跳ねたのだ。

頭のなくなつた首から大量の血が噴水の様に噴き出して、顔のない身体が前のめりに倒れこんだ。

一瞬の出来事で頭が追い付かないもう一人の兵士の首に、そのまま剣を突き刺す。首を貫いた刀身は血で赤く染まり、刺された兵士の身体が一瞬の硬直の後だらんと脱力し、手から力なく剣が零れ落ちる。

黒ずくめの人物はそのまま束を離して首に剣を突き刺された兵士が倒れるのを見送ると、零れ落ちた剣を拾つて此方に視線を向けている兵士達に顔を向ける。

「さあ、来なよ。まあ、来なくてもいいけど。一人残らず、皆殺しだあつ!」

心底楽しそうに叫びながらその黒ずくめの人物、レイヴンは大部隊に突っ込んで行った。

「たつた一騎とは、随分となめられた物だ。」

突如現れた此方に向かつてくる竜騎兵を見つめ、迎え撃とうと竜を上昇させた騎士が

目を細めて呟く。

ただ少し気になるのは、徐々に見えてきた相手の竜のシルエツトだ。翼は真っ直ぐと伸びてまるで固定されている様な印象を受ける。それに鳴き声にしては妙に耳に響く喧しさだ。

あの様な竜、ハルケギニアに存在していただろうか？

いや、世界は広い。単に自分が知らないだけなのかもしれないと、竜騎士は雑念を捨てた。

アルビオンに住む火竜のブレスを一撃でも食らえば、いかなる竜だろうとただでは済まない。

竜騎士の股がった火竜が此方に向かってくる敵を撃ち落とそうとブレスを開く為に口を開く。

その瞬間、相手の竜から白い何かが発射された。その何かは火竜の翼と腹を撃ち抜き、火竜の腹にあるブレスの為の油を溜めている器官に引火して爆発する。

突然仲間をやられた他の竜騎士達が次々と相手の竜を追って火竜を羽ばたかせた。

ブレスを浴びせようと火竜は懸命に近付こうとするが、その鋼の竜、ゼロ戦のスピードは遙かに速く、ブレスを吐いてもかわされてしまう。

ゼロ戦の操縦席で、桐生は操縦桿を操りながら怒りに任せて二十ミリ機関砲弾と七・

七ミリ機銃を竜騎士に浴びせていく。「ガンダールヴ」の力によってゼロ戦はまるで桐生の身体の一部の様に滑らかに動き回り、竜騎士達を翻弄しては容赦なく弾を撃ち込んでいく。

次々と身体を、翼を撃ち抜かれて墜ちていく竜騎士達を見送り、速度エネルギーを高度へと変換する。火竜の動きを遥かに上回る速度で制空権を奪うのだ。

増援と見られる竜騎士が十騎ほど現れたのを確認すると、突然後ろから聞き慣れた声がか聞こえてきた。

「あ、あの天下一と言われてるアルビオンの竜騎士をあんなに倒しちゃうなんて！ あんなに凄いいじゃない！」

驚いて後ろを振り向くと、座席と機体の間からルイズが顔を出して墜ちていく竜騎士を眺めている。

座席の後ろには無線機のような機械が繋がれていたが、この世界では不要と思った桐生はそれを取り外していた。その為、座席の後ろには固定様のワイヤー位しかないので大きな隙間が出来ている。ルイズはそこに隠れていたらしい。

「ルイズ！ お前、乗っていたのか!？」

驚きを表しながら怒鳴る桐生に、ルイズは仏頂面をして見せる。手に持たれている「始祖の祈祷書」を見る限り、コルベールの元へ向かっている間に忍び込んだらしい。

「あつたり前でしょ！ あんたは私の使い魔なのよ！ 使い魔は主人と常に一緒にいな  
きや駄目なのよ！」

「残れと言つただろう！ 危ないだろうが！」

「危なくなんかないわよ！」

桐生の怒鳴り声に対抗する様にルイズも怒鳴り声を張り上げ、真つ直ぐな瞳で桐生を  
見つめる。

「あんた言つたでしょ!? 必ず帰ってくるつて！ それつてつまり勝つつて事でしょ!?  
なら私がいたって、あんたは勝つ！ 危ない事なんて何も無い！ 違う!？」

滅茶苦茶な理屈を延べてくるルイズに、桐生は深い溜め息をつきながらルイズから視  
線を逸らした。

何でこいつは、あいつと同じ瞳（め）をするんだ。

ルイズの真つ直ぐな瞳。それは今まで自分を信じ、常に自分を理解していてくれてい  
た遙と同じ物だった。

国も、歳も、背格好も、更には世界まで違うこの少女は、自分が何よりも愛している  
少女と同じ眼差しを持っている。

「全く……とんでもねえご主人様の元についてしまったもんだぜ」

「な、なんですつてえ!？」

小さく漏らした桐生の言葉に聞き捨てならないとばかりに、ルイズが身を乗り出して桐生の顔に顔を近付ける。

すると、桐生は小さな笑みを浮かべていた。

「だがまあ、お陰で余計負ける訳にはいかなかったぜ。しつかり掴まってるよ、ルイズ！」

桐生の笑みにつられた様にルイズも笑みを浮かべて頷くと、座席にしつかりと掴まりながらポケットから「水」のルビーを取り出して指に嵌める。

「姫様……私とカズマをお守り下さい」

小さな声で祈りを捧げると、いつの間にか座席の床に開いた状態で落ちていた「始祖の祈祷書」に気付く。

ルイズが何の気なしに「始祖の祈祷書」を拾おうと手を伸ばした瞬間、「水」のルビーとページが光り出して驚きを表した。

「全滅……だと!?!」

艦砲射撃実施に向けてタルブの草原の上空三千メートルに遊弋していた「レキシントン」号の甲板で、伝令からの報告を聞いたジョンストンは身体をわなわたと震わせた。

「敵は一体何騎で来たんだ? トリストインの竜騎士隊が、そんなに数があるとは思え



んが?」

「サー! そ、それが……報告では、一騎だと」

「一騎、だと……!?!」

ジョンストンは一瞬呆然とした後、被っていた帽子を甲板へ叩きつける。

「ふざけるなっ! 二十騎もいた竜騎士が、たった一騎に全滅させられただど!?! あり得る筈がないだろう!」

伝令が総司令官の剣幕に怯えて後退り、生唾を飲み込んだ。

「て、敵の竜騎兵はあり得ぬスピードで敏捷に飛び回り、射程の長い魔法攻撃で次々と我が軍の竜騎士を撃ち落としていったそうです……」

ジョンストンは報告を続ける伝令の胸ぐらを掴むとガクガクと乱暴に揺さぶった。

「ワルドはどうした!?! 竜騎士隊を預けた、あの生意気なトリステイン人はどうしたと言うんだ!?! まさか、奴までもやられたのか!?!」

「い、いえ、被害報告にはワルド子爵の風竜は上がっていません。ですがその、姿が見えぬ、と」

「あの小僧めっ! 裏切りおったか! それとも臆したか!?! 何にしる使えん奴だ!」

ギリギリと伝令の服を破らなばかりに胸ぐらを掴み続けるジョンストンを、ポーウツドが手でほどかせる。

「兵の前でその様に取り乱しては士気が下がりますぞ、総司令官殿」

冷静な口調が気に触ったのか、ジョンストンはポーウッドへと矛先を変えて詰め寄った。

「何を悠長な事を！ 元はと言えば、竜騎士隊が全滅したのは貴様のせいだぞ、艦長！

貴様の稚拙な指揮のせいと貴重な我が軍の竜騎士隊がやられたのだ！ この責任、貴様はどう取るつもりだ!？」

唾を飛ばしながら罵るジョンストンに小さな溜め息を漏らすと、ポーウッドは腰に指していた杖を引き抜いてジョンストンの腹へ叩き付けた。グリーンと白眼を向きながらジョンストンがその場に崩れ落ちるのを見送り、近くにいた従兵に部屋に運ぶ様に指示する。

総司令官が運ばれていくのを不安そうに眺めている伝令に、ポーウッドは軽い咳払いをしてから落ち着いた口調で言う。

「竜騎士隊がいかに潰れようとも、主力である本艦「レキシントン」号は無傷なのだ。ワルド子爵にも何かしらの策があるのだろう。諸君等はただ任務に励んでいけば良い」

ポーウッドの言葉に安心したのか、伝令は敬礼をすると持ち場へと戻っていった。

二十騎もの竜騎士をたった一騎で撃ち破った竜騎兵。強者であるのに変わりはないが、所詮は「個人」の力。連携を取った武力の前では無力に過ぎない。

「艦隊全速前進。砲台用意」

ボーウツドの命令で動き出した艦隊はやがてタルブの草原の端向こう、周りを岩山で囲まれた天然の要塞ラ・ロシエールの港町に布陣したトリステイン軍の陣容がわかる程近付いた。

「上下左砲、命令があり次第砲撃開始、それまでは待機せよ。それと上下右砲、弾種散弾に変え竜騎兵に備えよ」

ボーウツドの命令に従い砲台が用意される中、先程の伝令が再び息せき切ってやって来た。

悪い知らせなのは目に見えているのもあって面倒臭そうに、ボーウツドは報告を促す様に顎をしゃくくって見せる。

「で、伝令ーわ、我が軍の地上部隊、ぜ、全滅しました！」

その言葉に、ボーウツドの表情は一瞬で険しくなった。

「竜騎士だけでなく地上部隊までも全滅だと？ 馬鹿な……トリステインの軍か？ それとも例の竜騎兵が空襲をかけたか？」

地上部隊に奇襲をかけられぬ様に制空権を奪った筈なのに、何故全滅等と言う状態に陥っているのか。いや、そもそも空から眺めている限り、地上部隊に攻撃を仕掛けられそうな兵や竜騎士の類いは見付からなかった筈。仮に背後から襲おうにも他の艦隊が

注意深く見張っていた筈だ。

「そ、それが……伝え聞いた所、此方もその竜騎兵とは別のたった一人に全滅させられたと」

「何だと!?!」

冷静を装っていたボーウッドも思わず声を上げて叫ぶ。

竜騎士を全滅させた竜騎兵だけでも多少ながら驚いていたのに、今度は地上部隊がたった一人に全滅させられたのだ。とてもじゃないが信じられない。

「一体どれ程の強者が現れたと言うのだ!?! トリステインに一騎当千の強者がいる等聞いた事がないぞ!?!」

苛立ちを隠せずに怒鳴り散らす此方を見ながら震える伝令を見て、ボーウッドは慌てて咳払いをした。

「……濟まぬ、少々取り乱した。それで、一体どの様な者が相手だったのか報告はあるかね?」

「そ、それが……」

伝令は歯をカチカチと鳴らせる程震えながらボーウッドを見つめた。

その震えから、この伝令が震えているのは自分の怒りに対してではなく、別の何かを恐れているのをボーウッドは悟った。伝令が落ち着くのを待ってから再度報告を促す

様に顎をしやくつて見せた。

「ほ、報告によりますと、相手は「トライデント」のリーダーだったと……」  
「な………に………!?!」

ボーウツドは言葉を詰まらせながら僅かに後退った。

数年前、トリステイン、ゲルマニア、アルビオンの三方国の三千人のメイジ達によって結成された犯罪組織「オブリビオン」の討伐の為に、それぞれの国がメイジや兵士を結集させて作られた連合軍が向かった決戦の部隊となる戦場には、既に先客がいた。

連合軍が見守る中、強力なメイジ達を次々と討ち倒していたのは三人の人物だった。それこそが「トライデント」であり、その戦が彼等を表の世界にまで名を馳せさせるきっかけとなった。

当時の戦争にウェールズと共に連合軍に参加していたボーウツドは、艦隊から三人の戦いを眺めて身震いしたのを覚えている。

いや、あれは戦いではない。まるで生まれたての赤ん坊をなぶり殺す様な、一方的な殺戮だった。繰り出されるメイジ達の強力な魔法は何故か全てかわされてしまい、一人また一人とメイジ達は殺されていった。

あの戦いは未だに夢に出てくる程強烈な物だった。そして今、最も厄介な問題が出来てしまった。

「トライデント」が、あの化け物共がトリステインについたと言うのか……!？」

ボーウツドは眩きを漏らしてから大きく咳払いし、深呼吸をしてから伝令に向き直った。

「今は余計な憶測は止そう。奴等とてこの高さまでは飛べまい。まずはラ・ロシエールに立て籠っているトリステイン軍を片付ける！」

緑が覆い茂った草原には、鉛色の鎧を着込んだ屍が無造作に転がっていた。緑色の草は所々が血で赤く染まり、時折吹く風は血の臭いを運んで草原を駆けていく。

空から次々と墜ちてくる竜騎士を見ながら、レイヴンはアルビオンの兵士の屍を重ねた山の上に腰掛けて拍手を鳴らしていた。

「凄いいねえ。竜騎士がどんどん墜ちてくる。なかなか面白い光景だね」

クスクスと小さな笑い声を響かせながら空を舞うゼロ戦へと視線を向ける。

「一応墜ちて来た奴等は僕の獲物だったんだけど……まあ、流石に空は飛べないし、別にいつか。あの子達、喜んでくれるかな？」

死体の山の上で身体を伸ばしながら、レイヴンは呑気な口調で呟いた。

## 第26話

ラ・ロシエールの街に立て籠り、作成会議をしていたトリステイン軍がざわめき立った。原因は言うまでもなく、前方五百メートル先のタルブの草原の上空に現れたアルピオン軍の艦隊の存在だ。三色の「レコン・キスタ」の旗をはためかせながら此方に向かってきている。

十七年と言う月日の中、初めて見る敵にアンリエッタは身体の震えを抑えるのに必死だった。股がったユニコーンや周りにその恐れを悟られぬ様に浅い呼吸を繰り返した。

不意に、一瞬空が光った様に見えた。艦隊の砲撃だ。

着弾と同時に轟音を上げながら岩や人や馬が吹き飛んだ。圧倒的なその破壊力を前に兵達が浮き足立ちはじめた。

「お、落ち着きなさい！ 落ち着いて！」

「殿下」

初めて見る人の死。その恐怖から叫んだアンリエッタの肘を優しくマザリーニが掴む。振り返ったアンリエッタの顔は青ざめており、震えが手を通して伝わってくる。

「まずは殿下が落ち着きなされ。こんな時こそ、将は冷静でなくてはなりません。殿下

は我等の心臓、我等は殿下の手足、そして脳です。人の身体は心臓の血の循環で機能しております。この意味、お分かりですか？」

マザリーニはアンリエッタを宥めながら自分を憎んだ。

何が心臓だ。こんな幼い娘に全てを押し付けて、お前は恥ずかしくないのか!?

自己嫌悪、自己罵倒を悟られぬ様に表情はあくまでも穏やかな様子を浮かべるマザリーニ。

アンリエッタは早くなっていた呼吸をなんとか落ち着かせて首を振った。

「ごめんなさい、枢機卿」

謝罪を述べてから背筋を伸ばしたアンリエッタを見て、マザリーニは胸を痛めた。だが、ここでいつまでも自分を責めている訳にはいかない。自分よりも遥かに幼い少女が気丈に振る舞っているのだ。

自分を責めるのは後だ。今は、目の前の敵に集中しろ。マザリーニは自分に言い聞かせた。

トリステインは小国でありながらも由緒正しい貴族が揃った歴戦の国である。兵力差となるメイジの数は四つの国の中で一番多い。

マザリーニの号令で貴族達は岩山の隙間に空気の壁を作り出し、何とか砲撃を防ぐ。しかし、砲撃の威力が桁違い過ぎる為そう長くは持たないだろう。



「砲撃が終わり次第、タルブの草原で陣を組んだ三千の兵と共に攻めてくるでしょうな。我々に出来るのは、迎え撃つ事だけです」

「……枢機卿、勝ち目はありますか？」

アンリエッタが不安を抑えた声でしてきた質問に、マザリーニは周りの兵を見た。

勢いで出撃をしたものの、この戦力差は如何ともしがたい。敵は空からの援護を受けた三千。此方は二千あまり。勝ち目は……ない。

「五分五分、と言った所ですな」

しかし、その現実を伝えてどうなる？

そう考えたマザリーニは少しでもアンリエッタを安心させる為にそう嘯いた。

砲撃が止み、遂に地上部隊が押し寄せて来るだろうと覚悟した兵達の間には緊張が走る。しかし、草原の遙か先に敷かれているであろう陣は一向に動こうとしない。

誰もがいつ来るかと疑問を思っていると、甲高い声を立てながら偵察に行っていた伝令が砦の中に入って来た。

「殿下！ 姫殿下！ 報告！ 報告であります！」

「これ、殿下の御前であるぞ。落ち着かぬか」

まるで転がり込む様にアンリエッタの前にやって来た伝令の声に頭を痛くしながらマザリーニがたしなめる。

伝令は大きく咳払いすると膝まづいて顔を上げた。その顔には戸惑いと喜びが混ざっている様に見えた。

「タルブの草原に陣を敷いていたアルビオン軍の地上部隊、全滅を確認致しました！」  
岩の中で響き渡った伝令の声に、一瞬の沈黙の後で再びざわめきが上がった。

マザリーニは目を細めながら伝令をじっと見つめる。チラリと一瞬アンリエッタを見ると、状況が飲み込めないのか目をパチクリさせている。

「その報告、真の事か？」

「はっ！ 最初は遠くから眺めておりましたが、あまりに動きが無い為近付いてみると……既に地上部隊は全滅していたのを確認しました！」

マザリーニは報告を聞きながら頭の中で状況を整理していた。

「アルビオン軍の地上部隊が全滅？ 一体誰が？ それともこの伝令はスパイ？ 此方を油断させる作戦か？ しかし、この状況で何の為に？」

頭に浮かぶ疑問符が意識を占領しかけた時、アンリエッタの声がそれを途切らせた。  
「誰がやったのです？ 敵の兵は三千と聞きました。そんな大部隊を打ち倒したのは、一体誰なのです？」

アンリエッタのもっともな疑問に誰も彼もが伝令に視線を向ける。

伝令は少し困った表情を浮かべながら首を振った。

「わかりません。ただ、念の為死体を確認した限りではアルビオン兵の物しかありませんでした」

「貴方」

報告を続けようとした伝令はアンリエッタの声に首を傾げてから思わず息を飲んだ。アンリエッタの表情が怒りに染まっている。確かな怒気を含んだ瞳が伝令を射ぬいていた。

「敵とは言え彼等もまた人間。その人達を「物」扱いするとは何事ですか!」  
「も、申し訳ありません!」

伝令はアンリエッタの言葉に頭を深く下げながら謝罪する。

その様子を見て、マザリーニを含んだ誰もが自分達の将がアンリエッタである事を誇りに思った。

「して、死体がアルビオン軍の者達だけだと言う状況に、貴殿の見解は?」

マザリーニが頭を下げたままの伝令に問いかけると、伝令はおずおずと頭を上げながら口を開いた。

「お、恐らく……アルビオン軍に対して多少の傷を負う程度に済んだか、もしくはは無傷だったのか、様々な見解は取れますが、辺りの芝を見ても大部隊が押し寄せた様子は無い為少数の人間がやった物かと……」

伝令の見解にますます謎が深まっていたトリステイン軍の思考は一時停止状態にあつたが、再び受けた砲撃によって再び動き出した。

ルイズは光の中に浮かぶ文字を指でなぞつた。

それは古代のルーン文字。授業をまともに受けていなければ絶対に読めない文字だ。

「始祖の祈祷書」に書かれた文面を紐解いていく。膨れ上がる知的好奇心にページを捲る指の動きが止まらない。

そして見つける。この「始祖の祈祷書」の本当の意味を。その文章の中で記された、「虚無」の名を。

「虚無」……伝説の系統じゃない。それじゃあこれは、始祖ブリミルの……!？」

今のルイズはゼロ戦の外がどうなっているかわからない。と言うよりも、最早外がどうなっているのか、自分の置かれている状況がどうなのかと気にする暇もなく、ただただ光の文字を追うのに夢中になっていた。

墜ちていく竜騎士を横目にやった桐生は遙か上空に佇む巨大戦艦を睨み付けた。

如何に竜騎士を撃退した所で、あの戦艦がある限り此方に勝ち訪れない。

桐生はゼロ戦のスロットルを開き、フルブーストで巨大戦艦目掛けて上昇する。

「無茶だぜ、相棒。こんな玩具じゃあのデカブツはやれねえよ」

「デルフ、ちよつと黙ってる」

デルフリンガーがいつもの調子で伝えてくる戦力差の話を桐生は遮った。

本当は桐生にも分かっている。どんなに抵抗した所で、このゼロ戦ではあの巨大戦艦に敵わない事に。

しかし、だから諦めると言うのか。桐生の中に流れる信念が、諦める事を許さなかった。

巨大戦艦に近付きながら、桐生が二十ミリ機関砲弾を発射する。放たれた銃弾は戦艦の装甲に着弾するが、僅かな煙が上がるだけで大した被害では無いことを告げる。

今度のもつと近付いて、と桐生が更に距離を詰めようとした瞬間、戦艦の右舷側から強い光が放たれた。

一瞬の間の後、ゼロ戦の機体に幾つもの小さな穴が空き衝撃が操縦席を揺らした。

「まずい！ 散弾だ！ 下がれ、相棒！」

デルフリンガーの叫びに咄嗟に操縦桿を動かして下降し二撃目を回避する。

「ちっ！ これじゃあ近付けねえ！」

ギリツと歯を食い縛りながら桐生が悔しそうに叫ぶ。

そんな桐生とデルフリンガーの言葉も聞こえていないルイズは「始祖の祈祷書」の

ページを捲る指を止め、そのページに書かれている文章に指をなぞらせる。

「どうやらこの「始祖の祈祷書」は、始祖プリミルに選ばれし「虚無」の使い手が「四の系統の指輪」を嵌めた場合のみ文章が浮かび上がるらしい。

つまり、自分は選ばれたのか？ この文章を読めると言う事は、そういう事なのか？  
今まで自分が魔法を使った際、いつも爆発していた。それは、「虚無」の魔法だからではないのか。

思えば今までその爆発の理由は解明された事はなかった。誰も彼もが失敗したと笑い、馬鹿にするだけでその原因はわからなかったのだ。

もしかしたら自分は本当に読み手なのかもしれない。

ルイズは覚悟を決めて、そのページに書かれた「虚無」の初歩の初歩、「エクスプロージョン（爆発）」の呪文を口ずさむ。

まるでいつも交わす挨拶の様に、その呪文の調べは滑らかに舌が回る。

ルイズは独り頷くと、隙間を潜って桐生の座る操縦席へと出てきた。

「どうした、ルイズ!?! くっ、危ねえ!」

前に出てきたルイズの身体を抱き寄せ、半ば強引に自分の膝元へ座らせながら桐生は操縦桿を操って機体のバランスを整えた。

開かれた桐生の脚の間でちよこんと小さな尻を滑り込ませて座らされたルイズは、桐

生に顔を向けると真剣な表情で口を開いた。

「カズマ、このひこうきとやらをあの巨大戦艦に近付けなさい」  
「何？」

ルイズの言葉の真意がわからず首を傾げる桐生に、ルイズも自信無さげに首を傾げながら顔をしかめた。

「……もしかしたら、上手く行かないかもしれない。何かの間違いかもしれない。でも、今は手段なんて選んでられない。薬にもすがる思いだけど、試す価値はある。だからお願い、なんとかああの巨大戦艦に近付いて！」

ブツブツとまるで独り言の様に呟いた後、再び真剣な表情で言い放つルイズに桐生はしかめっ面を浮かべるが、直ぐ様頷いた。

「わかったぜ、ご主人様」

桐生は再び操縦桿を操って巨大戦艦に近付いた。

しかし、再び散弾を撃ち込まれてしまう。何とか避けたが、これでは左舷側も同じだろう。まるで針鼠の様に突き出た大砲が、ゼロ戦を狙っている。

「くそっ！ 何とか近付く方法は……！」

「相棒、真上だ」

忌々しそうに呟いた桐生にデルフリンガーが横から声をかける。

「あの巨大戦艦の真上なら大砲が届かねえ死角がある」

桐生はデルフリンガーの言う通りに上昇し、巨大戦艦「レキシントン」号の真上を占位する。

すると、ルイズが桐生の肩に捕まって風防を開いた。強烈な風が二人の顔を打ち付け、ルイズの桃色の髪が荒々しく靡く。

「何してんだ、ルイズ!？」

「私が合図するまで、ここにぐるぐる回ってなさい！」

強い風のうねりでかき消されそうな声を何とか叫んで伝えるルイズ。

桐生は仕方なしに言われたまま「レキシントン」号の真上を旋回しようとしたその時、デルフリンガーが叫んだ。

「相棒！ 後ろから何か来る！」

デルフリンガーの叫びに桐生が後ろを振り向くと、一騎の竜騎士が此方目掛けて迫ってくるのが見える。そして、竜の背に乗っているのは。

「ワルドー！」

桐生は叫ぶのと同時にルイズを無理矢理自分の胸元に抱き寄せて風防を閉めると、操縦桿を前に倒して急降下させた。



ワルドは不敵な笑みを浮かべながら急降下するゼロ戦を追い掛ける。

今回の作戦で重要な鍵を握るのは、この「レキシントン」号に他ならない。頭のいい敵は必ず「レキシントン」号の死角を見つけ出してやって来る筈だと踏んでいたワルドは、ずっと上空の雲の中に隠れていたのだ。

そして、獲物はまんまとやって来た。目の前を駆ける奇妙な竜は確かに速い。これでは火竜等相手にならないだろう。

だが、今自分が乗っているのは風竜だ。速度では火竜を遥かに凌ぐ。

風防からルイズの物であろう桃色の髪が見えた。ならばあの竜、いや、竜の様な物を操っているのは……。

ワルドの顔に自然と狂気に満ちた笑みが浮かんでくる。無くなつた左腕が疼き、胸の鼓動がまるで絶世の美女と一夜を共にする少年の様に興奮で高まる。

「今日ここで……貴様を必ず殺してやるぞ！ カズマアツ！」

左の義手で風竜の手綱を握りながら叫ぶと、ワルドは右手で杖を掲げながら呪文を詠唱する。

ゼロ戦の後ろにピタリとくつついてくる風竜に、桐生は更にスロットルを開いてフルブーストで空を駆ける。

当然ワルドもそれを追って風竜を駆けさせる。徐々にその距離は縮まって行つた。

「くそっ！ 流石に風竜相手じゃあ、スピードで負けちまうぜー！」

デルフリンガーが珍しく絶望した様に叫ぶ。が、桐生の表情はあくまで落ち着いていた。

「これでいい」

「はっ？」

「その調子だ。もっと近付いて来い、ワルド。獲物はお前の目の前だ。追い付いてみろ……！」

「あ、相棒？」

小さく呟く桐生にデルフリンガーが間拔けな声を上げる。ゼロ戦を必死に逃げる様に駆けさせる桐生に徐々に、徐々にワルドが近付いていく。

ワルドは「風」系統の魔法、「エア・スピア」の詠唱を完成させると目の前を駆けるゼロ戦に狙いを定めた。

「もう駄目だな……」

どこか諦めを含んだ声でデルフリンガーが呟いたのと同時に桐生が笑みを浮かべた瞬間、突然ゼロ戦は僅かに下降しながらその場に急停止した。正確には急停止した様に速度が落ちた、なのだが。

桐生がスロットルを最小にし、フルフラップにした桐生は僅かに操縦桿を左下に倒したのだ。

最高速度で駆けていたワルドの風竜はゼロ戦の頭上を飛んだ。

突然目の前から消えたゼロ戦をワルドはキョロキョロと辺りを見回して探すが見つからない。

不意に、後ろからの殺気を感じてワルドが振り返ると、ゼロ戦の機首が光ったのが見えた。

しまった、と思った瞬間には遅かった。機関銃が風竜の身体を貫き、ワルドも肩と背中を撃たれた。

ワルドの表情が苦痛に歪み、風竜の口から小さな悲鳴が漏れた。

そのままゆっくりとワルドを乗せた風竜は身体を回転させながら、地面に向かって墜落していった。

「いやあ、おどれえたぜ！ やるじゃねえか、相棒！」

「昔見た映画の真似事だったんだが、なんとか上手く行ったな」

デルフリンガーの歓喜に満ちた声に苦笑しながら再びゼロ戦を「レキシントン」号の真上に向かわせる桐生。

ルイズは再び風防を開いて顔を出す。強い風が桃色の髪を透く様に靡かせた。

二つ呪文を口にしたルイズの身体の中に、リズムが巡る。何処か懐かしさを感じさせるそのリズムは呪文を口にする度に強くなり、神経が研ぎ澄まされて周りの雑音が聞こえなくなる。

身体の中で何かが生まれては行き先を求めてさまよう感覚。以前授業で言われた自分に合う系統の呪文を唱えた時に感じると言われた感覚。今まで感じた事のない感覚を、ルイズは今正に感じていた。

凄まじい力を感じる。身体の中に大きな波が起き、それはやがて大きなうねりへと変わる。

ルイズが桐生に脚で合図を送ると、桐生は一度高くゼロ戦を上昇させてから急降下させた。

身体の中の波が、行き先を求めて強く暴れだす。ルイズは杖の先を下に見える「レキシントン」号に向ける。

長い詠唱が終わり、今から繰り出す魔法の威力がルイズの頭の中にイメージとして流れ込む。

破壊だ。圧倒的な破壊。求められる選択は二つ。殺すか、殺さぬか。

烈風が顔を打ち付ける中、徐々に近づく「レキシントン」号。

ルイズは己の中で選択を決めた後、自分と「レキシントン」号の間の空間目掛け杖を振った。

執拗な砲撃のせいで天井を失った要塞の中、アンリエッタは小さな太陽を見た。

それが太陽か何かはわからないが、真昼の明るさをも上回るその輝きは艦隊を包み込んでいくのを最後に、その眩しさから思わず目を瞑る。

砲撃が止んだのか、辺りが静まり返ったのでアンリエッタが恐る恐る目を開くと、頭上の艦隊が燃えていた。

先程まで猛威を振るっていたのが冗談の様に、燃える艦隊はゆっくりと地面へと墜落して、地響きを立てた。

その場にいる誰もが事態を飲み込めず暫し呆然としている中、マザリーニが空を駆けるゼロ戦の銀翼の輝きを見た。

マザリーニは口元を綻ばせると、杖を高く掲げて叫んだ。

「見よ、諸君！ 敵の艦隊は破られた！ 我等が将、アンリエッタ姫殿下の清いお心に惹かれ現れた、伝説のフェニックスによって！」

「フェニックス？ 不死鳥？」

マザリーニの言葉に動揺した兵や貴族達がざわめく。

「さよう！ 見やれ、天を駆ける銀翼の鳥を！ あれこそトリステインが危機に陥りし時、清き心を持つ王の元にだけ現れると言うフェニックスに他ならぬ！ アンリエッタ姫殿下の清きお心が我等を！ 我が国を救ったのだ！」

一瞬の静寂の後、マザリーニの演説に感動したその場の全員が歓喜の声を上げた。

「うおおおっ！ トリステイン万歳！ フェニックス万歳！ アンリエッタ姫殿下万歳！」

声は大きなうねりとなり、皆の顔が喜びに染まる中、アンリエッタが小声でマザリーニに問い掛ける。

「枢機卿、そのフェニックスとは……どんな伝説なのですか？ 私は聞いた事がありませんが」

「さあ、どんな伝説なんでしょうな？」

マザリーニには悪戯っぽく笑って見せながら、鳩が豆鉄砲を食らった様な顔をするアンリエッタに囁く。

「そんな話は嘘でございますよ、姫殿下。ですが今大事なのは、事の真相ではございません。この場にいる全員に希望を与える事です」

そしてマザリーニは真剣な表情でアンリエッタを見つめた。

「覚えておきなさい、殿下。嘘だろうが何だろうが、使える物は何でも使うのです。それ

が政治と戦の基本。貴女は今日からトリスティンの、我等の王なのですから」  
アンリエッタは強く頷いた。

「さあ、殿下……勝ちを拾いに行きましょう」

マザリーニの言葉にアンリエッタは水晶の杖を高々と掲げて叫んだ。

「これより敵の殲滅・捕縛に向けて攻め込みます！ 全軍突撃！ 我に続け！」

兵士達の雄叫びの中、アンリエッタを乗せたユニコーンが地上へ墜落した。「レキシントン」号を指して駆け出した。

ルイズは風防を閉じると、ぐったりして桐生に寄りかかった。そんなルイズを桐生が優しく抱き留める。

「ルイズ」

「……何？」

身体中が怠い。頭がぼんやりする。けれどもそれは不快な疲労感ではなかった。何かをやり遂げた達成感、満足感がルイズの胸を満たしていた。

「良く頑張ったな」

桐生の手がルイズの頭を優しく撫でる。桐生の感触と匂いが、ルイズの身体を心地よく包んだ。

夕方、夕日が草原を赤く染める中、シエスタ達タルブの村人が森から出てきた。トリステインがアルビオンに勝利し、戦争が終わったと言う話があつて恐る恐る出てきたのだ。

既に草原では立ち込める黒煙以外見当たらなかつた。

墜落した「レキシントン」号筆頭の艦隊の乗組員は幸い無傷な者が多く、トリステイン軍が攻めに来た際には殆どの者が潔く降伏した。

アンリエッタの計らいで殺されたアルビオンの地上部隊の兵達は全員馬車でトリステインへと運び、追つて葬儀が行われる事となつた。

村人全員が森から出て安堵すると、空から爆音が聞こえてシエスタが顔を上げた。見慣れた物が少し離れた草原に降りてくる。「竜の羽衣」だ。

「カズマさん……カズマさんっ！」

顔を輝かせながら、シエスタがゼロ戦に向かって走り出す。

ゼロ戦を無事不時着させた桐生はルイズを抱き抱えながら操縦席から降りると、ルイズを地面に座らせ少し大きな岩に凭れかけさせた。

「かなり疲れてるみたいだから少し休め」

「そうさせて、貰うわ」



力なく返したルイズは小さな溜め息を漏らす。不意に吹いた優しい風が火照った気怠い肌に心地好かった。

「カズマきーん！」

デルフリンガーをルイズの隣に置くと、背後から聞き慣れた声が聞こえて桐生が振り返る。

そこには此方に向かって走るシエスタの姿が見えた。元気そうに走るシエスタに桐生は安心して微笑みを浮かべる。

シエスタは桐生に駆け寄るや否や抱き着き、身体を震わせて大声で泣き出した。

「怖かった……怖かったよおっ！」

ぼろぼろと大粒の涙を零しながら嗚咽を漏らすシエスタを、桐生は優しく抱き締めながら頭を撫でる。

そんな二人をぼんやりとルイズが眺めていた。

なによ、私の事をもう少し労ってくれたって良いじゃない。そりやあの子が生きていたのは良かったけど、正面から抱き締めるなら私が先でしょうが。いや、背後からならいいって訳じゃないけど。あんたは私の使い魔なのよ。

口に出さずともうくと唸りながら顔をしかめるルイズの頭の中は、桐生でいっぱいだった。

自分が「虚無」の使い手なんだとか、これからどうするのかとかは完全に頭の中から消えていた。

そんなルイズの心境を知ってか知らずか、隣に立て掛けられたデルフリンガーが笑みを含んだ声で言う。

「良いのかよ、伝説の魔法使い？ 使い魔が取られちゃうぜ？」

「うっさいわね、伝説の剣。あんな奴別に……」

ルイズはそこまで言っただけで言葉を詰まらせる。どうして自分はこんなにも素直になれないのだろう。シエスタやキュルケが心底羨ましい。

「まあ、俺は相棒が誰とくつつこうが構わねえけどさ。ご主人様なら使い魔を魅了するぐらい出来ねえと駄目なんじゃねえの？」

デルフリンガーの言葉にカチンと来たルイズは弱々しく立ち上がり、ゆつくりと桐生に向かって歩き出した。

うっさいわね。私だって別にこんな奴の為にやきもきするのはいい加減うんざりなのよ。そりゃ、格好いいし、抱き締められると安心するし、見詰められるとドキドキするけど！ けど、別にあんたが好きだとか、そんなんじやなくて！ ただあんたは私の使い魔なのよ！ だからあんたは！

桐生の背後に近付いたルイズは、ぱふつと桐生に抱き着いた。

あんたは、私だけを見ていればいいの！

黒いロングコートの所々を血で赤黒く汚したレイヴンが南の森に入ると、既に二人の子供を他の村人の元へ戻しておいたオーガとウロボロスが出迎えた。

「ただいま」

レイヴンが明るい調子で言うと、ウロボロスが首を振って呆れた様に溜め息を漏らす。

「あんなはした金で仕事を請け負うとは……全くもって理解に苦しむな」

「良いじゃない、君達は別に働かなかったんだからさ」

ウロボロスの言葉に少しだけむっとした様に返すレイヴン。

「それよりも、見たか？」

そんな二人の会話を割ったのはオーガだった。

レイヴンはその言葉に頷く。

「さっきの光でしょ？ あれは「虚無」？」

「間違いない。「虚無」の初歩魔法、「エクスプロージョン」だ。」

レイヴンの問いかけに、オーガはどこか懐かしそうに答える。

「トリステインにも「虚無」の使い手が？」

「いや、トリステインかどうかはわからん。ゲルマニアからの応援による者かもしれん」  
「どっちでも良いでしょ、そんなの」

ウロボロスとオーガのやり取りに退屈そうに欠伸をしながらレイヴンが言う。

「トリステインだろうがゲルマニアだろうが……それこそ四つの国とエルフ達が束になった所で僕等には敵わないんだから。違う？」

レイヴンの言葉に、オーガとウロボロスが小さく頷く。

そのまま三人は森の奥へと向かって足を進め、やがて姿は見えなくなった。

## 第27話

タルブの草原での戦争から数日後。勝戦にトリスティンの城下町が賑わう中、魔法学園はいつもの様に学生達の変わらぬ日常が流れていた。魔法学園では朝食の際にオスマンから王軍の勝利を伝えられただけで、他には情報が生徒達に入ってくる事はない。

ハルケギニアでは貴族同士の戦争は、言わば年中行事なのだ。世間が知らないだけで、毎日の様にどこかで小競り合いが始まっては小さな戦争が起きる。その為始まった事には騒ぐも、済んでしまえば落ち着くのも早い。

そんな貴族達の常識には当てはまらない桐生は、ルイズが授業を受けている間に女子寮の庭でデルフリンガーを素振りしていた。

白い刃が空を裂いてビュンツと言う音を立てる。数時間に及ぶトレーニングで火照った身体の額から滲む汗が頬を伝い、顎を伝い、雫となって地面に落ちる。

「鬼気迫る物を感じるぜ、相棒」

振られていたデルフリンガーが呑気な調子で声を上げた。

「どうしたんでい？ あの戦の後から妙に気が張ってるじゃねえか。ちつとはリラックスしたらどうだい？」

「そもいかねえな。」

最後の一振りとはかりに力強くデルフリンガーを振るいながら言った桐生は身体から力を抜き、持ってきていたタオルで顔を拭う。

「どんな理由かは知らねえが、あの戦艦を沈めたのはルイズだ。今はまだ誰も知らないみたいだが、それに相手が気付けば必ずルイズを狙いに来る。魔法なんて物が使えるこの世界では、今の俺じゃあ駄目だ。もつと強くならなくちゃならねえ。」

「あの娘っ子を守る為にかい？」

「半分正解で、半分外れだ」

初夏の日差しが降り注ぐ中で顔を拭ったタオルを肩に掛け、女子寮の壁に抜き身のデルフリンガーを立て掛けて自分も壁に背中を凭れかけると拳を握った。

「ルイズだけじゃない。俺は、俺の周りにいる奴等を守る。自分の身体を張ってでもな。」

力強く宣言する桐生に、デルフリンガーは笑う様にカタカタと柄を揺らすとそのまま押し黙った。

初夏らしい涼しくも暑さを感じさせる風を感じながら桐生が溜め息を漏らすと、午前の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

そろそろ昼食の時間だが、流石に食事の場に汗臭いまま出るのは失礼と感じた桐生

は、デルフリンガーを鞆に納めて井戸へと足を運んだ。

ジャケツトとシャツを脱いで近くに置かれていた木箱に置くと、井戸の釣瓶を引いて頭から水を被る。バシヤバシヤと頭や身体に当たって弾ける水がズボンを濡らす。この気温なら直ぐに乾くだろうと高をくくって気にしない。

水に濡れた髪を手櫛で掻き分けていると、

「あつ……」

と言う声が背後から聞こえて振り返る。そこにはシエスタがバケツを持って立っていた。どうやら水を汲みに来たらしい。

あの日、竜騎士を全滅させ、巨大戦艦を撃沈させた桐生とルイズはタルブの村人総出でお祝いをされた。

その日は無事だった家に泊めて貰い、翌日に馬車で学園へシエスタと共に戻ってきたのだ。

シエスタが声を上げたのも無理がない。背格好から桐生だと分かりルンルン気分。近付くと、背中に彫られた荒々しい龍の刺青が目飛び込んで驚いたのだ。

「シエスタ……すまん、驚かせたな」

「い、いえ……大丈夫です」

申し訳なさそうに話ながら身体を此方に向けてタオルで頭を拭く桐生にシエスタは

首を振って見せた。

「それ、ドラゴンのタトゥーですか？」

シエスタが恐る恐るながらも興味津々と云った様子で問い掛けてくる。桐生は小さく笑いながら頷いた。

「まあ、そうだな。俺の国では刺青と言うんだが」

「あの……カズマさんが良ければ、なんですけど。もう少し、見せて貰えますか？」

意外なお願いに少し首を傾げてから、桐生はゆっくりと再びシエスタに背を向けた。

荒々しく、力強く天に昇ろうとしているかの様に身をくねらせ牙を剥いている姿はこの世界のドラゴンとは身体の作りが違う様に見える。黄色く鋭い爪に掴まれた玉に描かれているのは知らない文字だ。

シエスタは持っていたバケツを置いて、そつと応龍の刺青に手を這わせる。浴びた水のせいで湿り気を帯びた肌は熱く硬い。

「なんて言うか……このドラゴン、カズマさんに似ていますね」

「俺に？」

「はい。とても力強くて、怖いのにどこか優しさを感じます。まるで、そう……カズマさんみたい」

シエスタはトンと額を桐生の背中に当てて、伝わる温もりを感じながら囁く様に言っ



てからパツと離れた。

「ごめんなさい、馴れ馴れしかつたですよね？」

「いや、そんな事はないさ」

慌てた様に言うシエスタに微笑みながら言うと、桐生はシャツとジャケットを羽織つた。

「それじゃあ、またな」

「はい」

満面の笑みを浮かべて挨拶をしたシエスタはバケツの水を汲んで食堂へと向かう桐生を見送った。

桐生の背中に触れていた掌を眺めてから、シエスタはその手を握り締めて自身の胸元に当てた。

夜。夕食を終えて部屋に戻った桐生は椅子に腰掛けて晩酌のワインを呷っていた。ベッドではルイズが寝そべりながら手に持った「始祖の祈祷書」を眺めている。

ルイズは「始祖の祈祷書」をベッドに置くと目だけを動かして桐生に視線を移す。

開かれた窓の向こうに広がる夜空を眺めながらワインを呑む姿はなかなか様になっている。まるで小説の挿し絵の様だ。

夜空を肴にお酒なんて、意外とロマンチストなのね。

ルイズは心の中で一人呟くと、ベッドから立ち上がって棚からグラスを出して桐生の反対側の椅子に腰掛ける。

桐生が目の前にやって来たルイズに顔をしかめると、ルイズはスツと自分のグラスを桐生に差し出した。

「私にも注いでちょうだい」

ぶつきらぼうに言うルイズに苦笑してから、桐生は瓶を掴んでグラスにワインを注ぐ。

黒々とした赤い液体がルイズのグラスを満たしてから、自分のグラスにも注ぐと桐生はそのまま軽く掲げて見せた。

桐生の意図に気付いたルイズは小さな笑みを浮かべるとそのままグラスを同じ様に掲げ、カチンと小気味良い音を立てて乾杯が交わされた。

グラスに口をつけ、口の中に広がる渋味を秘めた心地好い苦味を味わってからルイズはグラスをテーブルに置き、窓の外で輝く星と二つの月を眺めた。

暫くの沈黙の後、ルイズは思わず溜め息を漏らしながら胸の中にある不安を桐生に話すべきかどうか迷っていた。

伝説の系統「虚無」。自分にあんな力が眠っていた実感が湧かない。授業では未だ四

大系統は失敗するが、今まで一度も成功した事がなかった簡単なコモン・マジックは成功する様になった。コモン・マジックは、自分にあつた系統に目覚めた途端に使える様になると言われている。やはり本当に自分は「虚無」の系統なのだろうか。

「不安か？」

不意に声をかけられていつの間にか俯いていたルイズがハツと顔を上げる。すると先程まで夜空を眺めていた桐生が此方を見つめていた。

「……うん。正直言つて、不安だわ」

心を見透かされた気がしたルイズは再び溜め息を漏らしてから桐生に相談することを決めた。

「未だに四大系統は失敗するのに、あんな巨大な光の玉を出せるなんて……やっぱり私は「虚無」の使い手みたい。正直少し嬉しかったわ。今まで自分が失敗してきたのは自身のせいじゃなくて、私が自分にあつた系統を使えていなかったせいだつてわかつたから。今までは単純に才能がないから、私は駄目だからって思っていたのにそれが間違いだつてわかつたから。でも……」

ルイズはそこで一呼吸置いてグラスの中に残つたワインを飲み干した。酔いで赤らんだ表情で溜め息を漏らしながら空になったグラスをテーブルに置いて俯く。

「不安なの。私が使つた「エクスポーション」は城下町では「奇跡」と言われている。で

もいつか、必ず王室の誰かが私の「虚無」に気付く。そうなったら、どうなっちゃうのかな？ 私は……やっぱり戦争の為に利用されちゃうのかな？」

ルイズの身体が小刻みに震え始める。閉じた瞳の闇の中で浮かぶのは、目の前で胸を貫かれたウェールズや桐生が撃ち落とした竜騎士達。

今まではただ眺めていた誰かの死が、今度は自分の手で誰かに死を与えなければならなくなるのかもしれない恐怖がルイズの中を駆け巡る。

そんなルイズの頭をポスツと乗せられた掌が優しく撫でる。クシヤクシヤと髪を掻き分けて撫でてくる感触は温かく、ルイズの中の恐怖や不安を溶かす様に安心を与えた。

ゆっくり顔を上げると、いつの間にか自分の隣に立っていた桐生が頭を撫でながら優しい瞳で此方を見つめていた。

「大丈夫だ、ルイズ。お前は俺が守る。何があってもな」

ルイズはその言葉と掌の感触の心地好さに目を細める。明確な約束もされていない言葉なのに、何故こんなにも信じる事が出来るのだろうか。

親よりも、もしかしたら自分が心から慕っている姉よりも、桐生は自分にとって甘えられる存在なのかもしれない。

甘えてばかりではいけないと言う思いはある物の、ルイズはまだ十代の少女。甘えた

いと言う願望は簡単に消える物ではない。

徐々にぼやけた視界の中で睨が下りていき、桐生に身体を預けたままルイズは眠りについた。

身体に走る苦痛から、ワルドは目を覚ました。視界に広がるのは見慣れない天井だ。自分の身体に巻かれた包帯を見てから、辺りを見回す。板張りの壁の粗末な部屋だ。木製の机が一つと、自分が横になつていっているベッド以外は何も無い。粗末に造られた窓からは日の光が差し込んで部屋を照らしている。

「俺は、一体……？」

痛む身体をベッドに預け、天井を眺めてながらワルドは記憶を掘り起こした。

タルブでの空中戦で、桐生が操る見慣れない竜の様な物に後ろから何かの魔法で身体を貫かれ、地面に向かって墜ちていく所から記憶がない。

無意識に左手が胸元に行くと、いつも着けているペンダントがない事に気付く。

首を動かして辺りを再度見回すと、机の上にペンダントがあるのが見えた。銀製のチェーンにロケットのついたシンプルな造りはすぐに自分の物だと判断出来る。

起き上がろうと痛む身体を動かしてベッドの端に腰掛け、立ち上がろうとした瞬間に脚に力が入らずそのまま派手に前のめりに倒れてしまう。硬い床に打ち付けられた痛

みと傷の痛みに顔が歪む。

「ちよつと！ あんた何やってんの!？」

女性の怒鳴り声に苦痛に歪む顔を上げると、そこにはフーケが立っていた。地面に這いつくばる此方を驚いた表情で見下しながら、盆に乗せられた湯気立つスープを机に置いて駆け寄る。

「まだまともに動けない癖に無理するんじゃないよ！ 弾に身体を貫かれて瀕死だったつてのに!」

「弾、だと？ 俺は、弾で撃たれたのか？ つっ!」

身体を抱きかかえられて肩を借りながらフーケの言葉に疑問を感じながらも、乱暴に寝かされた身体の痛みに思わず声を漏らした。

「もう少し優しく寝かせられんのか？ そんなんじや嫁に行けんぞ?」

身体から力を抜いて溜め息を漏らしながら悪態をつくワルドを無視して、フーケはワルドの身体を「レビテーション」で僅かに浮かせて上体を起こさせてから再びベッドに下ろした。

「それだけ口が回るなら大分良くなつたつて事でしょ？ ほら、スープだよ。食べて少し身体と心を落ち着かせな」

ベッドに腰掛けてフーケが持つてきたスープを一匙救うとワルドの口元に運んだ。

ワルドは少々訝しげな表情をしながらも素直に口を開いてスープを味わう。スープを全て飲みきったワルドは漸く人心地ついて身体をベッドに預けた。

「ここはどこだ？」

「アルビオンのロンディニウム郊外の寺院だよ。昔厄介になった事があってね。今回も口を聞いて使わせて貰ってるのさ。無事にここまで連れてきた私に感謝するんだね」

「アルビオンだと？ 侵攻作戦はどうなったんだ？」

「ああ、そっか。あんたは気を失ってたから知らないんだね。失敗も失敗、大失敗さ。艦隊、及び地上部隊は全滅。「勝利はこれ疑い無し」が聞いて呆れるよ」

呆れた様に手を広げて首を振って見せるフーケの言葉にワルドは顎に手をあてがって考え込んだ。

竜騎士は間違いなく桐生の操っていたあの竜もどきにやられたのだろう。地上部隊も恐らく桐生がやったのだと納得がいく。だが、艦隊はどうだ？ 確かに強力な弾を放つ竜もどきではあるが、あの弾丸程度で破れるとは思えない。

「アルビオンの敗北の原因は何だ？」

「……一応、二つだと噂は流れているよ」

ワルドの言葉にフーケは溜め息を漏らしながら腕を組んで顔をしかめて見せた。首を傾げるワルドにフーケは指を一つ立てて見せた。第一の理由と言うらしい。

「タルブの空に突然巨大な光の玉が現れたんだ。まるで小さな太陽の様なね。その光が止んだ途端に艦隊は全滅したよ。まるで爆発に巻き込まれた様に煙を上げながらね。世間ではトリステインのお姫様の起こした「奇跡」と言われてるよ。実際は謎だけどね」

フーケは空になった皿をつまらなそうに爪先でピンと弾いて見せながら呟いた。

不意にワルドの脳裏にルイズの顔が浮かび上がった。ルイズの中に秘められていた力を高く買っていたからこそ自分の手元に置いておこうと思った。

気絶してしまっていた為その光の玉とやらは見えなかったが、その光はやはりルイズの仕業なのだろうか。ルイズもまた「虚無」の使い手なのだろうか。

馬鹿な、とワルドは首を振った。クロムウエルの話によれば「虚無」の系統は生命を操るとの事だ。そんな艦隊を潰す様な巨大な光の玉なんて個人で扱えるとは思えない。

考え込んでいたワルドの目の前に二本の指を突き付けながら今度は真顔になったフーケがズイツと顔を近付ける。

「それともう一つ。「トライデント」が今回の戦争に介入した恐れがある」

「何だ?!? つー!」

予想外の情報にワルドが思わず声を荒げると、振動が身体に響いて痛みに顔をしかめる。

「まあ、こっちは誰かが見た訳じゃないからなんとも言えないけどね。ただ、艦隊にいた



人間からの信号の中に、「トライデント」に地上部隊が全滅させられたって言うのがあったらしいからね」

フーケは困惑した様に漏らした。

仮に「トライデント」がトリステインについたのが事実ならば、今回の戦争は生半かな物ではなくなってしまう。今回だつて数は圧倒的に此方が優位だつた筈だ。だから確実な勝利が約束されていた、筈だつた。

桐生の操つていた竜もどき、ルイズの秘められていた力の解放、「トライデント」の介入……あまりにも予想外な事が重なり過ぎる。

「そのペンダントを取つてくれ」

ワルドは落ち着かない様子で机の上に乗ったペンダントを指差した。

フーケは言われるままにペンダントを摘まんでワルドに手渡すと、すぐさま首に着けた。

「それ、大事な物なの？」

「別に……。身に付けてないと落ち着かないだけだ」

「ふくん……ずいぶん綺麗な人が入っているから？」

まるで猫の様な悪戯っぽい笑みを浮かべて言うフーケに、ワルドの顔に僅かながら赤みが差した。

「貴様……中を見たのか？」

「あんたを介抱してる時に首から落ちてたまたま開いちやつてね。まあ、お宝以外に覗きの趣味はないから安心して。で？　で？　誰なのよ、それ？　恋人？」

身を乗り出して好奇心を露にしながら問い掛けてくるフーケはまるで猫その物の様に見える。

一瞬その細く白い首を搔つ切つてやろうかと考えたがワルドはロケットを握り締めながら溜め息を漏らした。

「そんなんじゃない。俺の、母だ」

「母親？　あんた、意外とマザコンな所があるのね」

「好きに言え。もういないし、貴様には関係ない」

そう言つてムスツとした表情でそっぽを向いたワルドにフーケが両手を広げて首を振ると、扉がガチャリと開かれた。

扉から現れたのはクロムウエルと黒いローブで身を包んだシェフィールドだった。クロムウエルはワルドの顔を見るなりにつこりと笑みを浮かべる。その笑顔からは感情が読み取れず、まるで仮面の様だった。

「目が覚めたかね、子爵。無事で何よりだ」

人懐っこそうな笑顔を浮かべたままクロムウエルが言くと、ワルドは深々と頭を下げ

た。

「申し訳ありません、閣下。一度ならず二度もの失敗……何とお詫び申し上げれば良いか」

「気にする事はない、子爵。今回の敗戦、君に原因は何もない」

クロムウエルがチラリとシエフィールドに目配せさせると、シエフィールドは報告書らしい羊皮紙を捲りながら頷いた。

「報告によれば、突如空に現れた光の玉が膨れ上がり、我が艦隊を吹き飛ばしたとあります。更には、例の「トライデント」が地上部隊を全滅させたとも」

「つまり、敵に未知の魔法を使われた挙げ句、強大な力を持った化け物までも此方の敵になってしまった。これは大きな計算違いだ。強いて敗因を挙げるなら……敵の力量を見謝った我々指導部の問題だ。君達一介の兵に罪を擦り付けるつもりはない。しかし、君にはまだまだ働いて欲しい。今はゆっくりと療養して傷を癒し、再び余の杖として活躍してくれるかね、子爵？」

クロムウエルは優しい微笑みを浮かべながら手を差し出して見せると、ワルドはその手の甲に口付けた。

「必ずや」

「ありがとう、子爵」

クロムウエルがワールドから手を引つ込めると粗末な造りの窓から外を眺めた。

「しかしながら、その光の玉とやらが「虚無」かどうかを調べるのも必要だが、「トライデント」が敵についたとなると厄介この上ない。かつてメイジ三千人を葬ったあの力が我々に牙を向いてくるとなると手を打たねばならぬ」

「仰る通りです」

シエフィールドが報告書をペラペラと捲つて僅かに眉を潜めた。

「「トライデント」はその知名度故に存在その物の目撃情報自体は掴めますが、あの「オブリビオン」との戦い以来数年が経った今も拠点は愚かメンバーの素性も一切割れていません。更に出現する町や国にも関連性がなく、裏社会でも誰もその尻尾を掴めていない、まさに神出鬼没と言った状態の様です」

「彼等の目的はわからぬが、向かつてくるなら排除せねばなるまい。だがその前に、あのトリステイン軍を率いたのはアンリエッタ姫殿下だったと聞いている。箱入りのお姫様だと高をくくっていたがなかなかどうしてやるものだ」

「「トライデント」の話を重ね々しく話していたクロムウエルはアンリエッタの話になるとどこか楽しそうに話し始めた。

「彼女はトリステインで「聖女」として崇められ、しかも近々女王として即位するそうじゃないか。王とは国その物。王を手中に納めれば国を納めたも同然。そうなれば、

「始祖の祈祷書」も難なく我が手に納まろう。ならば成すべき事は一つだ」

クロムウエルがパチンと指を鳴らすと、廊下から蘇ったウエールズが部屋に入ってきて深々と跪いた。

「お呼びでしょうか、閣下」

まるで人形のような、感情を感じられない声で問い掛けてくるウエールズはどこか儂く見える。

クロムウエルは跪いたウエールズの肩を優しく掴みながら口を開いた。

「親愛なるウエールズ君。余は君の恋人である「聖女」を我がロンディニウムの城に招待しようと思う。しかし、道中何もなくては退屈だろう。君が迎えに行つてやれば彼女も喜んで来てくれる筈だ。任せられるかね？」

クロムウエルの言葉に顔を上げたウエールズは冷たい笑みを浮かべながら頷いた。

「御意に」

「結構。ではワルド君、ゆっくり療養してくれたまえ。「聖女」の迎えはウエールズ君に任せるとする。何か入り用ならミス・シエフィールドに遠慮なく言ってくれたまえ」

「閣下のお心遣いに感謝の言葉もありませぬ」

ワルドは再び深々と頭を垂れてからクロムウエルの隣で佇むシエフィールドを眺めた。

深く被ったローブのせいで表情が見えないが、覗く顎の細いラインにそれなりの美女である事が窺える。それにクロムウエルの秘書なだけでなく、事務処理の能力は高そうだ。特別強い魔力は感じられないが、恐らく何か特殊な力があるのだろう。ただの秘書にしてはクロムウエルの信頼が相当厚い事が何となく窺えた。

「ああ、そうそう。「土くれ」殿、道中我がアルビオン兵の道案内役、実に感謝しているよ。余の気持ちとして受け取ってくれたまえ」

クロムウエルがシエフィールドに頷いて見せると、ローブから取り出された小さな袋がフーケに手渡された。

持った重みに手に伝わるジャラツと言う感触から金貨なのが窺える。

「では、失礼するよ」

ワルドとフーケにニコツと笑いかけてから、クロムウエルはウエールズとシエフィールドを引き連れて部屋から出ていった。

フーケは手渡された金貨入りの袋を乱暴に机に放り投げるとらクロムウエル達が出ていった扉を忌々しそうに睨んだ。

「ふん、いけ好かない男だね。死んだ恋人を餌にして女を呼び出そうなんて……だから私は貴族が嫌いなんだ」

「あの男は貴族ではない。元は一介の司祭だ」

「ああ、そうだったね。なら、今日は記念日だね。貴族以外で貴族と同じくらい大っ嫌いな存在が生まれた事のね」

ワルドの指摘に苛立った様に派手に手を振りながら首を振ったフーケはワルドに視線を向ける。

するとワルドは左手を強く握り締め、肩をワナワナと震わせていた。

「どうかしたの?」

「死人に仕事を取られるなど……くそっ! こんな所で立ち止まっている場合ではないと言うのに! 「聖地」が、俺の目的が遠退いていく……!」

悔しそうに歯を食い縛りながら瞳を閉じて悲痛の想いを口にするワルドにフーケは小さく溜め息を漏らしてから、ワルドの頬を優しく撫でた。

「本当にそれを目指しているなら、焦りは禁物さ。時には立ち止まり、傷を癒すのも必要だよ」

フーケはベッドの端に腰掛けるとワルドの顎をクイツと上げて俯いていた顔を此方に向けさせると、唇を重ねながらゆっくりと押し倒した。

「何の、真似だ……?」

唇が離され解放された口でそう問い掛けるワルドに、フーケは優しく微笑んだ。

「私も焼きが回ったのかしらね? あんたみたいに何かの為に必死にもがいてる男を見

ると……放っておけないのよ」

傷だらけの身体に負担を掛けない様に気を遣いながらワルドの身体に覆い被さり、互いの吐息がかかるほどの距離で瞳を見つめてフーケが囁く。ローブ越しの乳房が包帯が巻かれたワルドの胸板に押し付けられる。

「貴様に、俺の何がわかる……?」

「さあ? これからわかるかもしれないし、一生わからないかもしれない。けどね、人の温もりを感じないまま生きられるほど、あんたが強くないのはわかるよ」

フーケのしなやかな指先がワルドの身体をなぞる様に這わされ、くすぐったさに身を振るワルドにクスクスと小さく妖艶な笑みが浮かぶ。

「勘違いしないでよ? 誰にでもこんな事する訳じゃない」

「……言ってる。」

ワルドはもう抵抗を止めてフーケに身体を預ける様に力を抜いた。フーケの指先が、ワルドの腹からズボンに向かって這わされていく。

「貴様こそ、勘違いするな」

「何を?」

不意に言葉を紡いだワルドに指の動きを止めて首を傾げるフーケ。

ワルドは躊躇う様に視線を少し泳がせてからフーケの瞳を見つめて口を開いた。



「俺も、女なら誰でも抱く訳じゃない」

悔しそうに言つて視線を反らしたワルドに、フーケはどこか楽しげに含み笑いをして見せた。

「なら、今だけはお互い甘え合おうじゃない。身体、痛くて上手く動けないでしょ？ 私  
がしてあげるから……」

ズボンのベルトに手をかけながら、フーケはワルドに深く口付けた。

## 第28話

初夏の日差しが本格的な夏のものに変わろうとする正午、アリエツタは自室で客を待っていた。

戴冠式を無事に終え、女王となつてからは国内外からの来客が格段に増えて一日中誰かしらに会つていなければならなくなつた。

様々な訴えや要求、おべんちやらを聞き分けながら玉座に腰掛けて威厳を保たなければならぬのは尋常ではない神経を使う。しかし、少しでも疲れや弱味を見せてしまつてはそこに付け入ろうとする輩があちこちにいる。「王」と呼ばれる者は常に厳格であり、揺るぎない存在でなければならぬ。たとえばそれが、齡十七歳の少女であろうとも。しかし、今回の来客はそんな女王の仮面を脱ぎ捨てて接する事の出来る相手だ。

部屋の外に控えている従者が来客の到着を告げると、アリエツタははやる気持ちを懸命に抑えながら通す様に伝えた。

開かれた扉から部屋に入ってきたのはルイズと桐生だ。扉が閉まるとルイズは恭しく頭を下げた。桐生はそんなルイズの隣で軽く会釈して見せる。

「ルイズ……ああ、ルイズ！」

アンリエッタは顔を綻ばせながらルイズに抱き着いた。ルイズは顔を上げないまま呟く。

「姫様……いえ、失礼致しました。今はもう陛下とお呼びしなればなりませんね」

「止めてちょうだい、ルイズ！ そんな他人行儀な呼び方、私は許しません！ 貴女は私から、最愛のお友達を奪うつもりなの？」

「ならば、いつもの様に姫様と呼ばせて頂きます。」

「是非、そうしてちょうだい。ああ、ルイズ……私こんなに素直に誰かに話せるなんて久しぶりよ。女王なんてなる物じゃないわ。退屈は二倍、窮屈は三倍、そして気苦労は十倍！ 鳥籠の中の鳥には、こんなささやかな素直になれる時間が唯一の希望なの」

アンリエッタはつまらなそうに言う、寂しげな笑みを見せた。

ふと、アンリエッタの姿が一瞬桐生には堂島大吾と重なった。最後は自らの意志とは言え、自分の押し付けがましい想いで東条会と言う強大な組織の頂点に君臨したあの若きカリスマも同じ思いをしているのだろうか。

桐生には心の何処かで覚悟している。いつかあの大吾が道を外れるその時が来たら、再び自分の拳で目を覚まさせて見せると。

桐生が一人考え事をしている中、ルイズは黙ってアンリエッタの言葉を待った。アンリエッタからの使者が魔法学園にやってきたのは午前の授業の始まりであった。二人

は教師に事情を話して授業を休み、アンリエッタが用意した馬車に乗り込んでやって来たのだ。

アンリエッタがわざわざ自分を呼び出した理由。やはり、「虚無」の事なのだろうか。なかなか話し出さないアンリエッタが気になったが、此方から質問するのは何故か憚れた。

「姫様。この度の勝戦のお祝いを、言上させて下さいまし」

此方の瞳を覗き込んだまま黙り込むアンリエッタに痺れを切らしたルイズがなるべく当たり障りのない話題で口火を切ると、アンリエッタはそつとルイズの手を握りながら口を開いた。

「あの勝利は貴女の……いえ、貴女達のお陰だものね、ルイズ。そして、使い魔さん」

アンリエッタが微笑みながら言うのとルイズの顔がハツとなり、桐生の眉が僅かにつり上がった。

「私に隠し事はしなくても結構よ、ルイズ？」

「わ、私、何の事だか……」

アンリエッタの言葉に思わず声を震わせてしまうもルイズは尚もとぼけようとした。

そんなルイズにアンリエッタは優しく微笑むと、机から報告書の羊皮紙を手渡した。それを読んだルイズは溜め息を漏らしながら肩を落として見せた。

「……までお調べとは……流石ですわ、姫様」

「あれだけ派手な戦果をあげておいて、隠し通すのは無理と言う物よ」

そう言つてアンリエッタは桐生の方へと顔を向けて歩み寄つた。

桐生はアンリエッタの瞳を真つ直ぐ見返しながら組んでいた腕を下ろした。

「以前はアルビオンへの危険な旅からルイズを守り、今回は異国の飛行機とやらを操り敵の竜騎士隊を全滅させた……改めて、厚くお礼を申し上げますわ」

「俺はシエスタを、世話になつたあの村を救いたかつただけだ。礼を言われる様な事はしてないさ」

桐生が首を振つて見せると、アンリエッタは小さく笑つた。

「貴方にとってはそうかもしれませんが、貴方は救国の英雄です。出来たら貴方を貴族にして差し上げたい所なのですけれども……」

アンリエッタはそこで俯き言葉を詰まらせた。

何時だったか、キユルケが言つていた言葉を思い出す。トリスティンではメイジでない者は貴族になる事は出来ない筈だ。

「褒美や肩書きが欲しくて、あの戦いに参加した訳じゃない。余計な気遣いは無用だ」

首を振る桐生に少し驚いた表情で顔を上げたアンリエッタは少し考え込む様に黙り込むと頷き、桐生から離れて二人を交互に見詰めた。

「多大な……本当に大きな戦果ですわ、ルイズ・フランスワーズ。貴女と、貴女の使い魔が成し遂げた戦果はハルケギニアの歴史に載る程の物です。本来なら、貴女には領地どころか小国を与え、大公の位を与えても良いくらいです」

「い、いえ、私は何も……。手柄を立てたのはカズマですし……」

アンリエッタの誉め言葉に顔を赤らめながらモジモジするルイズに苦笑しながら桐生が優しく頭を撫でてやる。

そんなルイズに優しい微笑みを浮かべながらアンリエッタは首を振る。

「あの光は貴女の力なのでしょう、ルイズ？ 城下では奇跡の光と噂されていますが、私は奇跡なんて信じません。あの光が拡がる中、貴女達が乗った飛行機とやらが飛んでいた。私はね、ルイズ……あの光は貴女の力だと思えないの」

ルイズは自分を見つめるアンリエッタの瞳にそれ以上隠し事が出来ないのを悟った。

不安そうに此方を見上げるルイズに、桐生は好きにする様に頷いて見せた。

ルイズは少し躊躇いがちに口を開いて「始祖の祈祷書」の事を話し出した。桐生と言うパートナーがいるとは言え、少しでも相談出来る相手が欲しかったのだ。「水のルビー」に「始祖の祈祷書」反応して文字が浮かび上がった事、その文字を読み上げたらあの光が発生した事。

アンリエッタはルイズを見つめながら黙って話を聞いていた。

「始祖の祈祷書」には「虚無」の系統と書かれていました。姫様……それは本当なのでしようか？」

アンリエッタは瞳を閉じて首を振ってからルイズの肩にそつと手を置いた。

「ご存知、ルイズ？ 始祖ブリミルは三人の弟子達に王家を作らせ、それぞれに秘宝を遺したのです。トリステインに伝わるのが貴女の嵌めている「水のルビー」、そして「始祖の祈祷書」

「はい、存じております」

「王家の間の言い伝えにこう伝えられています。始祖の力を受け継ぐ者は、王家に現れると」

「しかし……私は王族ではありませんわ。」

「何を仰るの、ルイズ。ラ・ヴアリエール公爵家の祖は王の庶子。なればこそその公爵家ではありませんか」

ルイズは思わず息を飲みながら背筋に緊張を走らせた。

「貴女の身体には王家の血が流れているのです。資格は十分な筈よ」

そしてアンリエッタは桐生の左手を取ると、手の甲に刻まれたルーンを指で撫でながら眺めた。

「この印は、「ガンダールヴ」の印ですね？ 始祖ブリミルが用いた三つ柱の使い魔の一

柱、呪文の詠唱時間を稼ぐ為だけに生まれた使い魔の印」

桐生は頷きながらオスマンから聞いた話を思い出した。

「では……私はやはり、「虚無」の担い手なのですか？」

「そう考えるのが正しいでしょう」

ルイズは溜め息をつきながら肩を落とした。今まで才能がないだの無能だのと言われてきたと思ったら、今度は伝説の魔法を扱えると来た。あまりにも唐突過ぎて思考は追い付かず、何処からかどつと疲れが出たのを感じた。

「これで私が貴女に勲章は恩賞を授ける事が出来ない理由がわかったわね、ルイズ？」

桐生はルイズの代わりに頷いて後を引き取った。

「なるほどな。今ルイズの功績をお姫様が認めちまえば、あの光がルイズの力である事を国内外に伝える事になっちまう。そうなれば敵の目的は当然、ルイズって事になる」

ルイズがごくりと生唾を飲み込むとアンリエッタは真剣な表情で頷いた。

「その通りです。あの光がルイズの力である事がわかれば、敵はルイズを奪うか、始末する為に躍起になるでしょう。敵の目的になるのは女王である私一人で十分です。それに……」

アンリエッタは急に言葉を途切らせると辺りを訝しげに見回してから溜め息を漏らした。



「敵は空の上だけとは限りません。地の底にも潜み好機を伺っている可能性もあります。貴女その力を知れば、私欲の為に寄ってくる者もいるでしょう」

ルイズは強張った表情で頷きながら思わず桐生の手を握った。桐生はそんなルイズの手を優しく握り返す。

「だからルイズ、その力の事は早く忘れなさい。ここで話した事は、私達だけの秘密です」

アンリエッタは口元に指を立てて見せた。

ルイズは桐生から手を離すと、暫く俯いた後に顔を上げてアンリエッタの顔を真っ直ぐ見つめた。

「恐れながら、私はこの「虚無」を姫様に捧げたいと思います」

その言葉に桐生の表情が険しくなるのを感じたが、懸命にルイズは知らん振りをしてアンリエッタを見つめ続けた。

アンリエッタはそんなルイズに首を振った。

「いえ……良いのです、ルイズ。貴女は一刻も早くその力の事を忘れなさい。そして二度と使ってはなりません」

アンリエッタが窓の外へと視線を向けると、ルイズは一歩前に出て跪き頭を垂れた。

「以前母が申しておりました。過ぎ足る力は人を狂わせる。」「虚無」等と言う強大な力

を持った私がそうならぬ保証はありません。その為にも、私に鎖を与えて欲しいのです」

ルイズは顔を上げると、決意を固めた表情を浮かべていた。その顔は凜々しく、しかしどこか危なげに見える。

「私は幼少の頃から、この身を姫様に、この国に捧げたいと思い、そう教育もされてきました。しかし、私には才能と言う武器がありませんでした。それ故についた二つ名は「ゼロ」。嘲りと侮蔑の中、いつも齒痒い思いに身体を震わせていました」

ルイズは悔しそうに顔を歪めて言ってから、キツと表情を険しくさせた。

「しかし、そんな私に始祖プリミルは力を与えてくださいました。私は、私の信じる物の為にこの力を使おうと思います。それでも姫様……いえ、陛下がこの力をいらぬと言うのならば、私は杖を陛下に返さなければなりません。どうか私に、姫様と言う名の鎖を！ トリストインと言う名の鎖を与えて下さい！」

叫ぶ様なルイズの言葉にアンリエツタは背を向けて、手で目元を拭った。ルイズの口上に感動したらしい。

「お前にその重みが耐えられんのか？」

先程からあまり喋らなかつた桐生の怒気を含んだ言葉にルイズとアンリエツタの身体が強張った。

ルイズは立ち上がって桐生へと身体を向ける。そこには案の定と言うか、真剣に怒った時の表情を浮かべた桐生が腕を組んで此方を見つめていた。

「お前が今口にした言葉……その重みがどれ程の物か、わかかって言ってるのか、ルイズ？」

ルイズはその言葉から発せられる怒気と圧力に思わず後退りそうになるのを必死に堪えながら桐生の瞳を見つめ続ける。

「お前が今自分から着けようとしている鎖は、大人になれば誰でも嫌でも着ける事になる。その鎖は多くの物を失わせる。自分の大事な物も、人も、想いすらも」

桐生の言葉が耳を抜け、脳へと導かれた瞬間ルイズは一瞬見た。両腕に、両足に、首に黒く重々しい鎖が絡まった自分の姿を。

思わず周りを確認して今のが幻だったのかを確認するルイズ。今の黒く、重々しく、冷たそうな鎖が桐生の言う鎖なのだろうか。

「その鎖の重さは生半可な物じゃねえ。その重さに、次々と大事な物を奪われても耐える覚悟がお前にあるのか？」

重々しく、はぐらかし等一切許されない言葉で問い掛けてくる桐生。

今の桐生に生半可な覚悟を表しても伝わらないのはルイズもわかっている。だからこそ飾らない、ありのままの想いをぶつける為にルイズは深呼吸をしてから口を開い

た。

「覚悟ならあるわ。後悔はするかもしれない。辛い思いも、想像以上に待つてるかもしれない。それでも……私は私の信じた道を行くわ！」

きつぱりと言いつつルイズの言葉に迷いはなかった。

桐生は正直、ルイズを甘く見ていた。単なる思い付きでアンリエッタの役に立とうと思つていてと思つていたが、言葉とその瞳から伝わる迷いの無さはまごう事なき本物だった。

桐生は暫くルイズを見つめ黙つていたが、やがて小さな溜め息を漏らして首を振つた。

「なら、もう何も言わねえ。お前はお前の信じた道を行け」

桐生の言葉にルイズは力強く頷くと、アンリエッタに再び向き直つた。

いつの間にか此方を向いていたアンリエッタはそんなルイズに笑顔を見せた。

「ありがとう、ルイズ。やはり貴女は何時までも私の一番のお友達。ラグドリ안의湖畔でも、貴女は私を助けてくれたわね。私の身代わりに、ベッドに入ってくれて……多くの物が時と言う荒波に飲まれ、削られ、形を変えていく中、貴女は変わらずにいてくれるのね」

「姫様！」

ルイズはアンリエッタに駆け寄ると、お互いを強く抱き締め合った。

そんなルイズとアンリエッタを見ながら、桐生は複雑な想いに頭を悩まされていた。ルイズがアンリエッタの手伝いをすると言う事は、簡単に東へ旅する事が出来なくなっ  
てしまった。

この世界の居心地は悪くない。新しい仲間、新しい出会い、新しい知識は桐生の心を高ぶらせ、本当に楽しいと感じられる。しかし同時に、早く遥達の元へと帰りたいと思う自分があるのも事実だった。

ひとしきり抱き合った二人はゆっくりと身体を離れた。

「お願い、ルイズ。私の力になってくれるのなら、これだけは約束して。決して「虚無」の使い手である事を口外しない事。また、みだりにその力を使わない事」

「かしこまりました」

「始祖の祈祷書」は貴女に授けます。それと後日、貴女には正式な王室からの許可証を贈らせて貰います。警察権を含む公的機関の使用と、国内外への通行を可能にさせる物です。自由がなければ、仕事もしにくいでしょうから」

ルイズは恭しく頭を下げた。その許可証が届いた暁には、ルイズは女王の権利を行使する許可を与えられた立場になる。

「ただいまをもって貴女は私直属の女官です。貴女にしか解決出来ない事件が持ち上

がっただら必ず相談させて貰います。表向きは普段通り、魔法学園の生徒として過ごして下さい」

それからアンリエッタは腕を組んだまま此方を見守っている桐生へと顔を向けると、身体中のポケットを漁って金銀宝石を取り出して桐生の手握らせた。

「これからもルイズを……私の一番のお友達を宜しくお願ひします、優しい使い魔さん」  
「言われるまでもねえし、こんな高価な物を受け取る気もない。俺はこいつの使い魔だ。見返りが欲しくてこいつを守ってる訳じゃねえ」

手に握らされた金銀宝石を返そうとするも、アンリエッタはその手を握りながら首を振った。

「わかっています。貴方が私欲の為にルイズの側にいたとしたら、ルイズは間違いなく貴方から離れている筈です。ですから、これはそれに対する報酬ではありません。大切なお友達を救い、この国を救って下さった貴方への、私からの気持ちです。どうか受け取って下さい」

アンリエッタの真摯な瞳が桐生の眼を見つめた。その眼を見ていると、受け取らなくてはならない気がしてしまう。

帰る手掛かりを探せるのはまだ先だろうなど思いながら、桐生はアンリエッタに礼を述べて金銀宝石をポケットにしまいこんだ。

桐生とルイズが並んで王宮を出ると、ブルドンネ街の活気が出迎えた。街は勝戦祝いで未だに賑わい、酔っぱらった一団がワインやエールの入ったグラスを高々と掲げて乾杯を繰り返していた。

「ルイズ、学園から出てから何も食べてないだろう。少し遅めになったが、帰る前に昼飯でも食べていかないか？」

「そうね、確かに少しお腹が空いたわ」

桐生の提案に頷きながらルイズは自分の腹を押さえた。

魔法学園にアンリエッタの使いが呼び出しに来てそのまま此方に来てしまった為、二人は昼食を食べるタイミングを逃してしまったのだ。

行き交う人々の中のブルドンネ街の大通りはやはり狭い。桐生はルイズの手を握ろうと触れると、ルイズがパツと手を引っ込めた。

「き、急にどうしたのよ!？」

真つ赤な顔で怒鳴るルイズに桐生は首を傾げて見せる。

「こんなに行き交ってちゃはぐれちまうだろう？ だから手を繋いだ方が良かったら？」

「ば、馬鹿にしないでよ！ 私はもう子供じゃないわ！」

桐生の提案に怒鳴り声で返したルイズはそっぽを向くとそのまま歩き出してしまった。桐生が頭を掻きながら何故ルイズが怒ってるのかと疑問に顔を歪ませるとそれに続く。

ズンズン進んだルイズの肩に誰かの背中が強くぶつかった。

「いつてえな！」

ぶつかった痛みに声を上げながら振り返ったのは三十代くらいの男だ。どうやら傭兵崩れらしい。手に持ったワインの瓶をグビグビラッパ飲みしている。相当酔っているらしく、身体からは酒臭い臭いが漂っている。

ルイズはその臭いに不快そうに眉をひそめながら無視して歩こうとすると、男がその細い腕を掴んできた。

「待ちなよ、お嬢ちゃん。人にぶつかって挨拶もなく行くつてえのかい？ そんな法はねえぞ」

「おいおい、そのお嬢ちゃん貴族だぜ？」

傭兵崩れの仲間らしい男がルイズのマントに気付いて言う。

しかし、腕を掴んだ男は動じない。

「今はタルブの勝戦祝いの真つ最中だ！ 無礼講だ！ 貴族も平民もありやしねえ！ ほら、お嬢ちゃん。ぶつかった詫びに、俺に一杯注いでくんな」



グイツとワインの瓶を突き出して来た男をルイズはキツと睨み付ける。そんなルイズの態度に、男の表情が凶悪に変わった。

「んだあ、その眼は!? このクソガキ、俺には注げねえってのか! 誰のお陰でタルブでの戦争に勝てたと思つてやがんでえ! 「聖女」でもてめえ等貴族でもねえ! 俺達兵隊だ! 高みの見物しかしなかつた貴族が、偉そうにしてんじやねえ!」

仲間から口笛や歓声が上がると、男がルイズの髪を掴もうと手を伸ばすも、その指が桃色の髪に触れる事はなかつた。

横から手首を掴んだ桐生の手が、ゆっくり男の手をルイズの髪から離させた。

「んだあ、てめえは!」

「そいつは俺の連れだ。汚ねえ手で触んじやねえ」

桐生の登場に仲間の男達も表情を一瞬変えたが、此方に向けられる鋭い眼光に一瞬息を飲む。

桐生は男からワインの瓶を奪い取ると、小さく振つて見せた。

「そんなにこいつが呑みてえなら俺が呑ましてやる。遠慮すんな。良く味わえる様に瓶ごと呑ましてやるよ」

静かな声で凄みを利かせる桐生に男は言葉を詰まらせ視線を逸らした。長年戦場を生き抜いてきた経験が桐生との力の差を本能的に思い知らせてくる。例え仲間と束に

なつてかかった所で勝てないだろう。

男は桐生の手を振り解くと、仲間を促し去っていった。

桐生はつまらなそうに溜め息を漏らしながら近くにあつた木箱にワインの瓶を置くと、気が動転しているルイズに顔を向けた。

「だから言つただろう。手を繋いだ方が良いつて」

桐生の言葉に何も言い返せないルイズは小さく俯いた。

少し下を向いた視線の中に、差し出された見慣れた手が入つてきてルイズは顔を上げる。そこには、優しく笑う桐生の顔があつた。

「今度はちゃんと握れよ?」

「……………ん」

ルイズは小さく頷いて桐生の手を握る。

人混みを掻き分けながら歩く桐生について歩きながら、自分の手をしっかりと握つてくる温もりに思わず頬が熱くなる。

子供扱いされたのに腹を立てて迷惑をかけるなんて、やはり自分はまだまだ子供なんだとルイズは内心バツが悪そうにした。

しかし、桐生と共に歩いていくうちに、周りの活気や華やかな雰囲気やルイズの沈んだ心をウキウキとさせた。

周りに立ち並ぶ珍しい品々を取り揃えた露店は、地方領主の娘であるルイズには初めて見る物だった。

「あつ」

辺りを見回していたルイズは一軒の店に目が行って歩く足を止めた。

思わず突然止まったルイズを引っ張りそうになった桐生も歩く足を止めて、ルイズの視線の先に目を向ける。

「どうやらルイズは宝石商に目を止めたらしい。立てられたラシヤの布に指輪やネックレスが並んでいた。」

「見ていくか、ルイズ?」

桐生の言葉にルイズは瞳をキラキラと輝かせながら頷いた。

二人が近付くと、ターバンを頭に巻いた商人が厭らしい顔で揉み手をして見せた。

「いらつしやいいらつしやい! どうですか貴族のお嬢さん。珍しい石が集まっていますよ。どれもこれも「鍊金」で作った紛い物じゃございません。真正銘、天然の石ですよ」

並んだアクセサリーの多くは、ゴテゴテと飾られたどこか下品さを感じさせる物だ。しかし、そんな中でもシンプルな作りだったり、高級感が出ている物もある。

ルイズは並べられたアクセサリーの中でペンダントを手を取った。小さな銀細工に

二センチ程の六角柱に削られた翡翠色の石が嵌め込まれている。石の色がルイズの瞳の鳶色を連想させる。

「お嬢さん、お目が高い。その石は加工が難しい石で、そんなに上手く形を削り出せたのは珍しいんですよ」

日の光を浴びて輝く翡翠色の宝石にルイズはもう虜になってしまったらしい。掌に乗せては、可愛らしい指先で宝石を撫でている。

「欲しいのか？」

その声をかけた桐生に、ルイズは困った様に首を振った。

「お金がないから、いいわ」

「それでしたらお安くしますよ。四エキューにしときます」

「……全然安くはないじゃない」

安くすると言う商人の言葉に一瞬輝いたルイズの表情はゆっくりと沈んで悔しそうに言葉が口から出てきた。

「お前、小遣いはないのか？」

桐生がそう尋ねると、ルイズはつまらなそうに唇を尖らせて頷いた。

「あんたの剣を買う時に、今季のお小遣いを全部使っちゃったのよ」

ルイズはそう言ってペンダントをラシヤの布に戻した。が、視線はずっとそのペンダ

ントに釘付けだ。よほど気に入ったのだろう。

桐生はおもむろにポケットの中から先程アンリエッタから貰った一円玉程の大きさの金貨を取り出すと、ペンダントを手に取りながら金貨を商人に差し出した。

「これで何枚必要だ？」

商人は桐生の顔と手に握られた金貨を交互に見ながら呆気に取られた表情を浮かべた。桐生が想像以上に金を持っていて驚いたのである。

「こ、こんなには頂けませんよ！ ひい、ふう、みい……と、これで結構です。」

先々王の顔が描かれた金貨を四枚取った商人が満足げに言った。

「ルイズ、ちよつと後ろを向け」

「えっ？」

「着けてやる」

桐生の行動に呆気に取られていたルイズは声をかけられて慌てて後ろを振り向いた。

桐生の手が自分の桃色の髪を少し掻き分ける様に弄る感触がくすぐったいが、ルイズの頬はそのくすぐったさとは違う理由で緩んでいた。桐生からの初めてのプレゼント。それだけでルイズは嬉しくて堪らない。

ホック式の留め金が首の後ろで留められると、ルイズは桐生に振り返った。五芒星のループタイと重なる様にペンダントが首から下げられていた為、桐生がループタイを少

しだけ下にずらしてあげた。

「……ど、どうかしら？」

期待と不安が入り交じった表情で尋ねるルイズ。そんなルイズに桐生は微笑みながら頷いた。

「似合ってるぜ、ルイズ」

桐生の言葉にルイズは思わず一瞬思いつきり頬を緩めた。

しかし、すぐにハツとして桐生の手を掴むと引つ張りながら歩き出した。

「お、おい、どうしたんだよ、ルイズ？」

「う、煩いわね！ す、すっごくお腹が空いたの！ 早くお昼ご飯にするわよ！」

「わ、わかった、わかったから引つ張らないでくれよ」

懇願する様に言う桐生を無視して、ルイズはズンズン進む。

今は桐生と並んで歩けない。並んで歩いたら、今のどうしようもなく緩んでしまっている顔が見られてしまう。そんな恥ずかしい姿を見せたくない。

しかし、喜びに緩んだ頬の筋肉はどう頑張っても中々元に戻ってくれず、ルイズは桐生を引つ張りながら嬉しくて堪らない笑顔を浮かべ続けた。

## 第29話

とある虚無の曜日、の昼過ぎの事。その日、モンモランシーの機嫌は悪かった。機嫌自体はここ最近ずっと悪かったが、今日は特に悪かった。

不機嫌の原因はギーシュだ。あのルイズの使い魔と決闘をして敗れた日から暫くして、ギーシュは他の女の子に声をかけなくなつた。噂では、自分と別れたのを良い事に声をかけてきた女の子に対しては丁重にお引き取り願つたそうだ。今までのギーシュならこれ幸いとばかりに食い付いた筈なのに。

それは自分に対してもそうだった。あの日、確かケティと言つたか。あの一つ下の学年の女の子との二股がわかつた日から、ギーシュは自分に近付いて来なくなつた。なんだかんだギーシュとの付き合ひは長く、あの時の様に誰かに手を出しては自分にバレて、別れる別れないを繰り返してきた。大概ギーシュは愛の言葉とかプレゼントを片手に必死に自分に謝つてきて、そんなギーシュの態度に満更じゃなくなつては寄りを戻して来たが今回は違う。

少し大袈裟な言い方かもしれないが、最近のギーシュは女の子その物に興味が無くなつてしまつたのではないかと思うくらいに女の影がない。あるのは大抵ルイズの使

い魔と何か話していたとか、他の男友達と軽く馬鹿をやったとか、そんな程度の話ばかり。

実はモンモランシーは昨夜、ギーシュのもとを訪れたのだがその時の事を思い出して小さな溜め息を漏らした。

二つの月が照らす夜、モンモランシーは男子寮のギーシュの部屋の前に来ていた。

本来なら男子寮に女子が来るのは校則違反に当たるのだが、今のモンモランシーにとっては校則よりもギーシュの事の方が気掛かりだった。

軽く扉をノックすると、開いているよとの声が聞こえて扉を開いた。すると僅かに漂う汗の臭いにモンモランシーは眉を少しひそめた。

部屋の中では上着を脱いだギーシュが何やらトレーニングに勤しんでいた。床に横になつて膝を曲げ、状態を起こしては寝るのを繰り返す、所謂腹筋をしている所だった。晒された上半身は汗に濡れて、部屋を照らす蠟燭の灯りが小さく反射している。

「……やあ、モンモランシー。君が来てくれるなんて珍しいね」

ゆっくり曲げていた脚を伸ばしながら荒い呼吸を漏らしてモンモランシーに顔を向けると、ギーシュはそう言いながら立ち上がりベッドの縁に置いてあったタオルを取って顔を拭いた。



モンモランシーは取り敢えず部屋の中に入って扉を閉めるとまるで勝手知ったる我が家の様に窓際の机に向かって椅子に腰掛ける。

「何か飲むかい？　ワインと水くらいしかないけど」

「別に良いわ。それよりもレデイが部屋に入ってきたのだから、早く服を着てちょうだい」

モンモランシーの指摘にギーシユは申し訳なさそうに頬を掻きながら水の入った瓶に口つけラツパ飲みすると、身体の汗をタオルで拭いてからシャツを着込んだ。

白そこでふと、モンモランシーは首を傾げた。

ギーシユの着たシャツが妙に小さく見えるのだ。生地が肌に張り付いて、無理矢理着ている様にも見える。自分の知っているギーシユは女の子みたいにほっそりとしていて、どちらかと言うともう少しゆとりを感じさせる服の着方をしていた筈なのだが。

「ギーシユ……貴方、太った？」

「うーん、どうだろうね？　でも確かに最近服はキツく感じる様になったかな？　今度実家からもう少し大きめの服を送って貰おうとは思ってるんだ」

少しパツンパツンになっている服の襟を指先で軽く擦りながら苦笑して見せたギーシユはモンモランシーの向かいの椅子に腰掛ける。

窓際の机一枚の間で腰掛ける二人。付き合いたての頃、ここでよく愛の言葉を交わし

たのをモンモランシーは思い出した。大袈裟で情熱的な愛の言葉に心地好さを感じていたあの頃とはもう違う。ギーシユの軟派な性格がわかってから、ただその言葉を信じてと言う事は無くなった。

「それで、どうかしたのかい？ 君から僕のもとに来てくれるなんて珍しいじゃないか。てつきりもう、僕の顔は見たくないのかと思つていたよ」

自業自得を自覚して苦笑しながら言うギーシユ。

そんなギーシユにモンモランシーは窓の外に顔を向けながら、視線だけをギーシユに向けて口を開いた。

「この間、言い寄つてきた女の子を振つたそうね？」

「……ああ、そんな事もあつたね」

「私が貴方を訪ねるより珍しいじゃない？ てつきりすぐにでもその子とどこか出掛けるかと思つただけど？」

モンモランシーが皮肉を込めて言うと、ギーシユは少し虚空を眺めてから首を振つた。

「まあ、彼女には悪いとは思つたけど、今はそう言う事にはあんまり興味がないつて言うか、ね」

「そう言う事？ 女の子と遊ぶ事がつて事？」

「うん。僕は今、強くなりたいたいから。……カズマみたかね」

カズマ。あの使い魔の名前が出てきてモンモランシーは溜め息をつく。

何時だったか、ギーシュがあまりにもあの使い魔にべったりだったせいで良からぬ噂が立った事があった。あの二人はデキているだとか、あの使い魔にギーシュが頼っているだとか。噂や人の目を敏感に感じて気にするタイプのギーシュだ。その事に気付いていない筈がないと思うのだが。

「あんな平民に憧れるなんて……それでも貴方、貴族なの？」

「確かに彼は平民だが、そこらの貴族よりもずっと尊敬出来る人間だと僕は思うけどね」  
「貴方、周りから今なんて言われているか知ってるの？ 平民に尻尾を振った負け犬みたいに言われているじゃない。悔しくないの？」

「言いたい奴には言わせておけばいいさ。もうそんな噂や陰口で振り回されて、自分に嘘をつく方が僕はずっと辛いからね」

キツパリと言い切ったギーシュにモンモランシーは驚いた表情を浮かべる。

今までのギーシュならそんな噂や陰口ですぐに振り回され、周りに格好をつける癖の様な物があつた。しかし、今のギーシュは無理せずにそう言い切れる何かを持っているらしい。

考えたくはないが、あの使い魔が少しずつギーシュを変えているのだろうか。

「私にはわからないわね。確かに貴方はあの使い魔に負けた。あの使い魔が普通の平民より強いのはわかるわ。けどだからって……そこまで尊敬出来るものなの？ 所詮はあの使い魔だつて平民じゃない。」

どこか小馬鹿にした様に言いながらも、モンモランシーの心は強くざわついた。ギーシュの口からあの使い魔の名前が出ると、何故かわからないがイライラする。

暫くの沈黙の後、ギーシュが椅子から立ち上がったのでモンモランシーがそれを視線で追う。

ギーシュは戸棚を開いてタオルと水の入った小さな瓶を取ると、そのまま扉を開いた。

「外を走ってくるから、適当に帰ってくれ」

「何？客人を置いて出掛けるって言うの？」

得体の知れない苛立ちから睨む様な視線を向けて言うモンモランシーに、ギーシュは溜め息を漏らしてからゆっくりと振り返った。

「君に彼をわかつてくれとは言わないし、僕の事をどう言ってくれても構わない。ただ僕は、一日でも早く本当の意味で強くなりたいんだ。いつか君を、守れる様に」

「っ!？」

自分を見つめるギーシュの瞳。それは何処までも純粹で、綺麗で、思わず言葉を詰ま

らせて見とれてしまった。

再びギーシユは背を向けると、お休みと一言残して部屋から出ていった。

一人残されたモンモランシーは、久しく感じる胸の高まりに酔いしれてから女子寮へと戻った。

昨夜の出来事を振り返り、思わず少しギーシユにトキメイてしまった自分と、せつかく部屋まで行ったのに自分への愛の言葉がなかった事が彼女を酷くイライラさせた。

ふと、扉がノックされる音に気付いてベッドに腰掛ける。どうやら今日呼んだ客人が来たらしい。

「鍵は開いてるわ、入って」

モンモランシーの声に反応する様に開かれた扉から入ってきたのは件の人物、桐生であつた。

「邪魔するぞ」

「その椅子にでも掛けてちょうだい」

入ってきた桐生に流し目で椅子に座る様促すと、モンモランシーは戸棚からポットを取り出して茶の準備を始める。

きよろりと軽くモンモランシーの部屋を見回す桐生。家具はルイズの物よりもやや

豪華な造りの物が多い。勉強用と見られる机には本と、薬の調合用なのか乳鉢やフランスコ等が並べられている。

部屋の中で一際目を惹いたのは大きな化粧台だ。豪華な造りの鏡の前には香水なのか化粧品なのかわからないが様々な色や形の小瓶が所狭しと並べられている。まるで以前テレビで見たマンハッタンのビル街の様だ。

「どうぞ。粗茶だけど」

「すまんな」

出された紅茶の入ったティーカップを見て、桐生はぺこりと会釈する。

モンモランシーは桐生の向かいに座ると金色の巻き毛を指先で弄ってから紅茶を一口口に含んだ。

「それで、話つてのはなんだ？　そう言えばこんな風に面と向かって顔を合わせるの初めてだよな、も……もんも……」

「モンモランシー。「香水」のモンモランシーよ」

「そうだったな。俺は桐生一馬だ。宜しくな」

優しげな笑みを浮かべて自己紹介する桐生をモンモランシーはジッと見つめた。

顔は悪くない。同い年の男子にはない影と言うか、憂いを思わせる物を感じさせる魅力はあると思う。スタイルも、悪くないと思う。着ている服が少し奇妙だが、服越しか

らでも伝わってくる体格の良さは歴戦の戦士を思わせる。カップを持つ手の甲に浮かぶ無数の細かい傷がちよつとしたワイルドさを出してる風にも見える。

しかし、それはあくまで女性からの視線で見たこの男の印象だ。どうしてギーシュがあんなにもこの男に夢中になっているのか、全くわからない。

「単刀直入に言うわ。私が聞きたいのはギーシュの事よ」

「ギーシュか……確か、以前はお前と付き合っていたんだよね？ あいつがどうかしたか？」

なるべく音を立てない様に気を遣いながらカップから紅茶を口に入れて尋ねる桐生に、モンモランシーは窓の外へ視線を送りながら巻き毛をいじりながら口を開いた。

「あんたと決闘をしたあの日から、彼がちよつとおかしいのよ。今までとは違う、まるで別人になっていくみたい。あんた……彼に何をしたの？」

再び桐生に視線を向けたモンモランシーの眼は、何かを疑う様な鋭さが籠っていた。桐生はその眼を真っ直ぐ見つめながら軽く首を振った。

「特に何かをした覚えはないな。ただ、今までのあいつの事はわからないが……あいつは少し軟派過ぎる性格に見えた。別にそれが悪いとまでは言わない。年頃の男なら、誰だって心の何処かで女にモテたい願望はあるだろうしな。だが、このまま成長していけば、あいつはきつと薄っぺらい奴のまま終わっちゃう。だから少し助言はさせて貰っ

た」

「助言？」

「ああ。外見ばかりじゃなく、中身を鍛えろとな。外見がどんなに良くても、中身が薄っぺらいんじゃないやあ、一人の男としての魅力は出ない。あいつは少々調子に乗りやすいが、根は真つ直ぐな奴だ。軟派な性格が少しでも変われば、きつと今以上に格好いい男になれる筈だ」

そう話す桐生の顔は、まるでギーシユの父親の様に確信に満ちて、優しかった。

モンモランシーは思わず拳を握り締めながら歯噛みした。会つてまだ数ヶ月しか経っていない筈なのに、何故この男はギーシユの事をこんなにもわかった様に話せるのだろうか。

だからギーシユは今までの様に自分に振り返つてくれないのか。だからあんなにも別人の様になつてしまったのか。

「やっぱり、あなたのせいなのね」

俯きながら小さな声で呟いたモンモランシーに、桐生は首を傾げながら手に持つていたカップを置く。

見るとモンモランシーの持つているカップが小刻みに揺れている。

カチャンツと音を立ててカップを机に置いたモンモランシーは椅子から立ち上がった



て桐生を睨み付けた。

「あんたが！ あんたが余計な事を言うから！ ギーシユは変わっちゃった！ 私に見向きもしない！ あんなの私の知ってるギーシユじゃない！ 返して！ 返してよ！

私の知ってるギーシユを返して！」

一気に捲し立てて呼吸を荒げるモンモランシーを、桐生は静かな眼差しで見つめていた。

徐々に呼吸を落ち着かせながら力なくモンモランシーが椅子に腰掛けて俯く。

「ギーシユは、いつも私を一番にしてくれた。どんなに浮気を怒っても、どんなに酷い事を言っても、必ず私のもとに戻って来てくれた。なのに、今は……」

モンモランシーの瞳から、一粒の涙が零れ落ちた。

本当は自分でもわかつている。この男に当たった所で何がどうこうなる訳でもない。なのに、何故かギーシユが自分を見ていないのを感じる度、ギーシユがこの男と共にいるのを見る度、ギーシユの口からこの男の事が出る度、モンモランシーの胸は強く締め付けられた。

「……怖いか？」

不意に口を開いた桐生の言葉に、モンモランシーが顔を上げる。

「自分の好きな男が、自分を好きだと言ってくれていた男が、自分を見てくれなくなる事

が」

モンモランシーはただ黙つたまま、小さく頷いた。

そう、ずっと認めたくなかつた。認めるのが怖かつた。でも今はもう嘘をつけない。自分は、ギーシユの事が心から大好きなのだ。少し調子に乗りやすい所も、他の女子に視線を向けてしまう所も、何時でも自分に愛の言葉を囁いてくれるギーシユが。

モンモランシーは、桐生に嫉妬していた。いつもギーシユが夢中になつてくれていたのが彼へと変わり、彼ばかりにギーシユの視線が向く事に。

「なあ、モンモランシー？」

桐生はゆつくりと椅子に深く座り直してから言う、涙で濡れたモンモランシーの瞳を見つめた。

「お前は、俺にギーシユを取られたと思つていゝらうな。なら、逆に聞くが……お前はギーシユを自分から離れさせない様に努力したか？」

「えっ……？」

突然の質問に言葉を詰まらせ固まるモンモランシー。

桐生はそんなモンモランシーに構わず言葉を続ける。

「あいつが他の女に目が向かない様に、自分のもとから離れない様にと何か努力したか？ 自信を持って、あいつの為に何かをしたと言える事をしたか？」

「それは……。だって、ギーシュは……」

その先を口にしようとした瞬間、桐生は首を振ってモンモランシーにその言葉を飲み込ませた。

「確かにあいつの軟派な性格が悪いのは間違いないだろう。でもな、あいつを責める以外にお前は何をしたんだ？ 少しでも他の女に負けない様に美しくなろうとしたか？

あいつが他の女の所へいかない様に何かしてやったか？」

桐生の質問にモンモランシーは何も言えなかった。

いつも愛を囁くのはギーシュ。自分はギーシュにとって特別な人。彼の為に何かを等、考えた事もなかった。

「いいか、モンモランシー。お前が好きなのは、人間なんだぞ？ 心があるんだ。確かにあいつはお前を大事にしていただろう。それなのに裏切った事もあった。お前だけを責めるつもりはない。けどな、お前は悔しくなかったのか？ そんな女より自分の方が良いと思わせる事をしなかったのか？ 子供のお前にはキツイ言い方かもしれないけどな、何の努力も、考えもなしに、ただ愛されてるからと言う理由で側にいた所で、そいつはずっとは側には居てくれないんだぞ。もし、考えたくもない、努力もしたくない、それでも側に居て欲しいと思うのなら、人形とでも恋をしろ。季節や環境、気持ちが変わっていく中で、それでもそいつが一番だと思える人間同士でしか、本当の愛

なんて芽生えはしないんだ」

桐生の言葉が鋭利な刃となって、モンモランシーの胸に突き刺さる。耐えられなくなったモンモランシーが再び俯くと、机にパタパタと涙が零れ落ちた。

桐生はカップを取って一口紅茶を飲んでから、立ち上がって窓に近付き外へ視線を向けた。

窓の外を眺めた桐生は不意に口元に笑みを浮かべてモンモランシーに顔を向ける。

「少なくとも、ギーシュはお前の為に努力しているぞ?」

「えっ?」

顔を上げたモンモランシーを軽く手招きして窓際まで連れて来ると、窓の外を見る様に顎をしゃくつて見せた。

窓の外の少し先、一本の木が生えた庭でギーシュがトレーニングをしているのが見える。汗と砂埃にまみれながら、辛そうな表情を浮かべつつも身体に鞭打って鉄アレイの様な物を腕で上下させている。

「あいつが何の為にあんなに身体を鍛えているかわかるか?」

「……私の、為?」

桐生は頷いてから、モンモランシーの頭に手を乗せて優しく撫でた。

「最初のあいつはただ単に俺みたいになりたいと言う為だけに身体を鍛えていた。だが

な、次第にあいつの中で目標が生まれたんだ。「誰かの為に強くなりたい」と。そしてその誰かはモンモランシー、お前だと言っていた。キツパリと言いつつは今までの倍以上に格好良かったぜ？」

「なら、何でギーシュは、私の側に居てくれないの？ 強きなんていらぬ。私は、ギーシュが側に居てくれれば……」

「俺もお前の側にいてやらないのかとは言つたよ。だが、あいつは今までの自分の行いを後悔していたんだ。あいつが言つていたよ。「今の自分が行つた所でモンモランシーはきつと振り向いてくれない。だから自信を持つて彼女を守ると宣言出来る様になつた時、僕はまた彼女のもとへと行くよ。例え彼女が、もう僕の事を見てくれなかつたとしても」とな」

桐生の言葉で、モンモランシーは昨日のギーシュの言葉の意味が漸くわかつた気がした。

彼はずっと、側に居てくれていたのだ。例え身体は離れていたとしても、心はずっと。モンモランシーは顔を手で覆いながら小さく嗚咽を漏らしながら泣いた。そんなモンモランシーの頭を、桐生は優しく撫で続けた。

「お前は優しい子だな、モンモランシー。誰かの為に涙を流せるのは、優しくなきや出来ない事だ」

桐生の優しい温もりと言葉がモンモランシーの心をそつと温める。瞳から溢れ出てくる涙は先程の冷たさはなく、優しい温もりを秘めていた。

ギーシユが自分の知らない誰かになってしまいう様で怖かった。でも、実際は何も変わってない。ただ自分への想い方が変わったただけだ。

いつの間にかギーシユだけが大人になって、自分が子供だっただけなのだとモンモランシーは気付いた。

「モンモランシー……あいつの想いに無理に応えようとする必要はない。だが、もしあいつの事を少しでも想えるなら、その気持ち冷めるまで、見守っててやってくれないか？ つかあいつが、お前に想いを伝えられる様になる日まで」

涙で濡れた瞳を手の甲で拭ったモンモランシーは、桐生の言葉にぎこちなく笑って頷いた。

桐生もその笑顔に向かって頷くと、モンモランシーの部屋から出ていこうと扉に向かって歩き出した。

「えつと……カズマ？」

ドアノブに手を掛けた所で、モンモランシーに声を掛けられた桐生はそつと振り返る。

「……ありがとう」

照れ臭そうに頬を赤らめながら涙の痕を残した満面の笑みを浮かべるモンモランシーに、桐生も笑顔を浮かべて部屋から出ていった。

赤い月が天高く登った深夜。

月明かりを浴びて妖しく紅く染まったラグドリアン湖の岸边に男の悲鳴が響いた。

声の主が岸边に横たわると貫かれた胸からドクドクと鮮血が地面を黒ずんだ赤色に染めていく。

岸边には同じ様に鮮血を溢れさせながら倒れている男達が横たわっていた。どうやら雇われの傭兵の様だ。

仲間達が次々と殺されて腰が抜けた男は自分達を襲ってきた人物達を怯えた瞳で見上げた。

紅い月明かりに照らされたその人物達が身に付けている仮面が鈍く妖しい光を反射させる。

「な、な……何でお前等が!？」

男は声を震わせながら自分を見下ろしている三人の人物、「トライデント」の面々をつめる。男の質問に三人は答えない。

「お、お、俺達は、このラグドリアン湖の水の精霊を退治しに来ただけだ！ お前等も見

りやわかんだろ!? 今のラグドリアン湖の水位は二年前よりも明らかに多いだろう!?

このせいで近隣の住民から依頼を受けただけなんだ! お前等に迷惑をかける気もないし、お前等の邪魔もしない! だからどっかへ行ってくれ!」

悲痛な叫びを上げる男に暫く三人が押し黙っていると、不意にレイヴンが首を傾げて見せた。

「本当に僕達の邪魔をしない?」

レイヴンの声が思いの外若々しい事に驚きながらも必死に首を縦に振って見せる男。

「それはありがたいね。なら、」

どこか嬉しそうに言うレイヴンは顎をしゃくって見せる。すると左隣に佇んでいたウロボロスが男にゆっくりと近付いた。

「さっさと死んでよ」

レイヴンの声に一瞬間抜けな表情を浮かべた男の顔は、素早く突き出されたウロボロスの鉤爪に貫かれた。

ビクビクと痙攣していた男だったその肉塊は引き抜かれた鉤爪の後から鮮血を迸らせながら力なく地面に横たわった。

「つまらんな。俺を楽しませてくれる猛者はまだ現れんのか」

紅く染まり血が滴る鉤爪を眺めながら退屈そうに呟くウロボロス。



傭兵達の屍を一瞥すると、レイヴンは湖へと歩み寄った。

「終わったよ」

三人以外の人気のないラグドリアン湖にレイヴンの声が響く。

すると突然湖の水面に波紋が広がり、ゴボゴボと水音を立てながら水面から水が空へ向かって伸び始めた。

やがて水は人間の女性の形に変わると、目にあたる部分に蒼い光が灯った。

ラグドリアン湖に住む、水の精霊である。

「我が願いを聞き入れた事を感謝する、悪魔の名を語る者達よ」

それは凜と澄んだ、少女の様にも成人の女性の様にも聞こえる声だった。

レイヴンは首を振ってから仮面を取って笑みを浮かべて見せた。

「まさか水の精霊から依頼が来るとは思わなかったけどね。僕達もかなり有名になれたって事なのかな？」

「我は永きに渡りこの湖と共にあり続けた。人間の風の噂も入ってくる。よもやあの悪名高き三つ柱の悪魔の名を名乗る者達が誠に居ようとはな」

水の精霊は感情を感じさせない口調でそう語ると、三人をそれぞれその蒼い光の目で眺めてから続けた。

「此度の依頼、見事為し遂げてみせた事に褒美を渡したい。何を望む？ 単なる者達よ」

「だったらさ、何でわざわざ水かさを増させているのかを教えて貰えないかな？　ただ自分の行動範囲を広げる為って訳じゃないんでしよう？」

レイヴンが水の精霊に問い掛けると、オーガは腕を組み、ウロボロスは後ろ手に手を組んで佇む。自分達は二人の会話に干渉しない意思を表している様だ。

「お前達の同胞が、我が守りし秘宝を盗み出した。それを取り返す為に、我は湖の水を増やした。直ぐには無理だとしても、やがて世界が我が水に浸食された暁には、我が身体が秘宝を探り当てるであろう」

どうやら水の精霊は人間に大切な秘宝を盗まれたらしい。それを取り戻す為に世界中を水浸ししようとしているのだ。今のペースでの水かさの増やし方では何百年、何千年と言う時が必要となるだろうか。

しかし、人間とは違う時の概念を持つ精霊達にとっては、人間の一年がほんの一分にしか感じられない者もいると聞く。

「なるほどね……それで？　盗んだ奴の目星はついてるの？」

「風の力を使う数個体が私の眠る中、我に触れずに秘宝だけを奪っていった。確かその個体の一人が、「クロムウエル」と呼ばれていた」

「あいつか……」

ずっと黙っていたオーガがその名前に眩きを漏らす。

あのニューカッスルの城で会った、神聖アルビオンの皇帝だ。

「我が守り続けた秘宝、「アンドバリの指輪」を取り戻す為に、我は世界の隅々まで水に浸す必要がある」

「アンドバリの指輪」。その名前にレイヴンは聞き覚えがあった。

禁忌と謳われる秘宝の一つで、「水」の秘宝の中では究極の物と謳う者もいたと言われる指輪だ。その能力は、死者に偽りの命を与えて自分の命令だけを聞く人形に変える呪いを操ると言う。

ただし、所詮は偽りの命。一度その呪いが壊れてしまえばただの肉塊へと戻り、二度と復活する事はないと言われている。

「そのクロムウエルつてのには一応心当たりがあるな。どうかな、水の精霊。君が良ければだけど、僕達はその指輪を取ってくるのを引き受けても良いよ？」

レイヴンの突然の申し出にオーガとウロボロスが動揺した様に身体を揺らす。が、レイヴンはそれに構わず水の精霊に微笑みかけた。

水の精霊は暫しレイヴンを見つめたまま押し黙っていたが、やがて小さな頷きを見せた。

「ならば頼もう、悪魔の名を語る者達よ。お前達は私の願いを一度聞き入れてくれた。

我はお前等を信じよう」

「承りました、と。何時までにと約束は出来ないけどね」

「構わぬ。我にとつて時はささやかな流れでしかない。お前達の寿命が尽きるまでを期限としよう。持ってきた暁には喜んで褒美を授けよう。頼んだぞ」

それだけ言うのと水の精霊は砕け散り、湖に小さな波紋を残しながら消えた。

静まり返った宵闇の中、沈黙を破つたのはオーガだった。

「どういうつもりだ、レイヴン？ 何故あの様な依頼を受けた？」

怒気と言うよりも戸惑いが混じった声で尋ねるオーガ。

そんなオーガにレイヴンは欠伸を漏らしてから、コキコキと首を鳴らしながら口を開く。

「あのクロムウエルはいずれ殺す存在だし、そのついでと考えれば良いじゃない」

「俺が聞きたいのはそんな事じゃない。いつも報酬を第一と考えたお前が、何故今回は報酬を受け取らず、更には後払い等と言う一番嫌う方法を良しとした？ あの精霊に何故そこまで肩入れする？」

レイヴンは問い掛けてくるオーガを知らんぷりすると仮面を再び着けてからポツリと呟いた。

「子供の頃の借りをね、返そうと思うんだ」

それだけ口にする、レイヴンは歩き出した。

オーガとウロボロスは互いを見合いながら首を傾げると、レイヴンに続いて闇夜へと消えて行った。

去っていく三人をまるで見送る様に、月明かりに紅く染まったラグドリアン湖の水面に大きな波紋が広がった。

## 第30話

今は亡き王が使っていた居室。月明かりが窓から漏れる部屋の中、巨大な天蓋付きベッドの上でアンリエッタは薄い下着のみを身に纏って横たわっていた。

ベッドの横には父が愛用していた大きなテーブルがあり、その上にはワインの瓶と空になったグラスが置かれている。アンリエッタは横たわったままワインをグラスに注ぐと、上体を起こして一気に飲み干した。

以前は酒など食事の際に飲んだり嗜む程度だったが、女王になってからは量が増えた。

今までは政治の飾りの造花同然だったアンリエッタにとって、何かを決断すると言うのは並みの心労ではなかった。殆ど決まった決議も、自分の一言で簡単に無くす事も出来る。しかし、その幼い双肩にはトリスティンとその国民が背負われているのだ。ましてや今は戦時中、いい加減な決断等許されない。

飾りだった造花は生花へと生まれ変わり、その生き生きとした美しさで周りを鼓舞し引つ張っていかねばならなくなった。最早飾りの造花だった頃とは違い、大きな責任がその小さな身体にのしかかってくる。

その責任がアンリエッタを休む間もなく苦しめ続けていた。故に吞まずにはいられない。しかし、こんな姿をお目付のお堅い女官や侍従に見られたら面倒極まりないので、アンリエッタはこっそり隠したワインをこうして毎晩あけているのだ。

ワインの酔いに頬を淡く赤らめながらベッドに横たわると、決まって思い出すのは楽しかった頃の記憶だ。自分がありのままの自分で入られた、短い季節。

十四歳の頃の、夏の記憶。

「どうして貴方はあの時、愛を誓って下さらなかつたの？」

ラグドリアン湖の水の精霊は通称「契約の精霊」と呼ばれている。その精霊の前で誓った誓いは決して破られる事はないと言う。

十四歳の夏、ウエールズとこっそりと会ったあのラグドリアン湖で、自分は水の精霊の身許で愛を誓った。しかし、ウエールズは愛を誓ってくれなかつた。

アンリエッタは両手で顔を覆うと、小さな嗚咽を漏らしながら涙を流した。自分の問いに答えてくれる人はもういない。この世に存在しない。

勝利が彼を忘れさせてくれると思った。女王と言う立場が彼を忘れさせてくれると思つた。

しかし、忘れられない。忘れられる訳がない。

アンリエッタは手で涙を拭うと、そんな弱々しい自分に喝を入れる様に首を振つた。

明日はゲルマニアの大使との折衝が待っている。こんな下らない戦争を早く終わらせたいたリステインとアンリエッタにとつても大切な折衝だ。涙に濡れた顔で出席する訳にはいかない。公の場で弱い自分を晒すのは自殺行為だ。

深呼吸をしてから本日最後の寝酒とワインの瓶を取った時、扉がノックされた。

こんな夜更けに誰だろうか。億劫だが、出ない訳にもいかない。今は何が起きるかわからない。またアルビオンに動きがあつたのかもしれない。

アンリエッタは酔いでフラつく身体でベッドから立ち上がるとガウンを羽織り、扉へと近付いた。

「ラ・ポルト？ それとも枢機卿？ こんな夜更けに何事ですか？」

アンリエッタの問いに返事はない。代わりにノックが返された。侍従長でもなければ枢機卿でもないらしい。一体誰だろうか。

「誰です？ 名乗りなさい。こんな夜更けに女王の居室を訪ねる者が、名を名乗らなくて良いと言う法はありませんよ。さあ、早く名乗りなさい。さもなくば人を呼びますよ」

「僕だ、アンリエッタ」

その声に、アンリエッタは顔をから表情を失つて一瞬立ち尽くした。

「……今日は少し、飲み過ぎてしまったようね。こんなにもハッキリと幻聴が聞こえる



なんて……」

アンリエッタは自分を抑えようと胸に手をあてがった。激しい動悸が皮膚を通して手に伝わってくる。

「幻聴なんかじゃないよ、アンリエッタ。僕だ。この扉を開けておくれ」

アンリエッタは扉へ駆け寄り、その厚い茶色い木製の板に手を這わせた。

「本当に、本当にウエルズ様なの？ 貴方は、裏切り者に殺されてしまったと……」

アンリエッタは早まる気持ちを抑えて呟いた。

「それは間違いだよ。あのニューカッスルで討たれたのは僕の影武者さ。世を欺く為に今まで表に僕は姿を現さなかったから、僕は世間では死んだ事になっているけどね」

「でも、「風のルビー」だって……」

アンリエッタは自分の薬指に嵌められているウエルズの形見を眺めた。

「敵を欺くにはまず味方から、と言うだろう？ しかし、君が信じられないのも無理はない。なら、僕が僕である証拠を聞かせてあげよう」

一瞬の静寂。しかし、アンリエッタにとってはその沈黙が長く感じた。

「風吹く夜に」

アンリエッタの中で抑えられていた気持ち、その一言で弾けた。

その言葉は、あのラグドリアン湖で会う時に使っていた合言葉。ウエルズとアンリ

エツタ以外は知らない言葉だ。

アンリエツタは勢い良く扉を開いた。

その先には、何度も夢見た笑顔を浮かべたウエールズが立っていた。

「ウエールズ様……ウエールズ様！」

アンリエツタはウエールズに強く抱き付いてその胸に顔を埋めると、子供の様に咽び泣いた。

そんなアンリエツタの頭を、ウエールズが優しく撫でる。

「相変わらず君は泣き虫だね、アンリエツタ」

「だって、またこうして貴方に出会えるなんて……もつと早くお会いしたかったですわ」  
「流石に逃げ延びてからすぐに君の元へは行けなかったからね。あの後敵に見つからない様に何度も場所を変えてここまで来たけど……君が一人になる時間帯を探すのに時間がかかってしまったよ。まさか死んだ筈の人間が昼間に謁見に向かう訳にはいかな  
いだらう？」

少し悪戯っぽい表情を浮かべて見せながら話すウエールズはまごう事なき本物だった。

「本当に……意地悪な人だね、貴方は」

溢れ出る涙を指先で拭いながらアンリエツタも微笑みを浮かべた。

「アンリエッタ……頼みがあるんだ」

不意に、先程までの子供っぽさを残した笑いから真剣な表情に変わったウエルズにアンリエッタの表情も真剣な物へと変わった。

「僕と一緒に、アルビオンへ来て欲しい」

「何を、何を言っているの!?!」

アンリエッタはウエルズの顔を見つめながら信じられないとばかりに声を上げた。

「せつかく助かった命を、また散らすおつもりですか!?!」

「確かに愚かしい行為だとは僕も思う。それでも、僕は「レコン・キスタ」からアルビオンを解放しなくちゃいけないんだ。僕が今日君の元へ来たのも、その為なんだ」

「どういう、事ですか?」

「国内には、僕と志を共にしてくれている協力者がいる。しかし、僕にはもつと信用出来る人間が必要なんだ。アンリエッタ……僕と共に来てくれるね?」

ウエルズの言葉はアンリエッタの胸の内を酷くざわつかせた。もちろん、ウエルズと共に行きたい。愛しい人間と再び手を取り歩く事が出来るのだ。恋する乙女にとって、これ程の幸福は数少ない。

しかし、女王と言う立場がアンリエッタを引き留めた。今や自分の身体は自分だけの物ではない。多くの臣下が、兵士が、メイジが、民が自分の為に働いているのだ。その

想いを無下にするのは躊躇われた。

「お気持ちには、とても嬉しく思います。しかし、今はとにかくゆっくりと休んで、この話はまた明日にでも……」

そう言ったアンリエッタにウエルズは急に顔を近付けた。愛しい人の瞳が、アンリエッタを射抜く。

ウエルズはアンリエッタの瞳を見つめたまま囁いた。

「明日では遅いんだ、アンリエッタ。僕と共に来てくれ。愛している、もう二度と離さないから……」

そう言ったウエルズはアンリエッタの唇に自分の唇を重ねた。

ウエルズの言葉と口付けにアンリエッタの中の熱い何かが脈打つ中、その瞳は眠りの魔法によってゆっくりと閉じられた。

ウインドドラゴンに跨ったタバサとキュルケが夜の空を駆けていた。

タバサの帰省について行ったキュルケはタバサの実家で一泊し、夜まで過ごす学園に向かつてタバサと共に帰る所だった。

タバサの実家では、タバサの過去をキュルケは知る事になった。ガリア王家の継承者争いに巻き込まれ、実の母を廃人にされ、そんな仇とも言える現在のガリア王家に仕え

ている事を。

ウインドドラゴンの背鱗に捕まりながら、何時もの位置で本に目を落とすタバサをキュルケが見つめた。

自分とはとても同い年に見えないこの小さな身体で、どれ程の苦しみに耐えているのだろう。どれ程の憎しみを秘めているのだろう。

不意に、キュルケは後ろからタバサをそっと抱き締めた。

「タバサ……あたしは、貴女の味方だからね。どんな事があっても」

タバサは何も答えない。代わりに、本を持っていた片手でキュルケの腕を優しく握った。

ふと、トリステインの城下町を跨ごうとした瞬間に、雑木林の中を走る馬に乗った一行を見かけた。黒ずくめのローブを被っている者達に囲まれて真ん中を走っている人物には見覚えがあった。

「あれは、トリステインのお姫様と確か……ウエールズ皇太子じゃない。」

夜の密会にでも向かっているのだろうか。なんの気に無しに眺めた二人はそのまま魔法学園に向かった。

魔法学園の女子寮の庭で、桐生とルイズが涼むのを目的にお茶を飲んでいた。昼間の

暑さよりはマシだが今日の夜も蒸し暑い。そんな遅くならない頃に雨が降るかもしれないと思つた。

お茶を口にしながら談笑を楽しんでいた二人の前に、学園に到着したタバサの風竜が優雅に舞い降りた。風竜の背からタバサとキュルケが華麗に飛び降りる。

「あら、こんばんは、ダーリン。夜のお茶会と言つた所かしら？」

色気たっぷりな赤髪をかき上げながら言うキュルケにルイズがムツと顔をしかめる。せつかくの桐生とのお茶に水を差されたのが不満らしい。

そんなルイズに気付かない桐生は頷いて見せた。

「今日は少し蒸し暑いからな。夕涼みも兼ねて、こうして飲んでる訳だ」

「確かに、今日はちよつと蒸すわね。ま、あのお姫様は今夜もつとお熱いんだろうけど」

「お姫様？」

キュルケの言葉にルイズが怪訝そうな顔をして見せながら問いかける。

キュルケは首を傾げて見せてから頷いた。

「ええ、今さつき見かけたのよ。ええと、ほら……あのウエールズ皇太子と一緒に何処かへ向かう姿をね。あの王子様、死んだつて聞いてたけど生きてたのね。ま、お姫様も顔は悪くないし？美男美女のカップルつて感じなんじゃない？」

「ウエールズ、だと？」

桐生の眉が不穏な様子で歪む。

あの日、ニューカッスルで確かに死んだウエールズを見た桐生とルイズ。

嫌な予感がする。二人は顔を見合わすと、ルイズがタバサに駆け寄って肩を掴んだ。

「お願い、タバサ！ 今すぐトリステイン城に向かって飛んで！」

桐生一行がタバサのウインドドラゴンに跨ってトリステイン城に向かうと、城の中は蜂の巣をつついた騒ぎになっていた。

ウインドドラゴンが中庭に舞い降りると、一斉に魔法衛士隊が一行を囲んだ。

マンティコア隊の隊長がズカズカと一行に歩み寄るなり、その見覚えのある姿に眉をひそめた。

「またお前達か！ ええいつ！ 忙しい時にはかり姿を現しおつてからに！」

忌々しそうに言う隊長を無視してルイズが風竜から飛び降りると、息を荒げながら隊長に詰め寄った。

「姫様！ あ、いや……女王陛下はご無事ですか!？」

辺りには松明を持った兵士や杖で灯りを灯している貴族達が走り回っている。ただ事ではないのは明白だった。

「生憎貴様等の相手をしている暇はないんださつきと去れ」

ルイズは隊長の一言に顔を怒りに真っ赤にすると、ポケットの中からアンリエッタから授けられた許可証を突き出した。

「私は女王陛下直属の女官よ！ この通り陛下直属の許可証もあるわ！ 私には陛下の権利を行使する権利がある！ 直ちに事情を説明しなさい！」

突き出された許可証をマジマジと眺めてから、隊長はルイズと許可証を交互に見た。

隊長は根っからの軍人であつた。例えどんなに小さかろうが、幼かろうが、自分の上官には絶対の服従を誓っていた。

隊長は背筋を伸ばすと、敬礼する様に胸に手を当てて報告した。

「はっ！ 今から一時間程前、女王陛下が何者かによつてかどわかされたのです！ 警護の者を蹴散らし、賊は馬で駆け去りました！ 現在はヒポグリフ隊が陛下の後を追ひ、我々は城内に賊を特定出来る証拠がないか探している最中です！」

ルイズが不安げな表情で桐生へ顔を向けた。

桐生は頷くと、隊長に詰め寄つた。

「そいつ等はどつちに向かつたんだ？」

「はっ！ 賊は南へ向かつてるのでラ・ロシエールに向かつていると思われます！」

間違いなくアルビオンの手の者でしょう！ 出来れば竜騎士隊を派遣したかつたのですが……先の戦で竜騎士隊は全滅してしまつています。ヒポグリフ隊が賊に追い付け



るかどうかは……何とも言えません」

風竜に次いで足の速いヒポグリフが賊を追っているらしいが、追い付けるか怪しいらしい。

桐生とルイズは互いの目を見合わせ頷き合うと、颯爽とタバサのウィンドドラゴンに跨った。

「急いで！ 姫様を拐った賊は、ラ・ロシエールに向かっている！ 夜明けまでに追いつかないと大変な事になるわ！」

魔法学園から飛んで来る際に大体の事情を聞いたキュルケとタバサが頷き、すぐさま風竜を飛び立たせた。

「低く飛んで！ 賊は馬で走っているわ！」

ルイズの叫び声に呼応する様に城下町を一気に抜けた風竜は闇夜の中、その鋭利な嗅覚と感覚で障害物を避けながら街道を低く飛んで行った。

ラ・ロシエールに向かって伸びる街道で、四肢がバラバラになった魔法衛士隊の死体が散乱していた。賊を追っていたヒポグリフ隊の隊員達である。

馬から降りてヒポグリフ隊を殺したウェールズはゆっくりと杖を下ろしてアンリエッタに振り向いた。

同じく馬から降りていたアンリエッタがウエールズを信じられない物を見る瞳で見つめた。

「ウエールズ様……貴方、貴方、何て事を！」

「驚かせてしまった様だね」

アンリエッタは何時も肌身離さず持ち歩いている腰から下げた水晶の付いた杖を引き抜き、ウエールズに向かって突き出した。

「貴方は、一体誰なの？」

「僕はウエールズだよ」

「嘘よ！ 本物のウエールズ様なら、無闇に人を殺めたりなんかしない！ よくも、よくも魔法衛士隊の人達を……！」

「彼等の仇が取りたいかい？ ならば、僕を殺せばいい。君にこの胸を貫かれ死ぬるなら本望だよ」

そう言つて、自分の胸を指差すウエールズ。

アンリエッタは暫くウエールズを睨んでいたが、その瞳からは涙が零れ落ち、口から出たのは呪文ではなく小さな嗚咽。

「どうして……どうしてこうなつてしまったの？」

「訳は後で話すよ。様々な事情があるんだ。君は黙つて、あの日の誓いの通りにしてい

ればいい。覚えているかい？ あのラグドリアン湖で君が僕にしてくれた誓いを」

「忘れる訳がありませんわ。あの言葉を頼りに、今日まで生きて来たんですもの」

ウエールズはその言葉に優しく微笑みかけると、アンリエッタを強く抱き締め額に口付けた。

「ならば君は僕と共にいてくれればいい。後は僕に任せてくれ。大丈夫……もう君に寂しい思いをさせたりはしない」

アンリエッタはウエールズの胸の中で何度も頷いた。

この者が本物のウエールズかどうかはわからない。だが、そんな事はどうでもいいのだ。この感触に、この匂いに、この温もりに抱かれるなら、他の物は何もいらなかった。

二人が再び馬に乗ろうとした時、突然炎が巻き上がり地面を踊った。

炎に対する本能的な恐怖から馬は前足を高く上げて声を上げ、乗っていた黒ずくめの者達を放って逃げ出した。

ウエールズ一行の前にウインドドラゴンが降り立ち、ルイズに桐生、そしてタバサとキュルケが舞い降りた。

「まさかとは思ったが……やはり、お前だったか」

桐生がアンリエッタの肩を抱いて立っているウエールズを見て眉をひそめた。

ウエールズはそんな桐生達一行の登場にさほど興味がないのか、手を上げて黒ずくめ

の者達を夜の闇の中へと紛れさせた。

「ウエールズ、姫様を返して貰うぜ」

「返す？　面白い事を言うね。彼女は彼女の意思で僕と共にいるんだよ」

ウエールズの微笑は生前と変わらない優しい物だった。しかし、その奥には冷たい何かが秘められている。

あの日、ニューカッスルで話した勇敢なウエールズ皇太子はやはりもうこの世にいないのだ。

「姫様！　此方にいらして下さい！　そこにいるのはウエールズ皇太子ではありません！　亡霊です！　ウエールズ皇太子は……もうこの世にいません！」

ルイズが杖を構えながら必死にアンリエッタに話しかける。しかし、アンリエッタはその場から動こうとせず、肩を震わせ唇を噛み締めていた。

「姫様!？」

「言っただろう？　彼女は彼女の意思で僕と共にいると。さあ、取引とイかないか？」

「取引、だと？」

「そうさ。君達のおかげで僕等は馬を失った。道中危険も多いだろうと言うのにな。ここで君達とやり合うのも悪くないが、なるべく魔力は温存したいんだ。だから、このまま引いてくれるなら僕達は君達に危害を加えない。どうか？」

ウエールズの言葉を無視して、タバサは即座に呪文を詠唱し数本のも氷の矢をウエールズの胸向かって打ち込んだ。

「ウインディ・アイシクル」。タバサの得意な攻撃魔法だ。氷の矢は容赦なくウエールズの胸を貫いた。

しかし、ウエールズは微動だにしない。胸元に開かれた傷は見る間に再生し、破かれた服から生気のない肌が露出した。

「無駄だよ。君達に僕は傷付けられない」

その様子を、アンリエッタは戸惑った表情で見ている。

「見たでしょう、姫様!? この男はウエールズ皇太子ではありません! どんな魔法かはわかりませんが……ウエールズ皇太子の屍が操られているだけなんです!」

ルイズの言葉に、アンリエッタは強く首を振った。まるで今見た光景が現実の物ではないと否定する様に。

「お願い、ルイズ……私達を行かせて」

「何を仰るの、姫様!? それはウエールズ皇太子なんかじゃない! 姫様は騙されているのですよ!」

ルイズの叫びに、アンリエッタは微笑んだ。冷たく、悲しい微笑みだった。

「わかってる。そんな事はわかっているのよ、ルイズ。私の居室で唇を重ねたその時か

ら。でもね、それでも構わないの。確かに本物のウェールズ様ではないかもしれない。でも、それでも……もう二度と会えないと思っていた人が、今目の前にこうして立っていてくれる。私はそれだけで満足なのよ」

「姫様……！」

「ルイズ……貴女もいつか、誰かを本気で好きになった時にわかるわ。私はね、水の精霊の前で誓ったの。「ウェールズ様が変わらぬ愛を誓います」と。だから、私はその誓いを守る為に生きるわ。世の全てに嘘をつけても、自分に嘘はつけない。さあ、私から最後の命令よ、ルイズ。道を開けてちょうだい」

ルイズは杖を握り締めたまま、力無く腕を下ろした。アンリエッタの覚悟と決意は本物だ。そんな想いを、無下にする事が出来なかった。

ルイズがトボトボと道を譲る様に横へ歩くと、タバサとキュルケ戸惑いながらもそれについて行った。

そしてアンリエッタとウェールズが歩き出した瞬間、その前に桐生が立ちはだかった。

「逃げるんじゃないよ、アンリエッタ」

怒りの籠った言葉を口にして腕を組みながら目の前に立ちはだかる桐生を、アンリエッタは戸惑った瞳で見つめた。

「愛していた人が目の前に現れてさぞや幸せな気分だろうな。だがな、今お前の目の前にいるのはウエルズじゃねえ。ただの人形だ。愛の誓いを守る為に生きる？ 笑わせんじゃねえよ。そんなのは、辛い現実から逃げる為の言い訳だろうが。言い訳と決意の区別もつけられないガキが、一丁前に愛を語ってんじゃねえ」

アンリエッタは唇を噛み締めながら俯いた。両手がふるふると震えている。

「……カズマさん、貴方には本当に感謝しています。私の大切なルイズを守ってくれて、この国を救ってくれて。でもっ！」

絞り出す様に言葉を口にしていたアンリエッタが急に顔を上げる。その瞳は怒りで染まり、桐生を力強く睨みつけた。

「貴方に、貴方なんかは何がわかると言うのです!? 愛する人を失った苦しみが！ 痛みが！ 辛さが！ 悲しみが！ 私はウエルズ様だけを愛して生きて来た！ その人を失った時の想いもわからない人が、勝手な事を言わないでちょうだい！」

悲痛な想いを乗せたアンリエッタの言葉が街道に響き渡る。

その言葉から伝わる想いに、ルイズもキュルケも、タバサさえも胸が痛むのを感じた。

しかし、桐生は動じない。小さな溜め息をつけてから、アンリエッタを見つめた。

「良くわかるぜ、お前の気持ち」

「っ!?!」

桐生の言葉と瞳に、アンリエッタは息を飲んだ。

同情でも、憐れみでもない。桐生の目に宿っていたのは、鏡に写った自分と同じ瞳だった。

「俺もな、お姫様。ルイズの元に来る前に、多くの大切な人を失った。馴染みの店のママ、俺を兄貴と呼んで慕ってくれた男達、何時も支えてくれた兄貴分の男、俺を育ててくれた親父、兄弟の様に共に生きて来た親友、そして……」

桐生はそこで言葉を切り、瞳を閉じた。脳裏に浮かぶのは、一人の女性。いつも自分に見せてくれていた、澤村由美のあの笑顔。

桐生はゆっくりと瞼を開いた。寂しい瞳が、そこに宿っていた。

「子供の頃から、愛し続けた女も」

その一言に、アンリエッタだけではなくルイズ達も息を飲んだ。

そんなアンリエッタ達に構わず、桐生は話し続けた。

「最愛の女と親友を同時に失った時、俺は全てがどうでも良くなった。生きていくのすら投げ出しそうになった」

未だに色褪せる事の無い記憶。ミレニアムタワーの屋上で自らのケジメの為に引き金を引いた、錦山彰。自分を守る為に、凶弾に身を差し出した、澤村由美。この世で最も大切だった二人を失ったあの時の桐生は、正に今のアンリエッタと同じ心境だった。



「けどな……そんな俺に生きろと、手を差し伸べてくれた人達がいたんだ」

桐生は拳を握り締めて掲げて見せた。その瞳には、力強い光が宿っている。

自分に生きる事から逃げるなど叱咤してくれた、新しい親友、伊達真。自分に生きる意味を与えてくれた、澤村遙。この二人が自分にとって、どれ程大きな存在になった事だろう。

「人間てのはな、どんなに崖つ淵に立たされても、例え絶望のどん底に突き落とされたとしても、たった一人でも手を差し伸べてくれる人がいれば、何度だってやり直せるんだ。中にはそれに気付かず、或いは気付かない振りをして、ある者は道を誤り、ある者は自ら命を絶つちまう」

桐生は言いながらルイズを見た後、再びアンリエッタへと視線を向けた。

「お姫様……今ルイズは、家臣としてじゃ無い、国民としてもじゃ無い、一人の親友として、あんたを救おうと必死に手を伸ばしている。その手を、あんたは振り払うって言うのか？」

アンリエッタはルイズに視線を向けた。心配そうに見つめる瞳と目が合う。

何時も自分の友達でいてくれたルイズ。幼い頃から何時も助けてくれた。

ルイズが今自分に手を差し伸べてくれているのは、紛れもなく自分の為だろう。そんなルイズをアンリエッタは愛おしく思った。

しかし、それでも愛しい人への想いには敵わない。

「……………ごめんなさい、ルイズ……………」

顔を背け、辛そうに漏らすアンリエッタ。そんなアンリエッタを見て、ルイズも悲しそうな表情を浮かべる。

桐生は苛立った様子で舌打ちをすると、デルフリンガーの柄に手を掛けた。

「仕方ねえな……………聞き分けのねえガキだ。ならその悪夢、俺が覚まさせてやる」

ゆつくりとデルフリンガーを引き抜いて、その切っ先をウェールズに向ける桐生。

「見損なつたぜ、ウェールズ。魔法か何かは知らねえが、自分の愛した女を泣かせる様な真似しやがって」

「随分な言い掛かりだね。取引は決裂と見て良いのかな？」

不敵な笑みを浮かべ続けるウェールズに桐生は頷いて見せる。

「ああ、そこのお姫様を返して貰うぜ。そしてウェールズ……………お前は、俺が救つてやる」  
デルフリンガーを上段に構える桐生を見て、アンリエッタが声を荒げた。

「どきなさい、カズマ！ これは命令ですよ！」

「生憎俺の主人はあんたじゃねえ。どうしてもここを通りたきや……………俺を倒してからに  
しな！」

凄みを利かせるアンリエッタに構わず桐生が一気に間合いを詰めてウェールズに刃

を振るう。

瞬間、地面から湧き上がった水の壁がデルフリンガーの刃を受け止め、水圧でそれ以上刃が進まなくなる。

アンリエッタの唱えた「水」の魔法である。

「ウエールズ様には指一本触れさせませんわ!」

アンリエッタは持っていた杖を振るい、水の壁から鋭く太い棘の様な突起が飛び出した。

桐生はすぐさまデルフリンガーの刃の腹で受け止め、後ろへと吹き飛ばされる。

追い討ちをかける様にアンリエッタが呪文を唱えた瞬間、目の前で小さな爆発が起きてアンリエッタが吹き飛ばされた。

ルイズの唱えた「エクスプロージョン」だ。

「姫様と言えど、私の使い魔を傷付けるなら……容赦はしません!」

戦う決意を表した表情で桃色の髪を揺らしながらルイズが叫ぶ。その声に事の成り行きを見守っていたキュルケとタバサも呪文を唱え始めた。

厚い不穏な雲が空を漂い始めた宵闇の中、悲しい戦いの幕が上がった。

## 第31話

魔法による攻撃が飛び交う中、桐生はデルフリンガーを振り続けた。

黒ずくめの男達は桐生達を囲んでドットクラスの魔法を繰り出し続けている。先程ウエールズが話した様に魔力を温存させるつもりなのだろう。しかし、ドットクラスの魔法とは言え、巧みな連携が桐生達を追い詰めて行く。

先程からキュルケとタバサが男達に向かって魔法を繰り出すのが、氷の矢で貫かれようが、炎で身を焼かれようがビクともしない。ウエールズと同じく不死身な様だ。

「ちっ！ このままじゃ罅が明かねえっ！」

苛立った様子で目の前に飛んで来た「ファイヤーボール」を叩き斬りながら桐生が声を荒げる。

タバサは読めないが、ルイズとキュルケにも倒れない敵の攻撃から表情に焦りが現れる。

「何なのよ、こいつ等！ 何で倒れないのよ！」

キュルケが杖を振るい続け炎を操りながら戸惑いを含んだ声で叫んだ。

敵はそんな桐生達に構わず魔法を繰り出し続ける。やがてルイズを囲む様な形で三

人が身を寄せ合わなければならなくなるまで追い詰められてしまう。

「せめて、相手の杖を壊すなり出来れば……!」

ルイズの焦った声に、桐生はある閃きを思い付く。それが効果的な確証はないが、やらないよりはマシだと判断してタバサに振り返る。

「タバサ! 暫くの間、ルイズとキュルケを守れるか!」

タバサが桐生の方へと顔を向けて首を傾げる。

この状況で何が出来るのかはわからないが、桐生はかつてフーケとの戦いでも自分を守ってくれた人だ。

タバサは桐生を信じ、強く頷いて見せた。

「よし……暫くの間、こいつ等を頼む!」

桐生は言うなり黒ずくめの男の一人に向かって駆け出した。

「カズマっ!」

慌てて後を追いかけようとするルイズを制してタバサが二人と固まる様に身を寄せ合うと杖を振った。

瞬間、三人を囲む様に竜巻が巻き起こり、ルイズ達に向かって繰り出された魔法が次々と弾かれていく。

「てめえの相手は……俺だあつ!」

向かって来る桐生に気付いた男が杖を振るおうと腕を伸ばした瞬間、デルフリンガーの一閃が弧を描いた。

杖を桐生に向かって突き出した男は魔法が出ない事に首を傾げる。そして自分の右腕を見てみると、そこにある筈の腕が地面に転がっているのが見えた。

桐生はそのまま更にデルフリンガーを振って左腕を斬り落とし、更には両脚を斬り裂いて蹴り倒して男を達磨の様な格好で地面に転がす。

どうやら身体を傷付けられても再生はするが、切り離された場合は再生出来ないらしい。男は芋虫の様にモゾモゾと身体を動かしている。

「悪く思うなよ……」

桐生は手足の無くなった男に苦しい表情で呟くと、他の男目掛けて駆け出した。

仲間がやられた事に気付いた男達は、標的をルイズ達から桐生へと変えて魔法を繰り出した。

桐生は素早い動きとお得意のスウエイで魔法を避けながら次々と男達の手足を斬り裂いて行く。杖だけを破壊しても万が一予備を持っていた場合は意味が無くなってしまし、脚だけでも残れば壁となつてウェールズを守るに違いないと思つた桐生の決断は功を奏した。

男達はみんな両手両脚を失つた状態で地面を転がる事になった。

まるで地獄絵図の様にも見えるが、それよりも手足を無くしても血も流さず動き続ける男達に桐生はゾツとした。

「ん〜……」

不意に、デルフリンガーから唸り声が上がって桐生は視線を其方に向けた。

「どうした、デルフ？」

「あ〜……今ぶった切ったこいつ等なんだけどよ、なくんか……引つかかるんだよなあ……」

「引つかかる？」

首を傾げながら問いかける桐生に、デルフリンガーは柄をカタンと小さく揺らして見せた。

「何なんだろうなく……あ〜、思い出せねえ！ 人間が痒い所に手が届かねえ時ってこんな気分なんだろうなく」

「カズマ！ 大丈夫!？」

呑気なデルフリンガーの声を掻き消す勢いでルイズが桐生に駆け寄る。

桐生は答える代わりにルイズの頭を優しく撫でた。

「流石はダーリンね！ これでこいつ等は手も足も出ないわ！」

「……出ないと言うより無い」

転がる黒ずくめの男達を少し気味悪そうに見ながら言うキュルケにタバサが静かに口を挟む。

「ああ。だが、問題の奴はまだ残ってる」

桐生は視線をウエルズに向けてながら言う。

視線の先のウエルズは倒れた仲間の事等気にしていない様に微笑みながら拍手をしていた。

「素晴らしい動きをするね、ミス・ヴァリエールの使い魔殿。彼等はアルピオンの中でも指折りのメイジだったんだが、平民でありながら勝利を手にするとは驚きだよ。あの「マリー・ガラント」号で出会った時から只者ではないと思っていたが……想像以上だね」

「ありがとうよ。これで形勢逆転だな。姫様を返せ、ウエルズ！」

何処か余裕な態度を取るウエルズに凄味を利かせながら睨み付ける桐生にアンリエツタが身構える。

しかし、ウエルズは穏やかな微笑みを浮かべたままチラリと空を眺めると、首を振って見せた。

「いや、まだ君達が有利になった訳じゃないと思うよ。と言うより……君達が不利になったと言った方が正しいかな？」



「何だと?」

言葉の真意が掴めない桐生に対して、ウエールズは空へと指を差して見せる。

警戒を怠らないまま天を仰いだ桐生の額に、ポツリと大粒の雫が降りかかった。

次第にポツポツと大粒の雨が降り始め、あつと言う間に本降りになると辺りの路面を濡らし始めた。

「そんな……こんな時に!」

キュルケが心底悔しそうに声を荒げながら天を睨み付ける。

「どうやら始祖ブリミルは僕達を祝福してくれている様だ。こんな時に降ってくれるとは、まさに天の恵みだね」

「どう言う事だ?」

事態が掴めない桐生がルイズに問い掛けると、ルイズは悲しそうに俯きながら首を振った。

「この雨のせいで、姫様の魔法は強力な物になるわ。「水」系統のメイジにとって、雨はまさに恵みなの。絶対の勝利を約束するね……」

白俯くルイズを他所に、アンリエッタがウエールズの前に出てルイズ達に叫ぶ。

「見なさい! この雨で私達の勝利は揺るがない物になったわ! 私は貴方達を殺したくない! 今すぐ退きなさい!」

キュルケもタバサも、雨の力を得た「水」系統のメイジの強さを知っている。最早勝ち目が見えない戦いから戦意が失われて行くのを感じる。

ルイズは雨に打たれながら膝を突くと、力無く両手を地面に預けて四つん這いの格好になった。

「……まで、なの？ 私達じゃ、姫様は救えないの……う。」

辛そうに呟くルイズを見て、桐生はルイズの肩を強く掴んだ。

顔を上げたルイズの瞳に映ったのは、まだ力強い光を秘めた桐生の瞳。

「諦めるな、ルイズ。アンリエッタを救いたいんだろう？ 大切な友達を、救いたいんだろう？ あのお姫様を救えるのは、親友であるお前しか居ないんだ」

桐生の言葉に弱々しくも頷き立ち上がるルイズ。

桐生はルイズが立ち上がったのを見送ると、ウェールズへと視線を向けた。

魔法の力はこの数十日の期間で思い知っている。今の状況がどれだけ不利かまではわからないながらも、ルイズの様子から絶望的なのは手に取る様にわかった。

しかし、だからと言って諦める訳にはいかない。今ここでアンリエッタを行かせてしまえば……きつと取り返しのない事になる。そんな事はさせたくない。

「あゝ、なるほど……思い出したわ。」

重苦しい空気の中、呑気な声が桐生の右手から流れる。

四人は声の主であるデルフリンガーに一斉に視線を向けた。

「何だ、デルフ？ 何の話だ？」

「いや、悪いな、相棒。長生きし過ぎつとどうも物忘れが酷くつてよ。でも大丈夫だ。もう完璧に思い出したぜ」

「だから、何の話をしている？」

一人納得した様子で話すデルフリンガーに苛立った声で問い掛ける桐生。

「なに、あいつ等は俺と同類つて事さ。四大系統の魔法で動いてんじゃねえ。「先住」の魔法だ。ブリミルもあれにやあ手を焼いてたもんだぜ」

「何が言いたいのよ、このナマクラ！ 何か案でもあるつて言うの!？」

「人の、いや、この場合は剣のか。ともかく話は最後まで聞くもんだぜ、能無し娘っ子。せっかく「虚無」の使い手だつつうのに「エキスプロージョン」ばかり使いやがつて。まるで馬鹿の一つ覚えじゃねえか。この間みてえな派手な物を出せんのは年に一度あるかどうかだ。今のお前さんの「エキスプロージョン」じゃあ花火にもなりやしねえよ」

「だったらどうすればいいのよ!？」

「お前さんの持つている「始祖の祈禱書」は飾りかい？ ちゃんと読んでみな。ブリミルの事だ。何かしらの対策を書いてある筈さ」

ルイズは「始祖の祈禱書」のページを捲つてみた。しかし、「エキスプロージョン」の

次のページは相変わらず真っ白だ。

「何も書いてないじゃない!」

「本てのはページが沢山あるんだ。ちゃんと全部捲つて探しな」

ルイズが更にページを捲ると、文字が浮かび上がっているページが見つかった。

「デイスベル、マジック?」

「そいつだ。「解除」の魔法さ。これであの人形も力を失う筈さ」

桐生とルイズはお互い顔を見合わせて頷き合うと、アンリエッタ達に身体を向けた。

アンリエッタは唇を噛み締めながらルイズ達を見つめた。

この雨のお陰で退いてくれると思っていた。しかし、先程まで戦意を失っていた筈のルイズ達の瞳に再び強い灯火が灯っているのが見える。

アンリエッタは一度俯くと、深い溜め息を漏らしてから顔を上げた。その瞳には強い決意が宿っていた。

出来る事なら彼女達を、特にルイズを殺したくはなかった。しかし、彼女が自分の行く手を阻むと言うのなら……。

アンリエッタが呪文を詠唱し始めると、ウェールズの詠唱が重なる。その詠唱の際、ウェールズがアンリエッタに冷たい笑みを浮かべて見せた。

その温度に気付きながらも、アンリエッタの心はウエールズの笑顔に胸を熱くさせた。

徐々に二人に降り注ぐ雨粒は固くなって集まり始め、渦を巻き始めた。

「水」、「水」、「水」、更に「風」、「風」、「風」。

「水」と「風」の六乗。

同じトライアングルクラスと言えど、これほどまでに息が合った詠唱はほぼ有り得ないと言つても過言では無い。しかし、王家の血はそれを可能にする。

そして完成させる。王家の者のみが見える「ヘクサゴン・スペル」が。

詠唱は干渉し合い、巨大な竜巻となって二人を包む。

竜巻は轟音と共にルイズ達に向かって進み始める。

まるで謳う様に呪文を詠唱し始めたルイズ。

桐生の身体にルイズの声が雨と共に染み込んでいく様な心地良さが広がっていく。

「始祖の祈祷書」に書かれた古代のルーン文字を読むルイズの集中力は計り知れない。

今降り掛かる雨も感じていないのかも知れない。

「ちよつと……こんな時にこの子、何してんの？」

「気にするな。ちよつとばかり、伝説の真似事をしているのさ」

戸惑った様子でルイズを見ながら言うキュルケに、桐生が笑みを浮かべながら答える。

桐生はデルフリンガーを振るって雨粒を刃で弾くと、目の前で荒れ狂う巨大な竜巻を見つめた。

チラリとルイズの方を見ると、まだまだ詠唱が続きそうだ。

「どうやら、敵さんの方が早いみてえだな」

デルフリンガーが相変わらず呑気な口調で言う。

「まあ、「虚無」の魔法は時間が掛かっからなあ。その間はどうしても無防備になっちゃう。そんな主人を守るのがー」

「俺だ、と言いたいんだろう?」

何処か笑みが含まれた声で桐生が答える。

目の前の竜巻に対して浮かぶのは恐怖では無い。そんな物よりも、希望に近い感情が桐生の中を駆け巡っていた。

「伝説の真似事、ね。なら、その伝説に掛けるしかないわね。けど、あの竜巻はどうするのよ? いくら何でもあの竜巻は……あたしやタバサじや防げ無いわ」

桐生はなおも不安そうに言うキュルケとタバサに振り向くと、二人の頭を優しく撫でた。

濡れた髪を梳く様に掻き分け、太く硬い指が優しい感触を二人に与える。

「心配するな。お前等は、俺が守る」

桐生の言葉はまるで父親の様に頼もしく、雨で冷えた身体を温める様な温かさが秘められていた。

「……お願い」

タバサが桐生の手を強く握りながら呟く。

「頼んだわ、ダーリン。あたし達を……守ってね」

キュルケが桐生に抱き着くと、首筋にそつとキスを落とす。

桐生は二人に頷き掛けると、再び竜巻に身体を向けた。

「相棒、どうやら敵さんは準備が整った様だぜ？」

巨大な竜巻から吹き付ける冷たい湿った風が肌を打ち付けてくる。弾けた様に飛んで来た水が桐生の頬を掠めると、鋭利なナイフで付けられた様な切り傷が出来て血が滲んだ。

やがてそのまま渦を巻いていた竜巻は此方に向かってゆっくりと動き出した。

此方に向かいながら地面と周りの木々を巻き込みながら進んで来る光景はまるで巨大な津波にも見える。

「これは……手が掛かりそうだな」

桐生はゆつくりと竜巻に向かって歩き出す。次第に、身体から青いヒートの光が迸り始めた。

「言つとくがな、相棒。あの魔法は今までの魔法とは訳が違い。生半可な痛みじや済まねえ。相棒……覚悟は良いか？」

「誰に言つてんだ、デルフ？」

桐生はデルフリンガーを軽く掲げると、笑みを浮かべて見せた。

「俺はルイズの、「虚無（ゼロ）」の使い魔だぞ。あんな竜巻、敵じやねえよ。」

桐生は深呼吸をしてから一気に距離を詰めて竜巻をデルフリンガーで受け止めた。

デルフリンガーの峰を左腕で抑え付け、脚を踏ん張つて衝撃波の様な風圧に耐える。

「くっ……いぐっ、くうっ……い！」

水と風が桐生を押し潰そうと襲い掛かる。

爪が剥がれ、数本の指が折れた。

脛が裂け、視界が赤く染まる。

ブツリと言う音と共に耳が千切れる。

唇が裂けて口の中で血の味が広がる。

左腕が肘から折れ、激痛が身体に走る。

骨が軋み、筋肉が悲鳴を上げている。



肺が熱い。呼吸がし辛い。だが、

「それがどうしたあつ!」

デルフリンガーの峰に頭突きを繰り出し、額で刃を抑えながら一歩ずつ前に進み出す桐生。

「うおおおつ!」

魔法の端にいた桐生の身体は完全に魔法の中へと入り込み、より強い衝撃が身体に襲い掛かる。

「よ、止せ、相棒! これ以上進んだら相棒の身体がー!」

「うるせえっ!」

デルフリンガーの制止の声を遮り、少しずつながら一歩ずつアンリエッタ達に向かって歩み寄る桐生。

「痛くねえ……! 痛くねえんだよ、こんな傷。こんな傷なんかより……!」

桐生の脳裏に浮かぶのは、手を差し伸ばしながら辛そうに顔を歪めるルイズ。そして、間違っているとわかりながらその手を掴めず苦しそうにしているアンリエッタの姿だった。

「必死に手を伸ばしてるルイズと、悪夢にうなされて苦しんでいるアンリエッタを見る方が、よっぽど痛えんだよ!」

叫びながら歩を進める桐生の身体から迸っていた青いヒートが赤色に変わる。

身体は当に限界を迎えている。しかし、桐生の中の強い想いが、倒れる事を許さなかった。

呪文を詠唱しているルイズの頬に、何か冷たい液体が降りかかった。

呪文の詠唱に集中しながら指で液体を拭くと、その指が赤く染まる。桐生の血だ。

目の前には巨大な竜巻を受け止めている桐生の姿が見える。少し遠目でわからないが、とんでもない傷を負っているに違いない。

ルイズは呪文の詠唱を止め、桐生に駆け寄りたくなる衝動を必死に抑えた。

今、桐生は自分と、姫様の為に身体を張っている。ここで詠唱を中止してしまつては桐生の想いを無駄にする事になる。

不意に、ルイズの頭の中で桐生の声が木霊した。あの日、ギーシュとの決闘の時に言っていた言葉が。

「お前は俺の主人なんだろう？　なら、俺を信じろ」

ルイズの瞳に強い輝きが灯った。

そうよ、私はカズマの主人なのよ。使い魔を信じないのは、メイジのする事じゃないわ！

魔法を完成させたルイズは弱まった竜巻の隙間からウエールズに向かって杖を振るった。

デルフリンガーに吸収させて弱まってく竜巻の中、桐生は後ろから暖かい何かを感じた。光とも、風とも感じるその感覚は魔法の完成を桐生に知らせた。

薄れ行く意識の中、桐生は不思議な光景を見た。

それは幻だったかかもしれない。しかし、桐生は確かに見たのだ。

桃色の髪の小さな女の子と淡い紫色の髪の小さな女の子が、しっかりと手を握り合う姿を。

竜巻が掻き消えた後、桐生は得体の知れない満足感を感じながらその場に倒れ込んだ。

ルイズが杖を振るった瞬間、ウエールズが糸の切れた操り人形のように力無く倒れ込んだ。周りの手足が無くなった男達は動かなくなると、塵となって消えていった。

「ウエールズ様！」

強力な魔法の使用によって疲労した身体に鞭を打って倒れたウエールズに駆け寄るアンリエッタ。ウエールズの肌はまるで地割れした地面の様にヒビが入っていた。

生きている人間の物ではない。「アンドバリの指輪」によつて作られた偽りの命の成れの果てだ。

ルイズの唱えた「デイスperl・マジック」の力によつて、「アンドバリの指輪」の効果が消えた事はアンリエッタにはわからない。しかし、感覚でわかる。あるべき物があるべき場所に帰つたのだと。

ウエールズの身体を抱き締めるも、伝わるのは無機質な冷たさだけ。

「姫様……」

聞き慣れた声からアンリエッタは顔を上げる。

そこには、疲れた表情を浮かべてルイズが立っていた。

アンリエッタはすぐさま顔を背けた。

ルイズの顔をまともに見る事が出来ない。幼い頃からずっと自分を慕ってくれて、常に味方でいてくれたルイズ。その彼女を自分は殺めようとしたのだ。どんな顔をして良いかわからない。

「ルイズ……私は、私は何て事を……」

「目は……覚めましたか？」

「お願い、教えてちょうだい、ルイズ。私はどんな顔をして貴女の目を見れば良いの？」

「どんな謝罪をすれば、私は許して貰えるの？」

「……私には、わかりません。ですが、今は姫様のお力が必要です。」

ルイズはアンリエッタの手を取ると、倒れた桐生の元へと駆け出した。

キュルケとタバサが見守る中、桐生は地面に横たわっていた。身体中はボロボロで、ジャケットやストラックスには血が滲んでいる。折れた左腕は、不自然な方向に曲がってしまっている。

「酷い怪我……」

「カズマは、あの竜巻をたつた一人で受け止めてくれました。カズマの傷を治すには、姫様の「水」の力が必要です。お願いします」

アンリエッタは頷くと、杖を振るつた。

瞬間、桐生の身体が水に包まれた。暫くすると水がゆっくりと消えて行き、露わになった桐生の身体はまだ所々傷が消えていない物の、左腕は元の形に戻っていた。

「カズマ……」

ルイズが屈んで桐生に顔を近付けると、痛みが残るも動く様になった左腕を動かしてルイズの頭を撫でながら桐生が目を覚ました。

「良く頑張ったな、ルイズ」

ルイズは小さな笑みを浮かべながら頷いた。

「カズマさん……私……」

申し訳無きそうに俯きながら呟くアンリエッタに、桐生は身体を起こすと顎をしゃくって見せる。

「今は、ウエールズの元に行こう。このままじゃあ、あいつが報われねえ」

アンリエッタはゆっくり顔を上げて頷いた。

桐生達はウエールズの元へと向かうと、寂しそうな笑顔で此方を向くウエールズが口を開いた。

「ありがとう、ミス・ヴァリエールの使い魔殿。僕は……とんでもない過ちを犯す所だった」

「気にするな」

「ウエールズ様！」

アンリエッタが急いで駆け寄りウエールズの傷を癒そうと杖を振るった。

しかし、一度死んだ者に治癒の魔法は効果がない。

「無理だよ、アンリエッタ……この身体はもう癒せない。僕は、本来ここにいるべき人間じゃないんだ」

「そんな……！ やつと、やつとお会い出来たのに……！」

ウエールズはアンリエッタの頬に手を伸ばした。しかし、その手は指からポロポロと崩れて塵へと変わってしまう。

「どうやら……もうそんなに長くはない様だ。最後に……あの場所へ、あのラグドリアン湖へ連れて行ってくれないか？ アンリエツタ……君にあそこで誓って欲しい事があるんだ」

アンリエツタが懇願する様な瞳で桐生達を見つめた。

桐生は何も言わずウエールズの身体を抱きかかえた。魂が半分程消えかかった身体は酷く軽く感じた。

「タバサ、頼む」

桐生の言葉に頷いたタバサが口笛を鳴らすと、空で待機していたウインドドラゴンが舞い降りて来た。

桐生達は風竜に乗り込むと、弱まってきた雨の中ラグドリアン湖を目指した。

ラグドリアン湖に着いた頃には雨は止んでいた。

あれからどれだけの時間が経ったのだろう。空が僅かに白み始めている。

桐生はウエールズを抱きかかえたまま、アンリエツタと共にラグドリアン湖の中へと歩いて行った。

腰の辺りまで沈みかけた所で、桐生はアンリエツタにウエールズを預けた。

「最後は、お前が抱いてやってくれ。愛する女に抱かれたまま逝けるほど、男にとっての

幸せはないからな」

桐生はそれだけ言うのとルイズ達の元へと戻った。

アンリエッタはウエールズを強く抱き締めながらヒビ割れた頬を撫でた。ザラついた感触が指先に伝わる。

「ウエールズ様、ラグドリアン湖に着きましたよ。私達が初めて出会った、あの場所に」  
「ああ……そうか。」

ウエールズは虚ろな瞳で微笑んだ。もう、目は見えていない様だ。

「僕はね、アンリエッタ。あの日君と出会った時に思ったんだ。全てを捨てられたら、どんなに良いのだろうか。富も権力も必要ない、ただ小さな庭付きの家で二人で過ごせたらって」

「そう思ってた下さってるなら、何故あの時愛を誓って下さらなかったの？ 私は他に何もいらない、貴方様の愛さえ貰えればそれで幸せだったのに」

「君を不幸にすると思つて、僕はその言葉を言えなかった。僕等は王族だ。望む、望まぬとも、必ず戦乱の渦の中心となつて君臨しなければならなくなる。そんな男が一度誰かに愛を誓えば、その相手の女性は必ず敵に狙われる。今回の様にね」

ウエールズの身体から、少しずつ生気が無くなつていくのがアンリエッタの掌に伝わってくる。



溢れそうになる涙を必死に耐えながら、アンリエッタは少しでもウエールズとの最後の会話を楽しもうとした。

「アンリエッタ……今でも僕を、愛してくれているかい？」

「当然ですわ、ウエールズ様」

「なら、誓ってくれないか？　僕を忘れると。僕を忘れ、他の男を愛し、幸せになると。

水の精霊の前で、誓ってくれ」

アンリエッタは言葉を失った。

そんなアンリエッタに、ウエールズは弱々しく懇願する。

「お願いだ、アンリエッタ。僕は、もう間も無くこの世から消える。その前に……君の誓いを聞かせてくれ」

「無理よ……そんな事、言える訳ないじゃない！　他の人なんて考えられない！　私は……私は、貴方を、ウエールズ様だけを愛してきたのに！」

「アンリエッタ……もし誓いを立ててくれなければ、僕の魂は永遠にこの地を彷徨い続ける事になる。君は……愛した男をこの世に縛るつもりかい？」

「でも、でもっ！」

「アンリエッタ……君はまだ若い。これからも多くの出会いと別れを繰り返す筈だ。その中にきつと……僕以上に愛せる男がいつか現れる。だから、誓ってくれ……」

アンリエッタは消え入りそうなウエールズの声に身体を震わせて涙を堪らえながら、虚ろになったウエールズの瞳を見つめた。

「……誓います。だから、貴方も誓って。私が誓いを口にした後、魂となつても私を愛し続けると」

「ああ……勿論だ。誓うよ……。」

アンリエッタは白みを増して太陽が顔を出しかけている空を仰ぎ、瞳を閉じた。

「私は愛していたウエールズ様を忘れ、他の殿方を愛する事を誓います」

アンリエッタの誓いの声がラグドリアン湖に響き渡った。まるで、悲しい歌が奏でられた様に。

「さあ、今度は貴方の番ですわ。愛を誓って下さいまし。その瞬間だけは、私は貴方を強く抱き締めますわ。それくらいは許してくれるでしょう？」

瞳を開き、ウエールズに顔を向けたアンリエッタの顔が悲しみに染まった。

ウエールズは幸せそうに微笑みを浮かべたまま事切れていた。

もうどんなに揺さぶろうと、声を掛けようと、目覚める事も答えてくれる事もない。

「本当に、意地悪な人。最後まで、誓いの言葉を口にしてくれないんだから……」

ウエールズの身体が足元から徐々に崩れ、塵へと変わっていく。優しい微笑みを浮かべた顔が崩れ落ちると、吹いた風が塵を揚げていった。

「…………あああああああつー！」

先程まで堪えていた涙が溢れ出し、声にならない声でアンリエッタが泣き叫ぶ。瞳から流れ出る涙がラグドリアン湖の水面に零れ落ち、小さな波紋を何個も拡げる。愛する男を失った少女の叫びが、辺りに哀しく響き渡った。

ラグドリアン湖の岸边でアンリエッタを見守っていたルイズは、隣に立つ桐生の手を強く握った。

「カズマ……………これで、良かったのかな？」

泣き叫ぶアンリエッタを見つめたままポツリと呟いたルイズに桐生が顔を向ける。

「あのまま姫様を行かせてあげた方が、良かったのかな？ 私達は、夢を見ていた姫様を無理矢理起こしちゃったんじゃないかな？」

辛そうに漏らすルイズの手から自分の手を離すと、桐生はルイズの頭を撫でた。

空から起きたての太陽が光を地上に降り注がせ、アンリエッタが立つラグドリアン湖の水面を美しく輝かせた。

「明けない夜がないように、覚めない夢もないんだ。それが良い夢だろうと、悪い夢だろうとな。アンリエッタにとってあの夢が良い夢だったのか、悪夢だったかはわからねえ。けどな、お前は正しい事をした。それだけは間違いないじゃねえよ！」

「……うん」

桐生の言葉にルイズが小さく頷いた。

桐生はアンリエッタをルイズ達に任せて少し森の中へと足を進めた。

桐生は一際太い樹を見つけると、硬い幹目掛けて拳を叩き付けた。打ち付けられた衝撃から樹がグラグラと揺れ、木の葉が舞い落ちる。

「レコン、キスタ……！」

吐き出す様に声を漏らした桐生の瞳には、怒りの炎が宿っていた。

## 第32話

今日も大地を焼かんばかりに熱い光を降り注がせる太陽が空に高く上がっている昼、トリスティン魔法学園にも夏休みが訪れた。

午前の授業で今学期の締め括りとし、本格的な夏休みとなる明日に備えて帰郷する者への配慮として、午後は荷造りや仲間への挨拶への自由時間となった。

終業の鐘が鳴って三十分程。殆どの学生達が今学期最後の昼食を楽しんでいる中、ルイズの部屋では二人の少女が睨み合っていた。

一人は部屋の主でもあるルイズ。何時ものブラウスにスカート姿でループタイとマントを外した状態で腕を組んで目の前の少女を睨んでいる。胸元に垂らされた桐生からのプレゼントであるネックレスの翡翠色の石が、時折窓の外の陽の光に反射して神秘的な輝きを放つ。

もう一人はシエスタだ。何時ものメイド服ではなく、草色のブラウスにブラウンのスカートと言った普段着だ。メイド服ではあまりわからない、そこそこに豊満な乳房がブラウスのお陰か主張をしている。以前メイド仲間から言われた、「脱いだら凄い」の体型は伊達ではない。

事の発端はこうだ。授業が終わったルイズは桐生と昼食へ向かおうと部屋へと向かった。桐生には部屋の掃除をお願いしていたので、居るだろうと思つて部屋の扉を開けると、そこには桐生ではなくシエスタが立っていた。

シエスタ曰く、どうやら桐生はコルベルに呼ばれて会いに行つてゐるらしい。なのでルイズは桐生を迎えに行こうとした所、シエスタに呼び止められた。

シエスタはどうかやらの夏休みを利用して桐生をタルブの村へ招待しに來たらしい。しかし、桐生はルイズの断りなしには行けないとだけ伝えてコルベルの元へ行つてしまつたようだ。だからシエスタはルイズに、桐生がタルブの村に行ける様に許可して欲しいと言つて來た。

その瞬間から、ルイズの機嫌はよろしくない。桐生が他の女性と一緒に出掛ける等許せない。

「……で？」

話を聞いておきながら少しドスの利いた、ヤクザの様な声でルイズがシエスタに問い掛ける。

「ですから、カズマさんにも休日が必要なだと思つてです。いつつもいつつも部屋の掃除やら洗濯やらさせられているカズマさんをタルブの村に招待して、普段の仕事に対する労いをしたいんですよ。」

普段のシエスタならルイズに、貴族に対してこの様な強気な態度等取れない。しかし、恋する少女はその愛する男を勝ち取る為なら強気にも、小悪魔にも、大胆にもなれるのだ。

「何であんたの村にあいつを呼ぶ必要があんのよ？ だいたいそんなの、あんたのご両親だつて許さないんじゃないの？ 娘がまた男を連れて来るなんて……要らない誤解を招くだけじゃない。」

「そんな事ありませんよ。私の父も母もカズマさんの事を凄く気に入ってくれてるんですよ。きつと歓迎してくれる筈です。それに……誤解してくれるなら私は好都合です。」

「ああ？」

シエスタの一言に只ならぬ感情を感じて更にドスの利いた声と目付きでシエスタを睨み付けるルイズ。今なら神室町でもチンケなチンピラくらいなら目だけで圧せそうな勢いである。

しかし、シエスタは動じない。僅かながら何処か勝ち誇った様な笑みが口元に浮かんでいる。

「何よ、それ……どう言う意味よ？」

「いえ、別に？ ただ、カズマさんがもし私と一緒に村で住んでくれたらきつと一

生懸命働いて頑張ってくれるんだろなああって。何処かの誰かさんみたいに突然クビにする様な人も居ないでしょうし？」

「なっ!？」

ルイズが思わず声を上げる。ずっと心の奥で気にしていた事を突かれて組んでいた腕も離れてしまう。

「あ、あ、あんた……!」

「え? どうしたんですか? 嫌だなあ……私、ミス・ヴァリエールの事だなんて一言も言っていないですよ? ただまあ……あんな良い人をクビにするなんて理解出来ないな、とね? あ、もちろんこれもミス・ヴァリエールに対してじゃないですよ? まさか、ねえ? 平民の私が貴族の方に対してそんな事……ねえ?」

「(こ、この……!」

ルイズの身体がプルプルと震え始め、見えないオーラの様な物が部屋の中に充満する。今ここに居る二人の少女は、見方によつては龍虎が睨み合っている様に見える者もいるかもしれない。

今にも取っ組み合いが始まりそうな雰囲気の中、開かれた窓から一羽のフクロウが入って来た。二人の視線を受けながらフクロウは迷わずルイズの左肩にとまり、羽で頭をペシペシと叩いて来る。



「痛っ！ な、何なのよ、このフクロウは!？」

痛みを訴えるルイズがフクロウに顔を向けると、嘴で書簡を咥えているのが見える。ルイズは書簡を手にとると、押されている花押に表情を変えて書簡を開いた。

「何ですか、そのフクロウ?」

ルイズの表情の変化から毒気が抜かれた様に何時もの表情で首を傾げながら問い掛けるシエスタ。

ルイズは首を振って書簡を閉じると、シエスタに顔を向けた。

「シエスタ……悪いけど、カズマの事は今は諦めてちょうだい。王宮からの呼び出しが入ったわ。この一件は、私とカズマでやらなくてはならないの」

ルイズの表情から深刻さを感じたシエスタは仕方なしに口をつぐんだ。

目的を達成したフクロウが窓から飛び出すのを見送ったルイズはそのままコルベールの所にいる桐生を呼びに行こうとしてドアノブに手を掛けた所で、再びシエスタに向き直った。

「言つとくけど、カズマは私の使い魔なのよ。あんたに、ううん、他の誰かにだって、絶対に渡しはしないわ」

言いたい事を言つて少し満足したルイズがドアを開いて出て行こうとするのを、シエスタの言葉がそれを阻んだ。

「……使い魔だから、ですか。ミス・ヴァリエール、貴女は思っていた以上に弱虫なんです  
すね」

「何ですって?」

聞き捨てならない一言にルイズがシエスタを睨み付ける。

しかし、そんなルイズの視線にもシエスタは動じない。ルイズとは違う、真つ直ぐな  
目でその視線を見つめ返す。

「使い魔だから、主人だから。そんなの自分の気持ちを隠す為の言い訳じゃないですか。  
素直にカズマさんの事を好きって言う勇気がないだけでしょう?」

「……随分知った様な口を利くじゃない」

「私は貴女と違って自分に素直なんです。それに……貴女には言つてませんでしたが  
ど、私は一度カズマさんに告白しているんですよ」

「っ!」

シエスタの言葉に言葉を詰まらせながら狼狽するルイズ。そんな話、桐生から聞いて  
いない。

シエスタはそんなルイズに構わず寂しげな笑みを浮かべて見せた。

「結果は……見ての通り、振られちゃいました。あの人には帰る場所がある。それを理  
由に断られてしまいました」

ルイズの胸の中が酷くざわめいた。ホツとした気持ちもあるが、何処かシエスタを羨ましく思う部分もある。

自分は、本当に桐生の事が好きなんだろうか。ワルドの時の様な、ただの憧れに過ぎないのか。それとも、常に側に居てくれる桐生への安心感が彼を離れたくない理由になっっているのだろうか。

しかし、桐生の側に居る時、桐生と手を繋いだ時、桐生に抱き締められた時、感じるあの胸の高まりはワルドの時とは違う温かさを秘めている。

「でも、私はカズマさんを諦めた訳じゃありません。カズマさんが私を選んでくれなかったのは、私が嫌いと言う理由じゃないからです。だからミス・ヴァリエール……この際だからはっきりと宣言します」

自分の気持ちの確認に気を取られていたルイズの思考はシエスタの声によって覚まされた。

シエスタは胸元に手を当てながら穏やかな表情でルイズを見つめた。

「私はカズマさんに身も心も捧げる覚悟は出来ています。もし、カズマさんの心が貴女から離れたら……私は遠慮なく貴女からカズマさんを奪います」

シエスタの戦線布告にルイズの中で炎が燃え上がる。

私からカズマを奪う？ そんな事……させる訳ないでしょ！

「上等よ。出来るもんならやってみなさい。私は誰にもカズマを渡す気なんてないんだから」

ドアを閉めてコルベールの元へと向かうルイズ。その足取りは心なしか焦りを感じさせる物があつた。

一人ルイズの部屋に残つたシエスタは小さな溜め息を漏らして俯いた。

「あくあ、やっぱり駄目かあ。カズマさんと一緒に私の家でお茶でも飲みたかつたのになあ」

心底残念そうに呟いたシエスタはそつとルイズの部屋から出て行つた。

共に昼食を終えた桐生とコルベールは、研究所の外で紅茶を飲んでいた。

強い陽射しを遮る様に周りに生えた木々の葉が作る影のお陰でそんなに暑さを感じない。時折吹く熱を含んだ風は都会のベタついた物とは違って爽やかで心地良い。

「そんな事が……」

コルベールは紅茶の入つたカップを机に置くと驚いた様に声を漏らした。

桐生はこの間のアンリエッタの救出劇について話していた。もちろんルイズが「虚無」の使い手である事は伏せておいた。

コルベールはまだルイズが「虚無」の使い手である事は分かつていない。授業でもル

イズは未だに失敗が多い為、幸か不幸かそれがカモフラージュとなつてみんな「ゼロ」のルイズと呼び今まで通りの日々を送っている。その「虚無(ゼロ)」の本当の意味もわからぬまま。

コルベールは信頼出来る男だが、今はまだルイズの事を話すのは控えておいた。何処に目があり、耳があるかわからない。少なくともこの学園の中では話すのを止めておいた。最も、研究熱心なコルベールの事だ。いずれは自分の「ガンダールヴ」の力からルイズの本当の力に気付くだろう。

「レコン・キスタ」……噂には聞いていましたが、まさか死者までも操るとは。何と業の深い」

「ああ。たまたま魔法が切れたから良かった物の、正直危なかったぜ。上か、それともその側近かはわからないが………とんでもねえクス野郎がいるのは間違いないな。人の心を弄ぶ様な真似しやがって……!」

今でも耳に残る、アンリエッタの泣き声。言葉では表せない程の悲しみを味わうには若すぎる少女の声は、桐生の心に怒りの炎を灯させる。

気付かぬ内にカップを持つ手に力が入り、ピシリとカップの取っ手にヒビが入って慌てて机に置いた。

「ミス・ヴァリエールも此度の戦争に?」

「形はどうあれ、アンリエッタを「レコン・キスタ」から取り戻したのはルイズだ。一応内密にはなっているが、王宮であいつの活躍は少なくとも広がっているだろう。恐らく……参加は免れないだろうな。何よりルイズがやる気になっている」

桐生は複雑そうな表情でそつとカップを掴むと、中の紅茶を一気に飲み干した。コルベールがお代わりを勧める様にポットを掲げて見せるが、桐生は小さく首を振って断つた。

「カズマ殿は……ミス・ヴァリエールが戦争に参加するのを良しとするのですか？」

コルベールは怪訝そうな表情で桐生を見つめながら問い掛ける。

桐生はコルベールの目から視線を外して少し考え込む様に黙ると、小さな溜め息を漏らしながら首を振った。

「出来るならルイズには戦争に参加して欲しくない。あいつや子供達の手を汚させない様にするべきだと思う。それに戦争なんてない方が良いに決まってる。あれほど下らねえ事なんてないからな。だが、俺自身は「レコン・キスタ」が許せねえ。出来るなら今回の首謀者を一発ぶつ飛ばしてやりてえよ」

桐生は握り拳を作ると吐き出す様にコルベールに答える。

コルベールはそんな桐生を見て安心した様な、困った様な複雑な表情を浮かべながら紅茶を呷った。

「……少し、安心しました。カズマ殿が戦争を良しとしない人で良かった。戦争はどんな形でも良かった物なんてありはしません。そして同時に……絶対の悪も善も、戦争には存在しないと思います」

桐生はコルベールを静かな眼差しで見つめた。まるでコルベールの真意を問い掛ける様に。

コルベールはそんな桐生を見つめ返し、少し間を置いてから口を開いた。

「私は戦争に善悪等存在するとは思っていません。それぞれの思想、それぞれの大義、それぞれ理由を掲げて戦争は起こります。我々の正義は相手にとって悪であり、時としては相手の悪が世間からは正義と見られる場合もあります。私もあの日……罪を犯した日は正しい事をしたと思った。しかし、結果は決して許されない事をしてしまった」

コルベールは桐生から視線を逸らして苦しそうに顔を歪めながら言葉を紡ぐ。そして重々しく首を振ってから悲しげな笑みを浮かべて見せた。

「もちろん私も戦争は決して正しい事だとは思ってません。しかし、大切な物を奪い合う形になってしまふ以上、お互いが「自分が正しかった」とは決して言えないと思うのですよ。だから私は、復讐もまた誰かを殺める為には正しい理由だと思うのです」

「コルベールさん、あんた……」

コルベールの表情、言葉から何か思い詰めている物を感じた桐生が問い掛け様とした

所、

「カズマあつー！」

後ろから聞き覚えのある声が掛けられて其方へと振り返る桐生。

見ると少し先から桃色の髪を揺らしながら此方へ走って来るルイズの姿が見えた。心なしか何処か焦っている様にも見える。

「おやおや……ご主人のお出ましですな、カズマ殿。今日は昼食だけでなく食後の茶まで付き合つて頂いてありがとうございます。つまらない話を聞かせてしまいましたね」

「いや……そんな事はねえさ」

桐生は苦笑を浮かべながら立ち上がり、此方に向かって来るルイズを出迎えた。

ルイズはまずコルベールに向かつてぺこりと頭を下げた。

「すみません、ミスタ・コルベール。ちよつとカズマに用がありますのでこの辺でお暇させて貰います」

「いやいや、構わないよ。私も主人である君に断りもなくカズマ殿をお借りして済まなかつたね」

「おいおい、俺は物じゃねえぞ？」

三人で小さく笑うと、ルイズは桐生の手を引いて女子寮へと向かつて行った。



空になったカップを片付けながら、ルイズに連れて行かれる桐生をコルベールは見送った。

「……願わくば、貴方とミス・ヴァリエールが復讐の螺旋に囚われぬ事を」  
誰にも届かぬ程小さく呟いたその言葉は、夏の風に紛れ掻き消えた。

ルイズは女子寮へ戻って自分の部屋のドアノブに手を掛けると一瞬身体を強張らせた。

先程のシエスタとのやり取りが脳裏に浮かぶ。彼女はまだ部屋に居るのだろうか。

桐生が首を傾げながら此方を見ているのに気付いたルイズは意を決した様に扉を開く。中には既に誰も居らず、見慣れた部屋が拡がっていた。

思わずホツとしながら部屋の扉を閉めると、ルイズと桐生は向かい合って席に着く。そしてルイズは桐生に先程のフクロウが啞えていた書簡を手渡した。

桐生はそれを受け取って取り敢えず開いて中を見てみたが、相変わらず絵文字にしか見えない此方の世界の文字に眉をひそめる。なんて書いてあるのかさっぱりわからない。

「すまんがルイズ、俺にはこっちの文字はわからない。なんて書いてあるんだ？」

「ああ、そう言えばそうだったわね。この書簡にはね、姫様からの指令が書かれている

の

「指令つて事は、おまえに任せたい仕事があるつて事か」

「どうやらそうみたい。あの事件で凄く落ち込まれていたみたいけど……何時までも悲しみに沈んではおられないみたいで、ちよつとホツとしたわ」

ルイズは小さな笑みを浮かべると書簡に書かれている事を説明し始めた。

どうやらアルビオンは潰れた艦隊が再建されるまではまともな侵攻を諦め、不正規な攻撃を仕掛けてくる。マザリーニ筆頭の元、王宮の大臣達はそう予想しているらしい。街中で暴動や反乱を扇動し、卑怯な方法でトリステインを内部から壊していく……そんな事をされては堪らない。そんな事態に陥らない様に、アンリエッタ達は街の治安維持を強化する方針にした事が書かれているらしい。

「なるほどな。トリステインも本格化な防衛活動を始める訳か。だが、それとお前に何の関係があるんだ？」

「姫様は私に身分を隠しての情報収集を依頼して来たのよ。何処かに暴動を計画している輩がいらないか、街ではどんな噂が流れているか、それを調査する様に指示が書かれているわ」

「要はスパイつて奴か」

「すばい？ 何それ？」

「俺の居た世界ではそうやって情報を集めて来る奴をそう呼んでたんだよ。そうした事を仕事にする探偵って言うのも居たな」

「ふくん……まあともかく、所謂間諜って奴ね。」

そう言ったルイズの顔はどこか不満そうである。

「どうかしたか？」

「だってこんなの地味じゃない。情報収集なんて」

「いや、情報収集も大切な仕事だと思うぞ？ 戦争の中では、時に些細な情報が黄金以上の価値になる時もある。だが、同時に紛い物の情報も多い。その中から真実を見つければ簡単な事じゃない。あのお姫様はお前を信じているからこそ、その仕事をお前に託したんじゃないか？」

ルイズは書簡をジッと見つめた後、小さく頷いてから先を読み始めた。

どうやらアンリエッタはルイズにトリステニアの宿屋に下宿して、身分を隠しながら花売り等して平民達の間で流れている情報を集めて欲しいとの事らしい。書簡の中には任務に必要とされる経費を払い戻す為の手形も同封されていた。

ルイズは溜め息を漏らしながら昨晚帰郷の為に用意した、部屋の隅に置かれている鞆達を見つめた。

「せっかく実家に帰る為の準備までしたのにな」

「だったら、この任務を断るか？」

「そうはいかないわ」

桐生の一言にルイズは強く首を振ってから小さな鞆を取って、必要最低限の衣類や小物を詰めて準備をし出した。

「私は姫様直属の女官よ。任されたからには必ずこなしで見せるわ。どんな仕事であってもね」

小さな鞆に荷造りを終えたルイズは桐生に振り返るとにつと笑って見せた。

そんなルイズを見て、桐生も小さな笑みを返した。

桐生とルイズは女子寮から外へ出ると、トリスタニアに向けて出発した。しかし、身分を隠さなければならぬと言う条件の為、学園の馬は使えず、馬車も使えない。仕方なしに徒歩で向かう。

容赦なく真夏の太陽が照り付ける街道を二人は歩いた。トリスタニアまでは、歩きとなれば二日はかかる。

「あつ……」

日除けの帽子を被っているルイズが額に浮かぶ汗を手で拭いながら呟いた。

桐生もジャケツトを脱いでシャツの袖を捲くって少しでも涼を取ろうと努力するが、憎らしい程元気な太陽は二人に日差しをサンサンと降り掛けて来る。

ルイズはギロリと太陽を睨み付けた。

「こんなに暑いなんて……いっそ太陽を消してしまいたいわ」

「馬鹿言うな。太陽のお陰で俺達は飯を食べてるんだぞ」

「でもこの暑さ、堪えないわ」

「……………まあな」

身体中から汗を流し服に染みが出来て行く中、二人はまだまだ先の長い街道を歩きながらぼやいた。

昼食を終えた学生達が自分達の部屋へと戻る中、今日もギーシュは鍛錬に精を出していた。

男子寮の隅に生えた木の下で、上半身裸の格好で手製のサンドバックに拳を叩き付ける。砂の詰まった重々しい感触に拳が痛みを訴えるが、最初の頃に比べたら大分楽になって来た。

継続は力なり、と言う言葉が体現した様に、ギーシュの体格は少しづつだが変わって来ていた。弱々しかった腕は筋肉が付いてやや太くなり、痩せていた身体は幾分逞しさを感じさせる様になった。

左、右とサンドバックに拳を叩き付けた後、一歩間を置いてからハイキックへと繋げ

る。

ギーシュは以前、桐生から教わった戦い方のスタイルを必死になつて会得しようとしていた。

ある日、筋肉が付き始めたギーシュの身体を見た桐生は今使っている手製のサンドバックを一緒に作つてからこう言つた。

「筋肉は付いてきたが、お前は線が細い方だ。拳に力を込めて打ち込むのはまだまだ上手く行かないだろう。だが、代わりに足腰のフットワークは軽い。ならば一撃で相手を沈めるより、何発も確実に当ててダメージを蓄積させるスタイルの方が良いだろう」

そう言つて桐生が教えてくれたのは、彼が若い頃に扱つていたと言う格闘スタイルの一つ、「ラツシユスタイル」であつた。

一撃一撃は重くない物の、変幻自在の拳と蹴りの連携は相手を翻弄し、素早い攻撃が体力を削るスタイルである。

ギーシュはサンドバックを真つ直ぐ見つめながら、思い付く限りの拳と蹴りを織り交ぜた攻撃を繰り返して続ける。

「しっ！ しっ！ ふっ、うわっ!？」

数発拳をサンドバックに叩き込んでから思いつ切り蹴ろうとした瞬間、砂に足を取られて情けなくも転んでしまう。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

仰向けに大の字で寝転んだ状態で荒い呼吸を繰り返すギーシュ。暑さと運動に身体から湧き出る汗が肌を伝って流れていく感触はまるで蟻にたかられている様で気持ち悪い。

「……………ひっ!?!」

身体を起こして立ち上がりとした瞬間、首筋に冷たい何かを押し当てられて情けない声を漏らしてから、ギーシュが慌てて振り返る。

其処には水の入った瓶を持ったモンモランシーが立っていた。

「こんな暑い日にまでトレーニングなんかしなくて良いでしょうに。ほら、お水。ちゃんと水分も取らなきゃ倒れちゃうわよ?」

呆れた様に言いながら持つていた瓶をギーシュに差し出すモンモランシー。どうやら首筋に感じた冷たい感触はこれが原因らしい。

「ありがとう、モンモランシー。……はあっ! 生き返るなあっ!」

差し出された瓶の蓋を開けて一気に水を飲み干したギーシュは堪らなそうに顔をしかめて声を上げる。

モンモランシーは埃と汗にまみれたギーシュの身体を少し顔を赤らめながら眺めた。

流石にまだベッドは共にした事が無いので彼の裸をまじまじと見た事はないが、今ま

でのギーシュとは明らかに違う体型になっている。どちらかと言うと頼りなかったあの身体が、よくもこうも逞しく見える物になった物だ。

ふと、モンモランシーの目に空になった瓶を持つギーシュの手が目に入った。

「ちよつと、ギーシュ」

モンモランシーはその手を取ってまじまじと見つめた。

学園の使用人達が使う少し厚手で硬い布を使つて作られたサンドバックに、ギーシュの拳は皮が擦り剥けて血が滲んでいた。

「駄目じゃない、ちゃんど治療しなきゃ」

「このぐらゐなんて事ないよ。睡でもつけとけば治るさ」

「駄目、ちよつとジツとしてなさい」

軽く言うギーシュを無視して杖を取り出したモンモランシーは、小さく呪文を唱えてギーシュの拳に杖を振るう。

すると、ギーシュの血が滲んでいた傷に幾つもの泡が覆い被さり、泡が消えると少し跡を残しながらも傷口が塞がった。

「ギーシュ……強くなろうとするのを止める気はないわ。それは貴方の決めた事だし、誰かが文句を言う資格も無いと思うし。でもね……」

モンモランシーは傷の癒えたギーシュの手を包む様に握ると、ギーシュの瞳を見つめ



た。そんなモンモランシーに、ギーシュの心臓がドキツと跳ね上がる。

「可能な限りで良い。お願いだから、無茶はしないで。貴方が傷付いたら、悲しむ人が居るのを忘れないで」

自分の事を心から心配している……モンモランシーの視線が、言葉が、表情がそれを物語っていた。

ギーシュはモンモランシーが堪らなく愛おしくなった。今すぐ抱き締め、その唇を奪いたい衝動が身体を駆け巡る。

しかし、ギーシュの中の何かがそれを遮った。

今の僕は、まだモンモランシーに相応しくない。

それが正しい判断かどうかはわからない。ただギーシュは、モンモランシーに優しく微笑みかけた。

「ありがとう、モンモランシー。君がそう言ってくれるだけで、僕はとても心強く感じるよ。……約束する。絶対に無茶はしないよ」

そう言つてモンモランシーの手からするりと自分の手を引いたギーシュは身体を伸ばしてから頬を掻いた。

「その、モンモランシー。良かったらこれから一緒にお茶でもどうかな？ もちろん水を浴びて身体を綺麗にしてからだけ」

照れ臭そうに言うギーシュに一瞬キョトンとした後、モンモランシーはくすりと笑って頷いた。

「ええ、良いわ。なら、早く身体を綺麗にして着替えて来てね」

「よし、わかった!」

嬉しそうに笑いながら走るギーシュを見送ると、モンモランシーは小さな溜め息を漏らして微笑みを浮かべた。

「私がお茶に誘おうと思ったのに。なんか、悔しいな」

そう口にしながらか空を眺めるモンモランシーの顔は、何処か嬉しそうに見えた。

## 第33話

灼熱の太陽が照らす道を歩き切つて街に着いた二人は一先ず、最近出来たばかりらしい近くの喫茶店で冷たい紅茶で喉を潤していた。

店の中も外に負けず劣らずの暑さで、他の客や店員も額や肌に汗の玉が浮かんでいるのが見える。

ルイズは汗だくになつた身体に服がへばり付くのが気持ち悪いのか、何度もシャツの胸元を指で開いては、パタパタと手を振つて扇いでいる。

桐生も流石に暑さが堪えたのか、ジャケットを脱いでシャツの袖を捲つて少しでも涼を取ろうとしていた。

学園から街に来るまでの二日間、余りの暑さからルイズは制服の袖を捲つて歩いていた。

その判断の結果、照り付ける日差しのでいでルイズの腕は少し赤みを持つた日焼けが浮かび上がっていた。色白のルイズは小麦色の肌に変わる事はないらしい。

桐生もこの日差しの中、帽子も被らず歩いてきた為顔が心なしか色黒くなつた。捲つた袖から覗く腕もややいつもより色黒い。

「全く……焼け死ぬかと思つたわ」  
「本当にな」

額から伝う汗を腕で拭うルイズに、桐生は首を振りながら溜め息を漏らした。

沖繩に移り住んで暑さには大分強くなつたつもりだったが、此方の熱気はなかなか身体に堪えてくる。俺もやつぱり歳かな、と内心ごちりながら汗をかけた様に水滴の浮かんだグラスを持って、中に残つていた紅茶を飲み干した。

空になつたグラスの中でまだ何とか形を残している氷がカラツと小さく濁いた音を立てた。

そのまま喫茶店で軽めの昼食を済ませた二人はまず財務庁へと出向き、アンリエッタが手紙に同封してくれていた手形を現金へと換えた。新金貨で六百枚、四百エキューだ。

桐生はベルトに結わえられた、シエスタから貰つた革のポーチの中に入れてあるアンリエッタからの金貨を数えた。ざっと見ただけでも新金貨が五百枚以上はありそう。暫く金には困らなそうである。

その後、桐生は仕立て屋にルイズを連れて行き、ルイズ用に地味な服を買い求めた。

ルイズは嫌がったが、今回の任務は身分を隠して行うのが絶対条件だ。仕立ての良い学園の制服に五芒星のマントなんて着けてたら、私は貴族ですと周りに宣伝してると

変わらない。ここまで歩いて来た意味がなくなってしまう。

結局ルイズと色々話し合った結果、ブラウンの袖のないワンピースになった。桐生は懸命に服を選んだが、どうやらルイズの趣味には合わなかったらしい。殆どを却下された結果、まだマシだからとその服にしたのだ。これは外さないと頑として聞かない為、首から下げた翡翠のペンダントは着けたままだ。

ルイズは普段の服とは違う肌触りの生地になるのか、ちよくちよくワンピースを指先で摘んでは直すのを繰り返しては不満そうに顔をしかめた。

「やっぱり足りないわ」

「何がだ？」

「この頂いた活動費よ。四百エキューじや、馬を買って終わりじゃない」

「馬なんて必要ない。俺達は今、平民としてこの街に潜伏しなきゃならないんだ。俺にはこの世界の常識はあまりわからないが、少なくとも平民は馬を持ってないだろう？」

桐生は財務庁と仕立て屋に向かう際、街の中をざっと見回していたが馬に乗って移動している人間は殆ど居なかった。居たとしても、その身に着けている物から貴族であるのがわかる者ばかりだった。

「平民のフリをしようがしまいが、馬がなくちや満足なご奉公が出来ないじゃない」  
「なら安い馬で良いだろうが」

「駄目よ！ 大した馬じゃなかったら、いざという時役に立たないでしょ！ 馬具だつて必要だし……それに宿だつて変な所には泊まれないわ。このお金じゃ、二ヶ月半泊まっただけでなくなっちゃうわ！」

桐生はルイズの話を聞いていて頭が痛くなるのを感じた。

「お前……一体何処に泊まるつもりなんだ？ 安い宿で良いだろうが」

「そんなの駄目に決まってるじゃない！ 安い部屋じゃ良く眠れないじゃない！」

拗ねた様にプイツとそっぽを向くルイズに桐生は思わず目が点になってしまった。

一体こいつは何をしに街まで来たんだ？ 平民に紛れて仕事をするんじゃないのか？

ルイズは根っからのお嬢様だ。平民と貴族は別物、平民の普通は貴族にとって最低限に近い感覚でしかないのだろう。

桐生はルイズに背を向けると溜め息を漏らしながらこれからどうしようか悩んだ。

「もし、そこのお嬢さん」

仕立て屋の前で突っ立っていたルイズに、奇妙な男が声を掛けてきた。

桐生も思わずルイズに声を掛けた男の方へと顔を向ける。

奇妙な格好だった。歳は自分より少し上くらいだろうか。黒髪をオイルで撫で付けて整え、大きく胸元の開いた紫のサテン地のシャツからモジャモジャの胸毛が覗いてい

る。鼻の下と見事に割れた顎の下には小粋な髭が生え整っている。その身体から漂う香水の香りは人を不快にさせない程度に抑えられていた。

「貴女、なかなかの美人じゃない。如何かしら？　うちのお店で働かない？」

奇妙な男はその顔からは似合わない、女言葉でルイズに問い掛ける。

「はっ？　何で私が……むぐっ！」

文句の一つでも言おうとしたルイズの口を桐生がサツと抑え込む。

「有り難い。うちの娘を雇って貰えるのか？」

「娘？」

奇妙な男はルイズと桐生の顔を交互に見つめてから首を傾げて見せる。

「失礼だけど……親子にしては随分似てないわね？」

「生憎血は繋がっていなくてな。この子は孤児だったんだが、俺が引き取ったんだ。幸い、生みの親は随分と容姿が良かった様で……俺に似なくてホッとしている」

「あら、そうだったの。それじゃあ確かに似てないのも当然ね」

桐生は必死に演技しながらルイズにここは合わせると目配せする。

ルイズは納得いかない物の、渋々と肯定の意を表す様に小さく頷いた。

「でもお父さんはまだまだ若そうだし、生活には困らないかしらね？」

「いや……実は以前いた所でちよつとしたトラブルに巻き込まれてしまつて家も財産も

失ってしまったて、この街には今日来たばかりなんだ。何分急ぎだったので、殆ど着のままで来た物だから、娘にせめて服でもと思つて買ったは良い物の、これから如何しようか……文字通り路頭に迷つていたんだ」

「あら、そうだったの？ それはそれは……随分と苦勞をなさつたのねえ」

心底同情する様に言う男に桐生は内心ホツとしていた。咄嗟にこの様に嘘を並べられたのは、立華不動産での経験からだろう。短いながらも濃厚な接客と取引の駆け引きやテクニクは少なからず身体に染みている。経験から得られる事に無駄な事はないと改めて桐生は思い知つていた。

「ならそうねえ……実はうちは宿を經營しててね？ その空き部屋で良ければ二人に使わせても良いわ」

「本当か？ 何から何まで、有り難い」

「良いのよお、困つた時はお互い様つてね。ただし、条件を一つ。今そこのお嬢さんを雇おうとしたのは、宿の一階でお店を開いていてね。そこでお二人に働いて貰うわ。如何かしら？」

桐生はそこで顎に手を当てて考えた。ルイズに声を掛けたのが、ルイズの容姿から来る物だとしたら仕事内容は接客か、あるいは……。

桐生は目の前の男を真剣な眼差しで見つめてから口を開いた。



「働かせて貰えるのは有り難いが……娘に如何わしい事をさせる気はない。それでもいいか？」

ルイズを軽く抱き寄せながら言う桐生を男はジツと見つめてから、優しい笑顔を浮かべて見せた。

「大丈夫よ。私のお店で身体を売らせる様な真似はさせないわ。ちよつとした給仕の仕事をして欲しいのよ。早い話が、酒場の仕事ね。貴方には厨房に入つて貰うつもりだし、そこからなら娘さんの様子も常に見れる。それなら安心でしょう？」

男の目からは嘘の色は見えない。あるいは、それを目に出さない様になっているのか。不意に、抱き寄せられていたルイズがクイツと桐生のシャツを引っ張つた。

ルイズを見ると、置いてけぼりにされて不満げにしている顔がそこにあつた。

桐生は男に背を向ける形でしゃがみ込む。

「ちよつと、まさかあいつの所で働けつて言うの？」

「そのつもりだ。俺も側に居られるなら、いざという時動ける。それに、酒場なら噂や情報に常に流れている物だ。今回の任務にはもつてこいの条件だ」

「わざわざお金があるのに、何で働かなくちゃいけないの？」

「その金が如何やって生まれているのか、お前は少し知つた方が良く。やりたくないなら俺は降りる。任務はお前一人でやれ」

桐生の言葉にルイズは少しだけ困った様に口を紡いだ。

少し脅しに近い形になってしまったが、今回の一件はもしかしたらチャンスかもしれないと桐生は思っていた。

貴族と言う状況がどれだけ恵まれているのか、ルイズは大人になる前に少し思い知った方が良いと思う。ルイズ自身の為にも。

ルイズは少し悩んだ様に顔を歪めてから、渋々といった感じで頷いた。

桐生は立ち上がって男に振り返ると頷いた。

「今、娘とも話し合ったが……親子共々あなたに世話になる事にした。宜しく頼む」

「トレビアン！」

男はクネクネと腰を動かして顔を満面の笑顔に変えた。

思わずその姿に、神室町を牛耳っていたファイブミリオネアの一人、風俗王を思い出した。

あれから二十年近く。かつて神室町を懸けて金と拳で戦い合ったあの五人は今どうしているだろうか。

桐生の回想を他所に、男は指を動かして二人についてくる様にジェスチャーして見せた。

「それじゃあ今日から頼むわね。自己紹介が遅れたけど、私の名はスカロン。宜しくね」

「ああ」

上機嫌そうに歩き出したスカロンに続いて歩き出す桐生とルイズ。ルイズは目の前を歩くスカロンを疑わしく思う様な目で見つめた。

「ねえ、本当にあいつの所で働くの？　なんかあいつ、変じゃない？」

不安と不満を込めた目で話すルイズに桐生は首を振って見せた。

「あの男が変な事には同意するが、今回は譲らねえ。心配するな。俺は常にお前の側にいるさ」

宥める様に言いながら頭を撫でてくる桐生に、なんか騙されてると思いつつもルイズは素直に頷いた。

「さあ、準備は宜しくて!?　妖精さん達！」

しっかりと開店準備が整った店内を見渡しながらスカロンが腰をキュツと捻った。

スカロンの目の前には色とりどりの派手な衣装に身を包んだ少女達が背筋を伸ばして立っている。歳はみな、ルイズと同じか少し上くらいだろう。

「バッチリです！　スカロン店長！」

「ノンノンノン！　違うでしょおおおつ！」

少女達の元気な唱和に派手な動きをしながら指を振ってスカロンが叫ぶ。

「もう、いつも言ってるでしょ!? 店内では私の事はミ・マドモアゼルと呼ぶ様にと!」

「失礼しました! ミ・マドモアゼル!」

「んん〜! トレビアン!」

少女達の言い直しに満足気に腰をカクカク動かして身体を震わせるスカロンを見て、桐生は一瞬選択を誤ったかと本気で思ったが、少女達の何も変わらない様子を見る限りこれが普通らしい。

それに、少女達のスカロンに向ける眼差しには感謝と尊敬の意を感じる。スカロンが変人である事は変わりないが、店の少女達からの信頼は厚いらしい。

店員となる人間全てから信頼を集めるのは簡単な事ではない。どんなに仕事が出来ようが、どんなに正しい事を言おうが、結局人がついていく人間にはその人間の本質、つまり性格や気の配り方等様々な要素が求められる。この人なら任せられる、この人なら信頼出来る、下の者達からそう思われるのは生半可な努力では無理なのだ。

「さて、そんなミ・マドモアゼルからまずは悲しいお知らせ。この「魅惑の妖精」亭は最近売り上げが落ちてるわ。原因は最近東方から輸入されている「お茶」を出す「カッフェ」なるお店のせいね。妖精さん達がこんなに頑張っているのに、憎つたらしいわらないわ!」

そう言えば此処に来る前に寄って来たな……悪い事をしたか。

桐生は内心申し訳なく思いながら声に出さずに呟いた。

「落ち着いて！ ミ・マドモアゼル！」

「ごめんなさい。そうよね。私には貴女達が、常に頑張ってくれている妖精さん達が居るんだもの！ 此処でじだんたを踏んでいる様じゃ、「魅惑の妖精」の名に傷が付くというもの！」

スカロンは華麗なステップでテーブルに飛び乗ると、派手なポーズを見せて見せた。

「魅惑の妖精達のお約束！ ア~~~~~ン！」

「毎日笑顔のご接待！」

「魅惑の妖精達のお約束！ ドウ~~~~~！」

「美しい店内で清潔に！」

「魅惑の妖精達のお約束！ トロワ~~~~~！」

「たっぷりチップを貰うべし！」

「んん〜！ トレビアン！」

スカロンはテーブルから華麗に飛び降りて嬉しそうにポーズをする。

「さて、続いては妖精さん達に嬉しいお知らせよ！ 今日からなんと、新しい妖精さんが

お仲間に入ります！」

少女達は歓声を上げながら拍手した。

「じゃあ、新しい妖精さんを紹介するわ！ ルイズちゃん！ いらっしやい！」

拍手に包まれる中、羞恥と怒りに顔を真っ赤にさせたルイズが入ってきた。

ルイズは桃色の髪を店の髪結い師に横の髪を小さな三つ編みに結わえられていた。そしてホワイトの短いキャミソールに身を包み、上着がコルセットの様に身体に密着してスラリとしたラインを浮かび上がらせている。背中はザックリと開いている為、白く滑らかな肌がまだ熟していない色気を放っていた。さながら可憐な妖精の様だ。

桐生はルイズの格好に少し苦虫を噛み潰した様な表現を浮かべた。

仕事とはどういうものかを教える為に残った場所だったが、ルイズにはちよつと早い世界だったかもしれないと思う。

しかし、一度決めた事なのだ。桐生はそんなネガティブな考えを頭の隅に追いやって。

「ルイズちゃんは元々孤児だったんだけど、お父さんに引き取られてこの街に来たの。お父さんもちよつとトラブルに巻き込まれちゃって家も財産も失っちゃってね。とっても可愛い子だけど、同時にとても苦勞をしている子なのよ。みんな、仲良くしてあげてね」

少女達から同情の溜め息が漏れる。

スカロンは自分がついた嘘を信じてくれているらしい。他の従業員にもその嘘を広げて貰えば、自分とルイズと一緒に居ても何ら不自然では無くなる。これは有り難い事だった。

「さあ、ルイズちゃん。今日から一緒に働く妖精さん達に挨拶してちょうだい」  
わなわなとルイズの身体が震えているのがわかる。かなり怒っている様だ。プライドの高い貴族である自分がこんなはしたない格好をさせられて、終いには平民にも頭を下げると言われて。

しかし、任務の為だと自分に言い聞かせたルイズはその怒りを必死に堪えた。桐生が言う様に、酒場は常に噂と情報が入り乱れる。更に酔いで思考の鈍った客から耳寄りな情報を掴めるかもしれない。

チラリとルイズが横目で桐生を見ると、頷いて見せる桐生に覚悟を決めた。

「る、るる、ルイズです！ よ、宜しくお願いします！」

怒りから震える声と引きつった笑いでルイズが挨拶する。

「はい、拍手〜！」

スカロンの一言から少女達が拍手を鳴らした。

ルイズはぎこちない動きで少女達の左端に移動して並ぶ。

「さて、それともう一つお知らせ。妖精さん達をサポートするダンディな新人さんを紹介するわ！ さあ、カズマ君！ いらっしやい！」

スカロンの紹介から今度は桐生が前に出る。桐生の登場に少女達からはルイズ以上の歓声が上がった。

桐生は店から支給された黒く袖の短いシャツに白いエプロン姿をしていた。普段の格好からは想像出来ない姿だが、なかなか様になっている。

「カズマ君は今紹介したルイズちゃんを引き取ったお父さんよ。彼には厨房で働いて貰って、妖精さん達をサポートして貰うわ。どう？ どう？ なかなかのハンサムでしょ？」

桐生の肩を掴んで胸元を叩くスカロンに少女達は瞳を輝かせながらウンウン頷いている。

ルイズは桐生が他の少女に紹介されているのが気に入らないのか、鋭い目付きで桐生を睨んでいる。

「さあ、カズマ君。妖精さん達に挨拶してちょうだい」

スカロンから解放された桐生は少女達を見回してから口を開いた。

「今日から世話になるき……一馬だ。娘に苦勞を掛けてしまう不甲斐ない父親だが、娘共々宜しく頼む」



「はい、拍手〜！」

一瞬本名を名乗りそうになった所で、桐生は言葉を飲み込んだ。ルイズとは義理の親子関係である為、念の為自分の苗字は伏せる事にしておいた。幸いこの世界では名を呼ぶのが習慣になっている為、それほど苗字は隠しても怪しまれなさそうだ。

深々と頭を下げる桐生に少女達から大きな拍手が上がる。

ルイズはつまらなそうにムスツとした表情で桐生を見つめていた。

新人の自己紹介が終わった所で、スカロンは壁に掛けられた時計を見つめた。

スカロンが指をパチンと弾くと、その音に反応して店の隅に設えられた魔法細工の形達が派手な音楽を演奏し始める。行進の音楽だ。

スカロンがビシツと背筋を伸ばすと両手を広げた。

「さあ、開店よー！」

閉まっていた羽根扉が開かれ、開店を待ち構えていた客達がゾロゾロと入って来た。

「魅惑の妖精」亭、営業開始である。

「魅惑の妖精」亭は一見するとただの居酒屋だが、可愛い少女達が際どい格好で飲み物や食事を運んでくれる事で人気な店であった。スカロンはルイズの美貌と可憐さに目を付けてスカウトしたとの事だ。桐生の世界で言うならいつだかテレビでやっていた

メイド喫茶、に近い物かもしれない。

桐生は皿洗いの仕事を与えられた。店は繁盛している様で次から次へと空になった皿が運ばれて来る。皿洗いはどこの世界でも新入りの仕事らしい。他の従業員は料理やら酒やらの用意をしていて誰も手伝ってはくれない。

桐生は黙々と皿を洗い続けた。ルイズがやると決めた以上、自分はそれに続いて任務を遂行するだけだ。

冷たい水とぬるつく洗剤と格闘しながら皿の汚れを落としていく。しかし、桐生の動きよりも早く皿がどんどん積まれていく。

必死に皿の汚れを落としている桐生の元に派手な格好の少女が現れた。長いストレートの黒髪に太い眉が活発な雰囲気を漂わせている。大きく胸元が開かれたワンピースから覗く胸の谷間はその大きさを際立てている。歳は店の他の少女と同じくらいだ。

「ちよつとカズマ！ 汚れたお皿が減つてないわよ！ 他の料理でも使うんだからもっと早くして！」

ルイズ同様、自分より遥かに年下の少女に怒鳴られた。あの世で錦山や風間が苦笑しているのが脳裏に浮かび、桐生は小さな溜め息を漏らしてから少女に顔を向けた。

「すまん、頑張つてはいるんだが……」

桐生がそう言うのと、少女は洗い終わった皿を一枚掴んで見回してから少し驚いた様な表情を浮かべた。

「ふくん……確かにちゃんと綺麗には洗ってるみたいね。でもそれじゃ効率が悪いわ。貸してごらん」

そう言つて少女は桐生から皿洗い用の布を取ると、手本を見せる様にゴシゴシと洗つては綺麗になった皿を次々と積んでいった。その動きには無駄が無く、機械的ともまた違つたスムーズな動きに桐生は素直に感心した。

「こーやって布で挟む様にしてグイグイ磨けば両面の汚れが落ちるわ。片面ずつじゃ手間も時間もかかるでしょ?」

「なるほどな……」

「アサガオ」に居た時にそれなりに家事は慣れたつもりだったが、まだまだ上には上がいる様だ。向こうに帰れたら少し掃除や片付けの本でも読んでみようかと桐生は思つた。

「ありがとうな。良い洗い方を教えてくれたおかげで仕事はかどりそうだな」

「どう致しまして。あ、あたし、ジェシカつて言うの。宜しくね」

「そうか。さつき自己紹介はしたが、俺は一馬だ。宜しくな」

にぱつと気持ちの良い笑顔を浮かべて挨拶するジェシカに、桐生も笑みを浮かべて見

せた。

ジェシカは暫く桐生の側で一緒になって皿を洗っていたが、不意に辺りを見回してから桐生のシャツの袖をクイツと引つ張った。

「ねえ、カズマがあの人の子を引き取ったって……嘘でしょ？」

「……どうしてそう思う？」

ジェシカの言葉になるべく表情を変えない様にしながら桐生が質問を質問で返す。

「何て言うかさ……あの子のカズマを見る目、お父さん、って感じじゃないのよね。女が目って言うのかな？ とにかく、子供が親に向ける目じゃない様に見えるのよ」

少女ながらも流石は夜の店で生きている人間だ。観察力は並みの人間とは違うらしい。

「ねえ、誰にも言わないからこつそりあたしだけに教えてよ。お店じゃ出来ないサービスしてあげるからさあ」

腕で自分の胸を持ち上げ谷間を強調させながらジェシカが色気たつぷりに嘯く。

ジェシカの格好と言葉の限りでは給仕の妖精さんとやらの一人なのだろう。

桐生は小さく手を振った。

「そろそろお喋りは止めて仕事に戻ったらどうだ？ 店長に叱られるぞ？」

「良いのよ、あたしは」

「何でだ？」

「その店長の娘だもの、あたし」

桐生は本日再び目が点になった。

あのスカロンとジェシカが親子？ 寧ろこの二人こそ血の繋がってない親子なんじゃないだろうか。しかし、黒髪の色を見ると何となくはわかる。此方の世界では黒髪は珍しい方だ。

桐生の心情を察してか、ジェシカが頬を膨らませる。

「あのねえ、ああ見えてあたしとパパはちゃんと血の繋がった実の親子なの！ 全く、失礼しちゃうわ！ もう慣れたけど！」

ジェシカはぶりぶりとなりながら皿洗い用の布を投げ置いて桐生の元から去っていった。

桐生が洗い物と格闘している中、ルイズはもつと過酷な受難が待ち構えていた。

「(注)注文の品、お持ち致しました！」

必死に屈辱から来る怒りを抑えて引きつった笑顔を浮かべながら注文されたワインと陶器のグラスをテーブルに運ぶ。

目の前では客の男が下卑た笑みを浮かべて此方を見ている。叶うなら思いつ切りそ

の顔面を蹴り飛ばしたい。

「ありがとうよ、姉ちゃん。じゃ、注いでくれや」

男はルイズを舐め回す様に眺めながら陶器のグラスをグイツと差し出す。

貴族の私が平民に酌をする？ 貴族の私が？ 貴族の私が!?

頭の中でグルグルと繰り返す。ルイズに男は首を傾げた。

「聞こえなかった、姉ちゃん？ 注げって言つてんだろ？」

再度酌を催促する男にルイズは大きく深呼吸して荒ぶる気持ちを落ち着かせた。

これは任務。そう、任務なのよ。姫様の為に、平民に紛れて情報を集める為。

何度も強く自分に言い聞かせると、慣れない手つきでワインの瓶を持ち上げるルイズ。

「そ、それでは注がせて頂きます！」

ルイズはグラスにワインを注ぐが、怒りで震える手は上手く狙いが定まらない。バタ

バタと赤いワインがテーブルに溢れてしまった。

「何やってんだよ！ 人のワインを溢しやがって！」

「す、すみま……せん」

「すみませんで済むか！ このアホ女！」

謝罪するルイズに罵声を浴びせた男はジロジロと店の衣装を身に纏った汚れを知ら

なそんな身体を見つめた。

「お前、胸は無えけど良い顔と身体してるな」

ビシッ！ とルイズの中で何かにヒビが入る音が響いた。

「よし、こうしよう！ お前、ワインを口移しで俺に飲ませろ！ それで許してやるからよー！」

グイツと今度はグラスではなくワインの瓶をルイズに突き出す男。

ルイズはその瓶を取り上げ一気に呷ったかと思うと、男の顔目掛けてワインを吹き掛けた。さながらプロレスのヒールがやる毒霧の様だ。

「うわっ！ 何しやがる！ このガキ！」

文句を言う男を無視してルイズがテーブルにダンツと片足を乗せる。

その瞬間、目の前の小娘から漂う強烈な圧力に男は言葉を失った。

「い、い、い、い、い、この下郎！ あんた、私を誰だと思ってるの!?!」

「は、はい?」

「お、おとおお、恐れ多くも、こ、こ、こ、こっ！」

ルイズが公爵家と言おうとした瞬間、小さな身体がグイツと後ろから引つ張られた。

「いつけな〜〜い！ すみませんねえ、お客様あー！」

スカロンが男の隣の椅子に腰掛けるとタオルで男のシャツを拭き始める。

「な、何だよ、オカマ野郎。てめえに用は……」

「せっかくのワインをシャツに飲ませるなんて勿体無いわあ。さあ、ルイズちゃん。新しいワインを持って来て。その間お客様は私がお相手して差し上げるわあ」

スカロンが男にしなだれかかり、嫌がる男をとつてもない力で抑え込む。

理性が戻ったルイズは、は、はいっ！ と返事をして厨房へと駆け込んだ。

「本日もお疲れ様あつ！」

空も白み始めた頃、最後の客を見送ったスカロンの声に店内では歓声が上がった。

ルイズは力無く、ふらふらした足取りで立っていた。桐生も流石に疲れが出ており、肩を自分で揉みながらルイズの元へと歩み寄った。

「みんな一生懸命に働いてくれてありがとう！ 今月はちよつとだけど色をつけさせて貰ったわ」

少女達や従業員のコック達が喜びながらスカロンきら封筒を受け取っている。どうやら今日は給料日の様だ。

「はい、カズマ君。それにルイズちゃんにも」

ルイズの顔がパアツと輝いた。偶々とは言え、今日一日働いた分が貰えるなんて予想外だ。顔を輝かせるルイズに桐生も自然と笑みが浮かぶ。



桐生は受け取った封筒を破いて中の物を掌に出した。掌には小さな銀貨が一枚転がった。

まあ、俺がやったのは皿洗いだけだしな。

ルイズの方に目を向けると、ルイズも同じく封筒を破って中の物を取り出していた。しかし、ルイズの掌に乗ったのは硬貨ではなく一枚の紙切れだった。

「何だ、それは？」

紙切れを見つめながらプルプル震えるルイズに声を掛けると、スカロンが真顔で桐生に答える。

「請求書よ。ルイズちゃん、何人のお客さんを怒らせたの？ 悪いけど、仕事が出来なかった子にお金をあげられる程私も裕福ではないのよ」

ルイズは悔しそうに紙切れを握り締め、俯きながら溜め息を漏らした。

「良いのよ。初めは誰だつて失敗する物。其処から学ぶ事がお仕事で一番大事な事よ。挫折を知らずに大物になった人間なんて居ないんだから。これから働いて返してね」

スカロンに返す言葉もないルイズは身体を震わせながら歯を食いしばる。

桐生はそんなルイズの頭を優しく撫でた。

## 第34話

初仕事を終えて簡単な賄い食を貰った二人はスカロンに使つて良いと言われた部屋へと向かった。が、そこは二階の客室が並ぶ廊下の奥の扉……しかも扉の先のはしごを上つて入る屋根裏部屋だった。

本来人が住む場所ではない為、樽や木箱が散乱し、あちこちには蜘蛛の巣が張られている。歩くだけで舞い上がる埃にルイズは豪快なくしゃみをした。

部屋の隅に置かれたベッドにも埃が積もっており、桐生が毛布を剥ぎ取るとバサバサと振つて埃を落とす。

「何なのよ、この部屋！ こんな部屋で寝れる訳ないじゃない！」

忌々しげに辺りを見回して怒鳴るルイズを無視して、桐生は小さな窓を開けた。

夜明けの冷たい空気と共に、この部屋の先住民らしい蝙蝠が入つて来て梁にぶら下がって、キイキイと小さな鳴き声を上げる。

「何よ、こいつ等！」

「俺達の同居人だろ？」

桐生は軽く部屋を掃除して蜘蛛の巣をはらうと、ベッドに横になった。

「お前もさっさと寝ろ。昼から起きて俺は店の仕込み、お前は掃除だ。少しでも休まなきや身体がもたないぞ?」

「何であんたは順応してんのよ!」

「雨風をしのげて、しかもベッドで寝れるんだ。世の中には自分からなつた奴もいるが、中には全てを奪われて雨風に晒されて寝なきやいけない奴もいる。それに比べれば良い待遇だ。とにかく、俺はもう寝るぞ」

毛布を被つてゴロンとルイズに背を向けた桐生は、すぐさま小さな寝息を立て始めた。

ルイズは何度も部屋を見回して唸つた後、ベッドに上がつて毛布の中に潜り込み、桐生の背中にこつりと額を当てた。

確かに酷い場所だ。自分の部屋から比べたら、不潔で不衛生極まりない。しかし、それでも一つだけ喜ばしい事がある。

ここにはあのメイドが……シエスタが居ない。

桐生に告白して振られたにも関わらず、まだ諦めていないと言つた。更には、自分から桐生を奪うと言つた。

私は別に……あのメイドになんか負けたりしないけど。

心の中でポツリと呟きつつも、ルイズの中ではシエスタの存在は大きな脅威に成りつ

つあった。

身体を動かして、桐生にピッタリとくつつくルイズ。その大きな身体から伝わる温もりと匂いに瞳を閉じる。

ねえ、カズマ？ 私がシエスタみたいに告白したら……あんたは、やっぱり私を振るの？

自分が桐生に振られる姿は想像するだけでも胸が痛くなる。面と向かって告白し、振られたシエスタの痛みはこんなものでは無かつただろう。自分が同じ痛みを味わったら……正気でいられる自信はない。

自分でも気付かぬ内に、桐生のシャツを強く握り締めながらルイズはネガティブな考えを頭から追い出した。

今はともかく、任務に集中しよう。街の噂を逐一姫様に報告しなくては。

疲労と安らかな温もりに包まれ、ルイズの思考は徐々に眠りに落ちて行つた。

その日の夜も、「魅惑の妖精」亭は繁盛していた。

ルイズはげんなりした表情で店の隅に立ちながら料理やワインが運ばれていく店内を眺めていた。

ルイズを見た客の反応は二つだった。

一つはその身長と体型から、餓鬼が一丁前に仕事をしていると冷やかすタイプである。どの客も決まって馬鹿にするのは、店の中でダントツに小さいルイズの胸だ。

そんな客にルイズは青筋を浮かべた笑顔でワインをサービスするのであった。それはもう、良く味わえる様に瓶ごと吞ませてあげるのだ。

もう一つは特殊な性癖を持ったタイプだ。ルイズはスタイルはともかく、容姿だけなら店の中でもトップクラスに入る。そういう趣向をお持ちの方々にはルイズは大変喜ばしい存在なのである。

客は決まって小さなルイズを舐めてかかり、その小さな尻や短いスカートから覗く白い太腿を撫でようと手を伸ばしてくる。

そんなお客様にはルイズは平手打ちのサービスをお見舞いする。満遍なく両頬に。

そんな訳で愛想の一つも言えないルイズにスカロンは、

「貴女はここで他の子の働き方を見て学びなさい」

と言い、ルイズは此処に追いやられたのである。

店内を動き回る他の女の子達を見て、なるほど、とルイズは所々素直に感心した。

まず、基本的にニコニコと笑顔を浮かべて相手の愚痴や悪口を聞き流している。かと思えば突然相手の容姿や性格を褒めたり、色っぽい仕草で甘えて見せたりと男心を撥る。

そして客が身体に触れようとするとその手を優しく払い除け、時には焦らす様には申し訳なきそうにしながら断りを入れる。その際にはもつとチップをはずんでくれたら……とか、私が店一番の売れっ子になれば……と一言漏らし、そんな娘達の気を引きたい酔っ払った客はチップをドンドン出してくるのだ。

見事だと思いつつも、貴族の自分にあんな事出来る訳ない、とルイズは溜め息を漏らした。

メイジは貴族、生まれは公爵家なルイズだ。仮に明日世界が滅亡と言われても、あんな愛想が振りまける訳がない。

不意に、ルイズは店の隅に置かれた鏡に気付いて其方に視線を向けた。

写っているのは自分。恥ずかしい格好をしている、自分。しかし、紛れもなく美しい。溢れ出る気品さ。まだまだ成長の兆しを見せる身体。艶やかで綺麗な桃色の髪。

ルイズはおもむろに、鏡の前で様々なポーズを試してみた。腰に両手を当ててウインクしてみたり、親指を唾えて上目遣いにモジモジしてみたり。

うん、可愛い。恥ずかしい格好してるけど、私可愛い。

ナルシスト全開にルイズは自分の容姿に酔いしれた。

うん、やっぱり可愛い。私、見た目は結構……いや、かなりイケてるはず！ カズマだって男だもん。こんな私なら見惚れるはず！ でもカズマ、あんたは私の使い魔なん

だから、私に見惚れて当然なの！　と言うか私だけを見てれば良いの！

自分に見惚れる桐生の姿を想像して、ルイズは思わず口元に笑みを浮かべながらチラリと厨房で働く桐生へと視線を向ける。

瞬間、ルイズの時間が止まった。

厨房の洗い場で真剣な表情で皿を洗う桐生。昨日ジェシカに教わった洗い方のお陰で、流れる様に汚れた皿が綺麗になつて積まれていく姿は一見プロ染みて見える。時折額から流れる汗をシャツの袖で拭う姿は、無意識に恋する乙女の視線で眺めるルイズには堪らなくセクシーにすら見える。

ルイズの頬が自然と赤らみ、胸の鼓動が大きくなり始める。

な、何よ何よっ！　ちよつとカズマあんた……か、かつこいいじゃない！　ほ、ほんのちよつとよ!?　ほんのちよつとだけけども！

見惚れさせる筈が逆に見惚れてしまったルイズは、一人訳も分からず弁解する。

そんな桐生を見ていたら、不意に他の人物が桐生に近付くのが見えた。

スカロンの娘、ジェシカだ。桐生に声をかけて、何やら話したかと思うと口元に手を当て身体を揺らして笑っている。その揺れに比例して、黒く長い髪や胸元から覗く胸の谷間も揺れている。

ジェシカの黒髪と胸はシエスタを連想させ、二人が話しているのを見て、ルイズの中

で灼熱のマグマが噴き上がる。

黒髪、胸。黒髪、胸。黒髪っ！ 胸っ！

黒髪はまだ良い。が、胸の事は散々客に言われていた事もあって、ルイズの中のマグマは火山噴火よろしく大きく噴き上がった。

貴様等男はそんなに胸が好きか！ そんなに脂肪の塊の大きさが大事か！

ルイズの桃色の髪がざわつき、怒りの籠った視線が完全に桐生に向かっている。

「ちよつとルイズちゃん！ 何処を見てるの!？」

不意に掛けられた声に慌てて視線を向けると、腕を組んで怒った表情で此方を見ているスカロンが目の前に立っていた。

「駄目じゃないの！ ちゃんと他の子から働き方を学ばなきゃ！ それとも余所見出来るくらいに働き方がわかったの!？」

「えっ？ あつ、え、えつと……ご、ごめんさい……」

桐生への怒りとスカロンからの叱咤に混乱したルイズは小さくなりながら謝罪の言葉をお口にす。

「いい、ルイズちゃん？ 仕事が出来ないのは仕方ない事よ。いきなり完璧に働いて貰おうなんて私も思っていないわ。でもね、少しでも覚えようと努力もしないのは良くないわ。貴女が苦労しているのはお父さんから聞いているけど、一度仕事に出ればそんな事



は関係なくなるの。人にはそれぞれ事情があり、そんな中で仕事をしているんだから。だからこそ私は誰も甘やかさない代わりに、誰もを平等に扱わせて貰ってるの」

スカロンはそう言うのと、ルイズの肩を掴んで視線を合わせる様に屈み込んだ。

「この際だからハッキリ言うわ。ルイズちゃん……苦勞したからって、何時までも甘えないで」

ルイズはギュッと拳を握り締め、スカロンを睨み付けた。

何で私があんたに……平民のあんたなんかに説教されなきゃいけないのよ！

ルイズの視線を真っ直ぐに受け止めたスカロンは口元に笑みを浮かべ、何時もの女口調ではなく、声も地声に戻して言った。

「俺に説教されて悔しいか？ だったら俺を見返してみろ。そして、その悔しいと思う感情を忘れるな。その感情があれば、お前は何時でも俺を見返すチャンスがある」

それだけ言って立ち上がると、スカロンは客の元へと向かって行った。

一人残されたルイズは痛くなるくらいに拳を握り締め、久しく流れた悔し涙に頬を濡らした。

スカロンと何か話していたらしいルイズを見て、桐生は手の動きを止めて小さく溜め息をついた。あの様子では、どうやら何か怒られたらしい。

少し心配そうにルイズを見るも、桐生はすぐさま皿洗いを再開した。ルイズを心配するのは仕事が終わった後だ。今はこの大量の皿を磨くのが先だと自分に言い聞かせた。

「ルイズ、何かやらかしちゃったみたいね」

まだ桐生の側にいたジェシカがルイズを見ながら言う。

桐生はああ、と短く返事を返して視線は今磨いている皿から離さなかつた。

ふと、ジェシカが昨日の様に桐生のシャツの袖をクイツと引いた。

「ね、カズマ。ちよつと話したい事があるからあたしの部屋に来てくれない？」

囁く様に言うジェシカに視線を向けた桐生は訝しげな表情で首を傾げた。

「まだ仕事中だろ。仕事が終わってから聞いてやるよ」

「ううん、今話したいの。大丈夫、パパには休憩つて名目で一旦抜けさせてあげるから」

尚も食い下がるジェシカに少し面倒そうに溜め息を漏らしてから、桐生は仕方ないと

ばかりに頷いて見せた。

ジェシカは顔を輝かせながらスカロンの元へと駆け寄ると、何やら話をした後桐生の

元へと戻つて来た。

「オツケーだつてさ。じゃ、こっち来て」

泡にまみれたままの桐生の腕を掴んでグイグイと引つ張りながら歩くジェシカ。桐

生は溜め息をつきながらされるがままについて行った。

「ここがあたしの部屋。ほら、入って」

「……ああ」

招かれるまま桐生は部屋の中へと入った。

ジェシカの部屋は、思っていたよりも片付いていた。少し大きめの机の上には本が重ねられ、所々から付箋がはみ出している。恐らく仕事用とプライベート用が詰まれているであろう筆筒の横には全身を写す為であろう長めの鏡が立て掛けられている。

「ま、立ち話じゃせつかくの休憩も台無しになっちゃうしね。座ったら？」

机にしまわれていた椅子を出して桐生に腰掛ける様に勧めたジェシカはベッドにポスンと腰掛けた。

昼間の仕込みから立ちっぱなしだった桐生は素直に椅子に腰掛け、溜め息を漏らしながら身体を軽く伸ばした。

「で、話って何だ？」

煙草を吸いたく思うもここがジェシカの部屋である為ポケットに入れようとした手を引つ込めながら尋ねる桐生。

そんな桐生にジェシカは突然ニヤニヤした笑みを浮かべ始めた。

「あたしいく、わかっちゃったかも」

「何がだ？」

何処かもつたいぶった様子で話すジェシカに桐生は首を傾げた。

「ルイズの事。あの子、貴族なんですよ?」

ジェシカの言葉に、桐生は無表情のまま黙り込んだ。

そんな桐生にジェシカは手を振って見せる。

「とぼけなくって良いの。あたしはね、このお店の女の子の管理を任されてるのよ。だから女の子を見る目にはちよつとした自信があるの。ルイズってばお皿の運び方も知らないし、そのくせ妙にプライド高いし……それと、あの物腰。あれは貴族独特の感じがしたわ。あたしもこのお店で働き出して長いけど、あんな優雅な物腰なのはそこらじゃないもの」

「……どうだろうな。生憎、俺はあいつを引き取った身だ。だからあいつの出生や育った環境まではわからねえ」

ある意味では嘘ではない言葉を紡ぎ、話をはぐらかす桐生。

しかし、一度火の点いたジェシカの好奇心は治らない。

「だから、とぼけなくって良いって。何か事情があるんでしょ? でもルイズが貴族となると……カズマは従者か何か?」

「……何度も言うが、俺はあいつを引き取った身だ。だからあいつが貴族かどうかも知らねえし、興味もねえ。ただあいつが真つ当に生きてくれれば、それで良い」

これも嘘ではない。実際今回の一件、ルイズには人として色々勉強させたいと思っていたのもあってこの場所に厄介になる事にしたのだ。

貴族と言う概念に囚われない、貴族以上の貴族になつて貰う為に。

ジェシカはジツと桐生の顔を見つめた。まるで嘘を探るかの様に。

「なんか、カズマつて分かりにくいわね。嘘だけをついている訳じゃないみたいだし……でも、何か隠してるのは分かるわ。こちとら鋭いタニアつ子なんでね」

桐生はその言葉に対して口をつぐんだ。

神室町でもそうだったが、夜の街を長く生きている人間は観察力が人一倍高い。客の性格、クセ、好み等を的確に覚え、それに応えなければ生きていけないからだ。

桐生がこれ以上は簡単に口を割らないと判断したジェシカは、急に立ち上がって黒く長い髪を掻き分け、色っぽい笑みを浮かべて見せた。

そこには少女だと思っていたジェシカは居なく、夜の世界を生きる女の顔をしたジェシカが立っていた。

「ねえ、カズマ……」

ジェシカはゆっくり桐生に近付き、そのまま椅子に座る桐生の膝の上に腰掛け小声で囁いた。

柔らかくシエスタ程のボリュームのある胸が桐生の胸板に押し当てられ、その感触と

温もりを服越しに伝える。

ジェシカの手が桐生の顎のラインをなぞる様に肌を滑り、お互いの吐息が吹きかかる程の近い距離に顔を近付ける。

「ね、お願い。誰にもした事ないすっごいサービスをしてあげるから、あたしだけにこっそり教えてくれない？ あんたとルイズの関係とか、何を企んでいるのかとか……」

熱く、甘いジェシカの吐息が桐生の唇を撫で、そのまま重なりそうな程更に顔が近付くと、桐生は優しい笑みを浮かべてジェシカの唇に自分の人差し指を当てた。

「悪いが、店長の娘に手を出して追い出されるなんてのはごめんなんだ。そろそろ休憩は終わりだ」

優しくジェシカの頭を撫でたかと思うと、ドレス越しの腰を掴んで自分の膝から立たせた桐生はそのまま自分も立ち上がる。

「だがまあ、これだけは言っとくぜ。俺とルイズが何を企んでるかとはかく、この店に迷惑を掛けるつもりはねえよ」

桐生はジェシカに背を向けて歩き出そうとすると、不意に留まってジェシカへ顔を向けた。

「それと、色仕掛けで男を墮とすのを悪いとは言わないが、もつと自分を大事にしろ。少なくともお前の父親は、お前にそんな事をして欲しいとは思っていない筈だ」

それだけ言って出て行った桐生の背中を見送ると、ジェシカは思いつ切りベッドに倒れこんで深い溜め息を漏らした。

「うっわ……あたし、負けた。あんな親父に」

悔しそうに漏らしながらも、何処か嬉しそうな表情を浮かべてジェシカは一人呟いた。

ジェシカの部屋から戻った桐生は再び皿洗いを再開すると、ルイズが店内に居ない事に気が付いた。

店内の隅から隅まで見回しても、何処にも姿が見当たらない。

少し心配になりながらも、容赦なく次から次へと積まれる皿に追われて探しに行けない桐生は、結局店が閉まるまで動けなかった。

仕事が終わわり、それぞれが片付けをしていると、

「カズマ君、ちよつと良いかしら?」

とスカロンが桐生に話し掛けた。

桐生が振り返ると、スカロンの手にはシチューとパンが盛られた皿の乗ったお盆があった。

「何だ、その料理は?」

「今日の賄い食よ。二人で食べてちようだい」

「今日のは昨日よりも豪勢だな。何かあったのか?」

昨日の賄い食は豆が少しだけ入ったスープだった為、食事の質の上がりに素直に桐生は驚いた。

そんな桐生に、スカロンは小さな溜め息を漏らしながら首を振った。

「ちよつとルイズちゃんに注意したら、あの子部屋に引きこもつちやつてね。これでも食べて、元気を出して貰おうと思って」

「……そうだったか。気を遣わせて済まないな」

あの時スカロンから何を言われたか分からないが、ルイズはどうやら落ち込んでいるらしい。しかし、仕事を途中で抜けるという勝手な行為に桐生は申し訳なく思いながらお盆を受け取った。

「良いのよ。あの子には少しキツイ言葉だったみたいだから。私ってばやつぱりまだまだね。女の子をそれなりに見て来たつもりだったけど、まだまだ勉強が必要だわ」

「いや、仕事をないがしろにして引きこもつちまうとは……迷惑を掛けた。父親として申し訳ない」

お盆を持ったまま謝罪の為に頭を下げる桐生にスカロンは手を振った。

「カズマ君……正直ルイズちゃんは、ちよつと世間知らず過ぎるわ。仕事はどういう物



か分かってない。でもね、決して駄目な子ではないと思うわ。あの子の目には強い光がある。何事も乗り越えられそうな、強い光がね。今ならまだ間に合う。あの子はまだまだ人として伸びる筈よ。だから申し訳ないけど、此処に居る間は厳しく指導させて貰うわ」

「分かってる。至らない娘だが、どうか宜しく頼む」

幸い娘のジェシカと違って、スカロンは自分とルイズが親子である事に疑いを持っていないらしい。

桐生は料理を持ったまま部屋へと入ると、ベッドの上で毛布に包まりうずくまつてるルイズを見つけた。

桐生は料理を積み重ねた木箱の上に置くと、ツカツカとベッドに近付いて乱暴に毛布を剥いだ。

「何するのよー！」

突然毛布を剥がれたルイズが抗議の声を上げる。頬には涙の跡が見受けられた。

「どういうつもりだ、ルイズ。仕事の最中に抜け出すなんていい加減な事をして」

「何が仕事よ！ 大体、貴族の私が何であんな事しなきゃいけないのよ！ あんなの平民のやる事じゃない！」

「お前の今回の任務は、平民に紛れて情報を集める事だろうか？ なのに何だ？ 客を怒

らせるだけで、仕事だけじゃなくて任務も出来てねえじゃねえか。あのお姫様はお前を信じて任務を託したんだらう？ その想いをないがしろにする気か？」

「そんなの分かつてるわよ！ 私が言いたいのは、何でその任務の為にあんな下らない酌だの愛想笑いをしなきゃならないのかって言いたいの！ 貴族の私が」

「いい加減にしろー！」

久しく聞く桐生の本気の怒声に、ルイズの身体がビクツと跳ねる。

桐生の表情は怒りそのもので染まっており、鋭い眼光がルイズを射抜く。

「さっきから聞いてりゃあ貴族貴族と。貴族は平民よりも偉いんだろ？ だったら平民の出来る事なら何だつて出来るだらうが。何でお前等の言う平民があんなに汗水垂らして働いてるか分かるか？ お前等貴族と違って、働かなきゃ生活出来ないからだ。恋人の為、家族の為、或いは自分の夢の為に必死に働いて金を稼いでいるんだ。お前等貴族が働かずに生活出来ているのは、あいつ等平民の働きがあつてこそという事を忘れるな！」

桐生の言葉に反論出来ないルイズは俯きながら唇を噛み締め、ベッドのシーツをギュツと握った。

平民が何の為に働いているのか。そんな事、考えた事もなかった。

「勘違いすんなよ、ルイズ。お前が俺にとってどうでも良い奴なら、こんな厳しくは言わ

ない。幸か不幸か俺達は出会い、そして主人と使い魔という立場になった。俺はお前には、そこらの貴族よりもっと人の痛みや想いが分かる貴族になって欲しいから言っているんだ。そして俺は、お前ならそれが出来る事を知っている。簡単に物事を諦めたりしないのを知っている。俺の知っているルイズ・フランソワーズ・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、そんじよそこらの貴族とは違う。違うか、ルイズ？」

ルイズは溢れ出る涙を手の甲で懸命に拭うと、真っ赤になった瞳で桐生を睨み付けて立ち上がった。

「当たり前、前じゃないの。見てなさい！ あんたも、あの親父も、見返してやるんだから！ 私が本気になったら凄いつて所、今一度教えてやるわよ！」

「そうだ、それで良い。お前なら出来る」

瞳の奥にメラメラと炎が宿ったルイズに桐生は小さな笑みを浮かべる。

一先ずここで騒動は終わったかと思うと、突然拍手が部屋の中で鳴り響いた。

慌てて二人が音の鳴る方へと視線を向けると、にんまりとしたジェシカが此方を見て立っていた。

「お前、何時の間に……」

「カズマの怒鳴り声でしたからちよつと気になって来たんだけど、なかなか感動的な場面だったわ。ま、最初の方は何言ってるかわかんなかったんだけど、取り敢えずルイズ

がお父さんに凄い宣言をしているのを見れたから良しとするわよ。それじゃあ、ルイズ……本気になったらどう凄いのか、ハッキリ見せて貰おうじゃない?」

「何であんたにそんな風になら目線と言われなきやいけないのよ」

ルイズは忌々しげにジェシカを見ながら吐き捨てる様に言った。ただでさえシエスタと被る部分が多くて気に入らないのに、自分を呼び捨てで呼んでくる所がますます気に入らない。

「あのねえ、あんたのお父さんには言ったけど、あたしはこのお店の女の子の管理も任されてるの。あんたみたいにお客さんを怒らせるだけの子は、ハッキリ言って迷惑なの。あんたみたいな餓鬼のせいでお店の評判に傷が付いたら、困るの。分かる?」

「が、餓鬼ですって!?! これでももう十六よ!」

「え? あたしと同一年なの?」

ジェシカは心底驚いた様に言ってからルイズの頭のとっぺんから爪先まで眺め、最後に胸を凝視してからプツと小さく吹き出した。

その瞬間、ルイズの中で再びマグマが盛大に噴き上がった。

こいつ、今笑った! 私の胸を見て笑った!

鋭い目付きで睨み付けるルイズを全く意に介さずジェシカは指を立てて見せた。

「あのね、今夜からチップレースってのがあるの。お店の子達の中で一週間の間にどれ

だけチップを貯めたかを競い合うゲームなの。そこであんたの本気とやらを見せて貰おうじゃない。ま、口だけだろうけど」

ジェシカの挑発に、ルイズは完全に切れた。

「上等よ！ あんたみたいな胸の大きいだけの馬鹿女なんかに負けるもんですか！ 城が建つくらいにチップを貯めてやるわよ！」

「あら、言ったわね？」

「ええ、言ったわ！ 私が勝ったら、あんたには跪いて謝って貰うわよ！」

「良いわよ。ならあたしが勝ったら……あんた達の秘密を全部教えて貰うからね。それじゃ、お休み」

ジェシカは余裕たっぷりな様子でヒラヒラと手を振りながら出て行った。

ルイズは怒りが収まらないらしく、何度も枕をボスボス音を立てて殴りながら息を荒げた。

「本当にあつたま来た！ あの馬鹿女、ぜえつたいに謝らせてやる！ 見てなさい！ 酌でも何でもして、チップも情報もたっぷり集めてやるわ！」

まるで怒り狂った猫の様に髪を逆立ててフーツフーツと息を荒げるルイズに桐生が小さく苦笑する。

そんな桐生に、ルイズが顔を向けて口を開いた。

「でも、あんたは良いの？」

「何がだ？」

「その、ご主人様が他の男にベタベタ触られても……」

言いながらルイズの顔が怒りとは違った赤みを差し始めた。

桐生はそんなルイズに小さく笑うと、優しく頭を撫でた。

「心配すんな。お前に変な事する奴が居たら俺が直ぐにぶっ飛ばしてやるよ」

その言葉と手の温もりに、ルイズは安らぎを感じて瞳を閉じた。

瞬間、ルイズの腹からクウツと可愛らしい音が鳴り響いた。空腹から腹の虫が限界を訴えたのだ。

「さ、さあ！ さっさと食べて今夜に備えて寝るわよ！」

ルイズは恥ずかしさから真っ赤になりながらシチューとパンを頬張ると、今夜のチツプレスに向けて毛布に包まった。

桐生はそんなルイズを見て、今回の経験がルイズにとって良い物になる様に祈りながら隣で眠りについた。

## 第35話

店の仕込みが終わっていいよいよ開店間際、いつものミーティングでスカロンがパンパンと手を鳴らした。

「さあ、いいよいよこの時が来たわよ！ 準備は宜しくて!? 妖精さん達！」

「はい！ ミ・マドモワゼル！」

「今日から張り切りチップレース、開幕よ！」

天井に向かって手を上げてポーズしながら宣言するスカロンに、従業員一同から歓声と拍手が鳴り響く。

「さて、皆さんも知つての通り……まだこの店が「鰻の寝床」亭なんて色気も何もへつたくれない名前だった頃、トリスティン魅了王子と言われたアンリ三世陛下がお忍びでこのお店にいらつしやつたわ。そこで出会つた給仕の娘に、なんと陛下は恋を！ 恋を！ してしまつたのよ！」

激しい動きを交えながら語るスカロンの姿はどこかキュルケと被つて見えた桐生は一瞬、スカロンの顔でキュルケの身体と言うとんでもない妄想が頭に浮かんで、咳払いでその悪魔を頭の外へと追いやった。

「だけど王族と町娘。決して結ばれてはいけない恋の苦しきから、陛下は一枚のビスチエを娘に送り、その恋を諦めたの。私のご先祖様はその恋に激しく感じ入り、遂にはそのビスチエに因んで今のお店の名前になったのよ。そしてこれこそが、陛下が娘に送った「魅惑のビスチエ」！」

スカロンは突然服とズボンを脱ぎ捨てると、その逞しい身体にフィットする様に着込まれた丈の短い色っぽい、黒染めのビスチエが露わになった。

スカロンの姿に思わず吹き出した桐生は何とか誤魔化そうと大きく咳込んで口元を抑えた。

「今から遡る事四百年前、陛下が恋した娘に送られたこの「魅惑のビスチエ」は我が家の家宝となったわ！　そしてこのビスチエには着る者の身体にピッタリと合う様に伸縮する魔法と、「魅了」の魔法がかけられているのよ！」

「素敵なお話ね！　ミ・マドモワゼル！」

「んんんんんっ！　トレビア~~~~ン！」

感極まった様にポーズングして見せるスカロンに、桐生は悪くないと思ってしまうている自分に驚いた。

あんなにも気持ち悪い姿をしているが、どうやらこれが「魅了」の魔法の効果らしい。徐々にスカロンの姿にこれはこれでアリなのでは？　と思えてくる自分がいるのだ。



クネクネと身体を動かして色っぽい仕草をして見せるスカロンの演説はまだ続く。

「今日から始まるチツプレースに優勝した妖精さんには、この「魅惑のビスチエ」を一日着用する権利が与えられるわ！ もうこれ着た日にやあチツプなんて湯水のように貰えるの間違いないし！ そんな訳だから、みんな頑張つてね！」

「はい！ ミ・マドモワゼル！」

「宜しい！ では、グラスを持って！」

スカロンの号令に事前に配られていた、赤ワインの注がれたグラスを掲げる従業員一同。

「それじゃあチツプレースの成功とお、商売繁盛とお、」

そこでこほんと咳払いしたスカロンは身体を直立させて真顔に戻り、何時もの女言葉ではなく地声で言った。

「女王陛下の健康を祈って、乾杯」

スカロンに続く様に乾杯と言ってからみんなワインを呷ってグラスを空けた。

「さあ、今日も張り切って営業開始よ！」

パンパンと再び手を鳴らしたスカロンの言葉にそれぞれが持ち場へと向かって歩き出した。

「あ、あの……スカロン店長！」

そんな中、一人動かず空いたグラスを持ったままのルイズがスカロンに声を掛ける。「どうしたの、ルイズちゃん？」

スカロンは首を傾げながらルイズに近付くと、優しい微笑みを浮かべながら身体を屈めて視線を合わせながら問い掛ける。

ルイズは指をもじもじ動かしながらえっと、あの、と繰り返してから顔を赤らめ俯きながら口を開いた。

「昨日は、勝手にお店から出て行ってしまつてごめんなさい。今日からまた頑張りますから……宜しく、お願いします……」

慣れない謝罪に顔を赤らめながら必死に言葉を紡ぐルイズ。

昨日寝る前に、桐生から悪い事をしたのだから先ずはキッチンと謝る様にと言われて実践したのだ。この場に立つまでに、何度も貴族のプライドが邪魔したが、ルイズはそれを必死に押し込めた。

ジェシカに勝つと決めたのだ。謝罪の一つも出来ずに、勝負に勝つなんて出来る筈がない。

スカロンは優しくルイズの頭を撫でながら笑顔で頷いた。

「大丈夫よ、ルイズちゃん。でも昨日言った通り、私はお店の子は誰もを平等に扱わせて貰つてるの。ルイズちゃんだけを応援する訳にはいかないわ。だから、これは内緒よ」

「へ？ きやつ!？」

スカロンの最後の小声に思わず顔を上げたルイズは次に驚きの声を上げた。突然スカロンがルイズを抱き締めて頭を撫でたのだ。

「頑張れよ、ルイズちゃん」

周りに聞こえない様に小声で耳元で囁いたスカロンの声は地声だった。スカロンはそつとルイズを離し、何時もの笑顔で自分の持ち場へと戻っていく。

その言葉から、声から、ルイズの身体は温かい何かを感じた。

ルイズは拳を握り締め、絶対にジェシカに勝とうと改めて思った。自分を応援してくれているのは桐生だけじゃない。その想いに、貴族も平民も無かった。

ルイズは慣れない酌とお世辞に四苦八苦しながら接客をしていた。

そこでルイズは改めて、色んな人間がいるのを思い知った。

ただ女の子と喋りたい客、女の子はともかく酒を飲みたい客、女の子とスキンシップを取りたがる客、褒められたい客、中には馬鹿にして欲しいなんて特殊な客もいた。

客の相手をしながら、時折聞こえて来るアンリエッタや国への不満を、ルイズは小さくメモを取っていた。

「タルブの村での勝利は偶然だ。この国はもうお終いさ」

と言う意見もあれば、

「あの戦いを機に一気に攻め込みやあ良いんだ！ 勝利は我が国の物だ！」

と言う意見もある。また、アンリエッタに対しては、

「あのお姫様が勝利を導いてくれる筈だ！」

と言う声もあれば、

「戦のいの字も知らない小娘に何が出来るってんだ」

と言う声も上がっていた。

ルイズは聞いた事を事細かく書いては、寝る前に伝承鳩にメモを括り付けてアンリエッタの元へと飛ばした。

そんなこんなをしていて三日目を迎えたチップレース。

ルイズは未だチップを一枚も貰っていなかった。

誰も彼もが新人のルイズに声を掛けはするが、身長や胸の小ささからやその慣れない引きつった笑顔に愛想が尽きて他の女の子を指名してしまうのだ。

それでもルイズは必死に耐えた。慣れないお世辞等を口にして少しでもチップを貰える様に努力し続けた。

「おい、そのチビ。ちよつとこつち来い」

酔っ払った男がワインを運ぶルイズに声を掛けた。

ルイズはチビと言う言葉に少しムツとしながらも必死に笑顔を作って近付いた。

歳は四十位だろうか。薄汚れた草色のシャツと茶色いズボンで短いプロンドの髪に同じ色の髭が伸び放題に蓄えられている。

「はい、何でしょう?」

「……近くで見るとお前、随分小さいな。身長も胸も」

胸も。その言葉にルイズの中でビシリと何かにヒビが入る音が鳴り響いた。

この男、一生口を聞けなくしてやろうか。

黒ずんだ殺意を押しえ付け、青筋を立て引き攣った笑顔を浮かべながらワインを男の空いたグラスに注いだ。

「メシはちやんと食ってんのか?」

「え、ええ。一応……」

「……お前、歳幾つだ?」

「こ、今年で十六になりました」

「十六か……」

男はマジマジとルイズを見つめながら呟いた。

その視線に苛立ちを覚えかけたルイズは不意に気付いた。自分を見る男の目。その目には、深い悲しみが込められていた。

「……おい、チビ。これでちったあ何か食え。そんで身長も胸もデカくなれ」

男はポケットからジャラジャラと五枚程の金貨を机に置くと、ルイズに差し出した。

「あ、ありがとうございますー！」

嬉しそうに金貨を受け取るルイズに男は目を細め、少しだけ口元を緩めた。

「……俺の娘も十六だった。その金でもっと、飯を食わせてやりたかったんだけどな

……」

「十六、だった？」

男の歯切れの悪い言葉に、ルイズは首を傾げながら問い掛けた。

男は少し俯いて暫く黙った後、ゆっくりと口を開いた。

「お前も知ってんだろ？　ちよつと前にあつたタルブの村での戦を。俺の妻と、娘は

……あの戦いで死んだ」

ルイズは思わず言葉を詰まらせて男を見つめた。

「竜騎士のドラゴンの炎で焼かれちまつたらしくてな。出稼ぎに出て、帰って出迎えてくれたのはあいつ等の墓だった」

男はそう言うのとルイズが注いだワインを一気に飲み干し、勘定の料金を机に置いて立ち上がった。

「酔っ払いのつまんねえ話を聞かせて悪かったな。チビ、お前はたらふく食って、背も胸

もデカくなって、もつと良い女になれよ」

少し申し訳なきように苦笑して見せた男を見送りながら、ルイズは貰った金貨をギユツと握り締めた。

いつも小遣いや買い物の際に握っていた金貨だったが、今日チツプとして貰った金貨は酷く重く感じた。

チツプレース最終日。

仕事の前のミーティングで、スカロンはいつも以上にテンションを上げて口を開いた。

「さあ、今日がチツプレース最後の日よ！ まだまだ逆転も有り得るからみんな頑張つてちようだい！ では現在のトップスリーの発表よ！ 第三位、マレーヌちゃん！ 第二位、ジャンヌちゃん！ そして一位は……不肖、私の娘、ジェシカ！」

周りから歓声と拍手が鳴り響く中、この日の為に用意したのか何時もとは違うスリットの深いセクシーな衣装に身を包んだジェシカが優雅に一礼して見せる。

そんなジェシカをルイズは悔しそうに歯噛みしながら見た後、掌で輝く五枚の金貨を見つめた。

結局、ルイズはこの日まで家族を失った男から貰った金貨以外一枚も獲得出来ていな

い。

「さあ、今日も張り切つて行くわよ！ 今日には月末のダエグの曜日！ お客様も何時も以上に多くいらつしやるから、みんな頑張つてね！」

パンパンとスカロンが手を叩いたのを合図に、みんな持ち場へと向かつて駆け出す。

「どう、ルイズ？ まだまだ私に勝つ気はある？」

余裕たっぷりな様子で話し掛けて来たジェシカにルイズは言葉を詰まらせる。確か、ジェシカは今日までに百六十エキュール以上稼いでいると言っていた。ここから逆転するのは不可能に近い。

「ま、せいぜい頑張つてちょうだい。あんたみたいな餓鬼じゃ、それ以上稼ぐなんて無理でしょうけど」

「まだ勝負はついてないわ！ 見てなさい！ あんたをぎやふんと言わせてやるわよ！」

「はいはい。そう言うのは私より稼いでから言いましようね、お嬢さん」

カラカラと小馬鹿にした笑い声を上げながら去つていくジェシカを、ルイズは鋭く睨み付けてから自分も持ち場へと向かった。

その日も客の入りは良く満席となっていた店内に、一人の男と四人の取り巻きらしい男達が入ってきた。



一人はでっぷりと肥え太った中年だ。リーダー格らしいその男は薄くなっている髪を気にする様に頭を何度も触っている。少しよれているが貴族の証であるマントが小さくなびいている。周りの男達は緑色の軍服の様な服装だ。どうやら下級の貴族らしく、腰にはレイピアの様な杖を差している。

その男達の一団が店に入るなり、店の中で先程までの活気は一瞬にして消え去った。スカロンはすぐ様その男に近付くなり揉み手をしながら愛想笑いを浮かべた。

「これはこれはチュレンヌ様。ようこそ我が「魅惑の妖精」亭へ」

チュレンヌと呼ばれたその太った男は鯨の様な髭を指先で弄びながら周りを見回した。

「中々の繁盛振りじゃないか、スカロン。これは税金を多少上げても大丈夫そうだな」  
厭らしい笑みを浮かべて言うチュレンヌにスカロンは大きく首を振りながら困った表情を浮かべた。

「とんでもございませぬ。本日は偶々客の入り良かっただけです。毎日毎日、閑古鳥が鳴いていつ首を吊る羽目になるか怯える毎日です」

「ふんっ。まあ、良い。今日は客として来たのだ。その様な仕事の話は抜きにしようじゃないか」

「しかし、チュレンヌ様。生憎今は満席でして」

「ほう？」

チュレンヌは店内を見回してからパチンと指を鳴らす。すると取り巻きの男達がレイピアの様な杖を引き抜いて銀色の鈍い輝きを店内に散らばせた。

すると、今まで座っていた客が代金も払わずにそそくさと店の外へと出て行ってしまった。

「どうやら閑古鳥が鳴いていると言うのは本当らしいな」

意地悪い笑い声を出しながら我が物顔でドカツと椅子に腰掛けるチュレンヌ。

そんなチュレンヌの態度に、桐生は持っていた皿を思わず割ってしまった程強く握り締めた。

「何だ、あの野郎は？」

するといつの間にか桐生の横にやって来ていたジェシカが、忌々しそうにチュレンヌを見ながら吐き棄てる様に言った。

「ここら一帯のお店を任されてる徴税官のチュレンヌよ。貴族だからって威張り散らして偶に店に来ては私達にたかるの。銅貨一枚すら払った事ないわ。でも言う事を聞かないと、とんでもない税金をかけられるの」

弱い者にたかり私腹を肥やす。桐生が最も嫌うタイプである。

「おい、誰か酌をせぬか。せっかく来てやったのだぞ。少しは愉しませぬか」

「誰が酌なんてするもんですか。触るだけ触って、一銭も払わない癖に」

心底嫌そうに言うジュエシカを他所に、一人の少女がチュレンヌに近付いた。

ルイズである。このままではチップレースに負けてしまうと、少し気持ち悪い男だと思いつつも給仕の仕事をしたのだ。

「何だ、貴様は？」

「お客様は……素敵ですわね」

少し引きつった笑顔で近付いたルイズをチュレンヌが訝しげに見つめると、話にならないとばかりに手を振った。

「貴様の様な餓鬼に用はない。邪魔だ、あっちへ行け」

ビシリ、とルイズの中で大きく何かにヒビが入る音が鳴り響く。

するとチュレンヌは、ルイズをマジマジと眺めて鼻で笑った。

「なんだ、良く見たらただの小さな女か。身長も胸も小さくてわからなかったわ」

ビキキッ！　ともう一回、ルイズの中で何かにヒビが入った。その裂け目から激しい怒りが迸るが、ルイズは懸命にそれを抑えつけて引きつった笑顔を浮かべ続けた。

「しかし、大きさはないが形は良さそうだ。どれ、このチュレンヌ様が形を確かめてやろう」

チュレンヌの手が、ルイズの胸に向かって伸びていく。

そのチュレンヌの手首を強い力で掴み、グイツと上げさせた者が居た。桐生だ。「か、カズマ……」

少し不安そうながらも、何処か安心した様に桐生を見上げて呟くルイズ。

「ここは店の給仕と酒や会話を楽しまれるお店です。それ以上の事をお望みなら、どうぞそういったお店へ」

言葉こそ丁寧だが、乱暴にルイズから身体を離させる桐生にチュレンヌが顔を赤くしてその太った身を寄せた。

「何だ、貴様は!? 貴様の様な男に用はない! 引っ込んでいろー!」

「そうはいきません。私も従業員の一人です。この店の人間を守る義務がございませぬ。私が気に入らないのであれば、どうぞ他の店へ」

「貴様……客に向かってその態度はなんだ!?!」

「客?」

桐生は一瞬間の抜けた声を漏らしてから溜め息をつく、チュレンヌの胸倉を掴んで鋭い眼光で睨み付けた。

「き、貴様?!」

「寝惚けた事抜かしてんじゃねえぞ。客つてのは店のルールを守り、他の客に迷惑を掛けずに楽しんでる人間の事だ。今のためえに客を名乗る資格はねえ」

チュレンヌが掴まれているのに取り巻きの貴族達が杖を抜こうと手を掛けた瞬間、  
「お、……」

低く、目には見えぬもどつもない殺気の込められた桐生の声にその動きが止まる。  
ゆつくりとチュレンヌから貴族達へと顔を向けた桐生の眼は、それだけで人を殺せそ  
うな鋭さを秘めていた。

「俺は今こいつと話している。それを邪魔するつてんならお前等にも付き合つて貰うが  
……俺は今、機嫌が悪い。五体満足な身体で帰れると思うなよ。それでも良いなら杖を  
抜け。そうじゃないならとつと失せろ」

ゴクリ、と貴族達の誰かが生唾を飲んだ音が聞こえたかと思うと、貴族達は互いの顔  
を見合わせた後ゾロゾロと店から出て行った。

「お、おい！ 何処へ行く！ この者を捕らえぬか！ おい！」

懸命にチュレンヌが叫ぶが貴族達は振り返りもせず店の外に出ては散つて行った。  
「捕らえるなら、てめえ（自分）でやったらどうだ？」

桐生は乱暴にチュレンヌを離すとエプロンを外して小馬鹿にした様に言う。

チュレンヌは顔を真っ赤にしながら腰に差していた杖を引き抜いた。

「貴様！ もう許さん！ 縛り上げて鬮り殺しにしてくれる！」

「上等だ。ここのじゃあ店の迷惑になる。相手になつてやるから表へ出る」

桐生は店の掃除に使うデッキブラシを手に取ると、顎で店の外へ出る様にチュレンヌに促してから外へと出る。

チュレンヌもそれに続き、更に店の人間も不安そうに二人の後を追った。

「魅惑の妖精」亭での騒ぎは外にも聞こえてた様で、周りの店から呑んでいた客達が外へと集まってちよつとした人集りが出来ていた。

少し距離を空けて対峙する桐生とチュレンヌ。

「おい、スカロン。俺の給料からブラシ代を引いてくれ。代わりにこの意地汚ねえゴミは、俺が掃除してやる」

桐生はそう言いながらブラシの部分を取り外し、柄だけになった木の棒を構える。

そんな桐生に、チュレンヌが杖を抜きながら馬鹿にする様に笑い声を上げた。

「ふははっ！ そんな木の棒つきれで、何が出来ると言うのだ!! 笑わせるな！ 薄汚い皿洗い風情が！」

「そうだな……少し手の内を見せてやるよ」

チュレンヌの挑発に不敵な笑みを浮かべた桐生は、木の棒を地面に叩き付けた後に身体を捻りながら横薙ぎをして見せた。そのまま流れる様に巧みに棒を自分の手を軸に回転させ風を切る様なぶおんつという音を鳴らせる。

そのアクションスターさながらの動きに周りの観客から拍手や歓声が上がった。

チュレンヌの顔からも、徐々に余裕が無くなっていく。

深い深呼吸と共に、右手で棒を持つて背中に這わせる様な構えを取った桐生は、チュレンヌを見詰めて左手でちよいちよいと挑発する。

「来いよ。ゴミらしく、掃除してやるぜ」

「調子に……調子にのるなあっ！ 平民があっ！」

杖を構えて呪文を詠唱しようとしたチュレンヌに、桐生は左脚を軸に身体を回転させ鋭い横薙ぎを顔にお見舞いする。

右頬を穿たれたチュレンヌは後ろへとよろめくが、桐生は更に一步近付いて棒で腹を突き、そのまま力チ上げる様に顎へ先端を叩き付ける。

身体から青い光を迸らせながら桐生の追い打ちはまだ続く。左からの横薙ぎを再び顔に浴びせた後、そのまま右から脚を払ってチュレンヌの太った身体を無理矢理地面に倒した。そのまま上段へ棒を持ち上げると腹へ目掛けて打ち下ろし容赦なく叩き付けた。

蓮家操棒術奥義、「蓮家棒術の極み」だ。巧みな棒捌きは例えそれが箒だろうとモツプだろうと瞬時に武器へと姿を変える。

ルイズは以前、桐生が剣術と棒術を嗜んでいると話していたのを思い出したが、それが本当である事を改めて思い知った。

一方的な桐生の攻撃に呆氣に取られていた観客は、一瞬の間の後大きな歓声を上げて桐生を褒め称え始めた。

桐生は周りの歓声にも目をくれず、鼻血と口から血を流しながらもまだ此方を強く睨み付けてくるチュレンヌが起き上がるのを待った。

「この、平民風情が………貴族に楯突きおつて………」

丸々とした身体を支えてゆつくりと、脚を震わせながら起き上がるチュレンヌの姿に歓声も止んだ。

「カズマ！ そのままやっちゃって！」

ジェシカが叫ぶが桐生は動かない。チュレンヌが完全に立ち上がるまで待つつもりらしい。

「もう止めるなら、ここで終わりにしてやっても良いが………まだやるか？」

「当たり前、前だつ………！ 平民に負ける等、認められる訳あるまい！」

手の甲で鼻血を拭つたチュレンヌが憎悪を込めた眼差して桐生を睨む。

とうとうチュレンヌが完全に立ち上がると、桐生は溜め息を漏らして首を振った。

「やれやれ、ご立派だな。なら、次の一撃で決めてやる」

「やれる物ならやってみる！ 貴様はこの場で殺してくれる！」

杖を振るい、先端に火の玉を作り出したチュレンヌに桐生は一瞬笑みを浮かべると、



木の棒の端を持ってチュレンヌの脚の間に突き入れる。

一瞬チュレンヌが桐生の行為に訝しげにしてから杖を振ろうとするも、時既に遅し。

桐生はそのまま力任せに棒を持ち上げチュレンヌの股間に強く叩き付け、声にならない悲鳴を上げる太った身体をそのまま空へと打ち上げて地面に落下させる。

我流喧嘩体術、「長棒の極み」。長い棒を相手の股間に差し入れそのまま掬い上げる意外性を秘めた荒技だ。

観ていた観客の男達も自分の股間を押さえて切なそうに声を漏らす。

「いやあんっ！ カズマ君たらあっ！」

スカロンも思いつ切り股間を押さえながら声を上げた。その姿にギャラリーの男達は思わず股間から口元を手で押さえた。

桐生は棒を投げ捨てると、ルイズへと視線を向けた。

ルイズはその視線に桐生の意図を読み取ると、そそくさと屋根裏部屋まで掛けて隠してあったアンリエッタからの許可証を持って来た。

桐生が股間を押さえながら呻き声を上げるチュレンヌの頭を掴んで無理矢理上げさせると、駆け寄ったルイズが許可証を突き付ける。

「そ、それは陛下の許可し、ひぎっ!?!」

「あんまりでけえ声で喋るな。さもなきやこのまま頭を握り潰すぞ」

桐生のドスの利いた声と握力にチュレンヌは何度も頷いてからルイズを見上げた。

「見ての通り、私は陛下直属の女官で由緒正しい家系の三女よ。あんたみたいな木っ端の役人風情が、簡単に触れる訳ないでしょ」

「も、申し訳ございません！ し、失礼を！」

「本当にそう思ってるなら、今日の客の支払いは全部あんた持ちよ。それと、ここで見た物、聞いた事は全て忘れなさい。さもないと……」

ルイズがチラツと桐生に視線を向けると、桐生は心得ているかの様にチュレンヌに顔を近付けた。

「次は、てめえの命も無くなるぞ？」

「ひ、ひいつ！ わ、わかりましたわかりました！ 天地神明に誓い、この事は他言致しません！ こ、これでご勘弁を！」

チュレンヌは慌てて腰にぶら下げていた財布の袋をルイズに差し出した。中身を覗くと、エキュー金貨が数百枚程入っている。今日の客全員分を支払ってもお釣りが来る金額だ。

「良いわ。さあ、とつとと行きなさい。そして二度とこの店に来ないで。此処には、自分の生活や夢の為に頑張つて働いている人間しか居ないの。あんた達みたいな役所の人間を食べさせる為に働いている人間なんて居ないんだから」

「は、はいっ！ 失礼いたしましたあつ！」

チュレンヌは立ち上がるなり一目散に夜の闇へと消えて行った。

その瞬間、静かだった周りから歓声が沸き上がった。

店の女の子達は一齐に桐生とルイズに抱き着いて喜びの声を上げる。

「ありがとう、ルイズちゃん！ あの憎つたらしいチュレンヌの奴に一泡吹かせられたわ！」

「ざまあみろって感じよね！ あのデブ！」

「カズマ！ あんた格好良かったわよ！」

ジェシカも混ざって喜びの声を上げる中、桐生もルイズも複雑そうな笑みを浮かべて抱き締められていた。

騒ぎも収まり、店の中へと戻ってルイズ達はチュレンヌの置いていった袋を机に置いた。

「これは、文句無しよね」

そう言ったスカロンが周りを眺めると、従業員の誰もが笑顔で頷いた。

「今回のチップレースの優勝者は……ルイズちゃんに決定！」

スカロンの発表に周りから歓声と拍手が鳴り響いた。

ルイズは照れ臭そうに頬を掻きながら、みんなに促されて一步前へと出る。

「さあ、ルイズちゃん。このチップと「魅惑のビスチエ」は貴女の物よ。どうぞ受け取ってちょうだい」

チュレンヌが置いていった袋と「魅惑のビスチエ」を差し出しルイズに微笑みかけるスカロン。

ルイズはその二つをジッと見つめた後、手を差し伸ばしてその二つをスカロンへ押しやった。

「受け取れないわ」

ルイズの言葉に周りからどよめきが起こり、スカロンも困った様な表情を浮かべた。

「どうしたの、ルイズちゃん？　これは貴女が、自分で勝ち取った物なのよ？」

「そんな事ないわ。あの太つちよからお金を手に入れたのは私だけの力じゃなくて、カズマのお陰でもあるもの。だから、受け取れないわ」

「でも……」

「チップは、今までお店に掛けた迷惑料と、私の借金の返済として受け取って。今回のチップレース、私の負けよ」

そう言ったルイズはジェシカへと振り返ると、少し悔しそうながらも優しさのこもった笑みを浮かべて首を振った。

「ジェシカ……この勝負、貴女の勝ちよ。だから約束通り、貴女の質問に答えるわ。私は

貴族で、カズマは……人間だけど使い魔よ」

ルイズの告白に、店の中で沈黙が訪れた。しかし、それは息苦しい物ではなく、何故か誰も彼もがニヤニヤしている。

「あ、あれ？ 普通こういう時って、もっと驚いたりとかするんじゃないの？」

不安そうに周りを眺めるルイズに、スカロンは首を振って見せた。

「ルイズちゃんが貴族だなんて、最初からわかってたわよ」

「え、ええっ!？」

スカロンの言葉に、逆に驚きの声を上げるルイズ。

「当たり前じゃないの。こちとら夜の店を仕切ってる人間よ。人を見る目は人一倍なの。それにまあ……ルイズちゃんはわかりやすかったしねえ」

スカロンが苦笑混じりに言うのと、ジェシカも小悪魔の様な意地の悪い笑顔を浮かべてルイズを見た。

ルイズは恥ずかしさから顔を真っ赤にして俯いた。最初からバレていたなんて、今までの演技は何だったんだろうと軽く落ち込みを見せた。桐生も返す言葉が無いらしく、困った表情で頭を掻いていた。

そんなルイズに、スカロンは優しく肩を掴んで微笑んだ。

「大丈夫よ。何か訳があるんでしょう？ 誰かに言ったりはしないわ。それに、嬉し

かったのよ。ルイズちゃんもカズマ君も、あの豚野郎に私達の気持ち伝えてくれたじゃない」

ルイズが顔を上げると心底嬉しそうに笑うスカロンの顔がそこにあった。

「さあつ！ みんな、チップレースお疲れ様！ 明日は休みにして今夜は無礼講よ！  
今までの疲れを癒す様に、呑んで、食べて、騒ぎましょう！」

スカロンの掛け声に歓声が上がると、厨房から待つてましたとばかりに料理が大量に運ばれて来た。

店の机を埋め尽くさんばかりに並んだご馳走を囲む様にみんな並び、それぞれの手には年代物のワインが並々注がれたグラスが配られた。

「では、今回の優勝者は無しで！ その代わりに……」

スカロンが言葉を切つてルイズと桐生を交互に見つめた後、他のみんなは笑顔で頷いた。

「私達平民と共に働いてくれた優しい貴族のお嬢様と、その強く逞しい使い魔さんに！」

「乾杯！」

スカロンの音頭に声を揃えて上げた歓声の後、グラスを空けて料理へとみんなで手を伸ばした。

「ねえ、ルイズ」

ジェシカがちょこちょこことルイズに近付くと、ワインの酔いで少し赤らんだ顔で笑みを浮かべた。

「確かにあなたは貴族のお嬢様だけど、無礼講なら良いわよね？」

「な、何よ？」

思わず身構えたルイズにジェシカは蕩けた様に笑顔を浮かべた後、ガバツとルイズに抱き着いた。

少し身長に差がある為、ルイズの顔はジェシカの豊満な乳房の中へと埋められる。

「わぶっ！ ちょ、ちよつと！ いきなり何を」

「ありがとう」

そう言ったジェシカの顔からは笑顔が消え、大粒の涙をポロポロ流しながら泣きじやくっていた。

「このお店を、私達を守ってくれてありがとう。私達、いつもあいつに脅されて、嫌がらせされて……ずっと辛かった。私、あなたにこんな酷い事言つたのに……なのに、あなたは私達を守ってくれた。平民の私達を、貴族のあなたが。私、嬉しくて……」

「ジェシカ……」

今まで見せていた明るさとはかけ離れた、何処か憑き物が落ちた様に泣きじやくるジェシカをルイズはそつと抱き締めた。

そんな二人を、桐生とスカロンは優しい眼差しで見つめていた。

「まさか、貴族の方が私達を守ってくれるなんてね。後世に残る美談だわ」

スカロンはワインを小さく呷ると、深い溜息を漏らしてから桐生へ視線を移した。

「お疲れ様、カズマ君。手の掛かるお嬢様を宥めるのも大変だったでしょう?」

「いや、今回はあいつにとって良い経験になった筈だからな。疲れも吹き飛んださ」

桐生とスカロンは互いに小さく笑みを浮かべると、残り少なくなったワインのグラスを小さく重ねた。

平民と貴族が抱き合う。この世界では物語でしか有り得ない光景は何処までも美しく、何処までも優しかった。



## 第36話

トリストイン王宮の通路の石床をかつこつと音を立てて歩く一人の女騎士がいた。

板金で保護された鎖帷子を見に纏い、百合の紋章が描かれたサーコートをその上に羽織っているその騎士の短く整った金髪の下にある、澄み切った青い眼は迷いのない光が伺える。

行き交う貴族や親衛隊のメイジ達はその騎士をすれ違い様に立ち止まっては訝しげに眺め、目を丸くした。

騎士が腰からぶら下げているのは杖ではなく、細く長い剣だからである。

「ちつ。卑しい平民の女風情が、宮廷の通路を我が物顔で闊歩しおつて」

「何故あの様な粉挽き屋の女にシュヴァリエの称号を……。お若い陛下は気でも狂ったか？」

「聞いた所によりますと、あの女は新教徒らしいですぞ。おお、汚らわしい……。他国から我が国の品位を疑われかねん」

騎士は所々から投げかけられるあからさまな中傷や視線には目もくれず、堂々と通路を歩み進めてアンリエッタの執務室へと向かった。

王家の紋章が描かれたドアの前に控えた、魔法衛士隊隊員へアンリエッタとの対談の許可を申し込む。

「陛下は今、会談の最中だ。お引き取り願おうか」

「アリエスが参った、そう陛下にお伝え下さい。私は何時如何なる時でもご機嫌を伺える許可を頂いていますので」

此方を見下す態度を露骨に出しながら冷たく言った隊員はその騎士、アリエスの言葉に苦い顔をすると執務室へと入り、戻ってくると入室の許可を与えた。

アリエスが中に入ると、アンリエッタは高等法院のリツシユモンと会談をしているのが見えた。

高等法院とは、王国の司法を司る機関である。ここには特権階級の揉め事、裁判が持ち込まれる。劇場で行われる文学作品や音楽の検閲、更には平民の生活に関わる市場等を取り締まるのだ。その政策を巡っては、行政を担う王政府との対立も珍しくない。

アリエスの入室に気付いたアンリエッタは口端に微笑を浮かべると、リツシユモンに会談の打ち切りを伝えた。

「国民が税率の引き上げを快く思わないのはわかっています。しかし、今は非常事態なのです。国民に理解をして貰える様に、我々王族が働いて示しを見せなければなりません。国民もきつと、我々が真摯に働いていれば理解してくれる筈です」

「……仕方ありませんまい。何よりも陛下がお決めなされた事。では、私はこれで」

リツシユモンは深い溜め息を漏らしてからそう口にする、アンリエッタに深く頭を垂れて扉の脇に立つアニエスにも目をくれず退室して行った。

アニエスは椅子に座るアンリエッタの御前へまかり出ると、跪いて一礼した。

「アニエス・シュヴァリエ・ド・ミラン、参上仕りました」

アンリエッタは優しい微笑みを浮かべながら顔を上げる様にアニエスに促した。

「貴女が来てくれたという事は、調査は済んだのですね？」

「はっ。此方に」

アニエスは懐から書簡を取り出すと、アンリエッタへと捧げた。アンリエッタはその書簡を受けてると、早速とばかりに開いて中身を確認する。

そこには、アンリエッタがアニエスに依頼した、あの忌まわしき夜の調査の報告が書かれていた。あの日現れたアルピオンからの誘拐者、偽りの命を与えられ、人形として蘇ったウエールズが誰の手引きで侵入出来たかが書かれていた。

「手引きをした者がいる……そう取って宜しいのですね？」

「正確には、王宮を出る際に「すぐに戻る故門を閉めるな」と念を押して命じ、出掛けた者が一名」

「そしてその入れ違いに、私をかどわそうとした一味が入って来た」

苦しそうに呟くアンリエッタに、アニエスは頷いた。

「僅か五分の事です、陛下」

「それだけなら偶然で済まされる問題でしょう。しかし、貴女が調べてくれたこのお金は……説明がつきませんね」

調査書には、その男が己の地位を確固たる物にする為にばら撒いた莫大な裏金の額も書かれていた。

「およそ七万エキュ……こんな大金、彼の年金で賄える物ではありません」

「然りに」

アンリエッタの言葉にアニエスが同意を表す。

「その人物の屋敷に奉公する使用人に金を掴ませて得た情報ですが、アルビオン訛りを色濃く残す客が増えたとの事です」

「その使用人を此処へ。更なる情報を提供して貰いましょう」

「残念ながら、昨日より連絡が取れません。恐らく……感づかれ、消されたかと」

「……昔の人は良い事を言ったわ。獅子身中の虫。まさにこの事ね」

アンリエッタは深い溜め息を漏らしながら書簡を閉じた。

「レコン・キスタ」は国境を超えた貴族の連盟と聞きます」

「彼には信念等ありません。お金でしょう。理想よりも黄金が好きなお金。彼はお金でこ

の国を、そして私を売ろうとしたのです」

押し黙ったアニエスにアンリエッタは椅子から立ち上がって近付くと、優しくその肩に手を這わせた。

「ご苦労様でした。貴女は本当に良くやってくれた。お礼を申し上げます」

アニエスは首を振ってからサーコートの紋章を見つめた。百合をあしらった紋章……王家の印だ。

「私は陛下にこの身を捧げております。陛下は卑しき身分の私に姓と地位をお与え下さいました。私こそ、改めてお礼を申し上げさせて頂きたいと思えます」

「何を言うのです。貴女は先のタルブの戦で、貴族に劣らぬ戦果を上げたのです。貴女を貴族にする事に意義等ある筈ありません」

「勿体無いお言葉です、陛下」

アニエスは瞳を閉じながら深く頭を下げた。

アンリエッタはそんなアニエスを優しく見つめながら頬を撫で再び頭を上げさせる。「宮廷では苦労をなさってるようですね、アニエス？」

「生まれが生まれでございませうから。未だに「ラ・ミラン（粉挽き屋）」と嘲笑されるのも、仕方なき事と思っております」

「生まれと魂の高潔さには何も関係ないと言うのに。どうしてもこう貴族には、私を含め

馬鹿な人が多いのかしら」

「陛下、御身を卑下してはなりません」

「いいえ、アニエス。私も馬鹿だったのよ。私が唯一信頼する友人の……使い魔さんに言われたわ。「言い訳と決意の区別もつかない子供」だと。彼の言う通りだった。私は、王族としても人としても、まだまだ未熟である事を改めて思い知ったわ。未熟である以上、私もまだ貴女を嘲笑する馬鹿な人達と同類なのよ」

自嘲気味に笑いながらも、アンリエッタの瞳には優しい輝きが秘められていた。

「例の男……お裁きになりますか？」

「……証拠が足りません。これで犯罪を立証するのは難しいでしょう」

アニエスはそれならば、と低い声で言葉を紡いだ。

「陛下が新設された、この私めが率いる「銃士隊」にお任せ頂きますよう」

ワルドの裏切り、タルブの戦、この前の誘拐事件でトリステインを守る魔法衛士隊はボロボロになってしまっていた。現在では、グリフォン隊を引き入れたマンティコア隊のみである。

そこでアンリエッタが新たな兵隊として作り上げたのが、アニエス率いる「銃士隊」だ。人手不足から隊員は平民、更にはアンリエッタが女であるが故に身辺保護をしやすい女性のみで結成されている。銃士隊と名前の通り、魔法の代わりに最新のマスクेट

銃と剣によつて戦う部隊だ。

隊長が貴族でない事で他の隊との折衝や任務に支障をきたさない為、アニエスは特例で貴族の称号、「シユヴァリエ」と姓を名乗る権利が与えられた。

しかし、アンリエツタはこれを特例にするつもりはない。これからも優秀な平民が現れ、戦果を上げれば誰でも「シユヴァリエ」の称号を与えるつもりでいた。

あの忌まわしき夜の一件以来、アンリエツタはルイズ以外のメイジがどうにも信用出来なくなつていた。

「私共は宮廷の方々が申す様に卑しき身分の生まれ。卑しき者らしく、闇から闇へと葬る術も覚悟も持ち合わせておりませぬ」

アンリエツタは首を振つて見せた。

「貴女こそ、そう自分を、自分の仲間を卑下するのをおやめなさい。貴女は私が認めた近衛騎士隊の隊長です。近衛の隊長と言えば規範は違えど、格で言えば元帥にさえ匹敵するのですよ?」

アニエスは言葉を詰まらせた。

「誇りを持ちなさい。胸を張つて歩きなさい。品位等後から付くものです。生まれた時から品位を持つている人間等居ません」

「……御意」

「貴女は計画通り、あの男の行動を張りなさい。私の読みが正しければ、明日に犯人であれば尻尾を出す筈です。その場所を突き止め、フクロウで報せなさい」

「……泳がすおつもりで？」

「まさか。私はあの夜に関わった者を、誰一人許しません。人も国も……絶対に」

静かだが、瞳に強い憎悪の炎を灯すアンリエッタに、アニエスは一礼して退室した。

アニエスは心からアンリエッタに感謝していた。自分に貴族の位と姓と、復讐のチャンスを与えてくれたから。

ルイズが貴族とバレてから数日後の「魅惑の妖精」亭で、今日も桐生は皿を洗っていた。

ルイズは指名こそまだ貰えないながらも、それなりに仕事をこなしてチップも貰える様になっていた。

皿を洗いながら、桐生はここ数日のルイズの様子を思い返していた。

ここ最近のルイズは少し変わったと思う。それも良い方に。今までは小馬鹿にしてきた平民に対しても態度を改める様になったし、ジェシカを含めた店の女の子とも仕事終わりに談笑したり、貴族と平民の化粧の違いや流行り物の話に花を咲かせる事があった。



我が子の成長を見守る父親の様に、桐生の口元には自然と笑みが浮かんでいた。

「おう、カズマ。皿洗いが随分上手くなったじゃねえか」

厨房で働いている男が出来立ての料理を出しながら、ジェシカ直伝の洗い方で綺麗になつて積み重ねられた皿を眺めて笑顔で桐生に話し掛けた。

「しっかし、そんな何時までも冷てえ水に手突つ込んでたらふやけつちまうな。ちよつと休憩して来いよ」

「良いのか？」

「ああ。今日は酒の注文ばかりで調理は少ないしな。代わりにやつとくからよ」

「なら、言葉に甘えるでしょう。悪いな」

桐生は男に礼を言つて洗剤にまみれた手を拭うと、煙草を吸おうとポケットに手を入れて裏口のドアを開いて外に出た。

瞬間、何処からか走つて来た黒いローブに身を包んだ女が桐生と出会い頭にぶつかった。

女は思いつきり尻餅をついて痛みを耐える様に声を漏らす。桐生は慌てて女を引き起こした。

「す、すまん。大丈夫か？」

「だ、大丈夫です、ごめんなさい。あの、この辺に「魅惑の妖精」亭というお店があると

聞いたんですが……ご存知ですか？」

引き起こされた女は小さく頷くと、抑えた様な小声で桐生に尋ねた。

「それなら……」

答えながら、桐生はその女の声に聞き覚えがある気がした。女の方もそうだったらしく、顔を隠していたローブの裾をそつと持ち上げて桐生を見上げた。

そのローブの中にあつた顔は――

「あんたは、アンリエッタか？ 何故此処に？」

桐生の問い掛けにしつ！ とアンリエッタは漏らすと、桐生の背に隠れる様に回り込んだ。

すると、表通りから兵士達が鎧をガシャガシャと鳴らして走り回りながら怒声を上げているのが見えた。

「此処には居ない！ あつちを探せ！」

「事が起きてからでは遅い！ 何としても見つけ出すのだ！」

どうやら余り穏やかな状況では無いらしい。

アンリエッタは再びフードを深く被った。

「カズマさん、何処か身を隠せる場所はありませんか？」

切羽詰まった様に言うアンリエッタを少し見つめてから、桐生はその小さな手を優し

く掴んだ。

「この店で俺とルイズが厄介になつてゐる屋根裏部屋がある。其処へ行こう」

店の人間に見つからぬ様に注意しながら、桐生はアンリエッタを屋根裏部屋へと招き入れた。

アンリエッタはローブを脱ぐと、ホツとした様に息を漏らしてからベッドに腰掛けた。

「とりあえず、一安心ですわ」

「悪いが俺はそうでもないな。一体何があつた？」

「ちよつと城を抜け出して来たのですけど……騒ぎになつてしまつた様ね」

「当たり前だ。この間誘拐されかけたばかりだろう」

まるで叱られた子供の様にアンリエッタは押し黙りながら肩を落とした。

「あんたはもうこの国の王なんだろう？こんな勝手な事が許される身ではないと思うんだか？」

「仕方がないのです。大事な用があつた物ですから……ルイズが此処で働いているのは、報告で聞いておりましたが、直ぐに貴方に会えて良かった」

「とにかくルイズを呼んでくる。ちよつと待つてくれ」

桐生が屋根裏部屋から出て行こうとすると、アンリエッタはベッドから立ち上がった。駆け寄り桐生の腕を掴んで引き止めた。

「いけません」

「何故だ？」

「ルイズには、話さないで頂きたいのです」

「……ルイズに会いに来たんじゃないのか？」

「違います。私は、貴方に用があるのです」

桐生はとりあえずアンリエッタを再びベッドに座る様に促してから椅子に腰掛けて腕を組んだ。

「どういう事だ？ 俺に一体何の用だ？」

「明日までで良いのです。私を護衛して下さいまし」

「……何が何だかさっぱりわからねえ。どうして俺なんだ？ あんたの周りには強い兵士や魔法使いがいるだろう？」

「今日明日、私は平民に紛れなければなりません。また、宮廷の誰にもその事を知られてはならないのです。そうなる……貴方しか思いつきませんでした」

「……本当に他に誰も居ないのか？」

「ええ。貴方はご存知ないかもしれませんが、私は宮廷では独りぼっちなのです。若く

して女王に即位した私を快く思わない輩も居りますし。それに……」

そこでアンリエッタは口を閉じると、ドレスの裾を強く握り締めて俯きながら搾り出す様に呟いた。

「……裏切り者も、おります故」

桐生はワルドの事を思い出しながらアンリエッタを見つめた。僅かに身体を震わせながら俯く女王は余りにも脆く、余りにも儂げに見えた。

暫くの沈黙の後、桐生は深い溜め息を漏らしてから頷いた。

「良いだろう、他ならぬ王女様の頼みだ。引き受けよう」

「本当、ですか？ ありがとうございます！」

「但し、条件がある」

顔を上げて瞳を輝かせるアンリエッタに桐生は人差し指を立てて見せながら真剣な表情で言った。

「どんな目的があるかは知らないが……本当にヤバイと思つたら、無理矢理にでもあなたを連れて引き返すからな。王女だからじゃない。俺は目の前で女が傷付くとわかってまで危ない橋を渡る気はない。それだけは覚えておいてくれ」

アンリエッタは暫く黙って桐生の顔を見つめた後、頷いた。

「よし、約束だ」

「では、出発致しましょう。この辺も安全ではありませんから」

「行くつて……何処かアテはあるのか？」

「いえ。ですが街を出る訳にはいきませんから。とりあえず、着替えたいのですけど……」

アンリエッタは自分の身を包むドレスを見つめた。白い、清楚な作りのドレスはロブで何とか隠れはするものの目立って仕方ない。

「一応数枚、ルイズが平民に化ける為に買った服ならあるんだが……」

桐生と選んで買った服だけではやや不満だったルイズが、更に数枚服を購入していたのを思い出して鞆を見た。

「では、それを貸して下さいまし」

桐生は鞆から適当に服を取り出すとアンリエッタに差し出した。

服を受け取ったアンリエッタは桐生に背を向けるなり、無遠慮にドレスを脱ぎ始めた。

桐生は咄嗟に顔を背けながら、初めてルイズに着替えをさせられた時の事を思い出した。年頃の娘なんだからもう少し恥じらいを持って欲しい……桐生は心の中で呟いた。

「シャツが……少しキツイですわね」

ルイズの体型に合わせて買ったシャツは見事にアンリエッタにはサイズ違いだった。

留められたボタンが今には弾き飛びそうな程にアンリエッタの胸がサイズの違いを強調している。見立て的に、胸のサイズはシエスタ以上、キュルケ未満と言った所だろうか。

「おい……それで外を歩くのか？」

服を渡したのは自分ではある物の、桐生は訝しげにアンリエッタを見ながら言った。女の子にこんな格好をさせると遙に誤解されたら怒られるじや済まない気がする。

「ですが、これなら逆に目立たないでしょう。これで良しとしましょう」

アンリエッタはそう言つて上から二つ、ボタンを外す。するとサイズ違いから胸の谷間を強調する様なスタイルになった。

男からすれば目のやり場にやや困るが、王女らしさは幾らか消えて夜の街の女を演出出来ている。

「さ、行きましょう」

「ちよつと待て。それじゃあまだバレバレだぞ」

「えっ？ そうでしようか？」

早速出発と意気込みを見せたアンリエッタに桐生が待ったをかける。

確かに服装が変わつて雰囲気は幾らか変わったが、髪や顔立ちからはそのもの者とは違う気品と上品さが醸し出ている。ましてやアンリエッタは王女だ。街にも顔は広く

知られているだろうし、兵士達なら見間違う筈などない。

「髪型と……多少は化粧をした方がいいな」

「そうですか……では、やって下さいまし」

「えっ？ 俺がか？」

「最近の平民の流行り等は知りませんし……お願いします」

そう言つてアンリエッタは桐生に背を向けて椅子に腰掛けた。

桐生は溜め息をつきながらアンリエッタの髪を弄り、ルイズ同様にアンリエッタも世間知らずなのだと思つた。

「アサガオ」で綾子や理緒奈の髪を弄つてあげた時の経験を活かして髪型をポニーテールにし、化粧は薄めに施した。

化粧品はルイズに店に出るなら桐生が買って来た物だが、ルイズは天性の美貌で勝負すると言い切つて一回も使つていない。

「……ま、こんな物か」

化粧を終えた桐生は手鏡を渡すと、アンリエッタは鏡に映る普段とは違う自分の顔にニヤニヤし始めた。

「ふふつ、これなら街女に見えますわね」

アンリエッタは何処か嬉しそうに呟くと、椅子から立ち上がつてその場でくるりと



回って見せた。

確かに、端から見たら陽気な街女に見えなくもない。我ながら完璧な出来だなと桐生は一人満足していた。

準備が整った二人はこっそりと裏口から外に出る。夜空に輝く星々と二つの月が照らす中、少し温めの夜風が二人の頬を撫でた。

ふと、路地に向かって歩きながらルイズに言っておかなくて良いのか、勝手に仕事場から抜けて良いのか、一瞬考えたが心の隅へそつと押し出した。

今回はアンリエッタからの直々の依頼だ。一応ルイズにはそれで納得して貰えるだろう。

路地に回ると、辺りには女王の失踪から厳戒態勢が引かれていた。チクトンネ街の出口には衛兵が検問を行っているのが見える。

「こりゃあ、抜けるのは簡単じゃ無さそうだな」

桐生はあの、忌まわしいミレニアムタワーの出来事の後を思い出しながら呟いた。

目の前で凶弾の雨を浴びて倒れた柏木を抱き抱え、その血で服を濡らしたが為に警察に追われた、あの夜を。

アンリエッタも門の様子から息を飲んで頷いた。

「さて、どうするか」

「……私に考えがあります。お耳を……」

アンリエッタは小声で桐生の耳元で何やら囁くと、桐生は一瞬眉をひそめたが、静かに頷いた。

アンリエッタが桐生の腕に抱き着き、二人で寄り添いながら門へと近付いていく。

「待たれよ」

門の目の前まで来ると、検問をしていた兵士が二人の足を止めた。

「おいおい……一体何事だ？　ここは何時から通るのに許可がいるようになったんだ？」

「……詳しくは言えないが、非常事態なのだ。悪いが二人とも顔を良く見せて貰おう」

兵士はそう言つて桐生の顔をチラツツと見てから、アンリエッタへと顔を向ける。

アンリエッタは怯えた様に桐生に擦り付きながら身を振らせた。

「ん？　貴女は……いや、しかし……」

兵士がアンリエッタの顔をマジマジと見始めると、桐生がアンリエッタの肩を強く抱き寄せた。

「おい、こいつは今夜俺の相手をするんだ。横取りは止めてくれないか？」

「あ、相手？」

兵士は桐生とアンリエッタを交互に眺めながら口をパクパクと動かした。

「そうだ。高い金を払って買った女だ。せっかくお楽しみが待ってるっての邪魔するとは……野暮な野郎だぜ。何なら、お前にも女を紹介して貰える場所を教えてやろうか？」

「ぶ、無礼な！ 私はその様な商売女等に金を使う気はない！ 目障りだ！ とつとつ行けっ！」

兵士は顔を赤らめながら声を荒げると顎をしゃくって二人に早く通る様に促した。

桐生とアンリエッタはそのまま門を潜り、寄り添いながら歩き続ける。

「……やれやれ。あいつ、姫様を商売女扱いしやがった。後で知ったら気絶しかねないぜ」

桐生が小さく呆れた様に漏らすと、大通りに出るなりアンリエッタが身体を小さく震わせて笑い始めた。

「どうした？」

「いえ、ちよつと可笑しくつて。はく……ドキドキしたあ。でも愉快ですわね。こうして粗末な服を着て、髪型を変えて、軽く化粧をして……今さっきまで女王だった女が商売女に変わってしまうのですから」

本当に楽しそうに笑うアンリエッタは今までルイズと共に会った時とは違い、年相応の少女の顔をしていた。

「おいおい、幾ら何でもそれは言い過ぎだ。より近い人間が見たら、あんたがアンリエッタだとすぐに」

「しっ！」

「えっ？」

「カズマさん、今はその名前を口にしないで下さい。何処に耳があるかわかりません。そうですね……短く縮めて、「アン」とお呼び下さいまし」

「アン……か」

「はい。今此処に居るのは、貴方に買われた商売女……アンです」

悪戯っぽい笑みを浮かべて囁くアンリエッタに、桐生も釣られてか自然と笑みが浮かんで来た。

「わかった、アン。それじゃあ暫く、側に居て貰うぜ」

「はい、カズマさん」

アンリエッタは桐生の手に自分の指を絡めながら頷いた。

トリスタニアの街の一角に、薄汚れた小さな宿屋があった。木造のその宿は所々が腐り、看板は文字が読めない程に雨風に削られてしまっている。

所々穴の空いた扉を開くと、小さなランプに照らされた受付のカウンター越しに酒瓶

を持ちながら本を読んでる小太りで髭面の男が座っていた。

男はチラツと入って来た客を見る。

夜風と共に入ってきたのは茶色いローブに顔を包み、身体を茶色いマントに包んだ人物だ。身体のラインから、女であるらしい。

「宿なら他を当たんな。生憎今日も満室だぜ。宿賃も払わねえ虫共でな」

男は酒瓶を持ってグビツと呷ると、派手にゲツプをして見せながら言つて再び自然を本へと移した。

ローブの人物はそんな男に意を介した様子もなく近付くと、エキュー金貨を一枚受付のカウンターに置いた。

「赤い月と青い月が交わる部屋を……」

ローブの人物から発せられたその声は、若さを伺わせる女性の物だった。

男はその言葉に視線を再びローブの人物に向けると、金貨を受け取つて鉄製の鍵を手渡した。

「月の交わりが行われるのは綺麗な場所とは限らねえ。馬鹿な奴等に混じりたければ行きな」

男はそれだけ言ふと、また本へと視線を移して酒瓶を呷る。

ローブの人物はそのまま狭い廊下の先にあるトイレへと入ると、唯一の便器の中へ手

を差し入れて、底にある鍵穴に鍵を突き入れて回す。そして横から便器を押すと、ゆつくりと動いて地下へと通じる石造りの階段が現れた。

ロープの人物は階段を降りていくと、後ろで便器が戻される音が響く。

階段を暫く降りて鉄製の扉が現れ、飾り気の無いノブを掴んで開く。

扉の先では宿のそのポロい外見とは裏腹に、薄い灯りが照らす広い酒場が広がっていた。

酒瓶が幾つも並べられたバックバーの前で黒肌な体格の良い男達が酒を注いだり客と話し合っている。部屋の中には幾つもの丸テーブルが並び、それぞれには人相の悪い男達や派手なドレスや卑猥な衣類で歩く女達が酒を呑みながら話し合ったり、カードを楽しんだりしている。

犯罪者御用達の裏酒場、「ストウルティ」。トリスタニアの闇の全てが集まると言っても過言ではない秘密の酒場だ。此処には犯罪人、指名手配者、脱獄囚等あらゆる種類の人間が入り混じっている。

ロープの人物は迷いなく奥のテーブルを指して足を進める。

目的のテーブルには三人の人物が腰掛けていた。三人共仮面を被り、黒い仮面の人物はだらしなく椅子に寄り掛かり、鉛色の仮面の人物は腕を組んでいる。白い仮面の人物はまるで寝ているかの様に項垂れている。「トライデント」だ。

ローブの人物がテーブルに来ると黒い仮面の人物、レイヴンが姿勢を正して自分の前の椅子に掛ける様に促した。

「どうも、初めまして。依頼の話があると聞いたので待ってたよ」

まるで友達に接するかのように話すレイヴンにローブの人物は戸惑った様に身を振つたが、言われるままに椅子に腰掛けた。

「早速だけど、依頼の内容を。僕達もあんまりこの街には居られないんでね」

レイヴンが言うと、ローブの人物は少し俯いてから口を開いた。

「ダングルテールの虐殺」……ご存知ですか？」

「ああ、知ってるよ」

ローブの人物の問いにレイヴンは頷いた。

「ダングルテールの虐殺」とは、二十年前にダングルテールという村で国家の転覆を図った異教徒の平民達が殺された事件の事である。企てを実行される前に災いの芽を摘むと言う名目で行われたその異教徒狩りはまさに虐殺の名の通り、女子供も殺されたとの事だ。

「私は、あの村の生き残りの一人です。私は、私達は国家の転覆なんて考えてなかった。なのに、突然汚名を着せられ、有無も言わず殺された……！」

ローブの隙間から涙をテーブルに零しながら話す相手に、レイヴンはさほど興味も無

さそうに頭を搔きながら聞いていた。

「ずつと、調べて来ました。一体誰があゝの虐殺を考案したのか。トリステイン王家の側近に奴隸として近付き、あの虐殺の考案者を漸く突き止めたのです。その男を……殺して下さい！」

ローブの人物は乱暴に懐から出した皮袋をテーブルに投げ付けると、開かれた口からコロコロとエキュー金貨が転がった。

転がって来た金貨を摘み上げ、指先で弄ぶ様に回転させながらレイヴンが頷いた。

「お引き受けしましょう。それで、その男の名は？」

問い掛けながらピンツとレイヴンが指先で弾いた金貨を隣に座るオーガが掴み取る。

ローブの人物は顔を上げてレイヴンを見つめた。ローブの中、薄暗い隙間から覗く瞳には憎悪の炎が宿っていた。

「トリステイン高等法院、リツシユモン……！」



## 第37話

夜の闇が更に増し始めた頃、空からポツポツと大粒の雨が降り出して来た。

「魅惑の妖精」亭に居た客達も雨が激しくなる前にと次々と勘定を済ませて出て行ってしまった。先程まで大盛況だった店の中に残った客は数人程度になってしまい、賑やかな雰囲気は一変して静かな物へと変わった。

「嫌な雨ね。これじゃお客足が止まっちゃうわ」

指名を入れてくれていた客が帰ってしまったって手持ち無沙汰になったジェシカが、同じく相手をしていた客が帰ってしまったルイズの横で呟いた。

「やっぱり雨の日はお客さんが少ないの?」

一人呟くジェシカにルイズが声を掛ける。

「そうね。まあ雨宿り代わりに入って何も注文されなくらいなら来ない方が良くいけど。雨が降るとみんな家へと急ぐ人が多いからね」

退屈そうに爪を弄りながら喋るジェシカにルイズはふうん、と小さく呟きながら店内を見回した。

まばらになってしまった客達を相手にする数人の少女達を見てみると、何時もの忙し

さが無くなって何処か寂しさを感じさせた。

「なあ、ルイズちゃん。カズマが何処行つたか知らねえか？」

暇になった厨房から男が一人出てくると、ルイズに話し掛けた。

「カズマ？ 厨房で働いているんじゃないの？」

「いや、それがよお……今日はあまり忙しくないからちよつと休憩に行かせたんだよ。

そしたら戻つて来ねえし、真面目に働く奴だったからサボるとも考えられなくてな」

「お部屋かな？ ちよつと見てくるわ」

男の話に頷いたルイズはジェシカに許可を貰つて屋根裏部屋まで向かう。

屋根裏部屋には誰も居なかったが、予備の服が一枚無くなっていた。更には使つた事のない筈の化粧道具が出されて使われた跡があり、高級そうなドレスが一枚、無造作に床に転がっている。

「これって……姫様の？」

ドレスを持ち上げると、嗅ぎ覚えのある香水の残り香がルイズの鼻をくすぐつた。

何か、自分の知らない所で何かが起きている。

ルイズは屋根裏部屋を飛び出して裏口から外へと出た。

徐々に激しさを増す雨の中で城の兵士達が怒号を上げながら通りを走り回っている。

その中の一人に近寄つたルイズは呼び止めた。

「ちよつと、一体何があつたの?」

兵士はキャミソール姿のルイズを見るなり煩そうに手を振った。

「酒場女風情を相手にしている暇はない! とつとと店に戻れ!」

「お待ちなさい」

ルイズはキャミソールに着けていた小さなポーチからアンリエッタからの書簡を取り出して突き付ける。貴族とバレた日から常に持つ様にしてきたのだ。

「私は姿こそこんなですが、陛下直属の女官です」

兵士は書簡とルイズを交互に見てから青ざめながら直立した。

「し、ししし、失礼致しましたあ!」

「良いから、話してちょうだい」

兵士は周りを気にする様に見回した後、小声で話し始めた。

「じ、実はシャン・ド・マルス練兵場の視察の帰りに、陛下がお消えになられました」

「まさか……また「レコン・キスタ」が?」

「わかりません。賊はどの様に陛下を拐かしたのか……馬車の中から忽然と消えたのです。まるで霞の様に」

「その時陛下の警護は誰が?」

「新設の銃士隊です」

「ありがとう。所で、馬はないの？」

兵士は首を傾げながら頷いた。

ルイズは苛立った様に溜め息を漏らした後、書簡をポーチにしまふなり王宮へ向かって駆け出した。

カズマ……一体今、何処に居るの!?

激しくなる雨が身体を濡らすのも構わず、ルイズは街を駆けた。

馬を走らせていたアニエスはリツシユモンが住む大きな屋敷の前で止まった。

馬から降りて忌々しげに屋敷を見回した後、アニエスは門を叩いて大声で来訪を告げた。すると門に付いていた窓が開き、カンカラを持った小生が顔を出した。

「どなたですか?」

「女王陛下の銃士隊、アニエスが参ったとリツシユモン殿にお伝え下さい」  
「……こんな時間にですか?」

訝しげに話す小生にアニエスは今が零時を回り始めたのを思い出した。

「火急の要件です。是非とも取り次ぎ願いたいとお伝え下さい」

小生は面倒臭そうに奥へと消え、暫くすると門の門を外して開いた。

馬の手綱を小生に預けたアニエスは屋敷の中へと入っていった。

暖炉のある居間に通されて暫くすると、寝間着姿のリツシュモンが現れた。

「火急の要件と聞いたが、私の眠りを妨げるに値する物なのだろうか？」

剣を下ろしたアニエスに皮肉たっぷりに言うリツシュモン。

「女王陛下が、お消えになりました」

瞬間、リツシュモンの眉がピクンと動いた。

「拐かされた、と言うことか？」

「現在調査中です」

「なるほど、それは大事件だ。しかし、誘拐騒ぎはこの前起きたばかりではないか。またアルビオンの陰謀かね？」

「調査中です」

「調査中、ねえ。全く、君達軍人や警察からはその言葉以外出てこんのかね？ 当直の護

衛の隊は？ まさかこれも調査中かね？」

「我等、銃士隊でございます」

リツシュモンは呆れた様にアニエスを見ながら溜め息を漏らした。

「全く、君達は無能である事を証明する為に新設されたのかね？ だから陛下に申したのだ。剣や銃など所詮は魔法の前では玩具に過ぎん。平民が寄って集った所で、メイジ一人にも敵わぬ」

アニエスは表情を変えずにジツとリツシユモンを見つめた。

「戒嚴令の許可を。街道と港の封鎖許可を頂戴したく存じます」

リツシユモンは杖を振るってペンを手元に寄せて掴むと羊皮紙にサラサラと何かを書いてアニエスに手渡した。

「全力で陛下を探し出せ。見つからぬ場合は……分かつておるな？」

「はっ。この命で償いを」

アニエスは一瞬憎悪を込めた視線でリツシユモンを見た後、退出していった。

アニエスが部屋から出たのを見送ると、リツシユモンは急いだ様子で羊皮紙に何かをしたためた。

「リツシユモン様」

ノックの後、使用人の男が一人が部屋に入って来たのを見てリツシユモンは眉をひそめた。

「今は忙しい。要件なら後にしろ」

それだけ言って再び視線を羊皮紙に戻しペンを走らせ続けるリツシユモンに、使用人の男はそつと近付き囁いた。

「例の者、始末しました」

その言葉に、リツシユモンのペンを動かす手が止まった。

「そうか……。それで？ 奴は何を喋った？」

「残念ながら、命尽きるまで口を開かず」

「ふん、口が軽い割には、一応硬さも持っていたという事か。まあ、良からう。可愛がってやったと言うのに、主を裏切る者等不要だ。死体は？」

「念の為身元が分からぬ様、顔は潰しました」

「ならば適当に捨てておけ。但し、服は多少まともな物……。ふむ、商売女のような格好にさせる。客とのイザコザと周りも見ろだろうからな」

リッシュモンの指示に頷いた使用人の男は一礼してから部屋を出て行った。

邪魔の居なくなった部屋の中で、リッシュモンは目を血走らせながらペンを走らせ続けた。

屋敷の外へ出たアニエスは小生から馬を受け取り、鞍囊の中から黒いローブを取り出して鎖帷子の上から羽織り、フードを被った。

拳銃を二丁取り出すと、火薬が雨で濡れぬ様に弾を込めてからベルトへとたばさむ。最新の火打石式拳銃である。

剣の鯉口を切って完全に戦支度が整った所で馬に跨ると、チクトンネ街の方から走ってきた少女がアニエスに駆け寄ってきた。白かったであろうキャミソールは泥と雨で

汚れ、足は裸足だ。桃色の髪が頬と額にべったりとくっ付いている。

「その貴女！ お願ひ！ 馬を貸してちょうだい！ 急いでるの！」

突然現れ馬を要求してきた少女を訝しげに見た後、アニエスは手綱をしつかりと握つた。

「断る。私も急ぎの用があるのでな」

馬を走らせようとするアニエスの前に、その少女は立ちはだかった。

「退け。もう一度言うが私も急ぎの用がある。お前の様な商売女の相手をしている暇はない」

少女はアニエスの言葉を聞くなりポーチから書簡を取り出して突き出した。

「私は陛下直属の女官よ！ 警察権を行使する権利があるわ！ 貴女の馬を陛下の名において接収します！ 直ちに下馬なさい！」

「陛下の女官？」

その言葉に、アニエスは少女の顔をマジマジと見た。

格好こそ商売女の物ではあるが、雨で濡れた顔には気品が感じられた。

「ならば、名乗られよ。杖こそ持たぬが此方も貴族だ」

アニエスの言葉にその少女、ルイズは書簡をポーチに仕舞つて胸を張った。

「陛下直属の女官、ド・ラ・ヴァリエール」



ラ・ヴァリエール。その名前には聞き覚えがあつた。

「ほう、では貴女が……」

「私を知っているの？」

「お噂はかねがね。お会い出来て光榮至極。馬を貸す訳には参らぬが、事情を説明致そう。さあ、お手を」

ア二エスが差し出した手をしっかりと掴み、ルイズはア二エスの後ろへと跨つた。

「貴女、何者なの？」

後ろからア二エスに問いかけながら、ルイズは頬と額に張り付いた髪を指先で払つた。

「陛下の銃士隊。私は隊長のア二エスと申す」

ルイズは先程の兵士との会話から出た「銃士隊」と言う言葉に激昂した。

「あんた達何やってたのよ！ 陛下をみすみす拐われるなんて！ まさか護衛中に寝てたんじゃないでしょうね！」

「だから事情を説明すると言つたらう？とにかく、陛下はご無事だ」

「な、何ですって!?!」

ア二エスは馬に拍車を入れた。

雨が降りしきる夜の闇の中へと二人は消えていった。

雨も強くなり、深夜だった事もあって桐生とアンリエッタは安宿へと入った。

一番安い部屋を選びはしたが、最悪の部屋だった。

ベッドのシーツは湿り気を帯びており、ともに掃除されてない床の所々にはキノコが生えている。ランプは煤だらけで真つ黒だ。

「安いとは言え、金を取っていい部屋じゃねえな」

眉を潜めながら言う桐生が振り返ると、アンリエッタが自分の肩を強く抱きながら震えていた。

「……どうした？ 具合でも悪いのか？」

心配しながら駆け寄り寄る桐生に、アンリエッタは青ざめた表情で首を振った。

「ご、ごめんなさい。雨が……」

「雨？」

「雨が……怖いのです」

アンリエッタの言葉に、桐生はウエールズと戦ったあの夜を思い出した。

愛していた男の死。それを目の当たりにするには、アンリエッタは幼過ぎた。

桐生は無言のままアンリエッタをベッドまで連れて乗ると、アンリエッタの肩を優しく抱いた。

「カズマ、さん……」

「……あんたは俺が買った女だ。暫くこうさせて貰う。今何が起きててもアンリエッタという女王には関係ない。今此処に居るのは……アンという俺が買った女だからな」

桐生はそれだけ言ううと薄汚れた天井を見上げながら優しくアンリエッタの頭を撫でた。

「……うつ、うう……!」

桐生に抱き額を胸元に押し当てたアンリエッタは声を押し殺しながら、身体を震わて涙を流した。あの日から人前で涙を流す事を止めた少女の瞳からは、大粒の涙がまるで外の雨の様にベッドのシーツへと溢れ落ちていった。

桐生はただ黙ってアンリエッタの頭を撫で続けた。

どれだけ時間が経っただろうか。外の雨が小雨に変わりだした頃、アンリエッタは漸く落ち着いたらしく顔を上げた。頬は涙で濡れて塗ったファンデーションが溶けてしまっている。

「申し訳ありません、カズマさん……不甲斐ない姿を見せてしまつて。また貴方に助けられました」

「また?」

「はい。あの夜……操られたウェールズ様に私が自制を忘れてしまつた中、貴方は私を

止めて下さいました。貴方は言いましたね。「言い訳と決意の区別もつかないガキが、一丁前に愛を語るな」と」

「……ああ」

「それでも、私は自分を止められなかった。貴方を、本気で殺そうとした。それでも貴方は、私を命懸けで止めてくれた」

桐生は黙ったまま、アンリエッタの顔を見つめた。

「あの時、実は私はホツとしていたんです」

「どういう事だ？」

「私も分かっていました。私の隣に立っているのが本当のウエルズ様ではないと。私はきつと……心の何処かで誰かに言つて欲しかったんだと思います。私が間違っていると」

アンリエッタは切なそうに溜め息を漏らしながら言つた後、桐生の瞳を見つめた。

「ですから、お願いです。私がかもしまた何か愚かな事をしそうになつた時は……私の命を奪つても止めて下さいませんか？」

「何だと？」

「本当は……ルイズにお願いしたいんですが、あの子は優しいから。だから代りに、貴方が……」

「お断りだ。餓鬼の命を奪う趣味はねえ」

強くキツパリと言う桐生に、アンリエッタは言葉を詰まらせた。

「もしその時、俺が傍にいたら……また止めてやる。例え命に代えてもな」

そう言いながらアンリエッタから離れて立ち上がった桐生の背中に、アンリエッタは小さく頭を下げた。

その時、突然乱暴にドアが叩かれた。

「開けろ！ 王軍の巡邏の者だ！ 犯罪者が逃げた為順繰りに宿を回っている！ ドアを開けろ！」

桐生とアンリエッタは互いに顔を見合わせた。

「私を探しているに違いありません」

「……仕方ねえ」

桐生はそう言うと、アンリエッタに近付いて耳元で囁いた。

「ベッドに横になつててくれ」

「……どうするのです？」

「やり過ぎず為に演技するさ。絶対にこっちを見るな。良いな？」

アンリエッタは頷くとベッドに壁に顔を向けた状態でベッドに横になった。

桐生はそれを見送った後、ジャケットとシャツを脱いで乱暴にアンリエッタの側へと

投げ捨てて、上半身裸の状態でドアを開いた。

ドアの前には兵士の二人が立っていた。

「さつさと開けないか！中を」

「おい……」

早速中を確認しようとした兵士にドスの利いた声を出しながら桐生が立ちはだかる。

兵士達は中へと意識が行っていたが桐生の体格を見て思わず後ずさった。歴戦の戦士を感じさせる身体から並大抵の戦力では敵わない事が兵士の本能に呼びかけ始めた。

「人がお楽しみの最中に邪魔するってのはどういう了見だ？」

「だ、だから言ったろう！今逃げた犯罪者を」

「生憎、此処に居るのは俺と、俺が買った商売女しか居ないんだがな。まさかお前等……人の楽しみを奪っておいてタダで帰ろうなんて思っちゃいねえだろうな？」

拳を盛大に鳴らしながら凄む桐生に、兵士達は互いに顔を見合わせて生唾を飲み込む。

「せつかくこれからって時に邪魔しやがって……見ろ。女も茶々が入って気が萎えちまったじゃねえか」

中には入れないながらも横になっているアンリエッタを兵士達に見せる桐生。

側から見れば確かに不貞腐れて壁に向きながら寝ている様にも見えなくもない。

「今ならこれからのお楽しみを邪魔しないでくれるなら、なかった事にしてやるよ。但し、これ以上邪魔するってんなら五体満足じゃ帰せなくなるが……どうする?」

桐生の最終確認に兵士達もこれ以上関わりたくなくなったらしく背を向けて歩き出した。

「くそつたれ、こつちは仕事でやってんだつうのに……」

「まあまあ、ピエール。終わったら一杯やろうぜ」

ブツブツ文句を言いながら廊下から消えた兵士達に桐生は小さく溜め息を漏らした。

「カズマさん……」

背後から聞こえたアンリエッタの声に桐生が振り返る。

アンリエッタはベッドの上で身体を此方に向けながら上体を起こしていた。

「何とか上手くいったぞ。もう兵士は来ないだろう」

桐生が微笑み掛けながらベッドへ近づきシャツを取ろうとすると、その手をアンリエッタが優しく掴んだ。

「カズマさん、その……背中のドラゴンは何?」

アンリエッタは少し戸惑いがちに尋ねた。聞いて良いのかどうかを心配する様に。

シエスタ同様、やはり自分の背中に刺青、此方ではタトウになるんだろうが、それが入っているのは意外らしい。

「これは、俺の元の世界で入れた刺青つてやつだ。こつちではタトウーと言うんだつたな」

「あの……もし宜しければ、少し見させて貰っても宜しいですか？」

シエスタと同じ申し出をして来たアンリエッタに暫く黙つたままだつた桐生は、ゆつくりと背中を向けた。

「不思議な姿のドラゴンですね……。このドラゴンは、何という名前なんですか？」

「応龍だ」

「オウ、リュウ？」

「俺の居た世界に伝わる伝説の龍だ。四龍と呼ばれる四匹の龍の長と言われている」

「何故その、オウリュウ？ のタトウーを？」

「この絵を描いてくれた人に、俺に相応しいと言われてな。もしかしたら……あの人は、俺の未来を予見していたのかもしれない」

桐生の呟きに、アンリエッタは小首を傾げた。

伝説では、応龍は仕えていた黄帝の敵である軍勢を破る為に大嵐を起こして勝利を掴んだ。しかし、それが原因で「神でありながら人を殺めた」として南方へと隠棲する事となつてしまった。

以前シエスタが、応龍が自分に似ていると話していたのはあの日、「親殺し」の烙印を



背負って組から離れた自分と応龍の伝説が似ているからなのかもしれない。

桐生はそろそろとばかりにシャツを着ようと振り返ってジャケットに手を伸ばそうとするも、アンリエッタは再び桐生の手を掴み握り締めた。まるで愛しい人の手を掴む様に。

訝しげにアンリエッタを見ると、桐生の手を掴んだまま立ち上がり、少し背伸びをして唇を重ねた。

突然の事に驚いた桐生はアンリエッタを少し無理矢理離すと、真っ直ぐに瞳を見つめた。

「何の真似だ？」

「……恋人は、いらつしやいますか？」

「質問の答えになっていない」

「もしもないのなら……今夜だけで良いのです。私を、恋人の様に扱って下さいませ……」

そう言いながらアンリエッタは桐生の身体に抱き付いた。シャツ越しの胸の柔らかい感触が伝わり、漂う高貴な香水の香りが桐生の鼻をくすぐる。

桐生は暫く黙っていたが、ゆつくりと自分の身体を抱き締めるアンリエッタの手を解かせた。

「……何故、抱いて下さらないの？」

「俺は弱った女に付け入る様な真似はしない」

「貴方は先程仰ったじゃありませんか。此処で何が起きても女王には関係ないと。今の私は……アンとして貴方を求めているのです」

「確かに言つたな。そして、それもあんたの本心だろう。だが、あんたが求めているのは俺じゃない。ウエールズの、愛する男の代りだ。それが分かつた上であんたを抱く訳にはいかない。俺は、誰かの代わりにはなれない」

そう言つて桐生はシャツとジャケットを乱暴に着ると、ベッドへと腰掛けた。

アンリエツタはそんな桐生を見つめた後、同じ様にベッドに腰掛けて首を振つた。

「……ごめんなさい。はしたない女だと思わないで下さい。女王だ、聖女だと持ち上げられても私も一人の女。誰かの温もりが欲しくなる時があるのです」

桐生は黙つたまま、しかし肯定の意を込めて頷いた。

「そろそろ、話してくれないか？ 一体、何が目的でこんな事をしてる？ みんなしてあんたを一生懸命に探している。そして、あんたは必死になつて自分を隠して平民に紛れる為に身体を張っている。気まぐれで飛び出した訳じゃないのは分かつている。だが、未だに目的が見えない。あんたは何をしようとしてるんだ？」

「……そうですね。そろそろ、キチンと話さなければなりませんね」

アンリエッタは小さく頷いて呟いた。その声には、先程まで弱々しさはなく、威厳のある物になっていた。

「実は、キツネ狩りをしておりますの」

「キツネ狩り？」

「ええ。キツネは利口なのはご存知ですか？ 犬をけしかけても、勢子が追い立てても、決して容易にはその尻尾を掴ませたりはしません。ですから、罠を仕掛けたという訳です」

「罠、だと？」

「ええ。そしてその罠の餌は私。明日になれば、キツネは餌を取る為に躍起になって巣穴から飛び出す筈です。そして、巣穴から飛び出した所を捕らえるのが、今回の目的です」

桐生は顎に手を当てて考え込んだ後、アンリエッタへ顔を向けた。

「そのキツネってのは……一体何者なんだ？」

「アルビオンへの内通者の事です」

アリエスとルイズは馬に跨ったまま、リッシュモンの家の側の路地で息を潜めていた。雨は小雨に変わりはしたが、夏らしくない冷気が辺りに漂う。

アニエスはルイズの身体に自分が着ていたマントを羽織らせた。

「それで、事情つていうのは何？」

「一言で言うなら、ネズミ捕りだ」

「ネズミ捕り？」

「そうだ。王国の穀倉を食い荒らすばかりか、主人の喉笛まで噛み切ろうとする不遜なネズミを狩ろうとしている」

アニエスの説明にイマイチ事態を把握出来ないルイズは首を傾げた。

「もっと詳しく説明してちょうだい」

「悪いが今はそれしか言えない。……しっ！ 来たぞ」

リツシユモンの屋敷から先程の年若い小生が出てきた。カンカラを持ちながら辺りを見回した小生は一度引つ込むと、馬を連れて再び現れた。

小生は馬へと跨ると、カンカラを持ったまま馬を走らせた。

アニエスはそのカンカラの灯りを目印に小生の後を追って馬を走らせる。

「ちよつと、あの子がそのネズミなの？」

ルイズが尋ねるが、アニエスは答えない。真つ直ぐに小生の持つ灯りを見据えて馬を走らせている。

小生の馬は住宅街を抜け、夜の妖しい彩りが濃くなった繁華街へと向かって行った。

辺りは未だ女王を探す搜索隊と酔つ払いで溢れている。

チクトンネ街を抜け、更に奥へ進んだ所で小生の馬は路地へと入って行つた。

アニエスは向かいの路地へ入り馬からルイズと共に降りると、息を殺して小生が出て来るのを待った。

すぐさま何処かに馬を預けたらしい小生が路地から出て来て、何処かへと小走りに向かい始めた。アニエスとルイズも直ぐに後を追う。

すると小生は少し離れた場所にあつた宿へと入って行つた。アニエスに促されるまま、ルイズは一緒に宿の中へと入る。

「ちよつと、一体何が起こつてるの？」

疑問ばかりが浮かんで再度問い掛けるもアニエスは答えない。

少しこつた返しているロビーを人を掻き分けて進みながら階段で二階に登る小生を見つけ、ルイズの抗議の声も聞かずに手を引いてアニエスが追いかける。

階段の踊り場から小生が入つた部屋を確認すると、二人は暫し待ち人となつた。

不意に、アニエスがルイズに耳打ちする。

「マントを脱いで私にしなだれかかれ。商売女の様には振る舞うんだ」

訳も分からないままルイズはマントを脱いでアニエスに寄りかかった。

アニエスの短い金髪はボーイッシュな雰囲気を中心に与え、ルイズは汚れながらも

キヤミソール姿だった為、端から見れば二人はいちやつく騎士と商売女にしか見えな  
い。

「そのまま自然にしている」

声こそ女ではあるが、凜々しい顔立ちから中性的な美青年に見えるアニエスに思わず  
ルイズの頬が赤く染まる。

小生が部屋から出て来た瞬間、アニエスは咄嗟にルイズを強く抱き寄せ唇を重ねた。  
突然の事で驚いたルイズが必死に抵抗するも、アニエスの力には敵わない。

小生は階段を降りる際にチラツと二人を一瞥したが、直ぐに視線を逸らした。いちや  
つく騎士と商売女のキス。宿の中では珍しくもない。

小生が宿から出て行ったのを見送ると、やつとアニエスはルイズを解放した。

「い、いきなり何するのよ!」

「安心しろ。私は別に同性愛の趣味はない」

「私だつてそうよ!」

怒りに声を荒げるルイズを無視して、アニエスが先程小生が出て来た部屋のドアへと  
なるべく音を立てずに近づいて行く。

「さっきの子はいいの?」

「あいつは飼い主に頼まれた使いに過ぎない」

小声でルイズと話したアニエスは扉に耳を澄ませた後、ルイズの耳に顔を近付ける。

「お前はメイジだろう？ この扉を吹き飛ばせないか？」

「そんな荒っぽい事して良いの？」

「鍵が掛かっている筈だからな。ガチャガチャやっつてる間に逃げられたら意味がない」

ルイズは太腿のベルトに差していた杖を引き抜くとゆっくり深呼吸し、意識を集中させて小さく「虚無」の呪文を唱えると杖を振り下ろした。

発動した「エクスプロージョン」がドアを吹き飛ばしたのと同時に、アニエスが剣を引き抜いて中へと入る。

部屋の中では商人風の男がベッドに入ろうとしていた所だった。メイジらしく、手には杖がある。

男はそれなりの使い手らしく、入ってきたアニエスにも動じず呪文を唱えて杖を振るって突風を起こし鎧に包まれた身体を壁へ叩き付けた。

更に止めとばかりに呪文を口にするが、それをルイズが阻む。

男の顔の前で「エクスプロージョン」を発動し、衝撃に顔を押しえながら吹き飛ばす男にアニエスは立ち上がって駆け寄った。

痛みを耐えながら床に転がった杖を取ろうとする男の腕を容赦なく踏付け、悲鳴が上がるのも構わずにそのまま体重を込めて何度も踏付けて腕をへし折った。

「動くな！」

劍の刃を首に押し当てながら捕縛用の縄を腰から取って男の身体を縛り上げると、ベッドのシーツを引きちぎって猿轡にするアニエス。すると騒動から野次馬となった宿の客達が部屋を覗きに来た。

「騒ぐな！ 指名手配の犯罪者を捕まえたただけだ！」

アニエスの劍幕に、客達は一齐に散らばった。

アニエスは小生が男に渡したと思われる手紙を取って中身を確認すると笑みを浮かべた。そのまま部屋の戸棚や男のポケット等を調べて出て来た手紙を纏めると、一枚ずつ読み始めた。

「で、こいつ何なの？」

事の成り行きを見守っていたルイズが縛られた男を顎でしゃくりながらアニエスに問い掛ける。

「アルビオンのネズミだ。商人のなりをしてトリステインに潜伏し、情報をアルビオンへ流していた」

「つまり敵の間諜って事？ お手柄じゃない！」

「残念だが、まだ解決した訳じゃない。親ネズミが残っているんでな」

アニエスは一枚の紙を手にとるとジツと見つめた。それは建物の見取り図であった。



何やら幾つかの箇所には赤い丸が書き込まれていた。

「なるほど、劇場で密会を行っていた訳か。木の葉を隠すなら森に、人なら人混みの中と言う訳だな。確かに密会をしても目立たない、良い場所ではある」

アニエスは男の猿轡を乱暴に取ると、睨み付けて見下した。

「先程小生から受け取った手紙には、「明日、例の場所で」と書かれている。その「例の場所」とはこの劇場の事だな？ どうなんだ？」

男は不貞腐れた様な顔でそっぽを向いて口を閉ざす。

アニエスはそんな男に微笑を浮かべた。

「貴族の誇りに掛けて言わぬ、と申すか。なるほど、見上げた物だな」

アニエスの表情が冷たい笑みへと変わると、抜き身のままだった剣が胡座をかいている男の太腿へ深く突き刺さった。

ルイズがその光景に顔を歪めながら目を背けたのと同時に、男の口から痛みによる悲鳴が上がる。瞬間、開かれた男の口の中へアニエスが引き抜いた銃の銃口を押し込んだ。

「私は銃の扱いには慣れていますが、完璧主義なんぞな。当たらないかもしれない弾を撃つ様な真似はしたくない。だが、これなら大丈夫だ。このまま引き金を引けば、間違いなく貴様を殺せる」

男の怯えた視線を受けながら、アニエスは冷たい笑みを浮かべたままカチリと撃鉄を起こす。

「二つ数える内に選べ。恥を忍んで生きるか、誇りに死ぬか……最後に与えられた貴様の自由だ。生きたいのなら、そのまま領け」

震えてガチガチと歯が硬い銃身を叩く音が響く中、男は何度も小さく頷いた。

## 第38話

夜が明けた早朝、トリスタニアの一角にあるゴミ捨て場には人だかりが出来ていた。

何時もの様にゴミを捨てに来た近隣の住民が、顔を潰され無残な姿で放置された女の死体を見つけたからである。

行方不明のアンリエッタを探している為、少人数の兵士が現場検証を行っているが、いかんせん人数が少ない為に野次馬を押さえ切れずにいた。

死体は二十代前後の女性で、派手な服装から察するにこの辺で働く商売女の様だ。顔は何度も硬い鈍器で殴られたのか、原型が解らない程に潰されてしまっているせいで身元が特定出来ない。

野次馬の中で死体を眺めていた一人の青年が人の群れからそっと抜け出し、薄暗い路地に入って暫く歩くと仮面を着けた二人の男が目の前に立ちはだかった。左には白い蛇を模した仮面を着けた細身の男。右には鉛色の鼻から上を覆い額に突起を生やした仮面を着けた大男。ウロボロスとオーガだ。

「やはり、あの女か？」

ウロボロスが青年に問いかけると、青年は小さな溜息を漏らしてから羽織っていた黒

いロングコートの懐から鼻の辺りから嘴の様な突起が突き出た黒塗りの仮面を被った。「うん、依頼主のお姉さんだったよ」

仮面を装着した青年、レイヴンは感情の無い声で呟くと顎をしゃくつて見せ、二人を引き連れて暗い路地の奥へと消えて行った。

街の一角での死体騒動が号外となつて知らされる中で迎えた昼。中央広場のサン・レミの聖堂が十一時を知らせる鐘を鳴らした。

タニアリージュ・ロワイヤル座の前に、一台の馬車が止まった。開かれた馬車のドアから出てきたのはリツシュモンである。彼は堂々とした態度で劇場を見上げると、御者台に座った小生にここで待つ様に伝え劇場の中へと入つて行った。

我が者顔で通路を歩くりツシュモンに切符切りの男は一礼して彼を通した。芝居の検閲も職務の一環である彼にとってこの劇場は勝手知つたる別荘の様な物なのである。

客席へと入ると、客は皆若い女性が疎らに座っていた。今日の芝居は開演当初は人氣のあつた演目だが、役者の演技が酷過ぎると評者に酷評されてしまった為、当時とは比べ物にならない客の少なさだ。

リツシュモンは彼専用設けられた座席に腰掛け、内心焦りながら幕が上がるのをじっと待った。

リツシユモンが劇場に入って少しした後、ルイズとアニエスが劇場の前にやって来た。昨晚捕らえた男からの情報を元に、劇場の向かいの路地で張り込みを続けていたのだ。

ルイズは懸命に顔に出さない様に努力してはいたが、実はくたくたに疲れていた。男を捕らえて情報を聞き出してから一睡もしていない。ただアニエスの行動に合わせて動いているだけだった。未だにネズミとは誰なのかすら教えて貰えないのが不満だが、今は待つしかない様だ。

ふと、アニエスの方へと顔を向けると、疲れなど微塵も感じていない様な生気に満ちた表情で劇場を睨んでいた。アンリエッタが新設した隊の隊長らしくタフな方なのかもしれないが、その瞳には別の何かを秘めているのを感じられた。

眠気から少しぼやけ出してきた目を手の甲で擦って懸命に劇場を見つめていたルイズの視界に、見慣れた人影が映った。

この世界では一着しか存在しないかもしれないグレーのスーツにワインレッドのシャツを着こなした大男、桐生だ。傍にはいつだか服屋で買った平民の服を着て髪をポニーテールにしているアンリエッタがいる。化粧と服装からパツと見ただけではアンリエッタとは分かりにくい、ルイズの目は誤魔化されない。

二人はアニエスが飛ばした伝書フクロウの情報をもとにこの劇場へとやって来たのだった。

「姫様！ カズマー！」

叫びながら此方に駆け寄ってくるルイズの姿を確認したアンリエッタはすぐさま駆け出して、ルイズの小さな身体を強く抱き締めた。

「心配しましたわ！ 全く、何処に消えておられたのです!？」

「貴女の優しい使い魔さんをお借りして、街に隠れておりました。黙っていた事は謝りますわ、ごめんなさい。でも、大切な貴女には知られたくない任務だったのです。その為に使い魔さんをお借りしましたが……今朝、アニエスが飛ばした伝書フクロウの内容に貴女と行動を共にしていると書かれていて驚きました。やはり貴女は私の一番の友達。何処にいてもこうして巡り会う運命にあるのかもしれないですね」

それからいつの間にか側まで来ていたアニエスに気付いたアンリエッタがルイズから身体を離れた。

アニエスは桐生をチラリと見た後、その場に跪いた。

「準備は整っております」

「ありがとう、アニエス。貴女は本当に良くしてくださいました」

少し置いてけぼりを食らってお互いに目を見合わせる桐生とルイズ。そんな二人に

構わず、劇場の前にもう一組の団体客が現れた。

獅子の頭に蛇の尾を持つ幻獣、マンティコアに跨った魔法衛士隊だ。マンティコア隊の隊長は、その場の全員を見回して目を丸くさせた。

「これはどういう事だ、アニエス殿!? 貴殿からの報告により現れてみれば、陛下までいらつしやるではないか!」

隊長は颯爽とマンティコアから跳び下りると、アンリエッタへと駆け寄った。

「陛下! 心配したのですぞ! 全く……ご無事で何よりですが、一体何処におられたのです!? 我等マンティコア隊一同、一晚中駆け回って探したと言うのに!」

心底安堵した表情で話しながら隊長がアンリエッタへと質問を投げかける。

自分を心配してくれる目の前の隊長に申し訳なさから思わず苦笑したアンリエッタは頭を小さく下げた。

「ご心配をお掛けしたのは申し訳ありませんでした。後でキチンと説明します。ですが、その前に……隊長、命令です」

「はっ! 何なりと!」

アンリエッタの言葉に敬礼しながらビシツと背筋を正した隊長は凜々しさを感じさせる声で答えた。

「今から貴方の隊で、このタニアリージュ・ロワイヤル座を包囲しなさい。中からは蟻一

匹、逃してはなりません。宜しいですね？」

隊長はアンリエッタの命令に一瞬怪訝そうな表情を浮かべたが、すぐさま頷いた。

「御意」

「それでは、私は参ります」

劇場に身体を向け、その大きな外観を真剣な眼差しで眺めた後、アンリエッタが歩き出した。

「姫様、私達もお伴します」

すぐさまルイズがアンリエッタに近付き跪くも、アンリエッタは小さく首を振った。

「いえ、貴女は此処に残りなさい。これは、私が決着を着けなければならぬ事なのです」  
「ですが」

「ルイズ、これは命令です。此処に残りなさい」

少し厳しさを感じさせるアンリエッタの声に、ルイズは戸惑った表情を浮かべながら頭を垂れた。肯定の意である。

アンリエッタはそんなルイズに小さく頷き再び歩き出そうとするも、それを遮つたのは意外にも桐生であった。

「悪いが、此処まで付き合わされて待つてろなんて命令は聞けないな。俺達も行かせて貰う」



桐生の思いがけない言葉にルイズが顔を上げて驚いた表情を浮かべた。

アンリエッタが戸惑った様に言葉を詰まらせると、横からアニエスが剣を引き抜いて桐生に切っ先を突き付けた。

「これは陛下の、この国の問題だ。国も背負わぬ一介の平民がしやしやり出るな」

強い口調で話すアニエスをマジマジと眺めた後、桐生は向けられた切っ先を強く指で摘んで見せた。

アニエスは怪訝な顔で桐生を見ながら剣を引こうとするも動かない。物凄い指圧で刃を摘む桐生の指が剣の自由を奪っていた。

「貴様……！」

「なら尚更、ただ此処で待つ訳にはいかないな。このお姫様を守るのが直属の女官であるルイズの仕事だろう？ ルイズと一緒に俺もお姫様を守るぜ」

アニエスが忌々しげに桐生を睨みつけるも、一切引かずにその瞳を見つめ返し語る桐生。

緊張に満ちた沈黙の中、アンリエッタが小さな溜め息を漏らしながら頷いた。

「わかりました。では、ルイズとカズマさんにも護衛をお願いします」

「陛下っ！ 一般の人間を巻き込んで！」

「確かにただの一般人ならば、私も決して護衛を頼んだりはしません。ですが、この二人

の強さを私は知っています。特に彼は……カズマさんは、一介の平民ではありません。武術に長けています」

「……確かに、ただの平民ではない様ですが」

アンリエッタの肯定に否定的な意見を漏らしていたアニエスも、長年の戦いの経験から桐生が只者ではないのを見抜いてはいた。

納得はいかないが、アンリエッタの決めた事に否定は出来ない。諦めた様に剣を握る力を弱めると桐生も刃を離して解放した。

「精々怪我をせぬ事だ、大男」

苛立ちを含んだ声で言った後、アニエスは剣を鞘に収めて腕を組んだ。

「では、参りましょう」

マンティコア隊による劇場の包囲が完了した報せを受け、改めて歩き出したアンリエッタの後ろにアニエスと桐生、そしてルイズが続いた。

「ねっ、カズマがあんな事言うなんて珍しいじゃない？」

アンリエッタに続いて歩いていたルイズが、桐生のジャケットの袖をクイツと引いて小声で投げかけた。

「何か姫様とあったの？」

「そんなんじゃない。ただまあ……気になる事はあるがな」

桐生は敢えてはぐらかす様な言い方でその会話を終わりにさせた。

桐生の中の何かがこの劇場に渦巻くドス黒い気配を察知したのだ。そしてその気配は、物凄く近い所からも漂っていた。

薄暗い照明の中、幕が上がり、芝居が始まった。

女性向けの芝居の為、ちらほら見える観客はみな女性ばかり。恐らく役者の誰かしらのファンであろう、女性達の黄色い声が飛び交った。舞台では煌びやかに着飾った役者達が悲しい恋の物語を演じていた。

リッシュモンは役者の行動一つ一つの度に上がる観客の耳障りな黄色い声に苛立ちを覚えていた。待ち合わせの人物が中々来ない事も苛立ちを大きくさせていた。

リッシュモンの頭の中には今日の前で演じられている劇よりも、待ち合わせの人物に投げかける質問の事で頭が一杯だった。

今回の女王失踪はアルピオンによるものか。それとも全く別の組織によるものか。いや、もしかしたら自分を裏切つて奴が勝手に動いたのかもしれない。何にしても面倒な事になったとリッシュモンは額に手を当てて溜め息を漏らした。

不意に、隣の席に誰かが腰かけた。

リッシュモンはチラリと横目に座った人物を眺めたが、待ち合わせの人物ではない。

フードを深く被った、若い女性の様だ。

リツシユモンは軽く咳払いをして見せるが、隣の女性は席から立とうとしない。今はあまり他人に関わりたくないが、致し方なく思つて声を掛けた。

「失礼。そこは連れが座る席なので、どうか他所の席で劇を観てもらえないだろうか？」  
たしなめの言葉を掛けるも、女性は席から立とうとしない。

全く近頃の若い娘は……とリツシユモンは一人内心呟きながら、少しを身を乗り出して再度女性に話し掛ける。

「聞こえませんでしたかな、マドモアゼル？　そこは私の連れの」

「そんな事を仰らず、観劇のお供をさせて下さいまし。リツシユモン殿」

クイツとフードを捲りながらたしなめの言葉を遮つたその女性はアンリエッタだった。

リツシユモンは予想外の人物の登場に面食らつた表情を浮かべてから、すぐさま心配そうに辺りを見回して声を潜めた。

「陛下、行方不明と聞いて心配しておりました。一体何処にいらつしやつたのです？」

リツシユモンの問いに答えず、アンリエッタは真つ直ぐに劇を眺めながら口を開いた。

「これは女性向けの芝居、殿方が観に来る内容ではないと思ひますが？」

「なに、つまらなかりうが趣味に合わなかりうが、芝居に目を通すのも仕事の一つです  
で」

落ち着き払ったリツシユモンの言葉にアンリエッタは小さく笑った。

「なるほど。では劇場での密会も仕事の内であるかと？ ……考えた物ですね。貴方は高等法院長、芝居の検閲も職務の内故に、ここに貴方が居ても誰も疑問には思わない。これ程にない隠れ蓑ですわ」

「先程から仰つてる言葉の意味が分かり兼ねますな。密会とは……一体私が誰に会うと言うのです？ まさか愛人などとは申しますまいな」

リツシユモンは愉快そうに笑つて見せるが、アンリエッタの顔にはもう笑みはない。鋭い狩人の瞳が力強く光を秘めていた。

「貴方が先程仰つた連れの方なら待つだけ無駄というもの。何せ偽造された切符でこの劇場に入ろうとしたものですから。民の娯楽の場を汚す様な真似は許されてはなりませんからね」

「これは驚いた。切符売りは何時から王室の管轄に？」

アンリエッタはこの下らない上つ面のやり取りに嫌気が差した様に深く溜め息を吐いてから、リツシユモンを鋭い目付きで睨み付けた。

「お互い下らぬ腹の探り合いはもう止しましょう。貴方と今日此処で密会の予定を控え

ていたアルビオンの密使は昨夜逮捕しました。彼は洗いざらい話してくれましたよ。今頃はチエルノボーグの監獄で手厚くもてなされている筈です」

アンリエッタは一気にリツシユモンを追い詰めに掛かった。

アンリエッタの劍幕に一瞬キョトンとしたリツシユモンは次の瞬間、高らかな笑い声を上げた。幸か不幸か、その笑い声は劇に夢中な他の観客達には聞こえなかった。

「なるほどなるほど！ お姿をお隠しになったのは、私を誘き寄せる餌だったと言う訳ですな！」

「その通りですわ。そして、貴方はその餌にまんまとかかったのです、高等法院長」

「私は陛下の掌で踊らされていた、そういう事ですか！」

「本当に……本当に残念ですが、その通りです」

リツシユモンは今迄見せた事のない、邪悪な笑みを浮かべてアンリエッタを見た。その欲望に染まり切った下衆な視線に、アンリエッタは堪らない不快感を覚えた。

「私が消えれば必ず貴方は密使と接触する筈、そう考えました。自分達以外の組織が私を狙っている……貴方達にとつてこれほどの事件はありませんからね。焦つてしまえば、誰であろうと必ず慎重さを欠きます。それが利口なキツネだろうと、日向を歩かぬネズミだろうと」

「ふむ、確かに。それで、一体何時から私が怪しいと？」

「確証はありませんでした。貴方も大勢の容疑者の一人でしかありませんでしたから。でも、私に注進してくれた者がおりましたの。あの夜、手引きしたのは貴方で間違いないと」

アンリエッタの声は徐々に疲れたものへと行って行き、寂しさを秘めたものへと行って行つた。

「信じたたく……信じたたくありませんでした。貴方が、王国の権威と品位を守るべき高等法院長が、この様な売国の陰謀に加担するなど。幼い頃から私を可愛がってくれた貴方が……私を敵に売るなど」

「陛下は未だ私にとつて、無知な少女に過ぎません。そんな小娘に国を任せるなら、アルビオンに支配された方がこの国の為になる。違いますかな？」

「私を可愛がってくれた貴方は偽りの姿だったのですか？ 貴方の優しさは……全て嘘だったのですか？」

「主君の娘を可愛がらない家臣等居る筈が無かろうに。そんな事も気付けぬから、貴方は子供なのだ」

アンリエッタは息を止めて瞳を閉じた。

自分は一体何を、どれを、誰を信じれば良い？ 嘘と裏切りが支配する中で自分を保つていけるのだろうか。いや、嘘は兎も角、裏切りはなかった。この男は出世の為に

自分を利用してきただけに過ぎない。

惑わされるな。騙されるな。真実を見抜け。揺れぬ心を持って。それが、王の条件なのだから。

アンリエッタは瞳をゆっくり開くと、毅然とした態度で口を開いた。

「貴方を女王の名の下に罷免します、高等法院長。抵抗などせず、大人しく逮捕されなさい」

しかしリツシユモンは余裕の表情のまま、芝居へと顎をしゃくって見せる。

「何を申される。まだ芝居は途中、最後まで観ずに退場するのは役者に失礼ではありませんかな?」

「この劇場は魔法衛士隊が既に包囲しています。貴方も貴族の端くれなら、潔く杖を渡しなさい」

「やれやれ、小娘の分際でいきりよる。私を罠に掛けたつもりなのだろうが、生憎罠に掛かったのはお互いなのだよ」

「何ですって?」

リツシユモンはニッと笑うと手をポンツ、叩いた。

瞬間、芝居を演じていた男四人、女二人の六人の役者達は突然動きを止め、衣装に隠されていた杖を取り出してその先をアンリエッタに向けた。



突然の出来事に、観ていた観客達から悲鳴が上がった。

「騒ぐな！ 芝居は黙って観るものだろうが！」

本性を剥き出しにした、乱暴な声でリツシユモンが叫ぶ。

観客達が怯えて声を出せない中、アンリエッタは落ち着いた口調で呟いた。

「役者はみな、貴方のお友達と言う訳ですか」

「左様。みな一流の使い手です」

リツシユモンはアンリエッタの手を握りながら言う。その脂ぎった感触にアンリエッタは鳥肌が立つのを感じた。

「今回の脚本は、貴女を人質にとって、アルビオン行きの船を取る。そして貴女を手土産にアルビオンへ亡命。役者はアルビオン、舞台はトリステイン、そしてヒロインは貴女だ。最高の喜劇ではありませんかな？」

楽しそうに笑うリツシユモンに、何処までも冷たい瞳で見つめるアンリエッタが口を開く。

「念の為、忠告します。貴方にとってあの大根役者なお友達が大切なら、今すぐ杖を下ろさせなさい。さもないと、私の頼もしい二人の護衛が貴方のお友達を痛めつける事になりますよ？」

アンリエッタの言葉をハツタリと捉えたりツシユモンは高らかに笑いながら首を

振った。

「何を馬鹿な！ 脚本家である私の演出にその様な者はありませんぞ？ 助けが来た所で、最早手遅れだろうが！」

「そうですね……」

アンリエツタは小さな溜め息を吐いてから、劇場に顔を向けて手を挙げた。

「ならば、今から私が脚本家となりましょう」

眩きながら手を下ろした瞬間、女性役者二人の間で小さな爆発が起きて、それぞれが左右へと吹き飛んだ。客席にこっそりと潜んでいたルイズの「エクスプロージョン」ある。

突然の出来事に男の役者達が慌てた様に顔を見合わせた瞬間、疾風の如く現れた灰色の塊が一人の顎を強く打ち上げた。その塊は一瞬の硬直の後、二人目へと駆け出して左頬を殴ってよろめかせてから、顔面に拳を叩き込んで吹き飛ばした。その塊を確認しようとしたもう一人の男は次の瞬間、鋭い肘の突きに為す術なく吹き飛ばされる。

漸くその灰色の塊を目視出来た最後の一人が杖を向けるも、杖を握った手首に鋭い手刀を叩きつけられ、痛みから前屈みになった所に容赦ない拳が顔面を打ち抜いた。

我流喧嘩体術、「驚愕の極み」。目にも留まらぬ速さで次々と敵を薙ぎ倒す対多人数用の必殺拳だ。

「撃ち方用意！」

灰色の塊、桐生が役者達を薙ぎ倒したのを確認したアニエスが声を挙げると、今迄怯えていた観客達が一斉に懐から銃を取り出してリツシユモンにその銃口を向けた。

劇場の客全員は、実は銃士隊の隊員達であった。平民の女性で構成されている為杖を持たぬ以上、彼女達を見抜けるのは余程の眼力でないと不可能であろう。

自分の手駒が一瞬の内に倒された事に頭がついて行かずにポカンとしているリツシユモンの手を乱暴に振り払って何処までも冷たい声で話し掛けた。

「カーテンコールですわ、リツシユモン殿」

リツシユモンはその場に崩れる様に膝を突いた。

「ま、まさか……こんな小娘に、裏をかかれるなど……」

絶望しきった様子で呟くりツシユモンを他所に、アンリエッタが軽く手を挙げると、銃士隊の隊員達がその太った身体を拘束した。

その様子を、アニエスは剣の柄に手をかけながら見つめていた。

役者だったアルビオンのメイジ達が気絶しているのを確認してから劇場から飛び降りた桐生は、隠れていた客席から飛び出して来たルイズと落ち合った。

「やったわね、カズマ！ お手柄じゃない！」

嬉しそうに言うルイズの頭を撫でながら拘束され立ち上がらされたリツシュモンと、アニエスへと視線を向けた桐生は首を振った。

「いや、まだだ」

小さく呟いた桐生の言葉に首を傾げるルイズを他所に、桐生は一直線に駆け出した。

「チエルノボーグへ連行しなさい。そこで自分の犯した罪を償わせるのです」

アンリエッタの命令に銃士隊の隊員が頷くと、脱力気味のリツシュモンを歩かせて劇場の外へと向かった。

アニエスはリツシュモン達が向かって来る通路の先で、血走り憎悪の籠った眼でリツシュモンを睨み付けたまま剣を引き抜くと、一気に駆け出した。

雄叫びを上げながら突進するアニエスに、アンリエッタと銃士隊は訳が分からず硬直し、リツシュモンは恐怖に満ちた眼でアニエスを見詰めながら悲鳴を上げた。

憤怒と憎悪に任せたまま、剣をその醜い身体に目掛けて振り下ろす。が、剣は途中で動きが止まった。

リツシュモンとアニエスの間に割って入った桐生が、アニエスの剣を掴んだのだ。強く握られた刃に掌から滲み出た赤い血が伝っていき、ポタポタと床に敷かれた絨毯に零れ落ちていく。

「っ!? 退けっ!」

「断る!」

「退けえっ!」

刃を離させようと剣を引くアニエス。しかし桐生も痛みにも耐えながら懸命に刃を掴んで剣の自由を奪う。

「馬鹿な真似は止めろ! 此処でこいつを殺して何になる!?!」

「お前なんかは何が分かる! その男は私の故郷を! 仲間を! 家族を金で売り、殺した男だ! 法による裁きなど必要ない! 今此処で、私の手で殺してやる!」

憎悪に染まったアニエスの瞳は何処までもギラギラとしていて、何処までも悲しかった。

その瞳は、今迄戦ってきた「復讐者」達を思い出した。やり場のない怒り、決して消える事のない憎しみ。それだけに囚われ、大切な物を見失ってしまった者達を。

「今此処でこいつを殺して、復讐を果たして、それでお前の何になる?」

「そんな事知った事か! ただ私は、故郷を失ったあの日から! こいつを殺す事だけを目的に生きてきたんだ! こいつを殺せるなら、何を失っても——」

「逃げるんじゃない!」

言葉を遮り怒鳴り声を上げる桐生に、アニエスはビクツと身体を震わせた。

「復讐を逃げ道に使うんじゃねえ！ 何を失つてもだど？ お前を生んだ親が、そんな事望む訳ねえだろうが！」

怒鳴りながら乱暴に剣を投げる桐生の力に、アニエスの身体が引つ張られて後ろへ尻餅をついた。

瞳の端に涙を浮かべながら睨み付けてくるアニエスを、桐生は真つ直ぐ見つめ返した。

「アニエス、つて言つたよな？ 人間は長い事暗い道を歩いていると、この先もずっと暗いものだと思つちまう。そして次第に、先に進む事が嫌になつちまう。そして全てがどうでも良くなつちまうんだ。お前は、何時まで復讐なんて暗い道の中で彷徨い続けてる？ お前にとつてこの男が許せないなら、この男と同じ様な奴を作らない為に一歩前に行くべきじゃねえのか？」

アニエスは悔しそうに黙つたまま桐生を見上げていたが、ゆつくりと頭を垂れた。

そんなアニエスを見詰めていた銃士隊の隊員達は、一齐にアニエスを駆け寄り、心配そうに声を掛けた。

「隊長、大丈夫ですか!？」

「貴様っ！ よくも隊長を！」

まるでアニエスを庇う様に前に立ち、剣を引き抜いて桐生を睨み付ける隊員達。

そんな隊員達を見回してから、桐生は小さな笑みを浮かべた。

「見ろ、アニエス。お前を守ろうと、こんなにも仲間が手を差し出してくれるじゃないか。何を失つても、なんて二度と言うな。誰かの上に立った以上、お前の身体も、命もお前だけの物じゃねえんだよ」

そう言って桐生はアンリエッタに顔を向けて小さく頷くと、心得ていた様にアンリエッタも頷いて、隊員達と共にリツシユモンを外の馬車へと連行した。

「カズマ！ 大丈夫!?!」

事の成り行きを見守っていたルイズが桐生に駆け出すと、桐生は掌の傷を舌で舐めてから苦笑した。

「大丈夫だ。だが、痛みはそれなりにある。店に戻って手当てしなきゃな」

「だったら、早くお店に!」

袖を引っ張りながら焦るルイズに、桐生は優しく頭を撫でてから未だ此方に剣を向けたままの隊員達へ視線を向けた。

「そいつを、お前達の隊長を頼む」

隊員達は思いがけない言葉に戸惑った表情を浮かべた後、強く頷いた。

桐生達が劇場から出た後、黙ったまま俯いているアニエスに隊員の一人が声を掛けた。

「隊長、我々には、隊長が過去に何があつたかは知りません。我々は今この場で何が起きても記憶しませんし、見ても居ません。今は……今だけは、自由になつて下さい」

そう言つて隊員達が皆で頷き合つと、それぞれが背を向けたままアニエスを丸く囲つた。まるで、誰にも中を見せぬ様にする為に。

「……………うっ、ううっ！　うわあああああああああつ！」

小さく漏れた嗚咽はやがて大きくなり、アニエスは顔を上げて大声で泣いた。久しく頬を伝つた涙は冷たく、未だ消える事のなく燃え続ける復讐の炎を少しだけ小さくした。

リツシユモンの逮捕劇から三日後。

相変わらず桐生は厨房で皿洗いをし、ルイズは接客にと大忙しだった。

何時もの様に仕事に精を出していると、羽扉が開いて新しい客が入つて来た。二人組みだが、深くフードを被っている為顔は分からない。

「いらっしやいませー！」

慣れた動きで元氣良く言いながら注文取りにルイズが二人組みに近づくと、一人がフードを軽く上げて顔を見せた。

「アニエス！」



アニエスは指を唇に当ててから小声で囁いた。

「二階に部屋を頼む」

「貴女が居るって事は、もう一人は……」

「ええ、私ですわ。ルイズ」

もう一人の人物、アンリエッタの声を聞いたルイズはすぐさまスカロンに頼んで二階に部屋を取ってもらった。

用意された部屋に桐生を連れて四人で入ると、アンリエッタとアニエスがフードを取って席に着いた。

「さてと、ルイズ……先ずは貴女にお礼を。貴女が集めて下さる情報は役に立っていますわ」

「えっと……送つといて何ですが、あんなので大丈夫だったんですか？」

送った情報には確かに政治に関するものもあるが、殆どが他愛ない街の噂や平民からの批判等だ。役に立っていると言われてもイマイチ実感が湧かなかった。

「あれで良いのです。民の正直な意見をそのまま送ってくれるのが大事ですから。まだまだ若輩の身、批判はあつて当然です。しかし、それに負けぬ様に自らを磨き上げる為にも、その批判を聞かなくてはなりません」

ルイズはアンリエッタが頼もしく見える反面、少し寂しさを覚えた。もう自分の知っている姫様ではない様な、別の誰かになってしまっていく様な……。

「それと、貴女の使い魔さんを勝手にお借りしてしまつた事を謝らなくてはなりませんね。本当にごめんなさい」

「全くですわ。私を除け者にされるなんて」

ルイズは詰まらなそうに言いながら頬を膨らませた。そんなルイズを、桐生が頭を優しく撫でて宥めた。

「貴女を巻き込みたくなかつたのです。裏切り者を、罠に仕掛けるなんて危険な事を……」

「高等法院長が、裏切り者だつたんですよね？」

アンリエッタは内密に事を進めていたが、秘密はいずれ漏れるもの。リツシュモンがアルビオンの間諜である事は既に噂になっていた。

「その通りです。それと、もう一つ気掛かりな事が。アニエス」

アンリエッタが声のトーンを落として言うと、アニエスが頷いて口を開いた。

「実はチエルノボーグへ輸送中だつたりツシュモンが、何者かに殺害された」

「何だと？」

今迄黙っていた桐生が眉を潜めて言葉を発する。

アニエスは桐生へ顔を向けると首を振った。

「護衛に当たっていた兵もろとも、殺害されていた。リツシユモンの口から秘密が漏れるのを恐れたアルビオンの者の仕業だとは思いますが……犯人の特定は出来ていない」

「リツシユモンの屋敷を家宅捜査しましたが、使用人も全て殺害されました。アルビオンの者とは断定出来ませんが、仕事が早過ぎます。油断出来ない敵がいるかもしれません」

重たい空気が嫌になったのか、アンリエッタは小さな溜め息を漏らした後にアニエスに手を差し伸べた。

「そう言えば、正式な紹介がまだでした。彼女はアニエス・シユヴァリエ・ド・ミラン殿です。女性ですが、剣も銃も男勝りな銃士隊の隊長です」

アニエスは立ち上がると桐生とルイズに深く頭を下げた。桐生も軽く会釈し、ルイズも慌てた様に小さく頭を下げた。

そして今度は桐生とルイズに手を差し伸べた。

「ルイズとはもう面識があると話していましたね。其方の殿方はキリュウ・カズマ殿。人間ですが、ルイズの使い魔であり、頼もしい方です」

アニエスはジッと桐生を見詰めた後、瞳を閉じて小さく頭を下げた。

そんなアニエスの姿に、桐生は苦笑しながら腕を組んだ。

「さあ、堅苦しいお話はここまでにして、祝杯を挙げましょう！ 今回の事はまだ解決したとは言いい切れませんが、今は皆無事にこの場にいる事を祝いましょう！」

アンリエッタの言葉を聞いた桐生はルイズを座らせ、持つて来ていたワインをグラスに注いでそれぞれの手に渡して席に着いた。

「始祖ブリミルの加護の元、この場に信頼出来るお友達と共に居られる事を祝つて！」

「乾杯！」

アンリエッタの音頭の後、四人のグラスがカチリと重ねられた。

## 第39話

劇場での逮捕劇当日深夜。

リツシユモンを乗せたチエルノボーグへの護送用の馬車は月のない薄暗い闇夜の中街道を走っていた。脇にはそれぞれに魔法衛士隊の隊員が付いて護衛兼監視の為、馬に跨って馬車と並行に走っていた。

馬車の中では杖を奪われ、金属製の手枷を掛けられたリツシユモンが俯いたまま何やらブツブツと呟き続けていた。

リツシユモンとは向かい側に座っていた魔法衛士隊の隊員が、そんなリツシユモンを見ながら本日何回目になるか分からない舌打ちを繰り返していた。先ほどから「私は偉いんだ」「こんな事は夢なんだ」と現実逃避の言葉を漏らしては表情のない顔で馬車の底板を見つめている。その姿はまるで気が狂った精神病患者の様だ。

チエルノボーグまで後少しの距離だが油断は出来ず、馬車の横を走る魔法衛士隊隊員と、馬車を運転している派遣された御者は辺りを警戒していた。

リツシユモンはアンリエッタをアルビオンへ売る為に、相手側の深部を何かしら知っている可能性もある。そうなればアルビオンも、このままおめおめとリツシユモンを

チエルノボーグに連れて行かせる筈がない。リツシユモンを取り戻すか、或いは秘密を守る為にその口を封じる筈である。

そんな風に警戒して馬車を走らせていると、御者が何かに気付いたらしく馬を停めさせた。

脇を走っていた魔法衛士隊隊員も馬から降りて、御者が指差す方へと少し歩み寄る。

街道の少し先の真ん中、其処に大男が立っていた。左手に布に包まれた棒の様な物を持ち、袖の無い道着の様な薄汚れた上着に見た事のない濃紺のズボンを身に纏い、顔には鼻から上を覆う鉛色の仮面を着けている。良く見ると、その仮面の額の左右には角の様な突起があり、右肩からは劍の柄の様な物が覗いている。

「アルビオンの者か!? リツシユモンを取り返しに来たのだな!」

魔法衛士隊隊員の二人が怒号を上げながら杖を引き抜いて大男に切っ先を突き付けるが、大男は何も言わずに左手に持っていた布に包まれた棒を地面へ突き刺した。

「貴様! 何か言わぬか! それともそれは、肯定を表しているという事か!」

魔法衛士隊隊員が声を荒げて言うのも構わず、大男は右肩から覗く劍の柄の様な物を右手で掴むと、そのまま背中から何かを取り出して手を下げた。

それは大きな、とても大きな大剣だった。暗い為形はあくまでシルエツトしかわからないが、恐らく黒いであろうその鉄の塊から放たれる威圧感が肉厚の刀身を連想させ

た。

相手の抜剣を攻撃行為と見なした魔法衛士隊の隊員達は直ぐさま呪文を口にするも、時既に遅かった。

大男はそのまま身体を回転させて一歩前へ出ると、大剣を横一文字に振るった。瞬間、二人の魔法衛士隊の身体の上半身が前方線を描いて飛んで行つた。

半分になった身体の下半身からまるで噴水の様な血柱が上がり、力無く後ろへと倒れるのを見送ると、そのまま馬車へと歩み寄る大男。

御者は悲鳴を上げながら御者台から飛び降りると、来た道を駆けて逃げ出した。

逃げ出した御者を無視して大男、オーガは馬車へと近付くと、リツシユモンの向かいに当たる座席の壁目掛けて大剣を突き刺した。

リツシユモンの目の前で外の様子に杖を抜いて待機していた魔法衛士隊が突然壁を突き破り飛び出して来た大剣の刃に顔を横から貫かれ、白眼を剥いてだらんと身体から力が抜けた。

大剣が引き抜かれ顔の左右から血を吹き出しながら倒れた魔法衛士隊にリツシユモンが小さな悲鳴を上げる。

乱暴に馬車の扉が開かれ、オーガに胸元を掴まれ外に投げ出されたリツシユモンは地面にゴロゴロとその丸い身体を転がした。

「き、貴様！ 私が誰だか分かっているのか!？」

怒声を上げながら立ち上がったリツシユモンがオーガの姿を確認すると、威勢の良い態度は一変してその場に腰を抜かしてしまう。

「ひ、ひいっ!?! い、命だけは……!」

情けない声を上げながら懸命に後退りするリツシユモンを見て、オーガは小さな溜め息を漏らした後、両手でしっかりと大剣の柄を握って上段へと構える。

「人間はいつか死ぬ。それが早まっただけだ」

オーガはそう呟くと、命乞いをするリツシユモンを容赦無く斬り捨てた。

真つ二つになったリツシユモンだった死体を尻目に馬車に繋がれた馬の綱を切り離し、魔法衛士隊二人が乗っていた馬共々尻を叩いて逃してからオーガは天を仰いだ。

「ブリミル……これが、お前が守りたかった世界なのか……う!」

オーガは小さく漏らすと、茂みの中から服の所々を血に染めたレイヴンとウロボロスが現れた。

「……そつちも終わったか」

言いながら大剣を肩に再び掛け、地面に突き刺した棒を引き抜くオーガにレイヴンが頷いて見せた。

「使用人、メイド、小生……一人残らず、始末した」



まだ血に濡れたままの鉤爪を掲げながら笑みを含んだ声色で言うウロボロスに対してオーガは興味無きように背を向ける。

オーガの態度が気に入らなかつたらしいウロボロスが歩み寄ろうとするも、それをレイヴンが手で制した。納得が行かなそうに舌打ちをするも、ウロボロスは素直にレイヴンに従い足を止める。

レイヴンが二つに分かれたリツシユモンの死体を軽く足蹴にすると、顎をしゃくつて闇夜の中へと歩み始める。

オーガとウロボロスは互いを顔を合わす事も無くレイヴンに付いて歩いて行った。

夏の頃とは違い、優しい木漏れ日が降り注ぐ街道の脇に生える木々を、桐生は馬車の中から眺めていた。馬車を運転している御者はゴーレムらしく、ガラスの様な眼を光らせながら馬の手綱を器用に操っている。

トリストイン魔法学園の夏休みは終わりを告げ、「魅惑の妖精」亭から学園に戻った桐生達を待っていたのは、アルピオンとの戦争が本格的になるという知らせだった。

多くの生徒達は従軍する事となり、ルイズもまた従軍の許可を貰う為に帰省する事となった。正直に言えばルイズの戦争参加は反対だが、アンリエッタの前で見せた覚悟から桐生も腹を決める事にした。

初めて会う事になるルイズの両親。自分を見てどう思うだろうと考えていた桐生の思考は、下から聞こえた小さな呻きによって中断された。

顔を下へ向けると、シエスタが桐生の膝に頭を乗せて薄っすらと瞳を開いていた。普段のメイド服ではなく、草色のワンピースに編み上げのブーツの余所行きの格好をしている。

使用人という名目で付いてきたシエスタは桐生と同じ馬車に乗り、その揺れと時々吹いてくる秋の匂いを含んだ風の心地良さから眠ってしまったのだった。

最初は肩に凭れ掛かって来たシエスタだったが、ゆっくりとズレてきた為桐生が自分の膝に頭を乗せさせたのである。

「……あ、カズマさん。ごめんなさい……私、寝ちゃったんですね……」

「気にするな。良く眠れてたみたいだったしな」

申し訳無さそうに漏らすシエスタの頭を優しく撫でると、柔らかな笑みを浮かべながら気持ち良さそうに声を漏らした。

チラリと後ろを見ると、ルイズと彼女の姉が乗っている、自分達の馬車よりも一回り大きな二頭立ての立派な馬車が走っている。

目を覚ましたにも関わらず、シエスタは身体を起こそうとせず、そのまま甘える様に瞳を閉じたまま微笑み続けた。

「何だか……不思議です。私、カズマさんの膝枕で寝てたのに、母の夢を見ました」

「お袋さんの？」

「はい。私がまだ小さくて、兄弟もそんなに居なかった頃、いつも弟達を甘やかしていた母が唯一私だけにしてくれてたのが膝枕だったんです。その膝枕は柔らかくて、それからお日様の匂いがして……子供ながらに、ああ、私も愛されてるんだって感じた瞬間でした」

兄弟が多ければ多いほど、上の兄弟は我慢や努力を強いられるものだ。それはシエスタも例外ではない様である。

自分と錦山は、甘えたい盛りには自分より年下の孤児ばかりが周りに居て、不器用ながらに保母さんや風間慎太郎に迷惑を掛けないよう、甘える事を我慢しながら成長してきた。

時折街で見る、玩具やお菓子を強請り、駄々をこねる子供を見かけると思わずその素直さを羨ましく思う事が今でもある。

「私、今まで頑張つて来ました。家族の為に、自分の為に……だから、お願いです。今は……カズマさんに甘えさせて下さい」

そう言つてシエスタは身体を丸め、意地でも退こうとはしない意思を示した。

そんなシエスタを見てみると、不意に遙の事が脳裏を過ぎつた。普段は「アサガオ」の

皆の先頭に立って行動するが、いざ自分と二人きりになると見せた子供らしく甘える姿。普段大人びていても、どうしても愛情を求め、その優しい温もりを独り占めしたくなる時もあるだろう。

桐生は肯定の意を示す様に、再びシエスタの頭を優しく撫でた。

嬉しそうに漏れたシエスタの吐息は、やがてゆつくりと静かな寢息へと変わっていった。

ルイズは何度も目の前の馬車を注意深く見てはハラハラしていた。

自分から桐生を奪うと宣言したシエスタが、今正に桐生と二人きり。しかも先程からシエスタが上手く見えず、中で何が起きているのかサツパリ分からない。

そんな風に目の前の馬車にばかり集中していたルイズの左頬に、突然鋭い痛みが走った。

「ひゃんっ!」

情けない悲鳴を挙げると、目の前の人物がルイズの左頬を容赦なく掴み、そのままぐにいくつと引つ張り始めた。

「ひはっ! ひはいっ! ひはいへっ!」

あの強気のルイズがされるがままになっているのを、桐生が見たら驚く事だろう。

ルイズの頬を引つ張っているのは二十代半ばほどの、長いブロンド髪の女性だ。顔立ちはルイズに似ているが、何処かキツめの印象を与える美女だった。

「この私が話していると言うのに、何処を見ているのかしら？ 答えてみなさい、ちびルイズ？」

「ひはいっ！ ふ、ふみまへえ〜ん！ あねはま〜！」

両目に涙を溜めながら許しを乞うルイズに、ラ・ヴァリエール家の長女であるエレオノールはふんつ、と鼻を鳴らしてからルイズの頬を解放した。

ルイズより十一年上のエレオノールは男勝りの気性と、王立魔法研究所「アカデミー」の優秀な研究員として知られていた。

ルイズは少し赤くなった左頬をさすりながらしつかりとエレオノールの顔を向けると、エレオノールは小さく溜め息を漏らした。

「全く……一々従者の馬車なんて気にするんじゃないわよ。人の話はちゃんと聞きなさい。学園に行つて少しは変わったかと思つたら、相変わらず落ち着きのない子ね」

「ご、ごめんなさい、姉様」

ルイズはしよぼんとしながら頷いた。

「で、でも、何も学園のメイドを連れて来なくても良かったんじゃない……」

「はあ……。全く分かつてないわね。いい事、おちび？ ラ・ヴァリエール家はトリステ

インの名門中の名門。これはわかるわよね？」

「勿論です、姉様」

「となれば従者があんたの使い魔一人じゃ格好がつかないでしょう？ 貴婦人というのは、常に身の回りの世話をする侍女が一人は居るものなのよ。それにあの娘は自分から志願したじゃない」

トリスタニアの「アカデミー」に勤めているエレオノールがルイズを連れて帰郷する為に魔法学園にやって来たのは今朝の事である。

たまたま通りかかったシエスタがエレオノールとルイズの話聞き、桐生だけでなくもう一人従者は居ないのかと問われた瞬間に自分が行きますと名乗り出たのだ。女の勘で、付いて行けば桐生と一緒に過ごせると思ったのである。

これをエレオノールがあっさり認めただけでも面白くないのに、更にルイズをやきもきさせたのは桐生とシエスタが同じ馬車を使うこととなった事である。

エレオノール曰く、従者と一緒の馬車に貴族が乗る訳がないとの事だがそんな事はルイズにとつては知った事では無い。

しかし文句を言おうとした瞬間、エレオノールの鋭い眼光にルイズは蛇に睨まれた蛙宜しく何も言えなくなってしまうのだった。

それだけでも穏やかではないが、ルイズの内心はそれとは別の事でも穏やかではな

かった。今回の帰省が、一筋縄では行かないからである。

アルビオンへの侵攻作戦が発表されたのは夏休みが終わって二ヶ月が過ぎた頃、先月のケンの月の事である。

今度は此方から仕掛けるのを決めた王軍は、何十年か振りの遠征軍が編成される事となり、自国の士官不足を痛感する事となる。その為、貴族の学生も士官登録する事となった。一部の教師やオスマンが反対したが、アンリエッタを筆頭に王族がこれを抑え込んだ。

アンリエッタ直属の女官であるルイズは、特別な任務を与えられたのだが、「祖国の為に王軍の一員となってアルビオン侵攻に参加します」という便りを実家に送ったら大騒ぎとなってしまった。

従軍はまかりならぬという手紙が返ってきたが、ルイズはこれを無視。結果、エレオノールが魔法学園にやって来たという訳だ。

ルイズは実家の反応に機嫌を損ねていた。今回は桐生の飛行機を使い、進軍する予定となっている。アンリエッタや枢機卿が自分をトリスティンの切り札と思ってくれているのだ。

なのに何故従軍はまかりならぬなのか。戦が好きという訳ではないが、国の為に戦う事はラ・ヴァリエール家にとって誇るべき事ではないのか。

「全く、勝手な事をして！ 貴女が戦争に行つて何が出来ると言うの!? しつかりとお母様とお父様に叱つて貰いますからね！」

「で、でも、姉様……」

口答えを使用するルイズに対し、今度は両頬を掴んで思いつ切り引つ張るエレオノール。

「最近研究のし過ぎで耳が悪くなつたのかしら？ でも、と聞こえた気がしたわ。違うわよね、おちび？ はい、と言つたのよねえ？」

相変わらずルイズを子供扱いしているエレオノールは邪悪な笑みを浮かべながらむにいくつと両頬を引つ張り続ける。

「ひ、ひだっ！ あ、あでざば、ほっぺひだっ！」

姉の剣幕に何時もの調子が出せず、ただただ悲痛の声を漏らしながらルイズはさがれるがままになっていた。

アルビオンの首都ロンディニウムの南側に建てられているハヴィランド宮殿。その白の間は正しく「白の国」と呼ばれるのに相応しいほど白一色に塗りつぶされていた。十六本もの円柱がホールを囲み、傷一つない壁は光の加減次第で鏡の様に顔が映るほどだった。



そんな白の間では今、神聖アルビオン共和国の閣僚や將軍、そして新たな皇帝となったクロムウエルが中心の一枚岩で出来た円卓を囲んで会議を行っていた。クロムウエルの背後には秘書であるシェフィールドと傷の癒えたワルド、そしてフーケが佇んでいた。

会議の内容はタルブの村での敗戦についてと、今後攻めてくるトリステインとゲルマニアの連合軍に対しての対応である。

理由は定かではないが、「奇跡」と呼ばれる光の玉と竜もどきによつて竜騎士と戦艦「レキシントン」号を失ったアルビオンは大きな戦力削減を余儀なくされた。

更に隠密裏に行つた女王誘拐作戦も失敗に終わり、ウエールズという兵を失つたのは大きな痛手となっている。

様々な意見や怒号、憶測が飛び交う中、ホーキンス將軍が静かに皆の声を聞いている。クロムウエルに顔を向けた。白髪と白い髭が眩い歴戦の將軍がキツイ目で見つめる中、クロムウエルは微笑みながら意見を言う様に頷いて見せた。

「閣下、質問させて頂きます。彼等は間違いなくこの大陸に攻め入つて来る筈です。閣下の有効な防衛作戦をお聞かせ願いたい。連合軍の艦隊は約六十隻。我々とほぼ同じ数です。艦隊戦で負けたら、我等は丸裸同然。敵軍が我が大陸に足を入れれば泥沼になるのは必然。革命戦争で兵は未だ疲弊しています。その軍で敵軍を止めるなどとても

……」

ホーキンスの発言から、他の將軍や閣僚が口を閉じて一斉にクロムウエルへと視線を向けて発言を待った。

クロムウエルは自分の周りにいる將軍と閣僚を見回してからにつこりと笑つて口を開いた。

「彼等がこのアルピオンに攻め入る為には、全軍を動員する必要がある」

「左様です。しかし、彼等には国に兵を残す理由がありません。何故ならば、彼等には我が国以外敵が居ないからです」

「ふむ。ならば彼等は背中を疎かにすると?」

「既にガリアからは中立声明が発表されています。それを見越した進軍となれば、当然全勢力で向かつて来る筈です」

クロムウエルは後ろに振り返るとシェフィールドと何かをボソボソと話した。その声は余りにも小さく、ワルドやフーケでも聞き取れないほどであった。

少し話してからシェフィールドが頷くと、クロムウエルは再び將軍と閣僚に顔を向けた。

「その中立声明が、偽りだとしたら?」

クロムウエルの発言から一瞬の間の後、白の間に騒めきが走った。

「それは、真まことですか？ ガリアが我々に味方すると？」

「そこまでは言っていない。事は高度な外交機密なのだ」

ホーキンスの言葉にクロムウエルは口髭を弄りながら答えた後、手を叩いて会議の終了を知らせた。

「諸君等は案ずる事なく軍務に励んでくれたまえ。攻めようが守ろうが、我等の勝利は動かない」

將軍と閣僚達は先程までの暗い表情とは打って変わり、希望を含んだ表情で起立し一礼した。そして、それぞれの持ち場や己が指揮する軍や隊の元へと散って行った。

会議を終えたクロムウエルはシエフィールド達を引き連れて執務室へと戻り、かつて王が座っていた椅子に腰掛けると部下達を見回した。

「子爵、傷はもう癒えたかね？」

「万全で御座います、閣下。休息を与えて下さった事、感謝の言葉も御座いません」

「ふむ、それは良かった。しかし、感謝を述べるならば余ではなく、君を懸命に看病した「土くれ」殿にするべきだと思うぞ？」

クロムウエルの言葉にワルドがフーケへと顔を向けると、勝ち誇った様な表情を浮かべる彼女を忌々しげに見てから顔を背けた。

「さて、君はどう読むね、子爵?」

クロムウエルがワルドに問い掛ける。

「あの將軍の見立て通り、トリスティンとゲルマニアは此方に攻めに来ると思われます」  
「ふむ、やはりそうか。して、我が軍に勝ち目は?」

「五分五分……いや、若干ながら我々の方が有利でしょうな。兵数でこそ劣りますが、地の利と——」

「閣下の「虚無」もありますわね」

ワルドの言葉をフーケが引き継ぐ形で発言する。

するとクロムウエルは頬を掻きながら目を背け、小さな咳払いをして見せた。

そんなクロムウエルにフーケが首を傾げて見せた。

「如何なさいましたの?」

「いや……。諸君等も知つての通り、強力な魔法というのは何度も使える訳ではないのだ。故に、余の力をあまり当てにして欲しくないのが本音なのだよ」

クロムウエルの話し振りから察するに、彼が蘇らせられる死体の数には限度があるらしい。

「閣下の力を当てにばかりするつもりはありません。ただ、切り札の有無は士気に関わります」

「うむ。あくまでも切り札はガリアだ」

当初の予定では、ガリアはアルビオン軍の侵攻に呼応して、トリスティン、そしてゲルマニアを攻める予定だった。しかし、タルブでのアルビオン敗戦に計画変更が余儀無くされ、ガリアから出された新たな作戦は、アルビオン大陸にトリスティン、ゲルマニアの連合軍を引き寄せ、その隙に両国の本土を突くというものだった。

「……閣下。一つ、気になる事があるのですが」

「申してみよ、子爵」

「我々はハルケギニアの王政に反旗を翻した訳ですが、そんな我々にガリアの王政府が味方するのは、彼等にとってどんな得があるのでしょうか？ それとも、彼等には我々に味方するのに値する理由があるのですか？」

ワルドの質問に対して、クロムウエルは鋭い目付きをして見せた。

「子爵、それは君が考える事ではない。君は与えられた任務に邁進まいしんしてくれればいい」  
「……御意」

クロムウエルの言葉に失言だったと思ったワルドは頭を下げた。

「君に頼みたい仕事があるんだが……やってくれるかね、子爵」

「はっ。何なりと」

「ありがとう。入りましたまえ、メンヌヴィル君」

クロムウエルが呼ぶと、執務室の扉が開いて一人の男が入って来た。

白髪と皺から歳は四十代と見られるが、鍛え抜かれた身体が年齢を感じさせない。まるで剣士の様なラフな出で立ちではあるが、手には杖を持っている為メイジの様だ。

ワルドとフーケが最も目を引いたのは、その顔だった。額の真ん中から左眼を包んで頬にかけて火傷の痕がある。

「メンヌヴィル君、ワルド子爵だ」

メンヌヴィルと呼ばれた男は表情一つ変えずワルドを見つめた。

メンヌヴィル。その名前を聞いてワルドは目を光らせた。

「白炎」の二つ名を持つ、伝説のメイジの傭兵。卑怯な決闘を行い家名を奪われたとか、初めて焼いたのは両親だとか、彼が今まで焼いた人間の数は、彼が食べて来たパンよりも多いだとか、様々な噂が飛び交っている。

そんな噂の中でも、一つだけ確かな事がある。戦場では、女子供だろうが容赦無く焼き払い、消し炭にするという事だ。

「子爵、君も名前くらいは聞いた事があるだろう？ 彼が「白炎」のメンヌヴィル君だ。どうかね？ 伝説の前に立った気分は？」

「此処が戦場でない事に、喜びを隠せません」

ワルドは正直な意見を述べた。「トライデント」とはまた違った威圧感をメンヌヴィ

ルから感じ、杖を抜き合えば無事で済まない事は容易に想像出来た。

「さて、子爵。君には彼が率いる小部隊を隠密裏に運んで欲しいのだ。勘違いしないで欲しいのだが、これは余が最も信頼出来る「風」のエキスパートでなければ頼めない仕事だ。つまり、君こそが適任という事だ。分かってくれるかね、子爵？」

「勿論です、閣下」

自分のプライドを氣遣つてくれたクロムウエルの発言に、ワルドは運び屋をやらされる事の嫌気を飲み込む事が出来た。

「ガリア軍が全てを占領したとなつては、我々は何も発言出来なくなつてしまう。余はせめて「あの場所」だけは押さえたいのだ。そうすれば彼等に恩を着せられるだろう」

クロムウエルは焦りを含んだ声で言いながら腕を組んだ。

「閣下、「あの場所」とは？」

「貴族にとつて……いや、親にとつて何よりもかけがえのない存在とは何だと思うかね、子爵？ 例え、そう……自分の国を裏切つてでも守りたい存在は？」

その言葉の意味がわかつた瞬間、ワルドの口元に薄い笑みが浮かんだ。

クロムウエルは大振りに腕を振るいながら立ち上がった。

「魔法学園だ！ 彼処には貴族の子供達が大勢いる！ 子供達を人質に取れば、トリス

テインの貴族達との取引に使える！ 子爵、君はメンヌヴィル君が率いる一小隊を闇夜に紛れて、魔法学園に運んでくれたまえ」

「御意」

「出発の時間は後ほど伝える。余はメンヌヴィル君と話す事があるから、君達は待機してたまえ」

クロムウエルから退室の意を表されると、ワルドとフーケは頭を下げて執務室から出て行った。

自室に向かうワルドの後ろをフーケが付いて行き、ワルドが部屋に入って扉を閉めようとすると、フーケが脚で扉が閉まるのを阻止した。

「……おい、何の真似だ？」

訝しげな顔で問い掛けるワルドを無視して無理矢理部屋に入り込むと、突然フーケがワルドの胸を叩いた。

突然の衝撃に呻き声を漏らしながら叩かれた胸を押さえるワルドに対して、フーケが溜め息を漏らした。

「普段のあんたならこんな痛みを感じる事なんかないでしょうに。全く、無理して。ほら、包帯を変えるから服を脱ぎなよ」

机の上にあった救急箱を取るなりワルドを押してベッドに無理矢理座らせると、ワル



ドの制止の声も聞かずに服を脱がせていくフーケ。

だいぶ良くはなったものの、まだ至る所に塞がり切っていない傷が見られるワルドの身体は包帯とガーゼが未だ取れていなかった。

フーケは慣れた手つきでワルドの包帯とガーゼを取って行くと、救急箱に入っていた軟膏を傷に塗り、新しいガーゼを貼っていく。傷をすっかりガーゼで塞いでから包帯を器用に巻いていくフーケに、ワルドはバツが悪そうに顔を背けた。

「はい、これでよし。終わったよ」

包帯を巻き終えたフーケがワルドの身体を叩くと、ワルドの口から小さな呻きが漏れた。

「……もう少し気を遣え。そんなんじや嫁に行けんぞ」

「はっ！ あんたに心配されなくても大丈夫だつての！」

フーケはムスツとしながら言う。と救急箱に包帯や軟膏をしまつていく。ワルドはそんなフーケを尻目に服を着直した。

「それじゃあ私は行くけど、あんまり無理するんじやないよ」

「分かつてる。要らん世話だ」

ワルドがベッドに腰掛けたまま手を振って見せると、フーケが出て行こうと扉を開いた。

が、フーケは少しの間その場に立ち止まってからワルドへと振り返って歩み寄る。目の前まで来たフーケに顔を上げるワルド。フーケはそんなワルドの顎を掴むと、そのまま唇を重ねた。

突然の事に驚きながらも、拒絶する事なくフーケを受け入れるワルド。

「……本当に、無理するんじゃないよ」

唇を離れたフーケが心配そうに言うと、ゆっくりした足取りで部屋から出て行った。

フーケの柔らかな感触が残る自分の唇を指先で撫でた後、ワルドは首から下げたペンダントを握り締めて俯いた。

## 第40話

魔法学園からエレオノールに連れてこられて二日、桐生達はラ・ヴァリエール家の屋敷に漸く辿り着いた。

着いたのはもう夜の闇が空を完全に覆い尽くし、煌めく星々の中で一際二つの月が地上を照らす時刻になっていた。

桐生は馬車から降りて、今まで自分達が通つて来た道を見詰めながら溜め息を漏らした。

確か、ラ・ヴァリエール家の領土に入ったのは朝だったはずだ。そこからはラ・ヴァリエール家の庭という事になるのだが、庭を通つて屋敷に着くまでに半日以上かかるとはどう言う事だろうか。

恐らく神室町、いや、新宿その物位の敷地があるのではないだろうかと思わせる広さを桐生は感じていた。

そして、この領土に入った事で、桐生はルイズが正真正銘のお嬢様である事を改めて認識した。

昼頃に、昼食の為にと途中にあつた旅籠に寄つたのだが、ルイズとエレオノールが馬車から降りた瞬間に、旅籠から大勢の村人達が飛び出して帽子を取つては二人にぺこぺこ頭を下げていた。

村人達は桐生とシエスタにも気付कि、私服姿から二人がルイズ達にとつて大切な客人であると思つたのか、代わる代わるに挨拶をして来た。

普段している側のシエスタは困つた様に自分達も平民である事を伝えるが、それでも村人達は頭を下げ続けた。

旅籠の中へと案内されてルイズとエレオノールがテーブルに着いたので、桐生もそれに続こうとした瞬間、エレオノールが鋭い眼差しで睨んで来た。

桐生が一人首を傾げていると、シエスタが桐生のジャケットの裾をクイツと引つ張り、

「カズマさん、貴族の方々と同席は出来ませんよ」

と言われ、普段ルイズと一緒に座つていた為にそんなルールがあつたのを忘れていた桐生は頭を掻いて席から離れた。

ルイズはそんな桐生に何か言おうとしたが、エレオノールから何やらお説教が始まつてしまい、シユンと項垂れた。

少し離れた席からそんなルイズを見ていた桐生とシエスタは、思わずいたたまれない

気持ちになった。

「ミス・ヴァリエールも、あんな表情をするんですね」

「自分の姉が相手じゃ仕方ないんじゃないか？ 何で怒られてるのはわからないが」

「でも、あのエレオノールという方……まるでミス・ヴァリエールに八つ当たりしてる様にしか見えませんよ。こう言ったら失礼ですけど……少し、ミス・ヴァリエールが可哀想です」

シエスタは心配そうにルイズを見詰めながら呟いた。

多くの弟や妹を持つシエスタに取っては、エレオノールの妹への態度が余り快く思えないらしい。

しかし、そんなエレオノールの説教も長くは続かなかつた。

突然旅籠の扉がバンツと大きく開かれると、一人の女性が飛び込んで来た。

女性は腰がくびれたドレスを優雅に着こなし、羽根着きのつばの広い帽子を被っている。その帽子から覗くのは、ルイズと同じ桃色の髪と鳶色の瞳。

美しい、と言う言葉よりも可愛い、と言う言葉が似合う顔をしたその女性はエレオノールに気付くと目を輝かせた。

「あらあら！ 見慣れない馬車が見えたと思つたら嬉しいお客さんだわ！ 帰つてらしたのね、エレオノール姉様！」

「……ええ。ただいま、カトレア」

突然の訪問者に説教を中断して、エレオノールがカトレアと呼ばれた女性に挨拶した。

カトレアに気付いたルイズは先ほどまでの項垂れた表情が嘘の様に輝き、席から立ち上がるとカトレアへ向かって駆け出した。

カトレアはそんなルイズに手を広げ、胸の中へと迎え入れて抱き締めた。

「姉様！　ちい姉様！」

「ルイズ！　私の小さいルイズ！　貴女も帰って来てくれたのね！」

二人は周りの目も気にせず、声を上げて再会を喜んでいた。

どうやらカトレアはルイズのすぐ上の姉らしい。ルイズを大人びさせて、そのまま優しくさせた様な雰囲気を感じている。髪と瞳の色もルイズそっくりだ。二人の身体的特徴で違いを差せと言われたら身長と、その胸の大きさだろう。あくまでも素人目ではあるが、シエスタに勝るとも劣らない大きさだ。

カトレアは此方を見ている桐生とシエスタに気が付くと、ルイズを優しく身体から離して二人に駆け寄った。

完全に蚊帳の外だった為油断していたシエスタは焦った様に立ち上がり懸命に身嗜みを整えるが、カトレアはそんなシエスタに優しく微笑み掛けて手を振ってから桐生へ

と視線を向けた。

急に見詰められた桐生は首を傾げると、カトレアはニコニコしながら桐生の顔を両手で包む様に頬に手を添えた。

「うーん、昔から年上が好きなのは知っていたけど……随分歳の離れた殿方ね。でも、ハンサムじゃない。ルイズもなかなか見る目があるのね」

「はっ?」

カトレアの言葉にルイズは目を点にしながら間の抜けた声を漏らした。

カトレアはそんなルイズに満面の笑みを浮かべながら振り返り、桐生の肩を優しく叩いた。

「この方、ルイズの恋人なんでしょう?」

「はあっ!?!」

カトレアの言葉に反応したのは、今度はルイズではなくシエスタだった。

敵意を剥き出しにした眼でカトレアを睨むその表情からは、普段の貴族への礼節だの敬いだの感じられない。今、シエスタにはカトレアが貴族である事も、ルイズの姉である事も頭にないのかもしれない。

ルイズは一瞬思考が停止した様に無表情のまま黙りこくった後、顔を真っ赤にしながら勢い良く首を横に振った。

「ち、違うわ！ 恋人なんかじゃない！ た、ただの使い魔よ！」  
「あら、そうなの？」

必死になつて説明するルイズに振り返り、悪気なくコロコロと笑うカトレア。

そんなカトレアの後ろで勝ち誇つた様な表情を浮かべているシエスタに、ルイズは苦虫を噛み潰した様な顔をして拳を握り締めた。

カトレアは二人の静かなる駆け引きに気づく事なく桐生に顔を向けて、可愛らしく小さな舌を出して見せた。

「ごめんなさいね。私、よく勘違いしちゃうのよ」

旅籠から出た桐生達は、カトレアが乗つて来た馬車でラ・ヴァリエールの屋敷へと向かう事となった。

エレオノールは平民である桐生とシエスタと同じ馬車に乗るのを嫌がったが、カトレアになんだかんだ言いくるめられて渋々と乗り込んだ。

カトレアが乗つて来た馬車はとて大きく、中の広さもルイズ達が乗っていた馬車の倍以上であった。

そして、どうやら乗客は桐生達ではなかった。

馬車の中には様々な動物が乗っていた。虎やら馬やら犬やら猫やら……果ては蛇ま



でも。

聞いた所によると、カトレアは大の動物好きで何でもかんでも拾ったり連れて来ては屋敷で飼育するらしい。

桐生は側にすり寄って来た犬の頭を優しく撫でながら、膝には目の前にニヨロリと現れた蛇を見るなり気絶してしまったシエスタの頭を乗せて、ルイズ達三姉妹を眺めていた。

ルイズとカトレアは本当に仲が良いらしく、先ほどからキャツキャと声を上げながら楽しんでお喋りに花を咲かせている。その二人を眺めて寄って来た猫の顎を撫でながらエレオノールが溜め息を漏らしている。

しかし、二人を眺めるエレオノールの瞳は先ほどルイズに見せていたキツさはなく、優しい光が込められている。長女として妹達の団欒を温かく見守っているのかもしれない。

「そうだ、エレオノール姉様」

「何よ、おチビ？」

不意に思い出した様に声を掛けて来たルイズに、少し面倒臭そうにしながらも言葉の先を促すエレオノール。

ルイズは小さくはにかみながら口を開いた。

「以前頂いた手紙に書かれていましたよね？ ご婚約、おめでとうございます」

ルイズのその言葉を聞いた瞬間、エレオノールの眉がピクンと釣り上がり、カトレアは苦笑を浮かべながら口元を手で押さえた。

エレオノールから発せられる威圧感から、今までゆつたりのんびりとしていた動物達も怯えた様に隅へと散って行つた。

あれ？ と一人状況が飲み込めていないルイズが首を傾げた瞬間、エレオノールがルイズの頬を両手で驚掴むと思いつき引き張り始めた。

「ひぎっ!? あ、あでさばっ!? どぼじで!」

「貴女、知つてて言つてるのね？ そうなんでしよう?」

「じ、じりばせんっ!? わだぢ何にもっ!」

「婚約はとつくに解消よ! か・い・しよ・うっ!」

怒りからか鼻息を荒げながらルイズの頬を解放してから腕を組むエレオノール。

痛む頬を両手でささするルイズの頭を優しく撫でるカトレア。

「な、何故に!」

「試験」に受からなかったからよ。全く……あれで貴族なんて笑わせてくれるわ。

まあ、あんなヘタレならこつちから願ひ下げよ」

「試験」?」

エレオノールの口から出た聞きなれない言葉に赤くなつた頬を摩りながら首を傾げるルイズに、カトレアは小さく首を振つて見せる。

ルイズはまだ姉達しか知らないラ・ヴァリエール家のルールに少し不満気味に頬を膨らませた。

夜が更け、エレオノールがポケットから出した懐中時計を確認しているのを尻目に桐生が窓の外を眺めると、何やら大きな城が見えて来た。

街ではなく森に囲まれているその城は、トリステインの宮殿よりも大きく見えた。

「もしかして、あれか？」

桐生が城を指差しながら言うと、ルイズが頷いて見せた。

確か、今日向かっているのはラ・ヴァリエール家の屋敷と聞いていた筈だが……どこからどう見ても城にしか見えない。

そんな風に思っていると、突然フクロウが窓を開けて馬車の中に入って来た。

フクロウは羽根をバサバサと羽ばたかせて桐生の肩に止まると、器用に一礼して見せた。

「お帰りなさいませ、エレオノール様。カトレア様。ルイズ様」

フクロウが礼儀正しく挨拶する姿に驚きを全く感じない自分に、桐生は我ながら随分

とこの世界に慣れたものだ」と心の中で思った。

カトレアが立ち上がりフクロウの頭を優しく撫でながら微笑んだ。

「お出迎えご苦労様、トウルールカス。お母様は？」

「奥様は晩餐の席で皆様をお待ちです」

「トウルールカス……あの、お父様は？」

不安げに尋ねるルイズに、トウルールカスと呼ばれたフクロウは首を振った。

「旦那様は未だ戻られていません」

今回一番話さなければならぬ相手が居ない事に不安と不満がルイズの心の中で広がった。

ルイズは思わず桐生へと視線を向けたが、膝枕で眠っているシエスタの姿にすぐに視線を逸らしてしまった。

重い空気のまま、馬車は堀の向こう側にある立派な石像を携えた門の前で止まった。

すると石像の眼が光り、ジャラジャラと音を立ててゆっくりと跳ね橋が降りて行く。

門専用のゴーレムらしい。

ずううん、と重々しい音を立てて跳ね橋が掛かると、再び馬車が動き出して城壁の向こうへと動き出した。

ずっと馬車に乗って揺られていた身体を伸ばしていると、目を覚ましたシエスタが降りて来た。

次にエレオノール、カトレア、ルイズの順で降りた所で、玄関と思われる大きな扉から一人の男が現れた。

歳は五十を少し過ぎた頃だろうか。桐生ほどの身長で燕尾服に身を包み、白い手袋を着けている。白髪混じりのグレーの髪を短く整えて上唇には髪と同じ色の立派な髭が生え揃えられている。少し皺が多い顔のせいで実年齢以上上に見られがちかもしれない。瞳に宿る光は優しさと厳しさを兼ね備えている。

「お帰りなさいませ、エレオノール様。カトレア様。ルイズ様」

「ウルフェイン！」

恭しく頭を下げるその男にルイズが目を輝かせながら駆け寄った。

ウルフェインと呼ばれたその男は向かって来るルイズを優しく抱きとめると、桃色の髪を梳く様に撫でた。

「お久し振りでございます、ルイズ様。しばらく見ぬ間にまた一段と美しくなられて……」

「本当に久し振り！ ウルフフェインは……変わらないわね」

身体を離してウルフェインを見上げながら苦笑するルイズ。

ウルフェインは視線を桐生とシエスタに向けると、背筋を伸ばして深々とお辞儀した後、満面の笑顔を浮かべた。

「ようこそ、ラ・ヴァリエール家において下さいました。私、ラ・ヴァリエール家の執事頭を務めております、ウルフェインと申します。以後、お見知り置きを」

再度深くお辞儀をするウルフェインに対して、桐生もシエスタも思わず釣られた様に深く頭を下げた。

「どうぞ、此方へ。奥様がダイニングルームでお待ちです」

ウルフェインの後ろから次々と使用人が現れて、カトレアが連れて来た動物達やエレオノールとルイズの荷物をそれぞれ運び始める中、案内されるまま屋敷の中へと入って行く桐生達。

外見に負けず劣らず、ラ・ヴァリエール家の屋敷はインテリアも見事な物だった。

豪華な装飾が惜しげもなく飾られている部屋を何個も通り、十数分ほどでダイニングルームへと辿り着いた。

ダイニングルームに着くなり、シエスタはすぐさま使用人の控え室へと案内されてしまったが、桐生はルイズの使い魔である事が考慮されて晚餐会へ同席する事を許された。あくまでルイズの席の後ろに控えているだけだが。

ルイズが腰掛けたテーブルの長さは三十メートルほどの大きさだ。そこに座るのは四

人だけなのだが、周りには二十人ほどの使用人がテーブルを囲む様に背筋を伸ばして立っていた。

もう深夜ではあったが、この遅めの晩餐会にルイズ達の母親、ラ・ヴァリエール公爵夫人が先にテーブルに着いて娘達の到着を待っていた。

傍らにウルフェインを携えながら、上座に座っている公爵夫人は席に着いた娘達を見回した。

公爵夫人はエレオノール以上の高飛車な雰囲気醸し出した、一言で言うときつめの美人だった。歳はウルフェインと同じくらいかもしれないが、それはルイズ達娘の年齢を逆算した計算による物に過ぎない。四十半ばと言われても疑われる事がないであろう美貌と輝きを持つている。

ルイズとカトレアの桃色の髪は彼女譲りらしい。艶やかな桃色の髪を頭の上で纏め、人を傳かせて来た者だけが持てる貫禄を感じる。

どうやらルイズが心を許せるのはカトレアとウルフェインだけらしい。席に着いてから、後ろからでもわかるほどにガチガチに緊張しているのが伝わって来る。

「母様、ただいま戻りました」

エレオノールが言うのと、公爵夫人は頷いてからウルフェインに目配せした。

心得ている様にウルフェインが領き一度手を叩くと、四人それぞれの目の前に給仕達

が前菜を運んで来て晚餐会が始まった。

「い……頂きます」

緊張からぎこちない動きで両手を合わせ、食事の挨拶をしたルイズに公爵夫人達のフォークを持つ手が止まり、一斉にルイズに視線が向けられた。

「ルイズ、今のは何？」

カトレアが首を傾げながら尋ねると、ルイズは視線が自分に集まった事から自然と耳が熱くなるのを感じながらもじもじと答え始めた。

「えっと、その……食事を作ってくれた人への感謝と、料理になった生き物への供養を込めた……おまじない？　みたいな物なの。こうやって口にして言うと、食事が何時もより美味しく感じるの」

「魅惑の妖精」亭での生活で桐生から教わった日本のマナーは、最初こそ小馬鹿にしていたが、ジェシカ達平民と働いて食事の有り難みを理解し始めたルイズにとって大きな物へとなっていた。

今こうして目の前に出された料理も誰かが作ってくれた物であり、命を食す者として食材となった生き物達への感謝を忘れてはいけないという桐生の教えは、いつしかルイズの中で平民に対しての態度の変化を作り始めたのである。

「作ってくれた人への感謝って……それって平民に感謝するって事？　相変わらず下ら



ない事に拘る子ね。私達貴族が平民に感謝なんかしてたら、平民がつけ上がるでしょうが」

小馬鹿にした様に言うエレオノールに対して、姉としての怖さから何も言い返せないルイズ。

そんなルイズを見て、黙っていられない男が一人いた。

「それはどうかな？　貴族だろうが平民だろうが、感謝する気持ちを持ってない人間に碌な奴は居ないと思うが？」

桐生の言葉にエレオノールの目付きが鋭くなり、周りの使用人達の間にも緊張が走り出した。

ルイズも不安そうに桐生を見るが、そんな事に構わず桐生は言葉を紡ぎ続ける。

「今の時間、普通なら料理なんて作る事なんて殆どないだろう。今、目の前に出された料理と同じ物を、あんたは作れるのか？」

「何で貴族の私がそんな事しなきゃならないのよ？　平民は私達貴族からお金を貰って働いてるの。こつちが何を注文しようと勝手な筈じゃない？」

桐生を睨んだまま腕を組んで不機嫌そうに言うエレオノールに、桐生は小さく頷いた。

「確かにな。金を貰っている以上、当然期待に応えた働きをしなきゃいけない。それを

間違つてるとは言わない。だがな、もしもこの世界に平民と言う存在が居なければあんた等貴族はどうやって生きていくんだ？」

忌々しげに桐生を見つめるも、エレオノールは何も言い返せなかった。今平民がやっている仕事、もし自分がやる事となれば、上手く出来る訳がない。

「平民を見下すのは勝手だが、平民が居なきや出来ない事があるのを忘れない事だ。少なくとも、ルイズはあんたよりもそれを学んで来た筈だ。それは側にいた俺が一番良く知ってる」

エレオノールから視線を外しルイズへ顔を向けた桐生は、ルイズの頭を優しく撫でた。

その感謝は優しく、温かくて、ガチガチに緊張していたルイズの表情に笑顔を浮かべさせてくれた。

「……頂きます」

「カトレアっ！」

桐生とルイズを微笑ましそうに眺めていたカトレアは見よう見まねで両手を合わせ、口ずさむと注意する様に声を上げるエレオノールを無視して料理を口に運んだ。

「ん……美味しいっ！気持ちの問題かもしれないけど、確かに何時もより美味しく感じるかも」

カトレアは嬉しそうに笑みを浮かべながら料理を口に運ぶ。それを見たルイズも多少ながら緊張が解けたのか、一緒になって料理を運んだ。

エレオノールはそんな二人を詰まらなそうに眺めた。本当はこのままルイズが戦争に参加する事を母親へ話して、しっかりと叱って貰った後に断念させる算段だった。

しかし、その計画もルイズの使い魔とやらのせいで台無しになってしまった。今から無理矢理にでも話題を振る事も決して不可能な訳ではないが、ルイズの、自分の妹の人生に関わる事だ。いい加減な形で話を進めてしまえば、勝手な真似をしかねない。

エレオノールは苛立ちと焦りから大きな溜め息を漏らした。

「エレオノール、食事中ですよ。行儀の悪い事はやめなさい」

今までずっと口を開く事なかった母親の言葉に、エレオノールはハツとして小さく咳払いをした。

「ご、ごめんなさい、母様」

「平民の言葉一つで心を乱す様では、貴女もまだまだです。平民の言う事が正しいとは限りません。シャンとしなさい」

「は、はいっ!」

そう言った公爵夫人は料理を一口口に運び、味わう様に咀嚼した後言葉を続けた。

「そして覚えておきなさい。平民の言う事全てが間違つてるとも限りません」

「へっ?」

「研究者であるならば、幅広く視野を広めなさい。貴女はまだまだその若さ故に視野が狭い。今後今以上に自分を高めなければ、あらゆる意見に耳を傾けなさい。小さな石が、時には中に宝石を秘めている場合もあります。自らの成長を止めるのは、自分自身である事を忘れぬ事です」

「は、はあ……」

公爵夫人は桐生へと視線を向けると、しばらくジッと見つめてから食事を再開した。

晩餐会が終わって湯浴みを済ませたルイズは、カトレアの部屋で髪を梳いて貰っていた。

カトレアの部屋は植物と動物が一杯で、何個も植木鉢が並べられていて、鳥籠がいくつも天井から吊るされ、数匹の子犬が走り回っていた。

「貴女の髪って、惚れ惚れするくらい綺麗ね」

「ちい姉様だつて同じ髪じゃない」

梳いて貰う感謝が心地良くて、ルイズは瞳を細めながら口にする。

「私、エレオノール姉様みたいな金色の髪じゃなくて良かった」

「ルイズ、そんな事を言つては駄目よ。エレオノール姉様が気を悪くするわ」

「だって……私、エレオノール姉様が苦手なんだもの。何時も厳しくて、怒ってばかりで」

「貴女が可愛いのは、ルイズ。エレオノール姉様は私以上に、貴女の事を想っているのよ」

「そんな事ないわ、エレオノール姉様は私が嫌いなものよ」

寂しげに言うルイズを、カトレアが後ろから優しく抱き締める。

「本当よ、ルイズ。貴女が戦争に参加するって聞いて、一番心配したのはエレオノール姉様なんだから」

ルイズは自分を抱き締めてくれているカトレアの手を掴みながら、エレオノールの事を想った。

あのエレオノールが自分を心配？　きっと駄目な自分が戦争に行った所で家名を汚されるだけだと思っただけに違いない。そうに決まってる筈だ。

「ちい姉様……お身体は、まだ？」

ルイズの言葉にカトレアは身体を離し、苦笑しながら首を振った。

カトレアは幼少の頃から身体が悪く、魔法を使ったり、軽く運動をしただけでも体力を大きく奪われて衰弱してしまうのだ。

ラ・ヴァリエール公爵が国中の腕利きの医者や「水」のメイジを呼んでカトレアを診

せさせたが、どんな薬も、どんな治癒魔法も効果がなかった。何でも、生まれつき身体の中を流れる水の流れ常人と違って悪く、其処を治す事が出来なければ治療は意味がないそうだ。そして其処を治すのは、今の医学や技術、魔法では無理だと言われているらしい。

その病気のせいで、カトレアはラ・ヴァリエール家の領土から出た事がない。学校にも行けず、常に付き人が居なければならぬのだ。

ルイズはそんなカトレアが不憫に思えてならなかった。自分よりも魔法を扱えて、女性としても魅力的なのに外の世界へと歩き出せないカトレアが。

そんなルイズの気持ちに気付いたのか、カトレアはルイズの頭を優しく撫でた。

「さあ、ルイズ。今日は久し振りに一緒に寝ましょう」

カトレアの言葉にルイズは瞳を輝かせて頷いた。

部屋の灯りを消すと、子犬達は自分の寝床に戻って丸まった。

ふかふかのベッドの中でルイズはカトレアと寄り添い、その豊かな乳房に顔を埋めた。

「ねえ……ちい姉様」

「なあに？」

「私の胸も、ちい姉様みたく膨らむかしら？」

カトレアは小さく嘖き出すと、ルイズの頭を撫でながら頷いた。

「大丈夫よ。私もルイズくらい頃は小さかったんだから」

「本当？」

「ええ、本当よ」

ルイズは安心した様に瞳を閉じながら、カトレアの身体をギュツと抱き締めた。

「けど、良かったわ。貴女が落ち込んでなくて」

「私が落ち込む？ どうして？」

「ワルド子爵……裏切り者だったんでしよう？ 半年ほど前にワルドの領地に魔法衛士

隊の人達がやって来て、屋敷を差し押さえていたわ。婚約者が裏切り者だったなんて、

貴女が落ち込んでるんじゃないかと思つて」

ルイズは小さく首を振つた。

「平気よ。私はもう、子供じゃない。憧れと愛情を間違えたりはしないわ」

「そう……成長したのね、ルイズ」

「もう自分の道は自分で決める。だからお父様には、私の出征を賛成して欲しいの」

「なら、お父様が反対したら……勝手に出て行くのね？」

ルイズはその質問に言葉を詰まらせたまま黙りこくつた。

カトレアもそれ以上は聞かずにルイズを抱き締めたまま瞳を閉じた。

久しく鼻を擽る姉の香りにルイズは幸せな気持ちになりながら、不意に桐生の事が頭に浮かんだ。

晩餐会で自分を庇ってくれた桐生にお礼も言えずに別れてしまった。

今頃はシエスタと一緒にだろうか。そう思うと面白くない。

「さっきの男の人が気になる?」

一人悶々としていたルイズは急に声を掛けられて驚いた様に顔を上げる。

するとニコニコしながら此方を見ているカトレアの顔があつた。

「もう私の隣じゃ眠れなくなっちゃったみたいね」

「ち、ちが……別にそんなんじゃない!」

「良いのよ、ルイズ。貴女も女性として成長して来た証なんだから」

うくと唸るルイズからそっと身体を離れたカトレアは、上体を起こして微笑んだ。

「行つて来なさい。貴女の今の居場所に」

案内された薄暗い部屋の窓を開いて、桐生は空の月を眺めながら煙草を吸っていた。

部屋、とは言つたが、どうやらここは納戸らしい。其処彼処に箒やらバケツやらが置かれてる中、急遽作られたらしいベッドが一つだけ置いてある。

改めてルイズとの身分の差を思い知らされる。



煙草を楽しんでいると、扉がノックされた。

こんな納戸に用のある人間が居るのか疑問に思ったが、取り敢えずとばかりに煙草を携帯灰皿に押し込んで扉を開くとシエスタが立っていた。

「シエスタ……どうした？」

「その、来ちゃいました。なんだか眠れなくて」

はにかみを浮かべるシエスタを中に入れる桐生。

「よくここがわかったな」

「使用人の人に聞きました。カズマさんは何処に泊まっているのかって」

中に入れてシエスタが何か、バスケットを持っているのに桐生が気付くと、シエスタはそのバスケットを開いて見せた。

中にはグラスが数個と、酒瓶が三つほど入っていた。

「夕食の時に頂いたんですけど、折角だからカズマさんも一緒にどうかと思って持って来ちゃいました」

「そうだったのか。ありがとう、早速頂くとするか」

酒瓶を取り出してグラスを出そうとすると、今度はノックも無く扉が開かれた。

桐生とシエスタが扉に目を向けると、寝間着姿のルイズが立っていた。ルイズも使用人に聞いて桐生の泊まっている納戸を突き止め、向かって来たのだ。

ルイズは中にいたシエスタを見るなり、眉を釣り上げた。  
「何であんたが此処に居るのよ」

露骨に不機嫌な声で言いながらツカツカと納戸の中へ入って来るルイズ。

そんなルイズに負けじとシエスタは胸を張って言い返す。

「カズマさんとお酒を飲もうと思つて来たんです。ちゃんと使用人の人には話を通しましたよ」

「そんな事どうでも良いわ。早く部屋に帰りなさいよ」

「ミス・ヴァリエールこそお部屋に帰られたらどうですか？ 私達平民と違つて貴族の貴女にはさぞ居づらい場所でしょうし」

視線をぶつけ、バチバチと火花を散らせながら一歩も引かない二人。

そんな二人に苦笑しながら、桐生が酒瓶の蓋を開けると三つのグラスに注いだ。

「折角ルイズも来たんだ。今日は無礼講と言う事で、三人で飲もうじゃないか」

桐生から差し出されたグラスに、ルイズもシエスタも渋々ながら頷いてグラスを受け取った。

「それじゃあ、乾杯だ」

「……乾杯」

まだ何処かムツとしながらも、カチリとグラスを重ねた。

グラスを口に運んだ桐生は、鼻をつくその匂いに手を止めた。

部屋の薄暗さからわかりにくいだが、何時も飲んでるワインではないらしい。グラスを月明かりに照らすと、赤や白ではなく、琥珀の様な色が見えた。

一口含み、口の中で転がす。鼻を抜ける濃厚な香りに、気化したかの様な感覚を覚える舌触りと甘みと苦味が調和された喉越し。その味に桐生は覚えがあった。

ブランドデーである。ワインもブランドデーも、葡萄が材料の為此の世界でも作る事は可能だろうが、此方に来てからは初めて飲んだ。

そして気付く。ワインよりも度数が遥かに高い事に。

慌ててルイズとシエスタに顔を向けると、既にグラスは空となっており、二人とも真つ赤な顔でお互い睨み合っている。

「……だいたい、あんらはわらひを馬鹿にひしゆぎなろよ！ こっちはきろくなろよ！

きーろーくー！」

「なあにがきろくくれますか！ わらひなんか、ういつく、メイドれすよ！ かずまひやんにあーんなごろうしやこーんなごろうしがれますわ！」

一気飲みしたせいか呂律が上手く回らないほど酔った二人はぎやいぎやい喚きながら酒瓶を取った。

「おらっ！ きろく！ もつとろめ！」

「あんらこそ！ ろめ！ 馬鹿めいろ！」

互いに相手のグラスに並々と酒を注いでは一気に飲み干している。二人とも桐生の事はもう眼中にない様だ。

桐生はグラスに口付け、今度は味を楽しむ様にゆっくりと舌の上で酒を転がした。

ふくよかな味わいを感じながら、ルイズとシエスタの飲み比べを苦笑しながら眺めている桐生を、窓から覗く二つの月だけが見つめていた。

## 第41話

臉に当たたる朝日の光に、ルイズは目を覚ました。瞬間、頭に鈍い痛みが走って思わずこめかみを抑え込む。

目にしみるほど眩しい日差しを手で遮りながら気怠く重い身体を持ち上げたルイズは一瞬、自分が何処に居るのか分からなくなつたが、隣で寝息を立てながら寝てるシエスタを見て昨晚の事を思い出した。

シエスタと飲み比べをしたまま、気を失う様に眠ってしまったらしい。

シエスタと自分はベッドに寝かさされて毛布が掛かつており、ふと周りを見渡すと、桐生が水を持ったグラスを持って此方に来るのが見えた。

「起きたか、ルイズ」

「ん……頭が、ちよつと痛い……」

「飲み過ぎだな。ほら、水だ。少しは気分がスッキリするぞ。飲んでおけ」

差し出されたグラスを受け取って一気に水を啣るルイズ。喉が痛くなるほど冷たい水は酔いで気怠い身体を少しだけ楽にしてくれた。

「……はあつ。ありがとう、カズマ」

ルイズが空になったグラスを桐生に返すと、隣で寝息を立てていたシエスタから小さな唸り声が上がリ、薄眼を開けながらゆっくり状態を起こすと目を手の擦りながらルイズと桐生を交互に見た。

「ふにや……おはようございます、ミス・ヴァリエール。カズマさんも」

幾らかまだボーツとしているシエスタに苦笑を浮かべた桐生は、ルイズと同じ様に水の入ったグラスを差し出した。

シエスタは軽く会釈した後グラスを受け取り、水を味わう様にゆっくり飲み干すと大きな溜め息を吐いてから慌てた様にベッドから立ち上がってルイズに身体を向けた。

「あ、あのっ！ ミス・ヴァリエール！」

「な、何よ？」

突然のシエスタの行動に思わず身構えるルイズ。桐生も何事かとシエスタを見詰めながら事の成り行きを見守っていた。

「も、申し訳ありません！ 私、その、あまりお酒の癖が良くないらしくて……覚えて無いです、何かミス・ヴァリエールに失礼な事をしてしまったんじゃないかと思つて……！」

ペコペコと何度も頭を下げて来るシエスタに、ルイズは頬を掻きながら苦笑した。

「まあ、良いわよ。私もあんまり覚えてないし……少しは楽しかった記憶もあるし」

どうやらルイズとシエスタは昨晚の事をあまり覚えていないらしい。

昨晚、酒の飲み比べをしながら最初はお互いへの悪口の言い合いだったのだが、次第に矛先は桐生へと向けられ、まるで二人にはそこに居る桐生が見えていないかの様に、桐生への普段の不満や愚痴の言い合いが始まった。

言い寄っても靡かない、一緒に寝てるのに何もしない、こんなに想ってるのに振り向いてくれない、とまるで女子会のノリのような会話を繰り返して話していた。どういう訳かその時は普段の二人からは想像出来ないほど気が合ったらしく、時折「かんぱーいっ！」等とグラスを重ねながら笑い合う姿も見えた。

自分に対して好き放題言っていた事を、ほぼ素面の状態で聞かされていた桐生は頭が痛くなったが二人の楽しそうな姿から何も言えなかった。

シエスタは今度は桐生に身体を向け、深々と頭を下げながら謝罪した。

「カズマさんにもご迷惑をお掛けしたと思います。本当にごめんなさい」

「無礼講と言ったのは俺だし、気にするな。二人の意外な一面も見れたしな」

桐生の言葉に安堵したシエスタが小さく微笑んだ瞬間、ノックも無しに勢い良く扉が開かれた。

その音に驚いた三人が扉へ視線を向けると、十数名のメイドが慌てた様子で中に入ってきては壁に立て掛けてあったモップや箒を引っ手繰る様に取っている。

そのメイドの数人がルイズに気付くと、桐生とシエスタを押しやってルイズに近付いてきた。

「ルイズ様！　こんな所に居らっしゃったんですか！」

「急いで身支度を！　時間がありません！」

メイドの剣幕にキョトンとして居たルイズは我に返ると、両手を上げて首を振った。

「ちよ、ちよつと！　こんな朝っぱらから一体何事なの!？」

ルイズの言葉に説明する時間も惜しいと思ったのか、メイドは互いに顔を合わせて頷くと声を揃えて言った。

「旦那様が戻って来られます！　急いで支度して下さい！」

旦那様。その言葉からルイズは一瞬で表情を真顔に変え、ベッドから飛び降りると一目散に自室に向かって駆け出した。数人のメイドがその後を追う。

父が、ラ・ヴァリエール公爵が帰って来るのだ。

竜に四隅を紐で吊るされた馬車から車輪を外した様な豪華な籠が、朝靄の中ラ・ヴァリエール邸の前に降り立った。

数十人と集まって居た召使い達が籠に駆け寄ると紅い緋毛氈が入り口まで敷かれ、その緋毛氈に沿って左右に並び始める。



準備が整ったのを察知した召使いの一人が籠の扉を開くと、初老の貴族が緋毛氈に降りてきた。

ラ・ヴァリエール公爵である。歳は五十過ぎ。白くなり始めているブロンドの髪と口髭を揺らしながら豪華な衣装を身に纏い、悠々と歩いている。左眼に嵌められたグラスから覗く瞳からは鋭い眼光が宿っている。

屋敷の入り口まで来た公爵にウルフェインが駆け寄り、慣れた手つきで帽子を取っては髪を整え、服の合わせを確かめた。

「ルイズは戻っているか？」

ウルフェインに服の合わせを確かめさせたまま、渋いバリトンで公爵が言う。すると公爵専属であり、一番ラ・ヴァリエール家に長く仕えている執事ジェロームが恭しく一礼した。

「昨晚お戻りになられています」

「そうか。朝食の席に呼べ」

「かしこまりました」

ウルフェインの合わせが終わったのを見計らって公爵が屋敷の中へと歩き出す。その後ろ姿にジェロームもウルフェインも、外に並んだままの召使い達も深く頭を下げた。

朝食は昨晚のダイニングではなく、日当たりの良いこじんまりとしたバルコニーで行うのがラ・ヴァリエール家の決まりであった。

引き出されたテーブルに真っ白なシンクが敷かれ、上席に公爵と夫人が並んで座る。そして歳の順に三姉妹が席に並ぶ。ルイズの後ろには昨晚同様、桐生が立っていた。

ルイズは二日酔いから来る頭の痛みに耐えながら背筋を伸ばして座っている。

最初は桐生は平民なのだから食事の席には立つべきではない、昨日は例外だったと意見があったらしいのだが、公爵夫人より昨晚同様ルイズの後ろ立つ事が許された。

公爵は久しぶりに揃う娘達を一瞥してから桐生へと視線を向けるが、さほど興味がないらしくすぐさま視線を外した。

召使い達が次々と五人の前に料理を運んで来る。瑞々しいサラダやふつくらとしたパン、ローストビーフに果物等、魔法学園の朝食が再現されている様だ。

「い、頂きます」

「頂きます」

ルイズとカトレアが両手を合わせて頷きながら言う言葉に公爵は訝しげな顔をしたが、食事を口に運び始めた娘達に野暮な質問をしたく無いのか、そのまま自分も食事を始めた。

公爵は紅茶を一口口に含んでから、深い溜め息を漏らした。

「久しく娘達が揃った嬉しい筈の朝食だと言うのに……あの鳥の骨め、人の気分を害する事に関しては長けておる。せっかくの気分が台無しだ」

静かだが、強い苛立ちを含んでいる公爵の声に、ルイズの身体に緊張が走る。

公爵夫人も紅茶を一口口に含んでから、夫の方へと顔を向ける。

「どうかなさいましたか？」

「儂をわざわざトリスタニアに呼びつけて何の用かと思つたら、「一個軍団編成されたし」と言いおつた。全くふざけおつて……儂は既に軍務を引退し、兵を率いる世継ぎも家に居ないと言うのに。何より、儂は今回の戦は反対なのだ」

「確かにそう仰つてましたね。しかし、宜しいのですか？ 祖国は今、一丸となつてアルビオン討伐を目指すべしと枢機卿から御触れがあつたばかりではありませんか。ラ・ヴァリエールに逆心あり、と世間から言われかねませんよ？」

そう言いながらも公爵夫人は涼しげな顔だ。

「言いたい奴には言わせておけ。言われた事に従う事だけが忠義の表し方では無い。間違いを間違いとお教えるのも家臣の役目だ。全くあの鳥の骨め……枢機卿等と呼ばれておるからに調子に乗っておつて。若い陛下を誑かし、国土を広げる算段なのだろう」

アンリエッタの事を言われて、思わずパンを吹き出しそうになりむせ込んだルイズの

背中を桐生が優しく叩いて落ち着かせた。

「おお、怖い怖い。枢機卿の周りの雀達に聞かれたら、タダではすみませんよ?」

言いながらも公爵夫人は嬉しそうだ。まるで、夫の夫らしい姿が見れた様に。

公爵が話を終えたのを見計らって、それまで黙っていたルイズが頭の痛みも忘れて椅子から立ち上がり口を開いた。

「父様……伺いたい事があります」

公爵は立ち上がったルイズへと視線を向けた。その視線は厳しさの裏に温かな愛情がある物を桐生に感じさせた。

「良からう。だがその前に、久しく会う父に接吻はしてくれぬのか、ルイズ?」

ルイズは小走りに公爵の元へ行くと頬に口付け、真つ直ぐな視線で公爵を見詰めた。

「何故、父様は此度の戦に反対なのですか?」

「他でもない、この戦が間違った戦だからだ」

「戦争を仕掛けてきたのはアルビオンですわ。ならば迎え撃つのが当然の事ではないですか」

「ルイズ、勘違いをしないといけない。此方から攻める事を「迎え撃つ」とは言わないのだよ。いいか? 「攻める」という事は、圧倒的な戦力差があつて始めて成功する。敵軍は五万、我が軍は六万」

「我が軍の方が、一万も多いではないですか」

ルイズの反論に公爵は紅茶をもう一度口に含んでから首を振った。

「二万「も」ではない。一万「しか」なのだ。本来攻める側は守る側の三倍の兵力が勝利への必須条件だ。ましてや相手は空の上。仮に三倍の兵力があつたとしても勝利は難しいだろう」

「でも……」

まだ納得のいかないルイズに、公爵はルイズの頭を撫でながら顔を覗き込んだ。

「我々は攻め入るのではなく、奴等の大陸を包囲して日干しにするべきなのだ。そうすれば向こうから和平を申し込んでくる。戦は必ずしも白か黒か、そのどちらかに着けようとする必要はないんだ。攻め入り失敗すれば、それこそ多くの血が流れる事になる。必ず勝利出来るという条件がなければ、攻め入るのは間違っているのだよ」

ルイズは黙ったまま俯いた。

公爵の言っている事は正論だ。必ず勝利出来るという保証もなしに攻め入るのは、確かに危険すぎる。

「タルブの勝利は偶々だ。一度勝ったからと言って、慢心してはならん。傲りは身を滅ぼす。おまけに魔法学園の生徒を士官として連れて行く？ 馬鹿を言っちゃならん。子供を戦に参加させる等、それこそ失敗は確実だ。勝利も約束されていない戦に、いや、

例え勝利が約束されていたとしても、娘を戦争に参加させる等、出来る筈がない」

公爵は食事もそこそこに、残っていた紅茶を一気に呷って口元を拭うと立ち上がった。

「朝食は終わりだ。ジェローム！ 戦が終わるまで、ルイズを屋敷から出すな」

「かしこまりました」

「父様！」

席を外そうとする公爵にルイズが叫ぶ。

「陛下は私を必要としています！ 私は、この戦に参加しなくてはいけないのです！」

その言葉に、公爵は去ろうとする足を止めてルイズへと振り返る。

「お前の何を必要としていると言うのだ？ 魔法の使えないお前の、何を」

ラ・ヴァリエール家の人間はルイズが「虚無」の使い手である事を知らない。そんな疑問を持つのは当然の事だ。

桐生はここまで一切口出しせずルイズを見守っていた。人が人に想いを伝える時、自分の言葉で伝えなければ意味がない。手助けをすれば言葉は軽くなり、その中に秘められた想いを伝えられずに終わってしまう事もある。

「今はまだ、言えないけど……私……！」

ルイズはぎゅうつと拳を握り締め、必死に言葉を口から出そうとしていた。

「私はもう、子供じゃない！ 昔の私とはもう違うの！」

「ルイズ！ 貴女お父様に向かつて何て事を！」

エレオノールが席から立ち上がり、きつい声で言い放つ。

が、ルイズはそんなエレオノールを睨みつけた。

「姉様は黙ってて！ 今私は、父様と話しているの！」

ルイズのその態度に、家族全員、更には控えていたジェロームやウルフェイン、召使い達も驚いた。以前のルイズなら、姉の一言ですぐに縮こまってしまった筈なのに。

ルイズは公爵に向き直って口を開いた。

「みんなの知つての通り、私は馬鹿にされてきた。姉様達と違って、魔法の才能がないって言われてきた。でも、今は違う！ 陛下は私が必要だとはつきり言ってくれた！ だから私は、陛下の期待に応えたいの！」

ルイズの話聞いた公爵の目の色が変わった。

公爵はゆっくりルイズに歩み寄ると、身体を屈めてルイズと視線を合わせた。

「お前……得意な系統に目覚めたのだね？」

「はい」

「四大系統の、どの系統だね？」

ルイズは戸惑った様に身を振った。「虚無」の事は話せない。しかし、父に嘘をついて

いい物なのだろうか。

ルイズの中に小さな葛藤が生まれるが、唇を噛み締めて嘘をつく事を決めた。

「……「火」、です」

「そうか、「火」か……」

公爵は暫くルイズの顔をジッと見ていたが、やがて力無く頭を垂れた。

「お前のお爺さんと同じ系統だね。ならば戦に惹かれるのも無理はない。罪深い、系統だ。よりによって……お前が……」

「父様……」

深い溜め息を漏らしてからもう一度ルイズの顔を見詰めた公爵。その瞳には悲しみが宿っていた。

「ルイズ、大事な事だ。決して間違えてはいけない事だ。陛下がお前の力が必要だと仰った。確かなんだな？ 他の誰でもない、お前にそう言ったんだな？」

念を押す様な口調で問い掛ける公爵に、ルイズは力強く頷いて見せた。

「はい。陛下の口から、私の力が必要だと仰られました」

ルイズの瞳は澄んでいて、真っ直ぐで、それが事実なのを公爵に伝えた。

公爵は何処か苦しそうに眉を顰めながら、首を振った。

「名誉な事だ。本当に名誉な事だが……やはり認める訳にはいかない」



「父様！」

「ルイズ、お前はワルドの裏切りの一件で自分でも気付かぬ内に自棄になつて居るのだから。婿を取つて心を落ち着かせろ。戦争への参加等認めぬ。断じて認めぬ！ お前に相応しい婿を此方で用意してやる。話は終わりだ、ルイズ。お前は戦が終わるまでこの屋敷での謹慎を命ずる。勝手な真似は許さん。良いな？」

公爵の言葉に齒噛みしながら、ルイズは必死に頷くまいと拳を握り締めながら父の顔を見詰めた。

公爵夫人が目を細め、二人の姉妹が見守り緊張が漂う中、黙つていた桐生が口を開いた。

「好きでもない男と一緒にさせるのが娘さんの幸せとは、俺にはとても思えません？」  
桐生の発言に、今までルイズに向かつていた視線が一斉に桐生へと向けられる。それはルイズも例外では無かった。

ラ・ヴァリエール家の人間と召使い達に見詰められたまま、桐生はルイズへと歩み寄りながら言葉を紡いだ。

「確かに親父さんの言う通り、戦争への参加は俺も決して賛成は出来ません。だが、娘さんの……ルイズの覚悟は本物です。ただのその場任せの言葉じゃない。彼女は必死に自分の使命を全うしようとしています」

ルイズの隣に立った桐生を睨みつけながら公爵は立ち上がり、腕を組みながらこの世界では変わった格好の桐生をマジマジ眺めてから視線を合わせた。

「貴様の様な平民に何が分かるのだ？　そもそも貴様は何者だ？」

「申し遅れました、自分は桐生一馬と申します。貴女の娘……ルイズの使い魔です」

「使い魔だと？　幻獣ならいざ知らず、魔法も使えぬ貴様の様な男がルイズを守る訳なからう。話にならない」

公爵が小馬鹿にした様に手を振って見せると、ルイズは少しモジモジしながら口を挟んだ。

「父様……。確かに、カズマは貴族ではありません。魔法も使えません。しかし、剣術や拳法の腕は確かです。私はカズマに何度も命を救って貰っています。それに……」

ルイズはチラッと桐生の方を見て少し迷った様に顔をしかめたが、すぐに公爵に向き直るとキツパリと言い放った。

「カズマは一度ならず二度、ワルドにも勝っています」

その言葉に公爵と夫人が目光らせて、姉妹二人が意外そうに桐生を見詰めた。

「閃光」のワルドと言えれば知る人ぞ知る、「風」のスクウエアアクリスのメイジだ。まぐれや偶然で勝てる実力では無い。ましてやそれが魔法も使えない平民ならば。

「ルイズの言っている事は本当か？　お前は本当にあのワルドに勝ったのか？」

公爵が疑いの目を向けながら桐生に問い掛ける。

桐生は小さく首を振ってから答えた。

「二度目は勝ったとは言えません。逃げられてしまった為、引き分けという方が正しいでしょう。ですが二度目は、状況が一度目とは違いますが、勝利出来たと自分は思っています」

真つ直ぐ見返し語る桐生の瞳や口ぶり、態度から嘘をついているとは思えない公爵は腕を組んで小さく唸った。

そんな公爵に、ルイズは桐生のジャケットの袖を摘みながら言う。

「父様、戦争が危険な事は、私も多少ながら理解しています。ですが、カズマが居れば怖くはありません。カズマはいつも私を守ってくれました。私は、カズマを信じています。だからお願いです。私の出征を許して下さい。必ず勝利して此処に帰って来ます。約束します」

ルイズへと視線を向けた公爵は暫く黙っていたが、やがて首を大きく振ってから桐生を見詰めた。

「貴様の様な何処の馬の骨かも分からぬ者に娘は任せられん」

「父様！」

「まあ、聞け、ルイズ。どうしても戦に参加すると言うのなら、この男に「試験」を受け

て貰う」

公爵の口から「試験」という言葉。エレオノールの結婚を駄目にしたとしか聞いていないルイズは不安そうに桐生を見た。

公爵は桐生を睨みつけながら顔を近付けて凄味を利かせた。

「貴様の実力が本物かどうかを確かめる為の「試験」だ。口だけでない事を証明したければ、受けて貰おうか」

桐生は公爵の視線を受け、不安そうに此方を見ているルイズの頭を優しく撫でてから頷いた。

「お受けしましょう」

桐生が肯定を表すと、公爵がパチンと指を鳴らした。

するとウルフェインが公爵に近付き、公爵から何かボソボソと囁かれると頷いて席を外した。どうやらその「試験」とやらの準備を頼まれたらしい。

少しの間の後、召使いの一人が公爵へと駆け寄り何か囁いた。

公爵は頷くと顎をしゃくって桐生について来る様に促した後、ジェロームを引き連れて歩き出した。

桐生は黙ったままそれに続き、ルイズも後ろからついて行く。更にルイズの後ろに夫人と姉妹二人がついて歩いた。

屋敷の玄関のロビーに來ると、一つだけ重々しい形をした扉が目に入った。扉の前には二人の召使いが立っている。

ルイズは幼少の頃の記憶に、その扉に近付くとウルフェインに注意されたのを思い出した。なので中には入った事がない。

公爵が迷わずその扉へと向かうと、扉の前の召使い達が深く頭を下げてから扉を開いた。重々しい音を立てながらゆっくりと扉が開くと生暖かい風が吹き付けて來た。

その風から、桐生は嗅いだ事のある臭いを感じた。何度も嗅ぎ、一時はその臭いが鼻から離れ無かつた事もある。当然良い臭いではない。鉄錆の様な、鼻をつく不快な臭い、血の臭いだ。

ルイズも臭いを嗅ぎ取つたのか、顔をしかめながら鼻を手の甲で押さえている。それは姉妹二人も同じだった。

扉の先は、地下へと続く階段が設置されていた。脇には手すり、先を照らす為の蠟燭が着けられた燭台が続いている。

コツコツと音を立てながら公爵を先頭に階段を降りて行くと、だだっ広い、石造りの部屋に辿り着いた。此方も幾つもの蠟燭が着けられた燭台が壁に取り付けられ、階段よりも部屋を明るくさせている。

ざっと見た所六十畳ほどの大きさがあり、急遽拵えた様な豪華な椅子が五つ並んでい

る。その中で一際大きな椅子の横に、ウルフェインが立っていた。

公爵はウルフェインが立っていた椅子へと向かい腰掛けると、ウルフェインとは反対側の椅子の脇にはジェロームが立つ。その隣の椅子に夫人が、更にその隣に歳の順に姉妹が腰掛けた。

「父様、ここは？」

ルイズが部屋を見回しながら公爵に尋ねる。

桐生も部屋を見回して、壁や床、更には天井にもある黒茶けた染みを見つけた。臭いの原因でもある、血の染みの様だ。

公爵は深く椅子に腰掛け直してからルイズの質問に答えた。

「ここはかつて我々ラ・ヴァリエール家の先祖が魔法の練習に使っていた部屋だ。騒音に備えて地下に造られ、壁や床、天井には魔法を使っても壊れぬ様に強化の魔法が施されている。最も、その様に使われていたのは半世紀以上も前、まだラ・ヴァリエール家がそれほど力を持っていなかった時代だ。それから時代は流れ、この環境に目を付けた歴代の王よりここは捕虜や裏切り者の拷問部屋として使われていたのだ。私の祖父の代でその様な野蛮な真似を貴族の家で行うのは御免だとの事で拷問器具は全て処分されたがな。そして今年から、私からの「試験」を行う会場として此処を扱っている。今回の様にな」

ルイズの質問に答えた公爵は腰に差ししていた杖を引き抜くと、小さく振るった。

瞬間、桐生の腰に巻き付けられていたデルフリンガーが勝手に外れ、フヨフヨと空を漂いジェロームの元へと飛んで行った。ジェロームはそのデルフリンガーをしつかりと受け止める。

「お前は拳法も得意との事だったな。なので剣は預からせて貰う。我々貴族もそうだが、いざという時頼りになるのは武器ではなく、己の肉体なのでな」

公爵はそう言う腕を組んでルイズに視線を向け、椅子に座る様に顎をしゃくって促した。

ルイズは少し不安そうに桐生を見るが、力強く頷いて見せる桐生に小さく頷くと椅子に腰掛けた。

「試験」の内容は簡単な物だ。お前にはこれからある男と一対一で戦って貰う。その男に勝利する事が出来たら、「試験」は合格だ」

説明を受けた桐生は会場となるその部屋を見回すと公爵へと視線を向けた。

「俺が勝ったら、娘さんの戦争への参加を認めるんですね？」

「儂は貴族だ。例えば平民が相手であろうと嘘は言わん。貴族に二言はない。貴様が勝ったらルイズの戦への参加を認めよう」

桐生は深い溜め息を漏らしてから部屋の中央に立つと、拳を握り締めた。

「俺の方はいつでも行けます。その男とやらを呼んで下さい」

「その必要はない。既にその男は此処にいる」

公爵の言葉に桐生とルイズは驚いた様に部屋を見回すも、見えるのはラ・ヴァリエール家の人間とジェロームとウルフェイン、後は入り口に立っている二人の召使いだ。だ。

桐生とルイズの反応が当然と思った公爵は口元に笑みを浮かべると、軽く手を上げて見せた。

するとウルフェインが歩きながら何時もの白い手袋ではなく、黒い革手袋をしつかりと手にはめ直しながら桐生の元へと向かって行く。

「ま、まさか……」

ルイズが驚いた様に声を漏らすも、ウルフェインは桐生から少し離れた位置に立つと、深々とお辞儀をして見せた。

「貴族以外の方の相手はかなり久し振りになります……宜しく願いますよ、キリュウカズマ殿」

昨日の様な満面の笑顔で言うウルフェインに、ルイズが立ち上がる。

「父様！ 何故ウルフェインなのです!? ウルフエインはただの執事頭じゃないですか！ そんなウルフェインをカズマと戦わせようなんて間違ってます！」



ルイズは必死に訴えるが公爵は答えない。夫人も姉妹達もただ黙って桐生とウルフェインを見詰めている。

ルイズは苛立った様に桐生へと顔を向けて叫ぶ。

「カズマ！ ウルフェインを傷付けないで！ ウルフェインはちい姉様と同じ様に私を守ってくれた大切な人なの！ そんなウルフェインが傷付くなんて……カズマ？」

桐生に必死に訴えていたルイズはそこで気付いた。

桐生は真剣な眼差しでウルフェインを見据えながらゆつくりと構えを取った。その表情からは油断は何えず、相手の出方を待っている様に見える。

ウルフェインは一瞬身体からダランと力を抜いたかと思うと、凄まじい速度で桐生に駆け寄り拳の一閃を繰り出した。

咄嗟に腕を重ねて防御の体勢を取り、拳を受け止めるとその衝撃から二、三步後ろへと後退る桐生。

ルイズはただただ言葉を失った。ウルフェインの動きが全く見えなかったのだ。桐生の方へと視線を向けていたのもあるが、瞬きした瞬間にはウルフェインが桐生に拳を繰り出している所だった。

「ほお……。私の拳が見えるとは、今まで相手にして来たボンクラな貴族の方々とは一味違う様ですね。これは……」

心底驚いた様に言ったウルフェインは燕尾服の上着を脱ぎ捨て、シャツのボタンを上から二つ外すと襟を捲つて構えを取つて口元に笑みを浮かべた。

「久々に、本気の殴り合いが楽しめそうだ」

そのウルフェインの表情に、ルイズは思わずゾクツとした。

何時も厳しく、しかし優しく、他の召使い達や両親と違つて三姉妹として平等に扱つてくれたウルフェイン。その表情はとても優しい物だった。

今のウルフェインの表情はそんな物からはかけ離れた物だった。言うならば残忍で、容赦の無い男をイメージさせる様な物だった。

ウルフェインの顔に驚いているルイズに、公爵が声を掛ける。

「ルイズには言つてなかつたな。最も、エレオノールとカトレアが知つたのもつい最近だが。ウルフェインは三十年ほど前、トリスタニアの一部の貴族に恐れられていた男でな。「貴族狩り」の二つ名を持つ、貴族を標的に襲うチンピラだった男だったのだよ」

ウルフェインの過去の出世を聞いて、戸惑いながらルイズは桐生とウルフェインを交互に見る。

ウルフェインはちよいちよいと指を動かして桐生を挑発して見せる。

「さあ、「試験」はまだ始まったばかりだ。せいぜい楽しませてくれよ、カズマ殿」

「……上等だ」

拳の衝撃で痛む腕を振るうと、桐生は再び構えを取る。  
ラ・ヴァリエール家の地下室で、「試験」は静かに始められた。

## 第42話

燭台の蝟燭に灯された炎が揺らめく中、桐生とウルフェインは互いに拳を打ち合っていた。

ウルフェインは軽やかなステップと、速く重い拳を武器に桐生への攻撃の手を休めない。

しかし、桐生も決して押されてばかりな訳ではない。得意のスウエイでウルフェインの拳を躲しては左右からのフックや、ギリギリまで引きつけて下がりながらの前蹴りをウルフェインへ当てていく。

小牧流体術、「捌き討ち」。スウエイから繰り出す一撃は重さは無いものの相手の体力をじわりじわりと奪って行くトリックキーな攻撃だ。

桐生の攻撃ばかりが当たっていて、ルイズは桐生の方が押していると思っているが実は違う。

ウルフェインは桐生の攻撃を物ともせず突っ込み続け、拳を桐生に当て様と様々な攻撃を繰り出して行く。

フック、ストレート、アッパー……桐生はギリギリで躲しながら次第にウルフェイン

の格闘スタイルを分析していく。

軽快な足取りと拳による乱打。どうやらウルフェインはボクシングを元にしたスタイルの様だ。年齢からは想像出来ない重みを秘めた拳は速さもあり、まともに食らってしまつては致命傷を受けかねない。

ウルフェインの攻撃のパターンを大体読んだ桐生は右フックからの左アッパーを避け、そこに渾身の拳を打ち付けようとした。

瞬間、ウルフェインの眼が光つたのが見えた。

不味いと思つて時には既に遅く、ウルフェインはそのまま身体を前に出しながら鋭い右の蹴り上げを繰り出した。

ウルフェインの蹴りは桐生の顎を捉え、その衝撃から桐生の身体が打ち上げられた。

「カズマー」

ルイズの叫びを聞きながら桐生は咄嗟に地面に着地する際、身体を後転させてウルフェインと距離を取った。

古牧流体術、「猫返り」。着地する直前に猫の如く転がりダウンを避ける回避術である。

口端から伝う血を指で拭つた桐生を見て、公爵が小さく拍手をした。

「なるほど。確かに口ばかりではない様だな。ウルフェインの一撃を受けてまともに立

ち上がったのを見たのはお前が初めてだ」

公爵からの賞賛を無視して桐生は真つ直ぐにウルフェインを睨みつけると、ウルフェイン目掛けて駆け出す。

此方に向かつてくる桐生の身体から青白い光が発せられたのを見てウルフェインは訝しげにしながらも、もう一度蹴りをお見舞いせんと構えを取った。

此方にそのまま向かつて来ると思った桐生が突然自分の少し前で前転をした瞬間、起き上がりと同時に腹へと突つ込む頭突きを繰り出して、来てウルフェインは衝撃と痛み顔に歪めながら腹を押さえながら前屈みによるめく。

体勢を立て直した桐生は、前屈みになつてゐるウルフェインに打ち下ろす様に身体を回転させながら飛び蹴りを頭に叩き付ける。

我流喧嘩体術、「前転の極み」である。スウエイから更に回避する古牧流体術である「達磨避け」からの連携で繰り出される、バツティングセンターに居たカプルのボールに翻弄された哀れな彼氏から天啓を得た荒技だ。

桐生は倒れたウルフェインを見ながら数歩後ろへと下がり、出方を待った。

ルイズは思わず祈ってしまった。これ以上二人が戦い合わない様にと。

桐生が強いのは分かっている。ウルフェインが弱くない事も分かっている。だからこそ、二人が戦い続けければ生半可な傷では済まない事も分かっている。

ルイズの祈りは虚しくも届かず、ゆっくりとウルフェインが立ち上がった。痛みからは呼吸は荒く、前屈みのままの肩を揺らしている。

「おい、平民」

公爵の呼びかけに桐生が振り向くと、公爵は腕と脚を組んで小さく頷いて見せた。

「お前のその身体から湧き上がる光……。どうやらただの平民では無いらしいな。お前にもその様な能力があるのは素直に驚いたぞ」

「……「こも」？」

桐生は公爵の言葉が引つかかって問い掛けた。

以前ルイズから「ヒート」の事を変わった体質だと言われた事はあるが、今まで自分の様に光を身体から迸らせた人間は此方に来てからは見た事がない。

ルイズも桐生以外に「ヒート」を纏っている人間を見た事がない為、公爵へと視線を向けて話を聞いていた。

ルイズの視線に気付いているかいないか、公爵は顎をしゃくってウルフェインを見る様に桐生に促した。

桐生とルイズがウルフェインへと視線を向けると、二人は思わず驚いた。

ウルフェインの身体から黄土色の光……。 「ヒート」が湧き上がっていたのだ。

呼吸が落ち着いたウルフェインは身体を伸ばす様に上体を起こすと、ギラついた眼で

桐生を睨みつけた。

「若造が、調子に乗りやがって……！」

ルイズも聞いた事のない、ドスの利いた声で漏らしたウルフェインは黒い革手袋を外し、整っていた髪を乱暴に掻き揚げてオールバックにした。そのまま両手でシャツの襟を掴むと乱暴に引き千切って脱ぎ捨てる。

露わになったウルフェインの身体は、若い頃に負ったであろう古傷が其処彼処に付いていた。日々トレーニングを欠かしていないのを伝える体格は燕尾服のせいで着痩せに見えて隠れていたのを思わせた。

だが、ルイズと桐生が目を引いたのは体格でも古傷でもなく、ウルフェインの身体に刻まれているタトウーだった。

両肩から上腕にかけてトライバル模様の黒いタトウーが施され、背中一面には狼の顔が黒く描かれていた。

「舐めてんじゃねえぞ、餓鬼があつ！」

叫びながら駆け出し、向かって来るウルフェインの顔に桐生は拳を打ち付ける。

しかし、ウルフェインは痛み等感じていない様に構わず桐生の両肩を掴むと額に向かって頭突きを繰り返した。

痛みによるめく桐生に容赦なくフック、アッパー、ストレートと拳のコンビネーション



ンを浴びせてから鋭い前蹴りで桐生を後ろへと吹き飛ばすウルフェイン。

口と鼻から吹き出た血を地面に零しながら桐生の身体が転がる。

ルイズは思わず目を覆って顔を背けた。そんなルイズをカトレアが立ち上がって優しく抱き締める。

痛みを訴える身体を起こして何とか立ち上がる桐生に、ウルフェイン首を左右に動かしてゴキゴキと関節を鳴らした。

「カズマよお……お前、貴族は好きか？」

「何だと？」

ウルフェインの突然の質問から真意が見えない桐生は口元の血を手の甲で拭いながら問い掛け返す。

ウルフェインはそんな桐生に小さく笑みを浮かべて手を差し出すと、ギュツと拳を握り締めた。

「俺あなあ、貴族って生き物が太っ嫌いなんだよ。魔法が使えるか使えねえか、生まれが何処で育ちがどうかしか相手を測れねえ、そんな貴族ってクソみてえな生き物が！」

そんな貴族をぶちのめし、殴り飛ばすのが堪んねえ快感だな。普段偉そうにしてる奴が涙目になって「許して下さい」なんて言いやがる。そんな腰抜け共が偉そうにしてるのが気に食わねえんだ！」

バチンと拳と掌を重ねたウルフェインの言葉に、ルイズの瞳から涙が溢れ出して顔を背けた。何時も優しく、自分を大事にしてくれていたと思っていたウルフェインがそんな風に思っていた等知りたくなかった。

ルイズの涙を見て、桐生はウルフェインを殺気の籠った眼で睨みつけると、ウルフェインは小さな笑みを再び零して天井を仰いだ。

「でも武器は所詮この肉体一つしかねえ。特別使えるところからいつからか出す事が出来ていた、この「オーラ」による身体能力の向上だけだな。ある日、呆気なく負けちまった」

どうやら桐生にとっての「ヒート」に似ているあの光は、「オーラ」と呼ばれているらしい。ウルフェインの話し振りからすると、その能力は「ヒート」と同じ様だ。

ウルフェインは天井から今度は公爵へと視線を移した。

「俺を負かせたのが、旦那様だった。正直俺は死を覚悟したよ。貴族をあんだけぶちめしたんだ。見せしめの処刑か、鬺り殺しか。どちらにしろ良い死に方は出来ねえ。そう思っていた。でもよ、」

ウルフェインは今度は優しい笑みを浮かべながら桐生へと視線を戻した。その目を澄んでいて、とても綺麗な物だった。

「そんな俺を、旦那様は救ってくれた。「口だけの偉そうな奴をぶっ飛ばすのは当然だ」

とな。俺はあの時から旦那様を守ろうと思って、付き人を申し出た。快く受け入れてくれたあの時の喜びは今でも忘れねえ。そして暫くして奥様と結婚され、エレオノール様が産まれた」

ウルフェインの視線は、今度はルイズ達に向けられた。その優しい瞳は、父親を思わせる物が秘められていた。

「旦那様と奥様に、産まれたばかりのエレオノール様を抱いてやって欲しいと言われた時は耳を疑ったぜ。当たり前だ。平民が貴族の子供を抱き上げるなんて、有り得る訳がねえ。それでもと言われ、エレオノール様を抱き上げた時の重みと温もりを感じた時……俺は涙が止まらなかった。理由は良くわからねえ。ただ思った。「俺の一生を、この二人の子供の為に使おう」と」

ウルフェインの語りを聞いていたルイズが、ゆっくりとウルフェインに振り返る。

その瞳に写るウルフェインは何時もの優しい笑顔だった。

「それからカトレア様が産まれ、ルイズ様が産まれた。俺はこの三人を、実の娘の様に大切にしてきた。俺みたいになチンピラ上がりの男にそう思われても、迷惑なだけかもしれないけどな」

自嘲気味に笑いながらウルフェインは桐生に顔を向けると、自分の両手を暫く眺めてからギリッと歯を強く噛み締めた。

「だからルイズ様がワルドの野郎に裏切られたと聞いた時、俺は耐え難い怒りを覚えた。刺し違えてでもワルドを殺してやる、そう本気で思った。それからエレオノール様の婚約が決まり、旦那様から今回の「試験」の話聞いた時、喜んで俺は試験官を申し出た。大切にするだ？ 命に代えてでも守るだ？ 所詮はラ・ヴァリエール家の名前と財産が欲しくて近づいて来る為の口実じゃねえか。そんな口だけのクズ共に……そんなクソ野郎なんかにつ！」

拳を握り締めて歯を剥きながら顔を上げたウルフェインの身体からは黄土色の「オーラ」が更に激しく迸り、桐生目掛けて突進する。

その姿は、鋭い牙を晒しながら獲物に向かう獰猛な狼の姿を連想させた。

「旦那様と奥様の娘をつ！ 俺の大切な娘をつ！ 渡せる訳ねえだろうがあつ！」

一気に間合いを詰めたウルフェインが桐生に殴り掛かる。

桐生はなんとか防御していくが、防御の「リガード」ですら追い付けなくなり、そうなるほどにウルフェインの拳は速さと重さを増して行く。

とうとう受け止め切れなくなつた桐生の顎に鋭いアッパーが打ち付けられた。それを好機と見たウルフェインは左のボディブローから打ち下ろしの右を桐生の顔面に叩き付ける。

衝撃から力なく地面を転がりながら、桐生はウルフェインの拳の強さを思い知った。

ウルフェインの本当の武器は拳でも蹴りでもない。

公爵や公爵夫人、そしてその娘達への「想い」だ。それを愛と呼ぶ者が居る。それを信念と呼ぶ者が居る。形は様々かもしれない。しかし、「想い」が込められた一撃は何よりも強いのを桐生は知っている。

呼吸を荒げながら横たわる桐生に、苛立った声でウルフェインが叫ぶ。

「立てやこらあつ！ 戦に行きやあ俺より強い奴はごまんと居る！ ルイズ様を守るんじゃねえのか!? てめえも他のクズ共と同じ、口だけか!? ああつ!」

ウルフェインの言葉に黙ったまま、桐生が痛む身体を起こして立ち上がる。その瞳からは光は消えておらず、諦める等一切考えていない強さを秘めていた。

桐生が立ち上がったのを見て、今まで黙っていたエレオノールが椅子から乱暴に立ち上がり口を開いた。

「ウルフェイン！ この男を倒しなさい！ どんな卑怯な手を使っても構わないわ！

勝ちなさい！ これは、命令よ！」

「姉様!」

エレオノールの叫び声に桐生とウルフェイン、そして公爵夫妻とカトレアが驚く中、ルイズが声を上げてエレオノールに近付く。

エレオノールはルイズに身体を向けると、鋭い眼つきでルイズを睨みつけた。

「貴女を戦争に参加させる訳にはいかない！　こんな試験、さつきと終わらせるべきなのよ！」

「姉様には関係ない！　私は陛下の役に立ちたいだけなの！　こんな名誉な事を、どうしてそんなに否定するの!?!」

桐生とウルフェインの戦い等最早見えていない様に、ルイズとエレオノールは互い睨み合いながら口論する。かつてのルイズならばこんな事は出来なかつただろう。

「あんたみたいなき子供が戦争に行つた所で何が出来るつて言うのよ！　これ以上心配かけるのは辞めてちょうだい！」

エレオノールのその言葉に、ルイズの中で何かがブツリと切れた。

「心配？　ふざけないでよ！　姉様が心配してるのは私の事じゃない！　家名の事でしょう!?!　私が戦争に行つてヘマをして、家名を汚されなかが心配なんでしょう!?!」  
ずっと押さえ付けて来た不満が爆発したルイズの言葉に、エレオノールは表情を失つて一瞬よろめいた。

そんなエレオノールの様子を知つてか知らずか、ルイズの口はブレーキの効かなくなつた大型バイクの様に止まらない。

「どうせ私は出来損ないよ！　姉様からすれば邪魔な存在よ！　今まで私を怒つてたのだから、何も出来ない私が憎かつたからでしょう!?!　嫌いだったからでしょう!?!　姉様

にとつて、私は要らない子だったからー」

パンツ！ と大きく響いた音で、ルイズの言葉は中断された。

一瞬何が起こったかわからなかったルイズは、左頬にジワリと感じる痛みと逸れた視線からエレオノールに引つ叩かれたのをゆっくりと認識した。

痛む頬を手で覆いながら視線を戻したルイズの目に写ったのは、ボロボロと涙を流しながら唇を噛み締めているエレオノールの顔だった。

「あんたに……あんたなんかは何がわかるのよ！」

涙で震える声で叫びながらルイズの胸ぐらを掴んだエレオノールは、コツリと額を重ねてルイズの瞳を見つめた。

「家名なんかどうでも良いわよ！ 魔法が使えない事だつてどうだつて良いわよ！ 戦争に参加するのがどういふ事なのか、あんた本当にわかっているの!？」

エレオノールは頬を押さえるルイズの左手の手首を掴むと、グイツと視界の中に掌を入れさせた。

「この手を血に染めるかもしれないのよ!？」 その手で産まれてくる子供を、あんた抱けるの!？ それだけじゃない！ 手足を失うかもしれない！ 子供が産めない身体になるかもしれない！ 死ぬかもしれない！ あんたを失うなんて、耐えられないわよ!？」

初めて見るエレオノールの泣き顔に呆然としていたルイズを、エレオノールは強く抱

き締めた。

初めて感じるエレオノールの感触は温かく、震えていた。

「家名や名譽なんてどうでも良い！ ただ私は、あんたが元気にいてくれればそれで良い！ 大切な妹を死ぬかもしれない場所になんて行かせない！ あんたが居なくなるなんて、考えたくない！ あんたは……私の大切な妹のあんたは、一人しかないのよ！」

人目も気にせず涙を零しながら想いを口にするエレオノールに、ルイズの瞳からは温かい涙が溢れ出した。

自分を一番嫌っていたかと思っていたエレオノール。カトレアが誰よりもエレオノールが自分を大切に想っていると言った言葉が、漸くわかった。

ゆつくりとルイズはエレオノールの背中に手を回して抱き着くと、胸の中で静かに涙を流した。

そんな二人を眺めていたウルフエインは幸せそうに笑ってから、桐生に身体を向けて拳を鳴らした。

「悪いな、カズマ。意地でもお前に勝たなきゃならなくなった。例え、お前を殺してでも」

黄土色の光が更にウルフエインの身体から迸り出すと、桐生も二人からウルフエイン



に顔を向けて首を振った。

「あんたがルイズをどれだけ大事にしているのか、エレオノールがルイズをどれだけ想っているのかがわかったのは良かったと思っっている。俺があんたの立場なら、きつと同じ様に思っただろう」

桐生は深呼吸をしながら身体を伸ばし、青かった光が赤色に変わった瞬間、ジャケツトの襟元へと手を掛けた。

「だからこそ、ルイズの想いを譲る訳には行かない。あんたが俺を殺す気で来る覚悟があるって言うなら……俺はそれに、俺なりのやり方で応えるだけだ！」

勢い良く脱ぎ捨てられたジャケツトとシャツが地面へと散り応龍の刺青を晒す桐生に、ルイズ以外のラ・ヴァリエール家の一同が驚きを表しながらその見た事のない龍の姿に目を奪われ、ウルフェインの口元には笑みが増していった。

「ドラゴンのタトウーか。本来なら狼がドラゴンに勝てる訳がねえ。けどよお……大事な人間の為に平気で地べたあ這いずり回れる狼は、手強いと思うぜ？」

「そうだな。だが、俺も負ける訳にはいかないんだ。主人の命だけじゃなく、「想い」も守る。それが、使い魔である俺の役目だ」

互いに自然と構えを取り合い、呼吸を整えて行く二人。

静かに張り詰めて行く緊張の中、燭台の蝋燭から溶け落ちた蝋がポタリと地面に零れ

た。

その音を合図に、桐生とウルフェインは駆け出した。

互い譲れぬ、「想い」を拳に乗せて。

「うおおおおおっ！」

雄叫びを上げながら相手の顔面目掛けて繰り出した拳をギリギリの距離で避け合い、上腕同士が強く重なる。

弾かれた様にどちらからともなく距離を取ると、ウルフェインが右からのハイキックを繰り出す。

桐生はその蹴りを受け止めるのと同時に、ウルフェインの右脇腹にボディーブローを打ち付ける。

痛みから前屈みになったウルフェインはそのまま前に一歩強く踏み込み、桐生の顎を頭突きで打ち上げる。

衝撃に声を漏らしながら一歩下がるも、桐生は踏ん張ってウルフェインの肩を左手で掴み、顔に右肘のエルボーを当て、再び右のボディーブローを浴びせた後、思い切り顔を殴り飛ばした。

地面へと倒れたウルフェインに追い討ちを掛けようと近付くも、身体を捻りながらカポエラの要領で繰り出された蹴りを腹に受けて桐生も尻餅をつく。

一步も譲らない攻撃が互いの体力を奪う中、先に立ち上がったウルフェインが止めとばかりに全身全霊の力を込めた右ストリートを繰り出した。

何とか立ち上がった桐生はその拳をギリギリまで引き付けた瞬間、身体を横にずらしてウルフェインの腹には膝蹴り、背中には組んだ拳による交差法による攻撃を繰り出す。

古牧流体術、「受け流し」。相手の攻撃を交わしつつ強烈な交差法による攻撃で動きを封じる必殺技だ。

鋭い痛みにより腹を抱えながら呼吸が出来ずに固まるウルフェインに、桐生は身体から赤い光を迸らせながら飛び上がり、鋭い飛び蹴りを顔面に打ち込んだ。

身体が激しく地面へと叩き付けられた瞬間、ウルフェインは一瞬焔に包まれた龍の様な物が見えた錯覚を覚えた。

古牧流体術究極奥義、「王龍の極み」。「受け流し」からの連携で繰り出される、古牧流体術の開祖である古牧宗左衛門が晩年に編み出したと言われている必殺奥義である。

ウルフェインは何とか身体を起ここそうとするも、痛みから起き上がる事が出来ず、黄土色の光も消えてしまった。

「くっ……そ……俺の……負け、だ……！」

痛みに喘ぎながら漏らすウルフェインに、桐生も身体から赤い光が消えてその場に膝

をつく。

ルイズとエレオノール、カトレアが不安そうに見つめる中、二人の様子を眺めていた公爵がジェロームに視線を向けた。

「馬車を用意しろ。四人乗りの、質素な物で良い。魔法学園から来たメイドも出発出来る様に支度させろ。見送りには誰も出さなくて良い」

脇に立つジェロームにそう伝えて先に階段を上らせた公爵は椅子から立ち上がり、桐生とルイズに交互に視線を向けてから深く溜め息を漏らし口を開いた。

「約束だ。ルイズの戦争への参加を許可する」

「お父様！」

エレオノールが抗議の声を上げるも、公爵は首を振って見せた。

「儂等貴族は、約束は必ず守らなければならぬ。それが貴族の、人としての務めだ。この男はウルフェインに勝利した。ならば儂等にルイズの戦争への参加を拒否する資格はない」

公爵の言葉にエレオノールはルイズを悲しげな瞳で見つめてから、力なく首を垂れた。

公爵が夫人に目配せすると、夫人は頷いて腰に差していた杖を振るつた。瞬間、「レビテーション」の魔法によって横たわったウルフェインの身体が浮かび上がる。

「ウルフェイン……ごめんなさい」

浮かび上がったウルフェインに駆け寄ったルイズが申し訳なさそうに謝罪する。

ウルフェインはそんなルイズに手を伸ばし、頭を優しく撫でて首を振った。

「ルイズ様……貴女はもう、立派なレディだ。自分の道を歩んで下さい。そして、忘れて下さい。貴女を心から心配し、常に想っているご家族がいる事を。貴女は、愛されているという事を」

ウルフェインの手を掴んで包み込む様に握り締めながら、ルイズは何度も頷いた。

そんなルイズに安堵した様にウルフェインが手を引くと、今度は傍らで自分を見つめていた夫人へと視線を向ける。

「申し訳ありません、奥様。私はルイズ様を守りませんでした。どんな罰でも受ける覚悟は出来ています。なんなりと、罰をお与え下さい」

申し訳なさそうに言うウルフェインに、夫人は首を振って微笑んだ。

「本当に申し訳ないと思っているのなら、早く傷を癒しなさい。私達と、貴方の娘はルイズだけではないのですよ？」

夫人の言葉にウルフェインは一瞬息をするのも忘れた様に言葉を詰まらせ、必死に嗚咽を漏らすまいと身体を震わせながらその瞳から涙を流した。

ウルフェインの涙を見て見ぬ振りをして、夫人はカトレアと共にウルフェインの身体

を押しながら会場から出て行った。

ルイズはそんなウルフェインを見送った後、脱ぎ捨てられた桐生のシャツとジャケットを拾って、桐生に駆け寄る。

ルイズからジャケットとシャツを受け取った桐生がそれを着込むのを見届け、公爵が杖で地面を軽く叩いて二人の意識を此方に向けさせる。

振り返った桐生に公爵は乱暴にデルフリンガーを投げ渡し、出口へと向かって歩き出すと階段の手前で足を止めた。

「キリュウ、カズマ……だったな」

背を向けたまま言う公爵に、デルフリンガーを腰に括り付けていた桐生はその手を止めて小さく頷いた。

公爵は暫くそのままジツとした後、顔を少しだけ二人へと向けた。

「ルイズを……娘を、頼む」

短くそれだけ言うと、公爵は階段を上がって行った。

残ったエレオノールは俯いたままツカツカと桐生へと近付くと、顔を上げた瞬間桐生の顔に鋭い平手打ちを浴びせた。

避ける事もなくその平手打ちを受けた桐生に、エレオノールは涙が浮かんだ瞳で睨み付けながらシャツの胸ぐらを強く掴んで顔を近付ける。

「ルイズにもしもなんかあったら……あんた、殺すからね！」

吐き捨てる様に言つて乱暴にシャツから手を離したエレオノールは二人に背を向けると駆け出し、階段を上がつて行つた。

叩かれた頬を撫でた後、桐生はエレオノールの後を追う様に階段へ視線を向けるルイズの頭を優しく撫でた。

「お前は幸せ者だな、ルイズ。お前が思っている以上に、家族はお前の事を想つてくれているぞ」

「……私、知らなかった」

桐生の言葉に、ルイズがポツリと漏らした。

「ウルフェインがあんな風に考えていたなんて。エレオノール姉様が私の事をあんな風に想つていてくれてたなんて。私……私……！」

身体を震わせながらポツポツと溢れてきた涙がルイズの足元の地面を濡らしていく。

桐生はそつとルイズを抱き寄せると、ルイズは桐生にしがみ付いて大声で泣き出した。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ うわああああああん！」

繰り返し謝罪の言葉を口にしながら、ルイズは泣き続けた。それは自分が気付けなかつた家族の想いに対してか、それともその想いを知りつつ戦争に参加する事への謝罪

か。

ルイズ自身にも、それは分からなかった。

ひとしきり泣いて落ち着いたルイズと共にラ・ヴァリエール家の玄関に出ると、既に太陽は天高くへと昇って正午へと時刻が変わっていた。

だだっ広い玄関の前で質素な形の馬車と、その横にシエスタが待つていた。

辺りには他には誰も見当たらない。公爵の言っていた通り、見送りの者は誰もいないらしい。

「カズマさん、ミス・ヴァリエール、お待ちしていました。……ミス・ヴァリエール？大丈夫ですか？」

屋敷から出て来た二人を出迎えたシエスタがルイズの泣きはらんだ目に気付いて心配そうに声をかける。

ルイズはそんなシエスタに苦笑を浮かべながら頷いた。

「大丈夫よ。さあ、出発しましょう」

ルイズの事が心配だが、そう言われては何も言えずシエスタは馬車の扉の横に控える様に立った。

御者台にはゴーレムが乗っており、運転はまた自動で行なってくれるらしい。



桐生もシエスタと向かいの扉の横に立つと、ルイズは一步馬車へと近付いて振り返り、屋敷を見上げた。

もう二度と戻つて来れないかもしれない。両親や姉達、ウルフェインを含む使用人達とも二度と会えないかもしれない。

自分を押し潰さんとばかりにのし掛かつて来る不安を消し去ろうと、ルイズは瞳を閉じた。

自分の道を歩んで行く覚悟を改めて決め、瞳を開いたルイズの瞳には強い光が宿つていた。

「……行つて来ます」

小さくそう呟き、馬車へと向かつてルイズは歩き出した。

必ず生きてこの屋敷に帰つて来ると、心に誓いを立てて。

## 第43話

ルイズ達が帰省した翌日、ギーシュは首都トリスタニアの中ほどにあるシャン・ド・マルスの練兵場に到着していた。

二ヶ月間の即席な訓練を終えたギーシュは教練士官に書いてもらった紹介状を元に、自分が所属する事になった王軍所属のド・ヴィヌイーユ独立大隊の元へと来ていた。聞いた事のない部隊だったが、ギーシュは初陣に張り切っていた。

トリステインの軍隊は大きく分けて三つある。時の王を直接の最高司令長官とする「王軍」。各地の大貴族達が領地の民を徴兵して編成する「国軍」または「諸侯軍」。そして空や海に浮かぶ軍艦を指揮する「空海軍」だ。ギーシュはこの中の「王軍」に配属されたのである。

「命を惜しむな、名を惜しめ」を家訓にしている王軍の元帥職に着いている父はその年齢から此度の戦争に参加出来ない事を心から悔やんでいた。

ギーシュの上にいる三人の兄も、此度の戦争に参加している。一番上の兄はグラモン家の軍隊を預かり、二番目の兄は空軍の艦長だ。三番目の兄は王軍士官である。

そして自分は王軍のド・ヴィヌイーユ独立大隊預かりの士官として参戦する事となっ

ていた。

シャン・ド・マルスの練兵場は様々な大隊でごった返しになっており、肝心の自分の配属先の大隊が中々見つからず彷徨い歩くギーシュ。そんな中、明らかに雰囲気、もといガラが悪い男達とやる気の無さそうな年寄りばかりが寄せ集まった大隊を見つけて小さく苦笑した。

あんな所に配属された奴は、さぞかし運の悪い奴なんだろう。

そんな風に思いながら中々見つからない自分の配属先に、ギーシュは仕方なく近くの兵士に場所を尋ねた。

兵士が指差した方へと安堵と感謝を込めながら顔を向けた瞬間、ギーシュの表情は絶望に染まる。

兵士が指差した場所……それは正しく先ほどのガラの悪い男達と年寄りしか居ない大隊であった。

まるで悪夢を見ているようにフラつきながらその大隊に近付き、地面に座り込んでいた老傭兵に尋ねた所、正しくここがド・ヴィヌイーユ独立大隊だとの事だ。

独立と言えば格好は良いが、要は他の隊では扱えない役立たず共が集まったカス大隊であった。

老傭兵に今日から配属である事を伝えると、面倒臭そうに大隊長の元へと案内され

た。

そこでギーシユの表情は再び絶望に染まる事となった。

案内された先にいたのは白髪が目立つ、杖を支えに立っている老人だった。その隣には丸々と太った若い貴族が「参謀記章」を肩に掛けて控えている。

大隊長ド・ヴィヌイーユは矢や鉄砲等使わず、後ろからわつと声を掛けただけで心臓が止まってしまふのではないかと思われるほど弱々しく見えた。

とにかくとギーシユは紹介状をド・ヴィヌイーユに渡しながら挨拶を試みるも、どうやら相当耳と目が悪いらしい。此方の言っている事には全く答えられてないし、紹介状には目が羊皮紙にくっついてしまふのでは無いかと思うほどに顔を近づけて見ている。

大隊長の横から紹介状を見た大隊参謀が何やら小声で耳打ちをすると、大隊長は何度も頷いた。

「せ、せ、せいれーっ！」

しやがれた声で大隊長が叫ぶと、気怠そうな動きで男達が集まって来た。

「し、新任の中隊長を！　しよしよ、紹介する！」

ん？　中隊長？

ギーシユは一瞬疑問を浮かべるも、大隊参謀が大きく咳払いしてから声を張り上げた。

「えーっ、この度我が栄えあるド・ヴィヌイーユ独立銃歩兵大隊に配属された……えー……おい、名前！」

「ぎ、ギーシュ・ド・グラモンであります！」

突然怒鳴られギーシュは身体をピンツと張らせながら大声で叫んだ。しかし、男達の反応からすると聞いていない様だ。

「そ、そのグラウンデル君とやらには第二ちゆ、中隊を任しえる！ 従つて第二中隊は、は、「グラウンデル中隊」と呼称する！ 中隊長にけ、けけけ、けいれーい！」

時折噛みながら懸命に叫ぶ大隊長の声に、男達がやる気のない動きで敬礼する。

ギーシュはサーツと身体から血の気が抜けていくのを感じた。名前を間違えられている上にいきなり中隊長等、有り得ない配属だ。

「だ、大隊長殿！ 僕は学生士官ですよ！ いきなり中隊長なんて、無理に決まっているじゃないですか！」

中隊長ともなれば百人近くの兵隊を指揮する事もある。いきなりの配属には無理があるとギーシュは訴えた。

大隊長はそんなギーシュの肩を、プルプル震える手で叩いた。

「じゃえ、じゃえん任の中隊長が今朝、脱走しおつてな。後任をさ、探しておつたのだ」

「だ、脱走!? いや、先任士官がいるでしょうが！」

ギーシユの口答えに大隊長は疲れたのか、背を向けて歩き出すと椅子に腰掛けてポーツと空を眺めた。

ポカンとした表情でそんな大隊長を見詰めるギーシユに、大隊参謀が肩を叩いた。

「この隊は脱走した者以外、大隊長殿と私、それから各中隊長しか貴族は居らんのだよつて君が適任という訳だ。まあ、宜しく頼むよ、グランデル君」

大隊参謀はそれだけ言うと言書類の提出があるからと何処かへ行つてしまった。

その後大隊参謀の部下と名乗る初老の傭兵がギーシユに部隊の説明を始めた。

ド・ヴィヌイーユ独立銃歩兵大隊は鉄砲隊で人数は三百五十人ほど。それが三つの中隊に別れ、内二つが鉄砲中隊、もう一つが援護や護衛の短槍中隊との事だ。ギーシユが中隊長となつたのは鉄砲中隊の一つであつた。使う銃は旧式の火縄銃で、新式のマスケット銃は見られない。

そもそもギーシユは鉄砲の教育は受けていない。二ヶ月の即席訓練の為仕方がないが、それでもどんな部隊に配属となるかは事前に教えてくれても良さそうだが。傭兵も雇いながらの徴兵は酷いと思つていたが、予想以上だつた。

ギーシユは憂鬱になりながらも、中隊長になる事を受け入れた。決まつてしまつた物はしようがないと必死に自分に言い聞かせた。

そんなギーシユの憂鬱さに拍車を掛けるように、初老の傭兵が席を外した瞬間、ギー

シユを取り囲む様に部隊員達が集まつて来た。

名前を間違えられて紹介をされて気が滅入りそうになつたギーシユだが、溜め息を漏らしながら此方をジロジロと見て来る自分の部下となつた男達に問い掛ける。

「挨拶はもう済んだ筈なんだけど……何の用だい？」

ギーシユの質問に男達は答えず、ただ腕を組みながらギーシユを値踏みする様に眺めていた。

暫くの沈黙の後、男の一人が口を開いた。

「グランデル中隊長さんよ、勘違いされちゃ困るから先に言つとくぜ。ここに居る全員、誰一人としてあんたを俺等の隊長だなんて認めちやいねえんだよ」

一人が発した言葉に呼応する様に口笛や野次が飛び交う。

ギーシユは頭を掻きながら面倒臭そうに首を傾げて見せた。

「いきなりやつて来て俺等の隊長だあ？ しかも大して強そうにも見えねえ御坊ちやまがよお……冗談じゃねえんだよ」

吐き捨てる様にまた一人が口にした瞬間、ズイツと二人の男がギーシユに詰め寄つた。

どちらも体格が良く、少なからずとも荒事が得意な戦士を沸騰させる風格があつた。年もギーシユよりも十数は上の様だ。

「兵隊が足りねえからって、あんた等みたいなおのぼりさんが来られちゃあ困るんだよ。大して使えもしねえ飾りだけの隊長としての隅っこにでも引っ込んでろや。どうせ魔法が使

「分かったら、精々形だけの隊長として隅っこにでも引っ込んでろや。どうせ魔法が使えるだけで他には何にも出来ねえんだろ？ 御坊ちやまはよ」

本来街の中で貴族相手にこんな暴言を吐いたら死罪物である。しかし、ここは明日命があるかもわからない、戦場なのだ。通常のルール等役に立ちほしくない。

黙ったまま二人を見上げるギーシユに怯えていると感じたのか、周りから小馬鹿にした様な笑い声が上がった。

ギーシユは笑い声を受けながら思った。脱走した前中隊長は、恐らくこのプレツシャーに負けたのだろう。誰も自分を味方と思っていない、戦場の中で背中を誰にも任せられない孤独に。

ギーシユは笑い続けてる男達を見回してから、小さく溜め息を漏らして口を開いた。「つまり、実力があれば僕を隊長と認める……って事でいいんだね？ 君達よりも遙かに歳下である僕でも」

その言葉に、周りから上がっていた笑い声は一瞬でピタリと止まり、代わりに幾つもの訝しげな視線がギーシユの身体を貫いた。

「自分が使えるのは魔法だけじゃねえ……と言いたいのかい、御坊ちやま？」



「どうかかな? ただ僕も、笑われていて黙っていられるほど……優等生ではないんでね」  
静かだが、怒りが含まれたギーシユの声に男達はそれぞれ顔を見合わせてから少しだけ後退り、僅かな広さを確保した所で三人の男達が前に出て来た。

二人は先ほどギーシユに詰め寄った男達。そしてもう一人は左眼に眼帯を掛けた、顔中が傷だらけの男だ。

眼帯を掛けた男は拳を鳴らしながら下卑た笑みを浮かべてギーシユを見た後、他の二人と顔を合わせて頷き合ってから口を開いた。

「だったら俺等三人の相手をして貰おうか。心配しなくても一人ずつサシでやってやる。俺等に勝てたら、あんたを隊長として認めてやるよ。雑用だろうがパシリだろうが、好きに使ってくれや」

余裕を感じさせる物言いをする眼帯の男に、ギーシユは小さく頷くと胸元に差ししてある杖代わりの薔薇の造花を投げ捨てた。

ギーシユはその場で屈伸運動を数回行ってから深い深呼吸をし、小さくトントンと飛んでから両手に拳を作り、胸元に腕を上げて構えを取って見せた。

「……来い」

そう呟いた瞬間、ギーシユの目付きが変わったのを三人は見逃さなかった。が、特別警戒する事もなく、まずはギーシユに詰め寄った二人組の一人、髭面の男が前に出て腕

を回して見せた。

「普段偉そうにしていらつしやる貴族様をぶつ飛ばせるたあ、戦場で生きんのも捨てたもんじゃねえな」

口元に笑みを浮かべながら髭面の男はジリジリとギーシュに近づいていき、お互いに拳が届きそうになった所で身体を軽く揺らしてギーシュを挑発し始めた。

「殴られてるのは慣れてるか、御坊ちやま？ 言つとくが誰かに殴られるのは思った以上に痛えぞお？ 俺の拳が当たったからつて泣く様なみつともねえ真似はー」

「いつまで無駄口を叩いてるんだ？」

まるで子供に言い聞かせる様に話す髭面の男の声を遮る様に言うギーシュに、男の顔から笑みが消えた。

苛ついた様に眉を歪めながらギーシュは上体を揺らすと、鋭い目付きで髭面の男を睨み付けた。

「来ないんだつたら……こつちから行くぞおっ！」

叫んだのと同時にギーシュは大きく一步を染み込んで髭面の男に近付くと、そのまま素早い左ジャブから右ストレートを顔面に叩き込んだ。

突然の衝撃に髭面の男の顔が揺れたかと思つた瞬間、鋭い左の回し蹴りが男の右頬を穿ち大きな身体を地面へと転がせた。

周りからどよめきが上がると今度はギーシュに詰め寄ったもう一人の男、バンダナを頭に巻いた男が前に出てギーシュに殴り掛かる。

ギーシュはバンダナの男の拳をステップでギリギリ躲しながら動き回る。

ちよこまか動く細かいギーシュの動きに翻弄され、バンダナの男の表情に苛立ちの色が浮かび上がって来た。

その顔色を良く見ながら、ギーシュは懸命に男の拳を躲し続けた。苛立ちは思考を鈍くさせ、焦りから動きが大振りになるのをこの二カ月の訓練で学んで来た。勝負は時として、持久戦に持ち込むのも作戦の内なのである。

「こんの……ちよこまかしやがってー」

バンダナの男の動きが徐々に大振りになって来た。

ギーシュは上がる息を懸命に抑え続け、自分の顔面目掛けて打ち込んで来たバンダナの男の拳を上体を反らせて何とか避ける。

瞬間、バンダナの男に素早く一歩近寄ると同時に右の拳を鼻っ面に打ち込んだ。

痛みから鼻を押さえ、鼻血を地面へと零しながら膝をつく男の頭を掴むと、勢いを付けて更に膝蹴りを鼻っ面に叩き付けるギーシュ。

声を上げ、鼻血を噴き出しながら後ろに倒れ込む男を見送ると、額から顎に伝う汗を腕で拭いながら早まる呼吸を小さく漏らして最後の一人に視線を向ける。

眼帯の男は倒れた二人を尻目にギーシュと同じ様な構えを取ると、素早いステップで一氣に間合いを詰めて来た。

大柄な体格からは想像出来ない動きに戸惑い、思わず動きにキレが無くなったギーシュ目掛けて拳を振るう眼帯の男。

ギーシュは腕で拳を受け止めるも衝撃の強さから一撃で弾かれてしまい、ビリビリと痛みが走る腕に氣を取られる間も無く眼帯の男の拳が深くギーシュの腹へと叩き込まれる。

痛みと衝撃に顔を歪めたギーシュの服の胸ぐらを掴んで、眼帯の男は前屈みになっている身体を無造作に地面へ投げ付けた。

地面を転がりながら土煙を上げるギーシュを見下した後、眼帯の男が腕を高々と上げると周りから歓声が湧き上がる。

歓声と口笛が響く中、ギーシュは腹を押さえながら痛みを無くそうと悶え苦しんでいた。

眼帯の男がギーシュに近付いて労いの言葉の一つでも掛けてやろうと思った瞬間に不意にその足が止まる。

顔を歪めながらもまだ諦めていないのを示す様な瞳を向けているギーシュの身体から、淡い水色の光の様な物が迸った様に眼帯の男には見えたのだ。

その光は一瞬だった為、何度も確認する様に目を細めながらギーシュを見る男。しかし、それらしい光は見えない。

気のせいかと思っている内に、ギーシュが立ち上がった。

呼吸を荒げながら腹を押さえていた手を再び胸元まで上げて構えを取る。

「貴族の御坊ちやまにしちやあ、中々根性があるじゃねえか。気に入つたぜ。どうせなら徹底的にやろうや」

眼帯の男も構えを取りながら笑みを浮かべると、再びギーシュに殴り掛かった。

ギーシュは真剣な眼差しで男の動きを見詰めて何とか拳を避ける。もう一撃でも食らってしまえば、立てない気がしてならない為必死に避ける。

しかし、避けてるだけでは勝てる訳がない。ギーシュはギリギリ拳をステップで躲しながら時折男の腹にボディブローを打ち付けた。

最初はギーシュの拳等モノともしてなかった男だったが、そのボディブローも二発、三発、四発……と繰り返して受けて行く度に表情が歪み、動きが鈍くなって来た。

次第に男の動きが鈍くなって行き、打ち出される拳に鋭さが無くなって来た所で、拳を掻い潜ったギーシュの左アッパーが男の顎を捉えた。

顎を打ち上げられ、衝撃から脳が揺れたのか、男はよろめきながらその場に立ち尽くしてしまう。

それを好機と見たギーシユは飛び上がり、男を見据えながら拳を強く握り締めた。その瞬間、周りで眺めていた男達は確かに見た。ギーシユの身体から迸る淡い水色の光を。

「寝てろおっ！」

可能な限りの全体重を乗せた空中からの打ち下ろしの右が男の頭に打ち込まれ、男は顔面から地面に叩きつけられた。

ギーシユは呼吸を荒げながら膝に手をつけて身体を揺らす。男達が見た淡い水色の光はもう見えない。

決着のついたギーシユと男達を眺めてポカンとした様に呆けた顔の面々からは沈黙が漂った。

漸く呼吸を落ち着かせられたギーシユは身体を起こして投げ捨てた薔薇の造花を拾い上げ、土煙に汚れた頬を手の甲で拭いながら周りの男達を睨み付けた。

「貴様等あつ！」

ギーシユの怒鳴り声に、周りの男達の身体が一瞬ビクツと跳ねる。

ギーシユは隅々まで男達を睨み付けてから、親指を立てて自分を指差した。

「見ての通り、僕はこの三人に勝った！ 約束通り今から、貴様等は僕の部下だ！ 僕の命令は絶対だ！ それともう一つ！ 大隊長殿は間違えて言ったが、僕の名はギー

シユ・ド・グラモンだ！ グランデルじゃない！ よって僕等第二中隊は、「グラモン中隊」と呼称する！ 文句がある奴は今すぐ前に出ろ！ サシなら幾らでも相手になつてやる！」

ギーシユの怒鳴りに男達は互いに顔を見合わせてから、黙つて参列に並ぶと敬礼をして見せた。ギーシユを自分達の隊長として認めたとのである。

「も、文句なんかあるはずがねえ……！」

不意に聞こえた声にギーシユが顔を向けると、眼帯の男が鼻血を指で拭いながら身体を起こしていた。他の二人も痛みからか顔を歪めながらもなんとか立ち上がっている。

「あんたは、そこらの口だけの貴族とは違う。あんたを、隊長と認めますぜ。宜しくお願ひします、グラモン隊長」

三人が胸元に左腕を添えながら跪き首を垂れると、他の男達も同じ様に跪き首を垂れた。

ギーシユはそんな男達を見回してから胸を張つて腕を組んだ。

「貴様等の命、僕が預からせて貰う。早速で悪いが、僕は用を足して来る。各自いつでも動ける様に準備を整えておけ！ 良いな!？」

「「サーッ！」」

掛け声に応える男達の声に頷くと、ギーシユは威風堂々とした足取りでトイレへと向

かった。

練兵場のトイレの個室に入り、数回深呼吸しながら目の前の便器を眺めていたギョシユは、力無く膝をついて便座に手を添えようと便器の中へと嘔吐した。

「うっ！……がつ……はっ……！」

食道を逆流して来る今朝の朝食と胃液を便器の中へ次々と吐き出しながら喘ぐ。

舐められない様にと虚勢を張っていたが、恐怖と緊張が限界を迎えて身体が反応してしまつたのだ。威風堂々と歩いては見せていた物の、このトイレに着くまでもかなりの労力を要するほどに気が滅入ってしまった。

訓練とは違う、初めての殴り合いによる喧嘩。桐生に啖呵を切つて殴り掛かつた時とは訳が違う。殴られるかもしれないという不安、痛みに対する恐怖、訓練で痛みになんかは慣れたつもりでいたが、まだまだ甘かつたのを思い知らされた。

同時に中隊長としての立場にも不安が一杯だった。先ほどは格好を付けて言つたが、本当に彼等の命を預かるのだ。自分の命令、判断一つで、彼等を何人も殺してしまうかもしれないのだ。

胃の中が空っぽになり、胃や食道が痙攣している様な感覚を覚えながら、ギョシユは便座から手を離して力無く壁に凭もたれて必死に呼吸を整えた。

しかし、先ほどの喧嘩で確信した事もあつた。



二ヶ月の訓練中、ギーシュは訓練メニューとは別に教練士官に頼んでトレーニングを続けていた。

体育会系の人間は後輩から扱しきを求められると断れない性質らしい。どんなに疲れていようがダルそうだろうが、ギーシュのスパリング等の訓練に付き合ってくれた。

その中で、ギーシュは徐々に自分のスタイルが作り上げられているのを実感していた。桐生から教わった「ラッシュスタイル」を基本により速く、より重く、より鋭く拳や蹴りを繰り出せる様に工夫を凝らして行つた。

そして先ほどの喧嘩で、そのスタイルを完成させられたのを感じたのだ。

自分だけのオリジナリティを含んだ「ラッシュスタイル」。言うなれば、「グラモン流ラッシュスタイル」である。変幻自在の拳と蹴りは従来のスタイルを引き継ぎながらも、書物の知識や独自の発想を織り交ぜた乱打と重い一撃を秘めたスタイルだ。

ギーシュは拳を握り締めて立ち上がり、個室の外に出ると手洗い様に設置されてる井戸から備え付けの桶で水を組み上げ、数回口をゆすいだから何度も顔を洗つた。

冷たい水が顔を濡らす度に先ほど味わつた痛みを思い出す。その痛みを忘れず、かと言つて恐れずにこの戦場を生き抜こうと誓つた。

ポタポタと前髪や顎から浴びた水の雫が零れ落ちるのを感じながら大分少なくなつた桶の中の水を眺めていると、不意に視界の端から白いタオルが入ってきた。

顔を向けると、自分の父親ほどに歳の離れた中年の男がタオルを差し出していた。鉄の兜を被り、厚革に鉄の胸当てが着いた上着を羽織っているその男は自分に跪いた男達とは何処か違つて見えた。背負われている銃身の切り詰められた火縄銃、腰に差されている短剣、日焼けした肌と兜から覗く顔の傷は桐生同様の歴戦の猛者をイメージさせた。

「お見事でした、中隊長殿」

ニツと気持ちの良い笑顔を浮かべる男に、ギーシュはぎこちなく笑いながら素直にタオルを受け取つて顔を拭いた。

「失礼だが、君は？」

「申し遅れました。自分は中隊付軍曹のニコラと言います。自分は副官の真似事等をやらせて貰つてました」

真似事。その言葉からは謙遜の意を感じた。前任の中隊長の代わりにこの男がずっと隊を指揮していたのだろう。

「前任者は君の様な優秀な副官が居たのに逃げたりしたのか。情けない話だ」

「まあ、仕方ありませんや。グラモン中隊長殿も見ての通り、うちの隊は問題児ばかりですからねえ。初日に凄まれて泣きが入つてましたから」

顔を拭つたタオルを首に掛けてため息混じりに言うギーシュに、ニコラは頬を掻きな

がら苦笑して見せた。

「うちの隊にいる人間はみんな街では暴れるしか能の無い、スラム街や裏路地出身が多いんですわ。だから自分達をゴミの様に扱った貴族の方々を憎んでいるんです。正直、今回中隊長に任命されたグラモン殿を見てまた逃げ出しちまうかと思いましたが」

率直な意見を述べるニコラにギーシユは何故か好感を感じて同じ様な苦笑を浮かべた。

そこで少し間を置いたニコラは真顔になってギーシユを見詰めると、再び口を開いた。

「ですがグラモン殿はあの三人に勝った。あいつ等はこの隊の中でも一際喧嘩っ早いタイプでしてね。相手が気に入らなきや誰彼構わず喧嘩を売っちゃまう。魔法を使わずに戦って、その歳であれだけの拳法を扱えるのは大したもんですよ。見た所、まだ書生さんくらいとお見受けしますが……実家で拳法家でもお雇いで？」

興味半分といった様子で問い掛けてくるニコラに、ギーシユは首を振ってから顔を背けて遠くを見る様に目を細めた。

「僕の、師匠とも言える友人が教えてくれた拳法を真似しただけだよ。まだまだあの人は遠く及ばないけどね。戦い方も、人としても……」

二ヶ月前、訓練に参加する事となって遠征したギーシユはずっと桐生に会っていない

い。しかし、ギーシュの中で浮かぶ桐生の像は何時までも変わらない。強さと優しさを秘めたあの瞳に、自分は少しでも近付けて居るのだろうか。

そんなギーシュを眺めていたニコラが不意に小さく笑い出した。

突然笑われた事で訝しげな表情で自分を見るギーシュに、ニコラは小さく首を振った。

「失礼しました。いや、貴族の方でもそんな目をするんだなと思ひまして」

「そんな目?」

「誰かを心から尊敬し、想う目。自分もかつて、自分を育ててくれた隊の人達を想った時は、今のグラモン殿と同じ目をしていたもんですよ。とても温かい、良い目だ。貴族の方が誰かをそこまで尊敬するんなんで、中々聞いた事が有りませんので」

ニコラの言葉に、今度はギーシュが小さく笑った。

桐生と接し、自分と同じ貴族の人間よりも遥かに尊敬し、憧れた彼は平民だ。平民と貴族。その違いなど細やかな物でしかないのを、ギーシュは最近感じていた。

平民だろうと貴族だろうと、悲しければ泣き、嬉しければ笑い、腹が立てば怒る。誰だつてする事であるし、それが人間と言うものだ。

「買ひ被り過ぎだよ。貴族だつて誰かを尊敬したり、憧れたりするものさ。それに、僕だつて君達とは変わらない。ただ貴族という恵まれた環境の元に生まれた、甘ったれの

クソ餓鬼さ」

初めて桐生に会った時に言われた一言をギーシュは思い出していった。

生意気な平民だとか桐生を見なかったあの頃の自分を思えば、桐生の言葉は的を射ていた。弱い者にしか威張れない、文字通りの甘ったれだ。

ギーシュの言葉にニコラは少し驚いた表情を浮かべたが、すぐさま気持ちの良い笑顔に変わるとギーシュの背中を軽く叩いた。

「だったら、自分達がそんなクソ餓鬼を守りますよ。どっしりと構えていてください。あんたはもう、ただのクソ餓鬼ではいられないんですから。よろしく願いしますよ、グラモン中隊長殿」

ニコラの言葉にギーシュが強く頷いたその時、遠くでラツパが鳴った。

今から始まるアルビオン遠征軍総司令官、オリビエ・ド・ポワチエ將軍の訓示の知らせである。將軍の閲兵を受けた後にこの練兵場に集まった軍はラ・ロシエールに向けて出発し、そこで船に乗り込んで空路でアルビオン大陸を目指すのだ。

「さあ、行きましようか、中隊長殿。我等「グラモン中隊」の初陣です」

ギーシュは力強く頷くと、トイレから出て自分の中隊の待つ場所へと歩いた。

ニコラはギーシュの後ろを歩きながら目の前の背中を見詰めた。

百数人の命を背負う事になった、少年から男へと成長し始めたその背中には、心なしか

大きく見えた。

## 第44話

年末のウインの月の第一週、マンの曜日。

二つの月が重なる日の翌日であるこの日は、アルビオンがハルケギニア大陸に最も近く日でもある。

ラ・ロシエールの港からトリスタニアとゲルマニア連合軍六万の兵を乗せた大小五百隻の艦隊がもやいを解かれ、アルビオン侵攻に向けて一斉に空へと浮かび上がった。

女王アンリエッタと枢機卿マザリーニはラ・ロシエールの港の世界樹栈橋の頂点から出航する艦隊を見送った。

艦隊に着けられた、青地に白の百合模様のトリステイン王家の旗が風にはためている。

「負けられませんか」

飛び立つ艦隊を眺めながらマザリーニが呟く。

「負けるつもりはありません」

マザリーニの呟きにアンリエッタは表情を変えずに答えた。

今回の大戦の切り札である「虚無」……ルイズの存在はアンリエッタと枢機卿、そし

て王軍の將軍数名のみ。

その將軍の中の一人に託したルイズを想うアンリエッタは瞳を閉じた。

ルイズを託した將軍、ド・ポワチエ將軍は初め「虚無」の存在を信じようとはしなかった。無理もない。「虚無」は伝説の中に消えた系統だ。將軍は存在そのものすら疑わしく思えてならなかった。

しかし、タルブでの戦果を聞いて將軍はやつと納得した。

伝説の系統である「虚無」を手に入れた將軍は勇氣百倍とばかりに勇んで戦艦に乗り込んでいった。

アンリエッタは初戦を勝利で飾る為にも將軍に「虚無」の積極的な使用を命じた。

自分の罪深さにアンリエッタは深い溜め息を漏らした。この戦は国や民の為ではない。私怨を晴らす為の物だ。恋人の……ウエールズの仇討ちの為だ。

その仇討ちの為に、自分は何人の人間を死地へと送ろうとしているのだろう。その中には自分の幼馴染まで含まれている。

愛国を謳い、国の為、民の為に偽り、自身の復讐心を満たす為に人々を戦わせようとしている自分は必ずや地獄へ堕ちるだろうと自覚した。

自責の念が重く押し掛かる中、アンリエッタは唇の端を血が滲むほど強く噛みしめた後に大声で叫んだ。



「ヴィヴラ・トリステイン！」

アンリエッタの万歳の声が空に響く。

艦の上甲板に並んで見送るアンリエッタに向かって敬礼していた将兵達が、アンリエッタに続いて万歳を唱える。

「ヴィヴラ・トリステイン！ ヴィヴラ・アンリエッタ！」

その唱和は六万の将兵の唱和へと変わり、空を圧した。

「ヴィヴラ・トリステイン！ ヴィヴラ・アンリエッタ！」

唱和が響く中、口端から伝う血を親指の腹で拭ったアンリエッタは戦場に向かう将兵達へ視線を向けた。

しかし、その瞳に映るのは将兵達ではなく、未だ姿が見えぬ復讐の相手だった。

艦隊がアルビオンへと向かって飛び立った頃。

魔法学園では己の操る「炎」を何か平和的に利用する為にコルベールが辿り着いたのは、「動力」だった。熱の力を何かを動かす力へ変換するのである。

蒸気を利用して動き出す装置は幾つか作ってはみたが、それでは満足出来なかったコルベールにとってゼロ戦に積まれていた「エンジン」は、彼の「動力」の理想を具現化させた物だった。

コルベールはあらゆる方法でこの「エンジン」の解析を試みてみたが、「エンジン」を、更に言うならコレに近い内焼機関を組み立てるのは現状では不可能な事しかわからなかった。

「エンジン」の製造するに当たつての冶金技術や加工技術は、現代のハルケギニアでは再現は不可能だ。

コルベールは一瞬落ち込みはしたが、それでも彼の情熱は消える事は無かった。「不可能」である事を知る事が出来たのだ。それだけでも彼にとつては大きな収穫だった。

コルベールは研究室前のゼロ戦に視線を向けると、半年前に取り付けた新兵器の更なる改良を加えんと手を着け始めた。

従軍に従い殆どの住人が居なくなつた男子寮は文字通りもぬけの殻になつていた。

メイド達も廊下や階段を掃除するくらいで特に人気のない館に見える。

そんな男子寮に、本来なら女性禁止であるのにも関わらず廊下を歩く女生徒が居た。窓から差し込む日差しがその女生徒の靡く独特な縦ロールの金髪を輝かせる。

目当ての人物の部屋の前に来たその女生徒、モンモランシーは周りに人が居ないのを確認すると腰に差して居た杖を取り出して目の前の扉、ギーシユの部屋の鍵を「アンロック」で解除した。

そつと部屋の中に入ったモンモランシーは眉をひそめた。

ベッドは整っている物の床や机には本が散乱し、床の所々には筋肉トレーニングで使ったであろうダンベルや重りの様な物が転がっている。

モンモランシーは溜め息をつきながら机の上で積み重なってしまった本を取り始めた。

「全く……男の子つてどうしてこう片付けられないのかしら？」

モンモランシーは一人愚痴りながら次々本を取ってはガラガラになっている本棚へとしまつていく。

男子生徒は勿論、男性教師も殆どが戦争に向けて従軍となつた為、授業も所々で自習になったり、自由時間になったりとする事が多くなつた。その為手持ち無沙汰になつたモンモランシーは暇潰しも兼ねてギーシユの部屋を掃除しに来たのだ。

モンモランシーは本を取つてはタイトルに目を走らせた。

「古今東西武術録」、「ガルベード少尉の兵法」、「ヘイスティス流軍人格闘入門」……武術や兵法と言つた、貴族らしからぬチョイスにモンモランシーは頬を掻いた。

「もう……脳味噌まで筋肉に変える気なのかしら？」

逞ましくなつていくギーシユを見るのが嫌な訳ではないが、桐生に近付こうとする余りに勉強を疎かにしているのではとモンモランシーは呆れながら本を本棚へとしまつ

て行く。

そんな作業を数回ほど繰り返した所で、本の内容が変わって来た事にモンモランシーは気付いた。

武術書や兵法の書物の底からは、「鍊金」や「土」系統の魔法に関しての本がどんどん出て来たのである。

モンモランシーは一冊一冊その本を丁寧に本棚にしまつて行き、とうとう片付けが終わつた部屋の中ですうつと息を吸つた。

ギーシュの匂いが、鼻を擽る。今までこんなに彼の存在を意識した事なんて無かつた。部屋の中のギーシュの香りに包まれているだけで彼の近くにいた様な感覚を覚えた。

しかし、ギーシュ本人はもう此処には居ない。

戦場へと出向いてしまつた彼を想いながら、モンモランシーはベッドに倒れ込んだ。

メイドが洗濯したのだろう。洗剤の匂いが鼻腔を満たした。

「無事に帰つて来なきや……許さないから」

一人呟きながら枕に顔を埋めたモンモランシーの手が、シーツをぎゅつと強く握つた。

ゼロ戦の新兵器や機体の調整を終えてお茶を飲んでいたコルベールは、研究室前にやって来た桐生を見て笑顔を浮かべた。

「おお、カズマ殿！ そろそろ出発かね？」

「ああ」

コルベールの言葉に頷く桐生。

研究室前に来た桐生は出陣の準備が整っていた。首にはシエスタの祖父の形見であるゴーグルが下げられ、腰にはデルフリンガーが掛けられている。手には生活用品が入っているズタ袋を持っている。

「しかし大変だなあ。コレで直接フネに向かうのでしょうか？ まあ、向かうのは不可能ではないだろうが、問題は上手くフネに着陸させられるかですなあ」

今朝方、アルビオンへと向けて艦隊は出航した。

ゼロ戦という特殊な機体を搭載する為には艦が航行中である必要があるとの事で、出航を待つてからの出陣を指示された。

今回の戦争に向けて竜騎士を搭載する為の特殊な艦が建造され、それに合わせてゼロ戦専用の艦も建造されたのだ。

新鋭のその艦は「竜母艦」という新しい艦種に分類され、「ヴィセンタール」号と名付けられた。

ゼロ戦の燃料がガソリンである事と、その錬金の材料を知らされた数多くの「土」系のメイジがガソリンを錬金し、五回は飛行できるだけの量を積んである。

後は桐生がルイズを乗せたゼロ戦を操縦して、そのフネに着艦するだけだ。

「今回はメイジが何人も魔法をかけてくれるって話だからな。無事に下ろせるとは思えるんだが」

言いながら桐生はゼロ戦の機体に左手を這わせる。瞬間、手の甲のルーンが輝いた。不意に、桐生はゼロ戦の翼下に何本もの鉄パイプがぶら下がっているのを見た。

訝しげに鉄パイプを眺める桐生にコルベールが苦笑を浮かべた。

「そう言えばお互い色々忙しくて、カズマ殿に新兵器を説明する暇も無かったですな」

「これが……新兵器なのか?」

見た限りではただ鉄パイプが並んでいるだけにしか見えないが、コルベールの事だ。きっと何か機能があるには違いない。しかし、今は説明を聞いていられるほどの時間の余裕もない。

「まあ、詳しくは此方に書いとききましたから。いざという時に読んで下さい」

ゴソゴソとローブの内側を弄ったコルベールは数枚の紙の束が重なり折り曲げられた物を桐生に差し出した。

桐生は頷き、すぐ様その紙を受け取るとジャケットの内ポケットへとしまった。

桐生が紙をしまったのを見送ってから、言おうか言うまいか迷った様にコルベールが口を数回開け閉めした後、絞り出す様に言葉を漏らした。

「本当は……」

「ん？」

「本当は、カズマ殿にこんな武器等使つて欲しくないんです。しかし、これから向かう先は戦場。生き残る為には他者の命を奪つて活路を見い出さなければいけない。そして私は……カズマ殿に誰かを殺めて欲しくない。……わかっています、私の言っている事が矛盾している事は」

苦しげに言葉を紡いだコルベールは自身の顔を拭う様に手を這わせて深い溜め息を漏らす。

そんなコルベールを見ながら、桐生は静かにズタ袋を置いて腕を組んだ。

「……以前、カズマ殿には話しましたな。私は破壊の系統と言われている「火」系統を、破壊以外の物に使える様に研究していると。それが私の、かつて犯した罪への「罪滅ぼし」だと」

「ああ。その為にあんたが此処で様々な発明をしていると」

コルベールは桐生の隣へと歩み寄ると、並んでゼロ戦を眺めた。

陽の光を浴びた機体が鈍い輝きを反射して、並んだ二人の男を写している。

「カズマ殿……貴方は自分の力を恐れた事はありませんか？」

「……どういう意味だ？」

桐生が言葉の意味を問いつけながら顔を向けるも、コルベールの視線はゼロ戦に向けられたまま口を開いた。

「私は「火」の恐ろしさを知っています。人を、家を、大地を焼き、用途を変えれば燃やす以外でも生き物を殺害出来ます。貴方の扱う剣やその拳……それもまた他者を殺め、傷付ける事が出来る物です。貴方は、どうやってその力を正しく使う方法を見出したのですか？ 私には、正直今でも自分の力の使い方が正しいか迷う事があります。現にこの様に、「ひこうき」に兵器を取り付けた訳ですから。私は本当に、正しい事に力を使えるのか、やはり自信がないのです」

桐生へと視線を向けたコルベールの瞳。その瞳からは不安と懇願が籠っているのが見えた。

「ですからお願いです、カズマ殿。行ってしまいう前にどうか教えて下さい。どうすれば、貴方の様に正しく力を使う事が出来ますか？」

コルベールは何時もの優しげな笑みではなく、真剣な表情で桐生を見詰めて黙った。目の前の男が、自分の望む答えをくれるという期待を胸に秘めて。

桐生は暫くそんなコルベールと視線を重ねたまま微動だにしなかつたが、やがてゆっ



くりと首を横に振った。

「俺はあんたが思っているほど出来た人間じゃない。そうだな……まだルイズも来ない様だし、少し俺の話を聞いてくれるか？」

チラリと辺りを見回し、まだ支度が整っていないのか来る気配のないルイズを想いながら、桐生は再びコルベールへと視線を戻した。

コルベールが頷いたのを確認した後、桐生はポケットに手を入れて煙草を取り出すと一本を啜え、そのままコルベールへと差し出した。

煙草はこの世界でも存在はしており、コルベールもそれがどういう物なのかは理解していた。しかし、嗜む方では無かったからか少し遠慮がちに一本を取ると桐生に習って啜える。

桐生はライターで、コルベールは杖の先端で、ポツと小気味良い音を立てて着いた火がそれぞれの煙草の先端を灯す。

桐生は吸い込み、コルベールは吹かしながら紫煙を口から燻らせると、穏やかな風が煙をさらって行った。

「俺が物心着いた時には、両親はもう居なかった」

紫煙を燻らせながら、桐生は遠くを見る様な目で語り始めた。

「孤児院の中で同じ境遇の人間と過ごし、俺達にとって父親とも言える人間に憧れ、俺は

その人と同じ、極道と言う道を選んだ」

「いへどどうぞ」

桐生の口から出た聞き慣れない単語にコルベールが首を傾げた。

「こつちの世界で言うなら、ギャングつて奴か。人様に迷惑を掛けて金を脅し取る様な集団さ。俺は、その組織の一人だった訳だ」

桐生の意外な過去に、コルベールは信じられないと言った表情で桐生を見詰めた。

桐生はそんなコルベールに構わず語り続けた。

「その組織に入る時、父親とも言える人間にぶん殴られたよ。俺の様な半端者が生きるには、優しい世界じゃない事を伝えたかったんだと思う。それでも俺は自分にとつて兄弟の様な男と共に組織に入り、その人を、風間の親っさんを目指して働いた。悪い事も沢山やった。人に誇れる人生で無かったのは確かだ。理由は少し特殊だが、刑務所に入ったりな」

自嘲気味な笑みを浮かべる桐生に、コルベールは笑つていいかわからず困った様に頭を掻いた。

「その後は、兄弟や親っさん、そして愛していた女を守る為に組織の中と外を奔走し、結果……誰も救えなかった。いや、救われたのは俺だけだったのかも知れない。大切な人間を次々に失つて自棄になっていた俺に手を差し出してくれた男と少女がいたんだ。

そして今はその少女と孤児院をやっている中、俺はこの世界に召喚された。そして一人の少女の使い魔として、今ここに居るって訳だ」

短くなった煙草を携帯灰皿にねじ込んだ桐生はコルベールに差し出し、コルベールもそれに習って短くなった煙草を携帯灰皿へと入れた。

「わかつてくれたか、コルベールさん？　俺は別に聖人でも、正義のヒーローでもない。世間からすれば、寧ろ悪人に近い位置にいるのさ。でもな、これだけは言えるぜ」

桐生はコルベールに向き直ると、握った右手の拳をコルベールの胸元にとんと置いた。

「力を正しく使えるか、使えないかは、結局使う人間の意思次第って事だ。あんたの言う俺のこの拳も形を変えれば暴力にしかならない。だが、誰かの為、何かの為にその拳を使う時、それは暴力じゃなくなり、守る為の力になるんだ。あんたの言う「火」の力も、使う者次第で変えられる筈だ。少なくとも俺には、あんたは正しい事の為にその力を使っていると思えるぞ」

胸元に置かれた桐生の拳をジツと見詰めながら何かを考え込んでいたが、やがて優しい笑みを浮かべて桐生の顔に視線を向けた。

「ありがとう、カズマ殿。貴方にそう言って貰えただけで、私は幾らか救われた気がしました。やはり、私はまだまだ人として未熟なんですな。結論ばかりを急ぎ、形ある答え

を追って行ってしまおう」

桐生の手をそつと退け、身体を伸ばしたコルベールの表情は幾らか晴れやかになっていた。

「だが、貴方と接していると答えは常にある物ではない事を思い知らされる。人間と言うのは、難しい物ですな」

「難しくもいいのさ。本当に正しい事なんて、誰にもわかりはしない。ただ俺達は、一日を精一杯生きればいい。自分が正しいと信じた道を歩んでな」

桐生とコルベールは顔を見合わせると、互いに笑みを浮かべて頷き合つた。

ふと、コルベールの視界に向こうからやつて来る桃色の髪の少女の姿が見えた。ルイズだ。

「もう良いのか？」

近付いてきたルイズがコルベールに挨拶をしたのを見届けてから、桐生が問い掛ける。

「ええ。待たせちゃつてごめんさい。もう大丈夫、支度は済んだわ」

ルイズは軽く身体を回して日用雑貨が詰められた肩掛けのカバンを二人に見せる。

桐生は頷いて腕を組むと、真剣な表情でルイズの瞳を見詰めた。

「ならもう一つ確認させて貰う。ルイズ……覚悟は出来たか？」

桐生の言葉にルイズの身体にピンと緊張が走った。

覚悟。言葉にすればなんて事ないが、此処で答えれば曖昧な想いは許されなくなる。戦地に赴く覚悟、他者に手にかかる覚悟、死ぬ覚悟。本や話でしかなかった事が今、自分の身に降りかかるのだ。

ルイズはそつと瞳を閉じた。瞳の裏側を駆け巡るのは桐生と過ごして来た日々、そして家族の顔。

暫くの沈黙の後、ルイズは瞳を開くと真つ直ぐな視線で桐生を見詰めて頷いた。

桐生はルイズの身体を抱き上げてコックピットへと入れ、操縦席後部の防弾板を外して改造したシートに座らせた。

「それじゃあ、行って来る」

「ああ。無事に戻って来てくれたまえよ。その時は私の秘蔵のワインで乾杯するとして」

コルベールとしっかりと握手した後、桐生もズタ袋をルイズを渡してコックピットに乗り込んだ。

以前やった様に、コルベールの魔法でプロペラを回してエンジンを点火する。

コルベールに合図し、烈風を吹かせて貰う。

首から下げたゴーグルをしっかりと着ける桐生。

「カズマ殿！ ミス・ヴァリエール！」

エンジンによる轟音が響く中、コルベールが懸命に叫ぶ。

「いいか!? 死ぬな！ 死んでは駄目だ！ みつともなくて良い！ かつこ悪くて良い！ 周りから笑われても良い！ 絶対に死ぬな！ 生きて戻って来い！」

エンジンの轟音に邪魔され、コルベールが何を言っているのかはわからない。しかし、聞こえずとも桐生の胸には届いた。

桐生は軽く手を挙げるとスロットルを開く。瞬間、ゼロ戦が滑走を始めて浮き上がり、グングン上昇して行った。

空へと飛び上がったゼロ戦は徐々に小さくなっていき、やがて米粒程度の大きさにしか見えなくなった。

とうとうゼロ戦が見えなくなっても、コルベールはずっと見送り続けた。

事前に知らされていた進路に向けて二時間程飛んでいると、雲の切れ間から小さな点々が見えて来た。そこを目指して近付くと、空を埋め尽くさんばかりの艦隊が見えて来た。

大小何百隻ものフネが並ぶ景色はまさに壮観で、ルイズは息を飲みながら見惚れていた。

着艦するフネは何処かと桐生が辺りを見回していると、竜騎士が一騎此方に向かつて来て手を挙げて見せた。どうやら案内役らしい。

桐生が竜騎士に誘導されるままゼロ戦を操縦して行くと、「ヴュセンタール」号が見えて来た。

多量の竜を発着させるためであろう。巨大な平甲板が広がり、マストは左右に突き出る形で六本装備されており、上から見ると脚を上げた昆虫に見えなくもない。あくまで竜騎士を搭載する構造の為、大砲は着いていない。

竜騎士に促されるままゼロ戦を「ヴュセンタール」号の甲板に降ろしていくと、何人もの「風」系統のメイジがゼロ戦を程良い高度で浮く様に保ち、着艦の準備に入る様にとメガホンで指示が飛んで来た。

桐生は言われるまま主脚と尾輪を出してフラップを下げる。

ゼロ戦はまるで空を舞う木の葉の様にゆっくりと甲板へ着艦した。

「ヴュセンタール」号への着艦が成功して、ゼロ戦を降りた桐生とルイズはすぐ様護衛の兵を伴った将校に出迎えられた。

「ようこそ、「ヴュセンタール」号へ。甲板士官のクリューズレイです」

自己紹介を軽くした将校はそのまま自分に着いて来る様に桐生とルイズに促した。

促されるまま狭い中甲板を通り向かった先は二人が利用する個室だった。酷く狭い

部屋ではあるが、個室である。申し訳程度の机に小さな寝台だけの部屋だが。

荷物を置くと、将校は再び自分に着いて来る様にと促した。

狭い艦内をジグザグに歩き、とあるドアの前で止まらされた。

将校がノックすると、中から入る様にと声が帰つて来た為、将校は扉を開いて二人を中へと入れた。

部屋の中で二人を出迎えたのは、ズラリと並ぶ將軍達であつた。肩には金ピカに光るモールがあり、全員の位の高さが伺える。

唾然とするルイズと訝しげに眉をひそめる桐生に、従兵が椅子を勧めた。ルイズが腰掛け、桐生が後ろで控える。

ルイズが座つたのを見届けて、一番上座の美髯の將軍が口を開く。

「アルビオン侵攻軍総司令部へようこそ、ミス・「虚無（ゼロ）」」

ルイズの身体に緊張が走つた。桐生は胡散臭そうに上座の男を眺めた。

「私は総司令官のド・ポワチエだ。そして此方が、参謀総長のウインプフェン」

美髯の將軍は自分の名を乗つた後、左に腰掛けている皺の深い男を紹介した。

「そして此方が、ゲルマニア軍司令官のハルデンベルグ侯爵だ」

角の着いた鉄兜を被つた將軍が、自分の名を紹介されてルイズ達に重々しく頭を下げ



どうやらこの竜母艦は旗艦であり、同時に総司令部でもあるらしい。

それからド・ポワチエ將軍は、會議室に集まった參謀や將軍達にルイズを紹介した。「各々方。彼女こそ我々が陛下より預かりし切り札、「虚無」の使い手、ミス・ヴァリエールにあらせられます。タルブの村でのアルビオン艦隊撃墜も、彼女の功績なのです」紹介をされても會議室の面々は盛り上がらない。胡散臭そうにルイズとその使い魔を見詰めるばかり。

「ラ・ヴァリエール公爵の名は聞き覚えがあります」

三十代後半か四十代前半位のゲルマニア軍の將軍の一人がルイズを見詰めながら口を開いた。

「確かに公爵も強力なメイジであり、また兵法を知っている方だ。しかし、「虚無」を扱えるご息女がいるとは初耳だ。しかもその後ろの男……従者にしては腰にぶら下げている物が大きい。それにただの平民とは思えぬ眼光、体格。何者ですか？」

ゲルマニアの將軍はパイプを吹かしながらルイズよりも桐生をマジマジと見詰めた。戦場を生き抜いて来た將軍にとってはルイズよりも、只ならぬ雰囲気を漂わせる桐生の方に興味を惹かれていた。

ド・ポワチエ將軍はルイズに目配せし、桐生を紹介する様に促した。

「彼は、カズマと言います。人間ではありませんが、私の使い魔です」

ルイズからの紹介を受けて桐生は將軍達を見回してから軽く会釈する。

桐生の紹介を受けた將軍達の間にとよめきが起こり、皆胡散臭そうに桐生を眺めては小声で何かを囁き合っている。

「使い魔ですと？」

先ほどの將軍がパイプを吹かしながら小馬鹿にした様に呟いた。

「人間の使い魔とは……トリスティンではその様な物が流行っておるのですかな？ 此度の戦では、我々の知らぬ作法が多く見られそうすな」

遠回しに馬鹿にされたのを感じたルイズはムツとするが、桐生はムツとするだけでは済まなかった様だ。

「あまり俺の主人を馬鹿にしないで貰いたいな。俺が黙っていられなくなるんでな」  
殺気の籠もった視線を飛ばす桐生に、將軍が笑みを浮かべた。

「ほう……。どうやら血の気もそれなりにある様だ」

將軍が杖に手を掛けかけた時、ハルデンベルグ侯爵が大きく咳払いをして見せた。

「いい加減にしろ、エルギース將軍！ 我々は協力し合う為に此処に居るのだぞ！ 下らん挑発はもう止めろ！」

エルギースと呼ばれた將軍は暫く桐生を見詰めていたが、やがて小さな笑みを浮かべると両手を挙げて見せた。

「此処が戦場で無いのが残念ですな。しかし、お陰で意地でも生き残る理由が出来た。カズマ殿と言ったな？ この戦が終わわり、お互い生きていたら一杯奢らせて貰いたい。どうかかな？」

「ああ。奢られてやるよ」

エルギースに合わせる様に小さく笑いながら桐生も答え、そこで二人は互いに視線を外し合った。

そんな二人の様子を見て、ド・ポワチエ将軍は溜め息を漏らしてから身を乗り出した。「それでは、役者が揃ったという事で……打倒アルビオンに向けての会議を始めさせて貰います」

ド・ポワチエ将軍の言葉から、会議室に緊張感が漂い始めた。

## 第45話

会議が開始してから三十分くらいが経過したが、未だに会議は難航していた。

会議の本題となっているのは、アルビオン大陸に六万の兵を上陸させる為の方法についてだった。その上陸の成功を障害する物は主に二つ。

一つは未だ有力である敵軍の空軍艦隊だ。タルブでの戦いで主力である「レキシント」号を筆頭とした戦列艦十数隻を墜とす事は出来たとはいえ、アルビオン空軍には未だに四十隻ほどの戦列艦が残っている。

それに対して此方のトリステイン・ゲルマニアの連合軍には六十隻ほどの戦列艦はあるが、二国混合艦隊の為指揮上の問題が予想されている。統率の取れた先鋭であるアルビオン空軍に対して烏合の集の二国混合艦隊では、数の利等皆無に等しいと思われる。もう一つは上陸地点の選定だ。

アルビオン大陸に六万の大軍を上陸させる事が出来る要地は二つ。

一つは首都ロンディニムの南部に位置する空軍基地ロサイス。もう一つは北部の港ダータルネス。港湾設備の規模からすれば間違いなくロサイスが良いに決まっている。しかし、そこを大軍で真っ直ぐ目指してしまつてはすぐ様発見され、敵に迎撃の機会を

与えてしまう。

「強襲で兵を消費してしまつては、ロンディニムの城を墮とすのは不可能でしょう」  
参謀長は自軍の戦力を冷静に分析した上でそう発言した。

今、連合軍に求められているのは「奇襲」なのである。

六万の大軍を無傷のままロサイスに上陸させたいのだ。その為には敵の大軍を欺き、「我々連合軍の上陸地点はダータルネスである」と思い込ませなければならぬ。

その欺瞞作戦を成功させる為の作戦が次々と將軍達の間で挙げられるが、挙がる度に他の誰かが口を挟んで結局お流れになつてしまうのが何度も続いている。結局、將軍同士が口角泡を飛ばし、それをド・ポワチエ將軍がたしなめて辞めさせるの繰り返しなのだ。

纏まりそうにない会議を見ると、不意に桐生の脳裏に柏木修の姿が蘇つた。

風間組若頭として風間新太郎を支え続け、風間亡き後は東城会の直系組織を纏める若頭として活躍し続けていた、風間譲りの手腕と任侠魂を秘めた男だった柏木。常に癖の強い直系組織の組長達を纏めるのに苦労していた姿を自分だけには見せる事があつた。

CIAの策略によつて凶弾に倒れてしまつたが、もしもあの人が生きていたら今の東城会も形が変わつていたのではないかと思う。そして、大吾ももつと安心していられたのではないかと思う。

凶弾に撃たれ身体を血に染めた中、最後の力を振り絞って東城会の行く末を託された時に抱きかかえていた柏木の感触が、桐生の掌に今も蘇る。

「カズマ？ 大丈夫？」

自分の掌を眺めながら顔をしかめていた此方に気付いたルイズが心配そうに声をかけて来た。

桐生はそんなルイズに首を振って、大丈夫である事を見せて安心させようとした。

「ともかく、障害のどちらかを「虚無」殿になんとかしてもらわんとならん。タルブで「レキシントン」号を吹き飛ばした様に、今回もアルビオン艦隊を吹き飛ばしてはくれないかね？」

参謀記章を着けた貴族の一人がルイズを見ながら言うと、ルイズは桐生から振り返り首を振った。

「それは無理です。あの時の様な強力な「エクスプロージョン」を使うには相当な精神力を溜める必要があります。再び使える様になるには何カ月……いえ、何年かかるかわかりません」

ルイズの言葉に参謀の貴族達は失望した様に溜め息を漏らした。

「そんな不確かな「兵器」等切り札と呼べん」

参謀の一人がそう呟いた瞬間、ドンッ！ と言う大きな音が部屋の中に鳴り響いた。

桐生がルイズの後ろから身を乗り出し、拳を机に思い切り叩きつけたのだ。拳が打ち付けられた机上には大きなヒビが走っている。

怯えた目で此方を見るルイズ等構わず、桐生は参謀を睨み付ける。

「ルイズは兵器じゃねえ。あんまりふざけた事を抜かしてんじゃねえぞ」

「何だと！ 勝利する為に呼ばれたその娘が切り札なのだぞ！ 使い魔風情が我々の作戦に口を挟むな！」

桐生の怒りを物ともせず言い返す参謀達。

このまま殴り合いにまで発展しかけたその時、会議の始まりから一切口を開かなかったエルギースが杖を引き抜いて机を叩いた。

その場にいる全員が音の方に視線が向けられると、エルギースが立ち上がり周りを見回すと小馬鹿にした様な笑みを浮かべた。

「今回の戦は子供に頼らなければ勝てぬ戦なのですか？ 貴族としてではなく、大人として恥ずかしくはないのですか？ 子供頼りに会議を進める等……下らんですな。こんな無意味な会議に参加するくらいなら、外でパイプを吹かしていた方がずっと良い。良い会議結果があったら知らせてください。では、失礼」

「待たれよ、エルギース將軍！ 会議はまだ終わってないぞ！ おい！」

言いたい事を口にしたエルギースはパイプを咥えると、ハルデンベルグ侯爵の言葉に

も耳を貸さずに会議室から出て行った。

エルギースの発言から、部屋には白けた空気が漂った。桐生も参謀達も溜め息を吐きながらそれ以上の口論を続けるのをやめる。

「……艦隊は我々が引き受けよう。「虚無」殿には陽動の方をお願いしたい。出来ないかね?」

落ち着きを取り戻した周りを見回したド・ポワチエ将軍がルイズの方へ顔を向けながら問い掛ける。

「陽動、ですか? 具体的には何をすれば……」

「先ほどから議題に挙がっている通りの事だ。我々がロサイスではなく、「ダータルネスに上陸する」と敵軍に思い込ませて欲しいのだ。伝説の「虚無」殿ならば、容易い事ではないのか?」

ド・ポワチエ将軍の言葉を聞いたルイズは顎に手を当てながら瞳を閉じた。

そんな呪文があつただろうか?

自身の中で問い掛けながらも、操られたウエールズと対峙した際に「始祖の祈祷書」から新たに「デイスペル・マジック」を見つけたのを思い出した。もしかすれば、自分が見つけてないだけで何か役立つ呪文が載っているかもしれない。

ルイズは瞳を開いて一人頷くと、ド・ポワチエ将軍へと顔を向けた。



「明日までに、使える呪文を探しておきます」

ルイズの言葉に頼もしいとばかりに笑顔を浮かべて頷くド・ポワチ工將軍。

ド・ポワチ工將軍は周りの將軍達に目配せをして桐生とルイズに退室を促した。

会議室から出て来たルイズは張り詰めた雰囲気疲れしてしまつたらしい。身体を大きく伸ばしながら小さくんつ、と可愛らしい声を漏らした。

「何よ、嫌な感じ」

そう呟いて会議室の扉に向かつて舌を出して見せるルイズの頭を桐生が優しく撫でてやる。

部屋に戻ろうと二人が扉から身体を反転させると、向こうからエルギースがパイプを啣えながら此方に来るのが見えた。

会議室の薄暗い灯りでは分からなかったエルギースの顔や体格が、通路の窓から差し込む陽の光ではつきりと見えた。

丸いフォルムの鉛色のメットから覗く目は青く鋭い光を秘めている。顎には短く整えられた黒髭を蓄え、鉛色の鎧から覗く肌はキュルケの様な褐色だ。腰にはワルドと同じ、軍人が好むレイピア型の杖が刺されている。

此方に気付いたエルギースは気さくな笑みを浮かべて見せながらパイプを口から外

した。

「これはこれは、お二方。お二方も下らん会議に嫌気が差して出て来られた口ですか？」

問い掛けながら再びパイプを啜えて紫煙を燻らせるエルギースに、桐生はルイズを抱き寄せながら首を振った。

「退室を促されたから、出て来ただけだ」

「なるほど。しかし、それで良い。あんな意味のない会議に時間を費やすくらいなら訓練の一つでもした方が利口という物だ。実践知らずの頭の固い、卓上の理論しか述べられぬ者には分からんだろうがね。作戦を立てるのが不必要とは言わないが、必ずしも作戦通りに事が運ぶ事等ありはしない。戦場で頼れるのは、結局最後は己の肉体と精神力に他ならぬ」

会議室の扉を忌々しそうに見ながらエルギースが露骨に不機嫌な表情を浮かべて語る。どうやら彼は考えるよりも動くのが得意な様だ。

桐生はそんなエルギースを無視してルイズを連れて部屋へと向かおうとした。そんな桐生を見て、ああ、と思ひ出した様にエルギースが呟いた。

「そう言えば、お二方に少し付き合っただけで欲しい場所があるのだが……どうかお付き合い願いだらうか？」

笑みを浮かべながら言うエルギースには悪意は感じられない。が、先ほどの会議室での一件もある。このまま付いて行つて良いのか迷う桐生に、ルイズはジャケットの袖を握りながら首を振つた。

桐生は少し考えた後、ルイズを見てからエルギースに顔を向けて頷いた。

「有り難い。では、付いて来て頂こう」

エルギースは踵を返すと通路を歩き出した。不安そうにするルイズを宥める様に手を繋ぎながら桐生がその後を続く。

しばらく通路を何度か左右へ曲がりながら進むと、ゼロ戦が係留されている上甲板に着いた。ゼロ戦はロープで各部を縛られて甲板に固定されている。

ゼロ戦の周りには、ルイズとそう変わらないくらいの歳の少年の貴族達が群がっている。ある者は興味深そうに、ある者は訝しげにゼロ戦を眺めている。少年達はみんな革の帽子に青い上衣を纏い、腰には短めのレイピア型の杖を差している。

「お前達、その持ち主を連れて来たぞ」

エルギースが少年達にそう言うと、少年達は一斉に集まって整列した。

集まった少年達の顔を桐生は見回す。誰も彼もまだルイズと同じくらいの若さに見える。

ルイズも集まった少年達が自分くらいの歳なのに少し驚いたのか、訝しげに少年達一

人一人の顔を見ている。

そんな二人にエルギースは少し申し訳なきように苦笑してから口を開いた。

「お二方に来て貰ったのは、お二方が乗って来たアレについて彼等が聞きたい事があるとの事だったのでね。お前達、此方のお二方はその持ち主であるトリスティンのラ・ヴァリエール嬢と、使い魔のカズマ殿だ。失礼のない様に、何なりと聞くが良い」

エルギースの言葉に少年達は桐生とルイズの顔をマジマジと眺めると、少年達の中の一人が手を挙げた。

「では、ラ・ヴァリエール嬢にお尋ねしたい。コレは生き物なのですか？　そうでないなら一体何なのですか？」

「えっ？　えっと、それは……」

少年から自分を名指しして飛んで来た質問に困惑するルイズ。ルイズとてゼロ戦が「ひこうき」というものである事くらいしか分かっていないのだ。説明等出来る訳もない。

困った様子のルイズに代わって、桐生が口を開いた。

「あれはゼロ戦という、「飛行機」だ。生き物ではなく、人が操縦して動く乗り物の一つだ」

桐生の説明を受けた少年達は興味深そうに声を上げながらゼロ戦に視線を移した。

そんな少年達にエルギースは微笑みながら手を叩いて見せ、少年達の意識をゼロ戦から此方に向けさせた。

「謎が少しは解けたか？ 今度はお前達が自分達の乗り物をお見せして差し上げろ。せめてもの礼にな」

エルギースの言葉に少年達が敬礼すると、真っ直ぐに後ろに身体を向けて歩き出した。

エルギースに促された桐生とルイズは、少年達の後が続いて歩き出す。

「凄い……。こんな近くで見るのは初めてだわ」

辿り着いた場所で、ルイズはまず一言そう漏らした。

少年達に続いて着いたのは竜舎だった。首を綱に繋がれた蒼い皮膚と翼を持った竜達が時折鳴き声を上げながら此方を見ている。

「僕達は竜騎士なんだ」

少年の一人が得意げになって言ってみせた。

少年の説明によると繋がれている竜達は風竜の成獣である。タバサのシルフィードよりも二回りほど身体が大きい。

桐生がそつと風竜に手を伸ばすと、風龍に身体を少し後ずらせて桐生を見詰めた。

汚れない黄色い竜の瞳が、まるで値踏みをする様に桐生の身体を、顔を、眼を見詰める。

暫くすると風龍はゆっくりと桐生に近付いて、頭を下げた視線を合わせながら顔を近づけた。

桐生はそんな風龍の頭を優しく撫でる。キュルケのフレイムよりもザラついた、硬い鱗の感触が掌に伝わって来る。

桐生の撫でる感触に、風龍は目を細めながらクルルつと声を漏らした。瞬間、少年達から声が上がると。

「凄いな、あんた。見た所、メイジでもないのに風竜に認められるなんて。竜騎士の素質があるかもよ」

少年の一人が心底驚いた様に言う。

「そうなのか？」

「ああ。使い魔として契約しない限り、竜が一番気難しくて、乗りこなすのが一番難しい幻獣だからね。それに自分の認めた相手じゃなきゃ決して背中に乗せないんだ。しかも竜は此方の魔力や格、知性を見抜いて自分の主人かどうかを決めるからね。頭を撫でるなんて、いきなり出来る事じゃないよ」

少年の説明を受けた桐生が風龍の頭を撫で続けていると、ルイズが横から桐生のジャ

ケツトを引っ張って見上げて来た。瞳から察する、自分も撫でてみたいのだろう。

桐生はルイズの背中を押して風竜の前に出させると、風竜は先ほど桐生にした様にルイズを見詰めた。

暫くすると、風竜はルイズから視線を逸らしてそっぽを向いてしまった。

「はは、残念ながらラ・ヴァリエール嬢は認めて貰えなかつたらしいですな」

エルギースがそう言うのと、ルイズも頬を膨らませながら腕を組んでそっぽを向く。そんなルイズの頭を桐生が優しく撫でてやる。

「でも、やっぱりカズマの背中の中は形が違うわね」

桐生に撫でられて些か機嫌が治ったルイズが、桐生の顔を見上げながら言う。

桐生の背中に彫られている「応龍」は翼がない。いつしか誰かに聞いた話だが、西洋では龍は大きな翼を持つ蜥蜴のような身体のもが多く、東洋では翼がないか、或いは小さく身体が蛇の様なものが多いんだとか。

ルイズの発言に意味がわからない少年達とエルギースが首を傾げると、桐生は何でもないと周りに言った。

ルイズはなんとか風竜の頭を撫でようと背伸びして手を伸ばすが、風竜は気怠そうに首を動かしてその手から逃れる。

躍起になるルイズを宥めながら風竜を手懐けている少年達を桐生が見ていると、横か

らエルギースが声を掛けた。

「彼等は私が預かった竜騎士の部隊兵です。本来ならあと一年は訓練が必要な竜騎士見習いだったのですが、先のタルブの戦で消耗した竜騎士を即席に補充する形となって彼等も前線に立つ事になりましたね」

パイプを吹かしながら説明するエルギースの言葉を聞きながらも桐生はルイズの方へと視線を向け続ける。

ルイズは少年達から竜騎士になる為の訓練や心得の説明を熱心に聞いては、興味深そうに風龍を見上げていた。

年端も行かぬ、少女と少年。戦争で命を落とすには若過ぎる年齢に桐生は顔をしかめる。

そんな桐生を見て、エルギースは小さく笑った。

「なに、歳こそ若いですが、みなそれなりにガッツのある奴等です。我々同様、戦争の駒として働くには十分な動きは出来る。何も心配する事はない」

「駒……だっ？」

エルギースの言葉に露骨に不機嫌な声を漏らし、鋭い目付きでエルギースを睨みながら桐生は拳を握り締める。

そんな桐生にエルギースは首を傾げた。



「戦場に一度出れば、誰も彼もが勝利の為に動く駒と同じだ。カズマ殿、貴殿はチエスを嗜みますか？ 仮にそうだとしたら動かし、相手に取られるポーンを一々気にかけて勝負をしますか？ 私も貴殿も、そして勿論ラ・ヴァリエール嬢も彼等も、この「戦争」という巨大で大掛かりなゲームの上では使い捨てのポーンに過ぎない。ナイトにもビショップにもルークにも、ましてやクイーンにもキングにもなれはしない。変われないポーンの成すべき事は、少しでも敵を蹴散らし、勝利の為の道を築く事。違いますか？」

美味そうに紫煙を口から燻らせて語るエルギースに、桐生は何も言えずにルイズ達を見た。

会話はわからないが何か楽しそうに話して笑みを浮かべる少女と少年達。この戦争に参加することで、彼等の手も、その笑顔も、血に染めなくてはならない時が来る。そんな事があって良いのだろうか。

そんな風にルイズ達を見ていた桐生の首筋に、冷たく硬い何かが当てられた。視線を向けると、エルギースが杖を引き抜いて桐生の首元に宛てがっている。

「まさか、「こんな子供が」なんて考えているんじゃないでしょうな？ 彼等は確かに我々からすれば子供だ。しかし、戦場に出た以上、彼等は立派な一人の「兵士」だ。覚悟を決め、今日を生き抜く為にここに居るのだ。そんな彼等に対して哀れみなど、侮辱以外の何物でもない。そして、彼等を侮辱する事は、彼等を預かっている私に対する侮

辱となる。その所を弁えて欲しいな」

会議室の時とは違う、怒気を含んだエルギースの声が桐生に投げかけられる。幸か不幸か、ルイズ達は二人の今の状態には気付いていない。

自分の考えが甘い事は理解している。自分の居た世界でも、少年兵として銃を持つ子供達が存在しているのを桐生は知っている。

それでも、やはり納得はいかない。自分達の様な大人ならつゆ知らず、これから先の未来がある少年少女達が命を落とすかもしれない戦場に立つなどと。

しかし、戦争の参加をルイズが決め、そしてそんなルイズを守ると決めた以上、綺麗事だけでは生き残れないのを桐生は知っている。

悔しくて認めたくはないが、その覚悟をエルギースの言葉が改めさせたのを感じざるを得なかった。

桐生が何も言わないのが会話の終了を感じると、エルギースは杖を腰に差してルイズ達の元へと近付いて再び手を叩いた。

「さあ、そろそろ訓練を再開するぞ。お二方の手を煩わせるのは終いだ。全員持ち場に戻り、いつでも動ける様に準備しておけ」

エルギースの言葉にルイズと楽しげに話していた少年達はすぐさま背筋を伸ばして敬礼すると、そのまま散り散りに去って行った。

エルギースに促されて桐生の元へと向かったルイズは、桐生の表情が硬いのには気付いて心配そうに顔を覗き込んだ。

「カズマ? どうかしたの?」

「……なんでもない。ちよつと、考え事をしていただけだ」

ルイズに声を掛けられた桐生は首を振ると、ルイズと共に部屋へと戻った。

互いに向かい合って質素なベッドに腰掛けると、ルイズが深い溜め息を漏らした。

「陽動に使える魔法……。そんなの、どんなのがあるって言うのよ」

一人ポツリと漏らしたルイズを見ながら、桐生は首を振って窓の外を見た。

「さあなあ。いつそ艦隊の模型でも飛ばしてみるか? そんな物ありはしないだろうが」

そう呟きながら、桐生は若い頃にハマっていた「ポケットサーキット」、略して「ポケサー」を思い出していた。車の模型をモーターと電池で動かし、レースをするのは最初こそ小馬鹿にしていたが、これが案外やってみるとどつぷりとハマり込んでいった。豊富すぎるパーツのカスタマイズやお気に入りのボディへのシール貼りは奥が深く、無限の可能性を秘めている様にも思った。

中でもお気に入りだったボディの「DON-蜂」。バブルと言われたあの時代だから許されたと思うが、たかだかプラスチックのボディに五千万はふっかけ過ぎなのでは

ないかと今では思う。買ってしまった以上あまり大っぴらに文句は言えないが、えびすやも中々此方の足元を見て営業している。パーツシヨップもかなり悪どさを感じる値段設定だったのは、今思えばいい思い出だ。タイヤ一つ、モーター一つの為に必死になって不動産の仕事をしていた自分は、側から見れば滑稽だったろう。

その後、あの年……澤村遥と出会った2005年の12月、ポケサーを始めるに当たつての最初のマシンをくれた、ポケサーファイターとの再会をきっかけにまた始めたのだった。三七歳にもなる大の大人がと思うかもしれないが、一度初めてしまえばあの頃の興奮が蘇り、色々あつて無くしてしまったパーツを集め直し、再び熱中したのも今の自分からは誰も想像出来ないかもしれない。

そう言えば、あんなに大枚叩いて再び手に入れた数々のパーツは一体何処にいつてしまったのだろう。売っても大した額にはならないだろうが、あんなに買ったのいつの間にか無くしてしまったのは勿体なきを感じた。ちよつとでも取っておけば「アサガオ」の子供達にも使わせられたろうに。

そんな風に若き頃を思い出している桐生に対して、ルイズは身を乗り出して顔を近付けた。

「あんだ……今、何て言ったの?」

真剣な眼差しで此方を見詰めながら問い掛けるルイズに、桐生は少し困惑した様に顔

をしかめた。

「何の事だ？」

「艦隊の……何を飛ばすって言った？」

「ああ、模型の事か？　しかし、模型なんて何処にもー」

「そう！　それよ！」

桐生の言葉を遮って、ルイズは叫びながらベッドから立ち上がった。

話について行けない桐生の困った表情とは対照的に、ルイズの瞳は輝いている。

「六万の艦隊の模型を作って飛ばせば良いのよ！」

「おいおい、そんな材料、こんな空の上にある訳ないだろう。一つ作る事だって難しいぞ

？」

「違うわ！　材料なんて必要ないわよ！　魔法で作れば良いんだから！」

言うや否やルイズは「始祖の祈祷書」を荷物から引っ張り出すと、ベッドにうつ伏せに寝転び、枕で上体を上げながらパラパラとページを捲っては左手にしている「水のルビー」の指輪をかざしている。

桐生がそんなルイズに疑問を持っていると、「始祖の祈祷書」のページの一枚が輝いた。

ルイズの口元に笑みが浮かんで行く。どうやら、有力な魔法が見つかったらしい。

一体自分の模型という言葉の何がルイズにヒントを与えたのだろう。桐生は一人首を傾げながらルイズを見詰めた。

空をも覆う木々の枝が伸びた薄暗い森の中、二人の男が対峙していた。

一人は白装束に蛇の仮面を着け、三枚の刃を生やす鉤爪を突き出す様に構えている男、ウロボロス。

もう一人はそんなウロボロスの前で黒いコートを羽織り、同じ色のズボンのポケットに手をつ込む鳥の嘴の様な長い突起を生やした仮面を着けた男、レイヴン。

静かに仮面越しに見詰めあう中、一枚の木の葉がゆつくりと地面に落ちた瞬間、ウロボロスがレイヴン目掛けて駆け出した。

左右から同時に繰り出される鉤爪による一閃を飛んで避けたレイヴンは、そのまま右脚でウロボロスの顔面に蹴りをお見舞いする。

交差した腕でウロボロスは蹴りを防御すると、レイヴンが着地したのと同時に両腕を振るって斬りかかる。

鋭利な鉤爪の素早い一閃を縫う様に避けるレイヴン。時折人の骨まで容易く断ち切れるほどの鋭い刃がコートを裂き、仮面の突起を切り取って行く。

レイヴンの動きを読んだウロボロスが腹に目掛けて鋭い蹴りを繰り出すと、レイヴン

はその足首を掴んで身体を回転させ、遠心力を付けてウロボロスの身体を乱暴に投げ飛ばした。すぐさまウロボロスは鉤爪を木に突き立てて衝撃を身体から逃がし、体勢を整えると再びレイヴンの身体を斬り裂かんと襲い掛かる。

腕を器用に動かして変幻自在に鉤爪を操るウロボロス。その攻撃の隙を見てウロボロスの左右それぞれの手首掴んでレイヴンが動きを封じると、ウロボロスの靴の爪先から小さな刃が突き出て、バク転の要領で手首を掴まれたままレイヴンの顎を蹴り上げようと身体を回転させる。

瞬間、レイヴンは咄嗟にウロボロスの両手首を離して距離を取る。

再び二人が互いに向かつて駆け出した瞬間、空から降って来た黒刃の大剣が二人の間を割って重々しい音を立てながら地面に突き刺さる。

「そこまでだ」

木々の間からゆっくりと出て来た鉛色の仮面を着けたオーガの声に、ウロボロスは構えを解いて後ろ手に腕を組み、レイヴンはつまらなそうに溜め息を漏らした。

「良い所だったんだけどね」

不満げに言いながら身体を伸ばすレイヴンに、オーガは首を振る。

「お前達の組手には加減がない。どちらかが死ぬまで殺り合うのは目に見えている」

オーガはそう言いながら地面に突き刺さった黒刃の大剣を引き抜き、背中に担ぐと腕

を組んだ。

「本格的な戦争が始まる。アルビオン対トリスティン・ゲルマニアの連合軍によるな」  
「天に召されし始祖ブリミルが見たら、どんな反応をするだろうね」

重々しく話すオーガに対してレイヴンは軽く言い、シャツから首にぶら下げていた黄金の十字架を取り出して見詰めた。

そんなレイヴンを見て、ウロボロスは小さく笑い声を上げる。

「神の創りし物を壊そうとしている男が、神を想うのか？」

ウロボロスの言葉にレイヴンは顔を上げると、十字架をシャツの中へと仕舞い込んでから首を振る。

「生憎、僕が想うのは一人の女神だけでね。でも神には感謝しているよ。神をも殺せる力を与えてくれた事にね」

強い風が吹き、木々を揺らしてまるで潮騒の様なせせらぎが辺りに響き渡る。

斬り裂かれ、ボロボロになったコートも気にかげず、レイヴンはマスクを外して空を仰いだ。

生い茂る木々の葉の隙間から覗く青い空の、その下の何処かにある神が残した「遺産」を想って。



## 第46話

熱い。

身体を焼く様な熱波と、炎が燃え盛る音を感じる。

瞳を開いた少女の目の前に広がった光景は、未だ忘れる事の出来ない物だった。

月のない宵闇の中、赤い炎が雨の様に生まれ育った村に降り注がれている。

炎の雨は家々を焼き、大地を焼き、逃げ惑う人々を焼いた。

隣のおばさんも、向かいの友人も、火達磨になって悶え、苦しみながら地面を転がって、やがて動かなくなつた。

少女はそんな光景をただ呆然と眺めていた。何が起こっているのか、何故自分の村が焼かれているのか、何もわからない。

ふと、視界の端に両親が見えた。其方へと視線を向けた瞬間、何かを叫びながら此方に向かつて来る両親は少女まで後一步の所で炎に包まれた。

少女は必死に両親の名を叫びながら駆け寄る。しかし、もう両親の身体は消し炭へと変わってしまった。

炭となった両親の身体を掴んだまま顔を上げると、二人の男が此方に向いて立っ

るのが見えた。

炎の揺らめきのせいか、黒いシルエツトでしか見えない為、顔はわからない。ただ、手にした杖から貴族である事はわかった。

助けを求めようとした少女の声が上がる前に、後ろから少女を抜かして走っていく村人の男性が二人に駆け寄る。瞬間、村人は二人の男の杖の先端から放たれた炎によって、叫び声を上げながら焼かれていった。

助けて貰えると思っていた少女の想いは虚しく消え、代わりに目の前の二人が自分の村を焼いた張本人である事に気付いて、少女は恐怖から腰が抜けて尻餅をついて後ずさる。

二人の男はゆっくりと此方へと向かって来る。少女は必死に手を動かして逃げようとするも身体が上手く動かない。

とうとう目の前まで来た男達の顔を見上げて、少女は息を飲んだ。

此方を見下ろしている片方の男の眼。それはまるで蛇の様に瞳が縦長で、見る者を凍り付かせる様な冷たさを秘めていた。

蛇の眼をした男の手が此方へと伸ばされた所で、少女は意識を失った。

ガバツと勢い良くベッドの上で身体を起こしたアニエスは、荒い呼吸のまま辺りを見

回した。

そこは自分が与えられている、銃士隊の宿舎の部屋だ。燃え盛る炎も、熱い熱波も、炎の音も聞こえない。

ツンと、鼻に汗の匂いが刺さった。身体中から嫌な汗が噴き出して肌を虫が這いずつているかのように流れ、寝巻きはびっしりと濡れている。

アニエスは頬を伝う汗を手の甲で拭うと、窓の外へと視線を向けた。

夜明けにはまだ早い、空が若干白み始めている。

今日はトリステイン魔法学園へと向かい、学園に残っている女生徒達に軍事教練の指導を行う予定が入っている。

本来アニエス率いる銃士隊も今回のアルピオン侵攻に参加する筈だったが、最高司令官ド・ポワチエ將軍の策略によって、数少ない本国に残る部隊の一つに指名されたのだ。

ド・ポワチエは銃士隊に対して「近衛の銃士隊におかれては陛下の護衛に全力を注がれたし」ともつともそんな理由を与えたが、早い話、アニエス達がメイジでない事を軽んじたのだ。

更にド・ポワチエ將軍は、平民である銃士隊に手柄を取られては貴族の沽券に関わると私情を含ませているのだ。平民風情に手柄はやらんと、表にこそ出さないながらも腹

の底で思っているド・ポワチエ將軍の思惑をアニエスは感じていた。

アニエスはベッドから出ると、自分の寝汗で濡れた寝間着を乱暴に脱ぎ捨て、下着姿のまま棚の水差しを手にとってコップへ注ぎ、少し温い水を一気に呷った。

水が食道を通って胃へと流れるのを感じながら、アニエスは自分の机に置かれている本へと視線を向けた。

トリスタニアの宮殿、東の宮の一隅に作られた王軍の資料室。王軍でも高位の位を持たなければ立ち入れない資料室から拝借して来た本だ。

本来、資料室から本を外に、それも無断で持ち出すなんて事は決して許されない事だが、アニエスにとつてはどうでも良い事だった。

その本は、あの「ダングルテールの虐殺」について書かれた物だからだ。

ダングルテール。かつて何百年も前にアルピオンから移住して来た人々によつて開かれたその海に面した北西部の村々は、常に歴代トリステインの王達を悩ませる場所だった。

独立独歩の気風があり、何かと中央政府に反発を繰り返していたからである。

宗教国家ロマリアの一司教から新しい宗教が普及され、進取の気性に富んだ村人達はその宗教を取り入れてから百年余り、その宗教を優先して、此方の新制度を全く受け入れないかと歴代の王は不安に駆られていたが、アルピオン人の飄々とした気質も色濃く

残した村人達は飲むべき所は素直に飲んでいた。そのお陰で厳しく弾圧される事は無かった。

しかし、そんな日々に終わりを告げるきつかけとなった出来事があった。

幼いアニエスが見つけた、大粒の赤いルビーの指輪を身に付けた女性漂流者、ヴィットーリアを匿った事である。

ヴィットーリアはロマリアの新教徒狩りから逃れ、そのヴィットーリアを匿った事がロマリアにバレてしまい、リツシュモンはロマリアから賄賂を貰って「伝染病の壊滅」というもつともらしい理由で村を焼き払ったのだ。

ロマリアで新しい法王が生まれて新教徒狩りは打ち切られたが、アニエスの負った心の傷は癒える事はない。

自らの手で始末する事は出来なかったが、リツシュモンが死んだからといって復讐が終わった訳ではない。

アニエスは机に置かれている本を手を取った。表紙には「アカデミー実験小隊」と書かれている。

忌まわしき「ダングルテールの虐殺」を実行した、貴族の小隊の名簿である。中には思わず驚いてしまう人物の名も書かれていた。最も、殆どの隊員は既にこの世から亡くなってしまうが。

アニエスは本を開いて目当てのページを開くと、歯噛みしながらそのページを睨み付けた。

「アカデミー実験小隊」の小隊長のページ。其処だけが破り抜かれているのである。一番許せない、最も罪深い人間の名前がわからない。

しかし、名前はわからずとも、アニエスにはその小隊長を見つけたら見抜ける自信があった。

あの「蛇の眼」。あの眼は一生忘れる事はない。あの眼をした人間がそんなに多く存在するとは思えない。

その眼の持ち主こそ、自分が最も怨み、この手で殺さねばならぬ人間、小隊長に違いない。

アニエスは壁に掛けてあった自分の剣を鞘から抜いて、刃に鏡の様に写る自分の顔を暫く眺めた後、剣を掲げて瞳を閉じて刃の腹に額を押し当てた。

あの男……確か、カズマ、と言っただろうか。暗い道を歩み続けた者は先を見るのが嫌になり、永遠に闇の中を彷徨う事となると言っていた。

確かにその通りかもしれない。しかし、自分は違う。復讐を成し遂げなければ、見えぬ光もある。そして自分は、その光を得る為に此処までやって来たのだ。

開いた瞳に映るのは、剣の腹に鏡の様に写る憎悪に染まった瞳の自分の顔。

「復讐するは……我にあり！」

誰も居ない部屋の中で、アニエスの声が虚しく響いた。

アニエスが悪夢から目を覚ます数時間前。

日付が変わる頃に、アルビオンの首都ロンデイニムから馬で二日ほどの距離にある口サイスの街の港から一隻のフリゲート艦が出港した。

艦にはワルドとフーケ、そしてメンヌヴィルが率いる傭兵の小隊が乗っていた。

このまま予定通りに艦が進めば、明日の早朝には目的地であるトリステイン魔法学園に着く事になりそうだ。

艦の中の狭い部屋で、ワルド達は作戦の会議をしていた。

作戦の目的は魔法学園の占拠。クロムウエルの話によると、そこに残っている生徒達と教師達を人質に取り、連合軍への切り札として使う腹づもりなのだ。

作戦は至って単純な物だった。宵闇に乗じてトリステインの哨戒線を潜り抜けて魔法学園へ直接乗り込み、占拠する。

「確かに相手は子供だけど、それでもメイジの巢にかわりはないわ。そんな所を強襲するなんて、上手くいくの？」

作戦の概要を聞いていたフーケが溜め息混じりに言う。確かに宝物庫を狙った際は

上手くいったが、それはあくまで狙いが宝物庫だけだったからに過ぎない。

「ドット」や「ライン」クラスのみとはいえ、大多数のメイジを相手に戦うのは無謀以外の何物でもないのではないだろうか。

「確かに。しかし、今は教師の殆どは戦場へと駆り出されている。男子生徒もな。今、学園にいるのは戦いに慣れていない女生徒のみだろう。メイジである事にかわりはないが、所詮は甘やかされて育ったお嬢様に過ぎん。攻め入るには簡単な筈だ」

ワルドの言葉に訝しげな顔を浮かべるフーケに、メンヌヴィルがニツと笑みを浮かべて頷いた。

「教師共も戦場に出ているのは間違いないだろう。貴族とはそういう物だ。面倒な連中よ。誇りや名誉の為に命を簡単に投げ出せるのだからな」

メンヌヴィルの自嘲の含まれた物言いに、フーケは鼻で笑った。

「あんたも元貴族だから分かるって言いたい訳？」

「そういう事だ。最も、メイジの殆どは元貴族だろうか？ あんたもそうだよな、マチルダさんよ。」

貴族時代の名前で呼ばれ、フーケは少し照れ臭そうに顔を赤らめた。そんなフーケの反応にメンヌヴィルの部下達が下品な口笛を吹くと、ワルドが鋭い視線を送って辞めさせた。



そんな様子を見て、メンヌヴィルが小さく笑う。

「すまん、子爵。俺の部下は躰はなっているが、作法は余り知っている方ではなくてな。あんたの女に不快な思いをさせたなら謝るよ」

「……別に、この女は俺の女な訳ではない。これからの作戦に対して緊張感がないからたしなめただけだ」

不機嫌そうにメンヌヴィルに対して言うワルドがチラリとフーケへと視線を向けると、フーケはメンヌヴィル達に顔を背けながら悪戯っぽい視線を此方に向けていた。

そんなフーケにワルドは小さく舌打ちする。

メンヌヴィルは二人のやり取りなど興味がないのか、手に持った杖を弄りながら口元に笑みを浮かべていた。

「ああ……。早く魔法学園とやらに行きたいものだ。早く人を焼きたい。あの焼ける臭いを嗅ぎたい」

一人口ずさむメンヌヴィルを気持ち悪そうな顔で見ながらフーケが口を開く。

「人が嫌いなのか？」

「逆だ。大好きさ。だから焼くんだ。己の炎に燃える人間が醸し出すあの臭い……。堪らぬ物があるだろう？ あの臭いを嗅ぐ事だけが、俺を興奮させてくれる。まるで絶世の美女を抱く様に」

ワルドは顔をしかめ、フーケはゾクツと背筋に冷たい物を感じながら息を飲んだ。生理的に受け付けけない、嫌悪感の様な物をメンヌヴィルに感じたのである。

「それに気付かせてくれたのは、俺が二十歳の時に所属していた部隊のお陰だな。あそこでの経験が、俺に「人を焼く」という真の快感を教えてくれたんだ」

「部隊？」

ワルドは少し興味がある様にメンヌヴィルに問い掛けた。

メンヌヴィルは軽い咳払いをしてから、語り始めた。

「二十年前、俺は二十歳になったばかりの貴族士官でな。「アカデミー実験小隊」って部隊に配属されたんだよ。その小隊は文字通り実験的な部隊でな。なんせ初めて貴族、メイズのみで構成された部隊だったのさ。しかし、ワルド子爵。あんたが居た様な魔法衛士隊みたいな戦の花形部隊って訳じゃない。下級貴族で構成された、汚れ仕事専門の何でも屋みたいな物さ。野党退治や田舎貴族の反乱鎮圧とか、そんな仕事があれば真っ先に投入された。早い話、表舞台には出せない、お偉いさん方の使い捨ての便利な駒って奴さ。そこでその部隊の隊長つてのが、とんでもなく凄いい奴でな」

「隊長？」

メンヌヴィルの言葉に、フーケが首を傾げながら口を挟んだ。

メンヌヴィルは頷くと、笑みを浮かべて話を続けた。

「その隊長つてのは俺と対して歳の変わらない男だったんだが、こいつの肝はとにかく据わっていてな。何せ顔色一つ変えず、眉一つ動かさずに敵を焼き払うんだからな。俺はその隊長が前線に立つ度に惚れ惚れしたもんさ。その隊長はちよつと変わった奴だな、普段はそうでもないんだが、一度杖を掲げれば、まるで蛇の様な冷たい眼をしやがるんだ。あの瞳で見つめられる度に、まるで恋した餓鬼の様に胸が高鳴ったもんだ。そしてその隊長に徹底的に惚れ込んだのが、あの作戦だ。トリステインの北の隅っこにあつた、ダングルテールって田舎の寒村。そこで疫病が流行って手が付けられないから、外に菌が漏れる前に焼き滅ぼせて命令があつてな。かなり上からの命令つて事で、俺達は直ぐに急行した。そして村の少し手前で、あの隊長はとんでもない事を始めた。なんと、村に向かって火の雨を降らせたのさ。「フレイム・レイン」。聞いた事があるだろう?」

「フレイム・レイン」だと?」

ワルドは魔法の名前を聞いて思わず少し身を乗り出した。

「フレイム・レイン」。「火」の「スクウエア」クラスの魔法で、文字通り火の雨を降らせて全てを焼き払う。ただし、その雨の範囲を操るのはかなり困難で、狙い通りに発動出来た例は殆どなく、大半が不発か、自爆の様に自分も巻き添えを食らうかのどちらかなのだ。

「ああ。あの隊長はそんな高等魔法を難なく操り、一瞬にして村を火の海にしたよ。しかも念を入れて、わざわざ村へと出向いて、女も子供も容赦なく生き残った村人を焼き払った。でも確か一人だけ、気絶していた子供を焼かずに連れてきたんだっけか。アカデミーに引き渡して疫病の研究材料にするとか何とか言つてな。まあ、結局その村には疫病なんざあ無かつたんだがな」

「疫病が、無かつた？　なら何で村一つを焼いたのよ？」

フーケがメンヌヴィイルに問い掛ける。

「新教徒狩りつて奴さ。ロマリアから圧力がかかつたんだと。一人てめえ(自分)の国から逃げた新教徒の女がその村に匿われている。今後もこの様な事があつては面倒だから、その女もろとも村を焼き払えつてな。疫病なんて言うのは、その為の口実に過ぎなかつたのさ」

ワルドは表情を変えずに聞いていたが、フーケは露骨に不快感を露わにしてメンヌヴィイルを睨み付ける。

しかし、メンヌヴィイルはそんなフーケの表情等気にしていない様に話を続けた。

「そしてダングルテールの鎮圧任務が終わった時、俺はその隊長にぞつこんに惚れた。この男の様になりたい、本気でそう思った。その瞬間、俺は隊長の背中目掛けて杖を振つていた」

「惚れた相手に攻撃したって言うの？ 理解に苦しむわね」

「だろうな。まあ、正直俺にもあの時何故杖を振ったのかわからなかったが、今なら分かる。試したかったんだ。俺が惚れに惚れた目の前の男が、本当にそんな器があるのかどうかを。俺に殺されるくらいじゃあ、所詮はその程度の男だったって事に過ぎないからな」

「で、どうなったんだ？」

「ワルドが余計な考察を飛ばして結果を話せと言わんばかりにメンヌヴィルに問い掛ける。」

メンヌヴィルは口元をニイツと歪めて自身の焼けただれた目元を指差した。

「これで済んだ。あいつは本物だった。俺は渾身の魔法を撃ち込んだ筈だった。それであいつは軽くあしらいやがった。まるで飛んで来た虫を払い除ける様にな。そのまま俺は隊を脱走した。隊長に杖を向けておいて、隊に残ってられる訳がないからな」

「それで？ 惚れた男にやられたあんたはどうしたの？」

「今に至るって訳さ。傭兵をやっていたら、あの隊長にまた会えるかもしれない。そう信じてやって来たんだが……それももう終わった。誰かに殺られたか、はたまた引退したか……それはわからないが、俺に火傷を負わせたあの隊長の噂を聞く事は無かった。あいつを殺す為に魔法を極め、あいつを殺す為に強くなつて来たつてのに。俺はあの時

の何倍も強くなった。なのに肝心のあいつが、あの隊長が何処にも居ない」

メンヌヴィルは深い溜め息を漏らしながら俯いた後、火傷を負った目元を片手で押さえながら顔を上げ、高らかに笑った。

「ああっ！ もう一度あいつに会いてえ！ 会って強くなった俺を見て貰いてえ！ 俺はあの日、あの隊長に杖を向けた事をこれっぽっちも後悔した事はない！ 人殺しになった事も、貴族の名を捨てた事も！ なのにあの隊長だけが何処にもいねえ！ 夜な夜なあの蛇の眼を夢に見る度に、この火傷が疼きやがる！ 一生消える事のないこの疼きが俺を苛つかせやがるのさ！」

フリゲート艦が飛ぶ夜明け前の空に、メンヌヴィルの笑い声が響き渡った。

教師と男子生徒の殆どが従軍した事によって、まともな授業の時間が減った魔法学園にアニエス率いる銃士隊の騎馬隊が現れたのは、コルベールが桐生達を見送った日の昼だった。

学園に残っている女生徒達は門から現れた、騎乗した近衛隊の姿に驚いた。誰も彼もが一体何事だろう、と顔を見合わせては首を傾げている。

そんな女生徒達が周りにいる中、学園長のオスマンがアニエス達を迎えにやって来た。

「アニエス以下銃士隊、ただいま到着致しました」

馬から降りたアニエスは他の隊員達も馬から降りさせ、オスマンに深く頭を下げた。「ふむ、よう来なすった。お勤め、ご苦労様な事じやな」

立派に蓄えられた顎髭を扱きながら、オスマンが口にする。が、内心は穏やかな物ではない。

昨晚、王室より銃士隊を派遣して、残っている女生徒達に軍事教練を施させるという報せが来た。どうやらアンリエッタの王政府は、男女問わずに貴族という貴族を戦場へと駆り出す算段らしい。女生徒達も予備士官として確保しておいて、アルビオンでの戦いで士官が消耗し次第補充に当てるらしい。

男だろうが女だろうが、輝かしい未来を持つている子供達を戦場へ駆り出す等、オスマンには許せなかった。だからこそラ・ロシエールでの王軍見送りの式典に学園の女生徒と共に参加しなかった。しかし、それが王政府を刺激する結果となってしまうらしい。

「戦とは言え、子供まで参加させるとは……酷い物じやな」

「仕方ありません。此度の戦、「総力戦」と王政府は呼んでおります」

「「総力戦」じゃと？」

オスマンは小馬鹿にする様に鼻で笑って見せた。

「もつともらしい言い方をすれば良いという物ではない。女子供まで駆り出し、流れた血で汚れた旗を振るつた所で正義等ある筈がなからう」

そう言うオスマンをアニエスは冷たい視線で睨み付けた。

「ならば学園長殿に問いましよう。貴族の紳士や兵隊のみが死ぬ戦には、正義は存在するのですか？」

アニエスの問いかけに、オスマンは口を閉ざして僅かに後ずさる。

そんなオスマンを見ながら、今度はアニエスが鼻で笑つて見せた。

「死は平等です。女だろうが子供だろうが、容赦無く、等しく訪れる。それだけの事です」

苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべるオスマンを一瞥した後、アニエスは部下を引き連れて本塔へと向かつて歩き出した。

キュルケやモンモランシー等、残された女生徒は数少ない授業を受けていた。

キュルケは目の前の教壇に立っている、学園に残った数少ない男性教師、コルベールを軽蔑した眼で見つめていた。

懸命に黒板に炎の方程式を書いては、その結果や炎がもたらす恩恵についての講義を続けている。その顔はイキイキとしており、落ち着かない様子で授業を受けている女生



徒の心境等どこ吹く風といった様子である。

コルベールの講義が続く中、手を挙げた女生徒がいた。  
モンモランシーだ。

「おや、質問かね？ ミス・モンモランシー」

名を呼ばれ、質問が許されたモンモランシーは立ち上がった。

「今は、国を挙げての戦争の最中です。それなのに、こんな風に……呑気に授業をしていて良いのでしょうか？」

モンモランシーや他の女生徒もそうだが、自分の大切な恋人が戦場へと向かい、そしてアルビオン軍と戦っているのを思うと、今の自分達が受けているこの授業の時間ながらも無駄な物の様に感じてしまうのだ。

そんなモンモランシーに対して、コルベールは困った様な表情を浮かべて禿げ上がった頭を掻いた。

「呑気にも何も……此処は学び舎で、君達は生徒だ。そして私は教師だ。従って、此処では授業を受けるのが正しい事なのだよ」

コルベールは感情のない声で言った。

そんなコルベールに、モンモランシーは納得のいかない様子で首を振った。

「でも、クラスメイトや先生方だって戦場へと向かっているんですよ？」

「だからこそ、君達は学ばなければいけないのだ。そして戻つて来た彼等に教えてやると良い。戦争という物が如何に愚かな行為である事を。「火」の正しい扱いは破壊等ではなく、他者を救い、守る為にあるという事を」

コルベールが席に座る女生徒達全員へと顔を向け、普段とは違う高圧的な声で語つた。そんなコルベールのらしくない様子に数人の女生徒は戸惑つた様に身体を揺らしながら驚いた。

一瞬の静寂の後、講義そつちのけで爪の手入れをしていたキュルケは、ヤスリで磨かれた爪にふつと息を吹きかけてから小馬鹿にした様に笑つた。

「先生、貴方は単に戦が怖いだけじゃありません事？」

自身の父親位の歳の男を見下しながらキュルケが言い放つと、コルベールは何の躊躇いもなく頷いた。

「その通りだ、ミス・ツエルプストー。私は戦が、戦争が怖い。恐らく、この教室にいる誰よりもね」

何の恥じらいも無く堂々とそう口にするコルベールへのキュルケの視線は小馬鹿にする物から軽蔑する物へと変わっていった。

「ミスタ・コルベール？　そういう人間を何と言うかご存知かしら？」

「普段、あまり真面目に授業を受けてくれない君から講義を聞けるとは思わなんだ。ぜ

ひとも、教えて貰おうか」

キュルケは段々得体の知れない苛立ちが胸を埋め尽くしていくのを感じた。

自身より遙かに年下の少女に馬鹿にされていると言うのに、コルベールは何処までも余裕の表情で腕を組みながらキュルケの言葉を待っている。

その表情が、態度が、視線が気に入らない。

キュルケの中で何かが爆発し、机を強く叩きながら椅子から荒々しく立ち上がってコルベールを指差すと、怒りに染まった表情で叫んだ。

「ならハッキリと教えて差し上げようじゃない！ あんたみたいな人を、「臆病者」って言うのよ！ 戦場へと向かう勇氣もない、こんな意味があるとも思えない授業をするしかない、あんたみたいな人を！ 自分よりもずっと年下の子供達が勇氣を出して戦場へ向かったって言うのに、あんたは恥ずかしくない訳!？」

らしくも無く声を荒げて一気に捲し立てたキュルケを、遠くからタバサが見つめていた。

普通の人間ならばただ無表情のまま見つめているだけに見えるかもしれないが、その視線からはキュルケを心配するタバサの想いが込められていた。

他の女生徒達はそんなタバサの視線に気付かず、キュルケの様子に驚いていた。キュルケは普段、どんな嫌味や小言も余裕で聞き流し、常に相手を冷静に小馬鹿にしている

のに、今のキュルケからはそんな余裕は微塵も感じられない。

呼吸を荒げながら睨み続けてくるキュルケの視線を真つ直ぐ受けながら、コルベールが小さく頷いて見せた。

「なるほど。私の様な人間は臆病者と言うのか。ふむ。ならば私からも一つ、君に……いや、この場にいる君達に教えておこう。恐怖する事を臆病だと思うのは、若さ故の特権だ。もちろん、恐怖を乗り越える事はとても大切な事ではあるがね。しかし、覚えておくといい。怖いものを素直に「怖い」と口にする事も、一つの勇気なのだよ。それが理解出来る様になるには、君達はまだ若過ぎるかもしれないがね」

寂しげな表情で口にするコルベールに、女生徒達は戸惑った様にそんな彼を見ていた。

キュルケは納得がいかないながらも、何を言ってもコルベールには響かないのを察して、馬鹿馬鹿しくなって深い溜め息を漏らしてから力無く席に着いた。

キュルケが席に着いたのを見計らって再び講義を始めようとした時、教室の扉が開いて銃士隊が遠慮無く入って来た。

鎖帷子に腰から下げた剣と銃。そんな重々しい格好の女性の一団が現れた事に女生徒達からざわめきが走った。

「な、何だね、君達は？」

「そう問いかけるコルベールを無視して、アニエスが女生徒達を見回して口を開く。

「諸君、突然現れた我々に驚かれるのも無理はないが、静かにして貰おうか」

凜としたアニエスの声に教室の中に湧いていたざわめきが止まる。

「我々は女王陛下に仕えし銃士隊だ。陛下の名において、諸君等に命令する。これより授業を中断して軍事教練を行う。直ちに正装して中庭に整列せよ。以上だ」

アニエスの言葉が聞き捨てならなかったコルベールが両手を振って抗議の声を上げる。

「授業を中断だと!? そんなふざけた事、私は認めませんぞー」

抗議の声を上げるコルベールを一瞥すると、アニエスは首を振って小さな溜め息をして見せた、

「私だつて子守は御免だし、せつかく残った貴殿の職務を無駄にする様な無粋な真似はしたくは無いが、これも女王陛下からの命令だ。仕方あるまい」

女生徒達はぶつぶつと文句を言いながらも次々と立ち上がり、教室から出て行こうとする。

そんな女生徒達に、コルベールは声を張り上げて制止した。

「諸君! 待ちなさい! まだ授業の途中ですぞ! 後十五分は私が任されているのです! 何の役にも立たぬ教練等より、私の授業を聞きなさい! 少なくとも教練の無意

味さがー」

コルベールの訴えは、喉元に突き付けられた、アニエスが引き抜いた剣によつて静止された。

窓から差し込む日の光が、抜き身の刃を鈍く輝かせている。

「教練が何の役にも立たぬとは……本職を愚弄するには言葉が過ぎるな、ミスタ？ 此方がメイジでないからと言つて、余り舐めた態度を取られるのは不快なのだが？」

「べ、別に……舐めた訳では……」

自分の喉元に突き付けられた剣の切っ先に、コルベールはたじろぎながら冷や汗をかき、生睡を飲み込んだ。

不意に、アニエスが鼻をスンスンと動かして見せたかと思うと、怒りに染まった表情は更なる険しさを増した。

「お前、「炎」を扱うメイジだな。焦げ臭い、嫌な臭いがマントから漂っている。一つ、教えておいてやろう。私はメイジが嫌いだ。特に、「炎」を扱うメイジは、なっ」

「うっ！ ぐっ……！」

アニエスの剣の柄がコルベールの腹を強く穿ち、痛みから腹を押さえてコルベールが倒れ込む。

そんなコルベールに舌打ちしたアニエスは視線で女生徒達を急かし、次々と教室から

人が居なくなつて言った。

女生徒達はメイジではないアニエスにあつきりとやられたコルベールを軽蔑する様な眼差しで見ながら教室から出て行く。

「痛い思いをしたくないなら、私の任務の邪魔をするな」

冷たい口調でそう言い放つたアニエスは教練を始める為に残り少ない女生徒を教室から連れ出した。

痛む腹を押さええながら立ち上がったコルベールは、誰一人居なくなつた教室を見回してうな垂れた。

## 第47話

アルビオンへ向かい空を駆ける戦艦隊の間、それぞれの艦で鳴った朝直の鐘の音が響いた。

二国対一国の戦いが始まろうとするこの朝八時を告げる鐘の音の中、一つの戦艦の甲板でギーシュはニコラを相手にスパarringを行なっていた。

朝の冷たい空気が肌を冷やすのも構わず、ギーシュは上半身裸のままニコラの持つ手製のパンチングミットに拳を叩きつけていた。

三時間ほど前から始めた運動から、二人の身体からは熱気が蒸気機関の如く湯気となつて立ち上っていた。

拳の一発一発を確実にパンチングミットにギーシュが叩きつける度、バンツという鈍い音が響き渡る。

「右、右、左っ！ もつと速く！ そら、右！」

「しっ！ しっ！ だあっ！」

ニコラの指示に応える様に左右それぞれの拳を上手く使い分け、パンチングミットへと拳を打ちつけていくギーシュ。



ニコラの両手が重なった所で、思い切り振りかぶって渾身の一撃を叩き付けると、ワ  
ンセットの終わりを告げる様にニコラが構えるのを止める。

「お見事です、中隊長殿。やはり貴方の強みはその足腰のフットワークを活かした「速  
さ」ですね。一撃の重み自体はまだまだですが、そのフットワークの軽さは立派な武器  
になりますよ」

額を流れる汗を腕で拭いながら言うニコラに、ギーシユは膝に手をつきながら荒い呼  
吸で首を振る。

「確かに、動きの速さには多少は自信が、出来てはきた。でも、まだまだだ。まだ僕には、  
足りない物が多いのを感じる」

冷たく肌を切り裂かんばかりに吹く風を火照った身体で心地良く感じながらギー  
シユは言った。「ラッシユスタイル」の完成は間違いないだろうが、まだまだ改良の余地  
を感じているのも事実だった。

そんなギーシユに、ニコラは顎に手を当てて頷いて見せる。

「確かに、中隊長殿の今の動きはそのフットワークを活かした「速さ」が武器ですが……  
同時に弱点でもありますね」

「弱点？」

ニコラの言葉に顎を伝う汗を手の甲で拭い、甲板の柵に引つ掛けていた上着とマント

を取って身に纏いながらギーシュが問いかける。

「はい。中隊長殿は「速さ」を武器に拳や蹴りを乱れ打つのは得意な様ですが、その足腰の軽さ故に防御が脆い」

「防御なんて必要ないだろう？ 攻撃こそ最大の防御と言うじゃないか。それよりもっと速く動ける事の方が大事だよ。どんな強力な攻撃だろうと当たらなければどうという事はない」

「その考えは間違ってますよ、中隊長殿」

少し厳しい口調になったニコラの言葉と表情に、ギーシュは驚いて身体を硬直させる。それはまるで父に叱られた時の様な、親身になっている者から叱咤を思わせる物がニコラの言葉にはあった。

「どんな達人でも、防御は必ず体得してる物です。そして真に強い奴つてのは、攻撃と防御を本当の意味で鍛え上げた人間の事です。防御は勝つ為の手段。それを知らずに強くなった奴なんて居やしないんですよ。現に中隊長殿、貴方はあの三人との喧嘩であつさり防御を崩されましたよね？」

ニコラの指摘に、ギーシュは頬を掻きながらしかめつ面をしながらも素直に頷く。

あの時、慌てていたとはいえ、あの眼帯の男の拳の一発で呆気なく防御を崩してしまった。そこから攻撃を許してしまい、腹に重い一撃を喰らってしまったている。

ニコラの言葉で改めて思い知ったが、場合によってはあの瞬間に命を奪われてもおかしくはない。殴り合いだから良かった物の、剣や銃が使われたら一瞬で終わっていただろう。

「貴方が本当に強くなりたと思うなら、攻める事ばかりではなく、生き残る事も覚えて貰わなきゃ困ります。忘れんで下さいよ？ あんたはもうただのクソ餓鬼じゃない。自分等「グラモン中隊」の頭であり、自分等の命をその背中に背負って貰ってるんですから」

「ごめん、ニコラ。確かに君の言う通りだ。僕は、攻撃こそ一番大事だと思っていた。その考えを改める事にするよ」

以前の自分なら、こんな風に一介の平民でしかないニコラの言葉を素直に聞いたりはしなかっただろう。

しかし、桐生やシエスタ、そしてこのド・ヴィヌイーユ独立大隊の部下達平民との交流を通じて、貴族という立場の拘りがどれだけ自分の視野を狭くし、自分を詰まらない人間にしているのをギーシュは感じている。

今こうしてニコラに言われた一言を素直に受け止められるのも、結局は桐生のおかげとギーシュは思っているが、それは間違いだ。

今はまだギーシュは気付かないだろう。自分が如何に人として成長して来ているの

かを。

ギーシュの謝罪を受けたニコラは、再び朗らかな表情になると顎に手を当てながら首を捻った。

「分かってくれば結構ですよ。ですが、今の中隊長殿の戦い方で防御を意識し過ぎては、せつかくの「速さ」を活かせなくなっちゃいます。ですから、今のグラモン隊長の「スタイル」を崩さずに、防御（まもり）のイロハを守った「スタイル」を覚える必要がありますね」

「そう言われても……僕にはそんな事を教えてくれる様な相手は今はいないし」

桐生ならばそんな「スタイル」を教えてくれただろうが、今は彼も側には居ない。

この戦争から生きて帰れる保証は当然ない。下手をすれば、もう彼に出会えないかもしれない。

少しマイナスイメージな感情が心を支配していく中、そんなギーシュの心情を知ってか知らずか、ニコラがにかつと気持ちの良い笑みを浮かべる。

「いや、実はとっておきの人材が居るんですよ。多分中隊長殿に、防御のイロハを教え込めるほどの守りの達人が」

「……もしかして、君かい?」

ニコラの様子に少しだけ明るさを取り戻したギーシュは思ったまま問いかける。

すると、ニコラは少し残念そうに苦笑してから首を振って見せた。

「いや、残念ですが自分は中隊長殿に教えられるほど防御を得意とはしてません。なに、ちよつと待つて下さい。直ぐに連れて来ますから」

そう言うなりニコラは艦の中へと戻って行つてしまつた。

一人残されたギーシュは横に並ぶ艦隊の群れを見る。これほどの戦艦の数、そうそうに見られる物ではない。それだけ今回の戦争が生半可な物ではないのを物語つていた。

自分は、本当に生きて帰れるのだろうか。「命を惜しむな、名を惜しめ」とのグラモン家の家訓を守つてやつて来たが……今更ながら、戦争の恐ろしさをギーシュは実感していた。

瞳を閉じて脳裏に映るのは、桐生とモンモランシーの顔。あの二人に誇らしく帰還を報告したい。その想いがギーシュの頭を満たしていった。

そんな風に考えていた数分の内に、ニコラが防御の達人と呼ぶ相手を連れて戻つて来た。

その人物を見て、ギーシュは胡散臭そうに目を細める。

ニコラの連れて来た達人と呼ばれた人物。それはこのド・ヴィヌイーユ独立大隊に来た時に大隊長の元まで案内してくれた、あの老傭兵だった。

老傭兵はつい先ほどまで寝ていたのか、緊張感のない寝ぼけ眼で気怠げに大きな欠伸

をして見せた。

「中隊長殿、お待たせしました。彼こそ防御の達人、グレゴリオです。彼ならきつと隊長に良い経験を積ませてくれますよ」

先ほどの気持ちの良い笑顔でニコラは言うが、ギーシュにはとても目の前の老傭兵がそんなに凄い人物には見えない。

歳は六十代くらいだろうか。自分よりも背は低く、出会った時と違って兜が取れた頭は白髪混じりのダークレッドの髪が所々抜けて薄くなっている。コルベールの様に禿げ上がってしまうのも時間の問題かもしれない。

更に後ろ手に組んで立っている姿ははつきり言つて隙だらけだ。今背後から敵が来たら気付かぬ内に殺されてしまう気がしてならない。

疑わしげに此方とグレゴリオを見比べるギーシュの視線に気付いたニコラは、苦笑しながら首を振る。

「中隊長殿、言いたい事は分からなくもありませんが……余り相手を見かけで判断しない方が良いですよ?」

「それは、そうかもしれないけどさ……」

ニコラの事を疑う訳ではないが、こんな今にも再び寝てしまいそうな老傭兵を達人だと言われても説得力を感じない。そもそも傭兵として働いているのかすら怪しく見え

る。

ド・ヴィヌイーユ独立大隊は他の隊ではお荷物になる様な人材の寄せ集めで出来た部隊だ。自分の部下となった傭兵たちは確かに頼もしく感じるが、他の隊の人間までがそうとは限らない。はつきり言って戦力にならない輩も居るのは確かだろう。

不安と疑心に満ちた目でグレゴリオを見つめるギーシュに、ニコラは思い付いた様にポンと手を叩いて見せた。

「中隊長殿、百聞は一見に如かずという言葉があります。どうでしょう？　今この場で、グレゴリオ殿と手合わせしてみてもは」

「ニコラ……本気で言っているのかい？」

ニコラの発言にギーシュは驚きを含んだ声で問いかける。

達人だか何だか知らないが、こんな老人を相手にして何になると言うのだろう。寧ろ側から見たら虐めている様に見られてしまうのではないだろうか。

そんなギーシュの不安等どこ吹く風とばかりにニコラはグレゴリオに顔を向ける。

「グレゴリオ殿、寝起きでまだ本調子ではないと思いますが、是非とも中隊長殿に胸を貸して頂きたい。如何ですか？」

ニコラの言葉にグレゴリオは面倒臭そうに溜め息を漏らしてから後ろ手に組んだ腕を前に出して肩幅ほどに脚を開くと関節をゴキゴキ鳴らしながら首を回す。

グレゴリオの行動を了承と取ったニコラはギーシュに向き直ると近づいてそつと耳打ちする。

「中隊長殿、先に警告しておきます。グレゴリオ殿をただの老人と見たら痛い目に合いますよ?」

「……わかつたよ」

自分よりもか弱そうな年寄りに拳を振るうのにはまだ抵抗はある物の、ギーシュはゆつくりと構えを取ってグレゴリオを見詰める。

まあ、怪我をさせてしまわぬ様に少し気を遣えば大丈夫だろう。そう思いながらギーシュは軽くグレゴリオに向かって左のジャブを繰り出す。

すると、グレゴリオの右腕がギーシュの拳が当たるギリギリで突然顔面を覆う様に上げられ、その見かけ以上に硬い前腕にギーシュの拳は弾かれてしまう。

老体からは想像出来ない予想外な素早い動きに面食らうギーシュに、退屈そうにグレゴリオは大きな欠伸をしながら上げた腕を下ろす。

グレゴリオの欠伸にカチンと来たギーシュは、もはや手加減等せず得意のステップを混ぜて殴りにかかる。

ジャブやアツパー、更にはハイキックやローキックを織り交ぜ変幻自在の攻撃を繰り出すも、グレゴリオはその都度左右それぞれの腕と脚を動かしてギーシュの拳と蹴りを



いとも簡単に防いで行く。

自分の攻撃が全く当たらずに焦りと苛立ちを伺わせるギーシュに対して、グレゴリオは何処までも退屈そうな表情でまるで近寄る虫を叩き落とす様に攻撃を防いで行く。

ギーシュは遂に苛立ちから一步後ろに引いてから左脚で踏み込み、自分の繰り出せる攻撃の中でも最も素早く、最も連打の多い右脚による「ラツシユキツク」をグレゴリオに浴びせる。

股関節と膝の関節を器用に動かして目にも留まらぬ速さで連続蹴りを繰り出す、ギーシュなりの「ラツシユスタイル」における「フィンニツシユブロウ」の一つだ。

グレゴリオも流石にその速さに驚いたのか、両腕を上げてギーシュの蹴りを受け止める。

体力の続く限り蹴りを繰り返した後、止めとばかりに右脚を地面に着いて軸にし、身体を回転させて左脚による回し蹴りをグレゴリオをお見舞いする。

蹴りの衝撃でグレゴリオの身体が数歩後ろへと仰け反るが、ギーシュは額から頬に汗を伝せながら舌打ちする。

自分が可能な限りに蹴りを繰り返したにも関わらず、グレゴリオはその蹴りを全て両腕で受け止め切った様だ。

両腕を下ろしたグレゴリオの身体には傷一つなく、表情からも焦りや痛みの色が見え

ない。

グレゴリオはチラリとニコラの方へと視線を向け、その視線からグレゴリオの意図を読み取ったニコラは少し迷った様に視線を泳がしてから頷いた。

二人のやり取りに気付かないギーシュは呼吸を整えてグレゴリオの脇腹目掛けて右足の蹴りを繰り出す。

今度はグレゴリオも腕を上げずに蹴りを防ぐ様な仕草を見せない。

ようやく当たる。その確信にギーシュの口元に笑みが浮かぶ。

その瞬間、ギーシュの右脚はグレゴリオの脇腹に当たったのと同時に、グレゴリオの左腕が右脚を脇腹と挟む様にあてがわれてギーシュは自由を失う。

右脚の自由を奪われ、驚愕の表情を浮かべるギーシュに対して、グレゴリオは右脚で身体を支えているギーシュの左脚を強く蹴り飛ばす。

不安定な支えしかなかった左足を蹴られてギーシュが呆気なく地面へと倒れ込むと、グレゴリオはそのまま左腕と脇で右足を挟んだまま身体を回転させて勢いを付けてギーシュを投げ飛ばす。

硬い甲板に立て続けに背中を打ち付けられたギーシュは転がったまま背中を押さえながら苦痛に顔を歪める。

そんな風に悶えるギーシュにニコラが近付き、しゃがみ込みながら溜め息混じりに口

を開いた。

「言つた筈ですよ、中隊長殿。ただの老人だと思つては痛い目をみると」

ニコラの言葉がギーシユの頭の中で木霊する。

ギーシユはグレゴリオを完全にナメていた。自分よりも背が小さい、こんな老人が強い訳がないと。その結果が、今感じている痛みとなつて身体に返つてきた。

ギーシユは痛みを訴える身体に鞭打つて立ち上がると、グレゴリオを真つ直ぐ見詰めた。

「貴方の強さは良くわかつた。防御が如何に戦いの中で大切なのかも思い知つた。だから、頼む。いや、お願いします！ 僕に防御のイロハを教えて下さい！」

ギーシユは背筋を伸ばして深く頭を下げながら叫んだ。

ニコラはそんなギーシユを見てから懇願する様な眼差してグレゴリオを見詰める。

しばらく頭を下げるギーシユを見詰めたグレゴリオは、今一度面倒臭そうに溜め息を漏らした。

「貴族が儂みたいな平民に、簡単に頭を下げるんじゃない」

少ししやがれたその声に慌てた様にギーシユが顔を上げると、グレゴリオがちよいちよいと指を動かして見せた。

「先ずは構えから行く。今の中隊長殿の構えでは腰に重さがない。そんな足腰では簡単

に飛ばされてしまう。ほれ、こっちへ来られい。儂の我流でもあるが、しっかりと攻撃を受け止める構えを教えてしんぜよう」

「は、はいっ！」

ギーシユは瞳を輝かせながらすぐさまグレゴリオへと駆け寄る。

そんな二人を見て、まるで祖父と孫の様だとニコラは内心思いながら一人静かに笑った。

ギーシユは早速グレゴリオから防御についての講義を受ける。まずは構えと言われ、言われた通りの体勢を取ってみる。

両脚を肩幅ぐらいまで広げ、両腕は垂らした状態から肘を曲げてなるべく広げ過ぎぬ様に、かといって締め過ぎて脇にくっ付けない様にする。

そんな風に構えると「ラツシユスタイル」の時よりも動きは鈍くなってしまうが、両脚がしっかりと地に着いている感じがして身体も安定しているのを感じる。

「良いかな？ 防御で大切なのは、如何に確実に攻撃を受け止めるかと儂は思っている。攻撃を受け止めるには、足腰をしつかりと固め、重心を身体の中央になる様に意識するのだ。達人の領域になれば、その行為が瞬時に行えるだろうが、貴殿はまだその域に達するには時間が掛かる。ならば最初から防御を意識して、相手の攻撃に即座に対応出来る構えを習得しておいた方が良かろう」

ギーシユの身体に時折触れながら構えがしつかりと作られたのを見たグレゴリオは満足そうに頷く。

「ふむ、先ずはこんな所か。次は実際に攻撃を防いでみよう。良いか？ 今から儂が貴殿に殴り掛かる。両腕をしつかりと上げて顔面を殴られない様に覆いながら崩されぬ様にしつかりと脇を締め、腹に力を込めて身体を重くするのを意識せよ。では、行くぞ」グレゴリオの指示通りに両腕を上げて、顔の前を前腕で覆う様にしながら脇をしつかりと締める。そして重心が身体の中央に来るのを意識しながら腹に力を込めて攻撃を受け止める準備を完了させた。

ギーシユがしつかりと防御の体勢を取ったのを見越したグレゴリオは、やや大振りな動きでギーシユに殴り掛かる。

硬い拳が自分の両腕に打ち付けられ、その痛みと衝撃に顔を歪ませるも、眼帯の男に殴られた時よりも拳を受け止められているのを感じる。

衝撃に耐えかねて少しだけ身体が後ろへと下がってしまったが、それはグレゴリオの拳の重みのせいだけで、自分が足を動かした訳ではない。

数回試す様にギーシユを殴ったグレゴリオは満足気に頷きながら腕を下ろした。

「ふむ、若さ故か飲み込みが早く、筋も良い。どうか？ 初めてともに攻撃を防いでみた感想は」

「……今迄意識した事はなかったけど、身体が普段よりも重く感じて、攻撃を受け止めた瞬間にしっかりと防げてるのを実感した。ただ、やっぱり殴られた腕は痛いんだね。当たり前な事だけど」

グレゴリオの拳を受け止めてビリビリ痺れる様な痛みが走る腕をさすりながら、ギーシユは苦笑して感想を漏らす。「ラツシユスタイル」の軽さがなくなった分、攻撃を受け止める時の衝撃はかなり軽くなった様に感じた。

そんな風に話すギーシユに、グレゴリオは優し気な笑みを浮かべながら頷いた。

「腕に痛みが走るのは当たり前だが、それも鍛えて身体をしっかりと作れば軽くなる。ふむ……正直まだ教えるには早いとは思っていたが、今は戦中。生き残る為にも、次の段階へと進むか」

「次の段階？」

ギーシユが首を傾げながらグレゴリオに問いかける。

「今儂が教えたのは、あくまでも防御の基本に過ぎぬ。確かに相手の攻撃を確実に防げるかが防御において大事だとは言ったが、守り一辺倒では当然勝てる物も勝てない。だから相手の攻撃を防御しつつ、一瞬の隙を突いた起死回生のカウンターを教えてしんぜよう。先ほど、儂が貴殿の蹴りを受け止め、脚を蹴り払ったのは覚えておるな？」

「ああ……。あれは正直驚いたよ」

先ほどのグレゴリオのカウンターを思い出してから、背中の痛みがまた蘇りそうになるのをギーシユは首を振って振り払った。

グレゴリオは頷きながら言葉を続ける。

「余程の強者でない限り、一瞬とは言え四肢の自由を奪われた者はパニックに陥る。更に本来ならば使える手足の一本が欠ければ、当然防御も疎かにならざるを得ぬ。そこを突いて打撃や投げを繰り出すのが儂のカウンター術の真髄だ。儂はあの技法を、掴んで相手を制する事から「キヤッチ」と呼んでおる」

「「キヤッチ」？」

聞き慣れない言葉に思わず首を傾げながら鸚鵡返しのように言うギーシユに、グレゴリオは構えを取って見せる。

「先ほどの手合わせで分かっていたが、貴殿は目が悪い方ではない。相手の動きをしつかりと見据え、可能ならば掴み、攻撃を返してみると良い。まあ、言葉よりも身体で学ぶ方が中隊長殿は向いておるだろう。今から儂が軽く攻撃してみる。無理はせずに、可能だと思つたら遠慮なく掴んでみるが良い。では、行くぞ」

グレゴリオの掛け声に急いで構えたギーシユは気合いを入れ直そうと短く深呼吸して頷いた。

先ほどよりも遅い動きのグレゴリオの攻撃を上げた両腕で受け止めながら、懸命に拳

の動きを目で追う。

最初はそんな風に拳を目で追う余裕があまりなかったが、防御の構えを続けている内に身体がその体勢に慣れてきたのか次第に目の動きにも余裕が出来て来た。

ギーシユは咄嗟にグレゴリオの拳を掴もうと構えていた腕を動かす。しかし、読みが甘いせいで上手く行かず、顔面に拳を食らってしまい身体を仰け反らせ目を閉じる。

「痛みを恐れるな！ 戦いの最中に目を瞑る等してはならん！ 目を動かせ！ 間合いを読め！ 強くなりたいたいならば、諦めるなっ！」

グレゴリオの叱咤にギーシユはカツと目を見開き、再び防御の構えを取って拳を受け止める。

それから数回、グレゴリオの拳を掴もうと腕を動かしては失敗してしまい、顔面を殴られる。

痛みに懸命に耐えながらギーシユは拳の動きを追い、左の拳を打ち込んできたグレゴリオの腕の首首を遂に掴む。

ようやく掴む事が出来た事に喜びを露わにするギーシユの視界に、グレゴリオの厳しい表情が映る。

「何をしておる？ 掴んだのならば攻撃だろう？ 敵はこんな風に待つてはくれんぞ」

グレゴリオの言葉から喜びよりも申し訳なきを感じたギーシユは、一度瞳を閉じた後



渾身のボディブローを打ち込む。

一瞬、グレゴリオの身体が呻き声を上げながら僅かに浮かび上がり、解放された腕で腹を押さえながら後退りながら苦痛に顔を歪める。

「そうだつ！ それで良いつ！ 掴み、生まれた隙から容赦無く打ち込むつ！ これこそが「キヤッチ」の真髄に他ならぬ！」

痛みに耐えて脂汗を流しながら何処か嬉しそうに笑みを浮かべてグレゴリオが言う。そんなグレゴリオの笑顔を見た瞬間、ギーシュの中で閃きが走った。

「ラッシュスタイル」の様な素早い動きが無くなった代わりに、どつしりと構えた鉄壁の防御で攻撃を防ぎ、「キヤッチ」で動きを封じて重い一撃のカウンターを繰り出す。

自身の中で閃かれた新たな「スタイル」、防御とカウンターをメインにした「ディフェンススタイル」が生まれた。

ギーシュの顔色から何かを掴んだと読んだグレゴリオは、痛みが引いたのか身体を伸ばしながら目を細めた。

「儂が教えられる事は全て教えた。しかし、忘れてはならぬぞ。儂が教えたのは基本でしかない。これからは貴殿自身の経験と発想で更なる高みへと昇るが良い」

「ありがとう……。ありがとうございましたっ！」

再び背筋を伸ばして深々と頭を下げて感謝を述べるギーシュに、グレゴリオは苦笑し

ながら首を振った。

「言つた筈だ。貴族が儂の様な平民に簡単に頭を下げるなど。しかし……貴殿の感謝、しかと受け取つたぞ」

グレゴリオは優しげな笑みを見せながら背を向けると、軽く手を上げながら艦の中へと戻つて行つた。

グレゴリオを見送つたニコラはギーシュに身体を向けると、構えを取つて笑みを浮かべた。

「さあ、中隊長殿。今掴んだ感覚を忘れぬ様に最終確認として自分と組み手をして貰います。防御と攻撃、その両方を意識して下さいよ」

ギーシュは強く頷きながらニコラに向き直り、今度はパンチングミットなしのスパarringを行う。

「ラツシユスタイル」の素早いギーシュの攻撃をニコラは難なく防いでいく。自分に教えられるほど防御は得意ではないと話してはいたが、やはりあれも謙遜らしい。

不意に、ニコラは一步下がつてギーシュの拳の攻撃範囲から抜け出すと、今度は攻めに回る様に拳を振り上げる。

ギーシュは必死に先ほどグレゴリオから教わつた通りに腹に力を込めてしつかりと地に足を着ける。

瞬間、かつて桐生が行なっていた様に「ラツシユスタイル」から「デイフェンススタイル」への「スタイルチェンジ」がギーシユの中で行われる。

即座に防御の体勢を取ったギーシユはニコラの拳を両腕で受け止める。腕に伝わるその衝撃からニコラが多少手加減しているのが分かるが、今のギーシユは生意気をせず素直にその手加減に甘える事にした。

数回拳を受け止めてからニコラが構えを解いたのを見て、ギーシユも構えを解くと汗ばんだ額を腕で拭う。

「流石ですな、中隊長殿。しっかりとグレゴリオ殿の教え通りに動けていましたよ」

ニコラに言われて思わず父親に褒められた様な感覚を覚えてギーシユは照れ臭そうに苦笑した。

自分自身の中で新しい力を手に入れた実感を感じながら、ギーシユは身体を伸ばして何気なく顔を動かすと、目の前の光景に固まった。

まだ少し先に見えるアルビオン大陸。その方角から此方に勝るとも劣らない量の戦艦が向かってくるのが見える。

味方の他の戦艦も敵の戦艦隊が見えたのであろう。彼方此方の戦艦から怒号や叫び声が上がっているのが聞こえる。

固まったままのギーシユにニコラが歩み寄り、その肩を優しくポンと叩く。

意識が戻ったギーシユはニコラと敵の戦艦隊を交互に見た後深い溜め息をついて何とか気持ちを落ち着かせ様とするも、身体は自然と恐怖から震えてしまう。

「恐怖を感じるのは恥じやありませんよ、中隊長殿。自分も初陣に出た頃は、脚を震わせて逃げたい気持ちで一杯でしたから」

「君でも、そうだったのかい？」

ギーシユはニコラを驚いた様に見ながら問いかけた。

幾千もの戦さ場を渡り歩いて来た様な風格のニコラが怯えている姿等、想像出来なかった。

「当然ですよ。誰もが最初から強い訳じゃありませんから。今でこそ自分も戦争に慣れましたが、それは自分を育ててくれた仲間が居たからに他なりません。あの時あの仲間が居なきや、今こうして此処に立っていないかたもかもしれません」

ニコラはそう言いながら震え続けるギーシユにニカツと笑って見せた。

「大丈夫ですよ、中隊長殿。貴方は独りじゃない。我々が貴方を守ります。だからどつしりと構えていて下さい」

ニコラの言葉に、笑顔に、ギーシユの震えはゆっくり軽くなっていた。

正直に言えばまだ怖い。しかし、自分には仲間が居る。それをニコラが教えてくれた。

落ち着きを取り戻したギーシユを見て、ニコラは腕を組みながら敵の戦艦隊に視線を向けた。

「いよいよ、始まりますな。我々連合軍と、アルビオンの戦争が」

緊張を含んだニコラの言葉にギーシユは領きながら敵の戦艦隊を見詰める。

遂に自分にとって初めての戦争が始まる。その実感がギーシユの身体に満たされて行つた。

## 第48話

目の前に広がる敵艦隊の群れに視線を向けながら、桐生達の乗り込んだ「ヴュセンタール」号の総司令部の中でド・ポワチエ将軍が時計をチラリと横目で見た。

「ふむ……予測よりも早い対面となったか」

独り呟きながらド・ポワチエ将軍は小さな溜め息を漏らした。彼の計算では敵艦隊との接触は十時頃だと予測していたのだ。

「どうやら相手は、我々が思っている以上に生真面目なのかも知れませぬ」

ド・ポワチエ将軍の呟きに参謀の一人が相槌を打った。

「「虚無」は？」

「昨晚の内に使用する呪文の提案があり、これを受けて参謀本部で作戦を立案しました。問題ないかと」

「ほう。陛下がご信頼されているだけあって、年相応以上に仕事は早い方と見える。それで、どんな呪文だ？」

参謀はド・ポワチエ将軍の元へと近寄ると、作戦の計画書を開いて時折書かれてる文字に指を差しながら何やらゴソゴソと小声で話した。

参謀の話を受けたド・ポワチエ將軍の顔には、徐々に笑みが浮かび始める。

「なるほど。それは面白い。上手く行けば相手を吸引し、上陸を成功させられるやもしれん。伝令！」

掛け声を聞いた伝令兵が駆け寄り、ド・ポワチエ將軍の前に跪く。

「虚無」の出撃を命じる。作戦目標、「ダータルネス」。仔細は任す。エルギース將軍率いる竜騎士中隊は全騎を持ってこれを護衛。復唱」

「虚無」出撃！ 作戦目標「ダータルネス」！ 仔細自由！ エルギース將軍率いる竜騎士中隊全騎がこれを護衛！」

「宜しい。駆け足」

伝令は桐生達が既に待機している甲板目掛けてすつ飛んで行く様に駆け出した。

総司令部から飛び出した伝令兵を満足気に見送ったド・ポワチエ將軍は再び敵艦隊の群れに視線を戻して、作戦を成功させる為に戦艦隊に命令を発する。

「戦列艦の艦長達に伝えろ。例えば体当たりし、艦が壊れ自滅しようとも上陸部隊を満載した輸送船団に敵艦を近付けるな、と。この戦争、敵地への上陸の失敗は我々の敗北を意味するとな」

次々と旗信号で伝令が伝えられていく中、ド・ポワチエ將軍は敵艦隊を睨みながら腕を組んだ。

「さあ、貴様の出番だ、エルギース。貴様も大人であるならば、子供を命懸けで守つて見せろ」

その時漏れたド・ポワチエ將軍の呟きは、誰にも聞かれる事はなかった。

桐生は上甲板のゼロ戦の操縦席で、エンジン始動の点検を行っていた。手馴れてきたのか、はたまたこれも「ガンダールヴ」の力なのか、点検は滞りなく進み何時でも出撃出来る様になっていた。

後部座席にはルイズが既に座っており、「始祖の祈祷書」と杖を胸に抱いて目を閉じ、精神を集中させていた。胸元で杖と本の影に隠れたペンダントの石が、時折入り込む朝日で淡い輝きを放っている。

昨晚、ルイズは使用する呪文を見つけて参謀本部へと提出し、それを受けて作戦が立案されて作戦参謀達によって計画書が作られた。

ゼロ戦の点検を終えた桐生は、その計画書の写しである羊皮紙と睨めっこしながら眉をひそめていた。此方の何とも言えぬ形の文字は相変わらずちつとも読めやしない。

ゼロ戦の翼によじ登って、懸命に桐生に羊皮紙に書かれた地図やら文字やらを指差して甲板士官が説明するが、何度説明しても理解出来ない桐生に苛立ちを覚えて首を振った。



「もう良い！ お前が文字が読めぬ事は良くわかった！ だからシンプルに言つてやる！ エルギース將軍率いる竜騎士中隊がお前を先導する！ はぐれずについて行つて、ダータルネスまで「虚無」殿をお運びしろ！ わかったか!?」

いい加減喧しい説明に嫌気がさしていた桐生はわかったわかったとばかりに頷いて見せ、甲板士官は不安そうながらも翼から飛び降りた。

もう一度羊皮紙を眺め、航法もわからない、ましてや文字もわからない桐生には意味のないその計画書の写しを丸めてジャケットの懐にしまい込んだ時だった。

突然、耳をつんざく様な甲高い鐘の音が激しく鳴り響いた。  
音に反応した桐生は思わず空を見上げた。

視線の先の少し遠くの雲の隙間から、どう見ても味方ではない艦隊が急降下でこっちに向かつて来るのが見える。

桐生達の乗る総旗艦「ヴュセンタール」号を含む輸送船団の左上方を航行している六十隻の戦列艦達が、現れた敵艦隊と雌雄を決すべく上昇し始める。その戦列艦の中には、ルイズ同様に魔法学園から志願、或いは親や周りから強制的に参加された生徒達が何人も乗っている事を桐生は知らない。

味方の戦列艦が敵艦隊目掛けて突き進む中、飛んで来た伝令が桐生の耳に入る。

「虚無」出撃されたし！ 目標「ダータルネス」！ 仔細自由！ エルギース將軍率い

る竜騎士中隊は全騎を持ってこれを護衛！」

出撃の合図の様だ。

桐生はエンジンをかける為に、事前に打ち合わせておいた控えのメイジに指示を送った。

メイジがすぐ様プロペラ目掛けて杖を振り、「風」の魔法を使ってプロペラを回す。

スムーズに事が運んでいるのは事前に行った打ち合わせの賜物だった。最初にプロペラを「風」の魔法で回すと説明した時、彼は要領が悪いのか、なかなか理解してくれなかった。ただプロペラを回すという行為を行って欲しいと説明するだけで二十分近くの時間を費やした。

コルベールならば、まるで以心伝心の様に求めた通りにプロペラを回してくれただろうが。

そんな事を先ほど考えてはいたが、結局自分も字が読めないが故に甲板士官の説明をまともに聞いてはいなかったのだ。他者を悪く思う前に、まずは自分を良くしなくては、と桐生は思わず考えた。

プロペラが問題無く回ったの見て風防を閉じ、エンジンを点火させる。鈍い音の後に轟音と共に機体が振動し、上甲板を駆けて空へと飛び出した。

操縦桿を引いて機体を水平飛行を保つと、脚を収納する。

操縦に慣れては来たと見え、無事に飛び立てた事に桐生は小さく安堵の溜息を漏らした。後部座席を見ると、ルイズは目を閉じたまま精神を集中させている。普段は何処か落ち着きの無いルイズだが、こんな時の集中力は半端な物では無い。彼女なりのオンオフの切り替えなのだろう。

気が付くと、ゼロ戦の周りを竜騎士中隊が飛んでいた。風竜の背に乗っているのはルイズとそう歳の変わらない少年達。そして、ゼロ戦の前を飛ぶ風竜にはエルギースが乗っている。どうやら彼が先導するらしい。

エルギースがついて来いとばかりに手を振って合図すると、桐生が頷いた。桐生の頷きに満足気に前を見たエルギースは、そのまま真っ直ぐと風竜を飛ばして行く。

上方から敵艦から大砲が放たれる轟音が響き、桐生は上へと目をやった。

そこではトリステイン・ゲルマニアの連合艦隊と、アルビオン艦隊の間で砲撃戦が繰り広げられていた。お互いを合わせて百隻を超える艦隊が、それぞれの砲撃から派手に砲弾を放ち、甲板に上がったメイジ達がお互いに相手の艦隊目掛けて魔法を放っている。

風防を閉じているのにも関わらず、操縦席に漂い鼻を突く火薬の匂いに桐生は眉をひそめる。

味方のも敵のも、艦隊は次々と爆発を起こし、機体を炎で包みながらまるで蠅の様に落ちていった。時折、甲板から投げ出され、宙を舞いながら落ちていく死体や乗組員がまるで蟻の様に小さく見えた。

郷田龍司率いる関西、いや、日本一大きいとも言える極道組織近江連合との戦争とは比べ物にならない、映画の中の様な戦場に桐生は息を飲んだ。

巻き起こる爆発には何人、何十人も人間が巻き込まれ、その業火に焼かれ散つていく。

桐生は視線をエルギースが先導する正面へと戻して、深呼吸しながら操縦桿を握る手に力を込めた。今自分が居るのは映画の中では無い、現実の戦場だ。上空から黒煙と炎を巻き上げながら落ちていく艦隊と同じ運命を辿るかもしれないのだ。

気を引き締め直し、桐生は真つ直ぐ前を見詰めた。

今此処で死ぬ訳にはいかない。元の世界へ帰る為にも。ルイズの為にも。

竜騎士を前方と左右にはべらせ、空の青と雲の白が混じる戦場の中、桐生はアルビオン大陸目指してゼロ戦を飛ばした。

上空から降りしきる人や艦隊の破片の雨を避けながら雲の切れ間からアルビオン大陸が見えた頃、桐生達は敵の空を飛べる使い魔で構成された哨戒鳥に見つかった。

互いに密着して丸い塊となり、三百六十度を見渡す哨戒網の網の目の一個を形成するその鳥達はその眼を通して、精神を集中させて竜騎士の駐屯所に待機する主人の眼に敵影を移す。

使い魔の視界は精神を集中させる事で主人と共有する事が出来るのだ。

自分の使い魔の視界から桐生達の存在察知した三つの基地から、竜騎士の群れが飛び上がる。向かってくる敵を遊撃する為に待機していた竜騎士達は、自身の相棒である風竜を操って桐生達を迎撃せんと向かって行く。

前方を駆けていたエルギースの風竜が尻尾を激しく振り、エルギースが桐生に顔を向けると腰に差していた杖を引き抜いて前方を指した。

見ると上空から此方に向かって降りて来る、数十匹の風竜に乗った竜騎士が確認出来た。このまま進めば、正面からぶつかる形となる。

桐生は判断をエルギースに任せると、進路を変える気が無いのか、臆す様子も見せず敵の竜騎士隊目掛けて突き進む。攻撃を受けようが、邪魔をされようが、構わずこのまま目的の場所まで進む腹づもりの様だ。

桐生は翼の機関砲を操作しようとして、点検の時に弾切れを起こしていたのを確認したのを思い出して舌打ちする。先のタルブ戦で二十ミリ機関砲弾は使い切ってしまった

ていたのだ。

機首の機銃には幸い、約二百発ほどの七・七ミリ弾が残ってはいるが、それではこの状況を打開するには威力が足りない。

何か他に武器はと考えた所で、桐生は昨日コルベールから貰った紙束を思い出した。

ジャケットの胸ポケットから乱暴に紙束を取り出して広げて見る。案の定、開かれた半皮紙には此方の文字で書かれている為何と書かれているのか全くわからない。

しかし、コルベールは新兵器と言っていた。これなら何とかなるかもしれない。

「ルイズ！ コルベールから貰った新兵器の説明書だ！ 悪いが読んで聞かせてくれ！」

開かれた半皮紙をルイズに差し出しながら桐生が叫ぶ。しかし、ルイズからの反応はない。

振り返ると、ルイズは未だ瞳を閉じて精神を集中させていた。やはり並みの集中力では無いらしく、桐生の声に気付いていない様だ。

そんなルイズの集中力に少し頼もしさを感じるも、桐生は半皮紙を自分の膝に置いてルイズの膝を掴んで揺らした。

「はわっ!?! な、何?!? 何事?!?」

突然刺激に戦場には似つかわしく無い、可愛らしい悲鳴を上げてルイズが瞳を開いて

辺りをキョロキョロ見回す。

「ルイズ！ このままじゃ俺達の身が危ない！ 今すぐこのコルベールから貰った新兵器の説明書を読んで聞かせてくれ！ 出来るか!？」

「わ、わかった！ 貸して!」

状況が読み込めないながらも桐生の声色から、今自分が危険に犯されているのを感じたルイズは胸に抱いていた「始祖の祈禱書」を膝に置き、桐生から差し出された半皮紙を引つたくる様に受け取って文面に目を走らせた。

「えつと……カズマ殿、この説明書を読んでいるという事は、貴方は今とても困っていると見受けられる。そんな貴方を助けてくれるのが、今回私が作った新兵器だ。とくとご覧あれ!」

「ああ、是非とも拝ませて貰いたい物だ！ 前置きは良いから、何か要点は書いてないか!？」

コルベールらしい始まりの文面に思わず間が抜けかけたが、目の前から迫って来る敵の風竜の速さにあまり余裕が無いのを察した桐生が急かす様にルイズに要点のみの読み聞かせを促す。

「えつ、えつと、先ずは新兵器を使うにあたってー!」

「っ!?! ルイズ！ 捕まれ!」

「へっ? きゃあっ!」

ルイズに説明書を読んで貰ってる間にもあつという間に近寄って来た敵の竜騎士隊が此方に向かって魔法の矢を放って来た為、桐生は咄嗟に操縦桿を動かしてゼロ戦の機体を回転させて何とか回避する。

ゼロ戦を取り囲んでいたエルギース率いる竜騎士達も、風竜を上手く操って魔法の矢を避け、敵の竜騎士隊とすれ違う。

何とかゼロ戦の機体を水平にたもち、再び周りに竜騎士をはべらせて空を駆ける桐生達を敵の竜騎士隊が追い掛ける。

「ルイズ!? 大丈夫か!」

「びっ、ビックリしたけど大丈夫! 続きを読むわよ!」

即席ながら作ったシートベルトをしていた為、機体の回転に身体を投げ出されなかったルイズは膝から転げ落ちた「始祖の祈祷書」をしっかりと両膝頭で挟み込んでから半皮紙の続きを口にする。

「えく……新兵器を使うにあたって守って欲しい事は二つ。一つ、敵から追われている状況である事。一つ、周りに仲間がいるならなるべく寄り合って固まってから使用する事」

「周りに固まって?」



「この紙にはそう書いてあるけど……」

イマイチ使用条件は理解出来ないが、幸か不幸か今は敵に追われている状況。説明書の使用条件は一つ満たしている事になる。

桐生は足元にあった小さな黒板とチョークを取り出した。この二つ、このゼロ戦に乗った時から操縦席の隅っこに置かれていた物だ。どうやら当時のパイロットはこれで隣同士等で指示を交わし合っているらしい。

黒板とチョークをルイズに手渡し、黒板に白文字で「チカヨレ」と書いて風防を開き、シートベルトを外して周りの竜騎士達に見せる。強い風が桃色の髪を引き千切らんばかりに靡かせ、薄い空気にルイズの表情が歪む。

エルギースがルイズの持つ黒板を確認して頷くと、手で何やら合図をして見せた。すると周りの竜騎士達は心得たとばかりにゼロ戦へと可能な限り近付き、寄り添い合いながら走る。

竜騎士に囲まれてまるで大きな丸い塊の様になった此方は、敵の格好の的にしかなかった。いいない様にも思う。

竜騎士達がゼロ戦に寄り添ったのを確認してルイズは風防を閉じ、再びシートベルトをすると半皮紙の続きを読み始める。

「二つの条件を満たした場合、「えんじん」の開度を司る棒の隣に取り付けられたレバー

を思いっきり引つ張って欲しい……ですって！」

「こいつかー！」

此方にグングン近寄ってくる敵の竜騎士隊の姿が徐々に大きくなる中、桐生はスロットルレバーの隣にある見慣れないレバーを思いっきり引つ張る。

瞬間、ゼロ戦の翼に取り付けられた鉄パイプの様な筒からシユポントと栓抜きの様な音と共に何か飛び出した。

説明書の続きを口にしたルイズの声と同時に、その飛び出した何かからジュワツと点火音が響く。

「これぞ私が作り出した新兵器、名付けて「空飛ぶ炎蛇」だ！ 前方に「ディテクトマジック」を発信する魔法装置を取り付けた、燃える火薬で推進する鉄の矢だ！ この「空飛ぶ炎蛇」は魔法に対して反応して近寄る為、近くにメイジの味方がいる場合はなるべく近寄って貰わなくては巻き添えを食らうだろう！ 念の為同士討ちを避ける為に、発射位置から半径二十マイルの対象には反応しない様になっているぞ！ 何かよくわからないけど、あの先生案外凄いの作るじゃない！」

バントと小さな爆発音を立てて、後ろ向きに飛び出した十数本の火矢が追い掛けて来た竜騎士に向かって発射される。

まるでロケット花火の様にピューツと音を立てながら竜騎士に当たっては小さな爆

発を起こした。

モウモウと巻き起こる白煙が風に拐られると、追って来ていた竜騎士隊の半数近くが居なくなっていた。残っていた竜騎士隊の兵士も、また同じのを出されては堪らないとばかりに戦意を失って引き返して行く。

「やったあ！ 成功よ、カズマ！」

「ああ。やれやれ……コルベール様々だ」

声を上げてはしやぐルイズに桐生は安堵の溜息を漏らしながら相槌を打つ。

後方からの襲撃が無くなったのを確認したエルギースの指示の元、竜騎士達はゼロ戦から離れて元の位置へと戻る。

開かれた視界。その先に見える景色にルイズの顔から笑みが消え、桐生の肩をギュツと掴んだ。

「これは……不味いな」

桐生の口から重々しく言葉が漏れる。

目の前には、百騎を超えるであろう竜騎士の群れが此方に向かって来ていた。

アルビオンの竜騎士隊は天下無双と誉れ高く、その理由は質だけではなく、その圧倒的な頭数からも来ているのだ。

エルギースはアルビオンの竜騎士隊の群れを見るも、進路を変えずに速度を上げた。

やはりこのまま一気に突っ切ると判断し、周りの竜騎士達もエルギースに続いてゼロ戦と平行して進む。

上空から迫るアルビオンの竜騎士隊の群れから、一斉に魔法の矢が放たれる。緑色の光で出来た矢が、ゼロ戦目掛けて飛んで来る。

あの数は流石に避けきれそうもない。ルイズは更に強く桐生の肩を掴み、桐生も覚悟を決めて操縦桿を握り締める。

ふと、桐生は視線を感じて前方に顔を向ける。すると、エルギースが此方を見ているのに気付いた。

エルギースは此方をジッと見て桐生と視線が重なった瞬間、その口元にニヤリと笑みを浮かべた。

一瞬その笑みの理由がわからなかった桐生は、何か嫌な物を感じて思わず身構える。

視界一杯に広がる緑色の矢があと少しで届いてしまう距離まで近付いた瞬間、エルギースが突然自身が乗って風竜を操って僅かに上空させて翼を広げさせて躍り出る。まるでゼロ戦を覆う様に。

エルギースの行動の意図がわからない中、無数の魔法の矢がエルギースもろとも風竜の身体を、翼を貫いた。

桐生とルイズが言葉を失っている中、風竜と共に魔法の矢に身体のうちこちを貫かれ

たエルギースは再び桐生へと視線を向け、今一度笑みを浮かべてから力無く落ちて行った。

その笑みから、桐生は確かにエルギースの意思を感じた。

「何よ……。何なのよ!？」

目の前で突然無惨に身体を貫かれ、落ちて行ったエルギースにルイズがパニックを起こした様に叫ぶ。

桐生はそんなルイズに答える事も無く、真つ直ぐ前を向いて魔法の矢が無くなった所を一気に駆け抜けた。

すると今度は前方から巨大な火の玉、「ファイヤーボール」がゼロ戦目掛けて飛んできた。

今度は横を飛んでいた竜騎士の少年の一人がゼロ戦の前に躍り出て、風竜の身体で「ファイヤーボール」を受け止める。瞬く間に風竜は身体を焼かれ、その炎は容赦なく少年の身体も焼いて力尽きた風竜が燃えながら少年と共に落ちて行った。

「こいつ等は……「盾」になるつもりなんだ」

焼け落ちて行く風竜と少年を青ざめ震えながら見詰めるルイズに桐生が言う。

「「盾」って……」

「俺達の今回の目的は、お前を目的地に到着させる事だろう。あいつ等はその作戦成功

の為に、俺達の「盾」になる役割だったんだ。だから此処は……あいつ等が守ってくれている間に、一気に突き抜ける」

桐生はそう口にしながら座席を座り直した時、座席の脇にある見慣れないレバーを見つけて軽く手を触れた。瞬間、「ガンダールヴ」の証が光り、そのレバーを引いたらどんな効果があるのかが頭の中に流れ込んで行つた。コルベールが作つた新兵器のもう一つだ。

アルビオンの竜騎士隊の群れを突破した瞬間、周りにいた竜騎士隊の少年達が此方に向けて、笑顔で手を振りながら風竜を反転させた。その笑顔や手の振り方はまるで、学校の放課後に「また明日」と挨拶する友人の様だった。

しかし、桐生もルイズもわかつている。彼等にその「明日」が無い事を。

「駄目っ！ 行つては駄目っ！」

ルイズがコックピット内で叫ぶ中、追撃を開始する敵の竜騎士隊目掛けて、少年達は風竜を飛ばさせる。ゼロ戦を守る為の時間稼ぎの「盾」となる為に。

「捕まつてろ、ルイズ！」

敵に突つ込む竜騎士隊の少年達に気を取られているルイズに怒鳴る桐生。ルイズは何とか視線を前に戻して座席にしつかりと座り、シートベルトを握り締めた。

ルイズがちゃんと座つたのを見届けた桐生がレバーを引っ張ると、ゴウンツという鈍

い音を立てて尾翼下の胴体の外板が剥がれ、積まれていたのが顔を出した。

顔を出したのは、先ほどの火矢を何倍にも膨らませた鉄の筒。そこから勢い良く青白い炎が噴出され、蹴り上げられた様にゼロ戦が一気に加速する。

「火」の使い手コルベールが発明した、ロケット推進機関である。

瞬く間に敵と味方の竜騎士隊は見えなくなり、座っている座席を突き破らんばかりの加速感を身体中感じる中、まるで此方を避ける様に通り過ぎて行く雲が視界に入っては消えて行く。

ゼロ戦は計器速度で四百五十ノット近い速度を出して飛び続けている。機体がバラバラになってしまいそうな振動が二人の身体に強く感じられた。

「何としても、作戦を成功させなきゃ……。彼等の為にも」

胸元に抱いた「始祖の祈禱書」をギュツと強く抱き締めながらルイズが呟く。

桐生は苦しげに顔を歪めながら操縦桿を強く叩いた。その音でルイズの身体がビクツと跳ねる。

エルギースの最後の笑みに込められていた想い、「あとは任せた」と桐生は受け取った。

わかっていただのだ。戦場に立つ以上、生きて再び必ず出会える訳ではない。しかし、目の前で人間が無惨に死んで行くのをただ見てる事しか出来ない自分が苛立たしく、歯

痒かった。

桐生は深い溜息を漏らして気持ちを落ち着けてから操縦桿をしっかりと握った。

ルイズの言う通り、この作戦を何としても成功させなくてはならない。自分達にあとを任せ、命懸けで守ってくれたエルギース達の為にも。もし失敗してしまつたら、彼等の死を文字通り無駄な物へと変えてしまふ。

桐生もルイズも口を開かない重い沈黙の中飛び続けていると、眼下に港が見えてきた。切り開かれたただっ広い丘の上に空に浮かぶ船を係留する為の送電線の様な鉄塔、棧橋が見えた。

「あれがダータルネスの港よ」

ルイズが呟いてシートベルトを外す。

「カズマ、上昇して」

ルイズの指示に頷いた桐生はゼロ戦を上昇させる。高度を上げるに連れて、徐々にゼロ戦は速度を落として行く。

風防を開いても問題のない速度になったのを見越してルイズは立ち上がり、風防を開いた。

冷たい風がコックピット内に舞い込んでくる。

ルイズは桐生の肩へと跨り、呪文の詠唱を始めた。片手に持たれた「始祖の祈禱書」が



光り輝いた。

初歩の初歩。

「イリユージョン」

描きたい光景を強く心に思い描け。

さすれば詠唱者は空をも創り出す事が出来るであろう。

「始祖の祈祷書」にはそう書かれていた。

ルイズが唱えているのは幻影を作り出す、「虚無」の呪文であった。

ダータルネス上空をゼロ戦は緩やかに旋回する。

ジワリと雲が掻き消されて、空に幻影が描かれ始めた。

ルイズが心の中に思い描いたの物。それは巨大な戦艦の群れ。

此処から何百キロメートルも離れた場所にいる筈の、トリステイン侵攻艦隊の姿が現れ始めた。ダータルネス上空に突如として現れた幻影の大艦隊は、現実の迫力を伴って見る者を圧倒した。

「ダータルネスだと?」

ロサイスに向かっていたホーキンス將軍は、ダータルネス方面から送られて来た急便の報せに首を傾げながら呟く。

彼はアルビオン軍三万の兵を率いてロサイス方面に向かっている最中であつた。トリスティン・アルビオンの連合軍が上陸する地点はそこだと予想されていたからである。

しかし、報せの通りであるならば敵が現れたのは首都ロンディニウムの北方、ダータルネスらしい。

「まあ、全てが予想通りに事が運ぶとも限らぬか。我々の裏をかいだつもりなのかもしれない。全軍反転！」

ホーキンスは声を張り上げて率いた兵団に伝える。とは言え、三万もの兵団だ。幾つにも別れている全ての部隊に伝わる迄にはどうしても時間が掛かる。

敵の向かっている地へと早く赴き、さつさと布陣して安心を得たい物だとホーキンス將軍は内心呟いた。

何気無く見上げた空は何処までも青く、澄み切っていた。今起きているこの大戦とはまるで無縁なその澄んだ青に、ホーキンス將軍は一瞬懸命に戦うのが馬鹿馬鹿しく思えた。いつの時代も人間が懸命に戦っているのを、空と海と大地はその身を汚されながら眺めて来た。自然からすれば人間の行いは何と小さく、何と愚かな事かと思つていられるかもしれない。

全軍に伝令が伝わり、ホーキンス將軍を先頭にする為にと兵団が道を開いた。

ホーキンス將軍は今来た道を我が物顔で引き返しながら、この空の澄んだ青色とは対照的な、泥沼の戦いが待っているだろうなと一人考えていた。

## 第49話

早朝四時過ぎ。

未だ日が昇らない暗い空の中、魔法学園の上空に一隻の小さなフリゲート艦が現れた。

甲板に立っていたメンヌヴィルは上空を見上げながら小さく溜め息を漏らした。

傭兵となって幾千もの戦場を歩いた。時には死を覚悟した事もあった。今こうしてここに立っている事が奇跡であると思わざる得ない状況に陥った事もある。

しかし、それでもこの身体に宿った渴きは癒える事はなかった。

求めるのは、あの温度。この目元を焼いた、あの隊長が放った炎の温度。

あの「蛇の眼」を、今一度見たい。あの眼ともう一度視線を交わしたい。それがもう叶わぬ願いだとわかっではいるものの、メンヌヴィルは思わざる得なかった。

「……ふっ、俺を試さぬば安心して送れぬのか？ 子爵よ」

そう呟いたメンヌヴィルの言葉に答える様に、闇に包まれた甲板の奥からワルドが現れた。

ゆっくりメンヌヴィルに近付きながら、ワルドは内心驚いていた。気配を殺した「風」

の「スクウエア」クラスのメイジはさながら空気の如く見つけるのが困難となる。

しかし、メンヌヴィルは振り向きもせず此方の存在に気付いた。いや、仮に振り向いたとしても闇に包まれたこの距離ならば視覚等役には立たないだろう。どんな手を使ったかはわからないが、メンヌヴィルの実力が本物である事は疑い様が無くなった。「あんたには感謝しているよ、子爵。ここまで誰にも見つからずに来れたのはあんたの道案内のおかげだ。仕事が済んだら、高い酒の一杯でも奢らせてくれ」

近付いて来るワルドへ顔も向けずにメンヌヴィルが言う。

「今回は俺の功績と言うより、運が良かったという事だろう。最も、攻める側というのは自分が攻められる事を考えぬ事が多いからな」

メイジの使い魔やピケット船が行っているであろう哨戒ラインは避けては来たが、ここまで誰にも発見されなかったのは僥倖に近い。

「仕事の幸先が良い。これならば直ぐにでも制圧出来そうだ」

メンヌヴィルが手を挙げると、甲板の端に待機していた黒装束に身を包んだ十数名の傭兵の小隊が一齐に集まった。

メンヌヴィルが上げた手を倒して見せると、隊員達は次々と空へと身を投げ出していき、最後にメンヌヴィルもそれに続いた。

メンヌヴィル達傭兵の小隊が居なくなつた所で、甲板の奥からフーケが姿を現わす。

「気味が悪くていけ好きな男だったけど、この作戦を成功させられるかしらね？」

甲板の手摺に手を掛け少し身を乗り出し、魔法学園を見下ろしたフーケが呟くと、ワルドは首を振ってからチラツと魔法学園に視線をやった。

「もし失敗したなら、その程度の男だったという事だ」

それだけ言うとうとワルドは背を向けて、船内に向かつて歩き出す。

フーケはそんなワルドと魔法学園を交互に見てから、ワルドと同じ様に船内へと向かった。

アニエス率いる銃士隊の宿舎として割り当てられた火の塔の前で、銃士隊の隊員二人がマスケット銃を構えて見張りに立っていた。

ふと、月明かりの下で何かが動く気配を感じた。

年長の隊員は直ぐ様しやがみ、銃口に火薬と鉛の弾を紙で包んだ弾薬包を当ててそのまま押し込み、槊杖で火薬をつき固める。

同輩の隊員の動きを見て、もう一人の隊員もマスケット銃に弾と火薬を込める。

いつでも引き金を引ける様に準備すると、暗闇の中へと目を凝らす。

暗闇の中で影が動いたのが見えて誰何しようと口を開いた瞬間、二人の隊員の喉が風の魔法によって切り裂かれた。

力無く倒れ込んだ二人の隊員の身体はメンヌヴィル達に支えられ、音も無く地面へと横たわられた。

死体となった二人の隊員を見て、傭兵の一人が下衆な笑みを浮かべる。

「こいつ等、女ですぜ。しかもまだ若え。こいつは惜しい事をしちまいましたな。生け捕りにして楽しんでから殺した方が良かったっすね」

「俺はひと昔前の貴族と違って、男女差別論者じゃない。戦場に立つ以上、平等に死を与える」

メンヌヴィルの獣の様な笑みに、傭兵達もニヤリと笑う。

「隊長、貴族の餓鬼は殺しちや駄目っすよ？ 人質にするんですからね」

「わかっている。だが、それ以外は殺して良いという事だろうか？」

メンヌヴィルが杖を弄りながら楽しそうに言う、傭兵の一人が地図を開いた。

フーケに描いて貰った、魔法学園の地図だ。他の人間に見つからぬ様に布で覆う様にながら、魔法の僅かな灯りで地図を見る。

死体となった銃士隊の手に持たれていたマスクット銃を見て、傭兵の一人が口を開いた。

「銃を持っている連中が駐屯してるみたいだな」

「俺達は全員がメイジだけ？ 銃兵程度なら一個連隊が来ようと相手にならねえだろ」

軽口を叩いている仲間を無視して、地図をまじまじと眺めていた傭兵の一人がメンヌヴィルに声を掛ける。

「隊長、目標は三つです。本塔、餓鬼共がいる寮塔、そしてこいつ等銃兵が駐屯していると思しきこの塔です」

説明を受けたメンヌヴィルは直ぐ様自身の隊員達に指示を告げる。

「寮塔は俺がやる。ジャン、ルドウイヒ、ジェルマン、付いて来い。ジョヴァンニ、お前の選択で四名を連れて本塔にやれ。セレスタン、お前は残りを引き連れてこの塔だ」  
メンヌヴィルから指示を受けた傭兵の隊員達は、頷くなり行動を開始した。

中庭から漂う妙な気配で、タバサは目を覚ました。

少しの間悩みはしたが、キュルケを起こす事に決めた。

タバサはベッドから身体を起こしてパジャマから制服に着替え、廊下に出てキュルケの部屋の扉を叩く。すると素肌には薄手のネグリジェ一枚という、あられのない格好でキュルケが寝惚け眼を擦りながら扉を開いた。

「何よ、タバサ……まだ太陽も昇ってない時間じゃないの」

「変」

眠りを妨げられて文句を漏らすキュルケにタバサは短く言う。



キュルケは首を傾げながら目を閉じて、軽く耳を澄ましてみる。

するとぐるぐるるとサラマンダーのフレームが窓に向かって唸っている事に気付く。

「どうやらそうみたいね」

瞼を開いたキュルケの瞳からは、眠そうな色は消えていた。

キュルケが手早く制服に着替えて杖を手に取った瞬間、下の方から扉が蹴破られる音が響いた。

キュルケとタバサは顔を見合わせ頷いた。

「(ハハ)は一旦引く」

「それ、賛成」

キュルケとタバサは窓から飛び降りて茂みに隠れて辺りの様子を伺った。相手の姿や得物、数がわからぬ内には一旦態勢を立て直す。戦の基本だ。

直後数人の男の怒号と、女子生徒の悲鳴が寮内に響いた。

タバサはまだ暗い空へと視線を移す。日が昇るのはまだまだ先の様だ。

寮塔へ傭兵達が押し入った同時刻、アニエスは与えられた寝室で目を覚ました。銃士隊として鍛えて来た感覚が不穏な空気を察知したのだ。

枕元に置いていた剣と銃を取り、鞘から引き抜き銃の撃鉄を起こして扉の側へと待ち

受ける。

此処は宿舍として使っている火の塔の二階。何時もは倉庫として使われている部屋に、簡易ベッドを持ち込んだだけの寝室である。

今回の軍事教練の為に連れて来た隊員は十二人。彼女達は全員隣の部屋で寝起きしている。

アニエスは部屋の真ん中に置かれた鏡に気が付いた。確か、「月霞の鏡」というマジックアイテムだったか。月の光を鏡に反射して壁に当てると、壁の向こう側が透けて見えるという物だった。

アニエスは口元に笑みを浮かべ、鏡を手にとって雲の隙間から部屋に差し込む月の光を反射して扉へと向けた。

セレスタンという傭兵メイジが率いた四人は、火の塔の螺旋階段を上った二階へと躍り出た。踊り場には扉が二つ並んでいる。

奥の扉は二人の部下へと任せ、自分は一人を連れて手間の扉を開ける事にした。

セレスタンの指示で二人縦二列で突撃する事となった。一人が部屋に突っ込み、もう一人が援護に続いて入る手筈だ。

二人と同時にセレスタンが扉を蹴破った瞬間、腹部を冷たい何か貫いた。

セレスタンがその冷たい感触を確認した瞬間に絶命していた。

「月霞の鏡」で透けた向こう側でセレスタンの動きを読んでいたアニエスは、セレスタンが扉を蹴破った瞬間に目の前に躍り出て引き抜いた剣で腹部を貫いたのだ。

セレスタンの身体でアニエスの姿が確認出来なかったもう一人が戸惑っていると、アニエスはセレスタンの身体に銃口を押し当て引き金を引く。

セレスタンの身体を貫いた弾丸は、もう一人の身体をも貫いて絶命させた。セレスタンの身体に押し当てられていた事から銃声は鈍く低いくぐもった音になり、他の塔まで聞こえなかった。

身体を貫かれたセレスタンと、弾丸に貫かれた傭兵はゆっくりと倒れた。

傭兵達が倒れた頃合いに、隣から他の隊員達が飛び出して来た。

「アニエス様！……無事ですか!?!」

声を掛けて来た隊員達にアニエスは頷いた。

「問題ない、平気だ」

「我々の部屋にも二人ばかり忍び込んで来ました。問題なく片付けましたけど……」

自分の部屋に二人。隣に二人。忍び込んで来た賊は計四人。どうやらこの火の塔に忍び込んで来た賊は全員片付けられた様だ。

「アルビオンの狗と見て間違いないだろうな」

アニエスは侵入して来た賊の身なりを見て眩いた。

メイジばかりで構成された分隊。間違つても物盗りの類の者ではない。アルビオンが雇つた小部隊だろう。

不意にアニエスは外の状況が気になった。今、この学園には女子生徒しか居ない。

「二分やる。完全武装して、私に続け」

アニエスは部下に命令しながら剣を鞘を納めた。

メンヌヴィル達は何なく女子寮を制圧した。

貴族とはいえ、所詮はただのお嬢様でしかない女子生徒は賊が侵入して来ただけで怯えてしまい、全く抵抗を見せずに寝巻き姿のまま杖を取り上げられ、一箇所に閉じ込められる為に食堂へと連れて行かれた。その数、約九十人。

途中で本塔へ向かつていた連中と合流する。その連中が連れられた捕虜の中に学園長のオスマンが居た事にメンヌヴィルは微笑んだ。

食堂に捕虜達を集めたメンヌヴィルは後ろ手に全員を縛り始めた。傭兵の誰かが唱えた魔法のおかげで、ロープが動き手首に絡み付いていく。

女ばかりの生徒や教師の怯えた捕虜達に、メンヌヴィルはなるべく優しい声で一同に眩く。

「お嬢さん方、無闇に立ち上がったたり、騒いだりと我等が困る様な行動を取らなければ、命まで奪う様な事はありません。ご心配なされるな」

緊張からか、女子生徒の誰かが泣き出した。

「やれやれ……言ってる側からこれだ。静かにしなさい」

呆れた様にしながらもメンヌヴィルが諭す様に口にする。

それでもその女子生徒は泣きやまない為、メンヌヴィルは近付いてその女子生徒の顎へ杖を突き付け、そのまま顔を無理矢理上げさせた。

「消し炭になりたいか？」

その言葉が脅してない事が理解出来たのだろう。女子生徒は息が止まったかの様に泣き止んだ。

その様子に対して、オスマンが小さく咳払いして見せた。

「あゝ、君達？」

「何だね、爺さん？」

メンヌヴィルは女子生徒の顎から杖を外して、オスマンへと視線を移しながら問い掛ける。

「女性に乱暴するのは止してくれんかね？ 君達はアルピオンの手の者で、人質が欲しいのじゃろう？ 此処に居る我々は、此度の戦の上で何らかの交渉に使うカードなの

じやろう?」

「ほお……どうしてそう思う?」

「長く生きていればそいつがどんな奴で、何処から来て、何を欲しがっているのかくらいわかる様になるものじゃ。兎に角、贅沢はいかん。そのカードは、この老いぼれ一枚で我慢しておく事じゃ」

真剣に語るオスマンに、傭兵の一人が口元を押さえながら吹き出した。

「じじい、自分の価値わかってんのか?　じじい一人の為に国の大事を曲げる奴あ居ねえだろ?　普通」

ゲラゲラと大声で笑う傭兵達に首をすくめて見せながら、アルヴィーズの食堂に集められた人間を見渡してみた。

此処に居て欲しくない女子生徒の姿が見られない。

ふむ、とオスマンは内心呟いた。これはもしかしたら、何とかなるかもしれない。

「おい、じじい。学園にいる人間はこれで全員か?」

傭兵の一人の問い掛けにオスマンは頷いて見せる。

「うむ、これで全員じゃ」

傭兵達はそこで火の塔に向かった連中が戻って来ない事に気付いて顔を見合わせた。

手間取っているのだろうか?　いや、それはないだろう。仮に手間取っているのであ

れば、戻って来て増援の要請をしてくる筈だ。それくらいの判断力は持ち合わせている連中である。だからこそ、メンヌヴィルも分隊として任せたのだ。

そんな風に考えていた矢先、食堂の外から声が聞こえた。

「食堂の閉じこもっている賊達よ！ 聞けっ！ 我々は女王陛下下の銃士隊だ！」

その声に、メンヌヴィル達は顔を見合わせた。どうやらセレスタン達はやられたらしい。

しかし、それだけで顔色を変える連中ではない。一人の傭兵が舌打ちしながらオスマンへと顔を向けた。

「おい、老いぼれ。「これで全員」じゃねえじゃねえか」

「銃士は数には入れておらんのでな」

髭を手で扱きながらオスマンは涼しげな顔で言う。

メンヌヴィルは笑みを浮かべながら食堂の入り口に向かって歩くと、外の連中との交渉を考え始めた。

塔の外周を巡る階段の踊り場で、寮塔や本塔から離れた宿舎にいた魔法学園で働く平民達を避難させて、アニエス達は身を隠して様子を窺っていた。

未だ朝日は昇る気配を見せてくれない。

アニエスの声に反応したのか、食堂の入り口にがっちりとした体格のメイジが現れた。雲に閉ざされた薄暗い月明かりがその姿をぼんやりと照らす。

そのメイジに向けて銃を構えた隊員を制して、アニエスは叫ぶ。

「良く聞けつ、賊共つ！ 我等は陛下の銃士隊だ！ 我等は一個中隊で貴様等を完全に包囲している！ 人質を解放しろ！」

此処でアニエスは「一個中隊」とハツタリをかました。本当は十人ほどしか居ないが、この暗さがそのハツタリを少しでも味方してくれると思つたからだ。

そんなアニエスに対して、食堂からは愉快そうに笑う声が響いた。

「銃兵如きの一個中隊等、我々の敵ではない！」

「その銃兵に既に貴様等の仲間四人が屠られている！ 大人しく投降しろ！ そうすれば命までは取らぬ！」

「投降？ これからこの人質の正しい使い方をするのに投降等せぬさ。我々の要求はただ一つ。アンリエッタを此処に呼べ」

「陛下を呼べ、だと？」

「そうだ。俺達の雇い主は土足で国土を汚されたくないとの事だね。此処でアルピオンから兵を引く約束をして貰う」

本来ならば、一市民の為に軍が動く事等有り得ない。しかし、今人質になっているの



は貴族の子等、それも九十人という人数だ。本当に侵攻軍の撤退を余儀無くされるかもしれない。仮に侵攻を強行したとしても、自分の子を見殺しにされた貴族達から反乱を招く事も有り得る。

救いの無い選択を迫られ絶句するアニエスの耳元で、隊員の一人が囁いた。

「……何とか時間を稼ぎ、トリスタニアに急使を飛ばして増援を頼むべきでは？」

「いや、人質が取られている以上、増援等意味はない」

アニエス達の沈黙を否定と捉えたメンスヴィルは杖を振るいながら怒鳴った。

「五分間だけ貴様等に時間をくれてやる！ それまでにアンリエツタか枢機卿を呼ばなければ、一分毎に人質の一人を殺す！ もしも他の者が来たり、これ以上の兵が来た場合は、その人数に合わせて人質を殺す！ 良く考えて行動する事だ！」

アニエスが返答に詰まり、緊迫した空気が漂う中、後ろから間の抜けた声が掛けられた。

「何事かね？ 隊長殿」

振り返ると、コルベールが立って居た。

事態の把握が出来ていないコルベールがアルヴィーズの食堂を眺めようとしたのを、アニエスがローブの胸ぐらを掴んで引つ込めさせた。

「あんたは捕まらなかったのか？」

「質問の意味がわかり兼ねるが、私の研究室は本塔から少し離れていてね。それで、一体何事かね? 今の発言を聞く限りでは、どうやら只事では無さそうだが」

何処までも呑気そうなコルベールに、アニエスは苛立ちながら首を振って小さく怒鳴った。

「見てわからぬのか!? お前の生徒達が、アルピオンの手の者に捕まったのだ!」

コルベールの表情から見る見る血の気が引いていくのが見て取れたが、アニエスは御構い無しに食堂へと再び視線を戻した。

「ねえ、銃士さん?」

また後ろから声を掛けられ、振り返るとキュルケとタバサが其処に居た。

そんな二人をアニエス含む銃士隊の面々と、コルベールが驚いた様子で見つめた。

「お前達は、生徒か? 良く捕まらなかったな」

「まあね。それより、あたし達に良い計画があるんだけど、乗らない?」

「計画だと?」

「ええ。皆を早く助けてあげないと」

「ふむ……。それで、どんな計画だ?」

キュルケとタバサはアニエス達銃士隊に自分達の考えた作戦を説明した。

説明を聞き終えたアニエスの口元には笑みが浮かんでいた。

「なるほど、面白い作戦だ」

「でしょ？ もうこれしか方法はないと思うのよね」

自分達の作戦に同意を示したアニエスに対して笑みを浮かべるキュルケに対し、コルベールが首を振って反対を示した。

「危険過ぎる。相手は傭兵、つまり戦闘のプロだ。そんな小細工が通用する相手とは思えない」

「やらないよりはマシでしょ？ 臆病者の意見なんて聞いてないわ」

自分の作戦を反対されたキュルケが露骨に不機嫌な表情で手を振りながらコルベールに言い放つ。

アニエスに至っては、もうコルベールを見てもいない。

「奴等はあたし達の存在を知らないわ。それが奇襲の鍵よ」

キュルケは自分とタバサを指差して呟いた。

もはや存在を無視されているコルベールは少し離れて地面に膝を着くと、掌を地面に這わせた。それは無力な自分を悔いている様にも、何かに集中している様にも見えた。

人質達の前で腕を組みながら立っていたメンヌヴィルは、ズボンのポケットから懐中時計を取り出した。

カチリと、時計の針が無慈悲に動く。

「五分だ。どうやら奴等は君達を見捨てた様だな」

笑みの籠った冷たいメンヌヴィルの言葉に、女子生徒達は震え上がった。五分経つてもアニエス達から「アンリエッタを呼ぶ」と声が無ければ、一人ずつ殺すと言われているのだ。

「殺すのなら、私にしなさい」

オスマンが感情のない声で言うも、メンヌヴィルは首を振った。

「あんたは交渉の鍵として必要だ。おい、最初は誰だ？ 焼かれるのに立候補する奴は居るか？」

当然ながら誰も手を挙げる者は居ない。

メンヌヴィルが適当に女子生徒の一人を選び、杖を掲げたその時だった。

食堂の中に小さな紙風船が飛んで来た。

突然現れた謎の存在に全員の視線が集まった瞬間、紙風船が爆発して激しい音と光が放たれた。

風を使って黄燐がたつぷりと仕込まれた紙風船をタバサが飛ばし、それにキュルケが「発火」の魔法で着火したのだ。

女子生徒の悲鳴と数人の傭兵の叫び声が響き、ともに紙風船を見ていた傭兵達は視

力を奪われた。

瞬間、キュルケとタバサ、マスケット銃を構えた銃士隊がなだれ込む。

作戦は見事に成功、する筈だった。

食堂に飛び込んで来たキュルケ達に向かって、何発もの炎の玉が飛んで来たのだ。

作戦の成功を確信して油断していたキュルケ達は次々とその火の玉をまともに食らってしまった、銃士隊達はマスケット銃の火薬に引火して爆発し手に大火傷を負ったり、指が吹き飛んでしまい地面をのたうち回った。

キュルケは身体に受けた衝撃から、火の玉が当たる直前で爆発したのを感じた。身体を焼かれるよりも至近距離の爆発の方が効果的な攻撃法なのだ。身体の自由が奪われ、後は煮るなり焼くなり術者の自由となる。

食堂の扉が閉められる、何かで塞ぐ様な鈍い音がして、失い掛けたキュルケの意識が覚醒する。

痛む身体を何とか動かしてタバサを探すキュルケ。

視界の中でタバサが起き上がったのが見えたが、頭を打ってしまったらしくそのまま崩れる様に倒れ込んだ。

ふと、あと数センチ先に自分の杖がある事に気が付いたキュルケは、身体を這わせながら杖に向かって手を伸ばす。

しかし、その杖は誰かの足に踏み付けられた。

キュルケが顔を上げると、メンヌヴィルが立つて此方を見下していた。

「惜しかったな。光の玉を爆発させるのは見事な考えだったが」

そう言つてメンヌヴィルが笑つたのを見て、キュルケはある事に気が付いた。

メンヌヴィルの眼球がピクリとも動いていないのだ。

「貴方、まさか……その目」

キュルケの言葉に笑みを浮かべながら目に手を伸ばす。するとメンヌヴィルの眼球がゴロリと抜けた。義眼だ。

「俺は瞼だけでなく眼を焼かれていてな。光がわからんのだよ」

「そんな！ なら、どうして……!?!」

キュルケの頭の中で疑問が膨らむ。メンヌヴィルの動きは、目の見える者の動きだ。

「知っているか？ 蛇は獲物の体温で位置を割り出すのだよ」

義眼を戻してメンヌヴィルがニヤリと笑う。

「俺は炎を扱う内に温度に敏感になつてね。距離、位置、どんなに高かろうが低かろうが数値を的確に当てられる。温度でそいつの体格までわかるのさ」

キュルケは身の毛もよだつ恐怖を覚えて息を飲んだ。

そんなキュルケの様子を楽しむ様に、メンヌヴィルは顎を撫でながら笑みを浮かべ続

ける。

「お前、恐れているな？ 人間は感情が乱れると、体温も乱れる物なのさ。目で見るよりも、温度の変化の方が多くの情報を俺に与えてくれるのだよ」

メンヌヴィルはそこで鼻腔を広げ、香りを楽しむ様に吸い上げて見せた。

「嗅ぎたい」

「……何ですって？」

「お前の焼ける香りが、嗅ぎたい」

キュルケは震え上がった。

生まれて初めて感じる、純粹な恐怖。今までそれなりに無茶をして命の危険に冒される事はあった。しかし、今はそんな時とは違う。絶対の「死」を突き付けられ、絶望の中で感じる恐怖だ。

「今まで何を、どれだけ焼いて来た？ 炎の使い手よ。今度はお前が焼かれる番だ」  
メンヌヴィルが杖を掲げるのを見て、キュルケは覚悟を決めて瞳を閉じた。

強烈な閃光に視力を奪われていた傭兵達は、何とか視力を取り戻して食堂を見渡した。

どうやら自分達の誰一人として倒された者は居ないらしい。

代わりに、銃士隊の隊員であろう女性達がそこらで手を押さえながら蹲っているのが見えた。

「ははっ！ 随分と手の込んだ事をしてくれるじゃねえか！ ええ、姉ちゃんよおっ！」  
「ぐっ！」

蹲る隊員の一人の頭を、傭兵の一人が踏み付けながら下卑た笑みを浮かべ見下す。

「おい！ 今の内にこの女共を縛り上げて、後でたつぷり可愛がつてやろうぜ！ 女に生まれて来た事を後悔するくらいによおっ！」

「そいつは良いな！ こんこんとこ日出って、溜まり気味だったしな！」

一人の提案に傭兵達は皆賛同し、予備の縄で隊員達を縛ろうとした、その時――。

突如、傭兵の一人が足元の地面から噴き出した火柱に包まれた。

突然焼かれた仲間を呆然と見ていた傭兵達は次々と、足元から噴き出した火柱に包まれ身体を焼かれていく。

オスマンも女子生徒達も状況に頭が追いつかず、悲鳴を上げる事も忘れて既に炭に変わり始めた傭兵達を眺めていた。

キュルケに向かって杖を掲げたメンヌヴィルの動きがピタリと止まる。

中々自分の身体を焼く炎の熱い感触が訪れないキュルケは恐る恐る目を開いた。



一瞬の間の後、メンヌヴィルが横に飛んだのと同時に、メンヌヴィルが立っていた場所の地面から火柱が上がった。

火柱を避けたメンヌヴィルに向かって闇の中から数発の火の玉が飛んで来る。

メンヌヴィルは後退しながら火の玉を避けて、キュルケと距離が開かれた。

沈黙の後、火の玉の飛んで来た闇の中からコルベールが現れた。

「私の生徒に手を出すな」

キュルケは咄嗟に感じた。何時もの、臆病者のコルベールではない。コルベールの姿を全く別の存在の様だった。触れたら一瞬で焼き尽くされる、そんな熱気のような物を今のコルベールは纏っていた。

突然現れたコルベールに顔をしかめたメンヌヴィルは、次の瞬間に狂氣的な笑みを浮かべていた。

「おおっ！ お前はっ！ この温度！ この声！ コルベール！ コルベールではないか！」

歓喜からか顔を歪めて別人の様にはしやぎ出すメンヌヴィルに対し、コルベールは変わらぬ静かに睨み続けている。

「俺だよ、忘れたか!? メンヌヴィルだよ、隊長殿！ 久しぶりだな！」

両手を広げ、喜びを表すメンヌヴィルにコルベールは眉を潜める。



身体が思う様に動かない。爆発の衝撃で想像以上のダメージを受けてしまったらしい。

痛む身体に鞭打って寝返りをし、中庭の方へと視線を向ける。

そしてアニエスは痛みも忘れてその視線の先に見入った。

メンヌヴィルと対峙している様に立つコルベールが見える。そのコルベールの眼は、あの日からずっと追い掛け続けて来たあの男と同じ、あの「蛇の眼」をしていた。

## 第50話

重々しい沈黙の中、コルベールが右手に握っていた杖を軽く振るう。

瞬間、杖の先から巨大な炎の蛇が飛び出してコルベールを包み込む様に纏わりつく。まるで生きていて飼いならされている様に、炎の大蛇はメンヌヴィルへと顔を向けて口を開いて威嚇する様な動作をして見せた。

噛み締めた唇の端から流れる血が顎を赤く染める中、コルベールの口元に笑みが浮かぶ。

蛇の瞳で浮かべたその笑みは、二つ名の爬虫類を思わせる冷たい物だった。

キュルケはただただ目の前に立つコルベールに圧巻されるばかりだった。

自分の知っている普段のコルベールは何処か頼りない雰囲気で、生徒にも簡単に馬鹿にされる様な人間だった。しかし、今日の前に立つて居るのは全く別な、氷の様に冷たくて全てを焼き尽くすほど熱いという矛盾した感覚を覚えさせる雰囲気纏っている。

そんな風に呆然と此方を見ていたキュルケに、コルベールが声をかける。

「火」系統の特徴をこの私に開帳してくれないかね？ ミス・ツエルプストー」

血で赤く染まった口から出た言葉は、普段の授業の時の様に穏やかな物だった。

「……情熱と破壊こそ、「火」の本領ですわ」

「情熱はともかくとして、「火」が司るのは破壊だけでは寂しい。私は二十年間、そう思いついて来た」

そう言ったコルベールの顔に浮かんだのは、先ほどまでの冷たい笑みではなく、何処までも寂しい笑顔だった。

「だが……残念だ。結局は君の言う通りだ」

再び月は雲に隠れ、刷毛で塗った様な闇が辺りを包み込んだ。

見えるのはコルベールの身体に巻き付いた炎の大蛇が照らす、僅かな範囲だけ。

常人にとって闇の中の戦いは楽ではない。倒すべき相手の姿が見えないからだ。

しかし、盲目の世界を生き抜いて来た人間にとっては闇等ハンデにならない。

杖を握り、メンヌヴィルは口元に笑みを浮かべながら思う。

二十年前、自分の炎は負けた。未熟だったからだ。

しかし、今は違う。「光」を失い、死に物狂いで鍛えて来た炎はかつての何十倍も強く  
なった。

「光」を失った事で、自身の神経は強烈なまでに研ぎ澄まされて来た。僅かな熱量を、  
空気の変化でしっかりと感じる事が出来る。

人の体温、物の位置、それは空気の流れによつて心の中に影を作り出し、的確な「視覚」へと変化させて映し出す。

「聞こえるか!?! 隊長殿!」

闇の中で叫ぶ自身の声に反応する影を捉え、杖を構えるメンヌヴィル。

「さあ、最高の再会にしよう! 貴様か俺、どちらかが焼き尽きるまでの死合いを始めようじゃないか!」

何処までも続きそうな深淵の中で、メンヌヴィルははしやぐ様に言いながら呪文を詠唱し始める。

メンヌヴィルの声の後にピンと緊張が走る中、コルベールがキュルケに命じる。

「友人を連れて下がっていなさい。ここからはまだ君みたいなお子供が足を踏み入れてはいけない領域だ。醜い大人同士の、殺し合いが始まるからね」

普段ならコルベールの言葉に一言二言軽口を返すキュルケだが、今は素直にタバサを抱き抱えて走り出した。

走る去ろうとするキュルケ目掛けて、闇の中から数発の火球が飛んで来る。

コルベールは咄嗟に杖を振るい、炎の大蛇を動かして飛んで来た火球をその巨大な身体で受け止めさせる。

キユルケが塔の影まで逃げ切ったのを見て安堵したのも束の間、今度はコルベール目掛けて四方八方からメンヌヴィルの炎が襲い掛かる。

コルベールは炎の大蛇を操って迫り来る火球を受け止めながら、右へ左へと闇の中を動き回る。

「どうしたどうした、隊長殿!? 逃げてばかりでは俺は殺せないぞ!」

闇の中からメンヌヴィルの挑発する声が聞こえてくる。

これほどまでに深い夜の闇の中では相手の姿が見えない此方に対して、メンヌヴィルは身体の温度から此方の位置を的確に察知して来るのだ。

コルベールは反撃に転じようと火球のが飛んで来る方向へ同じ様に火球を放つ。

しかし手応えはない。コルベールが飛ばした火球は先を僅かに照らしながら進むだけである。

メンヌヴィルは火球を放ちながら次々と位置を変えてコルベールを攪乱する。此方の位置を掴ませぬ事でコルベールを追い詰めていく。

「闇の中では戦い辛いのか!? 貴様等の様な五体満足な身体でも、時には俺達の様にかかを失った者の身体よりも不便な物よな! ようし、せつかくだ! 少しサービスをしてやろうじゃないか!」

何処までも楽しそうに言うメンヌヴィルに不気味さを感じながらコルベールが身構

える。

数秒の後、一発の火球がコルベールの背後から飛んで来た。

コルベールは咄嗟にその火球を防ごうと炎の大蛇を操った瞬間、嫌な予感が頭をよぎった。

罨だと気付いた時には遅く、炎の大蛇に触れた火球が一瞬昼間の様な閃光を放った。

先ほどキュルケ達がメンヌヴィルにして見せた事を更に即席にした目潰しの効果を待つ、「閃光」の魔法だ。

一瞬とは言え、闇に凝らしていた目に焼ける様な光がかかれば視覚が奪われる。

失明し兼ねないほどの光を感じて、コルベールは目元を抑えながらよろめき、身体に纏っていた炎の大蛇がかき消えてしまう。

「こんなに側に寄り合うのはあの部隊での作戦以来だな、隊長殿」

メンヌヴィルの声が近くに聞こえた次の瞬間、腹に重い衝撃が突き抜ける。

目を覆って格好の的となってしまうコルベールの腹にメンヌヴィルが拳を叩き込んだのだ。

前屈みになりながら小さく呻くコルベールのローブの首元を掴み、メンヌヴィルはその顔を力任せに殴り飛ばす。

殴り飛ばされたコルベールの身体が地面を転がり、手に持っていた杖も地面を跳ねて



飛んで行ってしまった。

「言っただろう、隊長殿。サービスしてやると。メイジであるこの俺が直接殴ってやるのだ。貴様は簡単には焼かぬ。ここまで貴様を追いかけて来た分、痛ぶらせて貰うぞ」  
呻くコルベールを無視して首根っこを掴み、無理矢理立ち上がらせて殴り飛ばす度、メンヌヴィルは堪らない快感を覚えた。

あの日、自分から「光」を奪った男を、自分が心底惚れ込んだ男を好き勝手に痛ぶれる快感は堪らない物があった。

数発目となる拳をコルベールの顔面に叩き込み、満足したメンヌヴィルは地面に置いておいた杖を拾い上げた。

「見たか、隊長殿！俺は強くなったんだ！あの頃のアンタよりも！さあ、フィナーレだ！あんたの焼ける臭いを嗅がせてくれ！なあに、心配するな！あんたの「蛇」の名は俺が引き継ぎ、やがてはあのウロボロスをも超える裏社会の大蛇になって見せるさー！」

「……………メンヌヴィル君。げほっ、楽しんでる所を申し訳ないが、一つ頼みがあるのだが」

荒い呼吸を繰り返し、時折咳込みながら言うコルベールの声にメンヌヴィルが詠唱を止めた。

「何だ？ 苦しまずに焼いて欲しいだけでも言いたいのか？ まあ、あんたは昔馴染みだしな。お望みの部位から焼いてやるよ。その頼みとやらを言ってみろ」

視覚を取り戻したコルベールは上体を起こして地面に片手を着くと、呼吸を整えても片手で鼻血を拭いながら落ち着いた声で言う。

「簡単な事だ。降参して欲しい。私はもう、出来れば魔法で人を殺めたくないんだ」

メンヌヴィルは一瞬コルベールが何を言っているのかわからなかったらしく、呆けた表情で固まつてから頬を軽く搔いて見せた。

「おいおい、隊長殿……まさか殴られ過ぎてボケちまったのか？ 今のこの状況が理解出来ないのか？ 貴様はもう杖も無く、後は俺に焼かれるだけだ。この状況で何処に俺に勝ち目があるってんだ？」

「そうかもしれない。だが、それでもお願い申し上げる。この通りだ」

コルベールは両手と両膝を地面に着いて頭を下げ、日本で言う土下座の様な体勢で言う。

そんなコルベールを見ていたメンヌヴィルの口元が怒りで歪み始めた。

「俺は……俺は貴様みたいな腑抜けを超える為に、この二十年間を生きて来たと言うのか。許せぬ。俺は、俺が許せぬ！ じわじわと炙り殺してやる。産まれて来た事を後悔させながら殺してやる！」

メンヌヴィルは顔全体を怒りで歪めながら再び呪文を詠唱する。

「これほどまでに頼んでも駄目かね？」

「くどくどー」

尚も懇願するコルベールに怒鳴った瞬間、突如メンヌヴィルの足元からあの炎の大蛇が現れて身体にグルグルと巻き付いた。

「ぐおおおおおっ！ ば、馬鹿な!? 何故杖を持たぬ貴様に魔法が……！」

灼熱の炎の身体が自身の肌を焼く音を聞きながらメンヌヴィルが叫び声を上げる。

コルベールはそんなメンヌヴィルを殴られ膨れ上がった顔で見詰めながら立ち上がる。その手には両掌で覆い隠せるほどの小さい杖が握られていた。

「き、貴様!？」

「メイジたる者、いざという時用に仕込み杖の一つや二つは持つておく物だ。あの部隊に居た頃、私は君に教えておいた筈なのだが……今回ばかりは、出来の悪い部下だった事を嬉しく思うよ」

コルベールはローブの袖に折り畳み式の簡素な予備の杖を備えて、先ほど土下座の様な体勢で両手で地面を着く振りをしながら広げた杖を隠して、下を向いている時に小声で呪文を詠唱していたのだ。

「ついでに言うと、あの部隊に居た頃に教えた筈だ。蛇は音もなく獲物を仕留めると。

君の拳は確かにそれなりに強烈だったが、あの様に繰り返しては敵に反撃の機会を与えただけだ。必要以上の殺生を望んだ時点で、君には蛇になる資格はない。「炎蛇」と言う「蛇」の名に愛着も拘りもありはしないが、少なくとも君の様な者にはやれんな。先ほどの君の言葉を返すよ。そのままゆっくりじわじわと炙り殺してやる。産まれて来た事を、私の大切な生徒達に手を出した事を後悔すると良い」

無表情で感情のない声で言うコルベールにメンヌヴィルは熱い中ゾクリと寒気を感じた。

意識を失わせない程度に、しかし確実に肌を溶かして骨まで焼いていく炎に焼かれながらメンヌヴィルはコルベールに笑いかけた。

「ふふっ！ ふはははははははっ！ そうだ！ 流石だ、隊長殿！ 一瞬迷いもしたが、やはり俺はあんたを追って正解だった！ 隊長殿！ あんたは自分が教師になったつもりだろうが、何も変わっちゃいない！ その炎で他者を焼き殺す、人殺しのままで！」

狂った様に笑うメンヌヴィルに、コルベールは穏やかな笑みを浮かべて見せる。その眼からは、もう「蛇の眼」は消えていた。

「そうかもしれない。だが、もうそんな事に拘る事は辞めたのだよ。どんなに償おうと、私の犯した罪は消えない。しかし、異世界から来た友に教えられたのだ。「力」その物は悪では無く、使う者次第で守る事にも使えると。だから私は、大切な生徒達を守る為な



「コルベールはしやがみ込んで炭の塊を見詰めながら口を開く。  
「や」ようなら、副長」

事の成り行きを呆然と見ていたアニエスと目を覚ました他の銃士隊の隊員、更にはキュルケもハツと我に返り施錠された食堂の鍵を叩き壊して中へと突入した。

食堂の中は肉の焼け焦げた様な、異様な臭いが充満していた。

銃士隊が銃を構えるも、メンヌヴィルが引き連れていた傭兵達の姿が見当たらない。あるのは食堂のあちこちで煙を上げている炭の塊と女子生徒達、それとオスマンの姿だった。

銃士隊の隊員達が急いで負傷した他の隊員に駆け寄り声を上げる。

「誰かつ！…この中で治癒の魔法を使える物は居ないか!？」

銃士隊の声で恐怖から解放されたのに気付いた女子生徒達の中から、「水」系統を得意とする生徒がすぐに駆け寄って治癒の魔法負傷した銃士隊の隊員にかける。

他の銃士隊に誘導されながら、ある者は安堵から涙を流し、ある者は解けた緊張から腰を抜かしかけながら女子生徒達が食堂から外へと出て行く。

女子生徒達の解放を確認したコルベールは安堵の溜息を漏らすと、その場に倒れこんだ。顔中は殴られた痛みがまだ走っているし、身体の内側も痛い。

目の前に広がる月も星も隠してしまっている分厚い雲の隙間から、僅かに開かれた雲の切れ間から差し込む月明かりがやけに美しく感じた。

「先生っ！ 大丈夫!？」

視界の端から心配そうに此方の顔を覗き込むキュルケの顔が見えた。タバサを休ませて此方まで駆け寄り、しゃがみ込んで顔を覗いている様だ。

コルベールはそんなキュルケに穏やかな笑みを浮かべて腕を伸ばし、キュルケの頭を優しく撫でる。

「君も無事だった様だな。良かった……」

「やだ、先生……酷い顔してるわよ?」

安堵からか目に溜めながらキュルケの顔に苦笑が浮かぶ。

コルベールはそんなキュルケの顔を見て、自分が正しい事をしたという実感を感じた。

キュルケの手を借りて起き上がり、共に銃士隊と女子生徒達の元へと向かうコルベール。

コルベールの姿を確認した女子生徒達は次々と駆け寄って、感謝の言葉を述べた。

「先生! 助けてくれてありがとうございます!」

「怖かったよお、先生!」

女子生徒に囲まれる慣れない状況にコルベールは苦笑を浮かべながら無事で良かったと一人一人に声をかける。

「ちよつと皆、先生の顔を治療したいから離れてあげて」

負傷した銃士隊の隊員達の治療があらかた済んだらしく、モンモランシーが他の女子生徒達をコルベールから離れさせる。

食堂から持つて来た椅子にコルベールを座らせ、腫れ上がった顔に治療の魔法をかけるモンモランシー。淡い水色の光に照らされたコルベールの肌にプクプクと小さな泡が浮かんでは、完全ではないが腫れた肌が元に戻つて行き痛みを和らげる。

「ミス・モンモランシー、君の治療の技術は大した物だ。私は「水」系統はからつきしだからわからないが、かなり「水」系統に対して精進している様だね」

「やめて下さいよ、先生。私なんて、まだまだですよ」

コルベールの褒め言葉に苦笑しながらモンモランシーが言う。

モンモランシーの治療が終わった頃、オスマンがコルベールの元へとやつて来た。

「コルベール君。此度の生徒達の救出劇、誠に見事じゃった。不甲斐ないこの老いぼれに変わつて生徒達を救い出してくれた事、本当に感謝しておる。ありがとう」

顎髭を扱きながら言った後、頭を下げるオスマンに対してコルベールは慌てた様に立ち上がり手を振る。



「オールド・オスマン、今回は私ではなく率先して動いた銃士隊の方々に感謝を伝えてあげて下さい。彼女達が居なければ、私だつて生徒達を救えたかどうか……」

「ふむ、確かにそうかも知れぬな。おや？ あの隊長殿は何処へ行ったのかの？」

コルベールの指摘にオスマンが先ほどまでアニエスが居た場所に顔を向けるも、アニエスの姿が見当たらない。

ふと、コルベールは視界の端、メンスヴィルが焼かれた場所に立つて、その炭の塊を見下ろしているアニエスを見つける。

椅子から立ち上がりアニエスの元へと向かうコルベールに、キュルケが後ろからついて行く。

大きくなった雲の切れ間から差し込む月明かりに照らされたアニエスの背後から、コルベールが声を掛ける。

「隊長殿、今回はー」

瞬間、コルベールの言葉を遮る様に剣を引き抜いて振り返ったアニエスは、その切っ先をコルベールの喉元に突き付ける。瞳は憎悪に染まり、まるで飢えた獣の様なギラついた光を放っている。

「ちよつと！ 何してるのよ!?!」

キュルケがコルベールの横から飛び出してアニエスに怒鳴る。

キュルケの怒鳴り声でコルベール達の方へと視線を向けた女子生徒達も銃士隊の隊員達も、オスマンですら状況が理解出来ず目を丸くする。

憎しみの視線を向けるアニエスを、コルベールは真つ直ぐ見詰めた。

「貴様が、アカデミー実験小隊の隊長か？ 王軍資料庫の名簿を破ったのも、貴様なのか？」

アニエスの質問に、コルベールは静かに頷いた。

「なら、教えてやる。私はダングルテルの、貴様が滅ぼした村の生き残りだ！」

「……そうか。君があの子供か」

「何故我が故郷を滅ぼした？ 答えろ！」

アニエスの言葉に、キュルケはコルベールを見詰めた。メンヌヴィルが言っていた、女子供も容赦無く焼き尽くす隊長だったコルベールとアニエスが過去に会っていたのに驚きを隠せなかった。

コルベールは辛そうに顔を歪め、少し俯きながら口を開いた。

「……命令だった」

「命令、だと？」

「あの村で疫病が発生し、焼かねば被害が広がると伝えられた。当時の私は上からの命令に対して疑問を抱かない、文字通り言われたまま仕事をこなすだけの男だった。だか

ら、それが正しいと思ひあの村を燃やした」

「馬鹿な……それは嘘だ。あの村に疫病なんてなかった」

リツシユモンが賄賂を受け取り下した命令の内容に、アニエスは絶望した様な声で呟いた。

その言葉に、コルベールは力無く頷いた。

「私も後から知った。疫病と言う仮の理由をつけた「新教徒狩り」だと。それを知った日から、私は毎日罪の意識に苛まれた。奴の、メンヌヴィルの言つた通りの事を私はした。罪も無い人々を、女子供を焼き殺した。許される事じゃ無い。忘れた事も一時も無かつた。それで私は軍を辞めた。二度と炎を、破壊の為に使うまいと誓つた」

「それで貴様が手にかけて人々が戻つて来ると思ふか？ 奪われた者が貴様を許すと思ふか!？」

悲痛な叫び声を上げるアニエスに、コルベールは首を振る。

「許されたいと思つた事はないし、許されて良い事だと思つた事はない。だから、君がこの場で私を殺し、それで君が満足出来るのなら喜んでこの命を差し出そう。復讐も誰かを殺める正しい理由……私はそう思っている」

コルベールは持っていた予備の杖を投げ捨て、両手を広げて見せた。

アニエスがそんなコルベールに剣を振り上げる。

そんな二人の間に、キュルケが割って入った。コルベールを守る様に、両手を広げてアニエスの正面に立つ。その顔からは、普段の人を小馬鹿にした笑みはなく、真剣な表情だった。

「お願い、止めて！」

「退け！ 私はこの男を殺す為に生きて来た！ 二十年だ！ 討つべき仇の片方を奪われたが、今度こそ私の手で復讐を終える！」

「退きなさい、ミス・ツエルプストー。これは私と彼女の問題だ。君が首を突っ込んで良し事じゃない」

コルベールがキュルケの肩を掴んで退かせようとすると、キュルケは胸の谷間から回収しておいた杖を取り出してアニエスに向ける。

「どうしてもこの人を殺すと言うのなら、あたしが貴女を殺すわ！」

「止めろ、ツエルプストー！ 君まで復讐の螺旋に囚われて駄目だ！」

「先生は黙ってて！ 隊長さん、確かにこの人は貴女の仇かもしれない。でもあたしはこの人のお陰で今こうして生きている。貴女だってそうでしょう？ この人が居なきゃ、あたしも貴女もあのメンヌヴィルとかいう奴に殺されていた。この人を許して、とは言わない。でもあたしは、あたしを救ってくれたこの人を殺そうとする人間を絶対に許さない！」

「邪魔をすると言うのなら、貴様も殺すぞ！」

「殺りなさいよ！ 此処で黙ったまま命の恩人が殺されるのを見ているくらいなら、その恩人と一緒に殺される方がずっとマシだわ！」

必死に止めようとするコルベールをキュルケは強い口調で制してアニエスを睨み付ける。

アニエスもまた、そんなキュルケを鋭い目付きで睨み付けた。そして気付く。自分を見詰めるキュルケの瞳。それは鏡に写っているかの様に自分と同じ、憎悪に染まった瞳だった。

リツシユモンへの復讐を邪魔したあの男、カズマの言葉が蘇る。

「人間は長い事暗い道を歩いていると、この先もずっと暗いものだと思っちゃまう。そして次第に、先に進む事が嫌になっちゃまう。そして全てがどうでも良くなっちゃまうんだ。お前は、何時まで復讐なんて暗い道の中で彷徨い続けてる？ お前にとってこの男が許せないなら、この男と同じ様な奴を作らない為に一歩前に行くべきじゃねえのか？」

もしもこの場でコルベールを殺せば、このキュルケという少女は自分と同じ道を歩むのだろうか。この少女にとって、自分がリツシユモンと同じ立場の人間となるのだろうか。

深い闇の中を歩み続ける辛さや苦悩は痛いほど良く知っている。表面では仲間だ味

方だと口にしながらも誰も信用出来ない、何も信じられない、世界中の全てが敵に見えてしまい、言葉では言い表せない孤独の中を生きる事になる。

痛いくらい歯を食いしばりながら心の中で葛藤したアニエスは、更に高々と剣を振り上げて地面に突き立てる。

「この少女が言う通り、今回は貴様に命を救われている。だから……今回は引いてやる」  
剣を地面から引き抜いて鞘に納め、キュルケとコルベールの横を早歩きで通り過ぎたアニエスは足を止めて、顔を二人に向けて叫ぶ。

「忘れるなっ！ 私には貴様を許した訳ではない！ いつか必ず、復讐は果たす！ 精々身勝手な思想を抱いた偽善者として生きて行くが良い！」

アニエスはそれだけ言うとは他の銃士隊の隊員達を引き連れて宿舎である火の塔へと向かった。

アニエス達を見送ったキュルケは杖を再び胸の谷間に仕舞い込むと、腰が抜けた様にガクンと身体が沈んだ。

キュルケの身体を慌てて抱き止め、其処でコルベールは気が付いた。キュルケの身体が小刻みに震えている事に。

「ツエルプストー……なんて無茶をしたんだ。せつかく助かった命を粗末にする様な真似をして」

怒りと呆れの籠った口調で言うコルベールに、キュルケは苦笑する。

「だって、まだ貴方に伝えてない事があったんだもの」

「伝えてない事？」

キュルケの言葉にコルベールが首を傾げた。

そんなコルベールに、キュルケはニコツと笑った。普段の大人びた感じとは違う、年相応の少女らしい可愛らしい笑顔だった。

「助けてくれてありがとうって。あたし、先生の事を散々馬鹿にしたのに、「私の生徒に手を出すな」って言うってくれたでしょう？ あたし、こう見えても嬉しかったのよ」

「そんな事か……」

キュルケの言葉に今度はコルベールが苦笑する。

「事実を言ったまでだ。君も、他の女子生徒達も、私にとって大切な生徒だからね」

「……そこは嘘でも、「君は」ってあたしだけを指して欲しいわね。本当、乙女心がわかってないんだから」

「えっ？ あ、ああ……その、すまない」

「駄目、許さない」

困った様に顔をしかめるコルベールの身体に抱き着いて、顔を胸元に埋めるキュルケ。その身体は先ほどよりも震えが強くなっていた。

「罰として、このまま強く、抱き締めて。女の子は泣いてる顔を、殿方に見せたくない物、なのよ……」

呟く様に言うキュルケの声は震えていた。恐怖や緊張から漸く解放された事で、感情が高まってしまった様だ。

普段は他の女子生徒よりも大人びた雰囲気や言動をしていますが、キュルケも実際は十代の少女なのだ。今回の事は本気で怖かったのだろう。

コルベールは答える代わりにキュルケの身体を強く抱き締め、何度も優しく頭を撫でた。

嗚咽を漏らしてコルベールのローブを握り締めながら泣くキュルケ。

キュルケの頭を撫でながら顔を上げたコルベールの視界には雲が流れ、夜明けに向かつて起きようとしている太陽の明かりに空が徐々に白み出しているのが見えた。



## 第51話

ロサイスへと真つ直ぐに向かっている「ヴュセンタール」号の作戦会議室で、ド・ポワチエ將軍は報告を受け取った。

ロサイスへと偵察に向かっていた第一竜騎士中隊の一騎士からの物だ。報告を聞いたド・ポワチエ將軍の口元には機嫌の良い笑みが浮かび上がっている。報告を聞いたド・参謀総長のウインプフェンが上官の笑みを見てニヤリと笑った。

「どうやら朗報の様ですな」

「ああ。ロサイス付近はもぬけの殻と化したとの事だ。どうやら「虚無」は期待に応えてくれたらしい。アルビオン軍の全ての艦隊がダータルネスへ吸引された様だ」

「ほう！ これで勝利への第一の関門は突破出来たという事ですな」

ウインプフェンの相槌にド・ポワチエ將軍は深く頷いた後、軽く咳払いをしてから命令を発した。

「これより我が艦隊は全速をもつてロサイスへと向かう。上陸に向け、打ち合わせをしなければならぬ。各指揮官を急ぎ集めよ」

ド・ポワチエ將軍の命令を受けた伝令は深々と頭を下げた後、全速力ですつ飛んで

行った。

ウインプフェンを脇に携え、ド・ポワチエ將軍が作戦會議室の椅子に腰掛ける。

「さて、俺が元帥となれるかは今後一週間にかかっている。この第一の作戦成功がそれを何処まで後押ししてくれるのやら……」

ド・ポワチエ將軍は近くに広げられていた作戦會議用のアルピオン大陸の地図を引き寄せ、掌を勢い良く地図の中心へ叩きつけた。

この広大な空飛ぶ大陸には手付かずの五万の敵兵が眠っている。上陸は成功しても、厳しい戦いとなるのは火を見るより明らかだった。

ダータルネス上空に艦隊の幻影を浮かべた後、たった一機となつてしまつた桐生達を乗せたゼロ戦は、トリステイン艦隊との合流地点を目指して飛行していた。

計画書に書かれた通りならば、アルピオン大陸と空の境界で艦隊と合流出来る。

機体の中は、重苦しい空気が充満していた。

操縦席に座つた桐生は黙つたまま、ただ前だけを見ていた。

そんな桐生にルイズは何とか声を掛けようとするも、上手く言葉を出せずに口を開きかけては閉じるのを繰り返していた。

しばらく飛行していると雲が途切れ、ロサイスを目指すトリステイン・ゲルマニア連

合艦隊が姿を現した。

最初の頃に比べると、随分と数を減らしている。

が、それでも輸送船団がほとんど無傷という事は、戦闘に勝利したのだろう。

勝つたとはいえ、生き残った船も満身創痕と言った様子でボロボロだった。船体には幾つも穴が空き、マストがへし折れてる船もあれば、片舷の大砲がそっくり無くなっている船もあった。

「……あの、カズー」

「忘れるなよ、ルイズ」

重苦しい沈黙に耐えかねたルイズが必死に喉を絞って出した声は、桐生の言葉で遮られた。

桐生の声に身体を硬直させるながら生唾を飲むルイズ。

そんなルイズに、桐生は顔を向けた。その表情は悲しんでいる様な、苦しんでいる様な物で、瞳は寂しい光が秘められていた。

「俺達の為に命を懸けた、あいつ等を忘れるな。そして、人の「死」に慣れるな。これから先、この戦争が進むに連れて、亡くなる仲間もいるだろう。でもな、どんなに仲間を失ったとしても、「死」という物に慣れるな。人が死ぬのを、当たり前だと思ふな。この世に、意味もなく亡くなって良い命なんてないんだ」

「……………うん」

ルイズが「始祖の祈祷書」を抱き締めたまま、ゆっくりも深く頷くのを見届けてから桐生はゆっくり前へと顔を戻した。

目の前に「ヴェュセンタール」号の機体が見え、ゼロ戦は着艦する為に機首を向けた。黒煙と火薬の匂いが漂う中、ゆっくりと夕日へと変わり始めてる淡いオレンジ色の日の光が煤まみれの艦隊を美しく輝かせた。

「ヴェュセンタール」号に無事着艦したゼロ戦の傍らにはド・ポワチエ將軍を筆頭に参謀達が集まっていた。無事に任務を達成した「虚無」ことルイズを労う為に出向いたのである。

エンジンが切られたゼロ戦の風防が開けられ、桐生とルイズが顔を出すと、ド・ポワチエ將軍が拍手をして見せた。

それを皮切りに参謀達も次々と拍手をして二人を出迎えた。

桐生は無表情のまま、ルイズは複雑な表情でゼロ戦から降りる。すると二人を囲む様にド・ポワチエ將軍達が拍手を続けながら笑顔で近づいて来た。

「お見事です、「虚無」殿。無事に作戦を成功させてくれた事を心より感謝致しますぞ」

「あ、いえ……」

ド・ポワチエ將軍の勞いの言葉に、ルイズは困った様に頬を搔きながら頷いた。

作戦の成功は喜ばしい事である。だが、桐生の事が引つかかっているのか素直に喜ぶ事が出来ないルイズであった。

そして気付く。ド・ポワチエ將軍を含め、拍手も笑顔も誰も桐生へと向けていない事に。

今までは平民だから当然だと思っていたその光景に、ルイズは内心齒噛みする。

確かにあの呪文、「イリユージュオン」を唱えたのは自分かもしれない。だが、その呪文を成功させられたのは他ならぬ桐生のおかげだ。そんな彼に対して何の勞いの気持ちも無いのは失礼だと思わないのか。

「虚無」殿のおかげでロサイスは問題なく占拠出来るでしょう。今宵は細やかですが作戦成功の祝勝会をしたいと思っております。宜しければお二人もー」

「悪いんだが」

舞い上がった様に話すド・ポワチエ將軍の言葉を桐生が遮る。

突然自分の言葉を遮られた事に面食らった様に目を丸くさせるド・ポワチエ將軍とルイズが桐生へと顔を向けた。

桐生は相変わらず無表情だが、その顔には些か疲れの様な物を感じさせた。と言うよりは、うんざりしている、と言った方が正しいのかもしれない。

「俺は遠慮させて貰う。少し……疲れた。祝勝会とやらは俺抜きでやってくれ」

桐生はそれだけ言うと、ド・ポワチ工將軍や參謀達を乱暴に押し退け、自分達の部屋へと通じる通路の扉を力任せに開くと艦内へと消えて行つた。

「全く、「虚無」殿の使い魔であるとは言え、平民は作法というのを知らないので困る」

ド・ポワチ工將軍が嘆く様に言うと、參謀達も全くだと言わんばかりに頷いて桐生の入つた扉を軽蔑する様に見る。

ルイズはド・ポワチ工將軍達の態度に怒りを覚えた。桐生がどれだけ傷付き、どれだけ辛いのかを分かつていない。エルギースが、自分と歳の変わらぬ少年達が死んだというのに彼等の事も一切口にしないのも気に食わない。

頭では分かっている。今は戦争中だ。犠牲者を想つて嘆いてばかりはいられない。だが、せめて形だけでも良い。彼等の為にまず祈りを捧げるくらいしても良いのではないか。

ルイズはここで改めて思った。今のド・ポワチ工將軍達が、目の前の大人達が桐生の言う「死」に慣れた人間の姿なのだと。

彼等にとつて戦場で死に行く者等、所詮は手駒が無くなつた程度でしかないのだ。手駒が無くなつたならば新しく兵を補充すれば充分、そういう考えなのだろう。

自分がこの戦争の、アンリエッタの役に立てたのは良かったと思つている。その為に

今回の従軍に志願したのだから。自分が得たこの「虚無」の力を、アンリエッタの為に使おうと。

様々な考えが頭の中で渦巻き、ルイズは疲れた様な溜め息を漏らしてから肩を落としてド・ポワチ工將軍に声を掛けた。

「ごめんなさい、將軍。私も呪文の発動で少し疲れたみたいです。祝勝会には私とカズマは不参加という形でお願いします」

「む、左様ですか。残念ですが伝説の魔法となると疲労も並ではないのかもしれないかもしれません。分かりました。ではごゆっくり、お寛ぎ下さい」

心底残念そうといった表情でド・ポワチ工將軍はそう言うのと、参謀達に軽く声を掛けて道を開けさせた。

ルイズは開けられた道を通り桐生同様に扉を開いて船内へと入る。

コツコツと自分の足音が響く艦内の廊下を歩き、自分達にあてがわれた部屋の前まで来た。

ルイズは扉を開こうとドアノブへ手を伸ばして、そこで戸惑った様に手を引っ込めてしまった。

中には恐らく桐生が既に居るであろう。ならば、何と声を掛ければ良いのだろうか。

叱られた訳でも、喧嘩した訳でもない。だがゼロ戦のコックピットでの重苦しい空気

を考えると、ルイズの心は大きく騒ついた。

別に無理に声を掛ける必要は無いのは分かっているのだが、あの沈黙の中でジツとしているのは些か耐えられない。

しばらくモジモジした様に扉の前で身体を揺らしてから、ええいままよと意を決して扉を開いたルイズ。内開き式の扉が開き、そのまま中へと入る。

部屋の中では桐生がベッドの上で横になっていた。

桐生が寝ていると思つたルイズはゆっくりと音をなるべく立てない様に扉を閉める。

「いようつ、娘っ子。戻ったかい」

突然掛けられた声にルイズの身体が驚きにビクツと跳ねて反応する。

振り返ると壁に立て掛けられていたデルフリンガーがカタカタと小刻みに揺れている。どうやら笑っている。

「こいつあ面白え！ 身体を大きく跳ねさせるたあ、良い反応じゃねえか、娘っ子」

「い、いきなり話し掛けられないでよ！ ビククリするじゃない！」

「冷てえなあ、そりやあ冷てえ言い方じゃねえか、娘っ子。こちとらずつと大人しくお留守番してただげ？ ちよろつと喋るくらい許して貰えねえつてのかい？ 人権……」

剣権？ も俺には無いつてか？ ああ、傷付いた。俺は今とおつても傷付いた！」

カタカタ揺れながら話すデルフリンガーにルイズは大きく肩を落としながら深い溜



め息を漏らした。色々考えていた頭の中がこの喧しい声で一気に吹き飛んでしまった。「デルフ、ルイズも疲れてるんだ。もう少し静かに喋ってやれ」

横になっていた桐生からの言葉に、ルイズがハツとした様に声の方へと顔を向ける。どうやら桐生は眠っていた訳ではない様だ。

桐生からのたしなめとも捉えられる言葉に、デルフリンガーはすかさず抗議の声を上げる。

「なんでえなんでえ、相棒までよお！　さんざつばら鞆ん中に納めつばなしで全然構ってくれねえ癖に、いざ喋ってみりやあまるで俺がうるせえ奴みてえに言いやがつて！」

「実際うるさいじゃないの……」

抗議に対してのルイズの言葉にデルフリンガーは一際大きくカタンと揺れた。どうやら怒りの意思表示らしい。

「はーっ！　そうかいそうかいっ！　ピンチを救ってやったこの命の恩人、恩剣？　である伝説の剣に向かってうるせえってか！　こんな言われ方しなきゃならねえたあ、世も末ってやつだなあ、おい！　泣くぞぞ！　いじけるぞ、こらっ！」

「あんた、本当にうるさいわよ！　ちよつと黙ってなさい！」

ルイズはズカズカとデルフリンガーに向かって歩み寄ると、ヒョイと持ち上げて鞆と柄をそれぞれの手で掴んだ。

「あつ！ 止めろ、娘っ子！ 久々のトークタイムを強制終了させんな！ ねっ！ お願ひ！ 鞆に納めないでー」

強気だった口調から懇願に近い口調へと変わるデルフリンガーの言葉を無視して、ルイズは力強く鯉口を鞆へと納めた。

明るく喧しい声がまるで切れたスピーカーの様に消えて、部屋の中には静寂が訪れた。

ルイズは忌々しそうにデルフリンガーを眺めてからやや乱暴に壁へと立て掛けると、自分のベッドへと腰掛けた。

天井に向けられていた桐生の顔がゆっくりとルイズの方へと向けられる。

「祝勝会とやらには行かなかったのか？」

「あんな人達と楽しく食事が出来るとは思えないわ。私も少し疲れてるし……だから断っちゃった」

疲れているのは事実だが、桐生が行かないなら自分も行かないという子供っぽい理由は胸の中にしまっておいた。

桐生は再び天井へと視線を向けると小さく息を漏らした。

「そうだな。以前同様、お前は凄い魔法を成功させたんだ。疲れて当然だな。お前も少し横になった方が良くぞ？ 眠れなくても、疲労は多少取れる」

そう言った桐生をジツと見詰めてから、ルイズはベッドから立ち上がってゆつくりと桐生へ近寄る。

天井を映していた桐生の視界の端から、ルイズの顔がひよっこり覗き込んだ。可愛らしい鳶色の瞳はどことなく不安そうな色を見せている。

どうしたのかルイズを見詰めていると、ルイズの小さな唇が動く。

「隣……良い？」

不安そうにそう口にしたルイズに対して、桐生は笑みを浮かべて答える変わりに身体を少しずらした。

ルイズは安心した様に笑ってからそそくさと桐生の隣に横になる。此方に身体を向けてくれた桐生の胸元に額を軽く当てながらまるで子猫の様に身体をすり寄せた。

桐生の手が、ルイズの頭を優しく撫でる。ルイズにとつて祝勝会やどんな言葉よりも自分への労いと思える優しい感触が心地良い。鼻腔を擦るのは、煙草の匂いが混じった桐生の香り。

窓から差し込むオレンジ色の日の光はゆつくりと消えて行き、ランプの淡い灯だけが部屋を照らしていく中、桐生とルイズは疲労から眠りの海へと落ちていった。

カチリ、という聞き慣れた音で桐生は目を覚ました。

周りを眺めてランプの灯以外は部屋を照らしていないのを見ると、そこそこよるが深まった頃の様だ。だが、まだ祝勝会とやらは行われているらしく、少し遠くの方から笑い声が聞こえる。胸元ではルイズが小さな寝息を立てて眠っている。

ルイズを起こさぬ様に気遣いながらゆっくりベッドから降りて、ランプの灯りを息で吹き消し意識を集中させる。

遠い笑い声に混じって、かなり近い距離から忍び足で此方に近付いている気配を感じる。どうやら招かれざる客が深夜の訪問に訪れたらしい。

桐生は扉の前で佇み、深い呼吸を繰り返す。すると徐々に身体から青いヒートの光が溢れて来た。薄暗い部屋の中で桐生の身体から溢れる青い光だけが淡く辺りを照らす。

そうやって招かれざる客を待っていると、ドアノブがゆっくりと回り始めた。

桐生は咄嗟にドアノブを掴んで勢い良く扉を開く。開かれた扉の前には、一人の男が立っていた。

立っていたのは若い男だった。歳は二十代、見方によつては三十代の前半くらいにも見える。服装を見た所、船の整備士の様だ。薄汚れた茶色のツナギにカーキ色の帽子を被っている。「ヴェンセンタール」号を初めて来た時、ゼロ戦を下ろしてから機体を固定するワイヤーを弄っている同じ服装の人間を見かけたのを覚えている。

しかし、彼はどうやら他の整備士とは少し違う様だ。右手に握られているのはナット

やドライバーではなく、拳銃だからだ。

突然開かれた扉に面食らった様に驚いた表情を浮かべていた男はすかさず握っていた拳銃の銃口を桐生に向ける。

「遅いっ！」

銃口が向けられたのと同時に桐生は拳銃を握っている男の右手首を左手で掴み、銃口を自分から逸らさせつつ右手を内側から振り回して男の右頬を強く引つ叩く。

右頬から身体に走る衝撃に意識を揺さぶられた男に今度は顎へ掌底を強く打ち付けて床に叩きつけた。床で背中を強く打った男の右手から拳銃が離され、乾いた音を立てて床を転がる。

古牧流体術、「火縄封じ・短筒崩し」。拳銃の様に短い銃火器に対して発砲する前に先手を打つ護身体術である。

男が痛みに呻きながら立ち上がろうとした為、桐生は胸ぐらを掴んで腹を蹴り付け男の身体を廊下へと吹き飛ばす。

まだベッドで眠っているままのルイズを一瞥してから桐生も廊下へと出てそつと扉を閉める。

一定の感覚で蠟燭の燭台によって僅かな灯りが灯されている廊下では、男が痛みに耐えながらゆつくりと立ち上がった。

「アルビオンからの鉄砲玉か」

男は黙ったままツナギの前を開いてナイフを取り出した。その行為を桐生は肯定とみなした。

「何で俺が来る事が分かった？」

男はプツと血混じりの唾を吐き捨ててからナイフを構え、桐生に問い掛ける。

「お前の持っていた拳銃、どうやら撃鉄を挙げなければ撃てないらしいな。あの撃鉄の拳がる音を、俺は以前居た所でも聞いた事があつてな。だから身の危険を感じて待ち構えて居たんだ」

「あの音に気付いたのか……」

「もつと遠くで撃鉄を起こすべきだったな。お前の計画は失敗したつて訳だ」

桐生の言葉に男はナイフの位置を変えずに片手で帽子を深く被り直しながら、俯いて肩を揺らして笑つて見せた。

「馬鹿な奴だ」

「何だと？」

男の言葉に桐生は訝しげな表情を浮かべながら問い掛ける。

男が顔を上げると、狂気にギラついた瞳が覗いた。

「眠ったまま撃ち殺されていれば苦しまずに逝けたものを。予定は変わったが、俺がお

前を殺す事に変わりは……ないっ！」

素早い動きで帽子を脱ぎ捨てるなり桐生へ投げ掛ける男。

桐生が帽子を片手で弾くのとほぼ同時に、男のナイフが桐生の首筋目掛けて閃く。

桐生が避けると男はすかさずナイフを逆手に持ち替え、銀色の刃で追い掛ける。

桐生はナイフを持っている男の首に左腕を当てて迫り来る切っ先を防ぐ。ふと、遠目では分からなかったが、ナイフの刃が何かで濡れているのが分かった。切っ先からポタリと落ちる雫が蠟燭の灯りで煌めく。

毒だ。瞬時に桐生はそう判断した。

右の拳を男の腹目掛けて突き出す桐生。その拳が届く前に男は弾かれた様に後ろに引いて桐生との距離を取る。

「そのナイフ、ただのナイフじゃなさそうだな」

「ご名答。調合師に配合して貰った特製の毒が塗られてるのさ。例えかすつただけだとしても毒が体内に入れば激痛に襲われ、数分後にはあの世行きの特別製だ。苦しみなから死ぬ事になる。撃ち殺された方が良かったと思ひながら逝かせてやるぜ」

ナイフを指先で弄びながら言う男の顔に狂気的な笑みが浮かぶ。

桐生は黙ったまま腰に差ししていたウェールズの形見である短剣を取り出して、鞘から引き抜いた。

汚れない白銀の諸刃が男のナイフ同様に蠟燭の灯りで妖しく光る。

桐生が鞘を腰に差し戻し、短剣を持って構えると男も笑みを浮かべたまま構え直す。

お互いの出方を待つ様にゆっくりとした動きで間合いを取り合っていると、男が先に仕掛けた。

「しゃあっ！」

叫び声と共に突き出された男のナイフの刃を、桐生が短剣で受け止める。

ガキンという耳障りな金属音と火花が飛び散り、薄暗い廊下に一瞬真昼の明るさが広がる。

キンツと金属音を立てながら刃同士が離れると、男がナイフを桐生目掛けて振るう。

男は慣れた動きでナイフを操り変幻自在の斬撃を桐生に浴びせる。男にとってはたった一撃でも桐生に当てれば良いのだ。

ナイフによる突き、袈裟切り、払いの斬撃を間一髪で短剣で受け止めて防いでいく。その度に火花が飛び散り、薄暗い廊下を明るくする。

遠くでは未だに祝勝会による物なのか賑やかな笑い声が聞こえる。浮かれた連中の知らぬ所で命懸けで戦っている自分に、桐生は少し惨めにも感じた。

男のナイフを受け止め弾いた瞬間、衝撃からか桐生の腕が大きく上がる。

「貰ったあっ！」



桐生の隙を突いたとばかりに、勝利を確信した男が笑みを浮かべながら桐生の腹へナイフを突き出す。

瞬間、桐生は上がっていた腕を素早く動かしナイフが腹へ届く前に、短剣の柄頭で男の右手に握られているナイフの柄を強く叩く。

硬い柄頭の衝撃と痛みに顔を歪め声を漏らしながら、男の手からナイフが零れ落ちる。

桐生は間髪入れずに男の右手首を左手で掴んで壁に押し当てるなり、男の右手の甲の真ん中に短剣の刃を容赦なく突き刺した。

「があああつ！ お、俺の右手が……」

短剣が抜かれ、桐生に床に転がされた男が自分の右手を押さえながらのたうち回って声を上げる。貫かれた男の右手の甲と掌の傷口からは鮮血が溢れ出し、床に赤い水滴を幾つも作っていく。

我流喧嘩体術、「ドス刺しの極み・壁」。相手の手首を掴むなり壁へと掌を押し付けさせ、手の甲へドスや短剣といった短めの刃物の刃を容赦なく突き立て貫く荒技だ。

「ナイフの扱いはそこそこ悪くない。だが、生憎俺の知り合いに、ドスを持たせたら右に出る者が居ない男が居てな。その人に比べれば、お前のナイフ捌きなんて大した事がない」

桐生は短剣を軽く振るい、刃に着いた血を飛ばして鞘に納めながらそう口にしながら頭の中に一人の男の顔を思い浮かべていた。

頭に浮かんだのは自分の兄貴分でもある男、真島吾郎。真島組組長であり、元嶋野組若頭。通称、「嶋野の狂犬」。その通称が指す通り、常識では測れない男。

素手での喧嘩の腕も恐ろしく強いが、愛用しているドスの「鬼炎のドス」を扱わせればその性格と同じくらいに読めないドス捌きで此方を翻弄してくる。その動きは左目を失っているというハンデを感じさせず、喧嘩を、いや、殺し合いを楽しむ様な恐ろしい無邪気さを持っている。

沖繩のリゾート開発と基地拡大の本当の狙いを国会議員である田宮防衛大臣から聞かされた後、自身の計画を桐生に邪魔されまいと国会議事堂前でリゾート開発に力を入れていた田宮と同じく国会議員の鈴木から差し向けられたSPとの戦いの最中、トラックで救いに来てくれた時は一瞬本当に轢き殺されるかもしれないと思ったが、あの男のおかげで今の自分がいる。

「もう終わりだ。さあ、雇い主は誰だ？ 言えっ！」

うずくまっている男の胸ぐらを掴んで無理矢理身体を引き上げ、凄味を聞かせながら問い掛ける桐生。

男は額に痛みから脂汗を浮かべながらも、絶対に口を割るまいと笑みを浮かべながら

首を振った。

拳の一つでもお見舞いしてやろうかと桐生が腕を上げると、背後から扉の開く音が聞こえた。

桐生が音の方へと振り返ると、ルイズが部屋から顔を出していた。

ルイズのまだ眠たそうな表情が、桐生が男を掴んでいる姿を見て険しい物に変わる。

「カズマ、一体どうしたの？ その人はー」

「来るなっー」

部屋から飛び出そうとするルイズを声で抑え様と桐生の意識が一瞬男から外れる。

男はその僅かな隙を逃さずに左手で桐生の腕を振り解くと、数歩下がって距離を取りながらツナギのポケットから黒々とした液体の入った小瓶を取り出す。

桐生と目が合った男は一瞬ニヤリと口元を歪ませると、小瓶の蓋を指先で器用に弾いて開ける。

「よせっー」

男の行動の意図を察した桐生が次の行動を止めようと駆け出すも、男は桐生が近付くより早く小瓶を口に当てて中の液体を啣る。

次の瞬間、男は喉を押さえながら苦悶の表情を浮かべ、声にならない呻きを上げながら口から泡を吹いて崩れる様に倒れる。

桐生が倒れた男に駆け寄るも、男は既に事切れていた。首を押さえていた両腕はダラシと力が抜けて広げられており、瞳孔が広がった虚ろな眼が虚空を見詰めている。

その姿は、かつて大阪で「ヤクザ狩りの女」と呼ばれていた狭山薫と共に探っていた韓国のマフィア組織、「真拳派」の刺客を思い出させた。「真拳派」と東城会の因縁を探つて、大阪の新星町で情報を探していた桐生と狭山が辿り着いた「桂馬」という将棋クラブ。そこで桐生達に襲い掛かり、最後には薬で自害した刺客達。

何処の世界でも暗殺者はいざという時自害する物なのかと改めて思わされた。

「如何されました!? 今、叫び声が聞こえましたぞ!」

先ほど男が上げた叫び声を聞き付けたらしいド・ポワチエ將軍が取り巻きを引き連れドタドタと走って来た。ついさつきまで宴を楽しんでいたのが赤らんだ顔から察せられる。

桐生の足元で泡を吹きながら倒れている男を見て、ド・ポワチエ將軍は桐生と男を交互に驚いた表情で見る。

「一体何事だったのですか!?! この男は……我が軍が雇った整備士の様だが?」

状況が理解出来ないド・ポワチエ將軍に、桐生は小さく首を振った。

「どうやらアルビオンからの刺客らしい。俺達の寝込みを襲いに来やがった」

「な、何と! 艦内にネズミが!」

酒で赤らんでいたド・ポワチエ將軍の顔がサアツと青くなつていく。

部屋から顔だけを出していたルイズが何かに気付いたらしく、一度顔を引つ込めてから廊下へと出て来る。

「あの、これ……」

ルイズが手に持つていた物を不安そうに差し出す。

それはあの男が持つていた拳銃だった。古いタイプの拳銃らしく、撃鉄を上げて一発撃つては弾を込め直さなければならぬ単発式の様だ。木製のグリップに鉛色の鉄製の銃身がくつつけられている。

恐らく男はこの拳銃で桐生かルイズのどちらかを仕留め、残った方をあのナイフの毒で殺めるつもりだったのだろう。

桐生がルイズから拳銃を受け取り、ド・ポワチエ將軍に手渡す。

「酒盛りをするのも悪くないが、背後には気を付けた方が良いかもな」

桐生の言葉にド・ポワチエ將軍がゴクリと生唾を飲む音が響く。

桐生は死体となつた男の処分をド・ポワチエ將軍達に任せ、ルイズを連れて部屋へと戻つた。

桐生もルイズも同じベッドに腰掛けると、どちらからともなくお互いに身体を寄せ合つた。

敵はもしかしたら他にも居て、息を潜めて機会を伺っているのかもしれない。

ルイズの小さな身体を抱き寄せながら、桐生は「ヴェンター」号を逃げ場のない動く監獄の様に感じていた。

## 第52話

艦内での奇襲から一夜明け、トリステイン・ゲルマニアの連合艦隊はアルビオンの港町ロサイスへと辿り着いた。

突如としてロサイスを守る為に駐屯していた守備隊であるアルビオンの兵達は驚き、互いに顔を見せ合って慌てた。

「何で敵の艦隊がこっちに來たんだ!? あいつ等、ダータルネスへ向かったんじゃないのか!」

「知るか! とにかく至急ダータルネスへ伝令を走らせろ! この人数じゃ勝ち目なげざある訳ない!」

ルイズの「虚無」の魔法、「イリユージョン」で作り上げた艦隊連合の幻想からほとんどの兵はダータルネスへと向かってしまい、ここロサイスには多く見積もっても五百程度の兵しか残っていないかった。例え此方に来るとしても、敵の殆どがダータルネスへと向かっているだろうとの事でありロサイスへの守備力を強めなかつたのである。

そんな訳でロサイスに残っていたアルビオン兵達は、今回自分達はあまり仕事もせず、に済むだろうと高を括っていたのだ。

そんな緊張感もほどよく解けてる状態のアルビオン兵達は、突如現れた敵艦隊に慌てふためくしかなかつた。

「今からじゃ間に合わない！ とにかく我々で防衛をー」

一人のアルビオン兵の言葉は、連合艦隊から放たれた大砲の音によつて掻き消された。

なるべくロサイスを傷付けたくない連合軍は極力町を崩壊させない程度に大砲を放ち牽制しつつ、六万の兵を乗せた艦隊を次々と上陸させた。

艦隊の中で守られ力を温存していた連合軍の兵達が一斉にロサイスの町へと雪崩れ込む。

アルビオン兵達のほとんどは平民で剣や銃を手に取り対抗したが、多勢に無勢、ほとんど連合軍側の兵が消耗する事なくロサイスは占領された。

ロサイスの町を隅々まで調べ、アルビオン兵を全て排除、又は捕虜にした所で、艦内で待機させられていた桐生とルイズに町へ降りる様に指示が出された。

ルイズと共に桐生が艦内からロサイスへと出ると、大砲によつてであろう黒煙が上がる港町が目の前に広がった。

栈橋が海ではなく空へと伸びているので、少し視線を下に落とせば海の代わりに雲とその切れ間から見える森や山が見える。



港町というだけあって、棧橋の奥には灯台の様な石造りの高めの塔が二本、まるで門の柱の様に左右に一本ずつ建てられている。片方は大砲によって少し崩れてしまっているが、その左右対象に建てられたであろう形には不思議な美意識を感じさせる。

棧橋を渡って港となる広場を抜けると、石と木で作られた小さな町並みが広がった。素朴な白を基調とした壁に彩りどりの屋根の家が広がり、港からすぐの場所には酒瓶やパン等が描かれた看板がつけられた建物が多く見える。こんな戦争中でなければそこそこの活気のある町なのだろうと思わせた。

そんな建物も、いくつかは大砲によって壊されてしまつて黒煙が上がっていた。先ほどチラリと聞いた兵の報告によれば、戦争にあたつてアルビオン軍の人間以外は町から出されていたとの事なので、取り敢えず一般の市民の被害がない事に桐生は安堵していた。

ルイズと歩いていた桐生は不意に一人の兵に声を掛けられた。どうやらド・ポワチエ将軍がお呼びらしい。

桐生は兵に案内されるまま所々が崩れたロサイスの町並みを眺めながら歩いた。そして町から少し離れた場所に、ド・ポワチエ将軍を筆頭に作成会議の時に見た面々が集まっていた。中央には大きな木製のテーブルが置かれ、それを囲む様に皆座っている。その周りには豪華な作りの天幕が張られている。恐らく此処に居る連合軍将軍達の専

用の物なのだろう。

「おお、来なすつたな。「虚無」殿、貴女のお陰でこのロサイスは無事、我々の被害を最小限に抑えて占領する事が出来ました。改めて、感謝致します」

ルイズの存在に気付いたド・ポワチエ将軍が椅子から立ち上がり頭を下げると、他の将軍達も立ち上がりルイズへ頭を下げる。

そんな将軍達にルイズは照れ臭そうに頬を赤らめながら小さく頷きながら、

「い、いえ……」

と小さく漏らした。

ルイズの言葉に顔を上げたド・ポワチエ将軍達は再び椅子に腰掛け、ルイズにも空いた椅子に座る様に促す。

ルイズが椅子に腰掛け、桐生がルイズの後ろに立つのを見届けたド・ポワチエ将軍はこれからの予定を話し出した。

将軍等の話では、ここロサイスはアルビオンの首都であるロンディニウムの南方三百リーグ、桐生達の世界で言った所の約三百キロの位置にある。その為これから恐らくアルビオン軍からの反撃が直ぐに行われるのが予想されている。なのでここロサイスを中心に円陣を組み、向かって来たアルビオン軍との決戦をこの地で行って、一気にロンディニウムへ進軍する。その様に作戦を組んでいるとの事だ。

距離も距離な為アルビオン軍からの反撃は二、三日中、早ければ明日にでも向かつて来ると参謀長から意見が出された。

「幸い今はウインの月が始まったばかり。暑くはないがまだ寒さを感じさせぬこの気候ならば兵達には要らぬ疲労を感じさせずに済む。可能であるならば今年中にこの戦争を終わらせたい」

ド・ポワチ工將軍は髭を指で軽く撫でながらそう口にした。

ウインの月。ハルケギニアでいう所未だ秋の季節である。汗ばむほどの暑さはないが上着を着なければならぬほどの寒さも感じず、動くにはほどよい気候なのだ。

しばらくはこのロサイスに留まり、しっかりと反撃の準備を整える事で会議は終了した。

会議の終了を機にそれぞれが自分隊への指示を送る為に、將軍達は椅子から立ち上がると散り散りと去っていった。

ルイズも椅子から立ち上がり、桐生とこれからどうするか話そうとすると、ド・ポワチ工將軍から声を掛けられた。

「そうだ、「虚無」殿。貴女と貴女の使い魔殿には此方の天幕をご用意した。其方をお使い下さい。それと……」

ド・ポワチ工將軍は自分達と同じくらいに豪華な天幕へ二人を案内してから、指をパ

チンと鳴らして見せた。

するとすかさず一人の兵が駆け寄り、跪いて少し大きな鞆をド・ポワチエ將軍へ差し出す。ド・ポワチエ將軍はその鞆を開いて中身を取り出すと、それは一枚のマントだった。

ルイズが今着けている学園の物と生地も色も同じだが、そのマントの中心にはトリステイン王家の百合の紋章が白く描かれている。

「今は戦中、そして此処は敵の領地内です。敵味方の識別をつける為にも、貴女にはこれを羽織ってもらいます。どうぞ」

ド・ポワチエ將軍に差し出されたマントをジツと見詰めてからルイズはそれを受け取ると、着けていたマントを外して桐生に手渡し、紋章入りのマントを身に付けた。

自分が連合軍の一員である事を示す百合の紋章を身に付けた事で、ルイズは自然と自分の背筋が伸びるのを感じた。

ド・ポワチエ將軍はそんなルイズを見て微笑んだ。

「うむ、丈も問題ないし、バツチリですな。ああ、その学園のマントは此方から学園へと送っておきますのでお預かりしましょう。それでは」

桐生からマントを受け取ったド・ポワチエ將軍はそれだけ言うとは何処へと向かっていった。

取り敢えずの自由時間、手持ち無沙汰となった二人はロサイスの町を歩いてみる事にした。

小さな町のあちこちでは粗末な天幕が張られ、道を狭くしていた。連合軍の兵士達が所かしこと動き回り、来たるべき決戦へと向けて準備を進めている。

ふと、桐生の目に縄で繋がれた数匹の風童の姿が目に入った。その周りには自分達を守り、戦死していった少年達と変わらぬ歳の十数人ほどの少年達が話し合っている。

桐生は思わずその少年達に向かって歩き出し、ルイズも突然歩く方向を変えた桐生を慌てて追いかける。

少年達に近付いてその姿が確認出来る所まで来ると、桐生は苦々しく顔を歪めた。

分かつてはいたが、やはり自分達を守ってくれたあの少年達とは別人だった。もしかしたら助かったのかもしれないと一瞬でも期待を持ってしまった自分に桐生は苛立ちを覚えた。

顔を歪めながら此方を見る桐生に気付いた少年達は、桐生の元へとやって来た。

「あんた、もしかして……あの「ひこうき」とやらに乗ってた人か？」

少年の中の一人がそう問いかけて来た為、桐生は静かに頷いた。

瞬間、少年達はそれぞれ顔を輝かせガッツポーズを取ったり、中にはハイタッチをして喜ぶ者もいた。

「あいつ等、任務を無事に果たしたんだな！ 流星は俺の弟がいた隊だ！」  
「……弟？」

状況が読めない桐生が戸惑った様に言うと、少年の一人が強く頷いた。淡い栗色の短い髪に青い瞳。確かに自分の周りを飛んでいた竜騎士の中に似た様な姿の少年がいたのを覚えていた。

「ああ。あんたの乗ってた「ひこうき」を守る任務を与えられていた第二竜騎士中隊、あの中には俺の弟が入隊してたんだ。出来れば俺もこっちの第三中隊じゃなくそっちに入りたかったんだけど、編成でこっち選ばれちゃつてね。いやあ、でも兄貴としては誉れ高いよ！ 無事に任務を遂行したんだ。あいつは名誉の戦死を遂げられたんだな。しかし実の兄よりも先に成し遂げるなんざ、やっぱり生意気な弟だ」

悔しそうにそう口にする少年の顔からは悲しみを感じない。実の弟を失ったというのに、何処か誇らしげにしているその姿は痛々しきすら感じられた。

「ああ、ごめん。自己紹介が遅れたね。俺はバッシユ。第三竜騎士中隊の副長みたいなもんだよ。よろしく、えーつと……」

「一馬だ。よろしくな、バッシユ」

差し出されたバッシユという少年の手を握りながら自身の名前を伝える桐生。

バッシユは子供らしい笑顔でニツと笑って見せてから、桐生の後ろに立つルイズの存

在に気が付いた。

「ん？ そつちの女の子は誰だい？」

首を傾げながらバツシユが問い掛ける。そんなバツシユにルイズは桐生の横に立つて胸を張った。

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。このカズマの主人よ」

「しゅ、主人？」

ルイズの自己紹介の言葉の意味が理解出来ないのか、バツシユは二人を交互に見ながら目をパチクリさせる。普通に考えれば親子ほどの年の差を感じさせるのに、若い方が主人などと言っても意味がわからないのは無理もないだろう。

「俺はルイズの使い魔なんだ」

そんなバツシユに桐生が助け船の如く疑問の答えを口にする。

瞬間、バツシユを筆頭に少年達が桐生を取り囲んで物珍しげに眺め始めた。

「人が使い魔なんて……聞いた事ないな」

「ああ。これって歴史に残る事なんじゃないか？」

口々にそう言ってマジマジと桐生を眺めていた少年達の後ろから、パンパンと手を叩く音が聞こえた。

音の方へと振り返ると、一人の少年が腕を組んで立っていた。背は桐生の周りの少年達より高く、整えられたセミロングまであるかないかの金髪が日の光に輝いている。黒のズボンに白の腰辺りまで伸びた丈の長いシャツにマントを身に付けている。

「おかしいな。報告の間、君達には竜の世話を頼んでおいた筈なんだけど？」

少年から発せられるその声は透き通っており、男か女か一瞬判断に迷う美声だ。

そんな少年に対して、バツシユ含む少年一同は露骨に嫌な顔をする。

「申し訳ありませんね、ロマリア人の隊長殿」

「やれやれ、いい加減隊長の名前くらいは覚えてくれないかな？ ジュ

リオ・チェザーレだ」

バツシユの言葉に首を振りながら優雅な仕草で髪を掻き上げながら近付くジュリオと言う少年の顔を見て、桐生はある事に気付いた。

ジュリオの左眼はルイズと同じ鶯色だが、右眼は透き通る様な碧眼だ。確か、オツドアイと言ったか。虹彩の異常がもたらす現象だったと記憶している。

ジュリオは少年達を掻き分けて桐生の前に来ると微笑みを浮かべた。

「貴方が噂の使い魔、カツマ君とやらだね？」

「……一馬だ」

名前の間違いを訂正した瞬間、ジュリオは大仰な身振りで手を広げて仰け反って見せ



てから優雅に一礼した。

「これは大変な失礼を！ 僕はロマリアの神官、ジュリオ・チェザーレだ。以後、お見知りおきを。人間が使い魔なんて珍しいからね。貴方には是非一度お会いしてみたかったんだよ」

優雅な仕草で自己紹介をするジュリオの動きは、全てが芝居掛かっている様に見える。取り繕いの表情と動きで決して本心を他人に見せない様な、何処か食えない印象を桐生は覚えた。

ジュリオは顔を上げると桐生の横に居たルイズに視線を向けて、無邪気さを感じさせる人懐っこい笑みを浮かべて見せた。

「貴女がミス・ヴァリエール？ 噂通り美しいお方だね！」

突然自分に声を掛けられポカンとしてるルイズの手を取ると、ジュリオはその甲に優しく口付けた。

瞬間、ルイズは頬を可愛らしく赤らめながら視線をジュリオから逸らす。

「もう、いけない人ね」

まんざらでも無さそうにそう漏らすルイズに桐生は溜め息を漏らした。まあ、ジュリオはギーシュ以上の美少年だ。そんな美少年に口付けられて嫌な顔をする少女は数少ないだろう。

「神官が女性に触れても良いのか？　ロマリアってのは本当に節操のない国だな」

バツシュの言葉から察するに、ジュリオは自分の部下達に好かれていないらしい。

「一応此度の戦に参戦するにあたり、一時的な還俗の許可を教皇よりは頂いているんだよ。とは言えバツシュ、君の言う事ももつともだ。ミス、失礼を。未だ僧籍に身を置く故、女性に触れてはならぬ身。しかし、貴女のような美しき女性に出会えたのも神からの贈り物に他なりません。その喜びに粗相をしてしまった事をお許しく下さい」

ルイズの手から自身の手を離し、一礼するジュリオ。

バツシュはそんなジュリオを忌々しげに見つめながらも頭を下げた。

「ではジュリオ隊長殿、先ほどお願いした通り「鎮魂の儀」をして頂きたい。数名を着けますので準備の方を」

「ああ、そうだったね。それこそ坊さんの仕事だ。喜んでやらせて貰うさ」

ジュリオが頷くと、バツシュが数名の少年を指名してジュリオに着かせ、そのまま何処かへと向かって行った。

そんなジュリオを見送ったバツシュは露骨に舌打ちをしながら腕を組んで首を振る。

「神官の癖に偉そうにしゃがって。これだからロマリア人は嫌いなんだ」

「そのロマリア、つとというのは何なんだ？」

先ほどからバツシュが口にする言葉に疑問を覚えた桐生がそう問い掛けると、バツ

シユは信じられないといった表情で首を傾げて見せた。

「あんた、ロマリアを知らないのか？」

桐生は静かに頷く。

情けない話ではあるが、未だ桐生は此方の世界の文字が読めない。だから地図を見たとしても、何処が何の国なのかさっぱり分からないのだ。

しかし、素直に異世界から来た、と言った所で誰もがコルベールの様に信じてくれる訳ではない。だからこういう時は、決まった文句を口にする。

「俺は東のロバ・アル・カリイエから来たんでな。こっちの地理はよく分からないんだ」「あのエルフ共としようちゆうやり合ってる国か！」

バツシユの発言や、以前コルベールから聞いた話から、エルフとやらはどうやら人間とあまり仲が良い関係では無いらしい。

「ロマリアつてのはハルケギニアの寺院を束ねてる「宗教庁」がある国さ。神に仕える身分、つまりは神官がこの世で最も偉いと思ってる国さ」

宗教が絡む国となると、確かに諍いや争いは絶え無い様なイメージが湧いた。桐生のいた世界でも、宗教の相違で離婚や絶縁、果ては戦争だつて起きる。誰しも自身が信じている神こそこの世で唯一絶対の存在なのだ。

「その神官とやらも、魔法が使えるのか？」

桐生がそう口にする、少年達の一人がまさか！と口にした。

「そりゃあ貴族の血筋なら魔法も使えるだろうけど、神官には平民も多いんだ。だから全員が魔法を使える訳じゃないよ」

「あのジュリオは、平民の出って話さ。そのくせあんなに偉そうだから、いけ好かない奴だよ」

本人が居ないのを良い事に、少年達は顔をしかめながら口々に続けた。

「魔法が使えないのに、それでも中隊長になれるものなのか？」

桐生なりにこのハルケギニアという世界の常識はそれなりに理解して来たつもりだ。何事も基本は貴族が一番、という風潮に染まったこの世界で、平民ながら中隊長に上り詰められたのは普通ではないのはわかる。

「あいつ、平民の癖に竜に乗るのがとっても上手いんだ」

バツシュが悔しそうに顔を歪めて口にしてから、少年達は深い溜め息をついた。

「メイジでもないのに竜の声が聞こえる、なんて言ってたよ。何処まで本当かは知らないけど」

「まあ、その能力を買われて僕達竜騎士中隊を指揮しているギンヌメル伯爵に気に入られて、第三中隊の隊長の席に収まったんだ。そりゃあ、第三中隊は外人を補充して作られた部隊ではあるけど、破格の出世には違いない。神官が隊長だなんて、お陰で僕達

竜騎士中隊は他の隊の笑い者さ！」

口々に熱く不満を漏らす少年達をバツシユはまあまあと宥める。弟を持つていたというだけあって自分と年端の変わらぬ少年達をまとめるのはそこそこ上手いらしく、バツシユの宥めに少年達も渋々ながら落ち着きを見せる。

少年達全員がそれなりに落ち着きを取り戻した頃、ジユリオが共に連れて行つた少年達を引き連れて戻つて来た。

「お待たせした。「鎮魂の儀」の準備が整つたよ。それじゃあ来てくれ」

それだけ言うと、ジユリオは再び踵を返して歩き出した。それに少年達も続く。

「良かったら、あんた達も一緒に来てくれないか？ 弟達の魂と一緒に天国へと導いてやつて欲しい」

バツシユの声掛けに桐生とルイズは頷いて、少年達の後に続いた。

「鎮魂の儀」と言うのは、どういう物なんだ？」

少年達の後に続きながら桐生がルイズへと耳打ちする。

ルイズの話によれば、戦争や災害等で命を失つた人間の魂は自身が死んだ事を受け入れられない場合があると言う。未練や怨みつらみが魂を現世へと縛り、やがては怨霊や悪魔へと姿を変えてしまう場合があるらしい。なので祈りを捧げ、神官による歌を聞かせる事で魂の中の未練や怨みを鎮めて迷いなく天国へと導く為の儀式だそうだ。

恐らくその歌とやらは日本で言う所のお経の様な物なのだろう。何処の世界でも、不条理な死を遂げた死者の魂は決して晴れる物ではないという事だ。

怨霊、という言葉を聞くと、いつだったか渡された「呪いのビデオテープ」なんて物があつたなど内心桐生は思った。突然道端で渡されたビデオテープを見て、それは呪われたテープだとインチキな霊媒師から石を売り付けられそうになったのが懐かしい。もつとも、あんな子供騙しな赤い服の女なんてものとは比べ物にならない様なのがこの世界では実際に蠢いているんだろうが。

そういえば、あの時石を渡してきた霊媒師はこつちを見て随分怯えていた様だったが、あれは一体何に怯えていたのか未だに分からない。胡散臭いとは思ってはいいたが、そんなに自分は恐い顔をしていたのだろうか。それとも自分の後ろに何か居たのだろうか。いや、あの時近くにあつたのは、件のビデオテープくらいだったとしか覚えていない。

まあ、今はどうでも良いかと桐生はその記憶を頭の片隅に追いやった。

ロサイスの町から少し離れた空き地に、大小の石で作られた粗末な墓が十数個建てられていた。夕暮れへと変わった淡いオレンジ色の光がその墓石を照らしている。

バッシユの誘導で、少年達はその墓石の前に参列に並び出す。桐生とルイズもそれに

続いた。

少年達全員が背筋を伸ばして墓石を見詰める中、少年達と墓石の間にジュリオが歩み寄って辺りを見回した。

「これより「鎮魂の儀」を行う。一同、祈りを」

真剣な表情で言うジュリオの言葉に、少年達は次々と右手で拳を握り、左手でその拳を包むと瞳を閉じた。

ルイズもそれに続き、桐生も同じ様に拳を左手で包んで瞳を閉じた。

全員が祈りの姿勢を取ったのを見届けると、ジュリオはお経の様な歌を口にし始めた。透き通った声は迷いや未練を払い、彷徨う魂を天へと昇らせるのを連想させた。

時間にして十分ほどの時が経った頃、ジュリオの声が止んだ。それを合図に少年達も祈りの姿勢を解いて睨を開いた。

「ジュリオ隊長殿……ありがとうございます」

バツシユがジュリオに深く頭を下げた。

ジュリオは小さく頷きながら微笑むと、優雅な足取りでその場から去って行った。

それを皮切りに少年達も次々とロサイスへと戻り始める。桐生もルイズを連れて戻ろうとした時、その場から動かない少年の姿に気付いた。

参列に並んだ真ん中の先頭、そこに立っていたバツシユは墓石をじっと見詰めたまま

微動だにしていな。

桐生はそのままルイズとロサイスへと戻った所で足を止めた。

「どうしたの、カズマ？」

突然足を止めた桐生にルイズが首を傾げる。

桐生はしばらく黙ったまま虚空を見つめてから、ルイズへと視線を向けた。

「悪いがルイズ、先に天幕に戻っててくれ」

「えっ？ どうしたの？ 何かあるなら私も一緒にー」

「悪いが、これは俺一人で済ませたい用事なんだ」

ルイズの言葉を遮りそう口にした桐生の言葉は、怒りや叱咤の様な物はないが、有無を言わせぬ威圧感があった。

ルイズは少し戸惑いながらも、素直に頷いた。

そんなルイズに桐生は微笑みながら頭を優しく撫でてから、踵を返して歩き出した。

淡いオレンジ色の空は段々と夜の青黒さを濃くしていき、小さな星が砕け散った宝石の様

に煌いている。墓石の前に戻つてみると、まだバツシユは其処に立っていた。だが、先ほどとは少し

様子が違う。小さくだが、肩が震えている。

桐生はゆっくり近付いて、バツシユの背後に立った。



桐生の存在に気付いたバツシユは振り返ると、ぎこちない笑みを浮かべた。瞳には、今にも溢れそうなほどに涙が溜まっている。

「ああ、あんたか。今、弟を……レックスを褒めてたんだ。良く、やったって……。兄ちゃんは、誇らしいって……」

懸命に涙を流さぬ様、嗚咽を漏らさぬ様に言うバツシユの声は震えていた。

名譽の死だと口にしても、大切な兄弟を失った事に変わりはない。まだ十代そこそこの少年が味わうには早すぎる悲しみを、バツシユは懸命に堪えている。

桐生はゆっくりバツシユの横に立つと、その背中を優しく叩いてから撫でた。バツシユは桐生に視線を向けずに戸惑った様に生唾を飲む。

「お前の弟のお陰で、俺とルイズは今、此処にこうして立てていられる。何の慰めにもならないが、礼を言わせてくれ。レックス……ありがとう」

自分の背中を撫で続けながらそう口にした桐生と墓石を交互に見て、バツシユの瞳から一筋の涙が頬を伝う。

「良かったな、礼を言って貰えて。……お前、生意気なんだよ。兄ちゃんより先に逝きやがって。またロサイスで必ず会って約束しただろう？ ……父さんから言われてたじゃないか。嘘を吐くのは……一番しちや……いけないって……」

もうバツシユは耐えられない。そう感じた桐生はバツシユの背中を少し強く叩いた。

それが文字通り背中を押した様に、バツシユは墓石に抱き着いて崩れる様に座り込んだ。  
だ。

「うわあああああつ！ レックス！ 何で、何で死んじやつたんだよおつ！ 一緒に帰るつて、約束したじゃないか！ 母さんと父さんに、胸を張つて帰つて来るつていつたじゃないかあつ！」

昼時に見せた悔しそうな表情の仮面を剥ぎ取り、涙と鼻水で顔を濡らしながら大声で泣き喚くバツシユの姿を見て、桐生は強く齒噛みした。

血が繋がっていないとはいへ、兄弟として共に育つた錦山彰が自分の目の前で死ぬのを目の当たりにした時の絶望感は計り知れない物があった。そんな思いをこんな年端も行かぬ少年が味合わなきやならないのだ。

ルイズを守る為にと参加した戦争だったが、桐生の中でこの戦争の意味が大きく変わつて来た。

一刻も早くこの戦争を終わらせなければならぬ。大人だろうが子供だろうが、男だろうが女だろうが、こんな思いを味わう事のない様に。

兄弟を失つた少年の悲しげな泣き声に、桐生は心に強く誓つた。

## 第53話

ロサイスがトリステイン・ゲルマニアの連合軍に墮とされてから二日が経つたこの日、アルビオンの首都ロンディニウムのホワイトホールでは激論が飛び交っていた。

ルイズによる「虚無」の魔法「イリユージュオン」に惑わされて、アルビオン軍はダータルネスへと軍が誘導され水際で敵を迎え撃つ機会を失ってしまったのだ。設備を整えたロサイスで待ち構えていれば、連合軍を追い返す事も不可能ではなかったのだが。

「敵は完全に上陸して陣を築いています。今此方反撃を試みるのは自殺行為です」

十五人ほどが腰掛けた円形のテーブルで、北側に座っている若い将軍が憔悴した表情で口にした。

確かにこの若い将軍の言う通りである。四十隻ほど残っていたアルビオン軍の空軍艦隊は先の艦隊決戦で半数近くが墜とされ、残った艦も深刻なダメージを負っていて修復が追い付いていない。仮に出撃となっても、出せるのは多くて十隻と見積もった方が良いでしょう。

これに対し連合軍の艦隊は約十二隻ほどが沈み、八隻は深刻なダメージを負ったがまだ四十隻ほどが出撃可能な状態だ。アルビオン軍のお家芸とも言える制空権の掌握は、

完全に向こうの手にある。

更にタルブでは戦闘で三千の兵を失い、先日の敗北によって軍全体の士気は大きく下がってしまった。この事により離反する隊まで現れてしまい、アルビオン軍の戦力は大きく低下していた。革命時の勢いは既になく、虫の息の状態と言っても過言ではない。

座の中心に控えた、神聖アルビオン共和国議長にして、初代アルビオン皇帝でもあるクロムウエルに対して非難の視線が集中する。

数々の謀略を失敗し、挙句敵を上陸させてしまったのだ。その視線は当然の物でもあった。

しかし当のクロムウエルはそんな視線を全く意に介さず、穏やかな表情でその場に座っている。

アルビオン軍主力の実質的な指揮を執っているホーキンス将軍が、重々しく口を開いた。

「反転は小官のミスです。初戦で敵を殲滅する好機を私の判断ミスで失いました。詫びの言葉もありませぬ」

机に額がくっ付きかけんばかりに頭を下げるホーキンス将軍を見てから、クロムウエルは腕を組みながら小さく溜め息を漏らした。

「魔法学園の子弟を人質に取る作戦は失敗、敵の主艦隊に忍ばせたネズミからの連絡も途絶えた。ボロボロだな、我が軍は」

自身が用いた策が失敗した事に悪びれる様子もなく、クロムウエルは呟く。

ホーキンス將軍は顔を上げて再び口を開いた。その声には、疲れが籠っていた。

「敵の使用する魔法兵器は我々の想像を超えています」

「ふむ。ミス・シエフィールド」

クロムウエルの後ろで控えていた黒ずくめの秘書シエフィールドは、主の言葉に頷いて脇に携えていた羊皮紙を取り出し、書かれていた報告を読み上げた。

「ダータルネス付近に突如現れた「幻影」は、約十三時間に渡ってダータルネス付近を遊弋し、その後忽然と姿を消しました」

「報告にもあるように、矢も撃てぬ、魔法も出せぬ幻影等姑息な魔法に過ぎん。恐れる必要等ない」

「姑息な魔法ですと？ その姑息な魔法のおかげで敵はこのアルビオン大陸に上陸する事が出来たのですよ。効果は甚大です」

確かに攻撃的な役割ならば幻影等恐れるに足りないだろう。しかし、その幻影一つで軍を動かされ、戦力を分断されたのだ。侮る気持ち等微塵も産まれない。

「閣下……正直に申しますと、小官は敵が恐いのです。ダータルネスで見せた幻影、タル

ブで使われた光……敵は未知の魔法を多々使用しています」

悔しげに、しかし正直にホーキンス将軍がそう口にする、クロムウエルはシエフィールドに目配せした。

シエフィールドはまるで寺院で賛美歌を歌う聖歌隊の様な、良く通る美しい声で羊皮紙を読み上げた。

「敵は先のタルブで見せた、我が戦艦隊を殲滅した光を撃てない状態であると判断出来ます」

「それは何故か？」

「仮に使用が可能ならば、先日の上陸前の艦隊決戦で使わない筈がないからです」

「その考えは軽率過ぎやしませんか？ いざという時の為に温存の可能性もありますぞ」

将軍の一人がそう口にする、シエフィールドは羊皮紙から視線を逸らし丸テーブルに座る将軍達を見回してから続けた。

「先日の艦隊決戦、あそこで敗北すれば敵には後がない状態でした。上陸後の兵力や物資の温存を考えても、使えるなら使わざる得ない状態だった筈です。しかし、敵は通常の艦隊戦を行いました。確かにそれでも我が艦隊は敗北しましたが――」

「空で勝てぬなら陸で勝てば良い。簡単な事だ」

シエフィールドの言葉を引き取り、クロムウエルがそう続けた。

その言葉を受けて、参謀本部の将軍が立ち上がった。

「閣下、参謀本部は敵の次なる攻撃予定地を、シティオブサウスゴータと推定しました」  
丸テーブルの上に拡げられた地図を杖の先で叩きながら、将軍は説明を加える。

「街道の収束点であり、重要な大都市です。推定を裏付ける要素としましては、この辺りの敵の偵察活動が活発になっています。我々はシティオブサウスゴータに主力を配置して陣を構え、敵を迎え撃つべきです」

参謀本部からの作戦に、他の将軍からも賛同の声が上がった。

しかし、クロムウエルは首を横に振る。

「いや、主力はロンディニウムからは動かさぬ」

「これは異な事を！ 座して敗北を待つおつもりか!？」

声を荒げる将軍の一人に対し、クロムウエルはまるで子供のいたずらをたしなめる父親の様な眼差しを向けてから首を振った。

「サウスゴータの街は取られても構わぬ」

「敵にみすみす策源地をお与えになると申されるか。敵は大都市で消費した兵糧を補充し、休息も取って更に力をつけるでしょうな」

ホーキンス将軍が皮肉を込めて言葉を返すと、クロムウエルの口元に笑みが浮かび上

がった。その笑みは冷たく、思わずゾクリと感じるほどに邪悪な何かを宿していた。

「兵糧等与えはせぬ」

「どうやって?」

「簡単だ。サウスゴータの住民達から丸々食料を取り上げれば良い」

クロムウエルの言葉に、將軍達は言葉を詰まらせた。クロムウエルは、サウスゴータの住人達を利用し、最悪見捨てるつもりなのだ。

「敵は数少ない食料を住民達に分け与えぬばならなくなる。なまじ防衛戦を展開して此方の兵力に損害が被るよりも、賢い方策だと思わぬか?」

「敵が見捨てたらどうなさるおつもりか!? 大量の餓死者が出ますぞ!」

「それはない。なに、仮に敵が見捨てたとしても、国の大事の前では都市の一つ等小さな損害に過ぎぬ」

元司教とは思えない、冷たい言葉だがクロムウエルの読みは正しいと思えた。

連合軍はクロムウエルと交渉する為に侵攻して来た訳ではない。クロムウエルを倒し、この地を支配する為に来たのだ。十中八九、戦闘後の民意を考えて施しを行うのは間違いないだろう。

だが、もし此方側が勝利した場合はどうだろうか。下手したら大都市が反旗を翻しかねない。昔から言われているが、食い物の恨みとはそれほどまでに恐ろしい物なのだ。



「大都市一つを敵に回すと……勝利したとて、しこりが残りますぞ」

「そのしこりとやらを残さぬ為に先遣で亜人共を配置したのではないか。奴等の独断だったと説明すれば、問題ない」

どんな手を使ったのかは想像もつかないが、クロムウエルは亜人との交渉術に優れている。亜人先遣は通常の軍事作戦ではなく、いざとなった時の保険も兼ね備えた謀略であつたと知り、將軍達は哑然とした。

この初代皇帝は様々な謀略を企てるだけでなく、卑劣にも自国の民をも裏切ろうと言うのだ。

「それに勝利の為の策はまだある。ただし、この策は効果を発するには時間がかかる」

「一体どの様な策をお考えなのですか？」

「詳しくはまだ話せぬが、そうだな……我が「虚無」による罠、とだけ言っておこうか」  
クロムウエルはにっこりと笑いながらそう言つて立ち上がると、拳を振り上げた。

「諸君、降臨祭だ！ それまで何としてでも敵を足止めするのだ！ 降臨祭の終了と同時に、余の「虚無」と交差した二本の杖が驕り高ぶった敵に鉄槌を下す！」

交差した二本の杖、それはガリア王家の紋章を表していた。

將軍達は次々と立ち上がり、色めき立った。遂にガリアが動き出すというその期待によつて。

「その時こそ我が軍は前進する！我等の地を土足で上がった敵を粉碎する為に！約束しよう！」

歓声が上がリ、会場の空気が熱せられる中、まるで水を差す様に荒々しい拍手の音が上がった。いや、それは拍手と言うより、乱暴に手を叩いているといった方が正しい音だ。

興奮に色めき立っていた將軍達やクロムウエルはその音の方へと視線を向ける。

その先には赤い鎧に身を包んだ大柄で黒い髭面の將軍がクロムウエルに不敵な笑みを浮かべながら手を叩いていた。

「バルバトス……將軍」

ホーキンス將軍がその大男、バルバトス將軍に向かってたしなめる様な視線を向けて名を呼ぶ。

「いやあ、興奮する演説だったぜ、閣下。いよいよガリアが動くつてのは俺達にとっちゃありがたいがえ事だからな。けどよ、こうも押されっぱなしの我が軍に、本当にガリアは味方してくれるのかね？俺はそこがどうも不安でならねえんだけどな」

「バルバトス將軍、閣下に対して口が過ぎるぞ！」

ホーキンス將軍は自分と同一年で同期でもあり、唯一無二とも言える親友に向かって声を荒げた。

そんなホーキンス將軍に対してバルバトス將軍は不敵な笑みを続けながら視線を向けた。

「不安要素を口にしてはいるだけさ、ホーキンス將軍。何せこっちは自分の国の民すら犠牲にしなきゃならねえくらいに切羽詰まってるんだからよ。だから閣下に聞いてえんだ。ガリアが俺達アルピオンに味方してくれる保証は何処にあるのかをな。それぐらい聞いたって罰は当たらねえだろう」

バルバトス將軍の言葉に他の將軍達もクロムウエルへと視線を向ける。

盛り上がっていた所を邪魔されたクロムウエルは苦々しい顔をしてバルバトス將軍を睨んでいたが、すぐに涼しげな表情へと顔を戻して胸元へと手を当てがった。

「確かな保証を示す物品はない。だが、万が一ガリアが我等に味方しなかった時は、余の命を持って償おう。それでどうかね、バルバトス將軍？」

バルバトス將軍は笑みを消して鎧と同じ色の兜から覗く真剣な眼差しでクロムウエルの眼をジッと見つめた。その視線は心の奥底に眠る何かを探る様な、鋭さを秘めていた。

しばらくの沈黙の後、バルバトス將軍は立ち上がって背を向けた。

「そんだけの覚悟があんなら良い。ならまあ、降臨祭まで頑張らせて貰うさ。悪いけど腹が減った。先に昼飯にさせて貰うぜ」

それだけ言うとバルバトス將軍は会場から出て行つた。

一瞬白けかけた会場だったが、クロムウエルの一言でその熱気は再び燃え上がる事になった。

「さあつ！ 忠勇なる兵士諸君を、我等閣僚全員で励まそうではないか！」

掛け声と共に歩き出したクロムウエルに続き、閣僚や將軍達も続いてバルコニーへと向かつた。

かつて王の謁見を待つ為に設けられた広い中庭には、熱狂的な信頼をクロムウエルへ寄せている親衛連隊がずらりと並んでいた。

自分達の皇帝の姿に上がった歓声に、クロムウエルは手を振つて応える。

「諸君！ 敵は我が国土へと足を踏み入れた！ しかし、勇敢なる諸君に問おう！ これは、敗北か!?」

「否つ！ 敗北に非ずつ！」

数千の声がクロムウエルの声に答える。

「その通りだ、諸君！ これは断じて敗北ではない！ 余は勝利を諸君等に約束する！

無能な王から冠を奪い取つた、勇敢にして無双な諸君等に断言しよう！ 降臨祭の終了、それと共に敵は壊滅する！ 奴等は神の怒りに触れたのだ！ 迷えるハルケギニアを導くのは、神より選ばれし我等アルピオンの民に他ならぬ！ だからこそ、始祖は余

に力をお与えになったのだ！」

バルコニーには戦士したアルビオン兵士達が幾人か並べられていた。

クロムウエルが高く指輪を掲げると、指輪から光が発せられた。

すると、死んでいた筈の兵士達は起き上がり、歩き出した。

「諸君！ 始祖が与え給うたこの「虚無」の力がある限り、我等に敗北はない！ 余を信じよ！ 祖国を信じよ！ 始祖より選ばれた者の証、「虚無」を信じよ！」

中庭の熱気が最高潮まで高まり、歓声が響く中、クロムウエルは拳を振るつて叫んだ。

「神聖アルビオン共和国万歳っ！」

「神聖アルビオン共和国万歳っ！ 神聖アルビオン共和国万歳っ！ 神聖アルビオン共

和国万歳っ！」

クロムウエルに続いて声を上げる中庭の親衛連隊に続いて、バルコニーの将軍や閣僚達も次々と声を張り上げた。

終わる事のない連呼が空へと響いた。

熱狂的な演説の後、将軍や閣僚達は昼食を摂っていた。

そんな将軍達とは別に、ホーキンス将軍は人の居なくなつたバルコニーで空を眺めていた。

これからの作戦、部下達への指示、様々な事案が両肩へとのし掛かって息苦しく感じ、食欲も湧かず、ホーキンス將軍は一人溜め息を漏らした。

「相変わらず難しい顔してんなあ、ホーキンス」

背後から掛けられた声に振り返ると、ローストチキンを囓りながらも片手にワインの瓶を持ったバルバトス將軍が立っていた。

「そんな面あ繰り返してつと、早く老け込むぞ？」

「……私以上に常に先を考えているお前に言われても、説得力はないな」

クチャクチャと行儀悪く音を立ててローストチキンを咀嚼しながら近付いて来たバルバトス將軍に、ホーキンス將軍は首を振ってから再び空を眺めた。

ホーキンス將軍の隣に立ったバルバトス將軍は、手に持っていたワインを一口ラツパ飲みしてローストチキンを胃に流し込むと、ワインをホーキンス將軍へと差し出す。

ホーキンス將軍はワインの瓶を少しジツと見つめてから、乱暴に受け取ってラツパ飲みする。朝食も碌に入らなかつた空きつ腹に胃にアルコールが染み込んでいく感覚が腹部から伝わった。

ホーキンスとバルバトス。父親同士が仲が良かった事で幼馴染みの間柄の二人だが、性格はほとんど真逆に近かつた。

何事にも真面目に取り組み、常に成績も上位だったホーキンスに対し、勉強は自分が

気に入った事しか学ぼうとせず、貴族だろうと平民だろうと分け隔てなく接して仲間の多かったバルバトス。

しかし、成長していくにつれて、ホーキンスはバルバトスの本当の性格を知っていく事になる。人の見えない所で弛まぬ努力を繰り返すタイプであると。

魔法も体術も誰にも悟られる様に努力を続け、「炎」の「スクウエア」クラスまで成長し、乱暴な口調とは裏腹に誰よりも先を見越して動く器量を持ち合わせているのもあって、このアルビオンの將軍にまで上り詰めたのだ。

その気さくな性格から他の將軍や兵からも人気が高いが、バルバトスの隊はアルビオン軍の中でも一、二位を争うほど人数が少ない。バルバトスが本当の意味で信頼し、バルバトスを心から自分達の主であると認めた男達によって作られた隊は、人数こそ少ないながらも武力だけならアルビオン軍の中でもトップクラスに入る、正に少数精鋭の部隊なのだ。

「で、お前はと思うよ？ あの前代皇帝様の事は」

残り少なくなつたローストチキンの肉を食い千切つてはクチャクチャと音を立てながらホーキンス將軍へと顔を向けるバルバトス將軍。

ホーキンス將軍は空を見上げながらワインを再度ラツパ飲みして首を振つた。

「私は私の王の言う事を聞くだけだ。それ以上を詮索するつもりはない」

「へえ。つまりホーキンス將軍殿は、初代皇帝様の忠実なるゴーレムって訳か」

その発言にキツと目付きを鋭くしてホーキンス將軍が顔を向けるが、バルバトス將軍はそんな視線等どこ吹く風と言わんばかりにワインの瓶をホーキンス將軍の手から引ったくつて呷る。

「まあ俺には、寧ろあの皇帝様がガリアのゴーレムの様に見えるけどな。この国の為に今回の戦争に勝利しようとしては思えねえ」

「バルバトス……お前、自分が何を言っているのか分かっているのか？ 自身の王を疑う等——」

「生憎、俺が忠を誓うのはこの国と、俺が認めた奴だけだ。俺はあいつを認めちゃあいねえ」

最後の一かけとなった肉を嚙り取つて空高く骨を投げつけてから残っていたワインを一気に呷つて瓶を床へと落とすバルバトス將軍。

ガチャンと音を立てて硬いバルコニーの床に落とされ砕けた瓶だったガラスをブツで踏みつけながらホーキンス將軍はバルバトス將軍の肩を掴んで顔を近づけた。

「バルバトス！ 幾ら友と言えども、今の言葉は聞き捨てならぬぞ！ 我等の王を疑う等、臣下としてあるまじき行為だと分からんのか!？」

凄味を利かせながら詰め寄るホーキンス將軍とは対照的に、バルバトス將軍は口元に



笑みを浮かべて見せた。

「お前も本当は分かかってんじゃねえのか？ ガリアは今、俺達と連合軍がぶつかり合うのを涎垂らして待ち構えてる筈だ」

ホーキンス將軍の腕を乱暴に振り払うと、バルコニーの中央へと歩くと空を見上げた。

「俺達アルビオンと連合軍が本気でやり合えばどつちの国もタダじゃあ済まねえ。そこに一切傷を負っていないガリアが入って来てみる。奴等は数少ないメイジと兵力だけで、一気に三国を手に入れる漁夫の利があり得るかもしれねえ」

「それは……」

バルバトス將軍の推測に、ホーキンス將軍は言葉を詰まらせた。

もしもバルバトス將軍の言う通り、ガリアが自分達アルビオンの為でなく、この戦いで疲弊した三国を手に入れる為に来たとなればとてつもない脅威となるに違いない。連合軍を相手にただでさえ兵力を消耗していると言うのに、仮に勝てたとしてもこれ以更に戦闘となれば僅かな兵力しか残っていない自分達の国はあつという間に敗れるだろう。

「それを黙って見たまままでいるつもりはねえ。もしもあの皇帝がガリアと通じてこの国を差し出す算段だつてんなら……俺は遠慮なく、この国を守る為に牙あ剥くぜ」

「本気で言っているのか？」

バルバトス將軍の隊がもしも敵となったら、厄介である事この上ない。何よりホーキンス將軍にとって、親友と杖を交えるのは正直やりたくない。

「俺は自分の認めた人間でなきや、王とは認めねえ。今アイツに味方してんのは、ガリアの動きが読めないからだ。勝利の為に自分の国の民を犠牲にする奴なんざ、認められるか」

「……なら、何故お前は自ら王になろうとしないのだ？」

ホーキンス將軍は思わずずっと思っていた事を口ずさんだ。

親友であるが故に、バルバトス將軍の実力も人望も知っている。自分自身が羨んでしまふほどに、ホーキンス將軍にとってバルバトス將軍は上に立つだけの度量を感じていた。

しかし、当のバルバトス將軍はそんな出世欲とは無縁な生き方をしていた。將軍まで上り詰めたのも、自分がなりたかったからではなく、仲間や他の將軍からの推薦があったからだ。

「それだけの武、それだけの知、それだけの眼を持っているのなら、何故王を、頂点を目指さない？ お前は一体何を目指しているのだ？」

嫉妬が混じった視線を向けるホーキンス將軍に対して、バルバトス將軍は困った様な

表情で頭を掻いた。

「自分の器は自分が一番知ってる。俺は誰かの上に立つのは嫌いじゃあねえが、一国一城の主って器じゃねえ。いざれ現れる、本当にこの国の頂点に立つに相応しい人間を支える方が向いてんだよ。まあ、もしかしたら……その人間はお前かも知れねえがな」

「私、だど？」

ホーキンス將軍はその言葉に狼狽えた様になった表情を浮かべた。

そんなホーキンス將軍に対して、バルバトス將軍はからかう様に笑ってから身体を伸ばした。

「まあ、とりあえずお前が未来の王になるかどうかは別だが、お前はこの「炎斧」のバルバトス様を守ってやるよ。だからせいぜい胸え張ってな、総隊長殿」

それだけ言うと、バルバトス將軍は軽く手を上げて見せてその場を去った。

一人残されたホーキンス將軍は、再び空を見上げたながら親友の言葉に複雑な溜め息を漏らした。

將軍や閣僚達の昼食が始まった頃、かつて王が寝室として使っていた巨大な個室で、クロムウエルは身体をガタガタと震わせながら頭を抱えて床に蹲っていた。

その前には、秘書のシェフィールドが立っていた。

「見事な演説だったわ、司教殿」

普段とは違う高圧的な秘書からの言葉に、かつての役職で呼ばれた男はビクツと身体を震わせて顔を上げた。その顔には先ほどまでの威厳は無く、ただ怯えた三十路男がそこにいた。

「おおっ！ ミス・シエフィールド！ 本当にあのお方はこの地に援軍を寄越してくださいさるのでしょうか！ 先ほどの將軍ではないが、私は恐ろしいのです！ 魔法も使えぬこのただの男は恐いのです！」

まるで子供の様に怯えるクロムウエルの頭を撫でながら、あやす様な口調でシエフィールドは言う。

「あの酒場で「王になりたい」と言ったのは貴方でしょう。貴方のその率直な言葉に感じ入り、私の主人は貴方にこのアルビオンを与えたのよ」

「二介の司教が夢を見過ぎたのでしょうか？ 貴女とあのお方にそそのかさされ、「アンドバリの指輪」を手に入れ、王家に不満がある貴族を集め、私に恥をかかしたアルビオン王家に復讐した所までは本当に楽しい夢を見ている様でした」

「ならばその夢を見続けなさい」

「私の様な小者にはこの空の大陸すら大き過ぎると言うのに……。何故ゲルマニアとトリスティンを攻める必要があるのでしょうか？」

「言ったでしょう。ハルケギニアは一つにまとまる必要があるの。聖地を回復する事が、唯一始祖と神の御心に沿う事になるのよ」

「私とて聖職者の端くれ。聖地の回復は望む所ではありますが……私には荷が重過ぎます！ 敵が攻め込んで来ました！ あの無能な王達と同じ様に私を吊るしに来たのです！ どうすれば良いのでしょうか!? 教えて下さい、ミス……！」

懇願しながら顔を見上げるクロムウエルに対して、シエフィールドはその顎に手をあてがうと、猛禽類の様な険しい顔をして見せた。

「甘えるな」

普段の柔らかな声色とは違う、ドスの利いた声を出すシエフィールドにクロムウエルは小さく悲鳴を上げながら後退る。

深い闇の様な黒いブルネットの髪が揺れ、その下の目は妖しい輝きを放って、まるで人あらざる者の様だ。

「並の神官が到底叶えられぬ「王になりたい」という夢を叶えて貰ってにおいて、今更泣き言を口にするな。誰のおかげでその夢を叶えられたと思っている？ 貴様等我が主人が望むならば、今この場で消し去る事も出来る事を忘れるな」

「も、申し訳つ……申し訳ありません！」

クロムウエルは額を床にゴリゴリと額を押しつけながら許しを請うた。そうしなが

ら何故こんな事になってしまったのか、その理由を思い返してみた。

始まりは、小さな酒場での出会いだった。たまたまその酒場に酒を飲みに来た際、物乞いの老人に頼まれて酒を一杯奢った。

「司教殿、この酒の礼に、貴方の望む物を一つあげよう。言つてごらんさい」

久しく口にした酒で気を良くしていたクロムウエルは、少し悩んでから口を開いた。

ここは酒の席、多少自分の望みを大きく言つた所で誰かに迷惑を掛けるわけでもないだろう。そう思い、クロムウエルは口を開いた。

「そうだな……王になってみたい」

もちろん本気で言つた訳ではない。気が大きくなつた酒飲みの戯言だ。そもそも目の前の物乞いの老人が他人の願い等叶えられる訳がない。

クロムウエルの言葉を聞いた物乞いの老人はにっこりと笑つて、その場を去つていった。

そしてその翌日の朝、自分の部屋にこのシエフィールドが現れたのだ。

地方司教でしかなかった自分の人生は、それをきっかけに大きく起動が変わつていった。シエフィールドが連れて来た数人のメイジと共にラグドリアン湖から「アンドバリの指輪」を盗み出し、その力を使って今の地位まで余りにも異例な速さで上り詰めたのだ。

シエフィールドは愛おしげにクロムウエルの指に嵌められた、「アンドバリの指輪」を撫でた。その瞬間、指輪は妖しい深い水色の光を放った。

「お前はこの指輪が蓄えた力はどんな物だと思う？」

魔法に関しては知識がからつきしなクロムウエルは首を振った。

「私には分かりませぬ。この指輪の力を「虚無」と呼べと仰ったのは貴女様ではありませんか。「虚無」ではないのですか？」

「そうだったわね。この指輪が蓄えている力は「虚無」ではない。これは「風石」と同じ、先住の魔法と呼ばれる魔法の源の雫の一つ。色んな呼び名があるけどね。賢者の石、生命のオーブ……歴史的な見解で見れば、どちらかといえば「虚無」の敵に値する力よ」

「毎度ながら、貴女様の知識の深さは感じ入るばかりです」

「しかし、秘められた力は無限では無い。だから使用する度に石は小さくなっていくのよ」

シエフィールドの言葉にクロムウエルは眼をしかめて「アンドバリの指輪」を眺めた。確かに、今まで意識しなかったが、手に入れた時よりも石は小さくなっていた。

「先住の「水」の力の結晶。なればこそ水の精霊が守護する秘宝と成り得る。そこらの魔石とは比べ物にならぬ力を秘めた石。つまりは先住の秘宝……」

そう呟きながらシエフィールドがクロムウエルの指から「アンドバリの指輪」を

引き抜きジツと見つめると、その額が輝き出した。内から溢れる光だった。

初めてこの光を見た瞬間、クロムウエルは驚いた物だ。この「アンドバリの指輪」に触れる度に、シエフィールドの額は輝き出す。

人の額が輝くなんてあり得るのだろうか。しかし、シエフィールドは尋ねて答ええない。重要な事や肝心な事は、この謎めいた女性は一切教えてくれない。ただただ命令を下すのみだ。

シエフィールドが掌に指輪を乗せて差し出した。

クロムウエルは恐る恐るその指輪に触れると、まるで悪戯を仕掛けられた子供の様に咄嗟に手を引っ込めた。

「アンドバリの指輪」が、微かに振動している。触れただけで電流が身体に流れるかのような感覚を覚えさせる衝撃がクロムウエルの指に伝わった。まるで、失われた力を取り戻した様な振動だった。

「知っているかしら？」「水」の力の特徴を」

「そ、それは、傷を治したりー」

「それはあくまで表面的な事象よ。「水」の力は生命の身体の組成を司る。もちろん、心もね」

シエフィールドは妖艶な笑みを浮かべた。それはその笑みに近付いた者を咄嗟に食



い殺してしまう様な危険な物を感じさせた。

「死体を動かす事など、この指輪の持つ力の一つに過ぎないのよ」

## 第54話

シテイオブサウスゴータの城壁から約一リーグ離れた突撃地点で、ド・ヴィヌイーユ大隊三百五十名はラツパの合図を待ち構えていた。

それぞれの中隊に別れて待機してる中、一番端の位置に配置された第二中隊を率いるギーシュは朝靄の向こうにけふるサウスゴータの街を見詰めながら、己の身体の震えを懸命に抑えようと必死になっていた。

上陸から十五日が過ぎた今日、いよいよ攻撃開始の時がやって来たのだ。必ず来る事は分かってはいたのだが、いざとなると恐怖は際限なく身体の底から湧き上がる。

懸命に呼吸を整え、過呼吸になりそうなのを抑えていると、ギーシュの肩をニコラが軽く叩いた。

「中隊長殿、余計な世話かもしれません……小便を垂らしといた方が良いかもしれませんよ?」

「……忠告には感謝するが、生憎さつき済ませた」

ニコラに向かって少し睨みを利かせながらそう言ったギーシュは、自分の部下となつた隊員達を見回した。

ギーシユはしばらくは悩んだ様に腕を組んで頭を垂れながら首を数回振った後、意を決した様に顔を上げた。

「みんな、聞いてくれ！」

突撃の合図を待ち侘びていた隊員達がギーシユの掛け声によって、自分達の隊長へと皆顔を向ける。

ニコラもギーシユの掛け声に対して腕を組みながら顔を向ける。

ギーシユは自分の杖代わりでもある薔薇の造花を奮って自分の足元の地面を盛り上げらせて、隊員達全員に自分の姿が見える様にした。

「みんな……今日、これから僕達グラモン中隊は敵陣へと突撃する。みんなが僕を隊長と認めてくれた事を、僕は本当に嬉しく思っている。だが……」

ギーシユは一瞬躊躇った様に自分の右手をさすった後、ゆっくりとその手を差し出した。その手は遠くから見ている者も分かるほどに震えていた。

「分かるだろうか？ 僕は今、怖くて堪らない。震えが止まらず、逃げ出したい気持ちで一杯だ。普段貴族だと威張っているのに、肝心な時には弱腰になっている。こんな情けない隊長で申し訳ない。だから、頼むっ！」

ギーシユは手を引つ込めた瞬間、姿勢を正して深く頭を下げた。

隊員達はそんなギーシユの姿に心底驚いていた。ニコラと、遠くの方からギーシユを

見ていたグレゴリオ以外は。

「僕一人じゃ何も出来ない！ この作戦を成功させる為にはみんなの力が必要だ！ 僕にみんなの力を貸してくれ！」

懇願する様に叫ぶギーシユの言葉に、しばらくの沈黙が辺りを包んだ。

「……気に入らねえな」

沈黙を破つてのは一人の男の声だった。

驚いてギーシユが顔を上げると、声の主は腕を組みながらギーシユをジッと見詰めていた。

その声の主は、ギーシユが中隊長就任の時に殴り合つた、あの眼帯の男だった。眼帯に覆われていないその左眼からは、失望や怒りの色が伺われた。

ギーシユは苦しげに顔を歪めながら拳を握り締めた。拳を交え、最初に自分を認めてくれた男に対してその様な眼をさせてしまった自分がどこまでも情けなくなつた。

その男を皮切りに、他の隊員達もギーシユに対して眼帯の男と同じ視線を向けながら溜め息や、首を振る者まで見えた。

ニコラは顔に出さぬ様にしながら、内心焦りを募らせた。ギーシユが自分の弱さを認め、平民である部下達に助けを求めるのは決して悪い事だとは思わない。しかし、必ずしもそういった行為は友好的に捉われるとは限らない。恐らく隊員達はギーシユに対

して落胆の意を持ってしまっているのだろう。隊長らしく、いつそ空威張りでも良いからどつしりと構えて貰った方がまだ良かったのかも知れない。

せつかく纏まりかけたグラモン中隊だったが、ここまでかとギーシュもニコラも思った時、眼帯の男はギーシュに向かって拳を突き出した。

「グラモン隊長、俺達はあんたにとってそんなに信用出来ないんですかい？」

眼帯の男の質問の意味が分からず、ギーシュは戸惑った様に言葉を詰まらせながら首を傾げた。

「あの殴り合いの後に言ったはずですよ？ あんたを隊長として認めると。こっちはとつくに、あんたを守る為に命張るだけの覚悟は出来てんだよ」

眼帯の男はそう言つて足早にギーシュの乗っている盛り上がった地面によじ登り、ギーシュの隣に立つと声を張り上げた。

「みんな聞けえつ！ 甘つたれた貴族の餓鬼なんざ、本来なら守る気も起きねえだろう！ だが、この人は違う！ 口ばつかの貴族と違つて、俺達に自分の力を示した！ みんなでこの隊長を守り抜き、名誉ある戦死を遂げようじゃあねえかつ！」

眼帯の男が拳を振り上げてそう言うのと、他の隊員達も拳を振り上げ大声で叫んだ。少し肌寒かった朝靄の中に、そこだけ熱気が湧き上がった。

鼓舞し合い、これからの突撃に備える隊員達を見てギーシュの胸に熱い物が込み上げ

て来た。気が付けば、震えは止まり、呼吸も落ち着いていた。

そんなギーシユの肩を、ヒヨイと地面に登ったニコラが軽く叩いた。

「中隊長殿、これが貴方が取った行動の結果です。自分を含め、ここに居る全員で貴方を守ります。なあと、緊張する事はありません。話によれば敵の大砲は先日の艦砲射撃で殆ど潰されてますし、配備されてるのも何故か亜人の部隊だけらしいですし」

「亜人……か。しかし、亜人は凶暴でつかいじゃないか」

「確かにそうですが、人間なんかよりもずっとくみしやすいですよ」

火縄銃を担ぎながらそう言うて前へと視線を向けるニコラに続き、ギーシユも再びシテイオブサウスゴータの方へと前を向ける。

「それにしても……何処から攻めれば良いんだ？ 地図でも確認したが、この街は高い石壁に囲まれてるみたいだが……」

心配そうに呟くギーシユにニコラが頷く。

「今、「工事」をしてくれますよ」

そう言うて空を指差すニコラの指先を追うと、いつの間にか上空に十数隻の艦隊が並んでいた。一列に並んだ艦隊から、次々と石壁目掛けて砲撃を開始する。

轟音と煙と共に成す術なく崩れていく石壁に、突撃の待機地点にいる兵士達から歓声が湧き上がった。

そして煙の中から、巨大な土ゴーレム達が現れた。

「トライアングル」クラスのメイジによるゴーレムだな」

「ドット」クラスの自分では、あんな巨大なゴーレムは作れない。かつて相対した、「土くれ」のフーケが作ったゴーレムよりも小柄ではあるが、それでも身長二十メートルほどの大きなゴーレムが並ぶのはなかなか壮観だった。

ゴーレム達はそれぞれの背中に作ったメイジの家紋の幟をなびかせながら、崩れた石壁に向かって歩いて行く。地上の兵士達を通れる様に、崩れた石壁を蹴散らして道を作る為だ。

「あれは……兄さんのゴーレムー」

何体も居るゴーレムの中、ギーシユは一体のゴーレムを指差して思わず叫んだ。

そのゴーレムの背中に差された幟は、薔薇と豹、グラモン家の紋章が光っている。王軍所属の次兄が作ったゴーレムに間違いない。

石壁に近づくゴーレムに向かって、銀色の何かが飛び込んだ。瞬間、ゴーレムの腹にボコリと穴が空き、そのゴーレムはバランスを崩して地面へと崩れ落ちた。

銀色の何かは次々と他のゴーレムにも目掛けて飛んで行き、何体かのゴーレムは力なく崩れていった。

「あれは一体なんだ？」

「巨大バリスタでさあ」

ギーシユの眩きに、眼帯の男が答える。

「恐らくはオーク鬼が撃つてやがるんでしようが、三マイルほどある馬鹿でかいボウガンみてえな奴だ。人間が食らったら、跡形もなく消えちまう。まあ、人間に向かつて撃つもんじゃあねえですがね」

ギーシユはハラハラしながら兄のゴーレムを見詰めた。

グラモン家のゴーレムは脚にバリスタを受けて崩れかかったが、何とか持ち堪えて生き残る。

ニコラはグラモン家の幟とギーシユを交互に見てから口を開いた。

「中隊長殿はグラモン家の係累ですか？」

「係累も何も、末っ子だ」

答えるギーシユにニコラも眼帯の男も驚きを露わにした。

「グラモン元帥の！ こいつはおつたまげた！ そんな人間が何だつてこんな鉄砲大隊に来たんでえつ？ 元帥の名前を借りりやあ近衛の騎士隊だの、一流連隊の参謀にでもなれたじゃねえですか！」

心底勿体なさそうに言う眼帯の男に、ギーシユは首を振った。

「父の名を借りて戦場に出て、僕の手柄にはならない。それに、こんな臆病者だが、こ



の一步は自分の足で歩き始めたいんだ。そうしなきゃ、僕の追っている人には一生追い付けない」

ギーシュの脳裏には、ずっと追いついていない桐生の背中が何時もあつた。いつかその背中に並びたい。その背中を預けて貰える様になりたい。だから、強くならなくては駄目なのだ。桐生のその先にいる、モンモランシーという守るべき人の為にも。

そう口にしたギーシュをしばらくポカンと眺めてから、ニコラはギーシュの肩に腕を絡ませてニカツと笑った。

「改めてあんたが気に入りましたよ、お坊っちゃん。こうなりや意地でもあんたに手柄を取らせなきゃ、我々も恥を晒す形になっちゃう」

馴れ馴れしく話すニコラに以前の自分なら嫌悪を抱いていただろうが、今はその馴れ馴れしさが心強く感じた。

銀色の矢が飛び交う中、竜騎士がやって来て石壁の上で巨大バリスタを操るオーク鬼諸共炎のブレスで焼き払い始めた。

瞬く間に巨大バリスタの脅威が無くなり、生き残ったゴーレム達は石壁の瓦礫をどかし始めた。兵士達を通れる様に入り口を作っているらしい。

ニコラは後続の百人ほどの銃兵達に、銃に弾を込める様合図した。

今までニコラが見た事がないほど、銃兵達はせっせと弾を込め始める。それだけギー

シユと眼帯の男の掛け声に寄って、やる気が高まっているのだ。

火縄銃の繩にそれぞれ火を着け、焦げ臭い臭いが辺りを漂い始めた頃にゴーレム達が道を作り終えたらしくその場に崩れ去った。

それを見たニコラがギーシユの腰を軽く突いた。

「さあ、中隊長殿。うちは年寄りが多いんで、ちよつとフライング気味ですが突撃と行きましょう」

「まだ突撃の命令は出ていないぞ？ そんな事をして良いのか？」

「構いやしませんよ。手柄つてのは早い者勝ちですからね。それに、うちの隊員達は準備万端ですよ？」

不安そうに言うギーシユにニコラは笑いながら後ろの隊員達を指差した。其方に顔を向けると、それぞれの武器を構えた隊員達がギーシユに向かって頷いた。

ギーシユは深く深呼吸してから杖代わりの薔薇の造花を掲げた。

「グラモン中隊、前進！」

ギーシユの命令に掛け声を上げながら、グラモン中隊が石壁の先目掛けて突撃を開始した。

連合軍がシテイオブサウスゴータに突撃間近になった頃、朝靄が立ち込めるロンディ

ニウムの離れに延びた通りをホーキンス將軍が歩いていた。

目指した先はバルバトス隊の宿舎である。先日のバルバトス將軍の言葉の真意を確かめる為に、ホーキンス將軍は冬の近付きを知らせる薄ら寒い朝靄の中を歩いた。

バルバトス將軍は自分の認めた人間以外とは極力顔も合わせたがらない変わり者で、隊長に就任した際に先の国王に自分の隊の宿舎をロンディニウムの離れに造らせた。

アルビオン軍の中でも平民と貴族が対等で組織されているバルバトス隊の平民隊員の中には、此方が貴族なのも御構い無し乱暴な言葉を使ったりする者も多い。本来ならその時点で打ち首に値する所だが、それで平民隊員に手を出してしまうと、待つているのはバルバトス將軍からの報復である。

一度他の隊員の貴族が平民隊員に生意気な口を利かれたのに腹を立て、その平民隊員の手を魔法で焼いた事があった。その翌日、バルバトス將軍はその貴族隊員の腕をまるで挨拶をするかの様に突然斬り落としたのである。

以来、余計なトラブルを起こさぬ為にもあつてこの通りをバルバトス隊の人間以外が使うのは珍しい。

少し歩くと、道はなくなり広がったのは訓練用に整備された平地と、質素な木造の宿舎だった。

特別早くからの出撃を言い渡されてないバルバトス隊の隊員達はまだ寝ているらし

い。普段なら平民と貴族の隊員達が入り混じって訓練に励んでいる平地には誰もいない。

ふと、ホーキンス將軍の鼻を不意に甘い香りが擦った。匂いの元へと目を向けると、其処には隊員達が訓練の休憩や水分補給に使われている宿舎同様に質素に作られたテーブルがあつた。

そのテーブルに、一人腰掛けている人物が見えた。どうやらその人物は早朝の紅茶を嗜んでいるらしい。テーブルの上には白いポットとカップが置かれている。カップを持つ手の反対には本が保たれていた。

ホーキンス將軍はその人物に向かつて歩み寄つた。

数歩歩み寄つた所でその人物はホーキンス將軍に気付き、本を閉じて背筋を伸ばしながら立ち上がった。

人物はホーキンス將軍より少しだけ若い男だ。紺色のシャツに茶色いズボンとラフな格好だが、その腰には左側に劍が、右側には銃がぶら下げられていた。セミロングほどの銀髪が朝靄の中でも抜き身の刃の様な鈍い輝きを秘めていた。

「おはようございます、ホーキンス將軍」

礼儀正しく頭を下げたその男に、ホーキンス將軍は軽く手を振った。

「相変わらず早いな、カイル」

カイルと呼ばれたその男は、バルバトス隊の副隊長に当たる人物だ。もともとバルバトス將軍の幼少期からの付き人の平民だが、劍と銃の扱いにとても長けており、並の貴族では勝てないほどの戦闘力を持っている。ホーキンス將軍とも幼少期からの顔見知りで、バルバトス將軍に小言を言える唯一の人物でもある。

物静かで礼儀正しいが、瞳は血に飢えた獣の様に常にギラつき、バルバトス將軍以上に厳しいとの事で「鬼の副隊長」と陰で呼ばれている。また、いずれはバルバトス將軍を蹴落として隊長の座に取って代わろうと企んでいるとの噂もある。

「奴は……バルバトス將軍はいるか？」

ホーキンス將軍の質問に、カイルは困った表情を浮かべながら首を振った。

「どうやら夜明け前に出掛けた様です」

「出掛けただと？ 一体何処に？」

「さあ……昨晩も勝手な行動を慎む様言ったのですが、朝隊長の部屋に行くと「遊びに行ってくる」と書き置きだけがベッドの上にあったもので」

カイルは困った物だと肩をすくめて見せた。

ホーキンス將軍は疲れた様に頭を抑えながら深い溜息を漏らした。

誰よりも早く突撃したグラモン中隊は一番最初に石壁に辿り着いた。

しかし、手柄を奪われんとする数名の馬に乗った騎士達がグラモン中隊を抜かして中へと入っていく。

負けまいと駆け込もうとするギーシユをニコラが腕で押さえつけた。次の瞬間、騎士達が馬ごと中からグシャグシャにされて吹っ飛ばされた。大きな棍棒を持ったオーク鬼達が、最初に飛び込んでくる間抜けを待ち構えていたのだ。

体重が人間の五倍はある巨大な豚の化け物。いつだか桐生達と宝探しをした先でも出会った相手だ。

オーク鬼達はギーシユ達を見ると突っ込んで来ようとした。

「中隊長殿！ 一番後ろの奴に転ばせる呪文を！ 急いで！」

ニコラの掛け声にギーシユは咄嗟に薔薇の造花を振るった。によつきりと地面から生えた腕が、最後尾のオーク鬼の足に絡み付く。

狭い石壁の入り口の真ん中で、オーク鬼が転がった。

「第一小隊！ 目標、先頭集団！ てえーっ！」

ニコラは先頭にいるオーク鬼達目掛けて一斉射撃を命じた。

三十人ほどの銃兵が一気に引き金を引き、オーク鬼達は瞬く間に蜂の巣になった。

打ち倒された先頭の巨大な身体で入り口が塞がれてつかえている後ろの集団に、ニ

コラは容赦しない。

「第二小隊！ てえーっ！」

後に控えていた銃兵達が交代で再び一斉に引き金を引く。本来のオーク鬼ならこの程度の銃弾等棍棒で弾く所だが、至近距離から撃たれては防ぎようがない。

残ったオーク鬼達は逃げようとするも、後ろでギーシュに転ばされた仲間のせいで身動きが取れずにいた。

もたついてる所を更に銃兵達に射撃され、オーク鬼達は全滅した。

「一番槍は、僕等グラモン中隊が頂きだ！」

歓声を上げながらオーク鬼の死体を跨いでグラモン中隊が中に入っていると、突然石壁の外側手前辺りから炎が噴き上がり、石壁の高さを超える炎の壁が現れた。

グラモン中隊に続いて中へ入ろうとした他の隊の隊員が瞬く間に炎に包まれ、一瞬で炭へと変わってしまった。

一体何が起きたのかと炎の壁を見詰めていると、ギーシュの背後からゲツプの音が聞こえた。

音の方へと目をやると、其処には一人の男がオーク鬼の死体の上に座っていた。

「ようやく一番槍のご到着か。待ちくたびれたぜ」

腹から横一文字に斬り裂かれ、上半身と下半身が別れた巨大なオーク鬼の死体に腰掛け、片手に持っていたワインの瓶を呷りながらその男は呟いた。

男は赤い鎧に身を包み、もう片手には巨大な赤い刃のバルディッシュが握られている。オーク鬼の死体に腰掛けている足元には数本のワインの空き瓶が転がっている。

男は瓶から口を離してジロジロとグラモン中隊の面々を見てから、ギーシュに顔を向けるとつまらなそうに舌打ちした。

「何だよ……隊長の貴族はまだ餓鬼じゃねえか。こんな部隊に一番槍を取られる様じゃ、こいつ等もそんなに使えねえって事か」

そう言いながら男は腰掛けてるオーク鬼の死体の腹を軽く叩く。

自分を餓鬼扱いする男にギーシュはムツとしながら詰め寄りかけると、ニコラがそれを腕で阻んだ。そんなニコラに文句を言おうと顔を上げたギーシュの口は一瞬で塞がれた。

ニコラが未だ見せた事ないほどに真剣な表情で男を睨んでいるからだ。気が付くと、隊員達にも強い緊張した雰囲気漂っていた。

「その赤い鎧……あんだ、バルバトス將軍か？」

ニコラがそう言うと、男の口元に笑みが浮かび上がった。

「ほお……俺もちつとは有名になれたか。とは言え、わざわざこんな所まで来たその貴族の餓鬼に自分から名乗らねえのも無礼だわな」

男はオーク鬼の死体から腰を上げ、残った瓶の中のワインを一気に飲み干して口元を



拭った。

「お初にお目にかかる、連合軍部隊の一隊長殿。俺はバルバトス、バルバトス・デイル・サルバーンだ。二つ名は「炎斧」。一応アルビオン軍の將軍の一人だ。宜しくな」

ニイツと口元を歪めながら話す男の名に、ギーシユも息を飲んだ。

「炎斧」のバルバトス。以前読んだ兵法書の中にもその名が記された、アルビオン軍最強の將軍と呼ばれている戦いのエキスパート。

書物にも書き記されている人物との出会いに些か実感が湧かないギーシユを他所に、バルバトス將軍は空になった瓶を投げ捨てると、片手に持っていたバルデイツシユを構えた。燃えているかの様な赤い巨大な刃が朝靄の中で映えた。

「將軍なんかになっちまってから、前線に立てる機会が減っちゃってな。久しぶりに一兵士として、純粹に殺し合いを楽しませて貰うぜ。さあ、来な。遠慮はいらねえ。サシだろうが集団だろうが、相手しやるよ」

ただでさえ大柄なバルバトス將軍は、バルデイツシユを構えた瞬間オーク鬼よりも巨大に見えた。

ギーシユを腕で押さえながらゆっくりニコラが後ずさると、周りを懸命に見渡してから先ほどから湧き上がっていた疑問をバルバトス將軍に問いかけた。

「あんた一人か？ あの「鬼の副隊長」や、他の隊員達はどうした？」

「俺一人だ。大勢で動いちやあそつちの偵察隊に気付かれちゃうからな。……おいおい、まさか俺一人じゃ不満だなんて言わねえよな？　一応俺一人でも殺れりやあ、お前等の出世を約束出来るほどの首である自信はあるんだが？」

ギーシュは亜人しかいないという偵察隊の情報に誤りが無いのにはホツとした物の、生きている心地はしなかった。

相手は「スクウエア」クラスのメイジであり、優秀な武人だ。自分の様な「ドット」クラスのメイジで、しかも実践経験もない子供では敵う相手ではない。

しばらく警戒した様に睨みを続けながら動こうとしないグラモン中隊に、バルバトス將軍は退屈そうに欠伸をして見せた。

「なんだなんだ？　トリスティンの人間つてのは目の前にある手柄をみすみす逃す人種なのか？　随分と根性がねえなあ、おい？」

誰から見ても分かる挑発をして見せたバルバトス將軍に、もともと沸点の低い荒くれ者の隊員の中から三人が剣を抜いてニコラの制止も聞かずに襲い掛かった。

バルバトス將軍はゆっくりバルディッシュを構え直し、襲い掛かる三人目掛けて横一文字に振るった。

瞬間、三人の男達は身につけている鎧ごと腹から斬り裂かれ、別れた上半身と下半身の切り口から鮮血を噴き出しながら地面に転がった。

僅かに顔にかかった返り血を指先で拭ったバルバトス將軍は、残虐な笑みを浮かべてバルディツシュを振り回した。

「今日も俺の相棒、「紅月（あかつき）」の切れ味は抜群だ。良い感触だぜ。さあ、次はどうだ？ もっと俺を楽しませろ」

目の前で呆気なく散った男達を見て、ギーシュの心は恐れよりも怒りに満ちていった。自分を隊長と認め、短いながらも仕えてくれた部下達を殺された事に血が一気に上った。

「貴様あああつー！」

ニコラの腕を乱暴に振るい払って、ギーシュは胸に差していた薔薇の造花を手に取りバルバトス將軍へと駆け出した。

薔薇の造花を振るい、二体の青銅のゴーレム「ワルクューレ」を作り上げると、手に持った剣の切っ先をバルバトス將軍に向けて突進させる。

バルバトス將軍は容赦なく「ワルクューレ」を薙ぎ払い、バルディツシュを向かって来るギーシュ目掛けて振り下ろす。

ギーシュはギリギリまでバルディツシュを引き寄せると、軽やかなステップで横へと避けてバルバトス將軍に殴りかかる。

ギーシュの拳が届きかけたその時、突然バルバトス將軍の握るバルディツシュの柄の

先から火球が飛び出してギーシュの腹へと直撃した。

衝撃に後ろへ飛んだギーシュはゴロゴロと地面を転がって服に着いた火をすぐさま消し去り、そして混乱した。

バルバトス將軍の手には、バルディツシュしか握られていない。なのに何故、魔法を出せたのか。魔法は杖を振るわなければ、どんなに凄腕のメイジだろうと決して出せないはずだ。だから魔法衛士隊の多くは杖をレイピア状にして、防御を取りつつ魔法を発動出来る様になっているのだ。

改めて、ギーシュはバルバトス將軍の持つバルディツシュをマジマジと見つめた。しかし、何処をどう見てもただの武器にしか見えない。肝心の杖の役割になりそうな作りが見つからない。

そんなギーシュに、バルバトス將軍はバルディツシュを肩に担ぎながら鼻をさすつた。

「頭に血が完全に上ったかと思つたが、なかなかどうして良い眼をしてるじゃねえか。それで？ 杖を持つてない俺が何で魔法を使えたか分かつたかい、坊や？」

からかう様に口にするバルバトス將軍にギーシュは顔をしかめながらただ黙る事しか出来ない。

その間にもニコラ達は懸命にギーシュへの助太刀の算段を考えるが、バルバトス將軍

の眼が常に此方の動きを察知しているのを感じて飛び出せないでいた。考え無しに突っ込んで、先ほど三人と同じ様に斬り捨てられるのがオチだ。

「頭が固えなあ、トリステイン人は……」

呆れた様にそう言いながらバルディッシュをクルクルと手を軸に回したバルバトス將軍はギーシュに再び斬りかかる。

繰り出された袈裟斬りをギーシュが避けた瞬間、そのまま横薙ぎにバルディッシュが振られると、赤い刃に炎が覆われた。

驚きながら何とか横薙ぎの一閃を背後に避けたギーシュをバルバトス將軍は逃がさないとばかりに、燃え盛る刃を地面に突き立て、バルディッシュの柄先をギーシュに向けてそこから火球を三発繰り出した。

それほど速い訳ではない火球を避けながら、ギーシュも薔薇の造花を振るって花卉を飛ばし、バルバトス將軍の背後に三体の「ワルクユール」を創り出して斬りかからせる。しかし、バルバトス將軍は地面に突き立てたバルディッシュの刃側の柄を蹴り上げて一体をかち上げ、残りの二隊を拳で打ち砕いた。

再び薔薇の造花を振るおうとしたギーシュに対して、今度はその杖代わりである薔薇の造花をバルディッシュの切っ先で斬り払うバルバトス將軍。

花の部分が砕かれ、魔法が発動出来なくなったギーシュに容赦なく燃え盛る刃が振り

落とされた。

もう駄目だと一瞬覚悟した瞬間、ギーシュとバルバトス將軍の間に入つてバルドイツの動きを止めた人物が居た。

それはグレゴリオだった。バルドイツの柄を掴んで止め、その間にニコラが横からバルバトス將軍の脇腹目掛けて劍を振るつた。

「邪魔だぜ、ジジイッ！」

バルバトス將軍はそのままバルドイツを力任せに無理矢理横へと払い、グレゴリオ諸共動かしてニコラを柄で殴打した。

衝撃にニコラが吹き飛び、グレゴリオも薙ぎ払われた瞬間、ギーシュの拳がバルバトス將軍の顔面目掛けて繰り出される。

バルバトス將軍は何かギーシュの拳を避けると、柄の先でギーシュの腹を穿つてから距離を取つた。

一瞬焦りの色が見えたバルバトス將軍の顔は、次には活気に満ち溢れた表情が浮かんでいた。

「こりゃあ良い、久々に楽しいぜ！ 今のは惜しかったなあ、坊や」

痛みに耐えながら腹を押さえていた手を上げると、ギーシュは茎だけになってしまった造花を投げ捨て、予備の仕込み杖をポケットから出した。

そのギーシュの姿を見て、バルバトス將軍は首を振った。

「坊や、ゴーレムを出すスピードは悪くねえ。けどそれだけじゃあ、メイジとしちやあ二流だ。ゴーレムの使い方もっと考えてみな。ただ出して突っ込ませるだけじゃあ芸がねえぞ？」

まるで言い聞かせる様に言うバルバトス將軍の言葉に、ギーシュは息を落ち着かせながら考え込んだ。

そんなギーシュに対して、バルバトス將軍はただ黙ったままギーシュを見詰めた。まるで、蛹から孵化する蝶を待っているかの様に。

急に殺意が消えたバルバトス將軍に、ニコラ含めたグラモン中隊一同は動けなくなつた。理由は分からないが、今この二人のやり取りを邪魔してはいけない気がしてしまつたのだ。

真剣に考え込んだギーシュの脳裏に、あるイメージが湧き上がった。それは、二体の「ワルキューレ」とは形の違うゴーレムの姿だ。

ギーシュの身体から、淡いピンク色のオーラがゆつくりと立ち上がり、何処か虚ろな、何処も見えていない瞳のまま杖を振るいながら囁く様に呪文を唱える。

突如、ギーシュの左右真横の地面から青いゴーレムがゆつくりと創られていった。「ワルキューレ」よりも精巧に創られた、鎧に包まれた女性の姿をしたそのゴーレムの手

には左右対象にそれぞれ片手に馬上用に使われるランスが握られている。

「健全な肉体と健全な精神はその者を高める」。いつだったか授業で学んだ言葉を思い返ししながら、ギーシュは創り上げられたゴーレムをそれぞれ見詰めた。

そして確信する。今、自分は「ドット」クラスから、「ライン」クラスへのメイジになった事を。

「ニコラ、他のみんなも、手は出さないでくれ。この男は……僕が倒す。隊長として、部下の仇を取ってやる！」

強い覚悟を秘めたギーシュの瞳を見て、ニコラ達は剣を下ろした。覚悟を決めた男の邪魔をするのは、同じ男として野暮だと思ったからだ。

「ワルキューレ」とは比喩物にならないほど精巧な創りのそのゴーレムを見て、バルバトス將軍は笑みを浮かべた。

「この土壇場でクラスアップしたみてえだな。こつからが本番って訳だ。来いよ、坊や！ 俺を倒して、いっばしの「漢」になってみな！」

楽しい話しながら、バルバトス將軍はバルディッシュを構え直した。

ギーシュにとって命を懸けた一対一での初の実戦が始まるうとしていた。



## 第55話

石壁に沿う様に嘖き上がり、そびえ立つ炎の壁にトリスティン・ゲルマニアの連合軍の兵達はなす術がなかった。

飛竜で高く舞い上がり、炎の壁を越えようと試みた者もいたが、どんなに高度を取っても炎の壁からまるで生き物の様に腕が伸びて捕まり、瞬く間に焼き尽くされてしまった。「風」系統のメイジが「ウインド・ブレイク」を叩きつけて炎を払おうとしたが、炎の壁はビクともしない。

「ええいつ！ 一体どうなっている!? これでは突入出来ぬではないか!」

他の隊の中隊長が苛立った様に怒号を飛ばす。

「「水」系統のメイジは居らぬのか!」

「朝の会議で発表があっただろう! 「水」のメイジは皆医療部隊に移された! 今から呼びに戻っても、その間に新手の敵が来てしまう!」

行き場のない怒りを互いにぶつけ合う様に、中隊長や兵達が怒号を飛ばし合う。今回の作戦の最初からの躓きに、誰もが苛立ちを禁じ得なかった。

バルディツシュを構えたバルバトス將軍の前で、ギーシュは新しく生まれた二体のゴーレムをまじまじと眺めた。

左右それぞれ全く同じ造りのゴーレムは精巧な鎧と兜を身につけ、顔立ちや胸部の膨らみから、「ワルキューレ」同様女性のゴーレムだ。まるで双子の様に顔も背格好もそっくりな二体だが、唯一の違いは左右それぞれ、まるで利き手の様に馬上で使うランスを一本ずつ持っている事だ。右のゴーレムは右手に、左のゴーレムは左手に握られたランスもゴーレム同様青く鈍い輝きを放つ青銅で造られている。

ギーシュは「ワルキューレ」の時同様に頭の中で二体のゴーレムの動きをイメージする。すると呼吸をするかの様に二体のゴーレムはギーシュのイメージ通り、ギーシュの前で互いのランスを重ね、交差させた。

「さっきまでのゴーレムとは造りが違うな。それで？ その二体のレディを俺にも紹介してくれよ、坊や」

口調こそ軽いが、いつ飛び掛かれても咄嗟に対応出来るのが伝わってくるバルバトス將軍からの言葉に、ギーシュは二体のゴーレムの名前を考えた。

「ワルキューレ」の形を基礎に造り上げた上位ゴーレム。今の自分の力では同時に作れるのは二体までの様だ。

「なら、紹介しよう。僕が今造り出せる最高のゴーレム、「ヴァルキリー」のギーシュ、そ

してドロワットだ」

「ヴァルキリー」という形状の左のゴーシユ、右のドロワットと名付けられた二体はゆっくりとそれぞれランスの切っ先をバルバトス將軍に向ける。

二体のゴーレムが臨戦態勢に入ったのを見て、バルバトス將軍の口元の笑みがより大きくなっていく。

「悪くない名前だ。なら紹介も済んだし……踊ろうぜー」

叫んだのと同時に駆け出したバルバトス將軍に合わせて、ギーシユのイメージに伴いゴーシユとドロワットも突進する。

燃え盛る刃のバルディツシユの右からの横薙ぎをドロワットがランスで受け止め、空かさずゴーシユがバルバトス將軍の胸元目掛けてランスを突き出す。

右手をバルディツシユの柄から離して身体を反らせ、ギーシユの突きを回避したバルバトス將軍はランスを右腕と脇で挟み込むと、渾身の力でランスごとギーシユを持ち上げて投げ飛ばす。

人間よりも重く造られた筈のゴーレムが投げ飛ばされた事にグラモン中隊の隊員達は思わず驚きに声を上げる。ガチャンと耳障りな金属音を立ててゴーシユが背中から地面に落下するが壊れはしていない。

再度バルディツシユを握り直したバルバトス將軍はランスで刃を受け止めているド

ロワットを力任せに薙ぎ払う。厳しい訓練で培われてきた剛力の前に、ドロワットは薙ぎ払われるまま左へと吹き飛ばされる。

力任せにバルドイツシュを振り切ったバルバトス將軍に、今度はギーシュが空かさず飛び蹴りを繰り返した。目の前からゴーレムが消えた瞬間現れたギーシュにバルバトス將軍は一瞬面食らうも左腕を挙げて蹴りを防ぐ。

飛び蹴りを防がれたギーシュは地面に着地した瞬間、右手に予備の杖を握り締めたまま左ローキックから右ハイキックへのコンビネーションを繰り返す。バルバトス將軍はローキックをバルドイツシュの柄で、ハイキックを左腕で防ぐと鋭い前蹴りをギーシュの腹に打ち込んだ。

痛みに顔を歪めて吹き飛びながらもギーシュは杖を握り続け、立ち上がったギーシュがバルバトス將軍の背後からランスを脳天へ打ち下ろす。ギーシュのランスによる打ち下ろしを瞬時にバルドイツシュを持つ右手の持ち位置を変えて、空いた柄を突き出し防ぐバルバトス將軍。柄の先ギリギリでランスの一撃を防いでいるのに、それ以上ギーシュのランスが下がらない事から改めて並みの剛力ではないのが伺える。

ギーシュが時間を稼いでる間に立ち上がったギーシュとドロワットはバルバトス將軍に向かって駆け出す。そんな一人と一体を見たバルバトス將軍はギーシュの胸元に滑り込みながらバルドイツシュから手を離し、急に支える力がなくなったランスが打ち

下ろされる勢いを乗せて自らの身体でゴーシユを抱え上げ、向かつてくるドロワットに目掛けて投げ飛ばす。

勢い良く駆け出したドロワットは止まる事が出来ず、投げ飛ばされたゴーシユと激突して互いに耳障りな金属音を立てながら粉々に砕け散ってしまった。

ギーシユはゴーシユとドロワットと砕け散ったのを目の端で捉えながら渾身の飛び回し蹴りをバルバトス將軍に打ち込む。

両腕を上げてギーシユの蹴りを防いだバルバトス將軍の身体一二歩後ろへ後退るのを見た瞬間、ギーシユは杖をその場に捨てて「スタイルチェンジ」を行い、「ラツシユスタイル」の構えを取ると反撃の隙を与えぬとばかりに一気に距離を詰める。

間髪入れずに顔面に向かって殴りかかったギーシユの右の拳はバルバトス將軍の左手に掴まれてしまう。防御と同時にバルバトス將軍もギーシユの顔面目掛けて右の拳を振るつたが、ギーシユも殴られまいとその拳を左手で受け止めて握り締める。

お互いの利き手を制して睨み合う二人だったが、不意にバルバトス將軍の口元に笑みが浮かんだ。

その笑みに嫌な予感が走ったギーシユだったが、考える間もなくバルバトス將軍が頭を前後に振ってギーシユの鼻つ面に頭突きを打ち付けた。

被っている兜の硬さも相まって、衝撃と痛みに鼻血を吹き出しながらギーシユの身体

が後ろへとよろめく。その瞬間、バルバトス將軍の右の拳を握っていた手から力が抜けてしまい、ガラ空きになった腹へボディブローを受け、前のめりになった所で左頬に拳を続け様に打ち付けられて殴り飛ばされてしまった。

土埃を上げながらゴロゴロとギーシユの身体が地面を転がるのを見ながら、バルバトス將軍は掌で顔に浴びせられたギーシユの鼻血を拭う。

「ただの殴り合いは久しぶりだが、まだ鈍っちゃいないみたいだな。ほらよ、まだやれるだろ？」

喋りながらバルディッシュを拾い上げたバルバトス將軍はギーシユの杖を掴むと投げ渡した。

血混じりの唾を吐き捨て、鼻血を上着の袖で拭ったギーシユは杖を拾い上げて振るう。カチカチと金属音を立てて再び造り上げられたギーシユとドロワットがバルバトス將軍に向かってランスを構える。

ギーシユは二体のゴーレムをそれぞれ見た後、二体の間から飛び出す様にバルバトス將軍に向かって駆け出す。

バルディッシュを構え直したバルバトス將軍に向かってスライディングの要領で突っ込むギーシユ。バルバトス將軍はいとも簡単に飛んでギーシユのスライディング蹴りを避けるが、それこそギーシユの狙いだった。

バルバトス將軍が自分のスライディング蹴りを飛んで避けたのと同時にゴーレムを動かして、ゴーシユとドロワットがランスを左右から横薙ぎに払う。

ゴーシユが一矢報いたと確信するも、バルバトス將軍は自らの前でバルディツシユを地面へと突き刺し、左右から交差する様に襲い掛かるランスを防いだ。

着地したバルバトス將軍はバルディツシユを蹴り上げて二体のゴーレムのランスを弾いて、そのまま背後にいたゴーシユに向かって打ち下ろす。

後ろへ飛び引いて打ち下ろされた一撃を回避するゴーシユ。バルディツシユの刃が叩きつけられた地面に走ったいくつものヒビからその衝撃の強さがうかがわれ、もしあのまま受けてしまったらと考えて思わず生唾飲み込んだ。

そんなゴーシユに構わずバルバトス將軍はバルディツシユを構え直して襲い掛かる。鋭い突きによる一閃をゴーシユの胸元目掛けて繰り出す。

あと半歩浅く動いていたら胸を貫かれるであろうギリギリの距離で突きを避けたゴーシユは杖を振るって地面から石の槍を突き出してバルバトス將軍の首に向かって放つ。と、同時に二体のゴーレムを背後から詰め寄らせて襲い掛からせる。

石の槍を避けてゴーレム達に向き直ったバルバトス將軍に、ゴーシユとドロワットは交互にランスの突きを浴びせた。バルディツシユを操って自分の身体にランスの切っ先を触れさせぬ様に突きを防いで行くバルバトス將軍に背後から襲いかかろうとした

ギーシュは瞬間背筋に冷たい物を感じた。

何となく嫌な予感を感じたギーシュはそのまま大きく後ろへと下がる。そして次の瞬間、バルバトス将軍を囲む様に炎の壁が円状に噴き上がった。灼熱の炎をその身体に受けたゴーレム達はまるで飴細工の様にドロドロに溶けてしまった。

「良く気付いたな、坊や。そのまま突っ込んで来てくれりゃあ、骨まで燃やしてやったのによ」

ギーシュは呼吸を整えながら、甲板でのニコラとの訓練の時に言われた言葉を思い出していた。

「どんな達人でも、防御は必ず体得してる物です。そして真に強い奴つてのは、攻撃と防御を本当の意味で鍛え上げた人間の事です。防御は勝つ為の手段。それを知らずに強くなった奴なんて居やしないですよ」

わかつてはいた事だが、バルバトス将軍の戦い方に改めてギーシュは感服していた。殴り合いでのラフプレーによる防御からの攻撃、咄嗟の判断で相手の攻撃を防ぐ防御法、そして魔法による攻守一体の戦闘方。今自分が相手にしてる男は、真に強い者なのだ。

だが、だからどうしたというのだ。確かに自分は弱いかもしれない。この男には到底敵わないかもしれない。しかし、だから諦めるなど、他ならぬ自分の貴族としての、男



としてのプライドが許さない。そして何より、自分を信じてついて来てくれたニコラ達に顔向け出来なくなる。そんな事になっては、恐らく自分を一生許せないだろう。

もう勝てなくても構わない。ただこの男に、「こいつは手強かった」と言わせてやる。たとえ、刺し違えてでも。

恐らく生きてきた中で初めて命をかける覚悟をしたギーシュは、再び杖を掲げてギーシュとドロワットを造り上げた。

煌めく火の粉を撒き散らしながら炎の中から現れたバルバトス將軍はギーシュの眼を見て笑みを浮かべた。その目付きには見覚えがあった。兵士になって二十年余り、そんな眼をする男達は皆、強かったと記憶している。そんな目付きを、まだ十代半ばである目の前の少年が見せた事に内心驚きを感じている部分もあった。

この戦いも終わりが近づいている。二人共それを確信している。

ギーシュはただ出せるだけの力で向かう事を、バルバトス將軍はこの少年が期待通りかどうかを考えながら対峙した。

数秒の間の後、先に動き出したのはギーシュだった。ギーシュとドロワットを従えてバルバトス將軍に向かって駆け出し、左からのハイキックの顔面に向かって放つ。

バルバトス將軍が右腕で蹴りを受け止めたのを見送り、ドロワットにランスを右から左脇腹に向かって払う。ランスによる払いをバルディッシュの柄で防いだバルバトス

將軍は短く呪文を唱えて柄先から炎を噴き出してギーシュの身体へ浴びせた。

身体を焼く炎に構わずギーシュは後ろから来たゴーシュにランスを下から上へと振り上げる様にイメージして動かす。イメージ通りの動きをするゴーシュのランスに自らの脚を乗せて掬い上げさせる様に上に飛んだギーシュは燃えるシャツを纏いながら渾身の蹴りをバルバトス將軍に向かつて繰り出す。

ギーシュの動きが流石に予想外だった為、一瞬呆気にとられたバルバトス將軍は何か首を動かして蹴りの直撃を避けるも、蹴りを受けた兜が吹き飛ばされて黒色がかったブラウンの髪が風に晒された。

後先考えず繰り出した飛び蹴りに着地に失敗して倒れ込んだギーシュの腹を容赦なくバルバトス將軍が蹴り上げる。

まるでサッカーボールの様に飛ばされたギーシュは蹴りで込み上がった胃の中の物を嘔吐してしまう。痛みに腹を押さえた事で杖が手から零れ落ちて、ゴーシュとドロワットも力無く崩れ去った。

小さな喘ぎと咳込みを漏らしながら口元を手の甲で拭い、何とか立ち上がって見せる脚が震えてるのが見ている者に伝わって来た。

「もう……我慢出来ねえっ!」

ギーシユの戦いを見守っていたグラモン中隊の隊員の何人かが加勢しようとして剣を握り締めて動こうとした。

しかし、そんな隊員達をニコラが腕で制する。

「行かせてくれ！ ニコラの旦那！ このままじゃあグラモン隊長がー」

「黙って見てろっ！」

ニコラの怒鳴り声に隊員達は動きを止めた。

隊員達を見回したニコラは握り締めた拳を掲げる。その拳はどれだけ力強く握られているかを表す様に、握られた掌から血が伝っていた。

「聞いたはずだ。「手を出すな」と。今、グラモン隊長は……あの餓鬼は俺達を背負って戦っているんだ。「漢」の真剣勝負に水を差す様な真似は絶対にするな！ 今から加勢に行こうなんて馬鹿な真似をしようとした奴は、この俺が許さんぞ！」

ニコラの眼から、拳から、声から、その言葉に嘘がない事と同時に、ニコラ自身も今すぐにでもギーシユに加勢したい気持ちを押し殺しているのが伝った隊員達は苦々しい表情を浮かべながら剣を下ろした。

「皆の衆、今は信じてみようじゃないか。儂等の隊長殿を」

顎をさすりながらグレゴリオが静かな口調で隊員達に語りかける様に言った。

隊員達はギーシユを見詰めた。自分達よりもずっと若く、甘やかされてきたに違いな

い少年がボロボロになりながらも懸命に戦おうとしている姿に齒を食いしぼる。あんなにも大つ嫌いだつた貴族が、偉そうで気に入らなかつた筈の貴族がボロボロになつて良い気味だと思える者は一人も居なかつた。

「頑張つてくれ、グラモン隊長……！」

隊員の一人が思わず呟いた言葉に、その隊員自身が驚いていた。今まで社交辞令やご機嫌伺いの為に貴族を応援した事はある。しかし、こんなにも拳を握り締めて、懇願する様に応援したのは初めてだつた。

「そうだ……！　頑張れっ！　グラモン隊長！」

「隊長！　俺達がついていきますぜ！」

手は出せない歯痒さもあつて、懸命にギーシュを応援し始めるグラモン中隊の隊員達。そこには貴族だの平民だの、そんなわだかまりはなかつた。

「煩いな……！」

身体中に走る痛みを意識が持つていかれそうなギーシュの耳に、グラモン中隊隊員達の応援の聲が突き刺さる。

「そんな、一所懸命に応援なんかするなよ。そんな事されると……！」

一人呟きながら心の中から湧き上がる熱い物に、ゆつくりだがギーシュの拳は硬く握

り締められていき、「ラツシユスタイル」の呼吸が整っていく。

「意地でも……負けたくなくなるだろうがあっ！」

弾かれた様に駆け出したギーシユの動きは、限界が間近なのにも関わらず今までで一番速かった。

向かってくるギーシユにバルディツシユの横薙ぎの一閃を浴びせるバルバトス将軍。しかし、バルディツシユの横薙ぎよりもより低く身体を屈ませて避けたギーシユは一気に間合いを詰める。

そのまま「スウエイブロウ」の要領で右肩によるタツクルで、鎧でダメージは無いものの衝撃でバルバトス将軍の身体を後ろへ下げさせた事で自身の間合いを確保したギーシユ。左ジャブから右ストレート、更に左フックとコンビネーションを繰り返す。

バルバトス将軍は顔面に迫るギーシユの鋭い拳に身体を動かして避けるが、頬を掠って薄皮が擦れる。

ギーシユは自らの「フィニッシュブロウ」の一つとして右のアップパーを顎に向かって打ち上げた。右の拳はバルバトス将軍の顎を見事に捉えて打ち抜くが、バルバトス将軍も伊達にアルピオン最強の座についている訳ではない。ギーシユの拳で脳が揺れるのを感じながらバルディツシユを操って脇腹へと叩き付ける。この時バルバトス将軍が距離感を完璧に測れる状態だったらギーシユの身体は脇腹から横一文字に斬ら

れていただろうが、不幸中の幸いで当たったのは柄の部分で衝撃だけで済んだ。

が、それでも強烈な一撃である事には変わりなく、ギーシュの身体は再び吹き飛ばされた。

余りの痛みに呼吸が上手く出来ない状態で脇腹を押さええうずくまりながらギーシュはバルバトス將軍に目をやった。

軽い脳震盪を起こしているのか、バルバトス將軍が初めて地に膝をついている姿が目に入る。

今がチャンスだと立ち上がろうとするも、脚に力が入らない。

「う、動けっ！ 動けよっ！ 頼むっ！ 動いてくれっ！」

自分の身体に懸命に拍車をかけるが、身体は思う様に動いてくれない。

そして、勝負は無情である事を伝える様に、頭を振りながらバルバトス將軍が先に立ち上がった。

バルディツシュを担いでうずくまっている自分に近付いて来るバルバトス將軍に、ギーシュは悔しくて痛いくらいに歯を食いしばり溢れそうになった涙を必死に抑えるが、一つ、また一つと涙が頬を伝った。

「死ぬのが怖いか、坊や？」

片手で顎を押さえながらバルディツシュの切っ先を突き付けてくるバルバトス將軍

の質問に、ギーシュは首を振った。

「違う……悔しいんだ。貴方が強い事は知ってた。でも、部下の仇も取れない、自分が情けなくて、悔しいんだっ！」

嗚咽混じりに叫ぶギーシュに、バルバトス將軍は首を振った。

「お前の気持ちはわからなくもないが、大の男が戦場で涙を流すなんてあっちゃいけな  
いぜ？　そういうのは勝負が終わってから、一人で流しな」

バルバトス將軍の言葉にゴシゴシと目を拭った。

涙のせいか、それとも痛みと疲労からか、霞み始めた視界の中でギーシュはバルバトス將軍へと顔を向けた。

「バルバトス將軍。僕にこんな事を言う資格は無いと思うが……一つだけ、頼みがある」  
「ほう、何だ？　聞くだけ聞いてやるよ」

ギーシュはゆっくりと自分の部下である隊員達へと目を向けた。もう視界はぼやけて輪郭しかわからないが、そこに自分の部下がいるのはわかった。もう視界はぼやけて

「僕はどうなっても構わない。だから、僕の部下達には手を出さないでくれ」

「それはいけないっ！　グラモン隊長！」

ギーシュの言葉にニコラが叫ぶが、もうギーシュには届いていない。

ギーシュの視界はますますぼやけていき、もうバルバトス將軍の顔もまともには見え

ない。耳に入る声も何処か遠く感じて、ニコラが何かを叫んだとは思うのだがハッキリとは聞こえなかった。

「……最後に一つ教えてくれ、坊や。まだ聞いてなかったからな。お前の名前は？」

自分を見下すバルバトス将軍がどんな表情をしているかもわからないまま、ギーシユは口を開いた。

「僕の名はギーシユ……ギーシユ・ド・グラモンだ……」

力なくそう呟いたギーシユの脳裏に、桐生とモンモランシーの顔が浮かび上がった。ごめん、二人共……僕はここまでだ。

心の中でそう呟いたギーシユの意識はゆっくりと闇の中へと引きずり込まれ、瞳がゆっくりと閉じられた。

「グラモン……トリスティーンの元帥と同じ名か。覚えとくぜ、ギーシユ」

バルバトス将軍はそう呟くとバルディッシュユを高く掲げた。

「止めろおおおっ！」

叫びながらニコラが二人に駆け寄るも、バルディッシュユは無情にも振り下ろされる。

ドンツ！ という鈍い音が辺りに響き渡り、ニコラは力無く動きを止めた。

振り下ろされたバルディッシュユの刃はギーシユの鼻先スレスレで地面へと打ち付けられていた。



「この隊長を助けたかったら、今から言う俺の二つの条件を飲め。それが出来なきや、今度は本当にこいつの首を跳ねるぞ？」

それが脅しでない事は分かっていたニコラも、他の隊員達も何度も強く頷いた。

その様子に満足したバルバトス將軍はバルディッシュをヒョイと背中に担いで笑みを浮かべた。

「よし。まず一つだ。今から俺は此処から退いてやる。俺が去つてから数分後にはあの炎の壁は消える。そこでお前等のお仲間がやって来て、何を聞かれても俺が此処に居た事を言うな。何者かに奇襲を受けたなり突然襲われたなり適当に理由をつけて、「何が起きたかわからない」で通せ。わかったか？」

再び強く頷くグラモン中隊の隊員を見たバルバトス將軍は、焼かれたり斬られたりでボロボロになったギーシュのシャツを掴んで持ち上げると、ニコラに向かって投げ渡した。

「グラモン隊長っ！」

投げられたギーシュをニコラが抱き止めて安否を確認すると、他の隊員達も二人を囲む様に集まってギーシュを心配そうに眺める。身体の火傷や切り傷、顔の痣等傷だらけではあるが呼吸はしており、気を失っただけである事が確認出来ると隊員達は安堵の溜め息を漏らした。

ギーシュに蹴り飛ばされた兜を拾い上げたバルバトス將軍はピユイツと短く口笛を吹いた。

地響きの様な唸り声が辺りに響いたかと思うと、燃える様な赤い毛並の巨大な虎が颯爽と現れた。四本足のそれぞれ足首と口端からは炎が噴き上がっている。

巨大な虎はグラモン中隊の隊員達を敵意を剥き出しにした眼で睨みながら唸り声を上げる。その迫力に気圧されながらも隊員達も劍を握っていつでも抜ける様に構えを取る。

「止めろ、デイン。今のこいつ等は敵じゃない。少なくとも、今はな」

笑みを交えながら言うバルバトス將軍の言葉にデインと呼ばれた虎は小さく唸ると隊員達に背を向ける。どうやらバルバトス將軍の使い魔の様だ。

バルバトス將軍は近付いてきたデインの頭を軽く撫でた後、真つ赤な毛並の背中に跨った。

「もう一つの条件は簡単だ。お前等の隊長に伝言を伝えてくれりゃあ良い」  
「隊長に伝言？ 一体、何を？」

ギーシュを抱きかかえたままのニコラが訝しげな表情で問いかける。

バルバトス將軍はそんなニコラに対してニツと笑った。

「次に会うまでもっと強くなつとけ」。それから、「今度は国じゃなく、互いの誇りを

かけて殺り合おう」ってな」

バルバトス將軍の言葉を信じられないかの様に、ニコラは数回ギーシュとバルバトス將軍の顔を交互に見てから頷いた。

「わかった。必ず伝えよう」

「頼んだぜ」

ニコラの態度から約束を違えないと確信したバルバトス將軍は、デインに拍車をかけて駆けさせる。

まるで火の玉の様に赤い煌めきを放ちながらあつという間に遠くへ消えて行つたバルバトス將軍の言葉の通り、数分もしない内に炎の壁は消えて連合軍の部隊が次々と中へ入つて来た。

先を越され、悔しそうに何があつたのかを次々と聞いてくる他の隊の兵や隊長達にグラモン中隊の隊員達は誰一人として質問に答える者は居なかつた。

それはバルバトス將軍との約束は勿論だが、今はそんな下らない質問に答えるよりも自分達の隊長を休ませたい気持ちで一杯だつた。

昼過ぎにアルビオンの首都ロンドンイニウムに到着したバルバトスは、自分の隊の宿舎への道を歩いた。

宿舎の前の訓練場となる平地が見えると、既に隊員達が訓練を開始しているのが見える。ふと、その平地への入り口の所に、隊の副隊長であるカイルが立っている事に気付いた。

背筋を伸ばして腕を組み、此方を無表情で見ているカイルに、バルバトス将軍は面倒臭そうに兜を脱いで無造作に伸ばされた黒色がかつたブラウンの髪に包まれた頭を掻いた。カイルが怒っている時の、お決まりの格好だ。

「お帰りなさいませ、バルバトス様」

口調の中に棘があるのを感じながら、バルバトス将軍は適当に手を振った。

「早速ですが、昨晚もあれだけー」

「あく、あく……わかった、わかってる。悪かったよ、カイル」

説教を言わせまいと適当に相槌を打つバルバトス将軍にカイルは溜め息を漏らしたが、不意にバルバトス将軍の表情がいつもよりも楽しげである事に首を傾げた。

「随分機嫌が宜しいご様子で」

「わかるか？ 暇潰しのつもりだったんだが……中々どうして、良い楽しみが出来た。

あの餓鬼、今度会う時はどれだけ強くなってるか……本当に楽しみだ」

まるで童心に帰ったかの様な口調で呟くバルバトス将軍に、カイルはますます首を傾げた。

しかし、バルバトス將軍の頬や顎にある傷を見る限り、どうやら久しぶりに手応えのある相手に巡り会えたらしいのが伝わって来た。

カイルは内心連合軍の兵達も侮れないと一人警戒を強めた。